

IBM Intelligent Operations Center
バージョン1 リリース6

**IBM Intelligent Operations
Center**
製品資料

IBM

IBM Intelligent Operations Center
バージョン1 リリース6

**IBM Intelligent Operations
Center**
製品資料

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、541 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Intelligent Operations Center バージョン 1 リリース 6 モディフィケーション 0 に適用されます。本書は、新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

本書は下記原典を翻訳したものです。

原典： IBM Intelligent Operations Center
Version 1 Release 6
IBM Intelligent Operations Center
Product Documentation

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 2011, 2013.

目次

図 ix

第 1 章 ソリューションの概要 1

対象読者	2
機能	2
ユーザーおよび利点	3
コンポーネント	5
イベント管理	7
バージョン 1.6 の新機能	8
ユーザーのための新機能	8
管理者のための新機能	9
インストーラーの新機能	12
バージョン 1.6.0.1 の新機能	13
バージョン 1.6.0.2 の新機能	16
著作権表示および商標	20
著作権表示	20
商標	20

第 2 章 ソリューションのインストール 23

インストールの準備	23
IBM Intelligent Operations Center システム・サー ビス	23
標準トポロジでの IBM Intelligent Operations Center サーバー	25
高可用性トポロジの IBM Intelligent Operations Center サーバー	26
インストール・サーバー	28
標準環境用の IBM Intelligent Operations Center ハードウェア要件	28
高可用性環境用の IBM Intelligent Operations Center ハードウェア要件	29
前提ソフトウェア要件	31
サポートされるブラウザ	32
メディアのパッケージ化	32
インストール・オプション	32
インストール・チェックリスト	33
チェックリスト - コマンド行インストーラーを使 用した標準トポロジのインストール	33
チェックリスト - グラフィック・インストーラー を使用した標準トポロジのインストール	34
チェックリスト - コマンド行インストーラーを使 用した高可用性トポロジのインストール	35
チェックリスト - グラフィック・インストーラー を使用した高可用性トポロジのインストール	36
Kickstart ファイルを使用した Red Hat Enterprise Linux の準備	37
サーバーの準備	39
TCP/IP ネットワーキングのセットアップ	39
TCP/IP ネットワーキング	40
セキュリティー設定を無効にする	44
SSH サービスのセットアップ	44

SSH 構成の更新	45
標準環境用の Linux パッケージのインストール	45
高可用性環境用の Linux パッケージのインストー ル	49
その他のインストール前要件の設定	54
高可用性用のサーバーの準備	55
インストール・サーバーの準備	56
トポロジ・プロパティ・ファイル	57
インストール・プロパティのカスタマイズ	58
標準環境用のターゲット・サーバー情報	59
高可用性環境用のターゲット・サーバー情報	60
ディレクトリー・サービス情報	61
LDAP サフィックス	61
Lightweight Third-Party Authentication ドメイン	62
クラスタリング・プロパティ	63
標準環境用のパスワード情報	63
高可用性環境用のパスワード情報	66
インストール前のサーバー検証	68
標準環境のコマンド行インストーラーの実行	70
高可用性環境のコマンド行インストーラーの実行	72
標準環境の GUI インストーラーの実行	74
高可用性環境の GUI インストーラーの実行	75
インストール後かつ構成前のインストールの検証	76
インストール後の IBM Intelligent Operations Center の構成	77
IPv6 用のコラボレーション・サービスの構成	77
コラボレーション・サービス用のシングル・サイ ンオンの構成	78
セッション・タイムアウトの設定	79
LTPA タイムアウトの設定	81
IBM HTTP Server システム管理者の E メール・ アドレスの構成	82
IBM Business Monitor の HTTPOnly 設定の解除	82
高可用性環境におけるコラボレーション・サービ スの 2 次 LDAP サーバーの構成	83
高可用性環境における追加のクラスター・マネー ジャー関係の構成	84
高可用性環境におけるオプションの外部ネットワ ーク・ファイル・システムの構成	85
高可用性環境における Cognos モデルの構成	86
最適化対話式プロセス通信方式の定義	86
最適化対話式プロセス保守タスクの構成	88
Semantic Model Services のインストールおよび構 成	88
標準環境におけるオプションのセマンティッ ク・モデル・サーバーのインストール	88
高可用性環境におけるオプションのセマンティ ック・モデル・サーバーのインストール	89
Jazz チーム・サーバーの構成	90
Semantic Model Services のインストール	92
Semantic Model Services の構成の検証	92

Semantic Model Services のパフォーマンスの改善	94
ソリューションに付属するツールのインストール	95
サンプル・ユーザーの削除	96
サンプル・データの削除	97
ソリューション・インターフェースを使用したサンプル KPI の削除	97
DB2 コマンドを使用したサンプル KPI の削除	97
サンプル・モニター・モデルの削除	98
実動システムからのインストール・ファイルの削除	98
インストールの検証	99

第 3 章 ソリューションの保護 101

ユーザーの役割とアクセス権	102
サンプル・ユーザー	103
ユーザー役割グループと許可権限	104
ユーザーの追加	105
グループの追加	106
グループ・メンバーシップの表示または変更	106
ユーザー・プロファイルの表示または編集	107
ユーザーまたはグループの削除	108
ユーザーおよびグループのインポート	108
標準操作手順役割の定義	110

第 4 章 ソリューションの構成 113

データ・ソースの構成	113
データ・ソースの作成	115
データ・ソース構成の更新	117
データ・ソースの基本設定	118
データ・ソースの最小プロパティの設定	120
データ・ソースの重要プロパティと詳細プロパティの設定	124
データ・ソースの保護	126
データ・ソースからのデータのルーティング	127
データ・ソースへのアクションの割り当て	128
マップ上のデータの外観の構成	129
「フィルター」パネルの構成	130
ペインの作成	131
ペインの変更	131
ペインの削除	132
「保存済みフィルター」ペインまたは「お気に入り」ペインの編集	132
日付と時刻および休日の範囲の定義	133
地理情報マップの構成	133
基本マップの管理	134
マップの中心およびズームの設定	134
表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定	135
KML オーバーレイの追加	136
KPI の構成	137
サンプル KPI	138
KPI 階層の表示または変更	138
KPI 階層のエクスポートまたはインポート	139
所有する組織の追加、編集、または削除	140
KPI の凡例の変更	140
KPI 範囲の検証	141

KPI 権限の編集	141
名前付きエリアへの KPI のマッピング	142
KPI のレポートへのマッピング	142
KPI モデルの表示または変更	143
KPI のコピーまたは作成	144
KPI のコピー	144
KPI の作成	144
KPI の変更または削除	144
KPI の表示または変更	145
KPI の削除	145
ホット・スポット分析の構成	145
分析定義の作成	148
ロケーション・マップの構成	149
マップ・イメージの表示およびアップロード	151
ロケーション・マップの作成、更新、または削除	151
ロケーション・マップ上のエリアの作成、更新、または削除	153
標準操作手順の構成	154
標準操作手順定義の構成	154
定義のコピー、削除、および最新表示	157
ドラフトおよび承認の操作	157
定義の表示および編集	158
標準操作手順 の起動	159
標準操作手順のインスタンスの表示および編集	160
標準操作手順定義のエクスポートおよびインポート	160
参照の操作	161
通知テンプレートの作成	162

第 5 章 ソリューションの統合 163

統合できるシステムの例	163
データ・ソースとの統合	163
ソリューション用のデータ準備に関するガイドライン	164
DB2 データ・ソース	166
SQL を使用した名前付きエリアの定義	167
データ項目のルーティング	169
ルーティング・スキーマ・ファイル	170
KPI 更新のためのデータ・ソースのルーティング	172
統合トピックへのデータのルーティング	173
データ項目の相関	174
データ・ソースのタイム・スタンプの同期	175
KPI の作成および統合	176
モニター・モデルと KPI	177
モニター・コンテキスト・インスタンス	177
KPI のモデル化	178
KPI 階層の定義	181
IBM Business Monitor との KPI の通信	181
トリガー	182
IBM Business Monitor へのインバウンド・イベントの定義	182
IBM Business Monitor からのアウトバウンド・イベントの定義	183
モニター・モデルのデプロイ	184
KPI の表示ラベルと表示値	185

KPI のキャッシュ	186
CAP との統合	186
CAP メッセージ・ルーティング	187
CAP メッセージのパブリッシング	187
マップおよびリストでの CAP メッセージの表示	188
CAP メッセージの更新およびキャンセル	188

第 6 章 ソリューションのカスタマイズ 189

ユーザー・プロファイルの表示または編集	189
ユーザー・プロファイルの表示または編集	190
表示設定の構成	191
ユーザー・インターフェースのローカライズ	191
フィールド・テキストの翻訳	192
ソリューションへのロケールの追加	192
ユーザー・インターフェースのカスタマイズ	193
ページの作成またはカスタマイズ	193
「内容」パネルのカスタマイズ	194
コンポーネントのカスタマイズ	195
コンポーネントの作成	196
カスタム・モジュールの定義	197
コンポーネントの構成	198
ユーザー・インターフェースへのコンポーネントの追加	198
KPI のカスタマイズ	199
サンプル KPI	201
KPI をカスタマイズする前のバックアップ	203
データ・ソースに対するカスタム・アクションの定義	203
データ項目のアイコン	205
Cognos レポートの表示	206
ソリューションでの IBM ロゴの構成	208

第 7 章 ソリューションの管理 211

ログオン	211
製品バージョン詳細の表示	211
サービスの管理	212
システム・プロパティの構成	214
標準環境における状況の開始、停止、および照会	214
プラットフォーム制御ツールの標準環境コンポーネントについて	215
標準環境におけるコンポーネントの開始	215
V1.6.0.2 の標準環境で従う必要のある開始順序	217
V1.6 および V1.6.0.1 の標準環境で従う必要のある開始順序	217
標準環境におけるコンポーネントの停止	218
V1.6.0.2 標準環境で従う必要のある停止順序	219
V1.6 および V1.6.0.1 の標準環境で従う必要のある停止順序	220
標準環境におけるコンポーネントの状況の照会	221
標準環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手	222
高可用性環境における開始、停止、および状況の照会	223
プラットフォーム制御ツールの高可用性環境コンポーネントについて	223

高可用性環境におけるコンポーネントの開始	224
V1.6.0.2 の高可用性環境で従う必要のある開始順序	226
V1.6 および V1.6.0.1 の高可用性環境で従う必要のある開始順序	228
高可用性環境におけるコンポーネントの停止	229
V1.6.0.2 の高可用性環境で従う必要のある停止順序	231
V1.6 および V1.6.0.1 の高可用性環境で従う必要のある停止順序	232
高可用性環境におけるコンポーネントの状況の照会	233
高可用性環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手	235
コンポーネントの検証	235
システム検査チェック・ツールの使用方法	235
IBM Intelligent Operations Center サービスとコンポーネントの状況の判別	236
分析 (Web サーバー経由の Cognos Connection コンソール) テスト	236
問題判別	237
分析 (Cognos Connection コンソール) テスト	240
問題判別	240
分析 (Cognos Connection コンソール) [1] テスト	243
問題判別	244
分析 (Cognos Connection コンソール) [2] テスト	247
問題判別	247
分析 (SPSS Modeler) テスト	250
問題判別	250
アプリケーション・サーバー (REST CplexServer1) テスト	252
問題判別	252
アプリケーション・サーバー (REST CplexServer2) テスト	255
問題判別	256
アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Displ) テスト	258
問題判別	259
アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Displ2) テスト	262
問題判別	262
アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW1) テスト	265
問題判別	265
アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW2) テスト	268
問題判別	268
アプリケーション・サーバー (REST IopServer1) テスト	271
問題判別	271
アプリケーション・サーバー (REST IopServer2) テスト	274
問題判別	274

アプリケーション・サーバー (REST STProxyServer1) テスト	277	データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) テスト	327
問題判別	277	問題判別	327
アプリケーション・サーバー (REST WBM_DE_AppTarget.WBMNode1.0) テスト	280	データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [1] テスト	329
問題判別	280	問題判別	329
アプリケーション・サーバー (REST WBM_DE_AppTarget.WBMNode2.0) テスト	283	データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [2] テスト	331
問題判別	284	問題判別	331
アプリケーション・サーバー (REST WebSphere_Portal) テスト	287	データベース (DB2 インスタンス - ミドルウ ェア) テスト	332
問題判別	287	問題判別	332
アプリケーション・サーバー (REST WebSphere_Portal_Portal_Node2) テスト	290	データベース (DB2 インスタンス - ミドルウ ェア) [1] テスト	334
問題判別	290	問題判別	334
アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer1) テスト	293	データベース (DB2 インスタンス - ミドルウ ェア) [2] テスト	336
問題判別	293	問題判別	336
アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer2) テスト	296	ディレクトリー (Tivoli Directory Server コン ソール) テスト	337
問題判別	296	問題判別	337
アプリケーション・サーバー (REST isim1) テスト	299	ディレクトリー (Tivoli Directory Server) テス ト	340
問題判別	299	問題判別	340
アプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server 管理コンソール) テスト	302	ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [1] テスト	342
問題判別	303	問題判別	342
ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) テスト	305	ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [2] テスト	345
問題判別	305	問題判別	345
ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [1] テスト	308	ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロ クシー) [1] テスト	347
問題判別	308	問題判別	347
ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [2] テスト	311	ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロ クシー) [2] テスト	349
問題判別	311	問題判別	350
コラボレーション (IBM Domino コンソール) テスト	314	メッセージング (Message Broker のインスト ール・チェック) テスト	352
問題判別	314	問題判別	352
コラボレーション (IBM Sametime コンソ ール) テスト	316	メッセージング (Message Broker のインスト ール・チェック) [1] テスト	354
問題判別	316	問題判別	354
コラボレーション (IBM Sametime Proxy コン ソール) テスト	318	メッセージング (Message Broker のインスト ール・チェック) [2] テスト	355
問題判別	318	問題判別	355
データベース (database name) テスト	320	モバイル (IBM Worklight コンソール) テスト	357
問題判別	321	問題判別	357
データベース (DB2 インスタンス - アプリケ ーション) テスト	322	モバイル (IBM Worklight コンソール) [1] テ スト	360
問題判別	322	問題判別	360
データベース (DB2 インスタンス - アプリケ ーション) [1] テスト	324	モバイル (IBM Worklight コンソール) [2] テ スト	362
問題判別	324	問題判別	363
データベース (DB2 インスタンス - アプリケ ーション) [2] テスト	326	パスワード管理 (パスワード同期エージェン ト) テスト	365
問題判別	326	問題判別	366

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [1] テスト	367
問題判別	367
パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [2] テスト	369
問題判別	369
パスワード管理 (Tivoli Directory Integrator) テスト	371
問題判別	371
ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) テスト	373
問題判別	373
ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [1] テスト	376
問題判別	376
ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [2] テスト	378
問題判別	379
ポータル (WebSphere Portal コンソール) テスト	382
問題判別	382
ポータル (WebSphere Portal コンソール) [1] テスト	384
問題判別	385
ポータル (WebSphere Portal コンソール) [2] テスト	387
問題判別	387
セキュリティー (IBM Security Identity Manager 管理コンソール) テスト	390
問題判別	390
セキュリティー (IBM Security Identity Manager コンソール) テスト	393
問題判別	394
セキュリティー (IBM Security Identity Manager セルフ・コンソール) テスト	397
問題判別	397
使用状況データのロギングと分析	400
使用状況分析ログ	400
使用法分析ツールの実行	400
第 8 章 ソリューションの保守	403
データのバックアップとリカバリー	403
データのバックアップ	403
ファイル・システムのバックアップ	403
データベースのバックアップ	404
バックアップからのデータのリカバリー	406
ログ・ファイルの保守	407
パフォーマンスの調整	409
アプリケーション・サーバーの調整	409
WebSphere Application Server の調整	409
DB2 パフォーマンス・モニター・データ収集の構成	409
トポロジー・パスワードの変更	410
シングル・サインオンのための LTPA トークンの更新	410
セッション・タイムアウトの設定	411

第 9 章 データの表示、フィルタリング、および分析	415
サンプル・ユーザー・ビュー	415
マップでの操作	416
KPI 付きの状況	417
KPI 付きのエリア状況	418
管理ビューと構成ビュー	419
ソリューション管理	419
ポータル管理	420
マップおよびリスト上のデータの表示	420
マップの制御	420
「マップ」タブ	421
ポイント・データ項目の追加	423
エリア・データ項目または線データ項目の追加	424
KML オーバーレイの表示	425
「ロケーション・マップ」タブ	426
ロケーション・マップへのデータ項目の追加	428
「リスト」タブ	428
リストへのデータ項目の追加	429
マップおよびリスト上のデータのフィルタリング	430
フィルターの作成および保存	431
保存済みのフィルターまたはお気に入りの表示、適用、および削除	431
日付と時刻によるフィルタリング	432
境界によるフィルタリング	432
名前付きエリアの作成	432
データ・ソースによるフィルタリング	433
自動最新表示間隔の設定	434
レポートの表示	435
KPI を介した状況のモニター	437
KPI プレビュー・カードからのレポートの表示	438
データのホット・スポットの分析	438
ホット・スポット分析の実行	440
通知の表示	440
通知設定の構成	441
アクティビティーの管理	442
アクティビティーの表示、編集、および完了	443
標準操作手順へのデータ項目のリンク	445
連絡先の管理	445
第 10 章 トラブルシューティングとサポート	447
問題のトラブルシューティング手法	447
トレースの使用可能化およびログ・ファイルの表示	449
WebSphere Portal でのトレースの使用可能化とログの表示	449
アプリケーション・サーバー上の IBM Business Monitor のトレースの使用可能化およびログの表示	450
ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center	451
ISA Data Collector のインストール	451
データ・コレクションの作成	452

IBM サポートに送信するデータ・コレクション の命名	452
ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center の既知の問題	452
IBM Intelligent Operations Center のメッセージ	453
知識ベースおよび IBM サポートの使用	503
知識ベースの検索	503
Fix Central からのフィックスの入手	504
IBM サポートへの連絡	505
サポート更新情報のサブスクリプション	506
IBM との情報の交換	508
IBM サポートへの情報の送信	508
IBM サポートからの情報の受信	508
IBM Intelligent Operations Center に関する既知の問 題と解決策	509
データ・ソースまたはデータ項目が表示されない	509
日付またはズーム・レベルの選択が原因でデ ータ項目が表示されない	509
「エリア名」フィールドのデータ設定が原因 でマップにデータ項目が表示されない	510
データ・ソース・ルーティングの更新がフィルタ リング後の結果に反映されない	510
再配置した項目が最新表示後に削除されない	511
システム・パフォーマンスの問題	511
サード・パーティー・サーバーが応答していませ ん	511
認証メカニズムが使用できない	512
状況ビューに KPI データが表示されない	512
状況ビューで KPI イベントが更新されない	513
アラビア・ロケールで日時形式が正しく表示され ない	514
スクリーン・リーダーが時間の値を読み上げない	514
Tivoli Directory Server Web Administration Tool を使用して LDAP サーバーを始動できない	514
ユーザーが多数であるために接続が拒否される	515
1 次アプリケーション・サーバーが作動不能にな った場合に IBM Intelligent Operations Center が 応答を停止する	515
Intelligent Operations Center のデータ・ロード中 にロードが失敗する	516
第 11 章 リファレンス	517
IBM Intelligent Operations Center REST インターフ エース	517

標準トポロジーで IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品およびコンポーネン ト	519
高可用性トポロジーで IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品およびコンポ ーネント	523
IBM Intelligent Operations Center に含まれてはいる が、インストールされていない製品	526
IBM Intelligent Operations Center サーバーで使用さ れるポート	526
root アカウントで実行されるプロセス	527
PDF ライブラリー	528
用語集	529
A	529
B	530
C	530
D	531
E	531
G	532
H	532
I	532
J	532
K	533
L	533
M	534
N	534
O	535
P	535
R	535
S	536
T	537
U	537
V	538
W	538
X	539
アクセシビリティ	539
プライバシー・ポリシーに関する考慮事項	540
特記事項	541
商標	542

索引	545
---------------------	------------



第 1 章 ソリューションの概要

多くの組織や事業体では、業務の効率的な監視と調整が必要になります。すべての組織や事業体に共通するのは、適切な要員が迅速で正確な決定を行い、その決定の効果を追跡できるように、正しい情報を収集する必要があるということです。IBM® Intelligent Operations Center は、業務の効率的な監督と調整を促進するために設計されたソフトウェア・ソリューションです。

組織は、中核システムや、相互接続されているシステムの改善について共通の課題に直面しています。先見の明のある組織は、よりスマートな中核システムの効率性と有効性の改善を行いたいと思っています。そのような組織はこれらのシステムについて、新しい考え方や使用法を導入しています。高度情報技術を導入することで、組織は振る舞いやイベントのパターンをより適切に把握および予測して、賢明に対処できます。

例えば IBM は、情報技術 (IT) を適用して街のインフラストラクチャーを計画、設計、構築、および運用することで実現される生活の質と経済的福祉の改善の観点からインテリジェント・シティを定義しています。インテリジェント・シティは主に「最新テクノロジー」を指すものではありません。これは、テクノロジーを使用して既存リソースを最も効率的に利用し、市民の生活を改善するための方法を見つけることです。

IBM Intelligent Operations Center は、以下のタスクを行うことで、コンピューター・システムによって生成される現実世界のデータの利点を活用します。

- 適切なデータを収集して管理する
- そのデータを統合して分析する
- 情報への簡単かつ時宜を得たアクセスを促進する
- 関連情報を一貫した方法で提供する

このソリューションの利点は、次のとおりです。

- システムを調整し、得られた洞察に基づいて結果を達成する
- 全体的なレポートおよびモニター手法を使用して、計画済みの業務と未計画の業務を最適化する
- コミュニケーションとコラボレーションを促進することで、組織内の複数の領域をまとめる
- イベントを調整することでサービス品質を高め、費用を削減する

業務は個々の領域に分割できます。これらの領域は通常、組織構造と、関係者の専門知識に一致していません。例えば、市当局では輸送、水道、および公共安全などの部門に専門知識を持つ者が配置されます。

ある領域内で業務の複雑性が増すと、より高度にカスタマイズされたソリューションが必要になります。IBM Intelligent Operations Center には多数の異なる統合ポイントが用意されており、これを使用してカスタマイズを行うことができます。これらの統合ポイントと組み込まれているインフラストラクチャーによって、IBM ビジネス・パートナー、サービス・プロバイダー、およびお客様は広範囲にわたる強力なソリューションを柔軟に構築することができます。

対象読者

本製品資料は、IBM Intelligent Operations Center の使用、インストール、管理、および保守を行う担当者を対象としています。また、ソリューションの構成と、IBM Intelligent Operations Center が必要とする外部基本システムの統合に関する実装資料も含まれています。

この製品資料は、ユーザーがこのソリューションに含まれているコンポーネント製品の使用に関する予備知識を持っているか、それらのコンポーネント製品の使用に習熟しているという前提に基づいています。また、この製品資料は、ユーザーが Red Hat Enterprise Linux オペレーティング・システムの基本的な知識を持っているという前提にも基づいています。コンポーネント製品やオペレーティング・システムのトレーニングについては、この製品資料では扱っていません。これらの製品のトレーニングが必要な場合は、システム・インテグレーターまたは IBM 担当員に問い合わせ、基本コンポーネントのトレーニング機会に関する情報を入手してください。

機能

IBM Intelligent Operations Center には、測定、モニター、およびモデリングの機能が備わっており、これらを使用して基盤となるシステムを 1 つのソリューションに統合し、業務の効率、計画、および調整を改善できます。

IBM Intelligent Operations Center は、IBM Smarter Cities® Software Solutions 製品ファミリー内の製品です。IBM Intelligent Operations Center は、既存のハードウェアにインストールすることも (オンプレミス)、クラウドにデプロイすることもできます。IBM Intelligent Operations Center は単独でインストールすることも、IBM Smarter Cities Software Solutions 製品ファミリーの他のソリューションと共にインストールすることもできます。

IBM Intelligent Operations Center は、組織および基盤となる領域のデータに役割ベースでアクセスできるようにする GUI ベースの製品です。このソリューションには、イベント管理機能と統合マッピング機能があります。このソリューションは、イベントに備えた、またはイベントに応答する適切な手順やアクティビティを提供および追跡することができます。また、効率をさらに高めるための重要業績評価指標 (KPI)、レポート作成、およびコラボレーションの各機能も提供されています。これらの機能によって、組織の上層部は、複数の領域を統合して、協調性と意思決定能力を高めることができます。

イベントとデータの管理

IBM Intelligent Operations Center にはイベント報告とデータ追跡のメカニズムが備わっており、これを使用して、基盤となるすべての領域を識別し、把握することができます。予測されたイベント、計画されたイベント、および現在のイベントを、それらの進行に沿って管理できます。例えば、道路の下を通っている配管の交換は、水道の運用と交通の運用の双方に関係する、計画されたイベントまたは作業指示書です。今後 24 時間以内に発生することが予想される悪天候イベントは、予測されたイベントです。交通渋滞は、道路工事と天気の影響を受ける現在のイベントです。

統合された地理情報システム (GIS) またはロケーション計画によって、イベントが視覚的にマップされます。対話式的マッピングとシナリオ分析を通じてイベントの影響を測定できます。日時や場所などの定義したカテゴリーに基づいて、イベントに関する情報をフィルターに掛けることができます。フィルター処理された情報は、マップ上に強調表示されるか、または表にリストされます。いつでも、どこでも、必要に応じて情報に簡単にアクセスできます。

応答およびアクティビティの管理

IBM Intelligent Operations Center は、イベント関連の適切な手順およびアクティビティを格納するためのシステムを提供します。手順の進行状況を追跡したり、自分に割り当てられているアクティビティの状況をモニターまたは更新したりすることができます。

状況のモニター

IBM Intelligent Operations Center には、KPI を作成して表示するためのツールが備わっています。基本となるデータの変更に合わせて、KPI を更新できます。以下のタスクを実行できます。

- 単一の領域、または複数の領域にわたって、エグゼクティブ・レベルの状況を要約する
- 問題を明らかにし、課題を特定する
- KPI の詳細まで深く掘り下げて、さらなる調査を行う。

インスタント通知およびインスタント・メッセージ

IBM Intelligent Operations Center には、注意を要する問題に対する通知を維持するためのワークスペースが備わっています。このワークスペースを使用して、KPI をモニターすることができます。

IBM Lotus® Sametime® には統合されたコラボレーションおよび通信用ツールが備わっており、必要な場所で必要な時期に、そのツールをインスタント・メッセージに使用できます。

レポートの表示

IBM Intelligent Operations Center では、イベントのレポートをグラフ、表、または円グラフとして表示することができます。日時や場所などの定義したカテゴリーに基づいて、レポートに表示される情報をフィルターに掛けることができます。この機能を使用して、最も有用な情報を随時および定期的に収集および提供することができます。この機能により、調整された要約やグラフィカル表示のすべての利点を活用できるようになります。

ユーザーおよび利点

IBM Intelligent Operations Center は、組織、政府機関、または地方自治体で業務管理に携わっている要員（エグゼクティブ、監督者、およびオペレーター）向けに設計されています。

以下の表に、IBM Intelligent Operations Center の使用に関連するユーザーと利点を示します。

表 1. IBM Intelligent Operations Center のユーザーと利点

ユーザー	このソフトウェアが役立つ操作
エグゼクティブ	<ul style="list-style-type: none">• マップ、ダッシュボード、および通知を通じて、イベントのエグゼクティブ・レベルの要約を取得する• 重要業績評価指標 (KPI) を使用して組織の成功度を評価する• レポートを通じて問題を特定し、追跡する• 提供されるデータに基づくポリシーの優先順位と実装を指示する

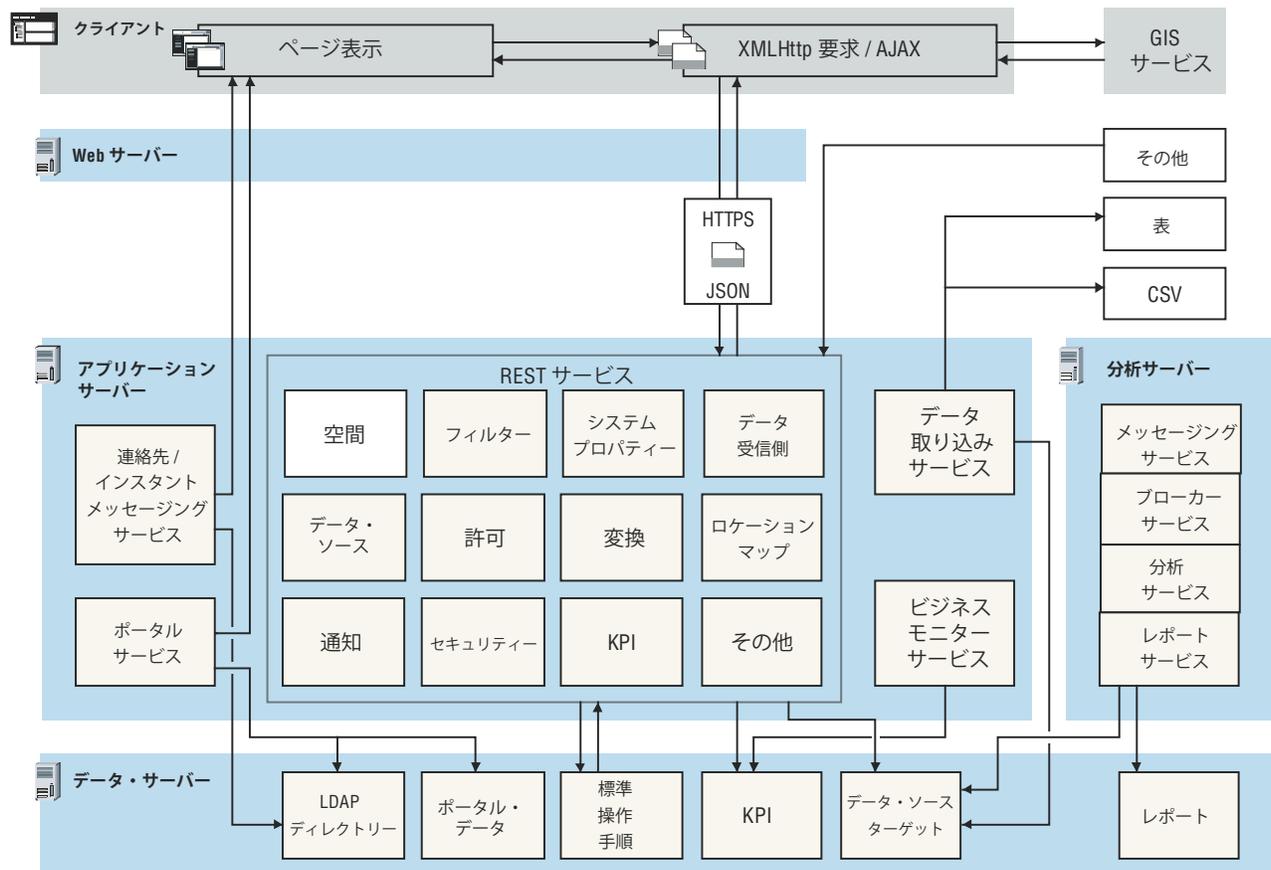
表 1. IBM Intelligent Operations Center のユーザーと利点 (続き)

ユーザー	このソフトウェアが役立つ操作
監督者	<ul style="list-style-type: none"> • マップ、ダッシュボード、および通知に示された競合および問題を特定して処理する • 新しいイベントの追加、既存のイベントの編集、およびイベントの取り消しを行ってイベントを管理する • イベントに関連した手順およびアクティビティを格納してその実行を管理する • KPI をモニターする • 重要事項を素早く簡単に伝える • レポート内でフィルター処理されたデータを表示する
オペレーター	<ul style="list-style-type: none"> • マップやリストで表示するイベントを作成、編集、およびモニターする • 割り当てられたアクティビティの状況を受け取って更新する • 定期的なレポートや随時のレポートを実行する • 緊急時や応答が必要なその他の状況で、素早く簡単に連絡する
ソリューション管理者	<ul style="list-style-type: none"> • データ・ソースを作成、更新、および削除する • ユーザーに表示されるフィルター・オプションを構成する • 地理情報マップとロケーション・マップを構成する • KPI 関係を管理し、KPI をユーザーに表示する方法を構成する • 標準操作手順定義を作成および編集する
システム管理者	<ul style="list-style-type: none"> • 管理コンソールを通じてシステムのコンポーネントを個別に管理する • システム検査チェック・ツールを実行してシステムのコンポーネントを検査する • システム・プロパティを追加、変更、および削除する • 新しいユーザーを追加し、適切な役割ベースの許可グループに割り当てる • 適切なユーザーやグループにデータ・ソースへのアクセス権を割り当てることで、データ・セキュリティを実現する • 必要な専門分野や、データ・ソースへの必要なアクセス権限に適した許可を設定する • 組織に適合するようにページをカスタマイズする

コンポーネント

IBM Intelligent Operations Center の構造は、主要コンポーネント、サブシステム、およびサービスに大まかに分けることができます。

次の図は、IBM Intelligent Operations Center の概略を示します。



クライアント

IBM Intelligent Operations Center では、イベントの情報、全体的な状況、および詳細への、Web ベースのワンストップ・ポータルを使用できます。ユーザー・インターフェース (UI) では、共通の形式で事前構成されたさまざまなビューで、カスタマイズされた情報が示されます。簡単に使用できるダッシュボードを介してすべての情報が表示されます。

Web サーバー

Web サーバーは、IBM Intelligent Operations Center に対するクライアント要求を管理します。

アプリケーション・サーバー

アプリケーション・サーバーは、IBM Intelligent Operations Center が管理するデータにアクセスするため、およびそのデータを視覚化するための一連のサービスを提供します。データ取り込みサービスは、さまざまな外部ソース (データベースやファイルなど) からデータをインポートするために使用されます。これ

らの外部ソースから提供されるデータは多岐にわたるため、データを共通の形式に正規化することで、重要業績評価指標の計算、標準操作手順や通知の起動、および空間情報一時データの提供に使用できるようにします。

連絡先およびインスタント・メッセージ・サービスは、効果的で、かつリアルタイムのコミュニケーションを可能にする機能を提供します。

ビジネス・モニター・サービスは、着信データ・レコードをモニターし、そのデータ・レコードに含まれる情報を使用して、重要業績評価指標を生成します。ポータル・サービスによって提供されるユーザー・インターフェイス層では、ユーザーが重要業績評価指標、標準操作手順、通知、およびレポートを表示できます。ユーザーは、地理情報マップ上に空間情報一時データを表示することもできるほか、建物や球技場を表す特定の詳細を、ロケーション・マップとリスト・ビューのどちらでも表示できます。

アプリケーション・サーバーは、セキュリティー・サービスを提供することで、権限を持つユーザーおよびグループのみがデータにアクセスできるようにします。

データ・サーバー

データ・サーバーは、IBM Intelligent Operations Center で使用されるすべてのデータベースを保管します。

分析サーバー

分析サーバーには、カスタム・ソリューションまたは他のドメイン・アプリケーションで使用されることがある以下のコンポーネントが含まれます。

メッセージング・サービスとブローカー・サービス

WebSphere® MQ が提供するメッセージング・サービスと、WebSphere Message Broker が提供するブローカー・サービスを使用すると、IBM Intelligent Operations Center でサポートされていない形式のデータを受信し、そのデータを変換することができます。データを変換すると、IBM Intelligent Operations Center による処理が可能なデータベース表または CSV ファイルに、そのデータを書き込むことができます。

分析サービス

分析サービスには、IBMSPPSS® WebSphere Business Modeler と IBM ILOG® CPLEX® Optimization Studio が含まれています。

レポート・サービス

IBM Cognos® Report Studio が提供するレポート・サービスを使用すると、レポートを生成できます。

関連概念:

212 ページの『サービスの管理』

管理コンソールを使用して、ソリューションによって提供されるサービスを管理します。

関連タスク:

99 ページの『インストールの検証』

IBM Intelligent Operations Center のインストール後に、製品が正しくインストールされたことを検証します。検証により、すべてのコンポーネントが始動し、予測したとおりに作動するようにします。

イベント管理

IBM Intelligent Operations Center では、中央のオペレーション・ハブで、ドメイン内部および複数のドメイン間の情報を、リアルタイムかつ長期にわたって統合し最適化することに重点を置いています。イベント・データ管理により、IBM Intelligent Operations Center では、複数のシステムからのデータを取り込み、絶えず予測を行い、重要なイベントやトレンドに対処することができます。

イベント・メッセージは、基本的ではあるが完全な情報を含む自己完結型のデータ項目で、受信者はそのメッセージに対し応答することができます。IBM Intelligent Operations Center のデータ受信側コンポーネントは、CSV ファイルおよびデータベース表からデータ項目を取り込みます。さらに、REST API を通じて IBM Intelligent Operations Center にデータ項目を送信することもできます。

イベントは、中央のオペレーション・ハブの操作やドメインの性質に基づき、さまざまな形式で IBM Intelligent Operations Center に受信されます。イベントの形式の例としては、トリガー、しきい値、複合イベント、手動生成イベントなどがあります。

トリガーは、何かが発生することで生成されるイベントであり、通常は受信者がアクションを取ることが必要です。以下のリストに、トリガーの例を示します。

- 火災報知機または煙探知機が作動した。
- 情報技術システムがダウンした。
- 侵入検出器が作動した。
- 自然のイベント (弱い地震など) にセンサーが反応した。

IBM Intelligent Operations Center は、このようなイベントに関する情報を外部システムから受信し、それを適切なアクションに送ります。適切なアクションの例としては、手順をトリガーすることや、情報を統合ポイントに送ることなどが挙げられます。一般に、低レベル標識は要約されることが多く、より広い範囲の注意に値する場合にのみ IBM Intelligent Operations Center に渡されます。例えば、すべての火災がイベントとして報告されるわけではありません。しかし、危険物があるために消防隊の複数の部隊と環境保護の専門家が出勤するような火災は、オペレーション・センターに報告する価値があるといえます。

しきい値イベントは、センサーや他のソースから取得した測定値が正常な範囲を超えたことを判別するのに役立ちます。基本的なしきい値イベントでは、複数の計測値を比較してトレンドを報告します。より高度なしきい値イベントでは、履歴情報によって作成されたしきい値に対して測定値を比較できます。以下に、しきい値イベントの例を示します。

- 温度超過および温度不足のアラーム
- 高水位および低水位
- 環境基準に違反する大気質や水質
- 過剰な電力使用量

IBM Intelligent Operations Center では、これらのイベントを重要業績評価指標 (KPI) の形式で管理できます。

複合イベントでは、複数のシステムからの情報を一緒にまとめて、関連イベントのグループとして報告するかどうかを判別します。例えば、有料道路通行料金収受の管理者が、クレジットカード認証のコンピューター・リンクがダウンしていることを示すトリガー・イベントをモニター・システムから受信し、ほどなくして、認証されていない決済の信用限度に近づいていることを警告するしきい値イベントを金融システムから受信したとします。これらの 2 つの問題の組み合わせは、いずれか一方のみの場合よりはるかに重大なもので、注意を喚起し解決に向けての調整をするために複合イベントが生成されます。

手動入力イベントは、都市には特に重要です。イベントの中には、犯罪や交通事故など、監視の対象となるインシデントがあります。このほかの手動入力イベントの例としては、市民からの緊急通報、都市職員が作成したレポート、都市の状況を報告する管理システムなどから生成されるイベントなどがあります。最も一般的なタイプの手動入力イベントには以下のものがあります。

- 重大な気象警報
- 犯罪レポート
- 火災
- 道路交通インシデント - 事故、混雑、過積載
- 近く予定されるイベント - ロック・コンサート、ロード・レース、パレード

複合イベント処理により、都市は都市システムに対する例外を容易に判別でき、場合によっては、関係のないデータからトレンドを識別したり、将来の問題を予測したりすることができます。

バージョン 1.6 の新機能

IBM Intelligent Operations Center 1.6 では、管理者やユーザーのための有用な新機能が導入されています。

資料では、以下のアイコンが使用されます。

-  暫定修正 PO01443 をインストールする場合に使用可能な機能は、緑の正符号アイコンで示されます。暫定修正 PO01443 により、IBM Intelligent Operations Center バージョン 1.6 のための共通アラート・プロトコル (CAP) イベント・サポートが提供されます。CAP イベント・サポートは、IBM Intelligent Operations Center バージョン 1.6.0.1 に自動的に組み込まれています。
-  IBM Intelligent Operations Center バージョン 1.6.0.1 で使用可能な機能は、テキスト「1.6.0.1」が含まれているアイコンで示されます。
-  IBM Intelligent Operations Center バージョン 1.6.0.2 で使用可能な機能は、テキスト「1.6.0.2」が含まれているアイコンで示されます。

関連情報:

 [IBM Intelligent Operations Center V1.6 用の CAP イベント・サポートのための暫定修正ダウンロード](#)

ユーザーのための新機能

IBM Intelligent Operations Center 1.6 では、新しい「フィルター」パネルを使用して、マップまたはレポートに表示されるデータをフィルタリングできます。

マップおよびリストのデータのフィルタリング

新しい「フィルター」パネルを使用すると、データを以下のようにフィルタリングできます。

- 地理情報マップ、ロケーション・マップ、またはリストのいずれかに表示します。
- 日時、場所、およびその他のカテゴリー (イベントのタイプやソースなど) に基づいて表示します。
- 後で簡単に再適用できるように、現在のフィルター設定を保存します。

 「「フィルター」パネル」について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

追加の詳細情報を含むマップの表示

ロケーション・マップのマーカー標識によって、1 つ以上の詳細マップを使用できるマップ上の位置が示されます。この詳細マップには、そのロケーションに関する情報が含まれています。

地理情報マップ、ロケーション・マップ、またはデータ項目詳細のリストに、独自のデータ項目を追加できます。

 マップとリストの表示について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

レポートのデータのフィルタリング

イベントのレポートをグラフ、表、または棒グラフで表示できます。「フィルター」パネルで適切なオプションを設定して、レポートに表示されるデータをカスタマイズできます。

 レポートの表示について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連概念:

430 ページの『マップおよびリスト上のデータのフィルタリング』

該当する操作ビューで、「フィルター」パネルを使用して、「内容」パネル内に表示されるデータを定義します。「内容」パネルには、「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブが含まれています。

420 ページの『マップおよびリスト上のデータの表示』

運用ビュー (operations view) の「内容」パネルで、地理情報マップ、ロケーション・マップ、またはリストのいずれかの形式のデータを表示できます。

435 ページの『レポートの表示』

「サポート内容」パネルを使用して、イベントのレポートをグラフ、表、または円グラフで表示します。表示されるレポートは特定のデータ・ソース出力および特定のイベントに依存しており、これらのデータ・ソース出力やイベントは、「フィルター」パネルから選択でき、マップの現行ビューにのみ表示されます。時間別のデータ・ソース結果を棒グラフまたは表形式で表示します。データ・ソース別の結果を円グラフまたは表形式で表示することもできます。グラフと表形式を切り替えるには、「時間別のデータ・ソースの結果」や「データ・ソース別の合計の結果」レポートの「**グラフ**」タブおよび「**リスト**」タブをクリックします。これらのレポートは、傾向を把握し、現在および将来のイベントへの対応について計画を策定するのに役立ちます。

管理者のための新機能

バージョン 1.6 の「ソリューション管理」ビューには、データ・ソースを構成したり標準操作手順を構成したりするための、新しい構成ウィザードが付属しています。マップ、それに関連するフィルター・オプション、および重要業績評価指標 (KPI) を構成することもできます。

データ・ソースの構成

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

- データの処理方法に関する基本指示 (新規データを検査する頻度など) を指定します。
- 図形の形式、およびマップ上でデータ項目を表すための位置に関する情報を提供する方法を選択します。

- ポータル・グループまたはユーザーに、データへの適切なアクセス権限およびデータ・ソースに対する許可特権を割り当てます。
- 使用可能なアクションから、データ・ソースに関連付けられたデータ項目に対して実行することのできる一連のアクションを選択します。

データは、CSV ファイルか、またはデータベースから収集できます。

 データは、CAP メッセージから収集できます。

1.6.0.1 **1.6.0.2** ソリューション管理者は、ユーザー・インターフェースまたは REST API のいずれかのみを介してデータ項目を提供するのに使用できるデータ・ソースを作成できます。このタイプのデータ・ソースは、外部ソースに接続されません。

データは、ソリューション全体、重要業績評価指標 (KPI)、選択された標準操作手順、または事前定義された統合トピックのいずれかにルーティングできます。

1.6.0.1 **1.6.0.2** データは、相関トピックにもルーティングできます。

 「データ・ソース」の構成について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

標準操作手順とアクティビティの定義

ウィザードを使用して、標準操作手順とアクティビティを定義します。

- さまざまなタイプのアクティビティを定義し、それらを標準操作手順定義に割り当てます。アクティビティ・タイプの例には、If-Then-Else 条件を指定する対象である条件アクティビティや、REST サービスに呼び出しを送信する REST アクティビティが含まれます。
- アクティビティに所有者およびモニターを割り当てます。標準操作手順のインスタンスが起動されると、アクティビティは、定義内で指定した所有者に自動的に割り当てられます。
- 標準操作手順のインスタンスを起動します。また、データ・ソース定義内で、イベントへの応答として標準操作手順が自動的に起動されるように指定することもできます。

 標準操作手順とアクティビティの定義について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

地理情報マップとロケーション・マップの構成

グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して、地理情報マップ表示の基本マップ、パン、およびズームを構成できます。

ロケーション・マップの構成時には、そのマップを地理情報マップ上のコレクションと位置に割り当てます。これにより、このコレクションは地理情報マップ上のマーカーで表されます。

 地理情報マップとロケーション・マップの構成について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

「フィルター」パネルのカスタマイズ

「フィルター」パネルをカスタマイズして、ユーザーが自分に関連するデータを簡単に確認できるようにします。

- 「日付と時刻」ペインに、日付と時刻の範囲および休日の範囲を追加します。
- より効率的なフィルター選択のために、データ・ソースを編成およびグループ化する独自のフィルター・ペインを追加します。
- フィルター・ペインを再配列し、ペインに含まれるデータ・ソースを再配列します。

 「フィルター」パネルのカスタマイズについて詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

重要業績評価指標のカスタマイズ

KPI をカスタマイズする際、KPI 権限を編集するのに使用できる、追加のオプションがあります。特定の KPI を表示する権限を持つユーザーを指定できます。

 重要業績評価指標階層のカスタマイズについて詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

システム・プロパティの操作

「ソリューション管理」ビューで、すべての IBM Intelligent Operations Center システム・プロパティを一目で確認できます。

- システム・プロパティを作成、変更、および削除します。
- REST サービスを通じて簡単に取得できるように、グループにシステム・プロパティを割り当てます。

 システム・プロパティの作成と編集について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

フィールド・テキストの翻訳

変換ウィザードを使用して、ユーザー・インターフェース内に表示されるフィールドの翻訳バージョンを指定します。表示される言語は、ユーザー・プロファイルまたはブラウザで選択したロケールによって決まります。

 フィールド・テキストの翻訳について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

REST API

IBM Intelligent Operations Center には、Representational State Transfer (REST) サービスを使用して実装される API のセットが付属しています。REST サービスには、Uniform Resource Identifier (URI) のセットが付属しています。これらの URI を使用して、データ・ソース、「フィルター」パネル、KPI、システム・プロパティなどの IBM Intelligent Operations Center コンポーネント内のデータにアクセスし、データを編集することができます。



REST API の使用について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連概念:

113 ページの『データ・ソースの構成』

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

154 ページの『標準操作手順の構成』

標準操作手順とは、1 つのプロセスまたは手順に関連するすべてのステップおよびアクティビティを記述した、一連の指示です。複雑で予測不能なイベントに対して、組織が一貫性と計画性のある高品質の対応を実施するには、標準操作手順が不可欠です。

133 ページの『地理情報マップの構成』

「ソリューション管理」ビューで、ユーザーが使用可能なマップ、マップの初期中心点、およびマップのズーム・レベルを構成できます。

149 ページの『ロケーション・マップの構成』

「システム管理」ビューで、「ロケーション・マップ」タブ上に表示されるロケーション・マップをカスタマイズできます。「ロケーション・マップ」タブは、操作ビュー上の「内容」パネルの一部です。

130 ページの『「フィルター」パネルの構成』

「ソリューション管理」ビューで、データ・ソースをどのようにグループ化するかを決定できます。次に、グループごとに、「フィルター」パネル内に表示されるペインを構成できます。選択したデータ・ソースがペイン内にリストされます。

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されます。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

192 ページの『フィールド・テキストの翻訳』

変換ウィザードを使用して、テキスト入力可能な任意のフィールドに翻訳を入力します。翻訳済みフィールドは、ユーザー・プロファイルまたはブラウザのいずれかで選択したロケールに従って、ユーザー・インターフェースに表示されます。

関連資料:

517 ページの『IBM Intelligent Operations Center REST インターフェース』

IBM Intelligent Operations Center には、Representational State Transfer (REST) サービスを使用して実装される API のセットが付属しています。REST サービスは、IBM Intelligent Operations Center コンポーネント内のデータ (システム・プロパティや重要業績評価指標 (KPI) など) にアクセスする Uniform Resource Identifier (URI) 一式を提供します。

インストーラーの新機能

IBM Intelligent Operations Center 1.6 では、インストーラーが機能強化され、サポートされる環境が追加されました。

高可用性環境の構成

IBM Intelligent Operations Center 1.6 は、標準環境または高可用性環境にインストールできます。高可用性環境では、スタンバイ・サーバーへのフェイルオーバーがサポートされます。フェイルオーバーにより、IBM Intelligent Operations Center システム全体の信頼性が向上します。

インストール・オプション

IBM Intelligent Operations Center 1.6 には 4 つのインストール・オプションがあります (標準環境用と高可用性用に 2 つずつ)。それぞれの環境で、GUI インストーラーとコマンド行インストーラーを使用できます。

GUI インストーラーでは、定義済みの IBM Intelligent Operations Center 構成がインストールされ、インストール中に最低限のカスタマイズを行うことができます。

コマンド行インストーラーでは、インストール・プロセスの中で柔軟に構成を行うことができます。GUI インストーラーが環境の要件に対応できない場合は、コマンド行インストーラーを使用する必要があります。

バージョン 1.6.0.1 の新機能

1.6.0.1

IBM Intelligent Operations Centerバージョン 1.6.0.1には、複数の新機能が用意されており、既存の機能への更新が提供されます。新機能には、マップ上のエリア単位でのデータ・フィルタリングのサポート、データ分析、およびデータ相関があります。

名前付きエリア

ソリューション管理者は、データ・ソースを名前付きエリア・タイプとして使用できるように構成することができます。そうすると、ユーザーは、操作ビューにおいて、名前付きエリアで定義された境界に基づいてデータをフィルタリングすることができます。名前付きエリアは、名前付きエリア・タイプ「データ・ソース」から受信されるデータ項目に定義されます。

ユーザーは、エリア状況ビューを使用して、特定の名前付きエリアの主要なデータを強調表示する重要業績評価指標 (KPI) のビューを取得することもできます。

 名前付きエリアと、境界別のフィルタリングについては、リンクを参照してください。

エリア・データ項目

ユーザーは、地理空間情報マップ上にユーザーが描く新規エリアを含むデータ項目を作成することができます。データ項目は、マップおよびリストに表示されます。

 新規エリアを含むデータ項目の作成については、リンクを参照してください。

データ分析

データ分析を使用すると、地理空間情報マップ上にホット・スポットを生成することによって時間と位置に関連するデータのパターンを強調表示することができます。ソリューション管理者は、ホット・スポット・ツールを使用して、ホット・スポット分析定義を構成することができます。

ユーザーは、ホット・スポット分析を実行して、データの理解を高め、意思決定に役立つ、マップ上のデータのパターンを識別することができます。

 データ分析およびホット・スポットについて詳しくは、リンクを参照してください。

データ・ソースの収集

ソリューション管理者は、ユーザー・インターフェース項目か、REST API メソッドのどちらかでのみデータ項目を提供するのに使用できるデータ・ソースを作成できるようになりました。このタイプのデータ・ソースは外部ソースに接続されず、すべてのデータ・ソース・プロパティは事前割り当てされます。

データベースを使用してデータを収集する場合、データは、SQL サーバー・データベースから、または DB2® データベースから収集できるようになりました。

データは、CAP メッセージからも収集できるようになりました。

 データ・ソースの収集方式について詳しくは、リンクを参照してください。

CAP イベント・サポート

CAP イベント・サポートは、IBM Intelligent Operations Center バージョン 1.6.0.1 に自動的に組み込まれています。暫定修正 PO01443 により、IBM Intelligent Operations Center バージョン 1.6 のための共通アラート・プロトコル (CAP) イベント・サポートが提供されます。

 CAP イベント・サポートについて詳しくは、リンクを参照してください。

データ関連

ソリューション管理者は、データ・ソースを構成して関連用に使用できるようにすることができます。また、ソリューション管理者は、ルーティング基準を構成して、データ項目をデータ・ソースから関連トピックまで送付することもできます。関連プロセスは、関連が発生すると通知を送信します。

 データ関連について詳しくは、リンクを参照してください。

標準操作手順へのデータ項目のリンク

プレビュー・カードを介して、ユーザーは、既に実行中の標準操作手順のインスタンスにデータ項目を関連付けることも、標準操作手順の新しいインスタンスを起動することもできます。

 標準操作手順へのデータ項目のリンクについて詳しくは、リンクを参照してください。

通知

通知は、バックグラウンド・プロセスからのエラーも表示するようになりました。通知のリストは、各通知の重大度も示します。

 通知について詳しくは、リンクを参照してください。

Cognos レポート

ソリューション管理者は、レポート・ページを作成するための新しいテーマ、およびCognos レポートを表示するための新しいレポート・ポートレットを使用できます。レポート・ページは、IBM Intelligent Operations Center インターフェースでビューとして表示されます。



Cognos レポートの表示について詳しくは、リンクを参照してください。

関連概念:

418 ページの『KPI 付きのエリア状況』

特定の名前付きエリアの主要なデータを強調表示する重要業績評価指標 (KPI) のビューを取得するには、エリア状況ビューを使用します。ユーザーは、マップの特定エリアにおける組織の業績に関して、状況の変更をモニターおよび管理し、その変化に対応することができます。

438 ページの『データのホット・スポットの分析』

「マップ」タブを使用して、事前定義された分析によって生成されるホット・スポットの形式の、マップ上で選択するエリアに関するデータを分析します。「ホット・スポット」ビューは、重要な問題のモニターおよび管理、その問題への対応に役立ちます。

145 ページの『ホット・スポット分析の構成』

ホット・スポット・ツールを使用して、ソリューションのホット・スポット分析定義を構成します。ホット・スポット分析では、時間と地理空間情報マップ上の位置に関連するデータのパターンを強調表示できます。管理者は、分析定義の作成、既にリストされているホット・スポット分析の更新、またはソリューションからのホット・スポット分析定義の削除を行うことができます。

186 ページの『CAP との統合』

共通アラート・プロトコル (CAP) を使用して、IBM Intelligent Operations Center と外部システムとの間でデータを交換できます。

174 ページの『データ項目の相関』

ソリューション管理者は、データ・ソースを構成して相関用を使用できるようにすることができます。また、ソリューション管理者は、ルーティング基準を構成して、データ項目をデータ・ソースから相関トピックまで送付することもできます。データ項目が相関トピックまで送付される際、相関プロセスはそのデータ項目が他の相関データ項目と相関していないかどうかを評価します。相関プロセスは、相関が発生すると通知を送信します。

440 ページの『通知の表示』

「通知」をクリックすると、通知およびその詳細についての動的リストが表示されます。

関連タスク:

432 ページの『境界によるフィルタリング』

「境界」ペイン内で、「内容」パネル内にデータを表示する対象の境界を定義します。

424 ページの『エリア・データ項目または線データ項目の追加』

地理空間情報マップ上のあるエリアと関連付けられていて、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成できます。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

115 ページの『データ・ソースの作成』

管理者は、データ・ソース・ツールを使用して、データ・ソースを追加および構成できます。

445 ページの『標準操作手順へのデータ項目のリンク』

プレビュー・カードを介して、既に実行中の標準操作手順のインスタンスにデータ項目に関連付けるか、または標準操作手順の新しいインスタンスを起動できます。

206 ページの『Cognos レポートの表示』

IBM Intelligent Operations Center は、Cognos レポートを表示するためのレポート・ページおよびレポート・ポートレットの作成についてのテーマを提供します。レポート・ページを作成すると、そのページは IBM Intelligent Operations Center インターフェースでビューとして表示されます。

関連情報:



IBM Intelligent Operations Center V1.6 用の CAP イベント・サポートのための暫定修正ダウンロード

バージョン 1.6.0.2 の新機能

1.6.0.2

IBM Intelligent Operations Centerバージョン 1.6.0.2には、複数の新機能が用意されており、既存の機能への更新が提供されます。新機能には、ユーザーが通知の設定をカスタマイズできるように拡張されたユーザー・プロファイル管理が含まれます。ソリューション管理者は、新規コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、カスタマイズされたユーザー・インターフェース・コンポーネントを作成できます。KPI については、ソリューション管理者は、レポートに KPI をマップできます。

ユーザー・プロファイル

ユーザーは、自分が受信する通知およびその受信方法を構成できます。ユーザーは、自分のビューに暗色のテーマと新規のグレーのテーマのどちらを適用するかを選択できます。



ユーザー・プロファイルの編集について詳しくは、リンクを参照してください。

通知

通知ウィンドウは、通知についての詳細情報を表示するように拡張されています。色分けされたアイコンにより、通知の重大度を一目で確認できます。バックグラウンド・プロセスでのシステム・エラーも通知に組み込まれます。

ユーザーは、自分のユーザー・プロファイルで通知の設定を構成できるようになりました。ユーザーは、KPI 通知の受信、およびデータのインポートに関連するシステム・エラー通知の受信を選択できます。通知ウィンドウに表示されるシステム通知に加えて、ユーザーは、SMS および E メール通知の受信することもできます (これらの通知が管理者によって構成されている場合)。



通知について詳しくは、リンクを参照してください。

マップ

ユーザーは、データ項目を作成し、それを地理空間情報マップ上のエリアに関連付けたり、データ・ソースに追加したりできます。ユーザーがマップに描画できるエリアのカテゴリーには、マルチポイント、線、マルチライン、およびマルチエリアが含まれるようになりました。

追加のアクションメニューを使用して、選択されたデータ・ソースのデータを提供する CSV ファイルを、任意のロケーションから直接参照およびアップロードできるようになりました。

管理者は **MaxFeaturesToRenderOnMap** システム・プロパティを構成することにより、マップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。マップにレンダリングされるデータ項目の数を制限すると、パフォーマンスが向上することがあります。

 マップへの更新について詳しくは、リンクを参照してください。

コンポーネントのカスタマイズ

ソリューション管理者は、ソリューション管理ビュー内にある新規コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズできます。管理者は、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成できます。既存のコンポーネントを、カスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。管理者は、マップとリストにあるデータ項目に対して表示されるプレビュー・カードおよび詳細プロパティ・ウィンドウをカスタマイズできます。データ・ソースに対して、管理者は、追加のアクションメニューに表示されるカスタマイズされたアクションを割り当てることができます。最後に、管理者は、拡張視覚化機能コンポーネント・タイプを構成して、マップでのデータ項目およびホット・スポットのレンダリング方法をカスタマイズすることもできます。

 コンポーネントのカスタマイズについて詳しくは、リンクを参照してください。

KPI

ソリューション管理者は、状況ビューに表示されるレポートに KPI をマップできます。ユーザーは、これらのレポートを参照して、KPI のトレンドを分析できます。

管理者は、IBM Intelligent Operations Center に関連付けられた KPI の階層を作成、インポート、およびエクスポートできます。

 KPI レポートと KPI 階層について詳しくは、リンクを参照してください。

データ・ソース

ソリューション管理ビューにあるデータ・ソース・ツールで、CSV ファイルからデータを収集する場合は、CSV ファイルを任意のロケーションから直接参照およびアップロードできるようになりました。

新規のエリア・マッピング最小プロパティを使用して、着信データ項目が、リストにある指定された名前付きエリア・タイプのデータ・ソースのいずれかのデータ項目の境界内に含まれているかどうかを判別できます。

標準操作手順にデータをルーティングする場合は、一致するレコードごとに、標準操作手順の新規インスタンスを起動するかどうかを選択できます。あるいは、アクティブな標準操作手順の既存のインスタンスを更新することを選択できます。

 データ・ソース・ツールへの更新について詳しくは、リンクを参照してください。

インストールされる製品

IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品は、最新のリリース・レベルに更新されています。

- WebSphere Application Server Network Deployment 7.0.0.27 から 7.0.0.31。
- WebSphere Application Server Network Deployment 8.0.0.6 から 8.0.0.8。
- IBM HTTP Server (および WebSphere Application Server プラグイン) 8.0.0.6 から 8.0.0.8。
- WebSphere Portal Enable 8.0.0.1 CF 05 から 8.0.0.1 CF 08 (GSKit フィックス IFPI05309 を含む)。

- IBM Java™ 1.7.0.4.2 から 1.7.0.6.1。
- DB2 Enterprise Server Edition 10.1.0.1 から 10.1.0.3。
- Tivoli® Directory Integrator 7.1.1.2 から 7.1.1.3。
- Tivoli Directory Server 6.3.0.18 から 6.3.0.26 (GSKit 8.0.50.16 を含む)。
- IBM Security Identity Manager 6.0 から 6.0.0.2。
- IBM Message Broker 8.0.0.1 から 8.0.0.3。
- IBM ILOG CPLEX Optimization Studio 12.5 から 12.6。

 IBM Intelligent Operations Center 1.6.0.2 と共にインストールされる製品について詳しくは、リンクを参照してください。

新しくインストールされる SDK

IBM Cognos Business Intelligence 10.2 SDK が IBM Intelligent Operations Center 1.6.0.2 と共にインストールされます。

プラットフォーム制御ツール

プラットフォーム制御ツールには、以下の更新が実装されています。

- IOCControl ツール構文を簡素化するために、標準環境と高可用性環境で同じ構文が使用されています。
- コンポーネントの開始、停止、および照会を簡素化するために、標準環境と高可用性環境の両方で標準コンポーネント命名方式が実装されています。
- 高可用性災害時リカバリー (HADR) の開始および停止機能が改善されています。

 プラットフォーム制御ツールについて詳しくは、リンクを参照してください。

インストールの事前検査

インストールの事前検査ステップには、以下の更新が実装されています。

- 各サーバー上に使用可能なディスク・スペースが十分にあるかどうかを判別する検査が追加されました。
- 新規の RPM 要件の検査が追加されました。
- プロパティ・ファイル内のパスワードがユーザー ID に対して正しいことを確認する検査が追加されました。

関連概念:

191 ページの『ユーザー・インターフェースのローカライズ』

ソリューション・ポータルに表示されるロケールおよびタイム・ゾーンを変更するには、ユーザー・プロファイルを編集します。ユーザー・プロファイルで特定のロケール設定を構成しなかった場合は、ブラウザの設定が適用されます。ユーザー・プロファイルで構成したロケールおよびタイム・ゾーンの設定は、ブラウザの設定よりも優先されます。

440 ページの『通知の表示』

「通知」をクリックすると、通知およびその詳細についての動的リストが表示されます。

214 ページの『標準環境における状況の開始、停止、および照会』

プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは、高

可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

223 ページの『高可用性環境における開始、停止、および状況の照会』
プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは、高可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center サービスを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

関連タスク:

424 ページの『エリア・データ項目または線データ項目の追加』
地理空間情報マップ上のあるエリアと関連付けられていて、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成できます。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

423 ページの『ポイント・データ項目の追加』
マップ上のポイントに関連するデータ項目を作成します。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

139 ページの『KPI 階層のエクスポートまたはインポート』
IBM Intelligent Operations Center ソリューションに関連付けられている KPI の階層を作成することができます。管理者は、既存の KPI 階層を JavaScript Object Notation (JSON) ファイルとしてインポートしたり、既存の KPI 階層を JSON ファイルにエクスポートしたりすることができます。

142 ページの『KPI のレポートへのマッピング』
管理者は、状況ビューに表示されるレポートに KPI をマップすることができます。同じレポートを複数の KPI にマップすることができます。オプションとして、レポートで表示されるデータを変更する一連のパラメーターを各レポートに追加することができます。これらのパラメーターの値は、Cognos レポート照会を生成するために使用されるほか、生成されたレポートのインスタンスにラベルとして表示されます。

438 ページの『KPI プレビュー・カードからのレポートの表示』
状況ビューの KPI プレビュー・カードから、KPI にマップされているレポートを表示することができます。

189 ページの『ユーザー・プロファイルの表示または編集』
ソリューション・ユーザー・プロファイル内の情報を表示し、編集することができます。ユーザー・プロフィールを編集して、時間帯 (タイム・ゾーン)、言語設定、および通知の設定を指定します。パスワードのリセットや、個人の詳細情報の変更を行うこともできます。

135 ページの『表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定』
マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。選択がクリアされたデータ・ソースのデータ項目が、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の両方にカウントされないようにすることができます。

195 ページの『コンポーネントのカスタマイズ』
ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズするために、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成することができます。既存のコンポーネントをカスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。例えば、特定のシステム・コンポーネントに対して、既存のプレビュー・カードを新規のカスタマイズされたプレビュー・カードで置き換えることができます。

115 ページの『データ・ソースの作成』
管理者は、データ・ソース・ツールを使用して、データ・ソースを追加および構成できます。

127 ページの『データ・ソースからのデータのルーティング』
データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

関連資料:

120 ページの『データ・ソースの最小プロパティの設定』

データ・ソースからのプロパティを各最小プロパティに割り当て、データに適した設定を選択します。

519 ページの『標準トポロジーで IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品およびコンポーネント』

IBM Intelligent Operations Center ソリューションでは、標準トポロジー用のさまざまなソフトウェア製品とコンポーネントがインストールされます。

523 ページの『高可用性トポロジーで IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品およびコンポーネント』

IBM Intelligent Operations Center ソリューションでは、高可用性トポロジー用のさまざまなソフトウェア製品とコンポーネントがインストールされます。

526 ページの『IBM Intelligent Operations Center に含まれてはいるが、インストールされていない製品』

IBM Intelligent Operations Center パッケージには、IBM Intelligent Operations Center のインストール時にインストールされない製品が含まれています。特定のユース・ケースで必要な場合、これらの製品は、IBM Intelligent Operations Center のインストール後にインストールできます。

著作権表示および商標

著作権表示

© Copyright IBM Corporation 2011, 2013. All rights reserved. IBM プログラムを使用するための契約条件に従うことを条件に、使用することができます。いかなる形式または手段（電子的、機械的、磁氣的、光学的、科学的、手動またはその他の形式/手段を含む。）であっても、IBM Corporation の書面による事前の許諾なしに、本書のいかなる部分も、複製、送信、複写、検索システムへの記録、または任意のコンピュータ一言語への変換を行うことはできません。IBM Corporation は、お客様ご自身が使用する目的でハードコピーまたは機械可読形式の文書の複製物を作成する制限された権利を許諾しますが、その複製物にはすべて、IBM Corporation の著作権表示を付するものとします。著作権に基づくその他の権利は、IBM Corporation の書面による事前の許諾なしに付与されることはありません。この文書は、生産的な使用を意図しておらず、いかなる保証もなしに特定物として現存するままの状態を提供されます。本書には、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含め、いかなる保証も適用されません。

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Microsoft、Windows および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Intel、Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Adobe、PostScript は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

第 2 章 ソリューションのインストール

IBM Intelligent Operations Center には、IBM Intelligent Operations Center 環境およびアプリケーションをインストールするためのインストール・オプションがあります。IBM Intelligent Operations Center をインストールしたら、いくつかの追加構成が必要です。

インストールの準備

IBM Intelligent Operations Center をデプロイする前に、IBM Intelligent Operations Center のシステム構成について理解し、環境の前提条件が満たされていることを確認します。

IBM Intelligent Operations Center システム・サービス

IBM Intelligent Operations Center サーバーは、多くのサービスを提供しています。

分析サービス

データ分析、表示、およびレポート作成の各サービスを提供します。

アプリケーション・ビルドの品質保証サービス

開発ライフサイクル全体にわたってプロジェクトの情報と状況を更新するための、コラボレーション、自動化、ガバナンスの各サービスを提供します。

アプリケーションの設計サービスおよび開発サービス

作業項目、プロジェクト・アクティビティ、ビルド、チームの進捗を示すダッシュボードとレポート、計画、高度なソース制御、およびソフトウェア構成管理のためのサービスを提供します。

アプリケーションのデプロイメント・サービスおよび管理サービス

ソフトウェアのアセンブリー、デプロイメント、および管理のためのサービスを提供します。

アプリケーション・サービス

ソリューションをサポートする Java Enterprise Edition サービスを提供します。

認証サービスおよび許可サービス

ソリューション、アプリケーション、およびその他のサービスに、認証サービスと許可サービスを提供します。

ビジネス・モニター・サービス

ビジネス・プロセスおよびアクティビティ情報を、リアルタイムで集計、分析、および表示します。

コラボレーション・サービス

リアルタイム・コラボレーションを可能にするサービスを、ユーザーおよびアプリケーションに提供します。

構成サービス

製品の構成を管理します (在庫管理および変更管理を含む)。

データベース・サービス

ソリューションおよびアプリケーションにデータベース・サービスを提供します。

イベント取り込みサービス

システム・イベントを収集、集約、表示、および処理するためのサービスを提供します。

ID 管理サービス

IBM Intelligent Operations Center アプリケーションとエンド・ユーザー ID を管理するサービスを提供します。

インストール・サービス

IBM Intelligent Operations Center をインストールするためのサービスを提供します。

KPI サービス

重要業績評価指標と関連アクションを処理するためのサービスを提供します。

メッセージング・サービス

メッセージ・サービスとワークフロー・サービスを提供します。

モバイル・サービス

モバイル・ユーザーを有効にするサービスを提供します。

パスワード管理サービス

ソリューションのパスワードを管理するためのサービスを提供します。

プラットフォーム管理サービス

実行時管理サービス (IBM Intelligent Operations Center のサービスおよびコンポーネントを開始および停止し、それらの状況を照会するための機能など) を提供します。

プラットフォーム使用状況サービス

ソリューションの使用状況を分析するためのサービスを提供します。

標準操作手順サービス

標準操作手順の処理を扱うサービスを提供します。

使用状況分析サービス

ユーザーのログオン、ログアウト、タイムアウト、ログイン失敗などの使用状況データをログに記録します。

ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

パスワードの同期を行います。このサービスでは、パスワード変更がエンドポイントで代行受信され、ID 管理サービスにリダイレクトされます。

ユーザー・インターフェース・サービス

製品とのユーザー対話をサポートするサービスを提供します。

ユーザー・ディレクトリー・サービスおよびユーザー・ディレクトリー統合サービス

ユーザー名およびグループ名と値との間のマッピング、および追加のディレクトリーとの統合を提供します。

Web サービス

HTTP、HTTPS、およびその他の Web サービスをソリューションに提供します。

以下のサービスを使用できるのは、オプションのセマンティック・モデル・サーバーがインストールされている場合のみです。

Semantic Model Services

アプリケーションによって実社会のオブジェクトおよび関係をモデル化できるようにするサービスを提供します。

以下のサービスを使用できるのは、オプションの Data Studio ツールがインストールされている場合のみです。

データ設計サービス

アプリケーション・ビルダーにデータ設計機能を提供します。

標準トポロジーでの IBM Intelligent Operations Center サーバー

標準トポロジーでは IBM Intelligent Operations Center は 4 つのサーバーにインストールされます。

アプリケーション・サーバー

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- アプリケーション・サービス
- ビジネス・モニター・サービス
- ユーザー・インターフェース・サービス
- コラボレーション・サービス
- モバイル・サービス
- ID 管理サービス
- 認証サービス
- パスワード管理サービス
- プラットフォーム使用状況サービス
- KPI サービス
- イベント取り込みサービス
- 標準操作手順サービス
- 使用状況分析サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

データ・サーバー

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- データベース・サービス
- データ設計サービス
- ユーザー・ディレクトリー・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

分析サーバー

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- インストール・サービス
- メッセージング・サービス
- 分析サービス
- プラットフォーム管理サービス
- メッセージング・サービス
- レポート・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

Web サーバー

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- Web サーバー・サービス

- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

セマンティック・モデル・サーバー (オプション)

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- Semantic Model Services

高可用性トポロジーの IBM Intelligent Operations Center サーバー

高可用性トポロジー環境では IBM Intelligent Operations Center は 8 つのサーバーにインストールされます。

アプリケーション・サーバー 1

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- アプリケーション・サービス
- ビジネス・モニター・サービス
- ユーザー・インターフェース・サービス
- コラボレーション・サービス
- モバイル・サービス
- ID 管理サービス
- 認証サービス
- パスワード管理サービス
- プラットフォーム使用状況サービス
- KPI サービス
- イベント取り込みサービス
- 標準操作手順サービス
- 使用状況分析サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

アプリケーション・サーバー 2

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- アプリケーション・サービス
- ビジネス・モニター・サービス
- ユーザー・インターフェース・サービス
- モバイル・サービス
- 認証サービス
- プラットフォーム使用状況サービス
- KPI サービス
- イベント取り込みサービス
- 標準操作手順サービス
- 使用状況分析サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

データ・サーバー 1

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- データベース・サービス

- データ設計サービス
- ユーザー・ディレクトリー・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

データ・サーバー 2

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- データベース・サービス
- データ設計サービス
- ユーザー・ディレクトリー・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

分析サーバー 1

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- インストール・サービス
- メッセージング・サービス
- 分析サービス
- プラットフォーム管理サービス
- レポート・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

分析サーバー 2

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- インストール・サービス
- メッセージング・サービス
- 分析サービス
- プラットフォーム管理サービス
- レポート・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

Web サーバー 1

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- Web サーバー・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

Web サーバー 2

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- Web サーバー・サービス
- ユーザー・ディレクトリー統合 - パスワード同期プラグイン・サービス

セマンティック・モデル・サーバー (オプション)

このサーバーは以下のサービスを提供します。

- Semantic Model Services

インストール・サーバー

IBM Intelligent Operations Center のインストール時に使用するサーバーは、IBM Intelligent Operations Center を標準環境にインストールするか高可用性環境にインストールするかによって異なります。

標準環境の場合は、分析サーバーがインストール・サーバーとなります。

高可用性環境の場合は、分析サーバー 1 がインストール・サーバーとなります。

標準環境用の IBM Intelligent Operations Center ハードウェア要件

標準トポロジーを使用して IBM Intelligent Operations Center をインストールするには、最小要件を満たす 4 つのサーバーが必要です。Semantic Model Servicesが必要な場合は、オプションの 1 つのセマンティック・モデル・サーバーが必要です。分析サーバーはインストール・サーバーとしても機能します。

サーバーでは、Intel x86-64 プロセッサーまたは AMD x86-64 プロセッサーが使用されている必要があります。

IBM Intelligent Operations Center で使用される最小要件のサーバーを、表 2 に示します。推奨される最小ディスク・スペースには、ブート区画およびスワップ区画のスペースは含まれません。これらのディレクトリーは、IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に定義してください。

表 2. 最小ハードウェア要件

リソース	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
CPU	4	4	4	2	4
メモリー	16 GB	16 GB	16 GB	2 GB	16 GB
ネットワーク・アダプター	1	1	1	1	1
ディスク・スペース	90 GB	112 GB	112 GB	65 GB	90 GB
インストール時に必要な追加ディスク・スペース	70 GB	139 GB (ダウンロード・メディアをサーバー上に保管する場合は 189 GB)	17 GB	27 GB	10 GB

ブート区画およびスワップ区画に必要なスペースを除外した、各サーバーのディレクトリーの最小要件を、表 3 に示します。

表 3. 各ディレクトリーの最小スペース所要量

ディレクトリー	最小スペース	注
/	8 GB	
/opt	7 GB または 32 GB	Web サーバー、他のすべてのサーバーには 32 GB が必要です。
/usr	8 GB	
/home	5 GB	
/tmp	12 GB	

表 3. 各ディレクトリーの最小スペース所要量 (続き)

ディレクトリー	最小スペース	注
/chroot	1 GB	
/datahome	22 GB	分析サーバーおよびデータ・サーバーのみで必要。
/loghome	8 GB	分析サーバーのみで必要。
/installMedia	10 GB、17 GB、27 GB、37 GB、または 70 GB	このディレクトリーには、別の名前を指定することができます。ただし、ディレクトリーに別の名前を指定する場合は、そのディレクトリーがインストール・プロパティ・ファイルまたは GUI インストール・パネルで定義されている必要があります。このディレクトリーはインストール後に削除できます。 必要なスペースの量はサーバーによって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> • セマンティック・モデル・サーバー (オプション): 10 GB • データ・サーバー: 17 GB • Web サーバー: 27 GB • 分析サーバー: 37 GB • アプリケーション・サーバー: 70 GB
/distributionMedia	102 GB	このディレクトリーには、別の名前を指定することができます。ただし、ディレクトリーに別の名前を指定する場合は、そのディレクトリーがインストール・プロパティ・ファイルまたは GUI インストール・パネルで定義されている必要があります。このディレクトリーは、インストール・サーバーのみで必要です。
/var	8 GB	
/SWAP	8 GB	

関連タスク:

39 ページの『サーバーの準備』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、オプションの セマンティック・モデル・サーバー (使用する場合) を含むすべてのサーバーを正しく準備する必要があります。これを行わなければ、インストールは失敗します。事前検査ステップでは、セマンティック・モデル・サーバーを除くすべてのサーバーについて、これらの要件の多くが実装済みであることを検査します。

関連情報:



システム要件

高可用性環境用の IBM Intelligent Operations Center ハードウェア要件

高可用性トポロジーを使用して IBM Intelligent Operations Center をインストールするには、最小要件を満たす 8 つのサーバーが必要です。Semantic Model Servicesが必要な場合は、オプションの 1 つのセマンティック・モデル・サーバーが必要です。分析サーバー 1 は、インストール・サーバーとしても機能します。

サーバーでは、Intel x86-64 プロセッサーまたは AMD x86-64 プロセッサーが使用されている必要があります。

IBM Intelligent Operations Center で使用される最小要件のサーバーを、30 ページの表 4 に示します。推奨される最小ディスク・スペースには、ブート区画用およびスワップ区画用のスペースは含まれません。

重要: データ・サーバー 1 の構成と データ・サーバー 2 の構成は、実質的に同じにする必要があります。構成には、ハードウェア、オペレーティング・システムのレベルとパッチ、ネットワーク・デバイス、およびデータベースのバージョンが含まれます。これらのサーバーの構成をできる限り同じにすることで、データベースのフェイルオーバー処理が必要になったときに、処理を円滑に進めることができます。

表 4. 最小ハードウェア要件

リソース	アプリケーション・サーバー 1	アプリケーション・サーバー 2	分析サーバー 1	分析サーバー 2	データ・サーバー 1	データ・サーバー 2	Web サーバー 1	Web サーバー 2	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
CPU	4	4	4	4	4	4	2	2	4
メモリー	16 GB	16 GB	16 GB	16 GB	16 GB	16 GB	2 GB	2 GB	16 GB
ネットワーク・アダプター	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ディスク・スペース	90 GB	90 GB	112 GB	112 GB	112 GB	112 GB	65 GB	65 GB	90 GB
インストール時に必要な追加ディスク・スペース	70 GB	70 GB	139 GB (ダウンロード・メディアをサーバー上に保管する場合は 189 GB)	37 GB	17 GB	17 GB	27 GB	27 GB	10 GB

ブート区画およびスワップ区画に必要なスペースを除外した、各サーバーのディレクトリーの最小要件を、表 5 に示します。

表 5. 各ディレクトリーの最小スペース所要量

ディレクトリー	最小スペース	注
/	8 GB	
/opt	7 GB または 32 GB	7 GB は Web サーバー 1 および Web サーバー 2 に必要で、32 GB はその他すべてのサーバーに必要です。
/usr	8 GB	
/home	5 GB	
/tmp	12 GB	
/chroot	1 GB	
/datahome	22 GB	分析サーバー 1、分析サーバー 2、データ・サーバー 1、およびデータ・サーバー 2 でのみ必要です。
/loghome	8 GB	分析サーバー 1 および分析サーバー 2 でのみ必要です。
/installMedia	10 GB、17 GB、27 GB、37 GB、または 70 GB	このディレクトリーには、別の名前を指定することができます。ただし、ディレクトリーに別の名前を指定する場合は、そのディレクトリーがインストール・プロパティ・ファイルまたは GUI インストール・パネルで定義されている必要があります。このディレクトリーはインストール後に削除できます。 必要なスペースの量はサーバーによって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> セマンティック・モデル・サーバー (オプション): 10 GB データ・サーバー 1 およびデータ・サーバー 2: 17 GB Web サーバー 1 および Web サーバー 2: 27 GB 分析サーバー 1 および分析サーバー 2: 37 GB アプリケーション・サーバー 1 およびアプリケーション・サーバー 2: 70 GB

表 5. 各ディレクトリーの最小スペース所要量 (続き)

ディレクトリー	最小スペース	注
/distributionMedia	102 GB	このディレクトリーには、別の名前を指定することができます。ただし、ディレクトリーに別の名前を指定する場合は、そのディレクトリーがインストール・プロパティ・ファイルまたは GUI インストール・パネルで定義されている必要があります。このディレクトリーは、インストール・サーバーのみで必要です。
/var	8 GB	
/SWAP	8 GB	

さらに、Web サーバーに接続するために、ロード・バランサー・インフラストラクチャーをご用意いただく必要があります。

関連タスク:

39 ページの『サーバーの準備』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、オプションの セマンティック・モデル・サーバー (使用する場合) を含むすべてのサーバーを正しく準備する必要があります。これを行わなければ、インストールは失敗します。事前検査ステップでは、セマンティック・モデル・サーバーを除くすべてのサーバーについて、これらの要件の多くが実装済みであることを検査します。

関連情報:



システム要件

前提ソフトウェア要件

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、すべてのサーバーに適切なソフトウェアをインストールしておく必要があります。

IBM Intelligent Operations Center には、Red Hat Enterprise Server Linux バージョン 6 リリース 6.3 以上が必要です。サーバーを準備するためのステップの一部として、特定の Linux RPM パッケージがインストールされている必要があります。

コラボレーション・サービス用にシングル・サインオンを構成するために、Windows がインストールされたワークステーションも必要です。

これらのサーバーには、前提ソフトウェアのみをインストールしておくことをお勧めします。IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、サーバー上にインストールされている IBM Intelligent Operations Center がある場合は、そのインストール済み環境を削除する必要があります。

関連タスク:

45 ページの『標準環境用の Linux パッケージのインストール』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、Linux パッケージをサーバー上にインストールする必要があります。

49 ページの『高可用性環境用の Linux パッケージのインストール』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、Linux パッケージをサーバー上にインストールする必要があります。

78 ページの『コラボレーション・サービス用のシングル・サインオンの構成』

WebSphere Portal SSO LTPA トークンをアプリケーション・サーバーにインポートすると、ユーザーは資格情報を再入力しなくてもコラボレーション・サービスにアクセスできるようになります。

39 ページの『サーバーの準備』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、オプションの セマンティック・モデル・サーバー (使用する場合) を含むすべてのサーバーを正しく準備する必要があります。これを行わなければ、インストールは失敗します。事前検査ステップでは、セマンティック・モデル・サーバーを除くすべてのサーバーについて、これらの要件の多くが実装済みであることを検査します。

関連情報:

 システム要件

サポートされるブラウザ

IBM Intelligent Operations Center ソリューション・インターフェースは複数のブラウザをサポートします。一部のブラウザは制限付きで使用できます。

IBM Intelligent Operations Center は、以下のブラウザでテストが完了しており、サポートされています。

- Microsoft Internet Explorer 9.x (32 ビットのみ)
- Mozilla Firefox 17 ESR
- Chrome V23
- Safari 6.0 for Mac OS X
- Safari 5.1 for Windows

Internet Explorer Compatibility View

IBM Intelligent Operations Center は Internet Explorer 9 の Compatibility View をサポートしていません。

最小画面解像度

IBM Intelligent Operations Center は、最小で 1280 x 800 の画面解像度で実行されるように設計されています。

メディアのパッケージ化

IBM Intelligent Operations Center は、DVD パッケージで注文することも、パスポート・アドバンテージから入手することもできます。

製品番号は 5725-D69 です。

関連情報:

 パスポート・アドバンテージ

インストール・オプション

IBM Intelligent Operations Center には、4 種類のインストール・オプションがあります。

オプションには、標準環境用と高可用性環境用があります。これらの環境用に、それぞれ 2 つのインストーラーが用意されています。

グラフィカル・インストーラーは、簡素化されたインストールを行います。インストールしたシステムを構成するためのオプションは最小限しかありません。

コマンド行インストーラーでは、インストールしたシステムをより柔軟に構成できます。

インストール・チェックリスト

IBM Intelligent Operations Center のインストール・オプションに、インストール・チェックリストを使用できます。これらのチェックリストはインストール手順の概要を示すものであり、インストールの進行を追跡するのに使用できます。

チェックリスト - コマンド行インストーラーを使用した標準トポロジーのインストール

コマンド行インストーラーを使用して IBM Intelligent Operations Center 標準トポロジーをインストールする際には、このチェックリストを使用してインストール・ステップを確認してください。

手順

- 1. IBM Intelligent Operations Center の予防サービス計画に関する技術情報で、製品資料に加えられた変更のうち、IBM Intelligent Operations Center のインストールと使用に影響する可能性のあるものを確認してください。
- 2. 必要なハードウェアがあることを確認します。
- 3. 必要なソフトウェアがハードウェアにインストールされていることを確認します。
- 4. オプション: Kickstart ファイルを使用して、サーバー上で Red Hat Enterprise Linux を準備します。オペレーティング・システムの準備は、「サーバーを準備します。」のステップの一部として手動で実行することもできます。
- 5. サーバーを準備します。
 - a. TCP/IP ネットワーキングをセットアップします。
 - b. セキュリティー設定を無効にします。
 - c. ssh サービスをセットアップします。
 - d. ssh アクセスとパスワードを必要とするユーザーを構成します。
 - e. 必要な Linux パッケージをインストールします。
 - f. その他のインストール前要件を設定します。
 - g. インストール・サーバーを準備します。
- 6. インストール・プロパティを検証し、必要に応じてカスタマイズします。
- 7. トポロジー・プロパティ・ファイルを編集して、インストール用のトポロジーを定義します。
- 8. コマンド行インストーラーを実行します。

重要: トポロジー・パスワードを必ず記録しておいてください。パスワード管理ツールおよびプラットフォーム制御ツールを実行している場合には、トポロジー・パスワードが必要です。デフォルトのトポロジー・パスワードは `ibmioc16` です。
- 9. IBM Intelligent Operations Center を構成する前に、インストールを確認します。
- 10. IBM Intelligent Operations Center を構成します。
 - a. IPv6 を使用する場合は、コラボレーション・サービスを構成します。
 - b. コラボレーション・サービス用のシングル・サインオンを構成します。
 - c. IBM Business Monitor の HTTPOnly 設定を解除します。
 - d. オプション: セッション・タイムアウトを構成します。

- __ e. オプション: LTPA タイムアウトを構成します。
- __ 11. IBM Intelligent Operations Center が正しくインストールされていることを確認します。
- __ 12. オプション: Semantic Model Services をインストールして構成します。
- __ 13. IBM Intelligent Operations Center が正しくインストールされていることを確認します。
- __ 14. その他のアプリケーションをすべてインストールします。

タスクの結果

IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーおよび IBM Intelligent Operations Center アプリケーションがインストールされ、使用の準備が整いました。

チェックリスト - グラフィック・インストーラーを使用した標準トポロジーのインストール

GUI インストーラーを使用して IBM Intelligent Operations Center 標準トポロジーをインストールする際には、このチェックリストを使用してインストール・ステップを確認してください。

手順

- __ 1. IBM Intelligent Operations Center の予防サービス計画に関する技術情報で、製品資料に加えられた変更のうち、IBM Intelligent Operations Center のインストールと使用に影響する可能性のあるものを確認してください。
- __ 2. 必要なハードウェアがあることを確認します。
- __ 3. 必要なソフトウェアがハードウェアにインストールされていることを確認します。
- __ 4. オプション: Kickstart ファイルを使用して、サーバー上で Red Hat Enterprise Linux を準備します。オペレーティング・システムの準備は、「サーバーを準備します。」のステップの一部として手動で実行することもできます。
- __ 5. サーバーを準備します。
 - a. TCP/IP ネットワーキングをセットアップします。
 - b. セキュリティー設定を無効にします。
 - c. ssh サービスをセットアップします。
 - d. ssh アクセスとパスワードを必要とするユーザーを構成します。
 - e. 必要な Linux パッケージをインストールします。
 - f. その他のインストール前要件を設定します。
 - g. インストール・サーバーを準備します。
- __ 6. 標準環境の GUI インストーラーを実行します。

重要: トポロジー・パスワードを必ず記録しておいてください。パスワード管理ツールおよびプラットフォーム制御ツールを実行している場合には、トポロジー・パスワードが必要です。デフォルトのトポロジー・パスワードは `ibmioc16` です。

- __ 7. IBM Intelligent Operations Center を構成する前に、インストールを確認します。
- __ 8. IBM Intelligent Operations Center を構成します。
 - __ a. IPv6 を使用する場合は、コラボレーション・サービスを構成します。
 - __ b. コラボレーション・サービス用のシングル・サインオンを構成します。
 - __ c. IBM Business Monitor の HTTPOnly 設定を解除します。
 - __ d. オプション: セッション・タイムアウトを構成します。

- __ e. オプション: LTPA タイムアウトを構成します。
- __ 9. オプション: Semantic Model Services をインストールして構成します。
- __ 10. IBM Intelligent Operations Center が正しくインストールされていることを確認します。
- __ 11. その他のアプリケーションをすべてインストールします。

タスクの結果

IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーおよび IBM Intelligent Operations Center アプリケーションがインストールされ、使用の準備が整います。

チェックリスト - コマンド行インストーラーを使用した高可用性トポロジーのインストール

コマンド行インストーラーを使用して IBM Intelligent Operations Center 標準トポロジーをインストールする際には、このチェックリストを使用してインストール・ステップを確認してください。

手順

- __ 1. IBM Intelligent Operations Center の予防サービス計画に関する技術情報で、製品資料に加えられた変更のうち、IBM Intelligent Operations Center のインストールと使用に影響する可能性のあるものを確認してください。
- __ 2. 必要なハードウェアがあることを確認します。
- __ 3. 必要なソフトウェアがハードウェアにインストールされていることを確認します。
- __ 4. オプション: Kickstart ファイルを使用して、サーバー上で Red Hat Enterprise Linux を準備します。オペレーティング・システムの準備は、「サーバーを準備します。」のステップの一部として手動で実行することもできます。
- __ 5. サーバーを準備します。
 - a. TCP/IP ネットワーキングをセットアップします。
 - b. セキュリティー設定を無効にします。
 - c. ssh サービスをセットアップします。
 - d. ssh アクセスとパスワードを必要とするユーザーを構成します。
 - e. 必要な Linux パッケージをインストールします。
 - f. その他のインストール前要件を設定します。
 - g. 高可用性環境で稼働するようにサーバーを準備します。
 - h. インストール・サーバーを準備します。
- __ 6. インストール・プロパティを検証し、必要に応じてカスタマイズします。
- __ 7. トポロジー・プロパティ・ファイルを編集して、インストール用のトポロジーを定義します。
- __ 8. コマンド行インストーラーを実行します。

重要: トポロジー・パスワードを必ず記録しておいてください。パスワード管理ツールおよびプラットフォーム制御ツールを実行している場合には、トポロジー・パスワードが必要です。デフォルトのトポロジー・パスワードは `ibmioc16` です。

- __ 9. IBM Intelligent Operations Center を構成する前に、インストールを確認します。
- __ 10. IBM Intelligent Operations Center を構成します。
 - __ a. IPv6 を使用する場合は、コラボレーション・サービスを構成します。
 - __ b. コラボレーション・サービス用のシングル・サインオンを構成します。

- __ c. IBM Business Monitor の HTTPOnly 設定を解除します。
- __ d. 追加のクラスター・マネージャー関係を構成します。
- __ e. オプション: セッション・タイムアウトを構成します。
- __ f. オプション: LTPA タイムアウトを構成します。
- __ g. オプション: オプションの外部ネットワーク・ファイル・システムを構成します。
- __ h. オプション: 高可用性環境における Cognos モデルの構成
- __ 11. IBM Intelligent Operations Center が正しくインストールされていることを確認します。
- __ 12. オプション: Semantic Model Services をインストールして構成します。
- __ 13. IBM Intelligent Operations Center が正しくインストールされていることを確認します。
- __ 14. その他のアプリケーションをすべてインストールします。

タスクの結果

IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーおよび IBM Intelligent Operations Center アプリケーションがインストールされ、使用の準備が整いました。

チェックリスト - グラフィック・インストーラーを使用した高可用性トポロジーのインストール

グラフィック・インストーラーを使用して IBM Intelligent Operations Center 高可用性トポロジーをインストールする際には、このチェックリストを使用してインストール・ステップを確認してください。

手順

- __ 1. IBM Intelligent Operations Center の予防サービス計画に関する技術情報で、製品資料に加えられた変更のうち、IBM Intelligent Operations Center のインストールと使用に影響する可能性のあるものを確認してください。
- __ 2. 必要なハードウェアがあることを確認します。
- __ 3. 必要なソフトウェアがハードウェアにインストールされていることを確認します。
- __ 4. オプション: Kickstart ファイルを使用して、サーバー上で Red Hat Enterprise Linux を準備します。オペレーティング・システムの準備は、「サーバーを準備します。」のステップの一部として手動で実行することもできます。
- __ 5. サーバーを準備します。
 - a. TCP/IP ネットワーキングをセットアップします。
 - b. セキュリティー設定を無効にします。
 - c. ssh サービスをセットアップします。
 - d. ssh アクセスとパスワードを必要とするユーザーを構成します。
 - e. 必要な Linux パッケージをインストールします。
 - f. その他のインストール前要件を設定します。
 - g. 高可用性環境で稼働するようにサーバーを準備します。
 - h. インストール・サーバーを準備します。
- __ 6. 高可用性環境の GUI インストーラーを実行します。

重要: トポロジー・パスワードを必ず記録しておいてください。パスワード管理ツールおよびプラットフォーム制御ツールを実行している場合には、トポロジー・パスワードが必要です。デフォルトのトポロジー・パスワードは `ibmioc16` です。

- __ 7. IBM Intelligent Operations Center を構成する前に、インストールを確認します。
- __ 8. IBM Intelligent Operations Center を構成します。
 - __ a. IPv6 を使用する場合は、コラボレーション・サービスを構成します。
 - __ b. コラボレーション・サービス用のシングル・サインオンを構成します。
 - __ c. 追加のクラスター・マネージャー関係を構成します。
 - __ d. IBM Business Monitor の HTTPOnly 設定を解除します。
 - __ e. オプション: セッション・タイムアウトを構成します。
 - __ f. オプション: LTPA タイムアウトを構成します。
 - __ g. オプション: オプションの外部ネットワーク・ファイル・システムを構成します。
 - __ h. オプション: 高可用性環境における Cognos モデルの構成
- __ 9. オプション: Semantic Model Services をインストールして構成します。
- __ 10. IBM Intelligent Operations Center が正しくインストールされていることを確認します。
- __ 11. その他のアプリケーションをすべてインストールします。

タスクの結果

IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーおよび IBM Intelligent Operations Center アプリケーションがインストールされ、使用の準備が整います。

Kickstart ファイルを使用した Red Hat Enterprise Linux の準備

IBM Intelligent Operations Center には、仮想サーバーまたはハードウェアサーバーで標準環境および高可用性環境用に Red Hat Enterprise Linux V6 オペレーティング・システムを準備するためのサンプルの Kickstart ファイルが用意されています。

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center のサーバー要件では、Red Hat Enterprise Linux のインストール時に minimal インストール・オプションが選択されていることが前提となっています。minimal オプションで提供されるのは、Red Hat Enterprise Linux の実行に不可欠な @core パッケージと @server-policy パッケージのみです。@core パッケージと @server-policy パッケージには、単一目的のサーバーまたはデスクトップ・アプライアンスに必要な Linux rpm パッケージが含まれており、これによってインストールのパフォーマンスとセキュリティを最大限に高めることができます。IBM Intelligent Operations Center に用意された Kickstart ファイルには、IBM Intelligent Operations Center に必要なすべてのパッケージが含まれており、これを使用することでサーバーをインストール用に準備することができます。

Kickstart ファイルは、インストール・メディアの /rhel-kickstart ディレクトリーにあります。

標準環境用に用意されている Kickstart ファイルは次のとおりです。

- std_ks-iopana-min.cfg - 分析サーバー用の Kickstart ファイル
- std_ks-iopapp-min.cfg - アプリケーション・サーバー用の Kickstart ファイル
- std_ks-iopdb-min.cfg - データ・サーバー用の Kickstart ファイル
- std_ks-iopdmz-min.cfg - Web サーバー用の Kickstart ファイル
- std_ks-iopmdl-min.cfg - セマンティック・モデル・サーバー用の Kickstart ファイル

高可用性環境用に用意されている Kickstart ファイルは次のとおりです。

- ha_ks-iopana1-min.cfg - 分析サーバー 1 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopana2-min.cfg - 分析サーバー 2 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopapp1-min.cfg - アプリケーション・サーバー 1 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopapp2-min.cfg - アプリケーション・サーバー 2 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopdb1-min.cfg - データ・サーバー 1 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopdb2-min.cfg - データ・サーバー 2 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopdmz1-min.cfg - Web サーバー 1 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopdmz2-min.cfg - Web サーバー 2 用の Kickstart ファイル
- ha_ks-iopmdl1-min.cfg - セマンティック・モデル・サーバー用の Kickstart ファイル

手順

各 Kickstart ファイルをセットアップします。

1. Kickstart ファイルを編集します。
2. lang の値を、インストール済み環境の言語に変更します。デフォルトは en_US.UTF-8 です。
3. rootpw の値を、システムのルート・パスワードに変更します。デフォルトは ibmioc16 です。
4. timezone の値を、インストール済み環境のタイム・ゾーンに変更します。デフォルトは America/New_York です。
5. network の情報を、ターゲット・システムに合わせて変更します。デフォルトはサーバーごとに異なります。
6. オプション: ファイル・システム区画のレイアウトを変更します。デフォルトの構成では、すべてのファイル・システム区画が 1 つのディスクに作成されます。

Kickstart ファイルを使用してサーバーまたは仮想マシンを構成します。

7. Kickstart ファイルで、インストール前のステップを実行します。
8. Kickstart ファイルを使用して、ハードウェア・サーバーまたは仮想マシンに Red Hat Enterprise Linux をインストールし、構成します。
9. Kickstart ファイルで、インストール後のステップを実行します。
10. 仮想マシンのスナップショット、またはハードウェア・サーバーのバックアップを作成します。

次のタスク

すべてのハードウェア・サーバーまたは仮想マシンで、Kickstart ファイルを使用してオペレーティング・システムを構成したら、他のサーバーの準備ステップに進みます。必要な Linux パッケージのインストールは Kickstart ファイルによって行われるため、これらステップはスキップして構いません。サーバーを準備したら、IBM Intelligent Operations Center をインストールします。

関連タスク:

39 ページの『サーバーの準備』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、オプションの セマンティック・モデル・サーバー (使用する場合) を含むすべてのサーバーを正しく準備する必要があります。これを行わなければ、インストールは失敗します。事前検査ステップでは、セマンティック・モデル・サーバーを除くすべてのサーバーについて、これらの要件の多くが実装済みであることを検査します。

45 ページの『標準環境用の Linux パッケージのインストール』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、Linux パッケージをサーバー上にインストールする必要があります。

49 ページの『高可用性環境用の Linux パッケージのインストール』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、Linux パッケージをサーバー上にインストールする必要があります。

サーバーの準備

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、オプションの セマンティック・モデル・サーバー (使用する場合) を含むすべてのサーバーを正しく準備する必要があります。これを行わなければ、インストールは失敗します。事前検査ステップでは、セマンティック・モデル・サーバーを除くすべてのサーバーについて、これらの要件の多くが実装済みであることを検査します。

このタスクについて

仮想環境で稼働している場合は、以下のステップのテンプレートを使用するとセットアップ時間を短縮できます。各セクションのステップをサーバーごとに実行するか、またはこれらのステップを使用した RHEL テンプレートを作成します。

関連概念:

31 ページの『前提ソフトウェア要件』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、すべてのサーバーに適切なソフトウェアをインストールしておく必要があります。

28 ページの『標準環境用の IBM Intelligent Operations Center ハードウェア要件』

標準トポロジーを使用して IBM Intelligent Operations Center をインストールするには、最小要件を満たす 4 つのサーバーが必要です。Semantic Model Servicesが必要な場合は、オプションの 1 つのセマンティック・モデル・サーバーが必要です。分析サーバーはインストール・サーバーとしても機能します。

29 ページの『高可用性環境用の IBM Intelligent Operations Center ハードウェア要件』

高可用性トポロジーを使用して IBM Intelligent Operations Center をインストールするには、最小要件を満たす 8 つのサーバーが必要です。Semantic Model Servicesが必要な場合は、オプションの 1 つのセマンティック・モデル・サーバーが必要です。分析サーバー 1 は、インストール・サーバーとしても機能します。

TCP/IP ネットワーキングのセットアップ

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、サーバー上で TCP/IP ネットワーキングをセットアップする必要があります。

このタスクについて

高可用性環境用の IBM Intelligent Operations Center をインストールする場合は、IPv4 を使用する必要があります。高可用性サーバー・クラスタリングでは、IPv6 はサポートされていません。

手順

1. DNS サーバーを使用するか、`/etc/hosts` ファイル内の定義によって、完全修飾名および短縮ホスト名を定義します。
2. `/etc/sysconfig/network` で設定されている `HOSTNAME` が、完全修飾ホスト名ではなく短縮ホスト名であることを確認します。例えば、`HOSTNAME=xyz.yourco.com` ではなく `HOSTNAME=xyz` と設定します。
3. すべてのサーバーで、ホスト名、完全修飾ホスト名、およびドメイン名が構成されていることを確認します。以下のテストが正常に完了すれば、サーバーは正しく構成されています。
 - a. `hostname -s` コマンドは、サーバーの定義された短縮ホスト名を返します。

- b. **hostname -f** コマンドは、サーバーの完全修飾ドメインとホスト名を返します。
 - c. **hostname -d** コマンドは、サーバーのドメイン名を返します。
 - d. サーバーごとに短縮ホスト名を指定した **ping** コマンド (IPv6 環境の場合は **ping6** コマンド) の結果は、サーバーがアクセス可能であることを示します。
 - e. サーバーごとに完全修飾名を指定した **ping** コマンド (IPv6 環境の場合は **ping6** コマンド) の結果は、サーバーがアクセス可能であることを示します。
4. /etc/hosts ファイル内の各サーバーに対して、ローカル・ループバック・アドレッシングを有効にします。
 5. ローカル・ループバック・アドレッシングを検証します。以下のテストが正常に完了すれば、サーバーは正しく構成されています。
 - a. **ping -n localhost** コマンドが、アドレス 127.0.0.1 を返す。
 - b. **ping -n localhost.localdomain** コマンドが、アドレス 127.0.0.1 を返す。
 - c. IPv6 環境で、**ping6 -n localhost6** コマンドが、アドレス ::1 を返す。
 - d. IPv6 環境で、**ping6 -n localhost6.localdomain6** コマンドが、アドレス ::1 を返す。
 6. 以下のサーバーの /etc/sysctl.conf ファイルで、**net.ipv4.tcp_fin_timeout=15** パラメーターを追加または更新します。
 - アプリケーション・サーバー
 - 分析サーバー
 - データ・サーバー
 - Web サーバー
 - セマンティック・モデル・サーバー (使用している場合)

/etc/sysctl.conf ファイルの変更後は、サーバーを再起動してください。

このステップが、サーバーの準備を行う時点で実行されていない場合は、セマンティック・モデル・サーバーを除くすべてのサーバーについて、IBM Intelligent Operations Center のインストール・プログラムが設定を修正します。

TCP/IP ネットワーキング

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、サーバー間の TCP/IP ネットワーキングを正しく構成する必要があります。

高可用性環境用の IBM Intelligent Operations Center をインストールする場合は、IPv4 を使用する必要があります。高可用性サーバー・クラスタリングでは、IPv6 はサポートされていません。

IBM Intelligent Operations Center で使用されるすべてのサーバーは、短縮ホスト名および完全修飾ホスト名を使用して構成する必要があります。これらのホスト名は、各サーバー上で正しい IP アドレスに解決されている必要があります。構成は、DNS サーバーを使用して、または /etc/hosts ファイルに定義を追加することで実行することができます。

各サーバーの完全修飾ホスト名には、少なくとも 3 つの構成要素が必要です。例えば、myhost.mydomain.com となります。ここで、最上位のドメインは、標準インターネット・トップレベル・ドメインです。

重要: 短縮ホスト名および完全修飾ホスト名は、正しい大/小文字で指定する必要があります。例えば、MyCompany.MyDomain.com を mycompany.mydomain.com と指定することはできません。

IPv6 ネットワーキングは IBM Intelligent Operations Center でサポートされていますが、IPv4 も同様にインストールして構成する必要があります。 IPv4 アドレスをサーバーに割り当てる必要はありませんが、IPv4 ループバック・アドレス (127.0.0.1) を有効化し、localhost ホスト名を 127.0.0.1 に解決する必要があります。

構成変更について、表 6 に示します。 これは、Linux ネットワーク構成ファイルを編集することによって IBM Intelligent Operations Center インストール・サーバーおよびターゲット・サーバーで TCP/IP ネットワーキングをセットアップするためのガイドラインです。表 6 の構成に関する注は、単なるガイドラインです。先に説明した要件に準拠するネットワーク・セットアップで機能することを確認してください。

表 6. TCP/IP 構成のガイドライン

ファイル	注
/etc/hosts	<p>hosts ファイルは、TCP/IP 名を IP アドレスに解決します。構成に DNS サーバーがない場合は、すべてのサーバーとその IP アドレス、短縮ホスト名、および完全修飾名をこのファイルで定義する必要があります。また、ローカル・ループバック・アドレスおよびホスト名も、このファイルで定義します。</p> <p>DNS サーバーを使用している場合は、DNS で解決されているホストをこのファイルに含める必要はありません。</p> <p>重要: IPv4 を使用している場合は、ローカル・ループバック・アドレス 127.0.0.1 を localhost および localhost.localdomain ホスト名にマップする必要があります。</p> <p>以下は、IPv4 アドレスを使用した /etc/hosts ファイルのサンプルです。</p> <pre># local loopback definitions -- do not remove # or alter these! 127.0.0.1 localhost.localdomain localhost # use the following if IPv6 is enabled in your # network definitions ::1 localhost6.localdomain localhost6 # target runtime servers for the standard topology 192.168.0.210 iocweb.ioc16.com iocweb 192.168.0.211 iocapp.ioc16.com iocapp 192.168.0.212 iocdb.ioc16.com iocdb 192.168.0.213 iocana.ioc16.com iocana # target runtime servers for the high availability topology 192.168.0.210 iocweb1.ioc16.com iocweb1 192.168.0.211 iocweb2.ioc16.com iocweb2 192.168.0.212 iocapp1.ioc16.com iocapp1 192.168.0.213 iocapp2.ioc16.com iocapp2 192.168.0.214 iocdb1.ioc16.com iocdb1 192.168.0.215 iocdb2.ioc16.com iocdb2 192.168.0.216 iocana1.ioc16.com iocana1 192.168.0.217 iocana2.ioc16.com iocana2</pre> <p>IPv6 の静的アドレスを割り当てるには、IPv6 のアドレス表記を使用します。</p> <p>IPv6 アドレスと IPv4 アドレスの両方を同一のサーバーで定義することができます。</p>

表 6. TCP/IP 構成のガイドライン (続き)

ファイル	注
<p><code>/etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-<i>adapter_name</i></code></p>	<p><code>ifcfg-<i>adapter_name</i></code> ファイルでは、指定のネットワーク・アダプターの基本ネットワーク設定を定義します。Linux により割り当てられるネットワーク・アダプターの名前は、<code>adapter_name</code> によって指定されます。<code>adapter_name</code> の代表的な値は <code>eth0</code> ですが、ご使用の環境では異なる場合があります。</p> <p>IPv4 ネットワーキングの場合は、以下のパラメーターを定義する必要があります。</p> <p>IPADDR 構成中のサーバーの IPv4 IP アドレスを指定します。</p> <p>NETMASK 構成中のサーバーの IPv4 ネットワーク・マスクを指定します。</p> <p>GATEWAY 構成中のサーバーの、デフォルトの IPv4 ネットワーク IP アドレスを指定します。</p> <p>BOOTPROTO 固定 IP アドレッシングを使用している場合は、<code>none</code> を指定します。</p> <p>NM_CONTROLLED ネットワーク管理サービスが <code>ifcfg-<i>adapter_name</i></code> ファイルを変更できないようにするには、<code>no</code> を指定します。</p> <p>ONBOOT アダプターを自動的に開始するには、<code>yes</code> を指定します。</p> <p>IPV6INIT アダプターが IPv6 ネットワーキングを使用するようにする場合は、<code>yes</code> を指定します。</p> <p>IPV6ADDR <code>IPV6INIT=yes</code> が指定されている場合は、サーバー IPv6 IP アドレスを指定します。</p> <p>IPV6_DEFAULTGW <code>IPV6INIT=yes</code> が指定されている場合は、サーバー IPv6 デフォルト・ネットワーク・ゲートウェイ IP アドレスを指定します。</p>

表 6. TCP/IP 構成のガイドライン (続き)

ファイル	注
<p>/etc/sysconfig/network</p>	<p>network ファイルでは、汎用ネットワーク・パラメーターを指定します。</p> <p>IPv4 ネットワーキングの場合は、以下のパラメーターを定義する必要があります。</p> <p>NETWORKING IPv4 ネットワーキングを有効にするには、yes を指定します。</p> <p>NETWORKING_IPV6 IPv6 ネットワーキングも必要な場合は、yes を指定します。</p> <p>HOSTNAME サーバーの短縮ホスト名を指定します。</p> <p>/etc/sysconfig/network ファイルの編集によるホスト名構成の変更は、サーバーを再始動するまでは有効になりません。再始動が望ましくない場合は、hostname new_host_name コマンドを実行して、現在のシェル・セッションのホスト名を変更してください。例えば、サーバーのホスト名を iocweb に変更するには、hostname iocweb コマンドを実行します。</p>
<p>/etc/resolv.conf</p>	<p>resolv.conf ファイルは、ネットワークおよびデフォルトの検索ドメイン用の DNS サーバーを定義する場合に使用されます。DNS サーバーを使用していない場合は、このファイルは空にしてください。</p> <p>DNS サーバーを使用する場合は、resolv.conf には以下の行を含めてください。</p> <pre>search domain_name nameserver first_DNS_server nameserver second_DNS_server</pre> <p>例えば、以下のようなものがあります。</p> <pre>search yourcompany.com nameserver 10.75.20.10 nameserver 10.75.20.11</pre> <p>search の値は、デフォルトの検索ドメインを指定します。最初の nameserver の値は、DNS サーバーの IP アドレスです。2 番目の nameserver の値は、2 次 DNS サーバーを指定する場合に使用できます。2 番目の nameserver の指定はオプションです。</p>

正しく構成されている場合は、各サーバーが以下のテストを正常にパスする必要があります。

1. **hostname -s** コマンドは、サーバーの定義された短縮ホスト名を返します。
2. **hostname -f** コマンドは、サーバーの完全修飾ドメインとホスト名を返します。
3. **hostname -d** コマンドは、サーバーのドメイン名を返します。

4. サーバーごとに短縮ホスト名を指定した **ping** コマンド (IPV6 環境の場合は **ping6** コマンド) の結果は、サーバーがアクセス可能であることを示します。
5. サーバーごとに完全修飾名を指定した **ping** コマンド (IPV6 環境の場合は **ping6** コマンド) の結果は、サーバーがアクセス可能であることを示します。

関連タスク:

39 ページの『サーバーの準備』

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、オプションの セマンティック・モデル・サーバー (使用する場合) を含むすべてのサーバーを正しく準備する必要があります。これを行わなければ、インストールは失敗します。事前検査ステップでは、セマンティック・モデル・サーバーを除くすべてのサーバーについて、これらの要件の多くが実装済みであることを検査します。

セキュリティー設定を無効にする

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、いくつかのセキュリティー設定を無効にする必要があります。これらの設定は、IBM Intelligent Operations Center のインストール後に再度有効にすることができます。

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に以下のステップを実行しない場合は、インストーラーがすべてのファイアウォールを無効化します。SELinux も、「permissive」に設定されていなければ、無効化されます。「permissive」に設定されている場合は、その設定が保持されます。いずれの場合も、インストールは正常に進行します。セマンティック・モデル・サーバーについては、これらの変更がインストーラーによって行われることはありません。

手順

1. SELinux (Security Enforcing Linux) を無効にします。そのためには、`/etc/selinux/config` ファイルを編集して、`SELINUX` を `disabled` に変更します。構成を変更したら、サーバーを再始動します。
2. すべての Linux ファイアウォールを無効にします。

SSH サービスのセットアップ

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、サーバー上で ssh サービスをセットアップする必要があります。このサービスは、パスワード認証を使用した root ログインのために有効にする必要があります。

このタスクについて

TCP/IP ポート 22 は、インストール処理中に使用するための、利用可能な ssh アクセス・ポートとして、オペレーティング・システムで構成する必要があります。プラットフォーム制御ツールの ssh アクセス用の TCP/IP ポート番号は、トポロジー・プロパティ・ファイルに指定されています。構成されたポートは、プラットフォーム制御ツールのみが使用します。

手順

1. `/etc/ssh/sshd_config` ファイルを編集します。
2. 以下の行が記載どおりに指定されていることを確認します。これらの行の先頭に `#` 記号がないことを確認します。

```
PermitRootLogin yes
PasswordAuthentication yes
```

3. 変更したファイルを保存します。
4. `service sshd restart` コマンドを実行して、各サーバーで `sshd` サービスを開始または再始動します。

SSH 構成の更新

IBM Intelligent Operations Center のインストールを正常に実行するには、SSH 構成の変更が必要です。

このタスクについて

各 IBM Intelligent Operations Center サーバーで、`/etc/ssh/sshd_config` ファイルの内容を確認し、必要に応じてこのファイルを変更します。

手順

1. コマンド `cp /etc/ssh/sshd_config /etc/ssh/sshd_config.orig` を実行して、ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
2. `/etc/ssh/sshd_config` ファイルを編集します。
3. `AllowUsers` ステートメントをすべてコメント化します。
4. `AllowGroups` ステートメントをすべてコメント化します。
5. IBM Intelligent Operations Center のインストールが完了するまで、`PermitRootLogin` ステートメントを `yes` に設定します。ファイル内に `PermitRootLogin` ステートメントがない場合は、このステートメントを追加しないでください。
6. IBM Intelligent Operations Center のインストールが完了するまで、`PasswordAuthentication` ステートメントを `yes` に設定します。`PasswordAuthentication` ステートメントがない場合は、このステートメントを追加しないでください。
7. 変更を保存します。
8. コマンド `cp /etc/ssh/sshd_config /etc/ssh/sshd_config.ioc_maintenance` を実行して、変更したファイルのバックアップ・コピーを作成します。
9. `sshd_config` ファイルを変更した場合は、コマンド `service sshd restart` を実行して、変更内容を有効にします。

次のタスク

IBM Intelligent Operations Center が正常にインストールされたら、`/etc/ssh/sshd_config` を元の状態に戻し、コマンド `service sshd restart` を実行して、変更内容を有効化します。

標準環境用の Linux パッケージのインストール

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、Linux パッケージをサーバー上にインストールする必要があります。

このタスクについて

Linux パッケージの要件では、Red Hat のインストール時に `Minimal` オプションが選択されていることが前提となっています。`Minimal` オプションでは、Red Hat Enterprise Linux の実行に不可欠な `@core` パッケージと `@server-policy` パッケージだけが提供されます。最小インストールは、単一目的のサーバーまたはデスクトップ・アプライアンスの基盤を提供するとともに、インストールのパフォーマンスとセキュリティが最大となります。

以下の表に示す Linux パッケージを IBM Intelligent Operations Center サーバーにインストールする必要があります。 GUI インストーラーを使用する場合は、redhat-lsb パッケージが分析サーバー上に必要です。これらのパッケージは Red Hat から入手できます。

表 7. IBM Intelligent Operations Center サーバーに必要な Linux パッケージ

アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
bc.x86_64 compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64 1.6.0.2 pam.i686 pam-devel.i686	compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXft.i686 libXft.x86_64 libXmu.i686 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 redhat-lsb.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64 1.6.0.2 pam.i686 pam-devel.i686	audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 compat-libstdc++i686 compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam.i686 pam-devel.i686 pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64	compat-db.i686 compat-db.x86_64 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64	audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 bc.x86_64 compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64 gettext.x86_64 gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2-engines.i686 elfutils-libs.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libcanberra.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686 libXft.i686 libXft.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686 libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam.i686 pam-devel.i686 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64

手順

1. すべてのサーバーに、必要な Linux パッケージをすべてインストールすることも、サーバーごとに必要なパッケージのみをインストールすることもできます。

- すべてのサーバーにすべてのパッケージをインストールするには、各サーバー上で以下のコマンドを実行します。各 **yum** コマンドは、1 行で指定する必要があります。

```

yum install -y audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 bc.x86_64
compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64
compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686
compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64
elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64
gettext.x86_64
gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64
gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64
libaio.i686
libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686 libXft.i686
libXft.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686
libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 libXtst.i686

```

```
libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64
pam.i686 pam-devel.i686 redhat-lsb.x86_64 rpm-build.x86_64
unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

- サーバーごとに必要なパッケージのみをインストールするには、以下のコマンドを実行します。各 **yum** コマンドは、1 行で指定する必要があります。

アプリケーション・サーバー上:

```
yum install -y bc.x86_64 compat-db.i686 compat-db.x86_64
compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64
compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64
elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64
glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686
gtk2-engines.x86_64 libaio.i686
libaio.x86_64 libgcc.i686
libgcc.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.x86_64
libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64
pam.i686 pam-devel.i686
rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

分析サーバー上:

```
yum install -y compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64
compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64
elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64
gettext.x86_64 gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64
gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64
```

```
libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXft.i686
libXft.x86_64 libXmu.i686 libXtst.i686 libXtst.x86_64
nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686
nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686
openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64
pam.i686 pam-devel.i686 redhat-lsb.x86_64
rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

データ・サーバー上:

```
yum install -y audit-libs.i686 audit-libs.x86_64
compat-libstdc++i686 compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64
gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686
libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openssh-clients.x86_64 pam.i686 pam-devel.i686 unzip.x86_64
xorg-x11-xauth.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

Web サーバー上:

```
yum install -y compat-db.i686 compat-db.x86_64 dos2unix.x86_64
elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64
gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64
gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64 libgcc.i686
libgcc.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64
libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 nss-softokn-freebl.i686
nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssh-clients.x86_64
rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686
zlib.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

セマンティック・モデル・サーバー上:

```
yum install -y audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 bc.x86_64
compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64
compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686
compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64
elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64
gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64
gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686
libaio.x86_64 libcanberra.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64
libstdc++.i686 libXft.i686 libXft.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64
libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686
libXpm-devel.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam.i686
pam-devel.i686 rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64
zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

2. オプション: X Window システム用の Linux パッケージをインストール・サーバー上にインストールします。 GUI インストーラーを使用する場合は、これらのパッケージが必要です。

- a. GNOME または KDE デスクトップ用のパッケージをインストールします。

GNOME デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" Desktop
```

KDE デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" "KDE Desktop"
```

- b. yum -y update を実行します。
- c. init 5 を実行して、デスクトップを始動します。 GUI デスクトップをデフォルトのデスクトップにするには、以下の手順を実行します。

- 1) /etc/inittab ファイルを編集します。
- 2) initdefault プロパティを 3 から 5 に変更します。更新後の行は以下のようになります。
id:5:initdefault:
- 3) 変更を保存します。
- 4) サーバーを再始動します。

3. オプション: X Window システム用の Linux パッケージをアプリケーション・サーバー上にインストールします。パスワード管理ツールを使用する場合は、これらのパッケージが必要です。

- a. GNOME または KDE デスクトップ用のパッケージをインストールします。

GNOME デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" Desktop
```

KDE デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" "KDE Desktop"
```

b. `yum -y update` を実行します。

c. `init 5` を実行して、デスクトップを始動します。 GUI デスクトップをデフォルトのデスクトップにするには、以下の手順を実行します。

1) `/etc/inittab` ファイルを編集します。

2) `initdefault` プロパティを 3 から 5 に変更します。更新後の行は以下のようになります。

```
id:5:initdefault:
```

3) 変更を保存します。

4) サーバーを再始動します。

4. 中国語、日本語、または韓国語のグラフィカル・インストーラーを使用する場合は、該当するコマンドを実行します。

言語	コマンド
中国語	<code>yum install -y "@Chinese Support"</code>
日本語	<code>yum install -y "@japanese Support"</code>
韓国語	<code>yum install -y "@Korean Support"</code>

関連情報:



<http://www.redhat.com/>

高可用性環境用の Linux パッケージのインストール

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、Linux パッケージをサーバー上にインストールする必要があります。

このタスクについて

Linux パッケージの要件では、Red Hat のインストール時に Minimal オプションが選択されていることが前提となっています。Minimal オプションでは、Red Hat Enterprise Linux の実行に不可欠な `@core` パッケージと `@server-policy` パッケージだけが提供されます。最小インストールは、単一目的のサーバーまたはデスクトップ・アプライアンスの基盤を提供するとともに、インストールのパフォーマンスとセキュリティが最大となります。

以下の表に示す Linux パッケージを IBM Intelligent Operations Center サーバーにインストールする必要があります。 GUI インストーラーを使用する場合は、`redhat-lsb` パッケージが分析サーバー上に必要です。これらのパッケージは Red Hat から入手できます。

表 8. 1 次 IBM Intelligent Operations Center サーバーに必要な Linux パッケージ

アプリケーション・サーバー 1	分析サーバー 1	データ・サーバー 1	Web サーバー 1	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
bc.x86_64 compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64 <div style="background-color: #0056b3; color: white; padding: 2px; text-align: center;">1.6.0.2</div> pam.i686 pam-devel.i686	compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXft.i686 libXft.x86_64 libXmu.i686 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 redhat-lsb.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zip.i686 zip.x86_64 以下は高可用性環境でのみ必要です。 ksh.x86_64 <div style="background-color: #0056b3; color: white; padding: 2px; text-align: center;">1.6.0.2</div> pam.i686 pam-devel.i686	audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 compat-libstdc++i686 compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam.i686 pam-devel.i686 pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64 以下は高可用性環境でのみ必要です。 zip.x86_64	compat-db.i686 compat-db.x86_64 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64	audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 bc.x86_64 compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libcanberra.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686 libXft.i686 libXft.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam.i686 pam-devel.i686 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64

表9. スタンバイ IBM Intelligent Operations Center サーバーに必要な Linux パッケージ

アプリケーション・サーバー 2	分析サーバー 2	データ・サーバー 2	Web サーバー 2
bc.x86_64 compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssl-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64 <div style="background-color: #0056b3; color: white; padding: 2px; text-align: center;">1.6.0.2</div> pam.i686 pam-devel.i686	compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXft.i686 libXft.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssl-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 redhat-lsb.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zip.i686 zip.x86_64 以下は高可用性環境でのみ必要です。 ksh.x86_64 <div style="background-color: #0056b3; color: white; padding: 2px; text-align: center;">1.6.0.2</div> pam.i686 pam-devel.i686	audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 compat-libstdc++i686 compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssl-clients.x86_64 pam.i686 pam-devel.i686 pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64 以下は高可用性環境でのみ必要です。 zip.x86_64	compat-db.i686 compat-db.x86_64 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssl-clients.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 rpm-build.x86_64 tcsh.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64

手順

1. すべてのサーバーに、必要な Linux パッケージをすべてインストールすることも、サーバーごとに必要なパッケージのみをインストールすることもできます。

- すべてのサーバーにすべてのパッケージをインストールするには、各サーバー上で以下のコマンドを実行します。各 **yum** コマンドは、1 行で指定する必要があります。

```

yum install -y audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 bc.x86_64
compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64
compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686
compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64
elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64
gettext.x86_64
gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64
gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64
libaio.i686
libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686 libXft.i686
libXft.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686
libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 libXtst.i686
libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssl-clients.x86_64
pam.i686 pam-devel.i686 redhat-lsb.x86_64 rpm-build.x86_64
unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
    
```

```
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

- サーバーごとに必要なパッケージのみをインストールするには、以下のコマンドを実行します。各 **yum** コマンドは、1 行で指定する必要があります。

アプリケーション・サーバー 1 および アプリケーション・サーバー 2 の場合:

```
yum install -y bc.x86_64 compat-db.i686 compat-db.x86_64
compat-glibc.x86_64 compat-glibc-headers.x86_64
compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64
elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64
glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686
gtk2-engines.x86_64 libaio.i686
libaio.x86_64 libgcc.i686
libgcc.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64 libXp.i686 libXpm.x86_64
libXtst.i686 libXtst.x86_64 nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64
pam.i686 pam-devel.i686
rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

分析サーバー 1 および 分析サーバー 2 の場合:

```
yum install -y ksh* unzip ksh.x86_64

yum install -y compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64
compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686 dos2unix.x86_64
elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64
gettext.x86_64 gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64
gtk2.i686 gtk2.x86_64 gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64

libaio.i686 libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libXft.i686
libXft.x86_64 libXmu.i686 libXtst.i686 libXtst.x86_64
nfs-utils.x86_64 nfs-utils-lib.x86_64 nss-softokn-freebl.i686
nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openmotif22.i686
openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64
pam.i686 pam-devel.i686 redhat-lsb.x86_64
rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

データ・サーバー 1 および データ・サーバー 2 の場合:

```
yum install -y zip.x86_64

yum install -y audit-libs.i686 audit-libs.x86_64
compat-libstdc++i686 compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64
gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686
libaio.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64 libstdc++.i686
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openssh-clients.x86_64 pam.i686 pam-devel.i686 unzip.x86_64
xorg-x11-xauth.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

Web サーバー 1 および Web サーバー 2 の場合:

```
yum install -y compat-db.i686 compat-db.x86_64 dos2unix.x86_64
elfutils.x86_64 elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64
gettext.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64
gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64 libgcc.i686
libgcc.x86_64 libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64
libXpm-devel.i686 libXpm-devel.x86_64 nss-softokn-freebl.i686
nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64 openssh-clients.x86_64
rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 zlib.i686
zlib.x86_64 pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

セマンティック・モデル・サーバー上:

```
yum install -y audit-libs.i686 audit-libs.x86_64 bc.x86_64
compat-db.i686 compat-db.x86_64 compat-glibc.x86_64
compat-glibc-headers.x86_64 compat-libstdc++i686
compat-libstdc++x86_64 dos2unix.x86_64 elfutils.x86_64
elfutils-libs.i686 elfutils-libs.x86_64 gettext.x86_64
gettext-libs.x86_64 glibc.i686 glibc.x86_64 gtk2.i686 gtk2.x86_64
gtk2-engines.i686 gtk2-engines.x86_64 ksh.x86_64 libaio.i686
libaio.x86_64 libcanberra.x86_64 libgcc.i686 libgcc.x86_64
libstdc++.i686 libXft.i686 libXft.x86_64 libXmu.i686 libXmu.x86_64
libXp.i686 libXpm.i686 libXpm.x86_64 libXpm-devel.i686
libXpm-devel.x86_64 libXtst.i686 libXtst.x86_64
nss-softokn-freebl.i686 nss-softokn-freebl.x86_64 ntp.x86_64
openmotif22.i686 openmotif22.x86_64 openssh-clients.x86_64 pam.i686
pam-devel.i686 rpm-build.x86_64 unzip.x86_64 xorg-x11-xauth.x86_64
zip.x86_64 zlib.i686 zlib.x86_64
pam_passwdqc.x86_64 tcsh.x86_64
```

```
yum -y update
```

2. オプション: X Window システム用の Linux パッケージをインストール・サーバー上にインストールします。GUI インストーラーを使用する場合は、これらのパッケージが必要です。

- a. GNOME または KDE デスクトップ用のパッケージをインストールします。

GNOME デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" Desktop
```

KDE デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" "KDE Desktop"
```

- b. yum -y update を実行します。
- c. init 5 を実行して、デスクトップを始動します。GUI デスクトップをデフォルトのデスクトップにするには、以下の手順を実行します。

- 1) /etc/inittab ファイルを編集します。

- 2) initdefault プロパティを 3 から 5 に変更します。更新後の行は以下のようになります。

```
id:5:initdefault:
```

- 3) 変更を保存します。

- 4) サーバーを再始動します。

3. オプション: X Window システム用の Linux パッケージをアプリケーション・サーバー上にインストールします。パスワード管理ツールを使用する場合は、これらのパッケージが必要です。

- a. GNOME または KDE デスクトップ用のパッケージをインストールします。

GNOME デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" Desktop
```

KDE デスクトップをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
yum -y groupinstall "X Window System" "KDE Desktop"
```

- b. `yum -y update` を実行します。
- c. `init 5` を実行して、デスクトップを始動します。 GUI デスクトップをデフォルトのデスクトップにするには、以下の手順を実行します。
 - 1) `/etc/inittab` ファイルを編集します。
 - 2) `initdefault` プロパティを 3 から 5 に変更します。更新後の行は以下のようになります。

```
id:5:initdefault:
```
 - 3) 変更を保存します。
 - 4) サーバーを再始動します。
4. 中国語、日本語、または韓国語のグラフィカル・インストーラーを使用する場合は、該当するコマンドを実行します。

言語	コマンド
中国語	<code>yum install -y "@Chinese Support"</code>
日本語	<code>yum install -y "@japanese Support"</code>
韓国語	<code>yum install -y "@Korean Support"</code>

5. **1.6.0.2** 分析サーバー 1 および分析サーバー 2 では、`nfs-utils rpm` パッケージのレベルが 1.2.3-36 であることが必要です。以下のステップを使用してパッケージを更新します。
 - a. Linux サポート・サーバーから `nfs-utils-1.2.3-36.el6.x86_64.rpm` をダウンロードします。
 - b. `root` ユーザーとして `rpm -qa nfs_utils*` を実行します。インストールされている `nfs-utils` パッケージが返されます。`nfs-utils-lib` のレベルは無視してかまいません。`nfs-utils-1.2.3-39.el6.x86_64` が返された場合は、アクションは不要です。
 - c. `nfs-utils-1.2.3-39.el6.x86_64` 以外の値が返された場合は、`root` ユーザーとして `rpm -e --nodeps nfs-utils-n.n.n-nn.el6.x86_64` を実行します (`n.n.n-nn` は `rpm -qa` コマンドで表示された値)。
 - d. `root` ユーザーとして `rpm -ivh your_download_location/nfs-utils-1.2.3-36.el6.x86_64.rpm` コマンドを実行します (`your_download_location` は `nfs-utils-1.2.3-36.el6.x86_64.rpm` がダウンロードされたディレクトリ)。

関連情報:



<http://www.redhat.com/>

その他のインストール前要件の設定

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、追加のサーバー・セットアップが必要です。

手順

1. Linux オペレーティング・システムで指示されているものと同じ時刻と日付のセットが、すべてのサーバーに設定されていることを確認します。時刻同期サービスを使用できます。
2. すべてのサーバーに、どのバージョンの IBM Java もインストールされていないことを確認します。
3. `UMASK` を `022` に設定します。
4. すべてのサーバーで `/etc/security/limits.conf` ファイルに以下の行を追加して、オープン・ファイルの最大数記述子を `20480` に設定します。

```
* soft nofile 20480
* hard nofile 20480
```

これにより、すべてのユーザーのオープン・ファイル数のデフォルトの制限 (ソフト・リミット) と最大数制限 (ハード・リミット) がそれぞれ 20480 に設定されます。他のアプリケーションで 20480 個を超えるオープン・ファイルが必要な場合は、必要に応じてハード・リミットを増やします。

サーバーの準備を行うときにこれらの設定が作成されていない場合は、IBM Intelligent Operations Center のインストール・プログラムが必要な設定を構成します。

構成済みのオープン・ファイル記述子を表示するには、**ulimit -n** コマンドを実行します。

5. すべてのサーバーで `/etc/security/limits.d/90-nproc.conf` ファイルに以下の行を追加して、ユーザー・プロセスの最大数を 16384 に設定します。

```
* soft nproc 16384
root soft nproc unlimited
* hard nproc 16384
root hard nproc 16384
```

これにより、すべてのユーザーのユーザー・プロセス数のデフォルトの制限 (ソフト・リミット) と最大数制限 (ハード・リミット) がそれぞれ 16384 に設定されます。他のアプリケーションで 16384 を超えるユーザー・プロセスが必要な場合は、必要に応じてハード・リミットを増やします。

サーバーの準備を行うときにこれらの設定が作成されていない場合は、IBM Intelligent Operations Center のインストール・プログラムが必要な設定を構成します。

構成済みのユーザー・プロセス制限を表示するには、**ulimit -u** コマンドを実行します。

高可用性用のサーバーの準備

高可用性環境に IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、追加のサーバー・セットアップが必要です。これらのステップは、オプションのセマンティック・モデル・サーバーについては不要です。

手順

1. ご使用のネットワークで IPV4 が実行されていることを確認します。高可用性サーバー・クラスタリングでは、IPV6 はサポートされていません。
2. Tivoli System Automation クラスタ化テクノロジーを正常にインストールできるよう、以下が正しく構成されていることを確認します。
 - a. ホスト名が正しく指定されているようにします。
 - b. トポロジー・プロパティ・ファイル内の `TSA.*` 構成プロパティに指定された値が正しく構成されているようにします。例えば、`TSA.PRIMARY.USERNIC` プロパティで指定された `NIC` が存在し、インストール時にアクティブであるようにします。
 - c. DB2 高可用性災害時リカバリー (HADR) ポートが使用可能であることを確認します。これらのポートは、1 次データベースからスタンバイ・データベースへ情報を複製するために使用します。デフォルトでは、これらのポートは 55000 番台です。
3. 分析サーバー 1 と分析サーバー 2 で、`rpcidmapd`、`nfs`、および `rpcbind` の各サービスが自動的に開始されるように設定され、これらのサービスが開始されているようにします。指定したサービスの開始情報を変更するコマンドは、**chkconfig service_name on** (`service_name` はサービスの名前) です。指定したサービスを開始するコマンドは、**/etc/init.d/service_name start** (`service_name` はサービスの名前) です。

関連タスク:

ホスト名の構成

IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、サーバー上で TCP/IP ネットワーキングをセットアップする必要があります。

インストール・サーバーの準備

IBM Intelligent Operations Center をインストールするには、事前にインストール・サーバーを準備する必要があります。

このタスクについて

標準環境では、分析サーバーがインストール・サーバーとして使用されます。高可用性環境では、分析サーバー 1 がインストール・サーバーとして使用されます。

手順

1. DVD のパッケージを注文するか、パスポート・アドバンテージからイメージを入手して、IBM Intelligent Operations Center のインストール・パッケージを入手します。
2. インストール・サーバーに /distributionMedia という名前のディレクトリーがまだ存在しない場合は、これを作成します。 /distributionMedia 以外のディレクトリーを使用する場合は、ディレクトリー名をメモしておいてください。この異なるディレクトリー名は、インストール時に指定する必要があります。以下のステップでは、例として /distributionMedia を使用します。
3. 物理 DVD を使用する場合は、インストール・イメージをインストール・サーバーにコピーします。
 - a. DVD をマウントします。
 - b. DVD の内容を、/distributionMedia ディレクトリー、または独自に作成したディレクトリーにコピーします。
 - c. DVD をアンマウントします。
 - d. すべての DVD の内容をインストール・サーバーのディレクトリーにコピーするまで、上記の手順を繰り返します。
4. パスポート・アドバンテージから入手した ISO イメージを使用する場合は、インストール・イメージをインストール・サーバーにコピーします。
 - a. /distributionMedia/iso ディレクトリーを作成するか、ステップ 2 で作成したディレクトリーに /iso サブディレクトリーを作成します。以下の説明では、例として /distributionMedia/iso を使用します。
 - b. パスポート・アドバンテージから /iso サブディレクトリーに、ISO イメージを 1 つずつダウンロードまたはコピーします。
 - c. ISO イメージをマウントするためのディレクトリーを作成します。この操作は、コマンド **mkdir /mnt/ioc16** を実行することで行うことができます。以下の説明では、例として /mnt/ioc16 を使用します。
 - d. 次のコマンドを実行して ISO イメージをマウントします。**mount -o loop /distributionMedia/iso/iso_filename /mnt/ioc16**。ここで、iso_filename はいずれかの ISO イメージ・ファイルの名前です。
 - e. 次のコマンドを実行して、ISO コンテンツを /distributionMedia にコピーします。**cp -r /mnt/ioc16/* /distributionMedia**。
 - f. すべての ISO イメージ・ファイルの処理が終了するまで、ISO コンテンツのマウントとコピーを繰り返します。

- g. 元の ISO イメージを保存するのであれば、/distributionMedia/iso ディレクトリーを削除します。
5. コマンド行インストーラーを使用して IBM Intelligent Operations Center をインストールする場合は、インストール・パッケージを解凍します。このステップは、GUI インストーラーを使用する場合は不要です。
- a. /installHome ディレクトリー、または独自に作成したディレクトリーに移動します。
 - b. **tar -zxvf ioc.tar.gz** コマンドを実行します。

トポロジー・プロパティー・ファイル

トポロジー・プロパティー・ファイルは、IBM Intelligent Operations Center の、お客様がカスタマイズ可能なデプロイメント用プロパティーを定義します。このファイルは、お客様の環境のニーズに合わせて編集する必要があります。付属のトポロジー・プロパティー・ファイル内のプロパティーのうち、記載されていないものは変更しないでください。

トポロジー・プロパティー・ファイルを変更した後は、コピーを安全な場所に保存してください。このファイルには、システムのユーザー名およびパスワードなどの、セキュリティー上重要な情報が平文で記載されています。トポロジー・プロパティー・ファイルのデフォルトのアクセス権限では、システムのすべてのユーザーに対して、システム管理者のパスワードが公開されます。無許可のユーザーがこのファイルにアクセスすると、そのユーザーはシステムへの全アクセス権限を持つことになります。このファイルを実動サーバーに置いたままにしないでください。

トポロジー・プロパティー・ファイルは、インストール後に以下の方法で使用できます。

- パスワードを忘れた場合に、パスワード情報のリポジトリーとして。
- システムでパスワードを変更する場合に、パスワードのリポジトリーとして。変更済みのトポロジー・プロパティー・ファイルを使用して、プラットフォーム制御ツールで使用するパスワードを更新することができます。
- システムの再インストールが必要な場合に、インストール情報のバックアップとして。トポロジー・プロパティー・ファイルを使用すると、インストール・パラメーターをすべて再定義する必要がなくなります。

IBM Intelligent Operations Center は、以下のトポロジー・ファイルを提供します。

ファイル名	用途	使用する場所
<i>install_home/ioc16/resource/custom.properties</i>	インストール・メディアのロケーション、作業ディレクトリー、およびその他のプロパティーを定義します。このファイルは、お客様の環境のニーズに合わせて編集することができます。	標準環境および高可用性環境
<i>install_home/ioc16/topology/iop.std.properties</i>	お客様がカスタマイズ可能なデプロイメント用プロパティー (ホスト名およびパスワードを含む) を定義します。このファイルは、お客様の環境のニーズに合わせて編集することができます。	標準環境

ファイル名	用途	使用する場所
<code>install_home/ioc16/topology/iop.ha.properties</code>	お客様がカスタマイズ可能なデプロイメント用プロパティ (ホスト名およびパスワードを含む) を定義します。このファイルは、お客様の環境のニーズに合わせて編集することができます。	高可用性環境

インストール・プロパティのカスタマイズ

インストール・プロパティ・ファイルは、インストール・スクリプトで必要とされる定義を提供します。コマンド行のインストール・オプションを使用すると、これらのプロパティを変更することができます。

このタスクについて

インストール・サーバーで、IBM Intelligent Operations Center インストール・パッケージがコピーされているディレクトリに移動します。以下のステップでは、このディレクトリを `install_home` と呼びます。インストール・サーバーは分析サーバーです。高可用性トポロジーでは、分析サーバー 1 がインストール・サーバーとなります。

手順

オプション: 必要な場合は、`install_home/ioc16/resource/custom.properties` ファイルを編集して、以下のプロパティ値を変更してください。ファイル内の、表 10 にリストされていないプロパティ値は変更しないでください。IBM Intelligent Operations Center を初めてインストールする場合は、デフォルト値を使用することをお勧めします。

表 10. IBM Intelligent Operations Center のインストール・プロパティ

プロパティ	説明	デフォルト値
<code>image.basedir.local</code>	IBM Intelligent Operations Center インストール・ファイルを含むインストール・サーバーのディレクトリの名前。これは、インストール・ツールの実行前にインストール・メディア・ファイルがコピーされたディレクトリです。その他のインストールの説明では、このディレクトリを <code>install_media</code> と呼びます。	<code>/distributionMedia</code>
<code>image.tmpdir.local</code>	インストール時に一時ファイルを格納するために使用される、インストール・サーバーのディレクトリ。	<code>/tmp/ioc/images</code>
<code>backup.local</code>	このディレクトリは、内部専用です。	<code>/tmp/ioc/backup</code>
<code>Unix.image.basedir.remote</code>	ターゲット・サーバーにインストールするパッケージがコピーされる、そのサーバー上のディレクトリ。	<code>/installMedia/ioc/image</code>
<code>Unix.script.basedir.remote</code>	ターゲット・サーバーで実行するインストール・スクリプトがコピーされる、そのサーバー上のディレクトリ。	<code>/installMedia/ioc/script</code>

表 10. IBM Intelligent Operations Center のインストール・プロパティ (続き)

プロパティ	説明	デフォルト値
connection.timeout	ターゲット・サーバーへの接続を待つ時間 (ミリ秒)。この時間が過ぎると接続は失敗します。	15000
waiting.time	失敗した接続を再試行する前に待つ時間 (ミリ秒)。	20000
retry.count	失敗した接続を再試行する回数。この回数を超えるとインストールは失敗します。	12

変更しなかった場合は、デフォルト値が使用されます。

関連概念:

63 ページの『標準環境用のパスワード情報』

IBM Intelligent Operations Center ソリューションで使用されるさまざまなユーザー ID のパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルで定義します。セキュリティ上の理由により、IBM Intelligent Operations Center の出荷時に設定されているデフォルトのパスワードは、変更してください。

標準環境用のターゲット・サーバー情報

トポロジー・プロパティ・ファイルの SERVERS セクションでは、ターゲット・サーバーのプロパティを定義します。

表 11 に、現在の環境用のトポロジー・プロパティ・ファイルで指定する必要がある、サーバーのプロパティ値を示します。

表 11. ターゲット・サーバーのプロパティ

プロパティ	説明
DB.1.HOST	データ・サーバーの完全修飾ホスト名
DB.1.ACCOUNT.PWD	データ・サーバー上の root ユーザーのパスワード
DB.1.SSH_PORT	データ・サーバーへの ssh アクセス用のポート番号
APP.1.HOST	アプリケーション・サーバーの完全修飾ホスト名
APP.1.ACCOUNT.PWD	アプリケーション・サーバー上の root ユーザーのパスワード
APP.1.SSH_PORT	アプリケーション・サーバーへの ssh アクセス用のポート番号
ANA.1.HOST	分析サーバーの完全修飾ホスト名
ANA.1.ACCOUNT.PWD	分析サーバー上の root ユーザーのパスワード
ANA.1.SSH_PORT	分析サーバーへの ssh アクセス用のポート番号
WEB.1.HOST	Web サーバーの完全修飾ホスト名
WEB.1.ACCOUNT.PWD	Web サーバー上の root ユーザーのパスワード
WEB.1.SSH_PORT	Web サーバーへの ssh アクセス用のポート番号

重要: ホスト名の値は、大/小文字を区別して入力された、完全修飾ホスト名である必要があります。例えば、IOC16App.IOC16.com は ioc16app.ioc16.com と同じではありません。

ssh ポート番号は、サーバーごとに設定可能です。ただし、構成済みのポート番号は、プラットフォーム制御ツールでのみ使用されます。ポート 22 は、各サーバー上での ssh アクセスに向けて使用可能にする必要があります。インストール時の、IBM Intelligent Operations Center による ssh アクセスには、ポート 22 が必須です。

高可用性環境用のターゲット・サーバー情報

トポロジー・プロパティ・ファイルの SERVERS セクションでは、ターゲット・サーバーのプロパティを定義します。

表 12 に、現在の環境用のトポロジー・プロパティ・ファイルで指定する必要がある、サーバーのプロパティ値を示します。

表 12. ターゲット・サーバーのプロパティ

プロパティ	説明
DB.1.HOST	データ・サーバー 1の完全修飾ホスト名
DB.1.ACCOUNT.PWD	データ・サーバー 1上の root ユーザーのパスワード
DB.1.SSH_PORT	データ・サーバー 1への ssh アクセス用のポート番号
DB.2.HOST	データ・サーバー 2の完全修飾ホスト名
DB.2.ACCOUNT.PWD	データ・サーバー 2上の root ユーザーのパスワード
DB.2.SSH_PORT	データ・サーバー 2への ssh アクセス用のポート番号
APP.1.HOST	アプリケーション・サーバー 1の完全修飾ホスト名
APP.1.ACCOUNT.PWD	アプリケーション・サーバー 1上の root ユーザーのパスワード
APP.1.SSH_PORT	アプリケーション・サーバー 1への ssh アクセス用のポート番号
APP.2.HOST	アプリケーション・サーバー 2の完全修飾ホスト名
APP.2.ACCOUNT.PWD	アプリケーション・サーバー 2上の root ユーザーのパスワード
APP.2.SSH_PORT	アプリケーション・サーバー 2への ssh アクセス用のポート番号
ANA.1.HOST	分析サーバー 1の完全修飾ホスト名
ANA.1.ACCOUNT.PWD	分析サーバー 1上の root ユーザーのパスワード
ANA.1.SSH_PORT	分析サーバー 1への ssh アクセス用のポート番号
ANA.2.HOST	分析サーバー 2の完全修飾ホスト名
ANA.2.ACCOUNT.PWD	分析サーバー 2上の root ユーザーのパスワード
ANA.2.SSH_PORT	分析サーバー 2への ssh アクセス用のポート番号
WEB.1.HOST	Web サーバー 1の完全修飾ホスト名
WEB.1.ACCOUNT.PWD	Web サーバー 1上の root ユーザーのパスワード
WEB.1.SSH_PORT	Web サーバー 1への ssh アクセス用のポート番号
WEB.2.HOST	Web サーバー 2の完全修飾ホスト名
WEB.2.ACCOUNT.PWD	Web サーバー 2上の root ユーザーのパスワード
WEB.2.SSH_PORT	Web サーバー 2への ssh アクセス用のポート番号

重要: ホスト名の値は、大/小文字を区別して入力された、完全修飾ホスト名である必要があります。例えば、IOC16App.IOC16.com は ioc16app.ioc16.com と同じではありません。

ssh ポート番号は、サーバーごとに設定可能です。ただし、構成済みのポート番号は、プラットフォーム制御ツールでのみ使用されます。ポート 22 は、各サーバー上での ssh アクセスに向けて使用可能にする必要があります。インストール時の、IBM Intelligent Operations Center による ssh アクセスには、ポート 22 が必須です。

ディレクトリー・サービス情報

トポロジー・プロパティ・ファイルでは、ユーザー・パスワードと、その他ディレクトリー内の機密データを暗号化するために使用する値を定義します。

暗号化は、LDAP.SEED および LDAP.SALT という 2 つの値に基づいています。

値は印刷可能な ASCII 文字である必要があります。印刷可能な ASCII 文字とは、コード・ポイント値が 33 から 126 までの文字です。ブランク・スペースは使用できません。

表 13. ディレクトリー・サービスのプロパティ

プロパティ	説明
LDAP.SEED	コード・ポイント 33 から 126 の間の印刷可能な ASCII 文字で構成される、12 文字から 1016 文字のストリング。 強固な暗号方式のストリングを使用してください。例えば、大/小文字混合文字、数字、および特殊文字で構成され、通常の単語や句が含まれない長いストリングがそれにあたります。
LDAP.SALT	コード・ポイント 33 から 126 の間の印刷可能な ASCII 文字で構成される 12 文字のストリング。 重要: LDAP.SALT は、正確に 12 文字の長さにする必要があります。文字数がそれ以上またはそれ以下の値を使用すると、インストールは失敗します。

LDAP.SEED および LDAP.SALT の値をシステムの外部に記録しておいてください。これらの値は、ディレクトリー項目をエクスポートまたは複製する必要がある場合に、必要になります。

LDAP サフィックス

IBM Intelligent Operations Center で使用される LDAP サフィックス情報は、トポロジー・プロパティ・ファイルで定義します。

ou、o、および c の各 LDAP パラメーターのみ変更できます。これらのパラメーターは、表 14 に示す要件を満たしている必要があります。

表 14. LDAP パラメーターの構文規則

パラメーター	ルール
c	以下のみを含み、正確に 2 文字長の文字列であることが必要です <ul style="list-style-type: none"> 小文字の英字 (a から z) 大文字の英字 (A から Z)

表 14. LDAP パラメーターの構文規則 (続き)

パラメーター	ルール
o	以下のみを含み、1 から 30 文字長の文字列である必要があります <ul style="list-style-type: none"> • 小文字の英字 (a から z) • 大文字の英字 (A から Z) • 数字 (0 から 9) • ダッシュ (-) • 下線 (_)
ou	以下のみを含み、1 から 30 文字長の文字列である必要があります <ul style="list-style-type: none"> • 小文字の英字 (a から z) • 大文字の英字 (A から Z) • 数字 (0 から 9) • ダッシュ (-) • 下線 (_)

以下のプロパティを指定するときは、ou、o、および c の値が一致している必要があります。

- LDAP.SUFFIX
- LDAP.BASE.ENTRY
- LDAP.USER.ENTRY
- LDAP.GROUP.ENTRY
- LDAP.PROXY.DN

例えば、以下のようなものがあります。

```
LDAP.SUFFIX ou=SWG,o=IBM,c=US
LDAP.BASE.ENTRY ou=SWG,o=IBM,c=US
LDAP.USER.ENTRY ou=USERS,ou=SWG,o=IBM,c=US
LDAP.GROUP.ENTRY ou=GROUPS,ou=SWG,o=IBM,c=US
LDAP.PROXY.DN ou=SWG,o=IBM,c=US
```

Lightweight Third-Party Authentication ドメイン

IBM Intelligent Operations Center では、Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) トークンを使用して、多くのサービス間でのシングル・サインオンを有効にします。LTPA ドメイン名は、トポロジー・プロパティ・ファイルに指定する必要があります。

WAS.LTPA.DOMAIN プロパティに、現在の環境の LTPA ドメイン名を指定します。該当する値を取得するには、標準環境ではアプリケーション・サーバー、高可用性環境ではアプリケーション・サーバー 1 で、**hostname -d** コマンドを実行します。

標準環境では、以下のサーバーでこの値が同じである必要があります。

- アプリケーション・サーバー
- 分析サーバー

高可用性環境では、以下のサーバーでこの値が同じである必要があります。

- アプリケーション・サーバー 1
- アプリケーション・サーバー 2

- 分析サーバー 1
- 分析サーバー 2

LTPA ドメイン名は、サーバーの完全修飾ホスト名の親部分です。例えば、完全修飾ホスト名が server.yourco.com である場合、LTPA ドメインは yourco.com です。

クラスタリング・プロパティ

高可用性環境に IBM Intelligent Operations Center をインストールする前に、クラスタリング・トポロジー・コンポーネントを構成するプロパティを定義する必要があります。

表 15. クラスタリング・プロパティ

プロパティ	説明
TSA.NETWORK.SUBNET	データ・サーバーをホストするネットワークのサブネット・マスク。これは、両方のデータ・サーバー上のネットワーク・インターフェース・カード (NIC) 用のサブネット・マスクです。
TSA.PRIMARY.USENIC	データ・サーバー 1 上のネットワーク・インターフェース・カード (NIC) の名前。NIC 名を特定するには、データ・サーバー 1 で ifconfig コマンドを実行します。
TSA.STANDBY.USENIC	データ・サーバー 2 上のネットワーク・インターフェース・カード (NIC) の名前。NIC 名を特定するには、データ・サーバー 2 で ifconfig コマンドを実行します。
TSA.QUORUM.IP	IBM Intelligent Operations Center 環境に含まれない高可用性システムの IP アドレス。この IP アドレスへは、IBM Intelligent Operations Center データ・サーバー 1 とデータ・サーバー 2 の両方から到達可能でなければなりません。 このロケーションには、ソフトウェアはインストールされません。インストール中および実行時にシステムが使用可能であることが、唯一の要件です。

標準環境用のパスワード情報

IBM Intelligent Operations Center ソリューションで使用されるさまざまなユーザー ID のパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルで定義します。セキュリティ上の理由により、IBM Intelligent Operations Center の出荷時に設定されているデフォルトのパスワードは、変更してください。

パスワードには、以下の文字のみを使用できます。

- 小文字の英字 (a から z)
- 大文字の英字 (A から Z)
- 数字 (0 から 9)
- ダッシュ (-)
- ピリオド (.)
- 下線 (_)
- 波形記号 (~)

ダッシュとピリオドをパスワードの先頭文字として使用することはできません。

別途説明がない限り、パスワードは 30 文字以内にする必要があります。

表 16. パスワード・プロパティ

プロパティ	関連付けられるユーザー名	説明
WEB.1.ACCOUNT.PWD	root	Web サーバーのルート・パスワード
DB.1.ACCOUNT.PWD	root	データ・サーバーのルート・パスワード
APP.1.ACCOUNT.PWD	root	アプリケーション・サーバーのルート・パスワード
ANA.1.ACCOUNT.PWD	root	分析サーバーのルート・パスワード
MDL.1.ACCOUNT.PWD	root	セマンティック・モデル・サーバーのルート・パスワード
LDAP.DB.PWD	dsrdbm01	LDAP ディレクトリーのデータベース
LDAP.ADMIN.DN.PWD	cn=root	LDAP 管理者バインド
LDAP.BIND.DN.PWD	cn=bind	LDAP バインド
LDAP.PROXY.INSTANCE.PWD	tdsproxy	LDAP プロキシ・インスタンス
LDAP.PROXY.ADMIN.DN.PWD	cn=root	LDAP プロキシ管理者バインド
LDAP.PROXY.BIND.DN.PWD	cn=bind	LDAP プロキシ・バインド
LDAP.REPLICA.BIND.DN.PWD	cn=master	LDAP レプリカ・バインド
ISIM.KEYSTORE.PWD	なし	鍵ストアのパスワード
ISIM.POSIX.LINUX.PWD	posixagent	POSIX Linux ユーザー
WBM.DB.USER.PWD	db2ibm	ビジネス・アクティビティ・モニター・サービスのデータベース
IHS.KEYSTORE.PWD	なし	HTTP サーバーの鍵ストア
WORKLIGHT.DB.USER.PWD	db2wrklt	IBM Worklight® データベース・ユーザー ID
WORKLIGHT.APPCNTR.USER.PWD	appcenteradmin	IBM Worklight アプリケーション・センターのユーザー ID
WAS.ADMIN.ACCOUNT.PWD	waswebadmin	アプリケーション・サービスの管理者。このパスワードは PORTAL.ADMIN.ACCOUNT.PWD と同じである必要があります。
WAS.LTPA.PWD	なし	LTPA トークン
PORTAL.ADMIN.ACCOUNT.PWD	waswebadmin	WebSphere Portal サーバー用の WebSphere Application Server コンソールの管理者。このパスワードは WAS.ADMIN.ACCOUNT.PWD と同じである必要があります。
PORTAL.ADMIN.UID.PWD	wpsadmin	WebSphere Portal サーバーの管理者。このパスワードは DOMINO.ST.ADMIN.PWD と同じである必要があります。
PORTAL.DB.USER.PWD	db2port1	WebSphere Portal データベース
DOMINO.USER.PWD	notes	コラボレーション・ユーザー
DOMINO.ORG.PWD	IBM	コラボレーション組織

表 16. パスワード・プロパティ (続き)

プロパティ	関連付けられるユーザー名	説明
DOMINO.ADMIN.PWD	notes admin	コラボレーションの管理者
DOMINO.ST.ADMIN.PWD	wpsadmin	コラボレーション・ポータル の管理者。このパスワードは PORTAL.ADMIN.UID.PWD と同じである 必要があります。
DOMINO.ST.BIND.PWD	wpsbind	コラボレーション LDAP バインド
DEFAULT.PWD.DAS	dausr1	データベース・サービスの管理サーバ
DEFAULT.PWD.DB2	db2inst1、db2inst2	データベース・サービスのデータ・サーバ
DEFAULT.PWD.IHS	ihsadmin	HTTP サーバ
DEFAULT.PWD.MQM	mqm	メッセージング・サービスのユーザー
MQM.CONN.USER.PWD	mqmconn	メッセージング・サービスの接続
IOP.ADMIN.USER.PWD	ibmadmin	システム管理ツール このユーザーには、ターゲット・サーバ上で root ユーザーと同等の特権が認可されます。プラットフォーム制御ツールは、このユーザー名の下で実行されます。このユーザーに与えられるアクセス権限はこのように大きいため、このパスワードは必ず、他のパスワードとは異なる長い値にして、安全に保管してください。
IOP.USER.USER.PWD	ibmuser	システム的一般ユーザー

重要: 以下のパスワードは変更しないでください。ISIM.ADMIN.USER.PWD および ISIM.SYSTEM.USER.PWD。

関連概念:

101 ページの『第 3 章 ソリューションの保護』

IBM Intelligent Operations Center は不可欠な操作の中核を成しているため、このソリューション内のセキュリティは重要です。セキュリティを確保するためには、デフォルト設定を把握していることと、ソリューションのユーザーを管理して正しいレベルのアクセス権限をすべてのユーザーに付与することが重要です。

関連タスク:

58 ページの『インストール・プロパティのカスタマイズ』

インストール・プロパティ・ファイルは、インストール・スクリプトで必要とされる定義を提供します。コマンド行のインストール・オプションを使用すると、これらのプロパティを変更することができます。

関連資料:

103 ページの『サンプル・ユーザー』

IBM Intelligent Operations Center のデプロイメント中に、サンプル・ユーザーが作成されます。

高可用性環境用のパスワード情報

IBM Intelligent Operations Center ソリューションで使用されるさまざまなユーザー ID のパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルで定義します。セキュリティ上の理由により、IBM Intelligent Operations Center の出荷時に設定されているデフォルトのパスワードは、変更してください。

パスワードには、以下の文字のみを使用できます。

- 小文字の英字 (a から z)
- 大文字の英字 (A から Z)
- 数字 (0 から 9)
- ダッシュ (-)
- ピリオド (.)
- 下線 (_)
- 波形記号 (~)

ダッシュとピリオドをパスワードの先頭文字として使用することはできません。

別途説明がない限り、パスワードは 30 文字以内にする必要があります。

表 17. パスワード・プロパティ

プロパティ	関連付けられるユーザー名	説明
WEB.1.ACCOUNT.PWD	root	Web サーバー 1 のルート・パスワード
WEB.2.ACCOUNT.PWD	root	Web サーバー 2 のルート・パスワード
DB.1.ACCOUNT.PWD	root	データ・サーバー 1 のルート・パスワード
DB.2.ACCOUNT.PWD	root	データ・サーバー 2 のルート・パスワード
APP.1.ACCOUNT.PWD	root	アプリケーション・サーバー 1 のルート・パスワード
APP.2.ACCOUNT.PWD	root	アプリケーション・サーバー 2 のルート・パスワード
ANA.1.ACCOUNT.PWD	root	分析サーバー 1 のルート・パスワード
ANA.2.ACCOUNT.PWD	root	分析サーバー 2 のルート・パスワード
MDL.1.ACCOUNT.PWD	root	セマンティック・モデル・サーバーのルート・パスワード
LDAP.DB.PWD	dsrdbm01	LDAP ディレクトリーのデータベース
LDAP.ADMIN.DN.PWD	cn=root	LDAP 管理者バインド
LDAP.BIND.DN.PWD	cn=bind	LDAP バインド
LDAP.PROXY.INSTANCE.PWD	tdsproxy	LDAP プロキシ・インスタンス
LDAP.PROXY.ADMIN.DN.PWD	cn=root	LDAP プロキシ管理者バインド
LDAP.PROXY.BIND.DN.PWD	cn=bind	LDAP プロキシ・バインド
LDAP.REPLICA.BIND.DN.PWD	cn=master	LDAP レプリカ・バインド
ISIM.KEYSTORE.PWD	なし	鍵ストアのパスワード
ISIM.POSIX.LINUX.PWD	posixagent	POSIX Linux ユーザー

表 17. パスワード・プロパティ (続き)

プロパティ	関連付けられるユーザー名	説明
WBM.DB.USER.PWD	db2ibm	ビジネス・アクティビティ・モニター・サービスのデータベース
IHS.KEYSTORE.PWD	なし	HTTP サーバーの鍵ストア
WORKLIGHT.DB.USER.PWD	db2wrklt	IBM Worklight データベース・ユーザー ID
WORKLIGHT.APPCNTR.USER.PWD	appcenteradmin	IBM Worklight アプリケーション・センターのユーザー ID
WAS.ADMIN.ACCOUNT.PWD	waswebadmin	アプリケーション・サービスの管理者
WAS.LTPA.PWD	なし	LTPA トークン
PORTAL.ADMIN.ACCOUNT.PWD	waswebadmin	WebSphere Portal サーバー用の WebSphere Application Server コンソールの管理者
PORTAL.ADMIN.UID.PWD	wpsadmin	WebSphere Portal サーバーの管理者
PORTAL.DB.USER.PWD	db2port1	WebSphere Portal データベース
DOMINO.USER.PWD	notes	コラボレーション・ユーザー
DOMINO.ORG.PWD	IBM	コラボレーション組織
DOMINO.ADMIN.PWD	notes admin	コラボレーションの管理者
DOMINO.ST.ADMIN.PWD	wpsadmin	コラボレーション・ポータル管理者
DOMINO.ST.BIND.PWD	wpsbind	コラボレーション LDAP バインド
DEFAULT.PWD.DAS	dausr1	データベース・サービスの管理サーバー
DEFAULT.PWD.DB2	db2inst1、db2inst2	データベース・サービスのデータ・サーバー
DEFAULT.PWD.IHS	ihsadmin	HTTP サーバー
DEFAULT.PWD.MQM	mqm	メッセージング・サービスのユーザー
MQM.CONN.USER.PWD	mqmconn	メッセージング・サービスの接続
IOP.ADMIN.USER.PWD	ibmadmin	システム管理ツール このユーザーには、ターゲット・サーバー上で root ユーザーと同等の特権が認可されます。プラットフォーム制御ツールは、このユーザー名の下で実行されます。このユーザーに与えられるアクセス権限はこのように大きいため、このパスワードは必ず、他のパスワードとは異なる長い値にして、安全に保管してください。
IOP.USER.USER.PWD	ibmuser	システム的一般ユーザー

重要: 以下のパスワードは変更しないでください。ISIM.ADMIN.USER.PWD および ISIM.SYSTEM.USER.PWD。

インストール前のサーバー検証

IBM Intelligent Operations Center は、インストール前にサーバー環境を検証して、サーバーがハードウェア要件とソフトウェア要件を満たしているか確認します。

表 18 に、IBM Intelligent Operations Center のインストール前に実行されるサーバー検証について要約します。オプションのセマンティック・モデル・サーバーについては、検証は行われません。

表 18. IBM Intelligent Operations Center のサーバー検証

リソース	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー
Linux ディストリビューション	Red Hat Enterprise Server			
Linux リリース	バージョン 6、リリース 6.3 以上			
CPU	4	4	4	2
/datahome 内の空き領域	適用外	適用外	22 GB	適用外
/opt 内の空き領域	32 GB	7 GB	7 GB	7 GB
/tmp 内の空き領域	12 GB	12 GB	12 GB	12 GB
SELinux	無効	無効	無効	無効
ファイアウォール	無効	無効	無効	無効
DNS (構成されている場合)	DNS が適切に構成されていることを検証するために、以下のコマンドが使用されます。 nslookup -ip nslookup -name			
IPv6 環境内で IPv6 が使用されていない場合でも必要です。	IPv6 モジュールがロードされていることを確認してください。	IPv6 モジュールがロードされていることを確認してください。	IPv6 モジュールがロードされていることを確認してください。	IPv6 モジュールがロードされていることを確認してください。
SSH 構成	<ul style="list-style-type: none"> リモートの ssh ログインを許可します。 root ユーザーが ssh を使用してログインすることを許可します。 パスワード認証を許可します。 	<ul style="list-style-type: none"> リモートの ssh ログインを許可します。 root ユーザーが ssh を使用してログインすることを許可します。 パスワード認証を許可します。 	<ul style="list-style-type: none"> リモートの ssh ログインを許可します。 root ユーザーが ssh を使用してログインすることを許可します。 パスワード認証を許可します。 	<ul style="list-style-type: none"> リモートの ssh ログインを許可します。 root ユーザーが ssh を使用してログインすることを許可します。 パスワード認証を許可します。

表 18. IBM Intelligent Operations Center のサーバー検証 (続き)

リソース	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー
高可用性トポロジーに使用可能なポート	9060 9080	9060 9080	55002 55003 55004 55005 55006 55007 55008 55009 55010 55011 55012 55013 55014 55015 55016	適用外
標準トポロジーに使用可能なポート	9060 9080	9060 9080	50000 50001 50002	適用外
ファイル・ハンドル制限	20480	20480	20480	20480
nprof 制限 (ulimit)	16384	16384	16384	16384
メモリー	16 GB	16 GB	16 GB	2 GB
ホスト名	<ul style="list-style-type: none"> 定義されたホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は、hostname コマンドによって返される値と同じです。 定義されたホスト名はインターネット標準 RFC-1123 および RFC-952 に準拠しています。 	<ul style="list-style-type: none"> 定義されたホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は、hostname コマンドによって返される値と同じです。 定義されたホスト名はインターネット標準 RFC-1123 および RFC-952 に準拠しています。 	<ul style="list-style-type: none"> 定義されたホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は、hostname コマンドによって返される値と同じです。 定義されたホスト名はインターネット標準 RFC-1123 および RFC-952 に準拠しています。 	<ul style="list-style-type: none"> 定義されたホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は有効です。 定義された短縮ホスト名は、hostname コマンドによって返される値と同じです。 定義されたホスト名はインターネット標準 RFC-1123 および RFC-952 に準拠しています。
接続	他のノードに送信された ping コマンドは正しく返されます。	他のノードに送信された ping コマンドは正しく返されます。	他のノードに送信された ping コマンドは正しく返されます。	他のノードに送信された ping コマンドは正しく返されます。
UMASK	022	022	022	022

以下の追加テストが実行されます。

- 各サーバーがチェックされ、必要な Linux パッケージがインストールされているかどうかを確認されます。

- resources/custom.properties ファイルの precheck.network.reffile プロパティで特定されたファイルをアップロードして、ネットワーク速度がチェックされます。アップロード速度の値が resources/custom.properties ファイルの precheck.network.KBSec プロパティで指定された値よりも大きい場合は、テストが不合格になります。ネットワーク速度テストを行う理由は、ネットワークが低速であると、タイムアウトによってインストールが失敗する可能性があるためです。

標準環境のコマンド行インストーラーの実行

スクリプトを使用して IBM Intelligent Operations Center がインストールされます。このスクリプトは、サーバーの準備とチェックを行い、IBM Intelligent Operations Center と関連ツールを標準環境にインストールします。

手順

- インストール・サーバーに root ユーザーとしてログオンします。
標準環境の場合は、分析サーバーがインストール・サーバーとなります。
- `/install_home/ioc16/bin` ディレクトリーに移動します。
- `./ioc-env.sh` コマンドを実行します。
- `./iop.std.install.sh -p topology_password` コマンドを実行します。 `topology_password` は、IBM Intelligent Operations Center 用に定義されたトポロジーにセキュリティーを提供するために使用されます。このパスワードは、IBM Intelligent Operations Center のインストール済み環境に変更を加えるときに必要となる、IBM Intelligent Operations Center ツールの初期パスワードです。

パスワードには、以下の文字のみを使用できます。

- 小文字の英字 (a から z)
- 大文字の英字 (A から Z)
- 数字 (0 から 9)
- ダッシュ (-)
- ピリオド (.)
- 下線 (_)
- 波形記号 (~)

ダッシュとピリオドをパスワードの先頭文字として使用することはできません。

トポロジーの鍵ストアを生成するステップで `topology_password` が指定されなかった場合は、`topology_password` が `ibmioc16` に設定されます。インストール手順のメニューが表示されます。

- ご使用条件が表示されます。インストールを続行するには、先にライセンスを受け入れる必要があります。
- このメニューからオプションを選択する。

表 19. インストール・オプション

選択	インストール・フェーズ	ステップの説明	平均実行時間
1	事前検査	インストール・メディアのチェックサムを検証します。	15 分
2	準備	テンプレートをトポロジー・ディレクトリーにコピーします。	2 分
3	準備	トポロジーの鍵ストアを作成します。	1 分

表 19. インストール・オプション (続き)

選択	インストール・フェーズ	ステップの説明	平均実行時間
4	準備	すべてのトポロジをパラメーター化します。	2 分 2 分
5	準備	(オプション) すべてのトポロジを暗号化します。	1 分
6	準備	「セットアップ/ターゲット」トポロジを実行します。	5 分
7	準備	環境の前提条件チェックを実行します。	15 分
8	インストール	(オプション) メディアをターゲット・サーバーにアップロードします。 このステップでメディアがアップロードされない場合は、次のステップでアップロードされます。別個のステップとしてメディアをアップロードすると、メディアのアップロード後にチェックポイントを指定できます。	1 時間
9	インストール	「標準」の基本製品インストール・トポロジを実行します。	2 時間 30 分
10	インストール	「標準」の製品構成トポロジを実行します。	5 時間
11	インストール	Identity Manager コンポーネントをインストールします。	1 時間 15 分
12	インストール	(オプション) Data Studio ツールをインストールします。	15 分
13	インストール	プラットフォーム制御ツールのインストール	15 分
14	インストール	システム検査チェック・ツールツールをインストールします。	1 時間 15 分
15	インストール	IBM Intelligent Operations Center アプリケーションをインストールします。	2 時間

7. ステップ 4 (70 ページ) から、順序どおりにインストール・ステップを選択していきます。前のインストール・ステップが完了するまでは、次のステップを選択しないでください。すべてのステップが正常に完了するまでは、どのサーバーも再始動しないでください。インストール・ステップは、コマンドで指定することもできます。例えば、`./iop.std.install.sh -p topology_password 1` のように指定します。

注: 仮想マシンにインストールする場合は、IBM Intelligent Operations Center アプリケーションをインストールする前に、すべての仮想マシンのスナップショットを取得します。これにより、アプリケーションのインストールが失敗した場合にスナップショットを復元することができます。スナップショットがないと、インストール全体を再始動しなければなりません。スナップショットを取得するには、以下の手順を実行します。

- a. 分析サーバーに root ユーザーとしてログオンし、端末ウィンドウで以下のコマンドを入力します。

```
su - ibmadmin
cd /opt/IBM/ISP/mgmt/scripts
./IOControl -a stop -c all -p topology_password
```

- b. すべての仮想マシンのスナップショットを取得します。

- c. 以下のコマンドを実行して、基本アーキテクチャーのプロセスを再始動します。

```
./IOControl -a start -c all -p topology_password
```

タスクの結果

インストールの進行状況が表示され、インストール・サーバー上の `/install_home/ioc16/log` ディレクトリーにあるログに書き込まれます。

高可用性環境のコマンド行インストーラーの実行

スクリプトを使用して IBM Intelligent Operations Center がインストールされます。このスクリプトは、サーバーの準備とチェックを行い、IBM Intelligent Operations Center と関連ツールを高可用性環境にインストールします。

手順

1. インストール・サーバーに root ユーザーとしてログオンします。

高可用性環境の場合は、分析サーバー 1 がインストール・サーバーとなります。
2. `/install_home/ioc16/bin` ディレクトリーに移動します。
3. `./ioc-env.sh` コマンドを実行します。
4. `./iop.ha.install.sh -p topology_password` コマンドを実行します。 `topology_password` は、IBM Intelligent Operations Center 用に定義されたトポロジーにセキュリティーを提供するために使用されます。このパスワードは、IBM Intelligent Operations Center のインストール済み環境に変更を加えるときに必要となる、IBM Intelligent Operations Center ツールの初期パスワードです。

パスワードには、以下の文字のみを使用できます。

- 小文字の英字 (a から z)
- 大文字の英字 (A から Z)
- 数字 (0 から 9)
- ダッシュ (-)
- ピリオド (.)
- 下線 (_)
- 波形記号 (~)

ダッシュとピリオドをパスワードの先頭文字として使用することはできません。

トポロジーの鍵ストアを生成するステップで `topology_password` が指定されなかった場合は、`topology_password` が `ibmioc16` に設定されます。インストール手順のメニューが表示されます。

5. ご使用条件が表示されます。インストールを続行するには、先にライセンスを受け入れる必要があります。
6. このメニューからオプションを選択する。

表 20. インストール・オプション

選択	インストール・フェーズ	ステップの説明	平均実行時間
1	事前検査	インストール・メディアのチェックサムを検証します。	15 分間
2	準備	テンプレートをトポロジー・ディレクトリーにコピーします。	2 分
3	準備	トポロジーの鍵ストアを作成します。	1 分
4	準備	すべてのトポロジーをパラメーター化します。	2 分

表 20. インストール・オプション (続き)

選択	インストール・フェーズ	ステップの説明	平均実行時間
5	準備	(オプション) すべてのトポロジーを暗号化します。	1 分
6	準備	「セットアップ/ターゲット」トポロジーを実行します。	5 分
7	準備	環境の前提条件チェックを実行します。	15 分間
8	インストール	(オプション) メディアをターゲット・サーバーにアップロードします。 このステップでメディアがアップロードされない場合は、次のステップでアップロードされます。別個のステップとしてメディアをアップロードすると、メディアのアップロード後にチェックポイントを指定できます。	1 時間
9	インストール	高可用性の基本製品インストール・トポロジーを実行します。	3 時間 45 分
10	インストール	高可用性の製品構成トポロジーを実行します。	8 時間 15 分
11	インストール	ID 管理コンポーネントをインストールします。	1 時間 15 分
12	インストール	DB2 HADR クラスター管理を準備および構成します。	15 分間
13	インストール	(オプション) Data Studio ツールをインストールします。	15 分間
14	インストール	プラットフォーム制御ツールのインストール	15 分間
15	インストール	システム検査チェック・ツールツールをインストールします。	1 時間 30 分
16	インストール	IBM Intelligent Operations Center アプリケーションをインストールします。	4 時間

7. ステップ 4 (72 ページ) から、順序どおりにインストール・ステップを選択していきます。前のインストール・ステップが完了するまでは、次のステップを選択しないでください。すべてのステップが正常に完了するまでは、どのサーバーも再始動しないでください。インストール・ステップは、コマンドで指定することもできます。例えば、`./iop.ha.install.sh -p topology_password 1` のように指定します。

注: 仮想マシンにインストールする場合は、IBM Intelligent Operations Center アプリケーションをインストールする前に、すべての仮想マシンのスナップショットを取得します。これにより、アプリケーションのインストールが失敗した場合にスナップショットを復元することができます。スナップショットがないと、インストール全体を再始動しなければなりません。スナップショットを取得するには、以下の手順を実行します。

- a. 分析サーバーに root ユーザーとしてログオンし、端末ウィンドウで以下のコマンドを入力します。

```
su - ibmadmin
cd /opt/IBM/ISP/mgmt/scripts
./IOControl -a 091 -p topology_password
```

- b. すべての仮想マシンのスナップショットを取得します。

- c. 以下のコマンドを実行して、基本アーキテクチャーのプロセスを再始動します。

```
./IOControl -a 001 -p topology_password
```

タスクの結果

インストールの進行状況が表示され、インストール・サーバー上の `/install_home/ioc16/log` ディレクトリーにあるログに書き込まれます。

標準環境の GUI インストーラーの実行

IBM Intelligent Operations Center は、グラフィカル・インストーラーを使用してインストールできます。このインストーラーでは、インストール・プロセス中に提供されるオプションが制限されます。現在の環境で、GUI インストーラーでは提供されない構成オプションが必要な場合は、コマンド行インストーラーを使用して、標準環境に IBM Intelligent Operations Center と関連ツールをインストールしてください。

手順

1. グラフィカル・コンソールで、インストール・サーバーにログオンします。
2. コマンド行コンソールを開きます。
3. `IntelligentOperationsCenter-install.bin` ファイルがあるディレクトリーに移動します。デフォルトでは、これは `/installHome` ディレクトリーです。
4. `root` ユーザーとして、`./IntelligentOperationsCenter-install.bin` コマンドを実行します。GUI インストーラーが表示されます。
5. 使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
6. ウェルカム・パネルを確認し、「次へ」をクリックします。
7. ご使用条件を読んで同意し、インストールを続行します。ご使用条件に同意しない場合は、インストールが終了します。
8. インストール・メディアが保管されているロケーションを選択します。デフォルトでは、これは `/distributionMedia` ディレクトリーです。「次へ」をクリックします。
9. インストーラーが以前に試行された IBM Intelligent Operations Center のインストールを検出した場合は、以前のインストール試行を続行するか、新規インストールを開始するかを選択します。新規インストールを開始すると、以前に試行されたインストールはアーカイブされます。
10. インストール・ディレクトリーを選択します。デフォルト・ディレクトリーは `/opt/ibm/IOC16install` です。「次へ」をクリックします。このフォルダーには、インストール・スクリプト、ツール、およびその他のリソースが保管されます。
11. インストールするトポロジーのタイプを選択します。「次へ」をクリックします。
12. ドメイン名を指定します。「次へ」をクリックします。このドメイン名は、会社または組織の DNS ドメイン名です。通常、これは組織のサーバーの完全修飾ホスト名の親部分です。例えば、サーバーの完全修飾ホスト名が `server.us.co.com` である場合、ドメイン名は `us.co.com` となります。
13. トポロジー・パスワードを指定します。「次へ」をクリックします。このパスワードはメモしておいてください。トポロジー・パスワードは、IBM Intelligent Operations Center の操作中に使用します。例えば、プラットフォーム制御ツールの実行時に、トポロジー・パスワードを使用します。
14. 管理パスワードを指定します。「次へ」をクリックします。このパスワードはメモしておいてください。このパスワードは、IBM Intelligent Operations Center によって提供される製品の管理コンソールまたはツールを使用して、その製品を管理するときに必要です。例えば、WebSphere Application Server Integrated Solutions Console にログオンして WebSphere Application Server を管理するとき、および WebSphere Portal にポータル管理者としてログオンするときに、このパスワードが必要になります。
15. LDAP SALT キーおよび SEED キーを指定します。「次へ」をクリックします。

16. 以降のパネルで、各サーバーの完全修飾ホスト名、ルート・ユーザー名、ルート・パスワード、および SSH ポートを入力します。各サーバーの情報を入力したら、「次へ」をクリックします。デフォルトの SSH ポートは 22 です。
17. すべてのインストール・パラメーターの値を入力したら、インストールを進行させるか取り消すかを選択します。その後は入力操作なしでインストールが進行します。インストールの進行状況が端末セッションに表示され、インストール・サーバーの `/opt/ibm/IOCinstall/install.log` に書き込まれます。完了すると、正常に完了したことを示すパネルがインストーラーによって表示されます。
18. 「完了」をクリックします。
19. インストール・ログが表示されている端末ウィンドウを閉じます。

タスクの結果

IBM Intelligent Operations Center がインストールされ、インストール後の構成を実行できるようになります。

高可用性環境の GUI インストーラーの実行

IBM Intelligent Operations Center は、グラフィカル・インストーラーを使用してインストールできます。このインストーラーでは、インストール・プロセス中に提供されるオプションが制限されます。現在の環境で、GUI インストーラーでは提供されない構成オプションが必要な場合は、コマンド行インストーラーを使用して、高可用性環境に IBM Intelligent Operations Center と関連ツールをインストールしてください。

手順

1. グラフィカル・コンソールで、インストール・サーバーにログオンします。
2. コマンド行コンソールを開きます。
3. `IntelligentOperationsCenter-install.bin` ファイルがあるディレクトリーに移動します。デフォルトでは、これは `/installHome` ディレクトリーです。
4. `root` ユーザーとして、`./IntelligentOperationsCenter-install.bin` コマンドを実行します。GUI インストーラーが表示されます。
5. 使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
6. ウェルカム・パネルを確認し、「次へ」をクリックします。
7. ご使用条件を読んで同意し、インストールを続行します。ご使用条件に同意しない場合は、インストールが終了します。
8. インストール・メディアが保管されているロケーションを選択します。デフォルトでは、これは `/distributionMedia` ディレクトリーです。「次へ」をクリックします。
9. インストーラーが以前に試行された IBM Intelligent Operations Center のインストールを検出した場合は、以前のインストール試行を続行するか、新規インストールを開始するかを選択します。新規インストールを開始すると、以前に試行されたインストールはアーカイブされます。
10. インストール・ディレクトリーを選択します。デフォルト・ディレクトリーは `/opt/ibm/IOC16install` です。「次へ」をクリックします。このフォルダーには、インストール・スクリプト、ツール、およびその他のリソースが保管されます。
11. インストールするトポロジーのタイプを選択します。「次へ」をクリックします。
12. ドメイン名を指定します。「次へ」をクリックします。このドメイン名は、会社または組織の DNS ドメイン名です。通常、これは組織のサーバーの完全修飾ホスト名の親部分です。例えば、サーバーの完全修飾ホスト名が `server.us.co.com` である場合、ドメイン名は `us.co.com` となります。

13. トポロジー・パスワードを指定します。「次へ」をクリックします。このパスワードはメモしておいてください。トポロジー・パスワードは、IBM Intelligent Operations Center の操作中に使用します。例えば、プラットフォーム制御ツールの実行時に、トポロジー・パスワードを使用します。
14. 管理パスワードを指定します。「次へ」をクリックします。このパスワードはメモしておいてください。このパスワードは、IBM Intelligent Operations Center によって提供される製品の管理コンソールまたはツールを使用して、その製品を管理するときに必要です。例えば、WebSphere Application Server Integrated Solutions Console にログオンして WebSphere Application Server を管理するとき、および WebSphere Portal にポータル管理者としてログオンするときに、このパスワードが必要になります。
15. LDAP SALT キーおよび SEED キーを指定します。「次へ」をクリックします。
16. 以降のパネルで、各サーバーの完全修飾ホスト名、ルート・ユーザー名、ルート・パスワード、および SSH ポートを入力します。各サーバーの情報を入力したら、「次へ」をクリックします。デフォルトの SSH ポートは 22 です。
17. すべてのインストール・パラメーターの値を入力したら、インストールを進行させるか取り消すかを選択します。その後は入力操作なしでインストールが進行します。インストールの進行状況が端末セッションに表示され、インストール・サーバーの /opt/ibm/IOInstall/install.log に書き込まれます。完了すると、正常に完了したことを示すパネルがインストーラーによって表示されます。
18. 「完了」をクリックします。
19. インストール・ログが表示されている端末ウィンドウを閉じます。

タスクの結果

IBM Intelligent Operations Center がインストールされ、インストール後の構成を実行できるようになります。

インストール後かつ構成前のインストールの検証

インストーラーの実行後、インストール後の構成ステップを始める前に、IBM Intelligent Operations Center が正しくインストールされていることを検証します。

手順

1. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのコンポーネントを停止します。
2. 表示されるメッセージを検討して、すべてのコンポーネントが正常に停止されていることを確認します。
3. 全サーバーの Linux オペレーティング・システムをシャットダウンします。
4. 全ランタイム・サーバーをパワーダウンしてパワーアップするか、全サーバーをリブートします。
5. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのコンポーネントを開始します。
6. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのコンポーネントの状況を照会します。
7. IBM Intelligent Operations Center にアクセスできることを確認します。
 - a. ブラウザーで、https://web_hostname/wps/portal に移動します。ここで、*web_hostname* は Web サーバーのホスト名です。
 - b. IBM Intelligent Operations Center の管理者 (wpsadmin など) としてログオンします。wpsadmin のパスワードは、トポロジー・プロパティー・ファイルの PORTAL.ADMIN.UID.PWD プロパティーで定義されています。
「スーパーバイザー: 操作」ページが表示されます。
8. システム検査チェック・ツールで、すべてのテストを実行します。

9. すべてのテストが正常に実行されていることを確認します。

次のタスク

何らかのエラーが認められた場合は、エラーを解決して、これらのステップを再実行してください。

関連タスク:

235 ページの『システム検査チェック・ツールの使用方法』

システム検査チェック・ツールは、IBM Intelligent Operations Center システムを構成するサービスの運用状況を判別するために使用します。

221 ページの『標準環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバーで実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

233 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

215 ページの『標準環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

224 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

218 ページの『標準環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

229 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

インストール後の IBM Intelligent Operations Center の構成

IBM Intelligent Operations Center をインストールしたら、インストールを完了するためにインストール後の構成ステップをいくつか実行する必要があります。

IPv6 用のコラボレーション・サービスの構成

インストール済み環境で IPv6 ネットワーキングを使用する場合は、コラボレーション・サービス用の構成ステップが必要です。

このタスクについて

IPv6 ネットワーキングをコラボレーション・サービス用に構成する前に、IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーをインストールしておく必要があります。

手順

1. Lotus Domino® の資料のステップに従って、Lotus Domino を IPv6 アドレッシング用に構成します。
2. Lotus Sametime Standard の資料のステップに従って、Lotus Sametime Standard を IPv6 アドレッシング用に構成します。

3. アプリケーション・サーバーに割り当てられている IPv4 アドレスを持つ IPv4 ネットワークを使用していない場合は、WebSphere Portal の資料に記載されたステップに従って Sametime 連絡先リスト・ポートレットに対する信頼を構成してください。

関連情報:

 IPv6 アドレッシング用 Lotus Domino の構成

 IPv6 をサポートするための Sametime Community Server の構成

 Sametime 連絡先リスト・ポートレットのための信頼の構成

コラボレーション・サービス用のシングル・サインオンの構成

WebSphere Portal SSO LTPA トークンをアプリケーション・サーバーにインポートすると、ユーザーは資格情報を再入力しなくてもコラボレーション・サービスにアクセスできるようになります。

始める前に

このタスクを実行するには、Lotus Notes® 8.5.x クライアントが必要です。既存の IBM Notes クライアントを使用することも、IBM Notes クライアントを Windows クライアント上にインストールすることもできます。インストールする場合は、インストール・サーバー上の /distributionMedia フォルダにある notes_designer_admin853_w32en.exe ファイルを使用します。ワークステーションは、完全修飾ホスト名を使用して、TCP/IP 経由でアプリケーション・サーバーに接続できるようにしておく必要があります。

このタスクについて

Lightweight Third Party Authentication (LTPA) トークンをインポートする前に、IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーをインストールしておく必要があります。

このトークンは、IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーのインストール時に作成されています。

手順

1. Lotus Notes 8.5.x クライアントをワークステーションにインストールします。既存のインストール済み環境を使用できます。ワークステーションは、完全修飾ホスト名を使用して、TCP/IP 経由でアプリケーション・サーバーに接続できるようにしておく必要があります。
2. アプリケーション・サーバーから、Lotus Notes を実行中のワークステーションに、/opt/IBM/ISP/stproxy.ltpa ファイルをコピーします。これが、コラボレーション・サービス・ディレクトリーにインポートされる LTPA トークンです。
3. アプリケーション・サーバー から、Lotus Notes を実行中のワークステーションに、/local/notesdata/admin.id ファイルをコピーします。これは、コラボレーション・サービス管理者用の ID ファイルです。この ID を使用して、コラボレーション・サービス・ディレクトリーにログインします。
4. ワークステーションで Lotus Notes クライアントを開始して、admin.id ファイルを使用してログオンします。
 - a. Lotus Notes のログオン・パネルで、「ユーザー名」をクリックします。
 - b. admin.id ファイルのコピー先のディレクトリーにナビゲートし、当該ファイルを選択します。
 - c. トポロジー・プロパティ・ファイルに DOMINO.ADMIN.PWD プロパティ用として定義されているパスワードを入力します。

- d. セキュリティー警告が表示された場合は、「はい」をクリックします。
5. names.nsf ファイルを開きます。
 - a. 「ファイル」 > 「開く」 > 「Lotus Notes アプリケーション」をクリックします。
 - b. 「検索対象 (Look In)」に、アプリケーション・サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
 - c. 「ファイル名」に、names.nsf と入力します。
 - d. 「開く」をクリックします。
6. 「Web」 > 「Web 構成」にナビゲートします。
7. 「LTPA トークン用の Web SSO 構成 (Web SSO Configuration for LTPA Token)」を選択して、「文書の編集」をクリックします。
8. 「鍵」 > 「WebSphere LTPA 鍵のインポート (Import WebSphere LTPA Keys)」をクリックします。既存の鍵の上書きに関する警告を受け取った場合は、「OK」をクリックします。
9. stproxy.ltpa ファイルをコピーした場所へのパスを入力します。「OK」をクリックします。
10. LTPA トークンのパスワードを入力します。このパスワードは、トポロジー・プロパティー・ファイルの WAS.LTPA.PWD プロパティーに定義されています。
11. 「トークン形式 (Token Format)」で、LtpaToken2 を選択します。
12. 「OK」 > 「保存して閉じる」をクリックします。
13. 標準環境で、プラットフォーム制御ツールを使用してコラボレーション・サービスを再始動します。
 - a. 管理サーバーにログオンして、端末ウィンドウを開きます。
 - b. `su -ibmadmin` を実行します。
 - c. `/opt/IBM/ISP/mgmt/scripts/IOControl -a stop -c st -p password` を実行します。ここで、*password* は、プラットフォーム制御ツールのインストール時に定義されたプラットフォーム制御ツールのパスワードです。
 - d. `/opt/IBM/ISP/mgmt/scripts/IOControl -a start -c st -p password` を実行します。ここで、*password* は、プラットフォーム制御ツールのインストール時に定義されたプラットフォーム制御ツールのパスワードです。
14. 高可用性環境で、プラットフォーム制御ツールを使用してコラボレーション・サービスを再始動します。
 - a. 管理サーバーにログオンして、端末ウィンドウを開きます。
 - b. `su -ibmadmin` を実行します。
 - c. `/opt/IBM/ISP/mgmt/scripts/IOControl -a 611 -p password` を実行します。ここで、*password* は、プラットフォーム制御ツールのインストール時に定義されたプラットフォーム制御ツールのパスワードです。
 - d. `/opt/IBM/ISP/mgmt/scripts/IOControl -a 261 -p password` を実行します。ここで、*password* は、プラットフォーム制御ツールのインストール時に定義されたプラットフォーム制御ツールのパスワードです。

セッション・タイムアウトの設定

セッション・タイムアウトは、セッションが終了し、ユーザーによる再度のログインが必要になるまでの、ユーザーがアイドル状態のままにいることのできる時間を決定します。セッション・タイムアウトには、管理者のポータル・サービス経由でのログインを含みます。

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center のインストール時には、セッション・タイムアウトは定義されていません。セッションがアイドル状態であっても、ユーザーは、ログアウトするまではログインしたままになります。

ユーザーの組織のセキュリティー・ポリシーにより、一定期間アイドルであればセッションのログアウトが必要となる場合は、以下のステップを使用して、IBM Intelligent Operations Center システムのセッション・タイムアウトを定義してください。

手順

サーバー・タイムアウトを構成します。

1. Web ブラウザーを使用して `http://application_server:9061/ibm/console` に移動します。ここで `application_server` は、標準環境の場合はアプリケーション・サーバーのホスト名、高可用性環境の場合はアプリケーション・サーバー 1 のホスト名です。
2. トポロジー・プロパティ・ファイルの `PORTAL.ADMIN.ACCOUNT.PWD` で定義されたパスワードを指定して、admin ユーザーとしてログオンします。
3. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「WebSphere Portal」をクリックします。
4. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
5. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
6. 「OK」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。
8. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「STProxyServer1」をクリックします。
9. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
10. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
11. 「OK」をクリックします。
12. 「保存」をクリックします。
13. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_GW1」をクリックします。
14. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
15. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
16. 「OK」をクリックします。
17. 「保存」をクリックします。
18. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_Disp1」をクリックします。
19. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
20. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
21. 「OK」をクリックします。

22. 「保存」をクリックします。
高可用性環境で実行している場合は、以下の追加のサーバーを構成します。
23. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_Disp2」をクリックします。
24. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
25. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
26. 「OK」をクリックします。
27. 「保存」をクリックします。
28. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_GW2」をクリックします。
29. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
30. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
31. 「OK」をクリックします。
32. 「保存」をクリックします。
33. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「WebSphere_Portal_PortalNode2」をクリックします。
34. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
35. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
36. 「OK」をクリックします。
37. 「保存」をクリックします。
Cognos のアイドル・タイムアウトを設定します。
38. root ユーザーとして、標準環境の場合は分析サーバーに、高可用性環境の場合は分析サーバー 1 と分析サーバー 2 の両方にログオンします。
39. /opt/IBM/cognos/c10_64/bin64/cogconfig.sh を実行します
40. 「セキュリティー」 > 「認証」をクリックします。
41. 「アイドル・タイムアウト (秒)」に、希望するタイムアウト値 (秒単位) を指定します。
42. 「ファイル」 > 「保存」をクリックします。
43. 高可用性環境の 2 番目の分析サーバーについて、上の手順を繰り返します。
サーバーを再始動します。
44. プラットフォーム制御ツールを使用して、アプリケーションおよび分析用のコンポーネントを停止した後、再始動します。

LTPA タイムアウトの設定

Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) タイムアウトは、セッションが終了し、ユーザーによる再度のログインが必要になるまでの、ユーザーがログオン状態のままにいられる時間を決定します。LTPA タイムアウトには、管理者のポータル・サービス経由でのログインが含まれます。

このタスクについて

LTPA タイムアウトは、IBM Intelligent Operations Center のインストール時に 150 分に構成されます。150 分が経過した後も、ユーザーがログアウトするまではログイン状態のままになります。

ユーザーの組織のセキュリティー・ポリシーにより、別の一定期間後にセッションのログアウトが必要となる場合は、以下の手順に従って、IBM Intelligent Operations Center システムの LTPA タイムアウトを定義してください。

手順

1. Web ブラウザーを使用して `http://application_server:9061/ibm/console` に移動します。ここで `application_server` は、標準環境の場合はアプリケーション・サーバーのホスト名、高可用性環境の場合はアプリケーション・サーバー 1 のホスト名です。
2. トポロジー・プロパティー・ファイルの `PORTAL.ADMIN.ACCOUNT.PWD` で定義されたパスワードを指定して、admin ユーザーとしてログオンします。
3. 「セキュリティー」 > 「グローバル・セキュリティー」 > 「LTPA」をクリックします。
4. 「LTPA タイムアウト (LTPA timeout)」に、必要なタイムアウト値を分単位で入力します。
5. 「適用」をクリックします。
6. 「保存」をクリックします。
7. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべての IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止した後、再始動します。IBM Intelligent Operations Center がまだインストール中の場合は、インストールの完全検証中にサーバーが再始動されます。

IBM HTTP Server システム管理者の E メール・アドレスの構成

システムによって生成されるメッセージに含まれる、システム管理者の E メール・アドレスを構成します。

このタスクについて

標準環境の Web サーバーまたは高可用性環境の Web サーバー 1 および Web サーバー 2 で、IBM HTTP Server の構成を変更して、サーバーに関する問題の問い合わせ先であるシステム管理者の E メール・アドレスを参照するようにします。

手順

1. `/opt/IBM/HTTPServer/conf/httpd.conf` ファイルを編集します。
2. `ServerAdmin` 値を、サーバーに関する問題の問い合わせ先であるシステム管理者の E メール・アドレスに変更します。
3. ファイルを保存します。
4. プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM HTTP Server を再始動します。

IBM Business Monitor の HTTPOnly 設定の解除

IBM Business Monitor が正しく機能するためには、HTTPOnly を無効にする必要があります。

手順

1. Web ブラウザーを使用して `http://application_server:9061/admin` に移動します。ここで `application_server` は、標準環境の場合はアプリケーション・サーバーのホスト名、高可用性環境の場合はアプリケーション・サーバー 1 のホスト名です。
2. トポロジー・プロパティー・ファイルの `WAS.ADMIN.ACCOUNT.PWD` で定義されたパスワードを指定して、admin ユーザーとしてログオンします。
3. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「Websphere Application Server」をクリックします。
4. `WBM_DE.AppTarget.WBMNode1.0` をクリックします。

5. 「コンテナ設定」で、「セッション管理」をクリックします。
6. 「一般プロパティ」で、「Cookie を有効にする」をクリックします。
7. 「セッション Cookie を HTTPOnly に設定して、クロスサイト・スクリプティング・アタックを阻止します」チェック・ボックスのチェック・マークを外します。
8. 「OK」、「保存」の順にクリックします。変更内容がマスター構成に保存されます。
9. 高可用性環境を実行している場合は、ステップ 3 (82 ページ) から 8 を繰り返して、WBM_DE.AppTarget.WBMNode2.0 に対しても同じ変更を加えます。
10. 「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」をクリックします。
11. WBM_DE.AppTarget を選択し、「停止」をクリックします。IBM Business Monitor クラスターが停止されます。
12. 「システム管理」 > 「ノード」をクリックします。
13. 「WBM ノード (WBM Nodes)」を選択し、「完全な再同期」をクリックします。すべての IBM Business Monitor ノードに変更内容が同期されます。
14. 「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」をクリックします。
15. WBM_DE.AppTarget を選択し、「開始」をクリックします。IBM Business Monitor クラスターが開始されます。

高可用性環境におけるコラボレーション・サービスの 2 次 LDAP サーバーの構成

高可用性環境の実行時には、コラボレーション・サービス用の 2 次 LDAP サーバーが必要です。

手順

1. Lotus Notes 8.5.x クライアントをワークステーションにインストールします。既存のインストール済み環境を使用できます。ワークステーションは、完全修飾ホスト名を使用して、TCP/IP 経由でアプリケーション・サーバー 1 に接続できるようにしておく必要があります。
2. アプリケーション・サーバー 1 から、Lotus Notes を実行中のワークステーションに、/local/notesdata/admin.id ファイルをコピーします。これは、コラボレーション・サービス管理者用の ID ファイルです。この ID を使用して、コラボレーション・サービス・ディレクトリーにログインします。
3. ワークステーションで Lotus Notes クライアントを開始して、admin.id ファイルを使用してログオンします。
 - a. Lotus Notes のログオン・パネルで、「ユーザー名」をクリックします。
 - b. admin.id ファイルのコピー先のディレクトリーにナビゲートし、当該ファイルを選択します。
 - c. トポロジー・プロパティ・ファイルに DOMINO.ADMIN.PWD プロパティ用として定義されているパスワードを入力します。
 - d. セキュリティー警告が表示された場合は、「はい」をクリックします。
4. names.nsf ファイルを開きます。
 - a. 「ファイル」 > 「開く」 > 「Lotus Notes アプリケーション」をクリックします。
 - b. 「検索対象 (Look In)」に、アプリケーション・サーバー 1 の完全修飾ホスト名を入力します。
 - c. 「ファイル名」に、names.nsf と入力します。
 - d. 「開く」をクリックします。

5. da.nsf ファイルを開きます。
 - a. 「ファイル」 > 「開く」 > 「Lotus Notes アプリケーション」をクリックします。
 - b. 「検索対象 (Look In)」に、アプリケーション・サーバー 1の完全修飾ホスト名を入力します。
 - c. 「ファイル名」に、da.nsf と入力します。
 - d. 「開く」をクリックします。
6. 既存のディレクトリー・アシスタンス項目を複製します。
7. 複製したディレクトリー・アシスタンス項目を更新します。
 - a. 「基本」タブで、「グループ許可」を「いいえ」に設定します。
 - b. 「検索順序 (Search Order)」で「2」を指定します。
 - c. 「LDAP」タブで、「LDAP ホスト (LDAP host)」を 1 次 LDAP ホスト名から 2 次 LDAP ホスト名に変更します。
8. stconfig.nsf ファイルを開きます。
 - a. 「ファイル」 > 「開く」 > 「Lotus Notes アプリケーション」をクリックします。
 - b. 「検索対象 (Look In)」に、アプリケーション・サーバー 1の完全修飾ホスト名を入力します。
 - c. 「ファイル名」に、stconfig.nsf と入力します。
 - d. 「開く」をクリックします。
9. 「フォームごと (By Form)」をクリックします。
10. LDAPServer フォームを複製します。
11. 複製したフォームを更新します。
 - a. 「LDAP 接続 (LDAP Connection)」で、2 次 LDAP の完全修飾ホスト名を指定します。
 - b. 「検索順序 (Search Order)」で「2」を指定します。
12. コラボレーション・サービスを再開します。
 - a. 分析サーバー 1 または分析サーバー 2 に ibmadmin ユーザーとしてログオンします。別のユーザーとしてログインしている場合は、`su - ibmadmin` コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに変更します。
 - a. 以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a 611 -p password
IOCControl -a 261 -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Centerのインストール時に定義されたトポロジ
ー・パスワードです。

高可用性環境における追加のクラスター・マネージャー関係の構成

高可用性環境に IBM Intelligent Operations Center をインストールしたら、クラスター・マネージャー関係を構成する必要があります。

このタスクについて

この構成を行わないと、1 次データ・サーバーまたはそのネットワーク・インターフェースの障害が制御されないため、データベースをスタンバイ・データ・サーバーに切り替えることができません。フェイルオーバーが失敗すると、IBM Intelligent Operations Center は作動不能になります。

手順

1. 分析サーバー 1 にログオンします。
2. 端末ウィンドウを開きます。
3. `root` ユーザーとしてログオンしていない場合は、`su - root` コマンドを実行して `root` ユーザーに変更します。
4. `cd install_home/ioc16/bin` を実行します。ここで、`install_home` は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時にインストール・ファイルがコピーされたディレクトリーです。
5. `./ioc-env.sh` を実行します。
6. `./ba.sh installTopology -t iop.ha.tsapatch -p topology_password` を実行します (`topology_password` は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワード)。

高可用性環境におけるオプションの外部ネットワーク・ファイル・システムの構成

オプションの外部ネットワーク・ファイル・システムを構成するには、スクリプトを使用します。

このタスクについて

外部ネットワーク・ファイル・システムを使用すると、メッセージング・サービスのフェイルオーバー・ソリューションをより堅固にすることができます。

手順

1. インストール・サーバーに `root` ユーザーとしてログオンします。
2. `/install_home/ioc16/bin` ディレクトリーに移動します。
3. `./ioc-env.sh` コマンドを実行します。
4. `./iop.ha.wmqextnfs.sh -p topology_password` コマンドを実行します。 `topology_password` は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時、またはその後の変更時に指定されたパスワードです。指定されていない場合、`topology_password` はデフォルトで `ibmioc16` となります。インストール手順のメニューが表示されます。
5. このメニューからオプションを選択する。

表 21. 外部ネットワーク・ファイル・システムの構成オプション

選択	フェーズ	ステップの説明	平均実行時間
1	準備	テンプレートをトポロジー・ディレクトリーにコピーします	1 分
2	準備	トポロジーをパラメーター化します	1 分
3	準備	トポロジーを暗号化します	1 分
4	インストール	外部ネットワーク・ファイル・システムをセットアップします	7 分

6. ステップ 4 から、順序どおりにインストール・ステップを選択していきます。前のインストール・ステップが完了するまでは、次のステップを選択しないでください。インストール・ステップは、コマンドで指定することもできます。例えば、`./iop.ha.wmqextnfs.sh -p topology_password 1` のように指定します。

タスクの結果

インストールの進行状況が表示され、インストール・サーバー上の `/install_home/ioc16/log` ディレクトリにあるログに書き込まれます。

高可用性環境における Cognos モデルの構成

データ・ソースが作成または更新されるときに、IBM Intelligent Operations Center は、Cognos モデルをパブリッシュできます。高可用性環境で、IBM Intelligent Operations Center が Cognos モデルをパブリッシュできるようにするには、Cognos を構成する必要があります。

このタスクについて

高可用性環境で、IBM Intelligent Operations Center が Cognos モデルのパブリッシュを試みると、2 つのディスパッチャーが実行している場合はエラーが発生します。ログ・ファイルに、以下のエラー・メッセージが表示されます。

```
BME-AS-0022 Model not open is obtained.
```

ソリューション管理者に、以下の通知が送信されます。

```
The Cognos models were not updated.
```

次の手順に従って、ディスパッチャーのいずれかを停止するか、ディスパッチャーのいずれかについて `metadataService` を停止します。

手順

1. IBM Cognos Administration を開始します。
2. 「構成」タブをクリックします。
3. メニューで、「ディスパッチャーとサービス (Dispatchers and Services)」をクリックします。高可用性環境で、2 つのディスパッチャーがリストされます。
4. 次のオプションのいずれかを選択してください。
 - ディスパッチャーのいずれかを停止するために、目的のディスパッチャーの横にある「その他」をクリックし、次いで、「ただちに停止」をクリックします。
 - ディスパッチャーのいずれかについて `metadataService` を停止するために、目的のディスパッチャーを選択します。「MetadataService」の横で、「その他」をクリックし、次いで、「ただちに停止」をクリックします。

タスクの結果

1 つのディスパッチャー・サービスのみ、または `MetadataService` が実行中の状態で、IBM Intelligent Operations Center は、データ・ソースの作成または更新時に Cognos モデルをパブリッシュすることができます。Cognos モデルが正常にパブリッシュされると、管理者に通知が送信されます。

最適化対話式プロセス通信方式の定義

1.6.0.2

E メール通知または SMS 通知を使用する場合は、IBM Intelligent Operations Center にパッケージされた Optimized Interactive Processes (OIP) Extreme Messaging (XM) コンポーネントを構成して、通信方式を定義する必要があります。E メールを使用する場合は、発信 E メールを配信するためにサーバー SMTP サ

ービスが使用されます。SMS 通知の場合は、サード・パーティーによって提供される SMS ゲートウェイが必要です。どちらの通知方式も必要ではない場合、以下のステップはオプションです。

手順

1. `http://AppServer_FQDN:10039/xm-admin/` にアクセスし、*WASAdmin* ユーザーとしてログオンします。

注: 初期設定ステップ 2 から 5 は、OIP を初めて実行するときに実行します。

2. 「構成」をクリックし、「停止」をクリックして XM コンポーネントを停止します。
3. 「XM サーバー状態 (XM Server State)」の値が「停止中 (Stopped)」になるまで待ちます。
4. 「初期化 (init)」をクリックし、「変更を保存 (Save Changes)」が表示されるまで待ちます。
5. 「開始」をクリックし、「XM サーバー状態 (XM Server State)」の値が「開始済み (Started)」になるまで待ちます。
6. 「アカウント (Accounts)」をクリックします。
7. 正符号 (「+」) をクリックします。
8. 「アカウントの追加 (Add Account)」で、「名前」に `iocAccount` と入力します。
9. 「OK」をクリックします。
10. 「アカウント (Accounts)」で、「iocAccount」をクリックします。
11. 「レポート・ポリシー (Report policy)」で「なし」を選択します。

E メール構成

12. 「発信チャネル (Outgoing Channels)」で、正符号 (「+」) をクリックします。
13. 「通信方式 (Communication Method)」で、「E メール」を選択します。
14. 「次へ」をクリックします。
15. 以下の情報を指定します。

タイトル (Title)

IOC Account Outgoing Email

アドレス

`iocAccount@EventServer_FQDN`

セッション名 (Session Name)

IOC Account Outgoing Email

JNDI 名 (JNDI name)

`mail/iocAccount_out`

ホスト名

SMTP サーバーの完全修飾ドメイン名

プロトコル (Protocol)

`smtp`

ポート (Port)

SMTP サーバー・ポート (デフォルトは 25)

ユーザー名

E メールの送信に使用される自分の SMTP サーバー・ユーザー名

パスワード

「ユーザー名」のパスワード

16. 「終了」をクリックします。

SMS 構成

17. 「発信チャンネル (Outgoing Channels)」で、正符号 (「+」) をクリックします。

18. 「通信方式 (Communication Method)」で、「sms」を選択します。

19. 「mobileGateway」を選択します。

20. 「次へ」をクリックします。

21. 以下の情報を指定します。

タイトル (Title)

IOC Notification Outgoing SMS

SMS モバイル・ゲートウェイ・ホスト名/IP (SMS Mobile gateway hostname / IP)

ご使用の SMS ゲートウェイ構成に該当する値を入力します。

モバイル・ゲートウェイ・ポート (Mobile gateway port)

ご使用の SMS ゲートウェイ構成に該当する値を入力します。

22. ゲートウェイが保護されている場合は、「保護 (Secured)」を選択し、以下の情報を指定します。

ユーザー名 (Username)

ご使用の SMS ゲートウェイ構成に該当する値を入力します。

パスワード

ご使用の SMS ゲートウェイ構成に該当する値を入力します。

23. 「終了」をクリックします。

最適化対話式プロセス保守タスクの構成

1.6.0.2

保守タスクに関するメッセージを送受信する方法を定義するには、IBM Intelligent Operations Center にパッケージされた Optimized Interactive Processes Extreme Messaging コンポーネントを構成する必要があります。

手順

1. http://AppServer_FQDN:10039/xm-admin/ にアクセスし、WASAdmin ユーザーとしてログオンします。
2. 「構成」をクリックします。
3. 「保守タスク (Maintenance Tasks)」をクリックします。
4. 希望する設定に応じて設定を調整します。

注: SMTP または SMS によってアラートを受信するには、各「保守時間ウィンドウの使用 (Use maintenance time window)」チェック・ボックスをクリアする必要があります。

Semantic Model Services のインストールおよび構成

IBM Intelligent Operations Center には、Semantic Model Services アプリケーションおよびサンプル・モデルがあります。このサービスを使用するには、事前にサービスをインストールして構成しておく必要があります。

標準環境におけるオプションのセマンティック・モデル・サーバーのインストール

オプションの IBM Intelligent Operations Center セマンティック・モデル・サーバーを標準環境にインストールするには、スクリプトを使用します。

手順

1. データ・サーバーに root ユーザーとしてログオンします。
2. `su - db2inst1 -c "db2 update dbm cfg using NUMDB 24"` コマンドを実行します。
3. インストール・サーバーに root ユーザーとしてログオンします。
4. `/install_home/ioc16/bin` ディレクトリーに移動します。
5. `./ioc-env.sh` コマンドを実行します。
6. `./iop.mdl.std.install.sh -p topology_password` コマンドを実行します。 `topology_password` は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時、またはその後の変更時に指定されたパスワードです。指定しない場合、`topology_password` はデフォルトで `ibmioc16` となります。インストール手順のメニューが表示されます。
7. このメニューからオプションを選択する。

表 22. セマンティック・モデル・サーバー インストール・オプション

選択	インストール・フェーズ	ステップの説明	平均実行時間
1	事前検査	インストール・メディアのチェックサムを検証します。	8 分
2	準備	テンプレートをトポロジー・ディレクトリーにコピーします。	1 分
3	準備	すべてのトポロジーをパラメーター化します。	1 分
4	準備	すべてのトポロジーを暗号化します。	1 分
5	インストール	セマンティック・モデル・サーバー アプリケーションをインストールします。	2 時間 10 分

8. ステップ 6 から、順序どおりにインストール・ステップを選択していきます。前のインストール・ステップが完了するまでは、次のステップを選択しないでください。インストール・ステップは、コマンドで指定することもできます。例えば、`./iop.mdl.std.install.sh 1 -p topology_password 1` のようにします。

タスクの結果

インストールの進行状況が表示され、インストール・サーバー上の `/install_home/ioc16/log` ディレクトリーにあるログに書き込まれます。

高可用性環境におけるオプションのセマンティック・モデル・サーバーのインストール

オプションの IBM Intelligent Operations Center セマンティック・モデル・サーバーを高可用性環境にインストールするには、スクリプトを使用します。

手順

1. データ・サーバー 1 に root ユーザーとしてログオンします。
2. `su - db2inst1 -c "db2 update dbm cfg using NUMDB 24"` コマンドを実行します。
3. インストール・サーバーに root ユーザーとしてログオンします。
4. `/install_home/ioc16/bin` ディレクトリーに移動します。
5. `./ioc-env.sh` コマンドを実行します。

6. `./iop.mdl.ha.install.sh -p topology_password` コマンドを実行します。 `topology_password` は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時、またはその後の変更時に指定されたパスワードです。指定しない場合、`topology_password` はデフォルトで `ibmioc16` となります。インストール手順のメニューが表示されます。
7. このメニューからオプションを選択する。

表 23. セマンティック・モデル・サーバー インストール・オプション

選択	インストール・フェーズ	ステップの説明	平均実行時間
1	事前検査	インストール・メディアのチェックサムを検証します。	8 分
2	準備	テンプレートをトポロジー・ディレクトリーにコピーします。	1 分
3	準備	すべてのトポロジーをパラメーター化します。	1 分
4	準備	すべてのトポロジーを暗号化します。	1 分
5	インストール	セマンティック・モデル・サーバー アプリケーションをインストールします。	2 時間 10 分

8. ステップ 6 から、順序どおりにインストール・ステップを選択していきます。前のインストール・ステップが完了するまでは、次のステップを選択しないでください。インストール・ステップは、コマンドで指定することもできます。例えば、`./iop.mdl.ha.install.sh 1 -p topology_password 1` のようにします。

タスクの結果

インストールの進行状況が表示され、インストール・サーバー上の `/install_home/ioc16/log` ディレクトリーにあるログに書き込まれます。

Jazz チーム・サーバーの構成

IBM Intelligent Operations Center Semantic Model Servicesは、Jazz™ チーム・サーバーにインストールされます。IBM Intelligent Operations Center Semantic Model Services をインストールする前に、Jazz チーム・サーバーを構成しておく必要があります。

このタスクについて

Jazz チーム・サーバーを構成する前に、IBM Intelligent Operations Center アーキテクチャーをインストールしておく必要があります。

手順

1. Web ブラウザーで `http://sms_host:82/jts/setup` に移動します。ここで、`sms_host` は、セマンティック・モデル・サーバーの完全修飾ホスト名です。
2. ユーザー ID `iicsystemuser` とパスワード `passw0rd` を使用してログオンします。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「パブリック URI の構成」ページで、「パブリック URI ルート」の値を `https://sms_host:9448/jts` の形式で入力し、「パブリック URI は、一度設定すると変更できないことを了解しています」を選択します。「次へ」をクリックします。
5. 「接続のテスト」をクリックします。構成テストが成功したことを示すメッセージが表示されるのを確認してください。
6. 「次へ」をクリックして、設定を保存して先へ進みます。

7. 「データベースの構成」 ページで、データベースを構成します。
 - a. 「データベース・ベンダー」には、DB2 を選択します。
 - b. 「接続タイプ」には、JDBC を選択します。
 - c. 「JDBC パスワード」には、トポロジー・プロパティ・ファイルで DEFAULT.PWD.DB2 プロパティとして定義されている DB2 データベース・パスワードを入力します。表示されるパスワード・メッセージは無視してください。
 - d. 「JDBC ロケーション」には、`//db_host:50001/JTS:user=db2inst1;password={password}`; を入力します。ここで、`db_host` は、データ・サーバーのホスト名です。{password} スtringは、示されているとおりに入力する必要があります。パスワード値に置換しないでください。
 - e. 「接続のテスト」をクリックします。エラーが発生した場合は、検査して該当項目を訂正します。項目が正しい場合は、データ・サーバーでプラットフォーム制御ツールを使用してデータベース・サービスが開始されていることを確認してください。
 - f. Jazz テーブルがデータベースに存在していないというメッセージが表示された後で、「テーブルの作成」をクリックします。処理が完了するまでに数分かかります。
 - g. 「次へ」をクリックします。
8. 「電子メール通知を有効にする」 ページで、値を「無効」に設定し、「次へ」をクリックします。
9. 「アプリケーションの登録」 ページに、「新規アプリケーションは検出されませんでした」と表示されるのを確認してください。「次へ」をクリックします。
10. 「ユーザー・レジストリーのセットアップ」 ページのステップ 1 で、「ユーザー・レジストリー・タイプ」に「LDAP」を選択します。
11. ステップ 2 で、Jazz チーム・サーバー・レジストリーの LDAP を構成します。
 - a. 「LDAP レジストリー・ロケーション」に、`ldap://db_host:389` と入力します。ここで、`db_host` は、標準環境ではデータ・サーバー、高可用性環境ではデータ・サーバー 1 の完全修飾ホスト名です。
 - b. 「基本ユーザー DN」には、`OU=USERS,OU=SWG,O=IBM,C=US` を入力します。LDAP サフィックスのパラメーターがデフォルト値から変更されている場合は、SWG、IBM、および US の値がトポロジー・プロパティ・ファイルで構成されているものと一致している必要があります。
 - c. 「ユーザー・プロパティ名のマッピング」には、`userId=uid,name=cn,emailAddress=mail` を入力します。
 - d. 「基本ユーザー DN」には、`OU=GROUPS,OU=SWG,O=IBM,C=US` を入力します。LDAP サフィックスのパラメーターがデフォルト値から変更されている場合は、SWG、IBM、および US の値がトポロジー・プロパティ・ファイルで構成されているものと一致している必要があります。
 - e. 「Jazz から LDAP グループへのマッピング」では、`JazzAdmins=JazzAdmins, JazzUsers=JazzUsers, JazzDWAdmins=JazzDWAdmins, JazzProjectAdmins=JazzProjectAdmins, JazzGuests=JazzGuests` に値が設定されていることを確認します。
 - f. 「グループ名プロパティ」には、`cn` を入力します。
 - g. 「グループ・メンバー・プロパティ」には、`cn` を入力します。
12. 「接続のテスト」をクリックします。警告メッセージが表示されたら、「詳細の表示」をクリックします。mail プロパティに関する警告の場合は、メッセージを無視できます。
13. 「クライアント・アクセス・ライセンス・タイプ」では、「IBM Integrated Information Core - IIC モデル・サーバー (IBM Integrated Information Core - IIC Model Server)」を選択します。
14. 「次へ」をクリックします。

15. 「データウェアハウスの構成」では、「今はデータウェアハウスを構成しません」チェック・ボックスを選択します。
16. 「要約」ページで、「終了」をクリックします。

タスクの結果

これで、Jazz チーム・サーバーは作動可能になりました。

関連概念:

61 ページの『LDAP サフィックス』

IBM Intelligent Operations Center で使用される LDAP サフィックス情報は、トポロジー・プロパティ・ファイルで定義します。

Semantic Model Services のインストール

IBM Intelligent Operations Center には、Semantic Model Services およびサンプル・アプリケーションが用意されています。

このタスクについて

Semantic Model Servicesを使用する前に、セマンティック・モデル・サーバー上に Jazz Team Server を構成する必要があります。

手順

1. Web ブラウザーで `http://sms_host:82/jts/admin` に移動します。ここで、`sms_host` は、セマンティック・モデル・サーバーの完全修飾ホスト名です。
2. 「サーバー管理」ページで、「サーバー」 > 「構成」 > 「アプリケーションの登録」をクリックします。
3. 「登録済みアプリケーション」ページで、「追加」をクリックします。
4. 「アプリケーションの追加」ページで、モデル・サーバー・アプリケーションを追加します。
 - a. 「アプリケーション名」に、Model Server と入力します。
 - b. 「ディスカバリー URL」に、`http://sms_host:82/modelserver/scr` と入力します。ここで、`sms_host` は、セマンティック・モデル・サーバーの完全修飾ホスト名です。
 - c. 値を選択して、「コンシューマーの秘密情報」に入力します。この値は、アプリケーションへのアクセスを提供するために使用されます。この値は、パスワードと同じセキュリティで取り扱う必要があります。
 - d. 「機能 ID」に、`iicsystemuser` と入力します。
「アプリケーション・タイプ」が Model Server に変更されます。
5. エラーがない場合は、「終了」をクリックします。

Semantic Model Services の構成の検証

IBM Intelligent Operations Center には Semantic Model Services のサンプル・アプリケーションが用意されているので、それを使用して Semantic Model Services のインストールと構成が正しいかどうかを検証できます。

手順

1. サンプル・モデル・ファイルを準備します。

- a. インストール・サーバーの *install_media* ディレクトリー内で、*iic15_2_stagebuilddtoserver.xx.jar* ファイルを見つけます。
 - b. 選択したディレクトリーに *iic15_2_stagebuilddtoserver.xx.jar* ファイルを解凍します。これ以降のステップでは、このディレクトリーを *model_home* と呼びます。
2. サンプル・モデルをインストールします。
- a. *model_home* が配置されているサーバー上の Web ブラウザーで http://sms_host:82/iic/console に移動します。ここで、*sms_host* は、セマンティック・モデル・サーバーの完全修飾ホスト名です。
 - b. *iicsystemuser* ユーザーとして、パスワードに *passwd* を使用してログオンします。
 - c. 「モデル・マネージャー」 > 「オントロジー (Ontologies)」 > 「参照」をクリックします。
 - d. *install_media/ioc/image/IIC/install/modelServices/post_install/* ディレクトリーにナビゲートします。
 - e. *rsm.owl* ファイルを開きます。
 - f. 「ロード」をクリックします。ファイルがロードされます。
 - g. 「モデル・マネージャー」 > 「オントロジー (Ontologies)」 > 「参照」をクリックします。
 - h. *install_media/ioc/image/IIC/install/modelServices/post_install/* ディレクトリーにナビゲートします。
 - i. *modelServer.owl* ファイルを開きます。
 - j. 「ロード」をクリックします。ファイルがロードされます。
 - k. 「モデル・マネージャー」 > 「オントロジー (Ontologies)」 > 「参照」をクリックします。
 - l. *install_media/ioc/image/IIC/install/ktpRuntimeServices/post_install/* ディレクトリーにナビゲートします。
 - m. *kpi.owl* ファイルを開きます。
 - n. 「ロード」をクリックします。ファイルがロードされます。
 - o. 「モデル・マネージャー」 > 「ロード」 > 「参照」をクリックします。
 - p. *install_media/ioc/image/IIC/samples/rdf/rsm/* ディレクトリーにナビゲートします。
 - q. *IBMOilDownstreamSampleRDF.xml* ファイルを開きます。
 - r. 「ロード」をクリックします。ファイルがロードされます。
 - s. 「モデル・マネージャー」 > 「ロード」 > 「参照」をクリックします。
 - t. *install_media/ioc/image/IIC/samples/rdf/rsm/* ディレクトリーにナビゲートします。
 - u. *IBMOilUpstreamSampleRDF.xml* ファイルを開きます。
 - v. 「ロード」をクリックします。ファイルがロードされます。
 - w. 「モデル・マネージャー」 > 「ロード」 > 「参照」をクリックします。
 - x. *install_media/ioc/image/IIC/samples/rdf/rsm/* ディレクトリーにナビゲートします。
 - y. *IBMOilDownstreamSampleReferenceRDF.xml* ファイルを開きます。
 - z. 「ロード」をクリックします。ファイルがロードされます。
 - aa. 「モデル・マネージャー」 > 「ロード」 > 「参照」をクリックします。
 - ab. *install_media/ioc/image/IIC/samples/rdf/rsm/* ディレクトリーにナビゲートします。
 - ac. *IBMOilUpstreamSampleReferenceRDF.xml* ファイルを開きます。
 - ad. 「ロード」をクリックします。ファイルがロードされます。
3. サンプル・モデルが正しくインストールされていることを確認します。

- a. 「モデル・マネージャー」 > 「照会」 > 「照会」をクリックします。事前定義された照会が実行されます。XML 構造が、照会結果と共に表示されます。最上位のタグは `spargl` で、2 次タグ `head` および `results` があります。
 - b. 「モデル・エクスプローラー」をクリックして、モデルを表示できることを確認します。
4. このモデルを使用して、モデル・マネージャー のインストールを検証します。
- a. セマンティック・モデル・サーバーの Web ブラウザーで `http://sms_host:82/iic/ibmoil` に移動します。ここで、`sms_host` は、セマンティック・モデル・サーバーの完全修飾ホスト名です。
 - b. 「IBM Oil Company」 > 「変数」をクリックします。Web サービスの URL が表示されます。

タスクの結果

Semantic Model Services および IBMOil サンプル・モデルがインストールされます。

Semantic Model Services のパフォーマンスの改善

IBM Intelligent Operations Center で提供されている Semantic Model Services を構成して、モデルに対して照会を実行する場合のパフォーマンスを改善できます。

手順

1. Web ブラウザーで `http://sms_host:82/iic/console` に移動します。ここで、`sms_host` は、セマンティック・モデル・サーバーの完全修飾ホスト名です。
2. 表 24 のプロパティ値を「OPCWEBSERVICE」カテゴリに追加します。

表 24. OPCWEBSERVICE プロパティ

プロパティ	値
<code>cache.browse.timetolive.second</code>	3600
<code>cache.timetolive.second</code>	2592000
<code>cache.wait.second.after.create.action</code>	1

3. RSM カテゴリで、以下の表 25 のプロパティおよび値を更新または追加します。

表 25. RSM プロパティ

プロパティ	値
<code>mvmViewPath.0</code>	<code>http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_Enterprise##http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_OrganizationalEntity.ManagesAspectOf_PhysicalEntity ##iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_Site##http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_PhysicalEntity.contains_PhysicalEntity##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_Area##http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_PhysicalEntity.contains_PhysicalEntity##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_ProductionUnit##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_PhysicalEntity.ManagedBy_OrganizationalEntity##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_OrganizationalEntity##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_OrganizationalEntity.has_measurement##http:// iec.ch/TC57/CIM-generic#RSM_Measurement##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_Measurement.HasA_MeasurementValue##http:// iec.ch/TC57/CIM-generic#RSM_MeasurementValue</code>

表 25. RSM プロパティ (続き)

プロパティ	値
mvmViewPath.1	http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_Enterprise##http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_OrganizationalEntity.ManagesAspectOf_PhysicalEntity ##iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_Area##http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_PhysicalEntity.contains_PhysicalEntity##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_ProductionUnit##http://iec.ch/TC57/CIMgeneric# ISA95_WorkCenter.Contains_Equipment##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_WorkEquipment##http:// iec.ch/TC57/CIMgeneric# RSM_PhysicalEntity.has_measurement##http:// iec.ch/TC57/CIM-generic#RSM_Measurement##http:// iec.ch/TC57/CIM-generic#RSM_Measurement.HasA_MeasurementValue##http:// iec.ch/TC57/CIM-generic#RSM_MeasurementValue
mvmDownLevelPreRequest	3
mvmCacheProperty.0	cim:RSM_IdentifiedObject.name
mvmMaxQueryURI	500
mvmMaxSparqlEntry	4000

- 「パブリッシュ」をクリックします。新規プロパティおよび変更プロパティが保存されます。
- プラットフォーム制御ツールを使用してSemantic Model Services を再始動します。
- Web ブラウザーで http://sms_host:82/iic/console に移動します。ここで、*sms_host* は、セマンティック・モデル・サーバーの完全修飾ホスト名です。
- 必要に応じて、ソリューションまたはアプリケーション固有の変更を行ってください。変更が必須な場合には、製品またはソリューション・ドキュメンテーション内で変更が識別されます。

ソリューションに付属するツールのインストール

IBM Intelligent Operations Center には、ツールキットと開発ツールが付属しています。これらは、IBM Intelligent Operations Center をカスタマイズするときに使用します。

Rational® Application Developer を除き、これらのツールは、IBM Intelligent Operations Center デベロッパーズ・ツールキットの DVD またはイメージに収録されています。Rational Application Developer は、別の DVD またはイメージで IBM Intelligent Operations Center に付属しています。

Lotus Sametime Client

Lotus Sametime Client のインストールおよび使用に関する情報については、Lotus Domino および Lotus Notes の製品資料を参照してください。

WebSphere Message Broker Toolkit

WebSphere Message Broker Toolkit のインストールおよび使用に関する情報については、WebSphere Message Broker の製品資料を参照してください。

IBM Business Monitor 開発ツールキット

IBM Business Monitor 開発Toolkit のインストールおよび使用に関する情報については、IBM Business Monitor の製品資料を参照してください。

Rational Application Developer

Rational Application Developer は、IBM Business Monitor 開発ツールキットと併用して KPI モデルを作成することのみを目的としています。

Rational Application Developer のインストールおよび使用に関する情報については、Rational Application Developer の製品資料を参照してください。

関連概念:

176 ページの『KPI の作成および統合』

重要業績評価指標 (KPI) モデルは、ビジネス・モニター開発ツールキット、および「重要業績評価指標」構成ツールを使用して作成および変更できます。

関連情報:

 [IBM Lotus Domino および IBM Lotus Notes の製品資料](#)

 [WebSphere Message Broker の製品資料](#)

 [IBM Business Monitor の製品資料](#)

 [Rational Application Developer の製品資料](#)

サンプル・ユーザーの削除

IBM Intelligent Operations Center にはサンプル・ユーザーが付属しています。セキュリティ上の理由から、IBM Intelligent Operations Center が実稼働環境にインストールされた後に、これらのユーザーを削除する必要があります。

このタスクについて

事前に定義されているユーザーを削除するには、以下のステップを実行します。

手順

1. アプリケーション・サーバーで、WebSphere Portal にサインインします。
2. 「管理」ポータルで、「アクセス」 > 「ユーザーおよびグループ」 > 「すべての認証ポータル・ユーザー」をクリックします。
3. 以下のユーザーの削除アイコンをクリックします。
 - tdelorne
 - scollins
 - akelly
 - ballen

重要: 以下の必須ユーザーは削除しないでください。これらのユーザーを削除すると、IBM Intelligent Operations Center が正しく動作しなくなります。

- admin
- wpsadmin
- isimsystem
- ITIM Manager

- appcenteradmin
- wpsbind
- notesadmin

関連資料:

103 ページの『サンプル・ユーザー』

IBM Intelligent Operations Center のデプロイメント中に、サンプル・ユーザーが作成されます。

サンプル・データの削除

IBM Intelligent Operations Center では、デフォルトでサンプル・データが提供されます。例えば、サンプル KPI やサンプル・モニター・モデルが提供されます。このサンプル KPI は、IBM Business Monitor 開発ツールキットを使用してさまざまなタイプの KPI を実装する際のガイダンスとなるように設計されています。水道、輸送、および公共安全用のサンプル・モニター・モデルが用意されています。サンプル・データは、必要に応じて、ソリューション・インターフェースまたは DB2 コマンドを使用して削除できます。

ソリューション・インターフェースを使用したサンプル KPI の削除 このタスクについて

削除できるサンプル KPI は以下のとおりです。

- 公共安全
- 輸送
- 水

手順

1. IBM Intelligent Operations Center に *wpsadmin* としてログオンします。
2. 「ソリューション管理」ビューで、「重要業績評価指標」をクリックします。
3. 削除するサンプル KPI を右クリックし、「削除」を選択します。
4. 「保存」をクリックします。

DB2 コマンドを使用したサンプル KPI の削除 このタスクについて

DB2 コマンドでは、すべてのサンプル KPI を削除することができます。

手順

1. IBM Intelligent Operations Center データ・サーバーに *wpsadmin* としてログオンします。
2. コマンド・プロンプトで、以下のコマンドを入力します。

```
su db2inst2
db2 connect to IOCD
db2 "delete from IOC.KPI_Hierarchy WHERE MODELID like 'ioc_sample_%'"
```

関連概念:

201 ページの『サンプル KPI』

IBM Intelligent Operations Center では、サンプル KPI が提供されています。このサンプル KPI は、IBM Business Monitor 開発ツールキットを使用してさまざまなタイプの KPI を実装する際のガイダンスとなるように設計されています。水道、輸送、および公共安全用のサンプル・モニター・モデルが用意されています。

サンプル・モニター・モデルの削除

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center のサンプル・モニター・モデルを削除するには、以下の手順を実行します。削除できるサンプル・モニター・モデルは以下のとおりです。

- `ioc_sample_public_safety_model`
- `ioc_sample_transportation_model`
- `ioc_sample_water_model`

手順

1. 「アプリケーション」 > 「モニター・モデル」をクリックします。
2. 削除するサンプル・モニター・モデルのバージョン (`ioc_sample_public_safety_model` など) をクリックします。
3. 「マネージャー・スキーマ (Manager Schema)」をクリックします。
4. 「スキーマ削除スクリプトの実行 (Run Delete Schema Script)」をクリックし、「OK」をクリックします。
5. 「アプリケーション」 > 「モニター・モデル」をクリックします。
6. 削除するモデルのチェック・ボックス (`ioc_sample_public_safety_model` など) をクリックし、「停止」をクリックします。
7. 「アプリケーション」 > 「アプリケーション・タイプ」 > 「Websphere エンタープライズ・アプリケーション」をクリックします。
8. 「`model_to_deleteApplication.ear`」チェック・ボックスを選択します。

`model_to_delete` は削除するモデルです。例えば「`ioc_sample_public_safety_modelApplication.ear`」などとなります。

9. 「アンインストール」をクリックして、変更内容を保存します。

次のタスク

詳しくは、IBM Intelligent Operations Center 製品資料の『サンプル KPI』を参照してください。

実動システムからのインストール・ファイルの削除

IBM Intelligent Operations Center のインストール時には、インストール・サービスの構成、インストール・メディア、およびログ・ファイルがサーバーに書き込まれます。インストールが完了し、インストールを検証したら、インストール・プロセスのみに使用されるファイルは実動システム・サーバーから削除できます。

アーカイブしてすべてのサーバーから除去できるものは以下のとおりです。

- トポロジー・プロパティ・ファイル内の `Unix.image.basedir.remote` プロパティによって定義されたディレクトリ。デフォルトの場所は `/installMedia/ioc/image` です。
- トポロジー・プロパティ・ファイル内の `Unix.script.basedir.remote` プロパティによって定義されたディレクトリ。デフォルトの場所は `/installMedia/ioc/script` です。

以下はインストール・サーバーからアーカイブして削除できます。これは、標準環境では分析サーバー、高可用性環境では分析サーバー 1 です。

- `custom.properties` ファイル内の `image.basedir.local` プロパティによって定義されたディレクトリ。デフォルトの場所は `/distributionMedia` です。
- `custom.properties` ファイル内の `image.tmpdir.local` プロパティによって定義されたディレクトリ。デフォルトの場所は、`/tmp/ioc/images` です。
- `custom.properties` ファイル内の `backup.local` プロパティによって定義されたディレクトリ。デフォルトの場所は `/tmp/ioc/backup` です。

インストール・サーバー上のトポロジー・プロパティ・ファイルにはパスワードが平文で含まれているため、このファイルは安全な場所に保管する必要があります。

インストールの検証

IBM Intelligent Operations Center のインストール後に、製品が正しくインストールされたことを検証します。検証により、すべてのコンポーネントが始動し、予測したとおりに作動するようにします。

このタスクについて

2 つの検証手順が提供されています。クイック検証手順は、IBM Intelligent Operations Center のインストール直後から、およびシステム全体のクイック検証が必要なときにいつでも使用できます。完全検証手順は、実行にかかる時間が大幅に長くなりますが、IBM Intelligent Operations Center が完全な稼働状態であると見なされる前に実行する必要があります。

手順

クイック検証

1. IBM Intelligent Operations Center にアクセスできることを確認します。
 - a. ブラウザーで、`https://web_hostname/wps/portal` に移動します。ここで、`web_hostname` は Web サーバーのホスト名です。
 - b. IBM Intelligent Operations Center の管理者 (`wpsadmin` など) としてログオンします。`wpsadmin` のパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルの `PORTAL.ADMIN.UID.PWD` プロパティで定義されています。

「スーパーバイザー: 操作」ページが表示されます。
2. システム検査チェック・ツールで、すべてのテストを実行します。
3. すべてのテストが正常に実行されていることを確認します。
4. プラットフォーム制御ツールを使用して、始動する必要があるすべてのコンポーネントを始動します。

完全検証

5. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのコンポーネントを停止します。
6. 表示されるメッセージを検討して、すべてのコンポーネントが正常に停止されていることを確認します。
7. 全サーバーの Linux オペレーティング・システムをシャットダウンします。
8. 全ランタイム・サーバーをパワーダウンしてパワーアップするか、全サーバーをリブートします。
9. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのコンポーネントを開始します。
10. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのコンポーネントの状況を照会します。
11. IBM Intelligent Operations Center にアクセスできることを確認します。
 - a. ブラウザーで、`https://web_hostname/wps/portal` に移動します。ここで、`web_hostname` は Web サーバーのホスト名です。

- b. IBM Intelligent Operations Center の管理者 (wpsadmin など) としてログオンします。wpsadmin のパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルの PORTAL.ADMIN.UID.PWD プロパティで定義されています。

「スーパーバイザー: 操作」ページが表示されます。

- 12. システム検査チェック・ツールで、すべてのテストを実行します。
- 13. すべてのテストが正常に実行されていることを確認します。

次のタスク

何らかのエラーが認められた場合は、エラーを解決して、これらのステップを再実行してください。

関連概念:

5 ページの『コンポーネント』

IBM Intelligent Operations Center の構造は、主要コンポーネント、サブシステム、およびサービスに大まかに分けることができます。

211 ページの『製品バージョン詳細の表示』

「ソリューション管理」ビューで、インストール済みの IBM Intelligent Operations Center および統合された IBM Smarter Cities Software Solutions のバージョンの詳細を表示できます。インストール後に適用した更新の詳細も表示できます。

関連タスク:

235 ページの『システム検査チェック・ツールの使用方法』

システム検査チェック・ツールは、IBM Intelligent Operations Center システムを構成するサービスの運用状況を判別するために使用します。

221 ページの『標準環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバーで実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

233 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

215 ページの『標準環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

224 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

218 ページの『標準環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

229 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

第 3 章 ソリューションの保護

IBM Intelligent Operations Center は不可欠な操作の中核を成しているため、このソリューション内のセキュリティは重要です。セキュリティを確保するためには、デフォルト設定を把握していることと、ソリューションのユーザーを管理して正しいレベルのアクセス権限をすべてのユーザーに付与することが重要です。

デフォルト・パスワード

ソリューションを保護するための最初の作業は、すべてのデフォルト・パスワードの変更です。デフォルト・パスワードについて詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

セキュア接続

IBM Intelligent Operations Center では、デフォルトで HTTPS が有効になっています。重要業績評価指標 (KPI) を処理するビジネス・モニター・サービスの HTTPS 設定は、変更することができます。

個々のサービスの HTTPS 設定を変更する場合は、対応するポート設定も更新する必要があります。システム・プロパティの設定の変更について詳しくは、トピックの末尾にあるリンクを参照してください。

ユーザー認証

ユーザー認証は、該当する機能へのユーザー・アクセス権限を提供する許可権限に関連付けられています。IBM Intelligent Operations Center は、シングル・サインオンを行うために、既存のセキュリティ・インフラストラクチャーとの統合をサポートします。

IBM Intelligent Operations Center のユーザー権限は、WebSphere Portal のユーザーおよびグループを介して管理されます。WebSphere Portal は、データ・サーバー上で実行される Tivoli Directory Server に付属する Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) データベースを使用します。

IBM Intelligent Operations Center に付属するセキュリティ・システムは、多数のユーザー・グループ、役割、および権限を処理できます。多数のユーザー・グループ、役割、および権限を処理することで、セキュリティ体制が管理しにくくなる可能性があります。管理者には、グループと権限の数を制限することを推奨します。

ユーザー役割と権限

役割ベースのユーザー・グループのメンバーシップにより、IBM Intelligent Operations Center へのアクセスを制御することができます。グループ内のユーザーには、彼らの役割に対応するソリューションの機能に対するアクセス権のみが付与されています。役割ベースのユーザー・グループのメンバーになることで、ユーザーは該当するタスクに集中することもできます。標準的な役割は、CityWideSupervisor、CityWideOperator、CityWideExecutive、および CityWideAdmin です。

ユーザーを IBM Intelligent Operations Center に追加するには、以下の手順を実行します。

1. 組織内のユーザーの役割に適合するグループを選択し、ユーザーをそのグループのメンバーにします。
2. ユーザーのプロファイルを完成させ、少なくともユーザー ID、名前、およびパスワードを含めます。

データ・ソースと権限

IBM Intelligent Operations Center 内の 1 つの機能へのアクセス権限があっても、その機能に含まれるすべてのデータ・ソースがユーザーに表示されるわけではありません。適切なデータのみがユーザーに表示されるようにするために、個々のデータ・ソースの構成中にアクセス権限が決定されます。管理者は、データ・ソースへのアクセス権限を、ユーザー・グループおよび個々のユーザーの両方に割り当てることができません。

WebSphere Portal Enable

WebSphere Portal Enable は、必要なユーザー・セットを収容するために拡張することが可能なプラットフォームを提供します。また、必要な組織構造を反映するよう調整できる、役割ベースのアクセス権も提供します。「**ユーザーおよびグループの管理 (Manage Users and Groups)**」ポートレットを使用して、ユーザーまたはユーザー・グループを表示、作成、および削除できます。また、グループのメンバーシップを変更することもできます。このポートレットについて詳しくは、このトピックの末尾にある WebSphere Portal の製品資料へのリンクを参照してください。

関連概念:

63 ページの『標準環境用のパスワード情報』

IBM Intelligent Operations Center ソリューションで使用されるさまざまなユーザー ID のパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルで定義します。セキュリティ上の理由により、IBM Intelligent Operations Center の出荷時に設定されているデフォルトのパスワードは、変更してください。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

関連情報:



IBM WebSphere Portal 8 の製品資料

ユーザーの役割とアクセス権

IBM Intelligent Operations Center は、ユーザー役割に基づいて機能へのアクセスを制限することによってセキュリティを実装します。

IBM Intelligent Operations Center の特定の機能を使用するには、その機能を使用するために必要なアクセス権限が提供されているユーザー役割グループのメンバーである必要があります。ユーザーは、管理者によってユーザー役割グループのメンバーに指定されます。以下の表には、IBM Intelligent Operations Center で、ログイン・アクセス・レベルを使用して実際の役割がユーザー役割グループにどのようにマップされるかが示されています。

表 26. 仕事上の役割と IBM Intelligent Operations Center のユーザー役割グループ

仕事上の役割	責務	ユーザー役割グループ
エグゼクティブ	<ul style="list-style-type: none">重要業績評価指標 (KPI) をモニターして、エグゼクティブの責任領域の状況を確認する現場の傾向や分類を調べ、状況を改善する方法についての戦略的な意思決定を行うスタッフや構成要員が得た洞察や問題への対処方法について話を聞く	CityWideExecutive

表 26. 仕事上の役割と IBM Intelligent Operations Center のユーザー役割グループ (続き)

仕事上の役割	責務	ユーザー役割グループ
監督者または管理者	<ul style="list-style-type: none"> 監督者または管理者の責任領域の状況を確認し、懸念のある領域を詳しく調査する 状況が悪い方向に変化したときの通知に対応する 日常業務を監視し、スタッフに作業を指示する 短期修正手段を決定する 	CityWideSupervisor
オペレーター	<ul style="list-style-type: none"> 着信データ更新をモニターし、詳細を確認する 要求に応答して状況に対応する 処理中のイベントや項目に関する情報を最新に保つために情報を更新する 短期的な修正処置が必要な傾向または領域を調べる 	CityWideOperator
ソリューション管理者	IBM Intelligent Operations Center のコンポーネント (データ・ソース、フィルター・オプション、マップ、重要業績評価指標、標準操作手順など) を構成します。	CityWideAdmin
システム管理者	グループの定義、グループへの権限の割り当て、グループへのユーザーの割り当てなど、ユーザーのすべての側面を管理します。ユーザーに適切なアクセス・レベルを提供します。アクセス・レベルは、グループ・メンバーシップに基づいて割り当てられます。システム管理者は、ソリューション管理者と同様に、IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントを構成することもできます。	wpsadmins

役割をカスタマイズして、組織に応じてユーザーを定義する前に、IBM Intelligent Operations Center のセキュリティ・システムを把握しておきます。

サンプル・ユーザー

IBM Intelligent Operations Center のデプロイメント中に、サンプル・ユーザーが作成されます。

一般的なサンプル・ユーザーは、ユーザー役割グループおよびそれに対応するアクセス権限を使用して定義されます。これらのサンプル・ユーザーは単に例として定義されたものであり、以下の表に示されています。ソリューションを管理するための他のユーザーも必要です。ユーザーの完全なリストについては、トピックの最後にあるリンク『サンプル・ユーザーの削除』を参照してください。

表 27. IBM Intelligent Operations Center に定義されているユーザー

ユーザー ID	ユーザー役割グループ
サンプル・ユーザー	
tdelorne	CityWideExecutive
scollins	CityWideSupervisor
akelly	CityWideOperator
ballen	CityWideAdmin
必須ユーザー	
wpsadmin	wpsadmins

組織のユーザーを定義する準備が整ったら、サンプル・ユーザーのみを削除してください。wpsadmin ユーザーは削除しないでください。wpsadmin ユーザーは、IBM Intelligent Operations Center に関連する管理タスクに不可欠です。

重要: wpsadmin ユーザーのデフォルト・パスワードを新規パスワードに置き換えてください。ポータル管理者のユーザー ID とパスワードの更新については、WebSphere Portal の資料を参照してください。

関連概念:

63 ページの『標準環境用のパスワード情報』

IBM Intelligent Operations Center ソリューションで使用されるさまざまなユーザー ID のパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルで定義します。セキュリティ上の理由により、IBM Intelligent Operations Center の出荷時に設定されているデフォルトのパスワードは、変更してください。

関連タスク:

96 ページの『サンプル・ユーザーの削除』

IBM Intelligent Operations Center にはサンプル・ユーザーが付属しています。セキュリティ上の理由から、IBM Intelligent Operations Center が実稼働環境にインストールされた後に、これらのユーザーを削除する必要があります。

関連情報:



IBM WebSphere Portal 8 の製品資料

ユーザー役割グループと許可権限

IBM Intelligent Operations Center では、ビューおよびビューに含まれる機能にアクセスするための権限のセットは、各ユーザー役割グループに関連付けられています。

管理者は、ユーザーを、対応するユーザー役割グループのメンバーにすることで、そのユーザーに役割を割り当てます。各ユーザーは、1 つ以上のユーザー役割グループのメンバーシップに割り当てられます。

次の表には、IBM Intelligent Operations Center で提供されるユーザー役割グループごとの権限がリストされています。各ユーザー役割グループに対して、IBM Intelligent Operations Center 内で提供されるサンプル・ビューごとに許可権限が付与されます。ビューにアクセスする権限があるユーザーには、そのビューに含まれるすべての機能にアクセスする権限があります。ただし、ビューに「フィルター」パネルが含まれている場合、データ・ソースを含むペイン内でユーザーに表示されるのは、そのユーザーに読み取り権限または読み取り/書き込み権限が割り当てられているデータ・ソースのみです。管理者は、データ・ソースへのユーザー・アクセス権限を個々のユーザーに割り当てるか、ユーザーを、データ・ソースへのアクセス権限があるグループのメンバーにすることができます。

表 28. IBM Intelligent Operations Center のサンプル・ビューおよび関連付けられているユーザー役割グループの権限

サンプル・ビュー	CityWideExecutive	CityWideSupervisor	CityWideOperator	CityWideAdmin	wpsadmins
スーパーバイザー: 操作	なし	ユーザー権限	なし	ソリューション管理者権限	システム管理者権限
スーパーバイザー: 状況	なし	ユーザー権限	なし	ソリューション管理者権限	システム管理者権限
オペレーター: 操作	なし	なし	ユーザー権限	ソリューション管理者権限	システム管理者権限
エグゼクティブ: 操作	ユーザー権限	なし	なし	ソリューション管理者権限	システム管理者権限
エグゼクティブ: 状況	ユーザー権限	なし	なし	ソリューション管理者権限	システム管理者権限
ポータル管理	なし	なし	なし	なし	システム管理者権限
ソリューション管理、システム管理	なし	なし	なし	なし	システム管理者権限

表 28. IBM Intelligent Operations Center のサンプル・ビューおよび関連付けられているユーザー役割グループの権限 (続き)

サンプル・ビュー	CityWideExecutive	CityWideSupervisor	CityWideOperator	CityWideAdmin	wpsadmins
ソリューション管理、構成ツール	なし	なし	なし	ソリューション管理者権限	システム管理者権限

IBM Intelligent Operations Center の許可権限は、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) グループに基づいて割り当てられます。許可権限には、以下の定義が適用されます。

- ユーザー権限は、機能を表示および操作するためのユーザー・アクセス権限を与えるためにユーザーに付与される権限です。
- 管理者権限は、以下のタスクを実行するための管理者アクセス権限を与えるために管理者に付与される権限です。
 - 機能の構成
 - ユーザーおよびユーザー・グループの作成、変更、または削除

関連タスク:

126 ページの『データ・ソースの保護』

データ・ソースのために、ユーザーまたはグループに、データへの適切なアクセス権限および許可特権を割り当てます。

ユーザーの追加

IBM Intelligent Operations Center にユーザーを追加できます。

手順

1. ポータル管理者としてソリューション・ポータルにログインします。例えば、`wpsadmin` や、`wpsadmins` ポータル・グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。
2. ビューの上部にあるメイン・ナビゲーション・バーで、**管理** > 「ポータル管理」をクリックします。
3. サイドバー・メニューで、**アクセス** > **ユーザーおよびグループ**をクリックします。
4. 「すべてのポータル・ユーザー・グループ」をクリックします。IBM Intelligent Operations Center の役割グループのリスト、およびこの環境にインストールされているその他のすべての IBM Smarter Cities Software Solutions が表示されます。
5. リストをスクロールして、ユーザーに割り当てるユーザー役割グループを探します。
6. IBM Intelligent Operations Center の役割グループを選択します。既存のグループ・メンバーの ID がリストされます。
7. 以下のいずれかの手順を実行してユーザーを追加します。
 - 新しいユーザーを追加するには、「新規ユーザー」をクリックし、必要な「プロファイル管理」フィールドに入力します。

注: 時間を節約するために、既存ユーザーに基づいて新規ユーザーのグループ割り当てを複製できます。新規ユーザーを選択してから、「グループ割り当ての複製 (Duplicate group assignments)」アイコンをクリックします。グループ・メンバーシップの複製元にする既存ユーザーを選択します。

- 既存のユーザーまたはユーザー・グループを追加するには、「メンバーの追加」をクリックし、リストからユーザーまたはグループ (複数可) を選択します。
8. 「OK」をクリックします。

タスクの結果

送信が正常に完了すると、それを確認するメッセージが表示されます。新規ユーザーを追加すると、ユーザー・プロファイルが作成され、グループ・リストに表示されます。新規ユーザーは、選択した役割グループに割り当てられている権限に従って、IBM Intelligent Operations Center へのアクセスが許可されます。

関連タスク:

189 ページの『ユーザー・プロファイルの表示または編集』

ソリューション・ユーザー・プロファイル内の情報を表示し、編集することができます。ユーザー・プロファイルを編集して、時間帯 (タイム・ゾーン)、言語設定、および通知の設定を指定します。パスワードのリセットや、個人の詳細情報の変更を行うこともできます。

グループの追加

IBM Intelligent Operations Center にグループを追加できます。

手順

1. ポータル管理者としてソリューション・ポータルにログインします。例えば、*wpsadmin* や、*wpsadmins* ポータル・グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。
2. ビューの上部にあるメイン・ナビゲーション・バーで、**管理** > 「**ポータル管理**」をクリックします。
3. サイドバー・メニューで、**アクセス** > **ユーザーおよびグループ**をクリックします。
4. 新規グループを追加するには、「**新規グループ**」をクリックして、ユーザー・グループの名前を入力します。
5. 「**OK**」をクリックします。

タスクの結果

送信が正常に完了すると、それを確認するメッセージが表示されます。「**すべてのポータル・ユーザー・グループ**」をクリックして、新規グループがリストに表示されていることを確認します。

次のタスク

- グループを WebSphere Application Server Network Deployment ジャンクション ACL に追加します。
- グループの権限を設定します。ページへのアクセス権の割り当てについては、IBM WebSphere Portal 7 の製品資料を参照してください。

関連情報:

 [IBM WebSphere Portal 8 の製品資料](#)

グループ・メンバーシップの表示または変更

グループ・メンバーシップを表示または変更して、IBM Intelligent Operations Center 内のユーザーのアクセス権限を管理します。

このタスクについて

メンバーシップを表示または変更する対象の役割に対応するグループを選択します。役割グループのメンバーシップによって、その役割に適したソリューション部分へのアクセス権限がユーザーに付与されます。

アイコンの上にカーソルを移動すると、そのアイコンの目的を示す吹き出しヘルプが表示されます。

手順

1. ポータル管理者としてソリューション・ポータルにログインします。例えば、*wpsadmin* や、*wpsadmins* ポータル・グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。
2. ビューの上部にあるメイン・ナビゲーション・バーで、**管理** > 「**ポータル管理**」をクリックします。
3. サイドバー・メニューで、**アクセス** > **ユーザーおよびグループ**をクリックします。
4. 「**すべてのポータル・ユーザー・グループ**」をクリックします。IBM Intelligent Operations Centerの役割グループのリスト、およびこの環境にインストールされているその他のすべてのIBM Smarter Cities Software Solutionsが表示されます。
5. IBM Intelligent Operations Centerの役割グループを選択します。既存のグループ・メンバーのIDがリストされます。
6. グループ・メンバーシップに関連する以下のアクションを実行できます。
 - ユーザーIDの「**メンバーシップの表示**」アイコンをクリックして、他のグループのメンバーシップを表示します。
 - 「**メンバーの追加**」をクリックし、追加するユーザーを選択して、グループにユーザーを追加します。
 - ユーザーIDに対して「**削除**」アイコンをクリックして、グループからユーザーを削除します。

ユーザー・プロファイルの表示または編集

ユーザーのプロファイルを表示または編集して、パスワードを含め、任意のユーザー・プロファイル属性を設定またはリセットします。このユーザーIDを変更することはできません。

このタスクについて

認証ポータル・ユーザー・リストからユーザーを選択してユーザー・プロファイルを開き、プロファイルの詳細を変更します。各ユーザーは、自分のプロファイルを変更することもできます。

アイコンの上にカーソルを移動すると、そのアイコンの目的を示す吹き出しヘルプが表示されます。

手順

1. ポータル管理者としてソリューション・ポータルにログインします。例えば、*wpsadmin* や、*wpsadmins* ポータル・グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。
2. ビューの上部にあるメイン・ナビゲーション・バーで、**管理** > 「**ポータル管理**」をクリックします。
3. サイドバー・メニューで、**アクセス** > **ユーザーおよびグループ**をクリックします。
4. 「**すべてのポータル・ユーザー・グループ**」をクリックします。IBM Intelligent Operations Centerの役割グループのリスト、およびこの環境にインストールされているその他のすべてのIBM Smarter Cities Software Solutionsが表示されます。
5. ユーザーIDの「**編集**」アイコンをクリックして、ユーザー・プロファイル属性を表示します。
6. パスワードを変更する場合は、「**新規パスワード**」と「**パスワードの確認**」に新しいパスワードを入力します。
7. 残りの任意のフィールドで、情報の入力、編集、または削除をすることができます。
8. 「**OK**」をクリックして、行った変更を送信します。

タスクの結果

送信した変更で、ユーザー・プロファイルが更新されます。

注: ユーザーが特定のタイム・ゾーンのデータを確認するには、ユーザー・プロファイルでタイム・ゾーンを選択します。ユーザー・プロファイルでタイム・ゾーンが選択されていない場合は、WebSphere Portal のタイム・ゾーンが使用されます。

関連タスク:

189 ページの『ユーザー・プロファイルの表示または編集』
ソリューション・ユーザー・プロファイル内の情報を表示し、編集することができます。ユーザー・プロファイルを編集して、時間帯 (タイム・ゾーン)、言語設定、および通知の設定を指定します。パスワードのリセットや、個人の詳細情報の変更を行うこともできます。

ユーザーまたはグループの削除

IBM Intelligent Operations Center からユーザーまたはグループを削除できます。

このタスクについて

ユーザーを IBM Intelligent Operations Center から削除すると、IBM Smarter Cities Software Solutions 内の他のソリューションに対するユーザーのアクセス権限も削除されます。グループを削除した場合も、他のソリューションからそのグループが削除されます。

アイコンの上にカーソルを移動すると、そのアイコンの目的を示す吹き出しヘルプが表示されます。

手順

1. ポータル管理者としてソリューション・ポータルにログインします。例えば、*wpsadmin* や、*wpsadmins* ポータル・グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。
2. ビューの上部にあるメイン・ナビゲーション・バーで、**管理** > 「**ポータル管理**」をクリックします。
3. サイドバー・メニューで、**アクセス** > **ユーザーおよびグループ**をクリックします。
4. 次のオプションのいずれかを選択してください。
 - 「**すべてのポータル・ユーザー・グループ**」をクリックして、グループのリストを表示します。
 - 「**すべての認証ポータル・ユーザー**」をクリックして、ユーザーのリストを表示します。
5. 削除するユーザーまたはグループの「**削除**」アイコンをクリックします。

タスクの結果

削除したユーザーまたはグループが、IBM Smarter Cities Software Solutions 内に存在しなくなります。グループを削除しても、グループのメンバーは削除されません。

ユーザーおよびグループのインポート

ポータル管理コンソールを使用して、IBM Intelligent Operations Center にユーザーを一括してインポートすることができます。

このタスクについて

この作業に必要な XML ファイルは、アプリケーション・サーバー: `/opt/IBM/WebSphere/PortalServer/doc/xml-samples/CreateUser.xml` にあります。XML ファイルを変更して、ユーザーを IBM Intelligent Operations Center に追加することができます。

複数のユーザーを追加する場合は、ユーザーをグループに追加する前に、まずすべてのユーザーを追加してください。このトピックの最後にある例を参照してください。

以下の手順の代わりに、コマンド行から `xmlaccess.sh` スクリプトを実行できます。このスクリプトは、アプリケーション・サーバーにあります。

手順

1. 新規ユーザーと、新規ユーザーが属するグループを `CreateUser.xml` ファイルに追加します。
2. ポータル管理者としてソリューション・ポータルにログインします。例えば、`wpsadmin` や、`wpsadmins` ポータル・グループのメンバーであるユーザーとしてログインします。
3. ビューの上部にあるメイン・ナビゲーション・バーで、管理 > 「ポータル管理」をクリックします。
4. サイドバー・メニューで、「ポータル設定 (Portal Settings)」 > 「XML のインポート (Import XML)」をクリックします。
5. 「参照」をクリックして、更新した XML ファイルを見つけます。
6. 「インポート」をクリックします。

タスクの結果

WebSphere Portal Server は、関連するエントリーを Tivoli Directory Server のディレクトリーに自動的に作成します。

例

以下の例では、XML ファイルを変更して、2 人のユーザーを IBM Intelligent Operations Center に追加し、それぞれのユーザーを 1 つの役割グループに追加しています。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<request xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:noNamespaceSchemaLocation="PortalConfig_8.0.0.xsd" type="update"
create-oids="true"
<portal action="locate">
  <user action="update" name="cityuser001" firstname="City"
lastname="user001" password="passwd">
    <parameter name="preferredLanguage" type="string"
update="set">en_US</parameter>
    <parameter name="cn" type="string" update="set">City user001</parameter>
  </user>
  <user action="update" name="cityuser002" firstname="City"
lastname="user002" password="passwd">
    <parameter name="preferredLanguage" type="string"
update="set">en_US</parameter>
    <parameter name="cn" type="string" update="set">City user002</parameter>
  </user>
  <group action="update" name="CityWideExecutive">
    <member-user update="set" id="cityuser001">
  </group>
  <group action="update" name="ioc_base_fire">
    <member-user update="set" id="cityuser001">
  <group action="update" name="CityWideOperator">
    <member-user update="set" id="cityuser002">
  </group>
</portal>
</request>
```

関連概念:

212 ページの『サービスの管理』

管理コンソールを使用して、ソリューションによって提供されるサービスを管理します。

関連情報:

 IBM WebSphere Portal 8 の製品資料

標準操作手順役割の定義

標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

以下の表は、標準操作手順に関連するそれぞれのアクションを実行できる役割を示しています。

表 29. 標準操作手順アクションと必要な役割

アクション	必要な役割
標準操作手順の作成	<ul style="list-style-type: none"> SopAdminRoles システム・プロパティーまたは SopAuthorRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。
標準操作手順定義の読み取り	<ul style="list-style-type: none"> SopAdminRoles システム・プロパティーまたは SopAuthorRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 定義の作成者または編集者によって読み取り権限を付与された任意の役割。
標準操作手順定義の更新または削除	<ul style="list-style-type: none"> SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 定義の作成者または編集者によって書き込み権限を付与された任意の役割。
標準操作手順のインスタンスの起動	<ul style="list-style-type: none"> SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 作成者または編集者によって標準操作手順定義内での書き込み権限を付与された任意の役割。
標準操作手順のインスタンスの詳細の読み取り	<ul style="list-style-type: none"> SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 作成者または編集者によって標準操作手順定義内での読み取り権限を付与された任意の役割。 作成者または編集者によってアクティビティー定義内での読み取り権限を付与された任意の役割。
標準操作手順のインスタンスの更新または削除	<ul style="list-style-type: none"> SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 作成者または編集者によって標準操作手順定義内での書き込み権限を付与された任意の役割。 作成者または編集者によってアクティビティー定義内での書き込み権限を付与された任意の役割。
アクティビティーの詳細の読み取り	<ul style="list-style-type: none"> SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 作成者または編集者によって標準操作手順定義内での読み取り権限を付与された任意の役割。 作成者または編集者によってアクティビティー定義内での読み取り権限を付与された任意の役割。

表 29. 標準操作手順アクションと必要な役割 (続き)

アクション	必要な役割
アクティビティーの更新	<ul style="list-style-type: none"> • SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 • 作成者または編集者によって標準操作手順定義内での書き込み権限を付与された任意の役割。 • 作成者または編集者によってアクティビティー定義内での書き込み権限を付与された任意の役割。
ライブラリー内の参照の作成	<p>以下のシステム・プロパティーにリストされているユーザー。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ReferenceLibrarianRoles • SopAdminRoles • SopAuthorRoles <p>注: 共有参照を作成できるのは ReferenceLibrarianRoles ユーザーのみです。</p>
ライブラリー内の参照の編集および削除	<ul style="list-style-type: none"> • ReferenceLibrarianRoles システム・プロパティーにリストされているユーザー。 • SopAdminRoles システム・プロパティーおよび SopAuthorRoles システム・プロパティーにリストされているユーザーは、自分が作成した参照のみを編集および削除できます。

関連タスク:

154 ページの『標準操作手順定義の構成』

標準操作手順を定義するときに、標準操作手順に組み込まれるアクティビティーを定義します。標準操作手順のアクティビティーの一部または全部について、実行する順序を指定することができます。例えば、直前のアクティビティーが完了するか、またはスキップされない限り、特定のアクティビティーが開始されないように指定することができます。また、所有者およびモニターを標準操作手順に割り当てます。

第 4 章 ソリューションの構成

「ソリューション管理」ビューで IBM Intelligent Operations Center を構成します。

データ・ソースの構成

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

ソリューション内に既にあるデータ・ソースの構成パラメーターを更新したり、ソリューションからデータ・ソースを削除することもできます。

データ・ソースを作成した後で、「フィルター」パネル・ツールを使用して、「フィルター」パネル内のフィルター・ペインにデータ・ソースを割り当てます。複数のデータ・ソースを 1 つのカテゴリの下にグループ化し、フィルター・ペイン上にまとめて表示することができます。すると、ユーザーは、操作ビューで「フィルター」パネルのデータ・ソースを選択することができます。ユーザーが「フィルター」パネルで選択するオプションの組み合わせにより、マップおよびリストに表示されるデータ項目が決まります。

データ・ソースを構成するときに、データ・ソースを表すアイコンを割り当てることができます。フィルター・ペインを構成するには、1 つのデータ・グループ内のすべてのデータ・ソースを表す、マップ・マーカ内で使用される色を選択します。アイコン・シンボルとデータ・ソースが属しているグループの色との組み合わせによって、マップ上でデータ・ソースを識別できます。

データ・ソースに対して以下の項目を構成することができます。

1. 収集方法

データ・ソースからデータを収集する方法を選択します。方法を選択すると、そのタイプのデータ・ソースに接続してデータを収集するために必要な情報を指定するように要求されます。以下の収集タイプがサポートされています。

- CSV ファイル (CSV file)
- データベース
-  共通アラート・プロトコル (CAP)
-   マップ、リスト、または REST API のみのいずれかでデータ項目を投入するための、ユーザー・インターフェース・エントリー

このステップは、データ・ソースの作成には必須です。

2. 基本情報

ソリューションによるデータの使用法に関する基本情報を指定します。データ・ソースに、ソリューション・ユーザー・インターフェース全体で使用される名前を付けます。データの処理方法に関する基本指示 (新規データを検査する頻度など) を指定します。このステップは、データ・ソースの作成には必須です。

3. 最小プロパティ

データ・ソースからのプロパティを、ソリューション内のすべてのデータ・ソースに必要な共通のプロパティの最小セットにマップします。デフォルトでは、最小プロパティには、ユーザー・インターフェース内の共通ラベルが割り当てられます。最小プロパティは、プレビュー・カ

ード上、または「リスト」タブ上の表の行内のいずれかに表示できます。時間およびマップ上の表示に関して、必要なデータ形式を受信するように最小プロパティを設定します。図形の形式、およびマップ上でデータ項目を表すための位置に関する情報を提供する方法を選択します。例えば、マップ上の表示の形式は、単一ポイント、複数のポイント、線、複数の線、またはポリゴンです。このステップは、データ・ソースの作成には必須です。

4. 重要プロパティと詳細プロパティ

データ・ソースの個々のプロパティの追加の詳細を定義します。最小プロパティまたは重要プロパティのどちらとしても定義されていないプロパティは、デフォルトで、詳細プロパティとして扱われます。重要プロパティは、ユーザー・インターフェース内のプレビュー・カード上または「リスト」タブ上に、最小プロパティとともに表示されます。詳細プロパティは、追加の情報を要求したときに詳細プロパティ・ウィンドウ内に表示されます。プロパティにユーザー・インターフェース用のラベルを割り当てることができます。プロパティに関連付けられたデータを処理および表示する方法に関する指示を指定できます。このステップは、データ・ソースの作成には必須です。

5. セキュリティ

ポータル・グループまたはユーザーに、データへの適切なアクセス権限およびデータ・ソースに対する許可特権を割り当てます。例えば、特定のユーザーまたはユーザー・グループに、データ・ソースからの項目の表示を許可するには、読み取り専用権限を定義します。

6. ルーティング

データ・ソースの個々のプロパティに基づいて、ソリューションによって受信されるデータを処理するためのルーティング指示を割り当てます。データは、ソリューション全体、重要業績評価指標 (KPI)、選択された標準操作手順、または事前定義された統合トピックのいずれかにルーティングできます。

1.6.0.1 **1.6.0.2** 関連トピックにもデータをルーティングできます。

7. アクション

1.6 **1.6.0.1** 使用可能なアクションから、データ・ソースに関連付けられたデータ項目に対して実行することのできる一連のアクションを選択します。

1.6.0.2 「ソリューション管理」ビュー内のコンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、データ・ソースにアクションを割り当てることができます。詳しくは、『コンポーネントのカスタマイズ』セクションを参照してください。

これらのアクションは、関連付けられたデータ項目のプレビュー・カード上の「追加のアクション」メニューに表示されます。

8. 外観

データ・ソースからのデータをマップ上で表すには、マップ上のポイントの位置を表すアイコンを割り当てます。ポイントの表現以外の図形の形式には、色スタイルを割り当てます。色スタイルは、最小プロパティで選択した図形の形式情報に関連付けて使用されます。式を使用して、データ・ソースからの個々のプロパティに基づいて、データ・ソースに割り当てられた外観のスタイルを変更することもできます。必要に応じてマップ上でデータ項目の表示を有効にするには、項目の外観に関する情報を入力して、このステップを完了します。この割り当ては、ステップ 3 で選択されたマップ位置および図形の形式の設定によって異なります。アイコンの色は「フィルター」パネル構成によって設定されるため、アイコンは形状の色の設定の影響を受けません。

関連概念:

164 ページの『ソリューション用のデータ準備に関するガイドライン』

IBM Intelligent Operations Center のマップやリストに必要なデータを表示してフィルターに掛けるために、データ・ソースでデータを準備します。その後、「ソリューション管理」ビューでデータ・ソースを構成します。

169 ページの『データ項目のルーティング』

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を処理して、情報の表示方法を決定します。

163 ページの『データ・ソースとの統合』

データ・ソースは、IBM Intelligent Operations Center と外部システムとの間で情報をやり取りするために使用されます。

関連タスク:

195 ページの『コンポーネントのカスタマイズ』

ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズするために、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成することができます。既存のコンポーネントをカスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。例えば、特定のシステム・コンポーネントに対して、既存のプレビュー・カードを新規のカスタマイズされたプレビュー・カードで置き換えることができます。

データ・ソースの作成

管理者は、データ・ソース・ツールを使用して、データ・ソースを追加および構成できます。

始める前に

データ・ソースに含まれるデータが、システムが受信できる形式であり、必要に応じて処理および更新できることを確認します。

このタスクについて

データ・ソース・ツールでデータ・ソースの作成に必須なのは、最初の 4 つのタブのみです。残りのタブは、システム内でデータ・ソースを作成するためのオプションのタブであるため、後で完了できます。データ・ソース構成を後で完了する場合は、ステップ 11 (116 ページ) の終了時に情報をメモしておきます。

データ・ソース・ツール内でアスタリスクが付いているフィールドは、常に必須です。ほとんどのフィールドではシステムによってデフォルトが提供されますが、いくつかのフィールドではユーザー入力が必要です。

ユーザー・インターフェース内でラベルとして表示されるテキストを含む任意のフィールドに対して、翻訳済みテキスト・オプションを指定できます。ラベルのデフォルト・テキストを入力します。次に、サポートされている言語のうち、いずれかの必要な言語のテキストを入力します。表示される言語は、ブラウザーで選択したロケールによって決まります。ユーザー・プロファイルで言語設定が指定されている場合は、ユーザー・プロファイルの設定がブラウザーの言語設定をオーバーライドします。

+ 共通アラート・プロトコル (CAP) をデータ収集の形式として選択する場合、データ・ソースを介して受信する CAP メッセージが地理空間情報マップまたはロケーション・マップに表示されることを指定できます。CAP の指定で定義されるエレメントは、データ・ソース・プロパティにマップされます。一部のデータ・ソース・オプションは事前選択されており、一部のデータ・ソース・プロパティは自動的に CAP エレメントにマップされます。これらの自動設定は変更できません。

手順

以降の手順について詳しくは、セクション内の後続のトピックを参照してください。

1. データ・ソース構成ツールにアクセスするには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「データ・ソース」をクリックします。
2. データ・ソースを作成する手順を指示するデータ・ソース・ツールを開始するには、「作成」をクリックします。
3. 「収集」タブで、以下のいずれかのデータ・ソース収集方法を選択して、データ・ソースに接続するために必要な情報を入力します。

CSV ファイルをアップロード

1.6 **1.6.0.1** ディレクトリー・パスに対して、/opt/IBM/ioc/csv を入力します。CSV ファイルをアップロードするには、事前にアプリケーション・サーバー上の /opt/IBM/ioc/csv ディレクトリーに CSV ファイルをコピーする必要があります。

1.6.0.2 アップロードする CSV ファイルの場所を参照します。選択した CSV ファイルが、アプリケーション・サーバー上の該当するディレクトリーにコピーされます。

データベースに接続

ホスト名または IP アドレス、ポート、ユーザー ID、パスワード、データベース名、およびデータベース表を入力します。

+ 共通アラート・プロトコル (CAP)

CAP メッセージを受信するデータ・ソースを作成するには、CAP メッセージを地理空間情報マップまたはロケーション・マップに表示するための適切なオプションを選択します。

1.6.0.1 **1.6.0.2** ユーザー・インターフェース・エントリー

マップ、リスト、または REST API のみのいずれかでデータ項目を投入するために使用できるデータ・ソースを作成するには、それらのオプションのいずれかを選択してください。それらのオプションのいずれかを選択する場合、データ・ソース・プロパティーはすべて事前に割り当てられます。外部ソースに接続されないデータ・ソースが作成されます。

- 投入されたデータ項目を地理空間情報マップ上に表示したい場合は、「**地理空間情報マップ用のユーザー・インターフェース・エントリー**」を選択します。ロケーションは、事前割り当てテキスト (WKT) 形式ストリングに含まれています。
- 投入されたデータ項目をロケーション・マップ上に表示したい場合は、「**ロケーション・マップ用のユーザー・インターフェース・エントリー**」を選択します。エリア・プロパティーがデータ・ソースに割り当てられます。

4. 「次へ」をクリックして、「基本」タブに移動します。
5. ご使用のデータ・ソースに必要な基本情報を指定します。名前と固有 ID を入力する必要があります。説明はオプションです。一般情報フィールドで、デフォルトを受け入れるか、設定を変更します。
6. 「次へ」をクリックして、「最小プロパティー」タブに移動します。
7. 各最小プロパティー・フィールドで、データ・ソースからのプロパティーを選択して、システムが必要とする最小プロパティーに割り当てます。必要に応じて、データ・ソースのデフォルト設定を変更します。
8. 「次へ」をクリックして、「重要プロパティーと詳細プロパティー」タブに移動します。
9. データ・ソース・プロパティー・リストから、重要プロパティーとして定義するプロパティーを選択します。必要に応じて、データ・ソースの他のプロパティー特性を定義します。
10. 必要に応じて「プロパティー詳細」ボックス内のフィールドを入力するか、デフォルトを受け入れます。
11. オプション: 残りのタブで、変更するフィールドを選択します。以下のタブ上のフィールドに入力できます。

- セキュリティー
- ルーティング
- **1.6** **1.6.0.1** 「アクション」
- 外観

注: データ・ソースのセキュリティーを構成しなかった場合、デフォルトでは、データ項目を表示するアクセス権を持つのは管理者のみです。データ・ソースに対してポイント図形形式を選択し、外観を構成しなかった場合、データ・ソースからのデータ項目はユーザー・インターフェース内に表示されません。

1.6.0.2 「ソリューション管理」ビュー内のコンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、データ・ソースにアクションを割り当てることができます。詳しくは、『コンポーネントのカスタマイズ』セクションを参照してください。

12. ソリューションにデータ・ソースを追加するには、「OK」をクリックします。

タスクの結果

管理ビュー内のデータ・ソースのリストに、追加したデータ・ソースが表示されます。このリストは、データ・ソースの構成および「フィルター」パネルの構成のために使用できます。

次のタスク

後でデータ・ソースの構成を更新または完了できます。マップ上でデータ項目の表示を有効にするには、操作ビューの「フィルター」パネルで、データ・ソースが表示されるように構成します。「**構成ツール** > 「フィルター」パネル」をクリックします。「フィルター」パネルの構成について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連概念:

130 ページの『「フィルター」パネルの構成』

「ソリューション管理」ビューで、データ・ソースをどのようにグループ化するかを決定できます。次に、グループごとに、「フィルター」パネル内に表示されるペインを構成できます。選択したデータ・ソースがペイン内にリストされます。

関連タスク:

195 ページの『コンポーネントのカスタマイズ』

ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズするために、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成することができます。既存のコンポーネントをカスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。例えば、特定のシステム・コンポーネントに対して、既存のプレビュー・カードを新規のカスタマイズされたプレビュー・カードで置き換えることができます。

関連情報:



OASIS 共通アラート・プロトコル・バージョン 1.2

データ・ソース構成の更新

管理者は、データ・ソースの設定を更新することができます。

このタスクについて

既存のデータ・ソースは、「データ・ソース」構成ビューのサイド・パネル内にリストされます。データ・ソースを選択し、更新可能なタブおよびフィールドに入力することができます。変更できない既存のデー

タ・ソースの部分に関連するフィールドは、編集できません。「収集」タブで編集できるのは、データ受信装置用のソース・データベース・パスワードだけです (該当する場合)。「最小プロパティ」タブで編集できるフィールドは、インストールされている IBM Intelligent Operations Center のバージョンによって異なります。

+ 「重要プロパティと詳細プロパティ」タブで編集できるのは、ラベルの変換後の値だけです。

手順

データ・ソース構成の更新方法について詳しくは、セクション内の後続のトピックを参照してください。

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「データ・ソース」をクリックします。
2. 変更するデータ・ソースを選択します。
3. 変更するタブおよびフィールドを選択します。以下のタブ上のフィールドに入力できます。

- 基本
- 最小プロパティ
- セキュリティ
- ルーティング
- **1.6** **1.6.0.1** 「アクション」
- 外観

1.6.0.2 「ソリューション管理」ビュー内のコンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、データ・ソースにアクションを割り当てることができます。詳しくは、『コンポーネントのカスタマイズ』セクションを参照してください。

4. 更新されたデータ・ソース構成を保存します。

タスクの結果

管理ビュー内のデータ・ソースのリストで、更新されたデータ・ソースにアクセスできます。このリストは、データ・ソースの構成および「フィルター」パネルの構成のために使用できます。データ・ソースが「フィルター」パネル上に表示されるように構成されている場合は、ブラウザを最新表示した後で、「フィルター」パネル上で、更新されたデータ・ソースにアクセスできます。「フィルター」パネルの構成について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連概念:

130 ページの『「フィルター」パネルの構成』

「ソリューション管理」ビューで、データ・ソースをどのようにグループ化するかを決定できます。次に、グループごとに、「フィルター」パネル内に表示されるペインを構成できます。選択したデータ・ソースがペイン内にリストされます。

データ・ソースの基本設定

「基本」タブ上で設定を選択して、データ・ソースに適した基本的な情報の入力および選択を行います。

選択するオプションに応じて、関連するフィールドのみが表示されます。

表 30. 「基本」タブ上のフィールドの説明

フィールド	説明
データ・ソース・ラベル	データ・ソースの名前。この名前は、ユーザー・インターフェース全体でこのデータ・ソースに付加されるデフォルト・ラベルです。
データ・ソースの固有テキスト ID	このデータ・ソースに固有のテキスト・ストリング。このストリングは、「データ・ソース・ラベル」フィールドに入力したストリングと同じにすることができます。
説明	データ・ソースの説明。このフィールドの入力はオプションです。
分析対象のデータ	データが分析プロセスで使用されるかどうかを示します。詳しくは、ご使用のソリューションに固有の資料を参照してください。 注: このオプションは、IBM Intelligent City Planning and Operations に適用されます。
1.6.0.1 1.6.0.2 境界のデータ	データ・ソースを名前付きエリアのタイプとして選択できるようにしたい場合は、このオプションに対して「はい」を選択します。このオプションの値は、共通アラート・プロトコル (CAP) データ・ソースの場合、またはロケーション・マップデータ・ソースの場合は、「いいえ」に事前選択されています。 SQL ファイルから名前付きエリアのデータをインポートするには、データ・ソースを作成する前に、名前付きエリアのデータを SQL ファイルに挿入する必要があります。データ・ソースが作成された後に、名前付きエリア・タイプのデータ・ソースで更新データがポーリングされることはありません。詳しくは、『SQL を使用した名前付きエリアの定義』トピックを参照してください。
資産またはリソース・データ	データが資産またはリソース関連プロセスで使用されるかどうかを示します。詳しくは、ご使用のソリューションに固有の資料を参照してください。 注: このオプションは、IBM Intelligent City Planning and Operations に適用されます。
1.6.0.1 1.6.0.2 関連のデータ	データ・ソースからのデータを関連に使用するかどうかを示します。
1.6.0.1 1.6.0.2 レポート・モデル	データ・ソースを Cognos Framework レポート・モデルに含めるかどうかを示します。

表 30. 「基本」タブ上のフィールドの説明 (続き)

フィールド	説明
ポーリング間隔	<p>更新を確実に受信するためにデータ・ソースをポーリングする間隔。この設定は、システムがデータベースで新規データをポーリングする頻度を示します。初期の詳細を受け入れた後で更新をポーリングしない場合は、値 0 を設定します。</p> <p> ポーリング間隔の値は、CAP データ・ソースには使用されません。</p> <p>1.6.0.1 1.6.0.2 ポーリング間隔の値は、ユーザー・インターフェース・エントリーのデータ・ソースには使用されません。</p>
アーカイブ間隔	<p>データがシステム内に保管される期間を示すデータ・ソースのアーカイブ間隔。この期間の終了時には、データを削除およびバックアップするために、データベース・スクリプトが実行されます。</p>

関連タスク:

1.6.0.1 **1.6.0.2** 167 ページの『SQL を使用した名前付きエリアの定義』
 多数の名前付きエリアを含んだ名前付きエリア・タイプのデータ・ソースを定義することができます。マップ上で各名前付きエリアのポリゴンを個別に描く代わりに、SQL 表を使用して名前付きエリア・ポリゴンを定義できます。その後、データベースに接続するデータ・ソースを作成して、SQL 表から名前付きエリア・データを収集します。

データ・ソースの最小プロパティの設定

データ・ソースからのプロパティを各最小プロパティに割り当て、データに適した設定を選択します。

前のタブで選択したオプションに応じて、一部のプロパティのみを編集できる場合があります。また、一部の値の事前定義または事前選択が行われている場合があります。

1.6.0.1 **1.6.0.2** ユーザー・インターフェース・エントリーのデータ・ソースの場合、すべてのプロパティが事前に割り当てられます。

表 31. 「最小プロパティ」タブ上のフィールドの説明

フィールド	説明
名前	<p>ユーザー・インターフェース内に表示されるデータ項目の名前を提供するプロパティ。プロパティを選択しなかった場合は、システムが名前を生成します。</p> <p> 共通アラート・プロトコル (CAP) データ・ソースの場合、プロパティは headline CAP エlement にマップされます。</p>

表 31. 「最小プロパティ」タブ上のフィールドの説明 (続き)

フィールド	説明
<p>エリア名</p>	<p>ロケーション・マップにデータ項目を表示する場合に、エリア名を提供するプロパティ。このフィールドでプロパティを選択すると、地理空間情報マップにデータ項目が表示されません。</p> <p> ロケーション・マップの CAP の場合に限り、プロパティは areaId 値にアップされます。この値は、area エlement内の CAP geocode エlementにあります。</p>
<p>1.6.0.2 エリア・マッピング</p>	<p>エリア・マッピングでは、着信データ項目が、名前付きエリア・タイプのいずれかのデータ・ソースのデータ項目の境界内に含まれているかどうかが判別されます。名前付きエリア・タイプとして使用可能なデータ・ソースから、1つ以上のデータ・ソースを割り当ててください。</p>
<p>開始日時、終了日時</p>	<p>データ項目の開始時刻と終了時刻を示す値を提供するプロパティ。開始日時の値は、「フィルター」パネルに従ってデータ項目をフィルタリングするために使用できます。</p> <p>タイム・スタンプ形式またはストリング形式を選択できます。システム・デフォルトでは、標準リレーショナル・データベース・タイム・スタンプ形式での時刻と日付が预期されます。フィールド・タイプを「ストリング」に設定した場合、「時間帯およびその他」タブでストリング形式を指定する必要があります。これらの形式の設定について詳しくは、「時刻形式」と「日付の形式」のフィールドの説明を参照してください。いくつかのデータ・ソース・タイプの場合、「フィールド・タイプ」の値に「タイム・スタンプ」オプションが事前に選択されています。</p> <p> CAP データ・ソースの場合、「開始日時」の値は、onset CAP エlementにマップされます。「終了日時」の値は、expires CAP エlementにマップされます。</p>
<p>最終更新日時</p>	<p>データ項目が更新された時刻を含むプロパティ。データ・ソース内のこのプロパティの値が、システムによって保管されている値よりも新しい場合は、システム内に既に保管されているデータへの更新がトリガーされます。</p> <p> CAP データ・ソースの場合、データ受信装置からの合成値が割り当てられます。</p>

表 31. 「最小プロパティ」タブ上のフィールドの説明 (続き)

フィールド	説明
ロケーション形式	<p>データ・ソースがマップ・マーカのデータを提供する形式。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「緯度および経度」を選択して、単一ポイント・マーカの座標を指定します。 「形状」を選択して、「時間帯など」タブにリストされた図形の形式オプションのデータを指定します。 <p>+ CAP データ・ソースの場合、「形状」オプションには、「ロケーション形式」の値が事前に選択されています。</p> <p>1.6.0.1 1.6.0.2 「基本」タブで「境界のデータ」オプションを選択した場合、「ロケーション形式」の値は「形状」に事前に割り当てられます。</p>
形状	<p>形状データを保管するデータ・ソース内のプロパティ。</p> <p>「ロケーション形式」フィールドで形状オプションを選択する場合は、ここでの入力が必要で、形状データが別個のデータ・ソース内に保管されている場合は、参照値を含むデータ・ソース内のプロパティを、このフィールドで選択します。この値は、「名前の参照」フィールド内のプロパティの値との一致を提供するためのものです。</p> <p>+ CAP データ・ソースの場合、「形状」の値は location に設定されており、location は area CAP エlement にマップされます。ただし、location は必須ではありません。area 値が CAP メッセージで指定されていない場合、location 値は null に設定され、CAP メッセージはマップに表示されません。CAP メッセージは、「ルーティング」タブで定義するいずれかのタブと一致する場合、引き続き適切な宛先にルーティングされます。</p>
ロケーションの参照、名前の参照	<p>形状データが別個の参照データ・ソース内に保管されている場合に必要データベース表とプロパティの名前。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「名前の参照」フィールドに、「形状」フィールド値と一致する値を含むプロパティを入力します。 「ロケーションの参照」フィールドに、対応するデータベース表の名前を入力します。 <p>一致する値を含むプロパティによって、データベース表の行が識別されます。システムは、Location という名前のプロパティ内でその行を参照して、形状データを見つけて、参照データ・ソースには、ここで提供したデータベース表の情報以外には、「収集」タブ上で提供したデータベース情報が適用されます。</p>

表 31. 「最小プロパティ」タブ上のフィールドの説明 (続き)

フィールド	説明
<p>図形の形式</p>	<p>マップ上のマーカーの形式。「ロケーション形式」での選択内容に基づいて、ここで適切な図形を選択します。このフィールドでの選択内容に応じて、「外観」タブ上でアイコンまたは色スタイルのいずれかを割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ポイント・マーカーを選択し、アイコンを割り当てます。 • 形状マーカーを選択し、色スタイルを割り当てます。 <p>+ CAP データ・ソースの場合は、「すべて」を選択します。図形の形式は、CAP メッセージの内容によって決定されます。CAP メッセージには、ポイントまたはポリゴンのいずれかが含まれていることがあります。</p> <p>1.6.0.1 1.6.0.2 「基本」タブ上の「境界のデータ」オプションで Yes を選択した場合、「図形の形式」の値は「ポリゴン」に事前に割り当てられます。</p>
<p>評価日</p>	<p>データ項目が評価される予定の日付。一部のソリューション・アプリケーションには、データ評価が組み込まれています。詳しくは、ご使用のソリューションに固有の資料を参照してください。</p>
<p>タイム・ゾーン・オフセット</p>	<p>データ・ソースの時間帯がシステム時間帯と異なる場合に適用される調整値を含むプロパティ。値の単位は分です。値は 30 で割り切れる必要があります (30、60、90 など)。調整値は「開始日時」と「終了日時」プロパティの時刻値にのみ適用されます。サンプルのシナリオでは、以下の要件を調整します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • データ・ソースのステージング表プロパティに含まれる開始と終了の時刻値は、GMT + 5 時間として表されている。 • ソリューションのターゲット表プロパティに含まれる時刻値は、GMT + 1 時間として表されている。 <p>値 240 を入力して、240 分 (4 時間) の調整を適用します。</p> <p>+ CAP データ・ソースの場合、「時間帯オフセット」プロパティを編集することはできません。このプロパティは事前に定義されています。</p>
<p>時刻形式、日付の形式</p>	<p>データ・ソースによって時刻ストリング値と日付ストリング値が提供される形式。この形式は、このトピックの最後のリンクに指定されている規格に準拠している必要があります。「日時」タブで日時フィールドの型を「ストリング」に設定した場合、ここで形式を入力します。</p>

関連概念:

175 ページの『データ・ソースのタイム・スタンプの同期』

データ受信側がデータ・ソースの更新情報を受信すると、更新されたデータ・ソースにタイム・スタンプが適用されます。タイム・スタンプを決定するために使用される方法は、いくつかの要因に応じて決まりません。

関連情報:



サポートされている日時の形式

データ・ソースの重要プロパティと詳細プロパティの設定

「重要プロパティと詳細プロパティ」タブで、データ・ソースに適した特定のプロパティのオプション・パラメーターを設定します。

最小プロパティと重要プロパティは、ユーザー・インターフェース内の「リスト」タブおよびマップ・プレビュー・カード上に自動的に表示されます。デフォルトでは、各データ・ソース・プロパティがソリューション内の最小プロパティまたは重要プロパティに割り当てられていない場合、そのプロパティは詳細プロパティです。詳細プロパティは、追加の情報を確認するためにプレビュー・カードをクリックしたときのみ表示されます。

「重要プロパティと詳細プロパティ」タブで、データ・ソースからのプロパティを選択し、表示されたフィールドで、そのプロパティで必要となるパラメーターを設定します。前のタブで選択したオプションに応じて、一部のプロパティのみを編集できる場合があります。また、一部の値の事前定義または事前選択が行われている場合があります。

+ 共通アラート・プロトコル (CAP) データ・ソースの場合、指定に含まれているすべての CAP エレメントがデータ・ソース・プロパティとしてリストされます。ただし、各プロパティで編集できるのは、「ユーザー・インターフェース・ラベル」フィールドの値だけです。次のリストに示すプロパティは重要プロパティであり、残りのプロパティは詳細プロパティです。

- areaId (ロケーション・マップの CAP のみ)
- category
- certainty
- event
- msgType
- sender
- severity
- urgency

1.6.0.1 **1.6.0.2** ユーザー・インターフェース・エントリーのデータ・ソースの場合、「ユーザー・インターフェース・ラベル」の値を除き、すべてのプロパティが事前に割り当てられます。

表 32. 「重要プロパティと詳細プロパティ」タブ上のフィールドの説明

フィールド	説明
ユーザー・インターフェース・ラベル	ユーザー・インターフェース全体で使用される、重要プロパティまたは詳細プロパティに割り当てられる名前。 「リスト」タブおよびプレビュー・カードに表示される最小プロパティの名前は、システムにより設定され、変更できません。ただし、別のアプリケーションで使用される最小プロパティのラベルは指定できます。詳しくは、ご使用のソリューションに固有の資料を参照してください。
重要プロパティ	重要状況を詳細プロパティに割り当てるオプション。重要プロパティは、ユーザー・インターフェース内の「リスト」タブおよびマップ・プレビュー・カード上に自動的に表示されます。重要状況を最小プロパティに割り当てることはできません。
データ型	プロパティのデータ値が保管される形式。許可されるオプションのリストから選択します。選択した形式がプロパティの型と互換性があることを確認してください。例えば、優先順位番号を含むプロパティには、Integer のデータ型が割り当てられます。
長さ	データ型が「文字」であるプロパティのストリング値で許可される最大長。システムの上限は 32704 文字です。このフィールドが表示されるのは、「データ型」フィールドで「文字」を選択した場合のみです。
「精度」、「小数位」	データ型が「10 進数」であるプロパティの値で許可される精度および小数点以下の桁数。例えば、123.45 という値の精度は 3 桁 (123) であり、小数点以下の桁数は 2 (45) です。プロパティ値の全長は、精度の桁数に小数点以下の桁数をプラスしたものに等しく、1 から 31 桁の範囲内になければなりません。値に 0 から 31 の小数点以下の桁数を入れることができ、有効値は、精度が 0 桁で、小数位点以下の桁数が 31 の数値です。「精度」フィールドと「小数位」フィールドが表示されるのは、「データ型」フィールドで「10 進数」を選択した場合のみです。
フィルタリングのために最適化	プロパティに関連するデータ項目の効率的なフィルタリングのためにプロパティの最適化を指定するオプション。「はい」を選択すると、データベース索引が作成されます。この最適化は、(名前などの) ソートや検索に頻繁に使用されるプロパティで役立ちます。
分布図で使用	プロパティ値をグラフで使用することを示すオプション。詳しくは、ご使用のソリューションに固有の資料を参照してください。 注: このオプションは、IBM Intelligent City Planning and Operations に適用されます。

表 32. 「重要プロパティと詳細プロパティ」タブ上のフィールドの説明 (続き)

フィールド	説明
索引 ID として使用	<p>データ項目の固有キー ID の全体またはその一部としてプロパティ値を割り当てるオプション。索引 ID として使用される 1 つ以上のプロパティを指定してデータ・ソースを定義できます。システム内のデータ項目を更新するには、データ・ソースからの更新がこの ID と一致していなければなりません。</p> <p>注: データ・ソースが索引 ID として使用されるプロパティで定義されていない場合、データ・ソースへのすべての更新は、システム内に新規データ項目として保管されません。</p>
更新可能	<p>システムによってプロパティ・データを更新できることを指定するオプション。このオプションは、プロパティが索引 ID として選択されている場合には選択できません。</p>
列挙値をフィルタリング	<p>実行時に受信されたこのプロパティの値に基づいて、追加のデータ項目フィルターをユーザーに提供するオプション。このフィールドが「はい」に設定されている場合、フィルター・パネルには、これらの値がフィルター・オプションとして表示されます。このフィールドがデフォルトの「いいえ」に設定されている場合、このプロパティの値は、ユーザーにフィルター・オプションとして提供されません。</p>
許容される値	<p>ユーザーが追加のフィルター基準として選択できる値を入力します。フィルター・パネルには、フィルター・オプションとして入力する値が表示されます。コマンドで区切られた値を入力し、値の中でスペースが意図したとおりに使用されていることを確認します。許容される値を構成時に入力できるのは、「列挙値をフィルタリング」が「いいえ」に設定されている場合のみです。</p> <p>注: すべてのプロパティで「列挙値をフィルタリング」が「いいえ」に設定されていて、許容される値がここでデータ・ソースに対して入力されていない場合、ユーザーには、フィルター・パネル上の「その他」オプションは表示されません。データ・ソース・ペイン上で選択可能な追加のフィルター基準はありません。</p>

関連情報:

 OASIS 共通アラート・プロトコル・バージョン 1.2

データ・ソースの保護

データ・ソースのために、ユーザーまたはグループに、データへの適切なアクセス権限および許可特権を割り当てます。

このタスクについて

ユーザー・インターフェース内のマップまたはリスト上で、データ・ソースからのデータ項目へのユーザー・アクセスを許可するには、必要なアクセス・レベルを割り当てます。提供されるリストには、システム

の管理者によって定義されたユーザーおよびグループが含まれています。デフォルトのアクセス権限は、データ・ソースの作成者の場合は読み取り/書き込み権限のみであり、その他のユーザーの場合はアクセス権なしです。

1.6.0.1

1.6.0.2

管理者は、すべてのデータ・ソースに対する読み取り/書き込み権限を持っています。

読み取り専用権限を持つユーザーまたはグループは、データ項目を表示でき、更新可能なフィールド内のデータ項目を更新できます。読み取り/書き込み権限を持つユーザーまたはグループは、読み取り専用権限を持つユーザーと同じアクセス権限を持ちますが、「ソリューション管理」ビューにアクセスできる場合には、データ・ソースを構成することもできます。

手順

1. データ・ソース構成ツールにアクセスするには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「データ・ソース」をクリックします。
2. 「セキュリティ」タブで、名前からのリストからユーザーまたはグループを選択します。
3. ユーザーまたはグループの適切なアクセス・レベルを選択します。
4. データ・ソース・ツールで、別のタブに移動するか、「OK」をクリックして、システムで使用するためのデータ・ソースを保存します。
5. 「保存」をクリックして、既存のデータ・ソースに更新を適用します。

関連資料:

104 ページの『ユーザー役割グループと許可権限』

IBM Intelligent Operations Center では、ビューおよびビューに含まれる機能にアクセスするための権限のセットは、各ユーザー役割グループに関連付けられています。

データ・ソースからのデータのルーティング

データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

このタスクについて

特定の基準に対して選択される式を定義して、データ項目をルーティングできます。次に、以下の宛先オプションのいずれかにデータをルーティングできます。

- システム全体にデータをルーティングするには、「**Intelligent Operations Center**」を選択します。
- 値および KPI 構成に応じて、KPI 処理にデータをルーティングするには、「**重要業績評価指標**」を選択します。
- ソリューション内で定義されている標準操作手順にデータをルーティングするには、「**標準操作手順**」を選択します。**1.6.0.2** 一致するレコードごとに標準操作手順の新規インスタンスを起動するかどうかを選択することができます。
- 以前に定義された WebSphere Application Server 統合トピックにデータをルーティングするには、「**統合トピック**」を選択します。
- **1.6.0.1** **1.6.0.2** 「**相関トピック**」を選択して、データが相関に使用されるトピックにデータをルーティングします。データを相関トピックにルーティングしたい場合は、「**基本**」タブの「**相関のデータ**」オプションに対して「はい」を選択する必要があります。

手順

1. データ・ソース構成ツールにアクセスするには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「データ・ソース」をクリックします。
2. 「ルーティング」タブで、データ・ソースからのプロパティのルーティング詳細を追加するには、以下のサブステップを実行します。追加するルーティング式ごとに、以下のサブステップを繰り返します。
 - a. 「ルーティング式の追加」をクリックします。
 - b. 「プロパティ」、「操作」、および「基準」フィールドに入力して、式を定義します。その結果の条件で、ルーティングされるデータが選択されます。
 - c. システムがデータをルーティングして処理できるように、「ルーティング先」オプションを選択します。
3. 複数の式が同じターゲットにルーティングされている場合は、「式ロジック」フィールドで定義されている全体の式ロジックが正しいことを確認します。システムは、データを処理するときに、以下の式ロジックを使用します。
 - 式の組み合わせに対して論理 AND 演算を適用するには、「すべての式が true でなければならない」を選択します。
 - 式の組み合わせに対して論理 OR 演算を適用するには、「いずれかの式が true でなければならない」を選択します。
4. データ・ソース・ツールで、別のタブに移動するか、「OK」をクリックしてシステム内で使用されるようにデータ・ソースを保存します。
5. 「保存」をクリックして、既存のデータ・ソースに更新を適用します。

注: 各ルーティング式の横に削除ボタンがあります。式を削除するには、削除ボタンをクリックしてから保存します。

関連概念:

169 ページの『データ項目のルーティング』

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を処理して、情報の表示方法を決定します。

510 ページの『データ・ソース・ルーティングの更新がフィルタリング後の結果に反映されない』
データソースのルーティング基準を編集した場合に、更新後のルーティング基準を満たすデータ項目が表示されるまでに、数回のリフレッシュ・サイクルが必要となる場合があります。

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されます。

154 ページの『標準操作手順の構成』

標準操作手順とは、1 つのプロセスまたは手順に関連するすべてのステップおよびアクティビティを記述した、一連の指示です。複雑で予測不能なイベントに対して、組織が一貫性と計画性のある高品質の対応を実施するには、標準操作手順が不可欠です。

データ・ソースへのアクションの割り当て

1.6

1.6.0.1

データ・ソースから受信するデータ項目に適用するユーザー・アクションを選択できます。デフォルトで適用されているアクションもあります。

このタスクについて

提供されたアクションのデフォルト・リストから、ユーザー・インターフェースのオプションとして必要なアクションを選択します。選択されたアクションは、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示されます。

1.6.0.2 「ソリューション管理」ビュー内のコンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、データ・ソースにアクションを割り当てることができます。詳しくは、『コンポーネントのカスタマイズ』セクションを参照してください。

手順

1. データ・ソース構成ツールにアクセスするには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「データ・ソース」をクリックします。
2. 「アクション」タブで、該当する「使用?」オプションを選択して、「使用可能なアクション」リストにある各アクションが使用可能かどうかを変更します。アクションを使用可能にするには、「はい」を選択します。
3. データ・ソース・ツールで、別のタブに移動するか、「OK」をクリックしてシステム内で使用されるようにデータ・ソースを保存します。
4. 「保存」をクリックして、既存のデータ・ソースに更新を適用します。

関連タスク:

203 ページの『データ・ソースに対するカスタム・アクションの定義』

データ・ソース構成ツールの「アクション」タブに使用可能なアクションとして表示される、カスタム・アクションを定義できます。データ・ソースにカスタム・アクションを割り当てると、データ・ソースのプレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに、そのアクションが表示されます。

195 ページの『コンポーネントのカスタマイズ』

ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズするために、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成することができます。既存のコンポーネントをカスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。例えば、特定のシステム・コンポーネントに対して、既存のプレビュー・カードを新規のカスタマイズされたプレビュー・カードで置き換えることができます。

マップ上のデータの外観の構成

データ・ソースからのデータ項目を表すために、マップ・マーカースにアイコンまたは色のいずれかを割り当てます。データ・ソース内にあるプロパティの値に従ってマップ・マーカースの外観を変更するための条件を設定できます。

始める前に

データ項目は、マップ上の 1 つのポイントにあるアイコン、またはマップ上の複数のポイントにある複数のアイコンのいずれかで表すことができます。また、データ項目は、他のさまざまな図形 (1 つ以上の線、または 1 つ以上の形状) のいずれかで表すこともできます。「最小プロパティ」タブで、マップ上でデータを表すためのマーカースの図形の形式を指定します。「最小プロパティ」タブで、形状データ値についてロケーションの参照も指定できます。

このタスクについて

外観を構成して、マップ上でデータ・ソースからのデータ項目がどのように表示されるかを定義します。選択する図形の形式に応じて、アイコンを選択するか、色を定義することができます。

ポイント形式のマーカーにアイコンを割り当てることができます。ポイント以外の図形の形式のマーカーには、色スタイルを割り当てることができます。アイコンの色は、フィルター・パネル構成でデータ・ソースに割り当てられたカテゴリーによって制御されます。独自のアイコンをソリューションにアップロードする場合、アイコンは、Portable Network Graphics (PNG) 形式にする必要があります。

手順

1. データ・ソース構成ツールにアクセスするには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「データ・ソース」をクリックします。
2. 「外観」タブで、データを表すマップ・マーカーにアイコンまたは色スタイルのどちらを割り当てるかに応じて、「アイコン」または「スタイル」のいずれかをクリックします。

アイコン

マップ・マーカーとしてアイコンを割り当てるには、「使用可能なアイコン」フィールド内でアイコンを選択するか、「暗色アイコンのアップロード」および「明色アイコンのアップロード」をクリックして独自のアイコンをアップロードします。

注: ソリューション・インターフェースのどこでもアイコンを表示できるように、アイコンの暗色および明色の両方のバージョンをアップロードする必要があります。

スタイル

データ・ソース全体に色を割り当てるには、「データ・ソースのスタイル」フィールドで、色を選択します。「最小プロパティ」タブで選択した図形の形式に応じて、「線の色」または「塗りつぶす色」のいずれかで色を選択します。

注: ここで適用する色スタイルにより、フィルター・パネル構成で選択した色がオーバーライドされます。フィルター・パネル構成で選択した色は、ポイント・データにのみ適用されます。

3. オプション: データ・ソース内の特定のプロパティにスタイルを割り当てるには、以下の手順を実行します。
 - a. 「スタイル」タブで、「スタイルの追加」をクリックします。
 - b. 名前を入力します。
 - c. 色を選択します。
 - d. 色スタイルが使用される条件を制御する式を作成するには、「式へのスタイルの割り当て」をクリックします。
4. データ・ソース・ツールで、別のタブに移動するか、「OK」をクリックして、システムで使用するためのデータ・ソースを保存します。「保存」をクリックして、既存のデータ・ソースに更新を適用します。

関連概念:

205 ページの『データ項目のアイコン』

操作ビュー、状況ビュー、および「ソリューション管理」ビューで、データ項目を表す独自のアイコンを設計し、イメージ・ファイルをアップロードすることができます。アップロードするイメージ・ファイルは、いくつかの要件を満たしている必要があります。

「フィルター」パネルの構成

「ソリューション管理」ビューで、データ・ソースをどのようにグループ化するかを決定できます。次に、グループごとに、「フィルター」パネル内に表示されるペインを構成できます。選択したデータ・ソースがペイン内にリストされます。

各ペインに色を割り当てたり、フィルター・ペインが表示される順序を変更したりすることができます。「日付と時刻」ペイン内に表示される日付と時刻の範囲および休日を定義することもできます。

関連タスク:

115 ページの『データ・ソースの作成』

管理者は、データ・ソース・ツールを使用して、データ・ソースを追加および構成できます。

117 ページの『データ・ソース構成の更新』

管理者は、データ・ソースの設定を更新することができます。

148 ページの『分析定義の作成』

マップ上の地理的エリアに関連付けることができるデータ分析定義のパラメーターを構成します。分析では、マップ上にホット・スポットを表示することによって、データのパターンを示すことができます。

ペインの作成

以下の手順を実行して、「フィルター」パネル内に表示されるペインを作成します。次に、ペイン内に表示されるデータ・ソースを選択します。

手順

1. 「構成ツール > フィルター・パネル」をクリックします。
2. 「作成」をクリックします。
3. 「ペインの作成」ウィンドウで、ペインの詳細を指定します。
 - a. 「ペイン名」の値を入力します。
 - b. 「使用する色」パレットから、ペインに関連付ける色を選択します。このペインからのデータをフィルタリングすると、データ項目マーカーがこの色で表示されます。ただし、データ・ソースがマップ上のポイントの位置で表されない場合は、管理者がデータ・ソース構成ウィザードの「外観」タブで構成した色の設定によって、ユーザーがここで指定した色がオーバーライドされます。
 - c. 「使用可能なデータ・ソース」リストで、ペインに含める各データ・ソースをクリックした後、「選択した使用可能なデータ・ソースをこのペインに追加」アイコンをクリックして、それらのデータ・ソースを「このペインに組み込まれるデータ・ソース」リストに移動します。
 - d. 「このペインに組み込まれるデータ・ソース」リスト内のデータ・ソースを再配列するには、データ・ソースをクリックした後、「選択したデータ・ソースを下へ移動」アイコン、または「選択したデータ・ソースを上へ移動」アイコンをクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。ペインが作成され、ペイン名がペインのリストの末尾に表示されます。
4. 「フィルター」パネルのペインを位置変更するには、リスト内でその名前をクリックした後、「選択したペインを下に移動」アイコン、または「選択したペインを上へ移動」アイコンをクリックします。

関連タスク:

129 ページの『マップ上のデータの外観の構成』

データ・ソースからのデータ項目を表すために、マップ・マーカーにアイコンまたは色のいずれかを割り当てます。データ・ソース内にあるプロパティの値に従ってマップ・マーカーの外観を変更するための条件を設定できます。

ペインの変更

以下の手順を実行して、「フィルター」パネル内に表示されるペインを変更します。ペイン内に表示されるタイトルとデータ・ソース、およびデータ・ソース・グループに関連付けられた色を変更できます。

手順

1. 「構成ツール > フィルター・パネル」をクリックします。
2. 変更するペインの名前をクリックします。
3. 必要に応じて、ペインの詳細を以下のように変更します。
 - 「ペイン名」の値を編集します。
 - 「使用する色」パレットから、ペインに関連付ける色を選択します。このペインからのデータをフィルタリングすると、データ項目マーカがこの色で表示されます。ただし、データ・ソースがマップ上のポイントの位置で表されない場合は、管理者がデータ・ソース構成ウィザードの「外観」タブで構成した色の設定によって、ユーザーがここで指定した色がオーバーライドされます。
 - データ・ソースをペインに追加するには、「使用可能なデータ・ソース」リストでデータ・ソースをクリックした後、「選択した使用可能なデータ・ソースをこのペインに追加」アイコンをクリックして、そのデータ・ソースを「このペインに組み込まれるデータ・ソース」リストに移動します。
 - データ・ソースをペインから削除するには、「このペインに組み込まれるデータ・ソース」リストでデータ・ソースをクリックした後、「選択したデータ・ソースをこのペインから削除」アイコンをクリックして、そのデータ・ソースを「使用可能なデータ・ソース」リストに戻します。
 - 「このペインに組み込まれるデータ・ソース」リスト内のデータ・ソースを再配列するには、データ・ソースをクリックした後、「選択したデータ・ソースを下へ移動」アイコン、または「選択したデータ・ソースを上へ移動」アイコンをクリックします。
4. 「保存」をクリックします。
5. 「フィルター」パネルのペインを位置変更するには、リスト内でその名前をクリックした後、「選択したペインを下に移動」アイコン、または「選択したペインを上へ移動」アイコンをクリックします。

ペインの削除

以下の手順を実行して、「フィルター」パネルからペインを削除します。

手順

1. 「構成ツール > フィルター・パネル」をクリックします。
2. 削除するペインの名前をクリックします。
3. 「削除」をクリックし、確認ウィンドウで「OK」をクリックします。ペインが削除されたことを確認するメッセージが表示されます。

「保存済みフィルター」ペインまたは「お気に入り」ペインの編集

「フィルター」パネルに表示されている、「保存済みフィルター」ペインまたは「お気に入り」ペインを編集するには、以下の手順を使用します。保存済みフィルターまたはお気に入りを削除できます。

このタスクについて

インストールされている IBM Intelligent Operations Center のバージョンに応じて、ペインの名前は、「保存済みフィルター」または「お気に入り」です。

手順

1. 「構成ツール > フィルター・パネル」をクリックします。
2. 「保存済みフィルター」または「お気に入り」をクリックします。
3. 保存済みフィルターまたはお気に入りを削除するには、「削除」アイコンをクリックします。
4. 「保存」をクリックします。

日付と時刻および休日の範囲の定義

以下の手順を実行して、「フィルター」パネル内の「日付と時刻」ペインに表示される日付と時刻の範囲オプションおよび休日のオプションを定義します。例えば、週末、ラッシュ・アワー、営業時間、および祝日に基づいてデータを簡単にフィルタリングできるように、オプションを指定できます。

手順

1. 「構成ツール > フィルター・パネル」をクリックします。
2. 日付と時刻の範囲オプションを指定するには、「日付と時刻」タブをクリックします。
 - a. 日付と時刻のオプションを追加するには、「追加」をクリックします。
 - b. 追加された行で、以下の詳細を指定します。
 - 「名前」の値を入力します（「週末」など）。
 - 「開始曜日」リストから値を選択します（「金曜日」など）。
 - 「開始時刻」リストから値を選択します（「05:00pm」など）。
 - 「終了曜日」リストから値を選択します（「日曜日」など）。
 - 「終了時刻」リストから値を選択します（「09:00pm」など）。
3. 休日のオプションを指定するには、「休日」タブをクリックします。
 - a. 休日のオプションを追加するには、「追加」をクリックします。
 - b. 追加された行で、以下の詳細を指定します。
 - 「名前」の値を入力します（「2012年7月4日」など）。
 - 「日付」で、値を入力するか、カレンダーから日付を選択します（「07/04/2012」など）。
4. 日付と時刻または休日のオプションを削除するには、行の末尾にある「削除」アイコンをクリックします。
5. 行の追加、編集、および削除が完了したら、「保存」をクリックします。

地理情報マップの構成

「ソリューション管理」ビューで、ユーザーが使用可能なマップ、マップの初期中心点、およびマップのズーム・レベルを構成できます。

ユーザーは、運用ビュー (operations view)内の「マップ」タブで、「追加のアクション」メニュー内にリストされているオプションのいずれかを選択して、表示されている基本マップを変更できます。マップ上のパンおよびズームのコントロールを使用して、選択されたマップの位置およびズーム・レベルを制御できます。

管理者は、「ソリューション管理」ビューで地理空間情報マップをカスタマイズできます。

- デフォルトの基本マップ、マップ・メニュー、および「マップ」タブ上に表示できるマップ
- 使用可能な各マップのデフォルトのパンおよびズーム・レベル

関連概念:

421 ページの『「マップ」タブ』

「マップ」タブを使用して、地理情報マップに表される現在の情報を表示します。マップ上でマークが付いているデータ項目から情報を取得できます。「フィルター」パネルでデータ・ソースを選択し、ソリューションで使用可能なマップのリストから基本マップを選択します。

基本マップの管理

管理者は、ソリューションの基本マップを作成、編集、または削除できます。

このタスクについて

地理情報マップ・ツールには、「マップ」タブに表示するマップを作成、編集、または削除するためのアクションのメニューが用意されています。ソリューションの基本マップを作成するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「地理情報マップ」とクリックする。
2. 「作成」をクリックします。
3. ユーザー・インターフェースでマップに付加する名前を入力します。
4. 基本マップ・プロバイダーのタイプを選択し、そのプロバイダーで必須のフィールドに値を入力します。

XYZ ユーザー独自の Web マップ・タイル・サービスの URL、およびオプションとしてマップの適切な帰属を入力します。

OpenStreetMap

OpenStreetMap Web マップ・タイル・サービスの URL、およびオプションとしてマップの適切な帰属を入力します。

Google Google で必要となるレイヤー・タイプ (例えば、Terrain、Satellite、Hybrid など) を入力します。

5. このマップを「マップ」タブのデフォルト・マップとして割り当てるには、チェック・ボックスを選択します。
6. 「保存」をクリックします。

タスクの結果

運用ビュー (operations view)の「マップ」タブで、ソリューションに使用できるマップのリストにこの新規マップが表示されます。「マップ」タブでの表示用としてこのマップを選択できます。

マップをデフォルト・マップとして割り当てると、そのマップはデフォルトで「マップ」タブに表示されます。「マップ」タブの「追加のアクション」メニューで「リセット」をクリックして、表示するデフォルト・マップを選択します。

次のタスク

リスト内のマップは、編集または削除できます。マップを編集するには、必要なマップ名を強調表示し、「編集」をクリックします。「基本マップのプロパティ」ウィンドウは「新規基本マップの作成」ウィンドウと似ており、必要に応じてフィールドを編集することができます。

関連タスク:

『マップの中心およびズームの設定』

管理者は、ソリューションの地理情報基本マップの中心点座標およびズーム・レベルを設定できます。

マップの中心およびズームの設定

管理者は、ソリューションの地理情報基本マップの中心点座標およびズーム・レベルを設定できます。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「地理情報マップ」とクリックする。
2. 「基本マップ」タブで、操作するマップを選択し、「マップ・ロケーション」をクリックします。
3. マップ・コントロールを使用して、必要な中心点座標およびズーム・レベルを設定します。現在の設定は、マップの横の「緯度」、「経度」、および「ズーム・レベル」フィールドに表示されます。
4. 「保存」をクリックします。

タスクの結果

運用ビュー (operations view)の「マップ」タブでは、設定した中心点座標およびズーム・レベルがその基本マップの初期デフォルトとなります。

関連概念:

420 ページの『マップの制御』

マウスまたはキーボードを使用して、マップ内でカーソルを移動できます。

関連タスク:

134 ページの『基本マップの管理』

管理者は、ソリューションの基本マップを作成、編集、または削除できます。

表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定

1.6.0.2

マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。選択がクリアされたデータ・ソースのデータ項目が、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の両方にカウントされないようにすることができます。

手順

以下の手順は、ソリューション管理ビューで実行します。

- マップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定するには、**MaxFeaturesToRenderOnMap** システム・プロパティを構成します。
- マップとリストに返されるデータ項目の最大数を設定するには、**StatMaxAllowedFeaturesInResponse** システム・プロパティを構成します。

次のタスク

デフォルトでは、フィルター・パネルでデータ・ソースの選択をクリアしても、そのデータ・ソースのデータ項目は、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目にカウントされます。現在選択されていないデータ・ソースのデータ項目がカウントされないようにする場合は、

RemoveFeaturesOnDataSourceDeselect システム・プロパティの値を **true** に設定します。

RemoveFeaturesOnDataSourceDeselect システム・プロパティの値を **true** に設定すると、マップをパンおよびズームするときに、パフォーマンスが向上することがあります。しかし、選択をクリアしたデータ・ソースを再選択するときには、パフォーマンスが低下することがあります。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

KML オーバーレイの追加

1.6.0.2

KML ファイルには、IBM Intelligent Operations Center マップに追加できるレイヤーおよび機能のコレクションが含まれています。XML 形式のデータがある場合は、KML スキーマを使用して、データ・ソースなしでマップに機能を追加できます。管理者は、KML オーバーレイを基本マップに追加できます。

このタスクについて

KML オーバーレイをマップに追加するには、IBM Intelligent Operations Center の **KmlUr1s** システム・プロパティを構成します。「フィルター」パネル内の「マップ・オーバーレイ」ペインでレイヤーが表示される順序は、**KmlUr1s** システム・プロパティで定義されている順序によって決まります。ソリューションのマップに KML オーバーレイを追加するには、以下の手順を実行します。

手順

1. アプリケーション・サーバーに *ibmadmin* としてログオンし、以下のディレクトリーを作成します。

```
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_theme_ear.ear/ioc_theme_static_js_web.war/  
js/com/ibm/ioc/kml/
```

2. ステップ 1 で作成したディレクトリーに KML ファイルをコピーします。
3. **KmlUr1s** システム・プロパティを編集して、必要な KML オーバーレイが表示されるようにします。例えば、2 つのオーバーレイを同時に構成するには、このシステム・プロパティを以下の値で変更します。

```
[{"label": {"group": "KMLLayer", "key": "layer1"},  
"url": "/ibm/ioc/theme/static/js/js/com/ibm/ioc/kml/UpdateKMLFile.kml"},  
{"label": {"group": "KMLLayer", "key": "layer2"},  
"url": "/ibm/ioc/theme/static/js/js/com/ibm/ioc/kml/KMLSAMPLE.kml"}]
```

ここで、

- *label* は KML オーバーレイ・ラベルです。
- *group* および *key* は、I18N リソース・サービスでレイヤーのラベルを検索するために使用されます。

注: 管理者は、関連する値を *ioc.i18n_resource* テーブルに追加する必要があります。

- *URL* は KML レイヤー・ファイルの URL です。

4. 変更を保存します。

タスクの結果

操作ビューにある「フィルター」パネルの「マップ・オーバーレイ」ペインに、選択可能なすべての KML レイヤーが表示されます。

次のタスク

詳しくは、『システム・プロパティの構成』を参照してください。また、詳しくは、WebSphere Application Server 製品資料のコンテキスト・ルート 情報も参照してください。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

425 ページの『KML オーバーレイの表示』

管理者がマップに対して 1 つ以上の KML オーバーレイを構成すると、フィルター・パネルに「マップ・オーバーレイ」ペインが表示されます。KML オーバーレイには、マップに表示できるデータ項目に関する追加の情報が含まれています (ロケーションやアイコンなど)。

KPI の構成

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されます。

ユーザー・インターフェースの状況ビュー上に表示される KPI 階層のナビゲーション・ツリーをカスタマイズできます。ソリューション内で使用可能な KPI モデルの KPI を表示、変更、コピー、作成、および削除することもできます。

KPI ナビゲーション・ツリー

「重要業績評価指標」ウィンドウには、親 KPI と子 KPI からなる KPI 階層が表示されます。これらの KPI 階層は、ユーザー・インターフェースの状況ビューの KPI ナビゲーション・ツリーに表示されます。ルート・レベルのノードは KPI モデルに対応しています。状況ビューでは、KPI は色分けされたセルで表されます。色は KPI の状況を示しています。

「関係と表示」タブでは、ルート・レベルのノードごとに、以下の表に示す情報を使用できます。

名前	ルート・レベルのノードのタイトル。
タイプ	KPI のルート・レベルのノードまたは所有する組織のタイプ。
モデル ID	対応する KPI モデルの ID。
アイコン	ルート・レベルのノード、所有する組織、またはデータ・ソースを表すアイコン。

KPI モデル (KPI model)

「重要業績評価指標」ウィンドウには、表示する権限のある KPI モデルの詳細が表示されます。各モデル内のすべての KPI の詳細を確認できます。

「KPI 定義」タブでは、KPI モデル内の KPI ごとに、以下の表に示す情報を使用できます。

KPI 名	KPI のタイトル。 KPI 名をクリックすると、プロパティを確認することができます。
モデル	KPI が属しているモデルの ID。
作成済み	KPI の作成方法 <ul style="list-style-type: none">モデル化された KPI とは、IBM WebSphere Business Monitor を使用してモデル・レベルで作成された KPI です。ダッシュボード KPI とは、重要業績評価指標ツールを使用して作成された KPI です。

タイプ	<p>KPI の種類</p> <ul style="list-style-type: none"> 集約 KPI は、選択されたメトリックと集約方式に基づく値を使用します。 式 KPI は、ユーザーが定義した XPath 式を使用して、他の KPI やユーザー定義関数に基づく値を使用します。
アクセス	<p>KPI のアクセス・レベル</p> <ul style="list-style-type: none"> 共有 KPI とは、それを表示するアクセス権限を他のユーザーが持っている KPI です。 プライベート KPI とは、所有者以外のユーザーと共有できない KPI です。

関連概念:

169 ページの『データ項目のルーティング』

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を処理して、情報の表示方法を決定します。

437 ページの『KPI を介した状況のモニター』

状況ビューでは、重要業績評価指標 (KPI) の状況を要約形式または詳細形式で表示することができます。

関連タスク:

127 ページの『データ・ソースからのデータのルーティング』

データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

サンプル KPI

ソリューションには、一連のサンプル KPI が付属しています。こうした KPI は、さまざまなタイプの KPI をユーザーの組織に合わせて計画および実装する際の手引きとなるように設計されています。水道、輸送、公共安全の各分野のサンプルが用意されています。

KPI 階層の表示または変更

管理者は、状況ビュー上に表示される KPI モデルを表示、変更、または削除できます。

手順

- 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
- 「関係と表示」タブで、ルート・レベルのノードを展開して、表示したいモデル・ツリーの下位レベルを表示します。
- ルート・レベルのノードのタイトルをクリックして、詳細をプレビューします。
- KPI をクリックして、「関係と表示」ウィンドウに表示される詳細をプレビューします。
- 「関係と表示」タブで、以下のようにして、既存の項目を移動、追加、変更、または削除できます。
 - ツリー内のサブ項目を移動するには、その項目を目的の位置までドラッグします。緑色または赤色のインディケータは、移動が許可されているかどうかを示します。
 - KPI モデルの既存のサブ項目のリストからツリーに項目を追加するには、サブ項目に含める項目を右クリックして「**KPI の追加**」をクリックします。
 - 「**KPI プロパティ**」ウィンドウに移動してサブ項目を変更するには、その項目を右クリックして「**編集**」をクリックします。

- ルート・レベルのノードまたはサブ項目をツリーから削除するには、その項目を右クリックしてから「除去」をクリックします。ルート・ノード項目を削除すると、その項目に含まれているすべてのサブ項目が削除されます。
6. 変更した内容を保存するには、「保存」をクリックします。変更しなかった場合は、「キャンセル」をクリックします。

注: ここでは、所有する組織やルート・レベルのノードの詳細を編集することはできません。所有する組織を変更する場合は、それを削除して別のものに置き換えます。

KPI 階層のエクスポートまたはインポート

1.6.0.2

IBM Intelligent Operations Center ソリューションに関連付けられている KPI の階層を作成することができます。管理者は、既存の KPI 階層を JavaScript Object Notation (JSON) ファイルとしてインポートしたり、既存の KPI 階層を JSON ファイルにエクスポートしたりすることができます。

このタスクについて

KPI 階層の再構成を回避するために、IBM Intelligent Operations Center の別のインスタンスからエクスポートされた既存の KPI 階層 JSON ファイルをインポートすることができます。KPI 階層のインポートでは、既存の KPI 階層がソリューションにインポートされ、ソリューション内の既存の階層が、インポートされた階層で置き換えられます。

既存の IBM Intelligent Operations Center KPI 階層のコピーを生成する場合は、その階層を JSON ファイルにエクスポートすることができます。KPI 階層のエクスポートでは、KPI 階層全体がエクスポートされます。KPI 階層は IBM Intelligent Operations Center のインストール済み環境間で転送できることが必要であるため、KPI 階層をエクスポートした場合、レポート、名前付きエリア、または許可へのリンクは維持されません。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
2. 「関係と表示」タブの上部で、「KPI アクション (KPI Actions)」ドロップダウン・リストからアクションを選択します。
 - ソリューションの KPI 階層全体をエクスポートする場合は、以下のサブステップを実行します。
 - a. 「KPI 階層のエクスポート」をクリックします。
 - b. ファイル・エクスプローラーを使用して、KPI 階層 JSON ファイルのエクスポート先となる場所を選択します。
 - KPI 階層をソリューションにインポートする場合は、以下のサブステップを実行します。
 - a. 「KPI 階層のインポート」をクリックします。
 - b. ファイル・エクスプローラーを使用して、インポートする KPI 階層 JSON ファイルを見つけます。

タスクの結果

選択した KPI 階層が、ソリューションからエクスポートされるか、またはソリューションにインポートされます。

所有する組織の追加、編集、または削除

管理者は、所有する組織を、状況ビュー上に表示されるルート・レベルのノードとして追加できます。ルート・レベルの既存の所有組織の詳細を編集できます。ルート・レベルの所有組織を削除することもでき、その関連サブレベル・ノードも削除されます。

このタスクについて

ルート・レベルのノードを追加するには、以下の手順に従います。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
2. 「関係と表示」タブの上部で、「所有する組織の追加」をクリックします。
3. ソリューション・インターフェース内に表示される所有する組織の名前を入力します。
4. 「モデル」フィールドのドロップダウン・リストで、追加するルート・レベルのノードの KPI モデルを選択します。
5. 「アイコン」フィールドのドロップダウン・リストで、ルート・レベルのノードを表すアイコンのファイル名を選択します。
6. 「OK」をクリックして、ルート・レベルのノードを「関係と表示」ウィンドウ上のツリーに追加します。
7. 「保存」をクリックして、「状況」ビュー内の表示を更新します。

タスクの結果

追加したルート・レベルのノードが、そのサブレベルと一緒にツリー階層に表示され、ユーザー・インターフェースの状況ビューに表示する対象として選択できます。

次のタスク

所有する組織の詳細を編集するには、「関係と表示」ウィンドウのツリーから目的の名前を選択し、右クリックして、手順に示されているとおりに、詳細を変更します。

所有する組織を削除するには、「関係と表示」ウィンドウのツリーから目的の名前を選択し、右クリックして、削除し、保存します。

KPI の凡例の変更

管理者は、状況ビューの上部にある KPI の凡例を変更できます。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
2. 「関係と表示」タブで、「KPI 凡例の更新」をクリックします。
3. 以下のようにして、KPI の凡例の表示を変更します。
 - 範囲を追加するには、「行の追加」をクリックします。
 - 範囲を変更するには、「範囲名」、「色」、および「アイコン」の下にある各フィールドを編集します。
 - 範囲を削除するには、「削除」アイコンをクリックします。
4. 「OK」および「保存」をクリックし、状況ビュー上に表示される凡例を確認して更新します。

KPI 範囲の検証

ナビゲーション・ツリーで各 KPI に割り当てられた範囲を検証することができます。

このタスクについて

検証プログラムは、各 KPI に割り当てられた範囲が、凡例で定義された範囲と一致し、かつ論理的であることを確認します。例えば、検証チェックでは、複数の範囲が相互に重なり合わずに並行して存在することを確認します。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
2. 「関係と表示」タブで、「KPI 凡例の更新」をクリックします。
3. 「KPI 範囲の検証」ウィンドウで、「検証の実行」をクリックします。以下の表は、各 KPI の検証チェックの結果のリストを示しています。『例』を参照してください。
4. 「キャンセル」をクリックしてウィンドウを閉じます。

例

以下の例に、検証チェックの結果として生成される表の形式とその一部を示します。

KPI	検証
消防署 1 の消防士負傷	有効
消防署	有効
犯罪の応答時間	有効
空港 2 でフライト遅延	有効
公共安全の予算	有効

KPI 権限の編集

ユーザーまたはグループに、KPI への適切なアクセス権と、関連する許可特権を割り当てます。

このタスクについて

ユーザー・インターフェース内の状況ビューで、モデルから KPI へのユーザー・アクセスを許可するには、必要なアクセス・レベルを割り当てます。提供されるリストには、管理者によって定義されたユーザー、グループ、およびデフォルト・アクセス・レベルが含まれています。KPI に対して設定したアクセス・レベルは、その KPI と、そのすべての子 KPI に適用されます。

手順

1. KPI 構成ツールにアクセスするには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
2. 「関係と表示」タブで、KPI ツリー階層内の KPI を選択します。
3. 「関係と表示」タブの上部で、「権限の編集」をクリックします。
4. 名前のリストからユーザーまたはグループを選択します。
5. KPI に関して、ユーザーまたはグループの適切なアクセス・レベルを選択します。
6. 「OK」および「保存」をクリックし、更新を確認します。

名前付きエリアへの KPI のマッピング

1.6.0.1

1.6.0.2

管理者は、KPI を名前付きエリアにマップして、ユーザー・インターフェースのエリア状況ビューで表示することができます。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
2. 1 つ以上の名前付きエリアに関連付ける KPI を選択します。この目的のために選択できるのは、最上位の KPI だけです。
3. 「関係と表示」タブの上部で、「名前付きエリアへの KPI のマップ」をクリックします。
4. 「名前付きエリア・データ・ソースの選択」フィールドで、選択可能な名前付きエリア データ・ソース・タイプのリストから選択します。

注: KPI マッピングに使用できるのは、名前付きエリアデータ型が割り当てられているデータ・ソースだけです。名前付きエリアのタイプをデータ・ソースに割り当てするには、データ・ソースを構成する際に、フィールド「境界のデータ」を「はい」に設定します。

5. リストされている選択可能な名前付きエリア・データ項目のチェック・ボックスを 1 つ以上選択します。
6. 「OK」をクリックして、選択した名前付きエリアに KPI をマップします。
7. 「保存」をクリックして、エリア状況ビューで選択に使用できる名前付きエリアを更新します。

タスクの結果

選択した名前付きエリアは、該当する KPI にマップされます。ユーザーが、エリア状況ビューのマップまたはリストで 1 つ以上の名前付きエリアを選択すると、関連する KPI が表示されます。

例

大都市の特定のエリアでの犯罪をモニターするために、マップ上に描かれた名前付きエリアによって表される警察管区に関するデータを持つデータ・ソースに KPI をマップすることができます。

KPI のレポートへのマッピング

1.6.0.2

管理者は、状況ビューに表示されるレポートに KPI をマップすることができます。同じレポートを複数の KPI にマップすることができます。オプションとして、レポートで表示されるデータを変更する一連のパラメーターを各レポートに追加することができます。これらのパラメーターの値は、Cognos レポート照会を生成するために使用されるほか、生成されたレポートのインスタンスにラベルとして表示されます。

このタスクについて

選択したレポートの選択した KPI にのみ適用されるパラメーターを追加することができます。例えば、大きな地方行政区域のサブ区域のデータを含んだレポートの名前と ID をそれらのパラメーターで参照することができます。Cognos レポート照会を生成する際に、任意のパラメーターを指定することができます。ただし、照会の結果は、指定したパラメーターをレポートが必要とするかどうかによって異なります。指定したパラメーターをレポートが必要としない場合、そのパラメーターはソリューションで処理されません。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」をクリックします。
2. 1 つ以上のレポートに関連付ける KPI を選択します。
3. 「関係と表示」タブの上部で、「KPI をレポートにマップ」をクリックします。
4. 「使用可能なレポート」の下の使用可能なレポートのリストで 1 つ以上のチェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。各 KPI の「レポート」フィールドに、関連付けられたレポートが表示されます。
5. オプション: 「パラメーターの追加」の下で、選択したレポートごとに「タイプ」と「値」の値を英数字で入力し、「追加」をクリックします。

タスクの結果

選択したレポートが、該当する KPI にマップされます。ユーザーは、状況ビューのマップまたはリストで KPI プレビュー・カードから 1 つ以上のレポートを選択できます。これらのレポートに関連する KPI が表示されます。

例

ある主要都市の特定の地域における犯罪をモニターするためのレポートを作成するとします。このレポートを作成するために、指定した時間帯に警察管区から得たデータを表示するレポートに KPI をマップします。

次のタスク

表示するレポートでレポート・ヘッダーを使用不可にする場合は、以下のレポート・パラメーターで値 **false** を設定します。

- **cv.toolbar**
- **cv.header**

パラメーターを使用した Cognos レポート照会 URL の生成、および構成可能なレポート・パラメーターについて詳しくは、IBM Cognos Business Intelligence の製品資料を参照してください。

関連情報:



IBM Cognos Business Intelligence 10.2.0 インフォメーション・センター

KPI モデルの表示または変更

管理者は、「KPI 定義」タブを使用して、ソリューション内で使用可能な KPI モデルを表示または変更できます。

「モデル別フィルター」フィールドには、表示する権限のあるビジネス・プロセス・モデルのドロップダウン・リストが表示されます。すべてのモデルおよびすべての KPI を表示するには、「すべてのモデル」を選択します。注目する特定のモデルに属している KPI のみを表示するには、そのモデルの名前を選択します。KPI は、アルファベット順にソートされて表示されます。

関連概念:

176 ページの『KPI の作成および統合』

重要業績評価指標 (KPI) モデルは、ビジネス・モニター開発ツールキット、および「重要業績評価指標」構成ツールを使用して作成および変更できます。

KPI のコピーまたは作成

管理者は、「**KPI 定義**」タブを使用して、ソリューション内で使用可能な KPI モデルに属している KPI を作成できます。

ソリューション内の既存のモデルの新規 KPI を作成できます。あるいは、表示される KPI のリストから KPI を選択して、コピーおよび編集できます。

KPI のコピー

ソリューション内のモデルから既存の KPI のコピーを作成します。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」 > 「重要業績評価指標」 > 「**KPI 定義**」をクリックします。
2. KPI を選択します。アクション・バーで、「追加のアクション」 > 「コピー」をクリックします。「**KPI プロパティ**」ウィンドウが開きます。
3. 「**KPI 名**」フィールドに、新規 KPI 名を入力します。
4. KPI を変更するには、「プロパティ」ウィンドウのタブのフィールドを編集します。これらのフィールドを編集して集約 KPI や式 KPI を作成する方法については、このトピックの末尾にあるリンクをクリックして参照してください。

注: ソリューション内で作成した KPI は、ダッシュボード KPI として定義されます。

5. 更新された「**KPI プロパティ**」を保存してウィンドウを終了するには、「**OK**」をクリックします。KPI をコピーして、それを保存してから変更を続行するには、「**適用**」をクリックします。保存せずに終了するには、「**キャンセル**」をクリックします。

KPI の作成

ソリューション内のいずれかの KPI モデルの KPI を作成します。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」 > 「**KPI 定義**」をクリックします。
2. アクション・バーで、「**作成**」をクリックします。
3. 「**新規集約 KPI**」または「**新規式 KPI**」をクリックします。「**KPI プロパティ**」ウィンドウが開きます。
4. KPI のコピー手順のステップ 3 および 4 に従って、新規 KPI のプロパティを編集します。
5. KPI を変更するには、「プロパティ」ウィンドウのタブのフィールドを編集します。これらのフィールドを編集して集約 KPI や式 KPI を作成する方法については、このトピックの末尾にあるリンクをクリックして参照してください。

注: ソリューション内で作成した KPI は、ダッシュボード KPI として定義されます。

KPI の変更または削除

管理者は、「**KPI 定義**」タブを使用して、ソリューション内で使用可能な KPI モデルに属している KPI を表示、変更、または削除することができます。

ソリューション内の既存のモデルの新規 KPI を作成できます。あるいは、表示される KPI のリストから KPI を選択して、コピーおよび編集できます。

KPI の表示または変更

ソリューション内のモデルに属している既存の KPI を表示または変更します。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」 > 「重要業績評価指標」 > 「KPI 定義」をクリックします。
2. KPI を選択します。アクション・バーで、「編集」をクリックします。「KPI プロパティ」ウィンドウが開きます。
3. KPI を変更するには、「プロパティ」ウィンドウのタブのフィールドを編集します。これらのフィールドを編集して集約 KPI や式 KPI を作成する方法については、このトピックの末尾にあるリンクをクリックして参照してください。

注: ここでは、モデル化された KPI の定義またはモデルを変更することはできません。

4. 更新された「KPI プロパティ」を保存してウィンドウを終了するには、「OK」をクリックします。KPI をコピーして、それを保存してから変更を続行するには、「適用」をクリックします。保存せずに終了するには、「キャンセル」をクリックします。

KPI の削除

ソリューション内のモデルに属している既存の KPI を削除します。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「重要業績評価指標」 > 「KPI 定義」をクリックします。
2. KPI を選択します。
3. アクション・バーで、「削除」をクリックします。

注: ここでは、モデル化された KPI を削除することはできません。ソリューション内では、ダッシュボード KPI のみを削除できます。

ホット・スポット分析の構成

1.6.0.1

1.6.0.2

ホット・スポット・ツールを使用して、ソリューションのホット・スポット分析定義を構成します。ホット・スポット分析では、時間と地理空間情報マップ上の位置に関連するデータのパターンを強調表示できます。管理者は、分析定義の作成、既にリストされているホット・スポット分析の更新、またはソリューションからのホット・スポット分析定義の削除を行うことができます。

ホット・スポットは、地理空間情報マップ上の色の付いた円であり、定義された基準に基づいて収集および分析されたデータ項目のクラスターを表しています。分析できるプロパティは、データ項目のソース、マップ位置、および開始時刻です。ホット・スポットに対して選択されるデータ項目は、分析結果に基づくパーセント・スコアを付けられ、黄色から赤色の範囲内の対応する色で表示されます。

ホット・スポット分析定義を作成する場合、「フィルター・パネル」ツールを使用して、その分析をフィルター・ペインに割り当てます。その分析は、ユーザー・インターフェースの「フィルター」パネルで選択できるようになります。「フィルター」パネルでの設定は、ホット・スポット分析定義とともに、分析されるデータとマップ上のホット・スポットの生成を制御します。

データ分析に関する以下の基準を構成して、マップ上のホット・スポットの形式で結果を表示することができます。

データ・ソース

選択可能なリストから、分析の対象となるデータ・ソースを選択します。一般に、分析結果の効率を最大限に高め、最も容易に解釈できるようにするには、選択するデータ・ソースの数が 2 つまたは 3 つを超えないようにしてください。

分析タイプ

指定したデータ・ソースに対して実行される分析のタイプを選択します。分析タイプは、距離と相関の規則によって定義されます。規則は、データ項目のソース、位置、および開始時刻に従ってデータを突き合わせることによって適用されます。次に、収集されたデータ項目のスコアが計算されます。分析の基準については、147 ページの表 33 で詳しく説明します。

距離制限

ホット・スポットに関するデータ項目の分析を規定する最大距離を定義します。クラスターに追加されるデータ項目は、最大距離の範囲内にあるクラスター内に他の項目を少なくとも 1 つ持っています。クラスターの中心と場所は、クラスター化された項目の中心の位置です。クラスターの半径は、中心から、中心点から最も離れたデータ項目の位置までの距離です。

制限時間

基準を絞り込む追加のオプションでは、ホット・スポットに関するデータ項目の分析を規定する期間を定義します。選択される各データ項目は、指定した各データ・ソースからの少なくとも 1 つのデータ項目に対してテストされるときに最大距離と時間間隔の範囲内にあります。

データ項目の数

マップ上にホット・スポットを生成するために必要なデータ項目の最小数のしきい値を定義します。

注: データ項目は、時間が重なり合うことはできますが、それらが関連していて、ホット・スポット内にあるかどうかの判別に使用されるのは、それぞれの開始日時の間隔だけです。

分析タイプ

分析タイプは、データ項目がどのようにクラスター内で収集され、地理空間情報マップ上でホット・スポットによって表されるかを定義します。実行される分析のタイプは、データ項目に適用される時間、距離、およびデータ・ソース関係の規則によって定義されます。データ項目のクラスターは、適用される規則に従って他の項目が検出されない時点で到達するまで、蓄積されます。

クラスター内で収集されたデータ項目のスコアが計算されます。スコアは、クラスター内の関係の規則に従うデータ項目の比率に基づいて与えられます。クラスター内で収集されたデータ項目の数に対するクラスター内の関連データ項目の比率は、0% から 100% の範囲のパーセントとして表現されます。パーセント・スコアは、マップ上のホット・スポットの色で表されます。色の範囲は黄色から赤色で、0% から 100% のスコアを表しています。

注: 関係の規則は、データ項目が以下のいずれかの最大距離 (および時間間隔 (該当する場合)) の範囲内にあることです。

- 分析における各データ・ソースからの別の項目、または
- 分析におけるもう一方のデータ・ソースのそれぞれから項目の最大距離の範囲内にある他の項目

次の表に、分析タイプごとに、項目がクラスター化されるためにどのような基準に適合する必要があるか、およびスコアがどのように与えられるかを示します。

表 33. 各タイプの分析におけるデータ項目の収集とテストの基準

分析タイプ	ステップ 1: データ項目のクラスタリング	ステップ 2: マップ上のホット・スポットの生成	ステップ 3: ホット・スポットのスコアの採点
A. 距離別のクラスター	<ol style="list-style-type: none"> 1. 指定したいいずれかのデータ・ソースから 2. ポイント・マップ位置が含まれているプロパティを持つ 3. 少なくとも 1 つの他のデータ項目に対してテストされるときに指定された距離の範囲内 	これ以上のテストは不要です	パーセントは、クラスター内の関連するデータ項目の間の距離に基づく比率から計算されます。この分析タイプのスコアは常に 100% であるため、ホット・スポットの色は常に赤色です。
B. 距離および相関データ・ソース別のクラスター	<ol style="list-style-type: none"> 4. データ項目の最小数のしきい値の範囲内 	指定された各データ・ソースからの少なくとも 1 つのデータ項目に対してテストされるときに指定された距離の範囲内	パーセントは、異なるデータ・ソースからのクラスター内の関連するデータ項目の間の距離に基づく比率から計算されます。マップ上にホット・スポットを表示するためには、スコアが 0% より大きくなければなりません。そうでない場合、クラスターは表示されません。スコアは、単一のホット・スポットについて最大 100% まで可能です。
C. 時間を含む、距離および相関データ・ソース別のクラスター		指定された各データ・ソースからの少なくとも 1 つの他のデータ項目に対してテストされるときに指定された距離と時間間隔の範囲内	パーセントは、異なるデータ・ソースからの関連するデータ項目の間の距離と時間に基づく比率から計算されます。マップ上にホット・スポットを表示するためには、スコアが 0% より大きくなければなりません。そうでない場合、クラスターは表示されません。スコアは、単一のホット・スポットについて最大 100% まで可能です。

ホット・スポットのスコア

次の表は、「距離と相関データ・ソース別のクラスター」のホット・スポット分析定義が、「境界」がマップ上の都市エリアに設定された状態で実行された場合のスコアの計算方法の例を示しています。「日時」フィルターは、1 週間の期間を対象とするように設定されています。マップ上で表されるデータ項目は、街灯の故障と軽犯罪の報告です。分析によって生成されるホット・スポットのうち 3 つが表に示されています。

表 34. ホット・スポットのスコアの例

都市エリアのデータ項目の分析	ホット・スポット 1	ホット・スポット 2	ホット・スポット 3
クラスターで収集されるデータ項目の総数	40	20	20
クラスター内の異なるデータ・ソースからの関連するデータ項目の数	30	10	4
計算	$30/40 * 100 = 75$	$10/20 * 100 = 50$	$4/20 * 100 = 20$
クラスターごとのスコア	75% = 赤色	50% = オレンジ色	20% = 黄色

この例で、最初に、マップ上のデータ項目の位置を観察できます。これは、街灯の故障と軽犯罪の報告を表しています。次に、データ分析を実行します。相当数の関連データ項目がクラスターで収集されていることが分かります。これらの関連項目がマップ上のホット・スポットのどこに表示されるかを確認できます。また、ホット・スポット 1 には、ホット・スポット 2 および 3 と比較して最も多くの数の関連項目があることも分かります。データは、ホット・スポット 1 の場所では、故障した街灯の近くで軽犯罪が高い度合いで起こっていることを示しています。このデータに基づいて、この場所の街灯の修理の優先順位を付けることができます。

関連概念:

438 ページの『データのホット・スポットの分析』

「マップ」タブを使用して、事前定義された分析によって生成されるホット・スポットの形式の、マップ上で選択するエリアに関するデータを分析します。「ホット・スポット」ビューは、重要な問題のモニターおよび管理、その問題への対応に役立ちます。

分析定義の作成

1.6.0.1

1.6.0.2

マップ上の地理的エリアに関連付けることができるデータ分析定義のパラメーターを構成します。分析では、マップ上にホット・スポットを表示することによって、データのパターンを示すことができます。

このタスクについて

分析定義を作成するには、以下の手順に従ってフォームを完成させます。

手順

1. ホット・スポット構成ツールにアクセスするには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「ホット・スポット」をクリックします。
2. 「作成」をクリックします。
3. 分析定義の名前と、必要に応じて短い説明を入力します。

注: ユーザー・インターフェースには、分析の名前のみが表示され、説明は表示されません。ユーザーを支援するために、分析の目的を反映した名前を入力してください。

4. 分析に必要なデータ・ソースを選択するために、「使用可能なデータ・ソース」フィールドで、1 つ以上のチェック・ボックスを選択します。
5. ホット・スポットを形成するために必要な項目の数のしきい値を選択するために、「最小データ項目」フィールドに、データ項目の数を入力します。

6. 「分析タイプ」フィールドのリストから分析を選択します。

注: 選択するデータ・ソースは、選択した分析タイプに必要な指定内容に準拠している必要があります。

オプション	説明
距離別のクラスター	<ul style="list-style-type: none">少なくとも 1 つのデータ・ソースデータ項目間の最大距離
距離および相関別のクラスター	<ul style="list-style-type: none">少なくとも 2 つのデータ・ソース異なるデータ・ソースのデータ項目間の最大距離
時間を含む、距離および相関別のクラスター	<ul style="list-style-type: none">少なくとも 2 つのデータ・ソース異なるデータ・ソースのデータ項目間の最大距離異なるデータ・ソースのデータ項目間の最大時間間隔

7. 「最大距離」フィールドに距離と単位を入力します。

8. 選択した分析タイプで時間間隔を指定する必要がある場合は、「最大時間間隔」フィールドに時間間隔と単位を入力します。

9. 「OK」をクリックします。

タスクの結果

定義した分析ビューは、分析のリストに表示され、編集またはソリューションからの削除の対象として選択できます。リスト内のすべての分析は、「フィルター・パネル」構成ツールで構成することもできます。

次のタスク

分析をユーザー・インターフェースで実行するには、操作ビューで「フィルター」パネルに表示されるよう分析を構成します。「構成ツール > 「フィルター」パネル」をクリックします。「フィルター」パネルの構成について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連概念:

130 ページの『「フィルター」パネルの構成』

「ソリューション管理」ビューで、データ・ソースをどのようにグループ化するかを決定できます。次に、グループごとに、「フィルター」パネル内に表示されるペインを構成できます。選択したデータ・ソースがペイン内にリストされます。

ロケーション・マップの構成

「システム管理」ビューで、「ロケーション・マップ」タブ上に表示されるロケーション・マップをカスタマイズできます。「ロケーション・マップ」タブは、操作ビュー上の「内容」パネルの一部です。

「ロケーション・マップ」タブで、メニューから特定のロケーション・マップを選択できます。「内容」パネルの「マップ」タブでは、マーカーによって、ロケーション・マップが使用可能な場所が示されます。

「ロケーション・マップ」タブでカスタマイズすることができます。

- 「ロケーション・マップ」タブ上に表示されるマップ、ダイアグラム、または計画。
- ロケーション・マップ内のエリア。これにより、それらのエリアに関連付けられたデータ項目をロケーション・マップ上に表示できるようにします。

- ロケーション・マップの階層。これにより、「ロケーション・マップ」タブ上のメニューおよび「マップ」タブ上のマーカーを使用できるようにします。メニュー項目は、アルファベット順に表示されます。ロケーション・マップは、以下の基準に従って分類されます。
 - 地理情報マップ上でロケーション・マップが存在する場所に基づいたコレクション
 - コレクション内のロケーション・マップのタイプに基づいたカテゴリー

ロケーション・マップ・ツールでは、ロケーション・マップ、コレクション、およびエリアを簡単に作成、表示、更新、および削除できます。カテゴリーは新たに作成できます。既存のカテゴリーを削除できますが、既存のカテゴリーを更新することはできません。カテゴリー、コレクション、ロケーション・マップ、およびエリアは、階層を形成しています。その詳細な定義を以下に示します。

カテゴリー

1 つのカテゴリーには、1 つ以上のロケーション・マップ・コレクションが含まれます。ユーザーは、カテゴリーを利用して、ロケーション・マップが簡単に見つかるようにメニューを編成できます。例えば、「警察署」という名前のカテゴリーには、市内の警察署を表すロケーション・マップのコレクションが含まれます。

コレクション

1 つのコレクションには、1 つ以上のロケーション・マップが含まれます。コレクションは、通常、複数のマップから成り立っていて、地理情報マップ上の位置を示すマーカーによって表されます。コレクションには、場所の座標とカテゴリーが割り当てられている必要があります。例えば、「警察管区 4」という名前のコレクションには、市の警察管区 4 にある警察署に関連付けられたロケーション・マップが含まれます。

ロケーション・マップ

ロケーション・マップとは、1 つの場所を必要な詳細レベルで表す任意のイメージです。ロケーション・マップは、コレクションに割り当てられている必要があります。例えば、「1 階」は、建物の 1 階のロケーション・マップです。このロケーション・マップは、「警察署」という名前のカテゴリー内の「警察管区 4」警察署のマップのコレクションに割り当てられます。

エリア エリアとは、ロケーション・マップ上の 1 つの部分の外形を示すユーザー定義の形状 (ポリゴン) です。エリアには、名前と説明が割り当てられている必要があります。名前は、ロケーション・マップ上のその部分を表す固有 ID です。ソリューションによって受信されたデータ項目にエリア ID が与えられている場合、そのデータ項目は、そのエリアが定義されているすべてのロケーション・マップ上に表示されます。例えば、「警察管区 4」マップ・コレクションの「1 階」および「2 階」というロケーション・マップ上には、「階段」という名前のエリアがあります。エリアに親 ID を割り当てるオプションがあります。

複数のロケーション・マップ上で親 ID を使用して、エリアの階層を作成します。例えば、スポーツ・スタジアムの 1 階の観客席を表すエリアを作成します。各席は、スタジアム 1 階の詳細なロケーション・マップで定義されます。さらに、各席に親 ID を与えて、その席がスタジアムの 1 階にあることを示します。エリア ID が与えられた席の 1 つに対応するデータ項目は、1 階の席の詳細なマップに表示されます。このデータ項目は、スタジアムの概要ロケーション・マップにも表示されます。概要マップ上の 1 階エリアのエリア ID は、それぞれの座席エリアで使用される親 ID と同じです。

ロケーション・マップの構成について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連概念:

426 ページの『「ロケーション・マップ」タブ』

「ロケーション・マップ」タブを使用して、特定のロケーションの状態に関する現在の情報を取得します。ロケーション・マップ上でマークが付いているデータ項目から情報を取得できます。「フィルター」パネルでデータ・ソースを選択し、ソリューションで使用可能なマップのリストからロケーション・マップを選択します。IBM Intelligent Operations Center のロケーション・マップは、対話用に事前に定義されているエリア (大規模なスポーツ・スタジアムの座席エリアなど) を含むマップ、ダイアグラムまたは計画です。

マップ・イメージの表示およびアップロード

管理者は、ソリューション内のロケーション・マップを作成する際に使用できるマップ・イメージを表示またはアップロードすることができます。

このタスクについて

「ロケーション・マップ」タブに表示されるマップは、作成することができます。このタスクの前に、マップ・イメージをアップロードすることができます。これにより、アップロードしたすべてのイメージは、新規ロケーション・マップの作成時に使用できるようになります。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「ロケーション・マップ」とクリックする。
2. 「ロケーション・マップ・イメージ」をクリックします。使用可能なすべてのイメージが表示されます。
3. 「アップロード」をクリックします。

注: ロケーション・マップ・イメージに使用できる形式は、PNG、JPG、SVG です。

4. マップ・イメージ・ファイルを見つけ、「開く」をクリックします。

タスクの結果

「ロケーション・マップ・イメージ」をクリックしたときに表示される使用可能なイメージに、選択したイメージが追加されます。

関連タスク:

『ロケーション・マップの作成、更新、または削除』

管理者は、ソリューション内のロケーション・マップを作成、更新、または削除できます。

ロケーション・マップの作成、更新、または削除

管理者は、ソリューション内のロケーション・マップを作成、更新、または削除できます。

このタスクについて

「ロケーション・マップ」タブ上に表示されるマップを作成、編集、または削除できます。

ソリューション内にロケーション・マップを作成するには、この手順の説明に従ってウィザードを使用します。ロケーション・マップを作成するには、最初の 2 つのタブに入力します。3 番目のタブの入力はオプションであり、後の段階で行うことができます。どのタブでも、キャンセルするか、前のタブに戻ることができます。

手順

1. 「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「ロケーション・マップ」とクリックする。
2. 「作成」をクリックします。
3. マップ名とマップ・イメージを選択します。
 - a. 「マップ・タイトル」フィールドに、マップの名前を入力します。
 - b. 「マップ・イメージ」フィールドの横で、「参照」をクリックします。
 - c. 使用可能なイメージのピクチャーから、マップ・イメージを選択します。選択したイメージ・ファイル名が「マップ・イメージ」フィールドに自動的に入力され、そのマップ・イメージがタブに表示されます。
 - d. 次のステップに移動するには、「次へ」をクリックします。
4. マップ・コレクションとカテゴリを選択します。
 - a. 「既存のカテゴリの選択」をクリックし、「カテゴリ」リストで、ロケーション・マップの既存のカテゴリを選択します。あるいは、「新規カテゴリの作成」をクリックし、「カテゴリ名」フィールドに、新規カテゴリの名前を入力します。
 - b. 「既存のコレクションの選択」をクリックし、「コレクション」リストで、ロケーション・マップの既存のコレクションを選択します。あるいは、「新規コレクションの作成」をクリックし、新規コレクションの名前およびその緯度と経度の座標を入力します。
5. オプション: 「次へ」をクリックして、ロケーション・マップの名前付きエリアを作成します。ロケーション・マップ上のエリアの構成について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。
6. 新規ロケーション・マップの作成を完了し、ウィザードを終了するには、「OK」をクリックします。
7. 「ロケーション・マップ」タブ上に表示される新規ロケーション・マップを保存するには、「保存」をクリックします。

タスクの結果

ブラウザを最新表示すると、操作ビューの「内容」パネル上の「ロケーション・マップ」タブに変更内容が表示されます。

次のタスク

メニュー上の名前をクリックして、強調表示します。以下のオプションがあります。

- ロケーション・マップを更新するには、手順の説明に従って、構成タブ上の該当するフィールドを編集します。
- コレクション名および位置の座標を更新するには、「コレクションの更新」ウィンドウに変更を入力し、「保存」をクリックします。
- ロケーション・マップまたはコレクションを削除するには、「削除」をクリックします。

関連タスク:

151 ページの『マップ・イメージの表示およびアップロード』

管理者は、ソリューション内のロケーション・マップを作成する際に使用できるマップ・イメージを表示またはアップロードすることができます。

153 ページの『ロケーション・マップ上のエリアの作成、更新、または削除』

管理者は、ロケーション・マップ上に表示されるエリアを作成、更新、または削除できます。

ロケーション・マップ上のエリアの作成、更新、または削除

管理者は、ロケーション・マップ上に表示されるエリアを作成、更新、または削除できます。

始める前に

ウィザードを使用してロケーション・マップを作成しているときに、エリアを作成するには、「次へ」をクリックして、「名前付きエリアの作成」タブに移動します。

ロケーション・マップ上の既存のエリアを更新するには、「管理」 > 「ソリューション管理」 > 「構成ツール」 > 「ロケーション・マップ」 > 「名前付きエリアの作成」をクリックします。

手順

1. マップ上にエリアを描くには、ウィンドウの隅にあるポリゴン・シンボルをクリックして、描画ツールをアクティブにします。マップ上で必要な開始位置をクリックしてから、ポリゴンのそれぞれの角をクリックして、マップ上に形状を描きます。ポリゴンの描画を終了するには、ダブルクリックします。描画ツールを終了するには、手の形のシンボルをクリックします。新規エリアがマップ上に表示されます。デフォルトでは、青で強調表示されます。
2. 新規エリアの名前と説明を入力します。

注:

ロケーション・マップにエリアを作成する場合、名前の制限は 64 文字です。データ項目がロケーション・マップに表示されるデータ・ソースの場合、データ・ソース内のプロパティにエリア名の値が入っています。エリア名プロパティの最大長は、エリア名を収容できるだけの長さでなければなりません。

3. オプション: エリアに親エリアを割り当てるには、「親エリア名」フィールドにリストされている名前のいずれかを選択します。
4. 新規エリアを保持するには、「追加」をクリックします。新規エリアを削除するには、「キャンセル」をクリックします。
5. 「ロケーション・マップ」タブ上に表示される新規エリアを保存するには、「保存」をクリックします。

タスクの結果

ブラウザを最新表示すると、操作ビューの「内容」パネル上の「ロケーション・マップ」タブに変更内容が表示されます。

次のタスク

エリアの名前、説明、または親 ID の詳細を更新するには、更新するエリアの名前をクリックします。以下のオプションがあります。

- マップ上のエリアへの更新を確定するには、「更新」をクリックします。
- マップ上のエリアへの更新を元に戻すには、「キャンセル」をクリックします。

エリアを削除するには、エリア名の横にある削除アイコンをクリックします。確定された更新または削除を保存して「ロケーション・マップ」タブ上に表示するには、「保存」をクリックします。

関連タスク:

151 ページの『ロケーション・マップの作成、更新、または削除』

管理者は、ソリューション内のロケーション・マップを作成、更新、または削除できます。

標準操作手順の構成

標準操作手順とは、1つのプロセスまたは手順に関連するすべてのステップおよびアクティビティを記述した、一連の指示です。複雑で予測不能なイベントに対して、組織が一貫性と計画性のある高品質の対応を実施するには、標準操作手順が不可欠です。

標準操作手順の作成および使用方法の概略を以下に示します。

1. ターゲット環境内で発生する可能性があり、管理された対応が必要となるすべての問題のリストを作成します。このリストは、過去の経験および応用知識に基づいて作成されます。
2. 対象分野の専門家が、問題を管理するための手順を記述します。以下のような内容が含まれます。
 - だれが関与するか
 - どのようなときに関与するか
 - どのように関与するか
 - 更新データの提供元、またはアクションの実施先は何か
3. 対応手順を定義するときに、標準操作手順管理者は標準操作手順定義を構成します。
4. 標準操作手順は、実行時に手動でも自動でも開始できます。
5. 標準操作手順アクティビティは、IBM Intelligent Operations Center ユーザー・インターフェースで追跡し統合することができます。

関連タスク:

127 ページの『データ・ソースからのデータのルーティング』
データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

標準操作手順定義の構成

標準操作手順を定義するときに、標準操作手順に組み込まれるアクティビティを定義します。標準操作手順のアクティビティの一部または全部について、実行する順序を指定することができます。例えば、直前のアクティビティが完了するか、またはスキップされない限り、特定のアクティビティが開始されないように指定することができます。また、所有者およびモニターを標準操作手順に割り当てます。

このタスクについて

標準操作手順定義を構成できるのは、許可された標準操作手順作成者および管理者のみです。許可された標準操作手順作成者は、SopAuthorRoles システム・プロパティにリストされます。許可された標準操作手順管理者は、SopAdminRoles システム・プロパティにリストされます。

ドラフトを保存し、それを後日まで承認用として送信しないようにすることもできます。標準操作手順は、承認されるまで起動することはできません。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「標準操作手順」 > 「定義」 をクリックします。
2. 「作成」 をクリックします。
3. 「基本」 タブで、標準操作手順定義の「名前」と「説明」を入力します。
4. 標準操作手順に関連付けられているアクティビティを指定の順序で実行する場合は、一般設定で「アクティビティを順序どおりに実行」を選択します。

5. 「参照」で、標準操作手順に参照を追加するには、以下のサブステップを実行します。
 - a. 「参照の追加」をクリックします。
 - b. 「参照」リストから、既にライブラリーに追加されている参照を選択します。参照をライブラリーに追加する場合は、以下のサブステップを実行してください。
 - 1) 「新規追加」を選択して、「追加」をクリックします。
 - 2) 「名前」および「URI」に値を入力します。完全修飾 URI を入力する必要があります。
 - 3) 必要に応じて、説明を入力します。
 - 4) 「追加」をクリックします。

参照が追加され、自動的にプライベートのマークが付きます。

「参照」表に、追加された参照がリストされます。参照を削除するには、参照の横にある「削除」アイコンをクリックします。

6. 「次へ」をクリックします。
7. オプション: 「役割」タブで、標準操作手順のモニターを担当する所有者を以下のように指定します。
 - a. 「使用可能な役割」リストから適切な役割名を選択し、その名前を「選択された役割」リストにドラッグするか、「追加」をクリックします。
 - b. 選択した役割ごとに、どのようなアクセス権限を持たせるかを指定するオプションを以下のように選択します。
 - 標準操作手順に関連付けられているアクティビティを役割がモニターできるようにしたい場合は、「読み取り者」を選択します。
 - 標準操作手順に関連付けられているアクティビティを役割がモニターおよび完了できるようにしたい場合は、「所有者」を選択します。
 - c. 「選択された役割」リストから役割名を削除するには、適切な役割名を選択し、その名前を「使用可能な役割」リストにドラッグするか、「除去」をクリックします。

SopAdminRoles システム・プロパティに定義されているユーザーは、デフォルトの所有者および読み取り者です。

8. 「次へ」をクリックします。
9. 「アクティビティ」タブで、アクティビティを標準操作手順に追加するには、「追加」をクリックします。
10. アクティビティ定義を作成するには、「アクティビティ定義の作成」ウィンドウで以下のサブステップを実行します。
 - a. アクティビティが標準操作手順で必須の場合は、「必須」チェック・ボックスを選択します。
 - b. **1.6.0.2** アクティビティを自動的に開始する場合は、「自動開始」チェック・ボックスを選択します。
 - c. 「名前」で、名前を入力してアクティビティを追加するか、あるいは、リストから名前を選択して、既に定義されているアクティビティのコピーを追加します。既存のアクティビティを選択すると、残りのフィールドには、そのアクティビティの定義から取得した値が表示されます。
 - d. オプション: 「役割」で、「所有者」リストからアクティビティ所有者を選択し、「読み取り者」リストからアクティビティ・モニターを選択します。あるいは、一方または両方の役割タイプについて、ユーザー名のコンマ区切りのリストを入力します。SopAdminRoles システム・プロパティに定義されているユーザーは、デフォルトの所有者および読み取り者です。
 - e. オプション: 「期間」で、数値を入力し、リストから測定単位を選択します。
 - f. オプション: 「説明」に、アクティビティの説明を入力します。

- g. 「アクティビティ・タイプ」リストから、アクティビティのタイプを選択します。

手動アクティビティ	所有者が手動で行うアクティビティ。「説明」フィールドに詳細を入力します。
自動化アクティビティ	IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 内で特定の作業指示書を開始し追跡するアクティビティ。リストから事前定義された作業指示書を選択します。
If-Then-Else アクティビティ	特定の基準に基づく分岐を可能にする条件付きアクティビティ。「条件を満たした場合」および「それ以外の場合」の値を入力するか、または選択します。
通知アクティビティ	アクティビティ所有者が値を入力するための E メール・テンプレートが含まれた通知ウィンドウを表示し、その後 E メール通知を送信するアクティビティ。通知テンプレートは、参照として参照ライブラリーに保管されます。所有者に表示される E メール・テンプレートを選択するには、「参照名」から参照を選択します。E メール・テンプレートをプレビューするには、「プレビュー」をクリックします。
REST サービス・アクティビティ	REST サービス呼び出しを作成するアクティビティ。 <ul style="list-style-type: none"> 「REST サービス」で、REST サービス URL を入力するか、あるいは選択します。 「ユーザー ID」で、REST サービスにアクセスするためのユーザー ID を入力します。 「パスワード」で、REST サービスにアクセスするためのパスワードを入力します。
SOP アクティビティ	別の標準操作手順を起動するアクティビティ。「SOP」リストから、標準操作手順の名前を選択します。

- h. オプション: アクティビティに参照を追加するには、ステップ 5 (155 ページ) に示すサブステップを実行します。

- i. 「追加」をクリックします。

アクティビティがアクティビティのリストに追加されます。

11. リスト内のアクティビティを以下のように編集します。

- アクティビティの詳細のサマリーを表示するには、アクティビティの名前を展開します。
- 標準操作手順の「アクティビティを順序どおりに実行」オプションを選択した場合、アクティビティを並べ替えるには、アクティビティ名をクリックしてドラッグします。
- アクティビティを編集するには、アクティビティの名前をクリックして、「編集」をクリックします。必要に応じてアクティビティを編集し、「保存」をクリックします。
- アクティビティを削除するには、アクティビティの名前をクリックして、「削除」をクリックします。

12. 「次へ」をクリックします。

13. 「サマリー」タブで、標準操作手順のサマリー情報を確認してから、「保存」をクリックします。標準操作手順定義がリストに表示されます。

14. オプション: 標準操作手順定義を承認のために送信するには、リスト内で定義の名前をクリックして、「承認のために送信」リストから「承認のために送信」を選択します。また、標準操作手順定義のドラフトを削除する場合は、リストから「ドラフトの廃棄」を選択します。

関連概念:

110 ページの『標準操作手順役割の定義』

標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

定義のコピー、削除、および最新表示

新しい標準操作手順定義を毎回作成するのではなく、既存の標準操作手順定義をコピーし、それを別の定義を作成するための出発点として使用することができます。定義を削除したり、最新表示したりすることもできます。

手順

ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「標準操作手順」 > 「定義」 をクリックします。

- 標準操作手順定義をコピーするには、リスト内でその名前をクリックして、「コピー」をクリックします。定義のコピーがリストに追加されます。例えば、オリジナルの定義の名前が SOP1 の場合、コピーは自動的に Copy of SOP1 という名前になります。コピーされた定義を編集し、名前を変更することができます。
- 標準操作手順定義を削除するには、リスト内でその名前をクリックして、「削除」をクリックします。

注: 標準操作手順定義のすべてのバージョン、およびトリガーされて実行中である標準操作手順のすべてのインスタンスが削除されます。

- リスト内のすべての標準操作手順定義を最新表示するには、「最新表示」をクリックします。定義が最新表示され、他の管理者によって行われた更新内容が反映されます。

ドラフトおよび承認の操作

標準操作手順定義を作成すると、最初はドラフト・バージョンが保存されます。ドラフト・バージョンを承認用に送信すると、あるバージョンの標準操作手順定義が保存され、承認タイム・スタンプ値がそのバージョンの名前となります。承認されたバージョンを基にした別のドラフトを作成することができます。

このタスクについて

標準操作手順定義を選択した後、操作する定義のバージョンを「バージョン」リストから以下のように選択します。

- 「バージョン」リストから「ドラフト」を選択したときに、ドラフトが承認用に送信されていない場合は、「承認のために送信」リストが表示されます。
- 「バージョン」リストから「ドラフト」を選択したときに、ドラフトが承認用に送信されている場合は、「承認」リストが表示されます。

- 「バージョン」リストから承認タイム・スタンプ値を選択した場合は、「ドラフトの作成」リストが表示されます。標準操作手順定義ごとに保持できる進行中のドラフト・バージョンは、最大で 1 つだけです。ドラフト・バージョンが既に存在する場合、「ドラフトの作成」リストは表示されません。

手順

承認用に送信されていないドラフトの操作:

- ドラフトを承認用に送信するには、「承認のために送信」リストから「承認のために送信」を選択します。
- ドラフトを廃棄するには、「承認のために送信」リストから「ドラフトの廃棄」を選択します。

承認用に送信されたドラフトの操作:

- ドラフトを承認するには、「承認」リストから「承認」を選択します。
- ドラフトを承認しない場合は、「承認」リストから「承認しない」を選択します。バージョン名は、タイム・スタンプ値から「ドラフト」に戻ります。

承認されたバージョンの操作:

- 承認されたバージョンを基にしたドラフトを作成するには、「バージョン」リストからバージョン名を選択し、「ドラフトの作成」リストから「ドラフトの作成」を選択します。

定義の表示および編集

標準操作手順定義を表示および編集するには、以下の手順を実行してください。

このタスクについて

標準操作手順定義のドラフト・バージョンのみを編集できます。定義設定の指定について詳しくは、このセクションにある、標準操作手順定義の構成に関するトピックを参照してください。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「標準操作手順」 > 「定義」 をクリックします。
2. 表示または編集する標準操作手順定義の名前をクリックします。
3. 「バージョン」リストから、バージョンを選択します。標準操作手順定義を編集するときに、「バージョン」リストには承認されたバージョンしか表示されない場合は、ドラフト・バージョンを作成する必要があります。それには、編集するバージョンを選択し、「ドラフトの作成」をクリックします。
4. 次のオプションのいずれかを選択してください。
 - 標準操作手順定義に関する基本情報を表示するには、「詳細」を展開します。
 - 標準操作手順定義の基本情報を編集するには、「編集」をクリックして、変更を加えます。変更を基本情報に保存するには、「保存」をクリックします。また、変更をキャンセルして定義を閉じる場合は、「キャンセル」をクリックします。
 - アクティビティ、役割、および参照を表示または編集する場合や、標準操作手順定義の変更ログおよびインスタンスを表示する場合は、以下のタブをクリックします。

「アクティビティー」	定義に関連付けられているアクティビティーのリストが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • アクティビティーの詳細を表示するには、アクティビティーの名前を展開します。 • アクティビティーを追加するには、「追加」をクリックします。 • アクティビティーを編集するには、アクティビティーの名前をクリックして、「編集」をクリックします。 • アクティビティーを削除するには、アクティビティーの名前をクリックして、「削除」をクリックします。
役割	役割と関連アクセス・タイプのリストが表示されます。役割を編集するには、「編集」をクリックします。
参考情報	定義に関連付けられている参照のリストが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> • 参照の詳細を表示するには、参照の名前を展開します。 • 参照を追加するには、「追加」をクリックします。 • 参照を編集するには、参照の名前をクリックして、「編集」をクリックします。 • 参照を削除するには、参照の名前をクリックして、「削除」をクリックします。
変更ログ	標準操作手順定義の変更履歴が表示されます。
インスタンス	実行中または完了した標準操作手順のインスタンスのリストが表に表示されます。インスタンスの状況およびインスタンスの編集について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

160 ページの『標準操作手順のインスタンスの表示および編集』

標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

標準操作手順 の起動

「ソリューション管理」ビューで、標準操作手順のインスタンスを手動で起動できます。

このタスクについて

標準操作手順を起動すると、承認された最新のバージョンが起動されます。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「標準操作手順」 > 「定義」 をクリックします。
2. インスタンスを起動したい標準操作手順定義の名前をクリックします。
3. 「定義アクション」ドロップダウン・リストから、「起動」を選択します。標準操作手順のインスタンスが作成されたことを示すメッセージが表示されます。

標準操作手順のインスタンスの表示および編集

標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

このタスクについて

標準操作手順定義の以前のインスタンスと現在のインスタンスを表示できます。標準操作手順が起動されるたびに、その起動が自動か手動かにかかわらず、標準操作手順のインスタンスが作成されます。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「標準操作手順」 > 「定義」 をクリックします。
2. インスタンスを表示する標準操作手順の名前をクリックします。
3. 「バージョン」リストから、バージョンを選択します。
4. 「インスタンス」タブをクリックします。この表は各インスタンスの状況を示しており、状況の値は「アクティブ」、「開始済み」、「完了」、または「停止」のいずれかです。表には、各インスタンスの開始時刻、終了時刻、およびアクティビティ状況も示されます。アクティビティ状況については、各列の先頭に状況アイコンが表示されます。列には、インスタンスにおいてその状況にあるアクティビティの数が示されます。アイコンが示す状況値は次のとおりです。
 - 「完了」状況は、完了したアクティビティの数を示します。
 - 「アクティブ」状況は、標準操作手順が起動され、そのインスタンスがアクティブであることを示します。
 - 「待機中」状況は、開始を待っているアクティビティの数を示します。
 - 「スキップ」状況は、所有者によってスキップされたアクティビティの数を示します。
 - 「自動化の例外」状況は、示された数の自動化アクティビティについて、IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 内で問題が発生したことを示します。
5. 表内で、インスタンスをダブルクリックします。
6. 「標準操作手順の詳細」ウィンドウで、以下のオプションから選択します。
 - 標準操作手順インスタンスの基本情報を編集するには、リストから「編集」を選択します。変更を基本情報に保存するには、「保存」をクリックします。あるいは、変更をキャンセルするには、「キャンセル」をクリックします。
 - 標準操作手順インスタンスのアクティビティ、参照、および役割を表示または編集するか、コメントおよび変更ログを表示するには、それぞれのタブをクリックします。
 - インスタンスを停止するには (インスタンスが開始済みである場合)、「停止」を選択します。
 - インスタンスを開始するには (インスタンスが停止済みである場合)、「開始」を選択します。
 - 標準操作手順インスタンスの詳細をエクスポートするには、リストから「エクスポート」を選択します。
 - 標準操作手順のインスタンスにコメントを追加するには、リストから「コメントの追加」を選択します。

標準操作手順定義のエクスポートおよびインポート

標準操作手順定義を XML ファイルとしてエクスポートしたり、事前にエクスポートされた標準操作手順定義ファイルをインポートしたりできます。

手順

ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「標準操作手順」 > 「定義」 をクリックします。

- 標準操作手順定義を XML ファイルにエクスポートするには、以下のサブステップを実行します。
 - 「定義アクション」ドロップダウン・リストから、「すべてをエクスポート」を選択します。
 - 表示されたウィンドウで、「ファイルの保存」をクリックして、エクスポートされた標準操作手順定義の保存場所を指定します。
- 事前にエクスポートされた XML ファイルから標準操作手順定義をインポートするには、以下のサブステップを実行します。
 - 「定義アクション」ドロップダウン・リストから、「インポート」を選択します。
 - 「標準操作手順のインポート」ウィンドウで、アップロードするファイルを選択します。インポートした定義が標準操作手順定義のリストに表示されます。既存の標準操作手順定義と同じ名前を持つ標準操作手順定義をインポートできます。この場合、既存の標準操作手順定義は上書きされません。そうではなく、同じ名前を持つ 2 つの標準操作手順定義が、定義のリストに表示されます。

参照の操作

参照ライブラリーには、標準操作手順を実行する場合に役立ち、簡単にアクセスできるリンクが含まれています (例えば、電話番号リスト、E メール・アドレス、フォーム、通知テンプレートなど)。標準操作手順ライブラリー内の参照を追加、編集、削除、および起動できます。

このタスクについて

参照ライブラリーを編集できるのは、許可された参照ライブラリアンのみです。許可された参照ライブラリアンは、ReferenceLibrarianRoles システム・プロパティにリストされます。

手順

ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「標準操作手順」 > 「参照」 をクリックします。

- 参照をライブラリーに追加するには、以下のサブステップを実行します。
 - 「追加」をクリックします。
 - 「名前」および「URI」の値を入力します。完全修飾 URI を入力する必要があります。
 - オプション: 説明を入力します。
 - 参照をプライベートにする場合は、「プライベート」チェック・ボックスを選択します。
 - 「追加」をクリックします。参照が表に表示されます。

注: 「プライベートの表示」チェック・ボックスを選択しないと、プライベート参照は表に表示されません。

- プライベート参照を表示するには、表の上部にあるドロップダウン・リストで、「プライベートの表示」チェック・ボックスを選択します。
- アーカイブ済みの参照を表示するには、表の上部にあるドロップダウン・リストで、「アーカイブ済みの表示」チェック・ボックスを選択します。
- ライブラリー内の参照を編集するには、以下のサブステップを実行します。
 - 参照を選択します。
 - 「編集」をクリックして、値を編集します。
 - 必要に応じて、「プライベート」チェック・ボックスを選択またはクリアします。「プライベートの表示」チェック・ボックスを選択しないと、プライベート参照は表に表示されません。

4. 必要に応じて、「**アーカイブ済み**」チェック・ボックスを選択またはクリアします。「**アーカイブ済みの表示**」チェック・ボックスを選択しないと、アーカイブ済みの参照は表に表示されません。
 5. 「**保存**」をクリックします。
- ライブラリーから参照を削除するには、削除する参照を選択して、「**削除**」をクリックします。
 - ライブラリー内の参照を開くには、参照を選択して、「**起動 URI**」をクリックします。新しいブラウザ・ウィンドウで参照 URI が開きます。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』
システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

通知テンプレートの作成

通知アクティビティなどで E メールを送信するのに使用できる通知テンプレートを、参照ライブラリーに追加できます。

手順

1. E メール・テンプレートを含むテキスト・ファイルを作成し、そのテキスト・ファイルを Web サイトに掲示します。E メール・テンプレートの例を以下に示します。次のテキストは、テンプレート・テキストの例です。

```
To:  
Subject:This is a test notification  
Body:This is some text to show how  
you can add multiple lines for  
the body.
```

To、Subject、および Body のフィールドはすべてオプションです。

2. ソリューション管理 ビューで、「**構成ツール**」 > 「**標準操作手順**」 > 「**参照**」 をクリックします。
3. 「**追加**」をクリックします。
4. 通知テンプレートの**名前**を入力します。
5. 通知テンプレートが含まれているテキスト・ファイルの **URI** を入力します。
6. 説明を入力します。説明の 1 行目はキーワード NOTIFICATION のみが含まれるようにしてください。説明の詳細は、その後の行に追加できます。
7. 「**追加**」をクリックします。

第 5 章 ソリューションの統合

製品およびサービスを IBM Intelligent Operations Center に統合できます。IBM Intelligent Operations Center には、関連データや更新を組み込むことができます。

着信データ項目は、IBM Intelligent Operations Center によってモニターされる重要業績評価指標 (KPI) に関連付けることができます。IBM Intelligent Operations Center に着信するデータは、標準操作手順に関連付けることもできます。

統合できるシステムの例

製品およびサービスを IBM Intelligent Operations Center に統合できます。

システムおよびサービスの例を以下に示します。

- 公共安全の問題についてレポートするシステム。
- 交通イベントについてレポートするシステム。
- 水質および水利用についてレポートするシステム。
- 関連する作業指示書の障害および状況についてデータを提供するシステム。

これらのシステムは、IBM Intelligent Operations Center との通信が可能で、かつデータ項目および測定値をサポートされているデータ形式で IBM Intelligent Operations Center に送信する必要があります。

データ・ソースとの統合

データ・ソースは、IBM Intelligent Operations Center と外部システムとの間で情報をやり取りするために使用されます。

IBM Intelligent Operations Center では、データ・ソースは、データ交換のための汎用の形式を提供します。データ・ソースは、Web サービスなど新たに出現した技術との互換性を持つ一方で、より高度な機能も提供しています。データ・ソースには、以下の機能があります。

- 緯度や経度のシェイプその他 3 次元の地理空間表現を使用した、柔軟な地理的ターゲット設定
- 複数言語および複数の対象者に対応したメッセージ作成
- 段階的適用と遅延に対応した有効期間および期限
- 高度なメッセージ更新および取り消し機能
- デジタル暗号化および署名との互換性
- デジタル・イメージおよびオーディオ機能

データ項目は、ソリューションのコンポーネントが送信または使用できる自己完結型のデータ・メッセージです。データ項目は、トピック・キューにパブリッシュすることができ、IT システムをサブスクライブしているすべての潜在的利害関係者は、このイベントを読むことができます。データ・ソース構成によってコンテンツが標準化されるため、複数のドメインが、共通の規則を使用して、共通の形式でイベントを送受信できるようになります。この標準は、データ項目内の必須フィールドとオプション・フィールド、およびこれらのフィールドの受け入れ可能な値を定義しています。データ項目処理を管理することにより、以前のフ

フォーマットと標準フォーマットの間で調整をとることができます。データ・ソースは、緊急事態だけでなく日常の運用状況も処理するように構成することができます。データ項目の構成については、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

データ・ソース構成を使用すると、項目ごとのデータ交換を最小限に抑えることができます。データ項目は XML フォーマットで表現されるため、さまざまなシステムがデータ・フォーマットを記述して読み取ることができます。これにより、意味のないデータや危険な混乱を招くデータのやり取りを防止できます。

IBM Intelligent Operations Center には、データ項目の永続的ストレージと、それらを表示するための標準インターフェースが用意されています。

IBM Intelligent Operations Center ではデータ項目全体が受け入れられますが、重要業績評価指標 (KPI) の計算、標準操作手順のアクティブ化、またはその他のカスタマイズ・アプリケーションに使用できるデータはその一部です。

IBM Intelligent Operations Center は、WebSphere Message Broker を使用して、データ項目を統合します。

関連概念:

113 ページの『データ・ソースの構成』

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

ソリューション用のデータ準備に関するガイドライン

IBM Intelligent Operations Center のマップやリストに必要なデータを表示してフィルターに掛けるために、データ・ソースでデータを準備します。その後、「ソリューション管理」ビューでデータ・ソースを構成します。

データ・ソースで IBM Intelligent Operations Center が受け取るデータを準備します。IBM Intelligent Operations Center がデータを受け取れるようにするには、システムが必要とする最小プロパティ値と、運用状況に合わせた重要プロパティ値を組み込みます。以下のリストでは、データの収集、および最小プロパティ値と重要プロパティ値に関する重要な考慮事項を強調表示しています。IBM Intelligent Operations Center でデータ・ソースを構成する方法については、関連リンクを参照してください。

データ・ソースの適切な構成

以下のすべての条件が当てはまる場合は、データ・インポート・プロセスが失敗し、エラーが表示されます。

- 開始日と終了日の列がストリング値として構成されているソリューションに、データ・ソースからデータをインポートする。
- データ・ソースの開始日と終了日の列がストリング値ではない。
- データ・ソースの時刻列に時刻型でない値が入っている。

インポート・プロセスの失敗を防ぐために、開始日と終了日の列がストリング・データ型となるようにデータ・ソースを構成します。また、データ・ソース内の時刻列を空にします。データ・インポート・プロセスによって、デフォルトの時刻値が適切に割り当てられます。

データの収集

1.6.0.1 **1.6.0.2** システムが SQL サーバー・データベースからデータを収集するようにしたい場合は、Microsoft JDBC ドライバーをインストールしてデータ・ソースを作成します。このドライバーは、IBM Intelligent Operations Center には付属していません。

1.6.0.1 **1.6.0.2** 境界のデータ

地理空間情報マップでマークされる名前付きエリアのデータを含むデータ・ソースがある場合、表

示したいデータのエリア境界条件を設定できます。ソリューションは、エリアに関連して表示されるデータを次のようにフィルターに掛けることができます。

- 操作ビューで地理空間情報マップの表示用に使用されるデータ
- 操作ビューで地理空間情報マップに表示されるホット・スポットの生成用に使用されるデータ
- エリア状況ビューで表示される KPI 用に使用されるデータ

ポーリング間隔

データ・ソースのポーリング間隔を設定すると、必要な時間間隔に従って、システムが更新を受け取れるようになります。この設定は、システムが新規データをチェックする頻度を示します。初期データの受け取り後、更新を一切確認しないという場合は、値を 0 に設定します。それ以外の場合は、更新を受け取る時間間隔を設定してください。

エリア名

データ・ソースでロケーション・マップからのエリア名を保留するプロパティを割り当てた場合、そのデータ・ソースからのデータは地理空間情報マップ上に表示できません。そのデータ・ソースからのデータは、ロケーション・マップでのみ表示できます。

注：データベース・プロパティは、ロケーション・マップのエリア名で生じる最大文字数が収まるようにする必要があります。

最終更新日時

最終更新日時プロパティは、更新を受け取る場合に必須となる、データベース・データ・ソースのプロパティです。CSV ファイルの場合は、CSV ファイルのタイム・スタンプ値がこのプロパティに自動的に使用されます。

タイム・ゾーン・オフセット

タイム・ゾーン・オフセット値はすべてのデータ・ソースに必須であり、開始時刻値と終了時刻値に影響を与えます。データ・ソースがシステムと同じタイム・ゾーンにある場合は、この値を 0 に設定します。値は分単位ですが、30 で割り切れる値を指定する必要があります。

形状 データ項目の位置が Well-Known Text (WKT) 形式の場合は、ロケーション・プロパティで形状オプションを選択してください。また、データ・ソースから、位置の値を示すプロパティをマップする必要もあります。

注：データをマップ上のポイントや形状で表すには、座標を WKT 形式にする必要があります。サポート対象のポイントや形状について受け取るデータは、有効な WKT 形式でなければなりません。この要件は、サポート対象のすべてのデータ入力方式 (データベース表、CSV ファイル、ユーザー・インターフェースからのユーザー入力) に当てはまります。

緯度および経度

データベース表または CSV ファイルからデータを受け取る場合は、緯度と経度を別々のプロパティとして指定できます。

重要プロパティと詳細プロパティ

操作ビューや状況ビューで、データをリストおよびプレビュー・カード形式で表示する場合は、データ・ソース・プロパティを重要プロパティに割り当てます。データベース表または CSV ファイルからデータを受け取る場合は、緯度と経度を別々のプロパティとして指定することもできます。

列挙値をフィルタリング

実行時に受信されるプロパティ値 (「列挙値」と呼ばれます) は、「マップ」タブまたは「リス

ト」タブでのデータのフィルタリングに使用できます。値をこの目的で使用するには、データ・ソースを構成する際に「キー・プロパティ」フィールドを「はい」に設定し、「列挙値をフィルタリング」フィールドを「はい」に設定します。

許容される値

データ・ソースの構成時に入力されるプロパティ値（「許容される値」と呼ばれます）は、「マップ」タブまたは「リスト」タブでのデータのフィルタリングに使用できます。値をこの目的で使用するには、データ・ソースを構成する際に「許容される値」フィールドに値を入力してください。また、「キー・プロパティ」フィールドを「はい」に設定し、「列挙値をフィルタリング」フィールドを「いいえ」に設定する必要があります。

注：この構成では、新規データ項目が「マップ」タブまたは「リスト」タブに追加されるときにユーザーが入力できる値も制限されます。

索引 ID として使用

ソース内のデータ更新に応じてソリューション内の既存のデータを更新する場合は、ID フィールドに値を設定します。このフィールドに値を指定しない場合は、ソースの更新時に各データ項目が新規データ項目とみなされます。ID 値は、ソース内で固有でなければなりません。最終更新日時フィールドや、この ID 以外のフィールドがソースで変更されると、その項目が更新されます。

注：この場合は、ソースがレコードのシステムとなり、IBM Intelligent Operations Center で行われた変更内容がソースの更新内容によって上書きされます。

以下のガイドラインは、CSV ファイルのみに当てはまります。

- CSV ファイルの 1 行目には、コンマで区切られたプロパティ名のリストを指定する必要があります。
- CSV ファイルの 2 行目以降の各行には、1 行目の各プロパティ名に対応する値を、プロパティと同じ数だけ指定する必要があります。
- 行の末尾に余分なコンマを入れないでください。また、各行のコンマの数は同じでなければなりません。
- アポストロフィ、単一引用符、二重引用符は使用できません。
- CSV ファイルがシステムによって処理されると、名前が変更されます (例: Test3_processed_123.csv)。
- 既存の CSV ファイル・データ・ソースを更新するには、アプリケーション・サーバー上のディレクトリに元の名前のファイルを置きます。受け取ったファイルごとに CSV ファイルのすべての行が処理されるため、重複を避けるために既存のエントリを削除することをお勧めします。

関連概念:

113 ページの『データ・ソースの構成』

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

DB2 データ・ソース

DB2 データベース・データ・ソースを準備する際に考慮すべき条件がいくつかあります。

64 ビット整数データ型と 10 進データ型

いくつかの DB2 数値データ型は、IBM Intelligent Operations Center ユーザー・インターフェースでの丸めを前提としています。例えば、10 進データ型および 64 ビット整数データ型の値は、16 桁の数値、または 17 桁の 10 進数に丸められます。

IBM Intelligent Operations Center は JavaScript を使用しますが、これには、数値を表すための倍精度 64 ビット形式の IEEE 754 値が用意されています。この方式では、53 ビット精度が提供されます。いくつかの DB2 データ (例えば、10 進データ型および 64 ビット整数データ型) は、最大 63 ビットまでの、高いレベルの精度を許可します。REST API サービスは、全範囲の可能な値を利用することができます。ただし、これらの値は、ユーザー・インターフェースを介して表示またはサブミットされるときに、JavaScript の低い方の精度制限に合うように丸められる可能性があります。

ユーザー・インターフェースの要素は、この制限により、以下のように影響を受ける可能性があります。

- 「リスト」タブでデータ・プロパティ値を表示すると、DB2 データベースに保管されている値に対して異なる値が示されます。
- プレビュー・カードでデータ・プロパティ値を表示すると、DB2 データベースに保管されている値に対して異なる値が示されます。
- 「新規項目」ダイアログでのプロパティのデータの入力は完了できず、エラーになります。

文字データ型

ソース DB2 データベースに文字データ型がある場合、ルーティング式を使用するようにデータ・ソースが構成されていると、予想外の動作が発生する可能性があります。この動作は、データ・ソースのルーティング式処理の結果として WebSphere Business Monitor に送信されたメッセージに余分なスペースが取り込まれるために発生する可能性があります。

DB2 での文字データ型は、固定長列です。例えば、名前プロパティ CHAR(20) を宣言し、20 文字より短い名前「IBM」を入力します。すると、DB2 によって、この値にスペースが追加されます。データがデータのインポート・ロジックによって処理される際に、式が評価されます。データ受信側は、ルーティング宛先と、IBM Intelligent Operations Center に保管するために DB2 ターゲット表に宛てて、文字「IBM」のほかに、17 個の空の文字スペースを送信します。その結果、データは予想どおりにルーティングされません。

SQL を使用した名前付きエリアの定義

1.6.0.1

1.6.0.2

多数の名前付きエリアを含んだ名前付きエリア・タイプのデータ・ソースを定義することができます。マップ上で各名前付きエリアのポリゴンを個別に描く代わりに、SQL 表を使用して名前付きエリア・ポリゴンを定義できます。その後、データベースに接続するデータ・ソースを作成して、SQL 表から名前付きエリア・データを収集します。

このタスクについて

名前付きエリアを正常に作成するには、次のステップを順番に実行する必要があります。SQL 表からデータを収集するデータ・ソースを作成する前に、名前付きエリア・ポリゴン・データを SQL 表に挿入する必要があります。名前付きエリア・タイプのデータ・ソース用の SQL データは、データ・ソース作成時のみ収集されます。データ・ソースが作成された後に、名前付きエリア・タイプのデータ・ソースで更新データがポーリングされることはありません。

手順

1. IBM Intelligent Operations Center データ・サーバー にログオンし、データベースに接続します。
2. 名前付きエリアのデータ・ソース表を作成します。表内のプロパティの長さは、名前付きエリアを定義するポリゴンの事前割り当てテキスト (WKT) 形式の値を格納できるだけの大きさにしてください。

プロパティがポリゴンの値を格納できる大きさでないと、名前付きエリアは作成されません。例えば、以下の SQL コマンドは、SAMPLE.NAMED_AREA という名前の表を作成します。

```
drop table SAMPLE.NAMED_AREA;
create table SAMPLE.NAMED_AREA (
  StartDateTime TIMESTAMP,
  EndDateTime TIMESTAMP,
  LOCATION VARCHAR(500),
  NAME VARCHAR(30),
  LastUpdateDateTime TIMESTAMP,
  TIMEZONEOFFSET INTEGER,
  INCIDENT_NUMBER VARCHAR(100),
  PROBLEM VARCHAR(100),
  CALL_DISPOSITION VARCHAR(100),
  PRIORITY_NUMBER INTEGER
)
DATA CAPTURE NONE;
```

3. 名前付きエリアの表に名前付きエリアのデータを挿入します。以下の例では、単一のポリゴンを表に挿入します。

```
INSERT INTO SAMPLE.NAMED_AREA (
  STARTDATETIME,
  ENDDATETIME,
  LOCATION,
  NAME,
  LASTUPDATEDATETIME,
  TIMEZONEOFFSET,
  INCIDENT_NUMBER,
  PROBLEM,
  CALL_DISPOSITION,
  PRIORITY_NUMBER)
VALUES (
  CURRENT_TIMESTAMP,
  CURRENT_TIMESTAMP,
  'POLYGON((-93.64833644901181 45.07616323264413,-93.54259304081118
  45.0732538434894,-93.55083278690229 45.012607882373146,
  -93.64970974003148 45.02037415319953,-93.64833644901181
  45.07616323264413))',
  'Polygon_001',
  CURRENT_TIMESTAMP,
  0,'10021',
  'problem',
  'call_dispostion',
  '2');
```

4. IBM Intelligent Operations Center にログオンし、『データ・ソースの構成』セクションの説明に従ってデータ・ソースを作成します。次の点に注意してください。
 - 「収集」タブで、データ・ソースの収集方法として「データベースに接続」を選択します。
 - 「基本」タブで、「境界のデータ」に対して「はい」を選択します。

タスクの結果

操作ビューのフィルター・パネルの「境界」ペインで、データ・ソースの名前付きエリアのリストに SQL ファイルで定義した名前付きエリアが表示されます。

関連概念:

113 ページの『データ・ソースの構成』

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

関連資料:

118 ページの『データ・ソースの基本設定』

「基本」タブ上で設定を選択して、データ・ソースに適した基本的な情報の入力および選択を行います。

データ項目のルーティング

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を処理して、情報の表示方法を決定します。

他の製品およびサービスは、メッセージング・パス・サービスを通じて IBM Intelligent Operations Center と統合できます。KPI は、ビジネス・モニター・サービスによってモニターされます。

データ項目は、IBM Intelligent Operations Center が受信します。データ項目はリストに表示することができます。また、これらのデータ項目が、地理情報マップまたはロケーション・マップでユーザー・インターフェースに表示される内容に影響する場合があります。対応する KPI ルーティングや標準操作手順ルーティングがないデータ項目は、データ項目に関する受信した情報に基づいて表示されます。

対応するデータ・ソースの構成によって、システムがデータ項目を受信したときに、そのデータ項目がどのようにルーティングされるかが決まります。「データ・ソース」構成ツールには、宛先と処理に関する以下のオプションが用意されています。

- IBM Intelligent Operations Center
- 重要業績評価指標
- 標準操作手順
- 統合トピック

データ項目を複数の宛先にルーティングする複数のルーティング式を作成することができます。ただし、いずれかのルーティング式が IBM Intelligent Operations Center を宛先としている場合は注意が必要です。それ以外のルーティング式は、データ項目を IBM Intelligent Operations Center にルーティングするルーティング式が true と評価された場合にのみ評価されます。

このため、同じプロパティを使用して複数の宛先にデータ項目をルーティングする場合に、宛先の 1 つが IBM Intelligent Operations Center であるときは、各ルーティング式でそのプロパティを同じ値にする必要があります。そうしないと、データ項目を IBM Intelligent Operations Center にルーティングするルーティング式が false と評価された場合に、他のルーティング式がすべて評価されなくなります。例えば、以下のルーティング式を定義するシナリオについて考えてみます。

- プロパティ A の値が ABC である場合は、IBM Intelligent Operations Center にデータ項目をルーティングします。
- プロパティ A の値が DEF である場合は、KPI 処理にデータ項目をルーティングします。

このシナリオでは、データ項目が KPI 処理に送信されません。あるデータ項目で A の値が ABC である場合は、そのデータ項目が IBM Intelligent Operations Center にインポートされます。A の値が DEF である場合は、データ項目が IBM Intelligent Operations Center にインポートされず、2 番目の式は評価されません。

「データ・ソース」構成ツールとデータのルーティングについて詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

重要業績評価指標

データ・ソースを構成するときに、IBM Business Monitor による KPI 処理にデータ項目をルーティングして、データ項目が KPI 値の計算に組み込まれるようにすることができます。KPI モデルでの KPI の定義によって、ユーザー・インターフェースの状況ビューで KPI がどのように表示されるかが決まります。ま

た、データ項目の情報がどのように処理されるかも決まります。例えば、KPI しきい値を超過した場合、データ項目に高い緊急度または重大度のフラグを立てる場合があります。管理者は、「重要業績評価指標」構成ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center の既存の KPI モデルを変更または拡張することができます。KPI モデルは、最初に IBM Business Monitor で作成されます。KPI の構成と統合について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

標準操作手順

データ・ソースを構成するときに、データ項目を特定の標準操作手順にルーティングすることができます。データ項目がルーティング式に一致すると、選択した標準操作手順定義に基づいて標準操作手順の新しいインスタンスが作成されます。標準操作手順のインスタンスが既に実行中である場合は、そのアクティブな標準操作手順インスタンスにデータ項目が関連付けられます。標準操作手順定義の構成と表示について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

統合トピック

ソリューションに独自のルーティング先を追加できます。WebSphere Application Server 統合トピックを作成して、ソリューションに追加することができます。

統合トピックにルーティングするデータ・ソースのカスタム・プロパティでルーティング・スキーマ・ファイルを更新した場合は、そのルーティング・スキーマ・ファイルを使用して一連の Java JAXB クラスを生成できます。統合トピックを listen しているアプリケーションでは、このルーティング・スキーマ・ファイルを使用して、着信 XML メッセージをアプリケーションが処理できる Java クラスに変換できます。

関連概念:

113 ページの『データ・ソースの構成』

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されません。

176 ページの『KPI の作成および統合』

重要業績評価指標 (KPI) モデルは、ビジネス・モニター開発ツールキット、および「重要業績評価指標」構成ツールを使用して作成および変更できます。

154 ページの『標準操作手順の構成』

標準操作手順とは、1 つのプロセスまたは手順に関連するすべてのステップおよびアクティビティを記述した、一連の指示です。複雑で予測不能なイベントに対して、組織が一貫性と計画性のある高品質の対応を実施するには、標準操作手順が不可欠です。

関連タスク:

127 ページの『データ・ソースからのデータのルーティング』

データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

ルーティング・スキーマ・ファイル

IBM Intelligent Operations Center の基本ルーティング・スキーマ・ファイルには、すべてのデータ・ソースに共通のプロパティに対応する要素が含まれています。データ・ソースに固有のプロパティも組み込むには、ルーティング・スキーマ・ファイルを更新します。更新されたスキーマ・ファイルは、データを

KPI にルーティングする際に使用されます。また、統合トピックにルーティングされるレコードを処理するアプリケーションを作成するときにも、更新されたスキーマ・ファイルを使用できます。

基本ルーティング・スキーマ・ファイル

KPI にルーティングされる XML メッセージは、以下に示す IOC-routing-v1.6.xsd 基本ルーティング・スキーマ・ファイルに基づいています。IOC-routing-v1.6.xsd ファイルは、サンプル・モニター・モデルに含まれています。

```
<complexType>
  <all>
    <!-- * Minimal properties */ -->
    <element name="DATASOURCEID" type="integer" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="OBJECTID" type="integer" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="STARTDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="ENDDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="LASTUPDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="ASSESSMENTDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="TIMEZONEOFFSET" type="integer" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="LOCATION" type="string" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="NAME" type="string" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <!-- * Key/Full properties */ -->
  </all>
</complexType>
```

変更されたルーティング・スキーマ・ファイルのサンプル

基本ルーティング・スキーマ・ファイルを `ioc_sample_monitor_models` で使用できるようにするには、以下の例と一致するように IOC-routing-v1.6.xsd 基本ルーティング・スキーマ・ファイルを変更する必要があります。データ・ソースの構成によっては、ルーティングされる XML メッセージに以下のキーと詳細プロパティがすべて組み込まれる場合と組み込まれない場合があります。

```
<complexType>
  <all>
    <!-- * Minimal properties */ -->
    <element name="DATASOURCEID" type="integer" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="OBJECTID" type="integer" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="STARTDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="ENDDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="LASTUPDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="ASSESSMENTDATETIME" type="dateTime" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="TIMEZONEOFFSET" type="integer" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="LOCATION" type="string" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="NAME" type="string" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <!-- * Key/Full properties */ -->
    <element name="SUPPLY" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="DEMAND" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="REVENUE" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="PROJECTED_REVENUE" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="BUDGET" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="EXPENSES" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="AIRPORT" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="DELAYS" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="INCIDENT_NUMBER" type="string" minOccurs="1" maxOccurs="1" />
    <element name="STATION" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="SOURCE" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="DISCHARGE" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="PRECINCT" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="PROBLEM" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="SEVERITY" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="LEAKAGE" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="LEVEL" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
    <element name="PH" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
  </all>
</complexType>
```

```

<element name="TURBIDITY" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
<element name="DEPARTMENT" type="string" minOccurs="0" maxOccurs="1" />
</all>
</complexType>

```

KPI 更新のためのデータ・ソースのルーティング

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を KPI にルーティングする必要があるかどうかを判別できます。

KPI にルーティングするように構成されたデータ・ソースからデータ項目が到着すると、システムが KPI XML メッセージを生成し、IBM Business Monitor のモニター・モデルで処理できるようにそのメッセージを送信します。データ・ソースに固有のプロパティをルーティング・スキーマ・ファイルに追加して、モニター・モデルが着信 XML メッセージからそれらのプロパティを抽出できるようにする必要があります。ルーティング・スキーマ・ファイルの編集について詳しくは、KPI のモデル化に関するトピックへのリンクを参照してください。

以下に示すサンプルの XML メッセージは、ioc_sample_monitor_models に関連付けられている KPI を更新します。

```

<iocrt:record xsi:schemaLocation="urn:ibm:industry:solutions:ioc:routing:1.6
IOC-routing-v1.6.xsd " >
<iocrt:AIRPORT> null</iocrt:AIRPORT>
<iocrt:BUDGET> null</iocrt:BUDGET>
<iocrt:LEAKAGE> null</iocrt:LEAKAGE>
<iocrt:DELAYS> null</iocrt:DELAYS>
<iocrt:LEVEL> null</iocrt:LEVEL>
<iocrt:DEMAND> null</iocrt:DEMAND>
<iocrt:DEPARTMENT> null</iocrt:DEPARTMENT>
<iocrt:NAME> water quality</iocrt:NAME>
<iocrt:PH> Take Action</iocrt:PH>
<iocrt:TIMEZONEOFFSET> 0</iocrt:TIMEZONEOFFSET>
<iocrt:DISCHARGE> null</iocrt:DISCHARGE>
<iocrt:PRECINCT> null</iocrt:PRECINCT>
<iocrt:EXPENSES> null</iocrt:EXPENSES>
<iocrt:PROBLEM> null</iocrt:PROBLEM>
<iocrt:ID> 26</iocrt:ID>
<iocrt:PROJECTED_REVENUE> null</iocrt:PROJECTED_REVENUE>
<iocrt:INCIDENT_NUMBER> null</iocrt:INCIDENT_NUMBER>
<iocrt:REVENUE> null</iocrt:REVENUE>
<iocrt:SEVERITY> null</iocrt:SEVERITY>
<iocrt:SOURCE> null</iocrt:SOURCE>
<iocrt:STATION> null</iocrt:STATION>
<iocrt:OBJECTID> 1974</iocrt:OBJECTID>
<iocrt:LASTUPDATEDATETIME> 2013-07-29T08:36:30+00:00</iocrt:LASTUPDATEDATETIME>
<iocrt:DATASOURCEID> 28</iocrt:DATASOURCEID>
<iocrt:SUPPLY> null</iocrt:SUPPLY>
<iocrt:TURBIDITY> Caution</iocrt:TURBIDITY>
<iocrt:LOCATION> POINT(-93.3047103742181 45.00458169489491)</iocrt:LOCATION>
<iocrt:ENDDATETIME> 2013-07-29T08:36:30+00:00</iocrt:ENDDATETIME>
<iocrt:ASSESSMENTDATETIME> 2013-07-26T16:20:12+00:00</iocrt:ASSESSMENTDATETIME>
<iocrt:STARTDATETIME> 2013-07-26T16:20:12+00:00</iocrt:STARTDATETIME>
</iocrt:record>

```

関連概念:

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されます。

440 ページの『通知の表示』

「通知」をクリックすると、通知およびその詳細についての動的リストが表示されます。

関連タスク:

178 ページの『KPI のモデル化』

KPI をモデル化するには、IBM Business Monitor 開発ツールキットがインストールされている Rational Application Developer または WebSphere Integration Developer を使用します。

統合トピックへのデータのルーティング

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を統合トピックにルーティングする必要があるかどうかを判別し、そのデータを事前定義された WebSphere Application Server 統合トピックに送信することができます。

始める前に

- 処理アプリケーションに対して必要な統合トピックを作成します。
- データ・ソースからの着信 XML メッセージを、アプリケーションが処理できる Java クラスに変換する場合は、データ・ソースのカスタム・プロパティでルーティング・スキーマ・ファイルを更新します。

このタスクについて

データ項目が、統合トピックへのルーティング対象として構成されたデータ・ソースから送信されている場合は、システムによって XML メッセージが WebSphere Application Server 統合トピックに送信され、処理されます。WebSphere Application Server 統合トピックを定義するには、以下の手順に従います。

手順

1. 「ソリューション管理」 > 「システム管理」 > 「管理コンソール」をクリックします。
2. 「アプリケーション・サーバー」をクリックします。
3. 管理ユーザー ID とパスワードでログインします。
4. 「新規エンタープライズ・アプリケーション」ウィザードの手順に従って、新規アプリケーションをアプリケーション・サーバーに追加します。
 - a. 「アプリケーション」 > 「新規アプリケーション」 > 「新規エンタープライズ・アプリケーション」をクリックします。
 - b. ローカル・ファイル・システムまたはリモート・ファイル・システムでの新規アプリケーションのパスを選択し、システムを参照してファイルを見つけ、アップロードします。
 - c. ファスト・パス・オプションを選択してインストールします。
 - d. 「モジュールをサーバーにマップ」ステップで、既存のサーバーを選択します。
 - e. リストから「PortalCluster」を選択し、「適用」をクリックします。
 - f. 要約ステップに到達するまで「次へ」をクリックし、「完了」をクリックします。
5. 「リソース」 > 「JMS」 > 「アクティベーション・スペック」をクリックします。
6. 「新規」をクリックしてアクティベーション・スペックを追加します。
 - a. デフォルトの有効範囲 cell=cell11 とデフォルトのメッセージ・プロバイダーをそのまま使用する場合は、「OK」をクリックします。
7. 「構成」タブで、アクティベーション・スペックの一般プロパティ・フォームに入力します。
 - a. 表示名 (topicTestAS など) を入力します。
 - b. JNDI 名 (eis/topicTestAS など) を入力します。
 - c. 「宛先タイプ」フィールドで、「Topic」を選択します。
 - d. 宛先の JNDI 名 jms/iocIntegration を入力します。

- e. 「バス名」フィールドで、「IO0.cell11.BUS」を選択します。
8. 「サーバー」 > 「クラスター」 > **WebSphere アプリケーション・サーバー・クラスター** をクリックし、「PortalCluster」を選択して、「開始」をクリックします。
9. WebSphere Application Server からログアウトします。

タスクの結果

ルーティング式の条件を満たすデータ項目がデータ・ソースに含まれており、宛先が「統合トピック」である場合は、データが統合トピックに送信されます。

次のタスク

データ・ソースから統合トピックにデータをルーティングする方法については、トピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

127 ページの『データ・ソースからのデータのルーティング』
データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

データ項目の相関

1.6.0.1 1.6.0.2

ソリューション管理者は、データ・ソースを構成して相関用に使用できるようにすることができます。また、ソリューション管理者は、ルーティング基準を構成して、データ項目をデータ・ソースから相関トピックまで送付することもできます。データ項目が相関トピックまで送付される際、相関プロセスはそのデータ項目が他の相関データ項目と相関していないかどうかを評価します。相関プロセスは、相関が発生すると通知を送信します。

相関プロセスには、以下のステップが含まれています。

1. 相関トピックは、システム・プロパティ表から以下の相関設定を読み取ります。

radius 送付されたデータ項目と相関されたデータ項目間の最大距離。デフォルト値は 200 です。

distanceUnit

データ項目間の距離が測定される単位。メートル、キロメートル、または法定マイルの場合があります。デフォルト値は METER です。その他の有効値は、KILOMETER および STATUTE_MILE です。

minutesBefore, minutesAfter

送付されたデータ項目と相関されたデータ項目間の最大時間差。時間差は分単位で測定され、各データ項目の開始日に相対します。デフォルト値は、minutesBefore と minutesAfter の両方について 120 です。

notificationSummaryThreshold

特定のデータ項目の相関数が通知サマリーしきい値を超えると、個々の通知の代わりにサマリートの通知が送信されます。デフォルト値は 10 です。

targetGroups

相関の通知が送信される先のユーザー・グループ。デフォルト値は ["CityWideOperator", "CityWideSupervisor", "wpsadmins"] です。

2. 相関についてアクティブ化されるデータ・ソース内で、相関トピックは以下の条件のすべてに一致するデータ項目を検索します。条件は相関設定に基づいており、送付されたデータ項目に相対して評価されます。
 - データ項目が相関について事前定義された空間距離内にあります。
 - データ項目が相関について事前定義された時間距離内にあります。
3. 相関トピックが相関を検索すると、個々の相関通知またはサマリー通知のいずれかを送信します。通知サマリーしきい値を超えると、相関トピックはサマリー通知を送信します。通知は、ターゲット・グループ・システム・プロパティで定義されたグループに送信されます。

注: 通知に含まれる距離および時間の値は、相関設定に定義されている距離および時間の最大値です。したがって、値は、相関データ項目間の正確な距離および時間を表しません。

個々の通知のサンプル

個々の通知には、次の例のようなヘッドラインが含まれる場合があります。

Source Name in Emergency Services data source might be related to Target Name in Police data source.

通知の本文には、次の例のようなテキストが含まれる場合があります。

Target Name is located less than 13.2m away and started between 4 minutes before and 15 minutes after Source Name.

サマリー通知のサンプル

サマリー通知には、次の例のようなヘッドラインが含まれる場合があります。

Source Name in Emergency Services data source might be related to 23 data items in Police data source.

通知の本文には、次の例のようなテキストが含まれる場合があります。

23 data items are located less than 13.2m away and started between 4 minutes before and 15 minutes after Source Name.

データ・ソースのタイム・スタンプの同期

データ受信側がデータ・ソースの更新情報を受信すると、更新されたデータ・ソースにタイム・スタンプが適用されます。タイム・スタンプを決定するために使用される方法は、いくつかの要因に応じて決まります。

更新されたデータ・ソースに適用されるタイム・スタンプは、以下の条件に応じて決定されます。

- 最終更新のタイム・スタンプがデータ・ソースにマップされていない場合、データ受信側は、リフレッシュ間隔ごとに、ターゲット・データベース表をソース・データベース表内のデータでリフレッシュします。
- タイム・ゾーンの設定が指定されていない場合は、すべてのタイム・スタンプが GMT タイム・スタンプとしてターゲット・データベース表に保管されます。
- タイム・ゾーンの設定が指定されている場合は、着信タイム・スタンプにタイム・ゾーンの設定が適用され、そのタイム・スタンプは GMT タイム・スタンプとしてターゲット・データベース表に保管されます。
- ソース・システムとターゲット・システムの間で時間が同期されていない場合は、データ・ソースに適用されるタイム・スタンプを予測できません。例えば、ソース・システム上のタイム・スタンプがターゲット・システム上のタイム・スタンプよりも進んでいる場合は、ターゲット・システム上で項目が重複する可能性があります。

関連資料:

120 ページの『データ・ソースの最小プロパティの設定』
データ・ソースからのプロパティを各最小プロパティに割り当て、データに適した設定を選択します。

KPI の作成および統合

重要業績評価指標 (KPI) モデルは、ビジネス・モニター開発ツールキット、および「重要業績評価指標」構成ツールを使用して作成および変更できます。

IBM Business Monitor 開発ツールキットは、Rational Application Developer とともにインストールできます。両製品は IBM Intelligent Operations Center に同梱されています。IBM Business Monitor 開発ツールキットは、WebSphere Integration Developer とともにインストールすることもできます。

KPI を定義また変更する前に、KPI の基盤となるデータ・ソースと XML スキーマについて理解する必要があります。例えば、水源の水位を追跡する KPI を定義する場合、水源の名前や水深 (フィート単位) など、追跡する必要があるデータ項目プロパティに対応するスキーマを認識する必要があります。KPI をこのように追加または変更した後、その KPI を IBM Business Monitor サーバーにデプロイする必要があります。

IBM Business Monitor および IBM Business Monitor 開発ツールキットについて詳しくは、IBM Business Monitor の製品資料を参照してください。

IBM Business Monitor を通じて KPI モデルおよびメトリックを設定したら、IBM Intelligent Operations Center の「重要業績評価指標」構成ツールを使用して、KPI を作成および変更できます。

関連概念:

169 ページの『データ項目のルーティング』

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を処理して、情報の表示方法を決定します。

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されません。

143 ページの『KPI モデルの表示または変更』

管理者は、「**KPI 定義**」タブを使用して、ソリューション内で使用可能な KPI モデルを表示または変更できます。

199 ページの『KPI のカスタマイズ』

IBM Intelligent Operations Center では、ビジネス・プロセスに適合するよう重要業績評価指標 (KPI) モデルをカスタマイズできます。

201 ページの『サンプル KPI』

IBM Intelligent Operations Center では、サンプル KPI が提供されています。このサンプル KPI は、IBM Business Monitor 開発ツールキットを使用してさまざまなタイプの KPI を実装する際のガイダンスとなるように設計されています。水道、輸送、および公共安全用のサンプル・モニター・モデルが用意されています。

関連資料:

95 ページの『ソリューションに付属するツールのインストール』

IBM Intelligent Operations Center には、ツールキットと開発ツールが付属しています。これらは、IBM Intelligent Operations Center をカスタマイズするときに使用します。

関連情報:

 IBM Business Monitor の製品資料

モニター・モデルと KPI

ビジネス・モニター・モデルは、重要業績評価指標 (KPI) と関連メトリック、インバウンド・イベントに関連する依存関係、ビジネス・アクションが必要となる状態、およびビジネス・アクションを起動する可能性のある状態を知らせるアウトバウンド・イベントを定義します。

IBM Business Monitor のモニター・モデルには、以下のサブモデルを含めることができます。

- モニター詳細モデル
- KPI モデル (KPI model)
- 寸法モデル
- 視覚モデル
- イベント・モデル

モニター詳細モデルには、ほとんどのモニター・モデル情報が収容されています。

IBM Intelligent Operations Center に付属のサンプル・モニター・モデルでは、視覚モデルまたはディメンション・モデルが使用されていません。

モニター詳細モデルは、1 つ以上のモニター・コンテキストを定義します。モニター・コンテキストは、1 つ以上のインバウンド・イベントから収集されモニターされる情報を定義します。IBM Intelligent Operations Center の場合、モニターの対象となるエンティティはルーティング・メッセージです。ルーティング・メッセージは、IBM Intelligent Operations Center がデータ・ソースから受信するデータ項目から生成される XML メッセージです。この XML メッセージから収集される情報を使用して、KPI を計算します。

KPI モデルには、1 つ以上の KPI コンテキストが含まれています。このコンテキストは、KPI と KPI に関連付けられたトリガーおよびイベントを定義します。KPI コンテキストは、インバウンド・イベントを処理し、繰り返し発生する待機時間トリガーを評価して、アウトバウンド・イベントを送信できます。例えば、コンテキストによって、KPI が定義済みの範囲外にある場合に XML 通知を送信するよう指定できます。

イベント・モデルは、モニター・モデル内で使用されるすべてのイベント・インバウンド定義およびイベント・アウトバウンド定義を参照します。イベント・モデルは、個々のイベント部分の構造を記述した XML スキーマを参照します。

モニター・コンテキスト・インスタンス

モニター・コンテキスト・インスタンスは、モニター・コンテキスト内で特定の時点で収集される情報です。

IBM Intelligent Operations Center では、モニター・コンテキスト・インスタンスはルーティング・メッセージに対応します。ルーティング・メッセージは、IBM Intelligent Operations Center がデータ・ソースからデータ項目を受信するたびに生成する XML メッセージです。そのような XML メッセージを IBM Business Monitor が受信すると、モニター・コンテキスト・インスタンスが作成または再利用されます。そのコンテキスト・インスタンス内のメトリックには、モニター・コンテキストに基づいて XML メッセージの値が設定されます。

モニター・コンテキストは、各ルーティング・メッセージに対して新規インスタンスを作成するよう定義することも、既存のインスタンスを再利用するよう定義することもできます。例えば、特定の場所で水量レベルを毎日サンプリングして、KPI で 1 週間の平均水量レベルを計算する場合は、各ルーティング・メッセージに対して新規モニター・コンテキスト・インスタンスを作成します。各インスタンスには、その日の水量レベルが格納されており、KPI によって 7 日間の測定値の平均が算出されます。

KPI は、モニター・コンテキストについて定義されたメトリックを使用して計算されます。集約 KPI を定義するときは、モニター・コンテキストと、KPI 集約関数の入力として使用するメトリックを指定します。KPI の評価時には、モニター・コンテキスト・インスタンスのメトリック値が集約関数によって使用され、KPI 値が計算されます。

KPI のモデル化

KPI をモデル化するには、IBM Business Monitor 開発ツールキットがインストールされている Rational Application Developer または WebSphere Integration Developer を使用します。

このタスクについて

KPI は、Rational Application Developer または WebSphere Integration Developer のいずれかと IBM Business Monitor 開発ツールキットを使用してモデル化されます。Rational Application Developer と IBM Business Monitor 開発ツールキットは、IBM Intelligent Operations Center に同梱されています。これらのツールについて詳しくは、このトピックの最後にある製品資料のリンクを参照してください。

モニター・モデルは、ビジネス・モニター・プロジェクト内に収容されています。モデルおよびプロジェクトは、IBM Business Monitor 開発ツールキットで提供される Rational Application Developer ビジネス・モニター・ウィザードを使用して作成されます。

KPI をモデル化するには、以下の手順を実行します。

手順

1. IBM Intelligent Operations Center が受信するデータ・ソースとデータ項目を把握します。
2. KPI の目的を把握します。例えば、KPI は以下のように使用することができます。
 - 制限に到達するか制限を超えた場合に、アクションを実行する必要があることを KPI で示す。
 - KPI を使用して、履歴データまたは統計データを計算する。
3. モニター・コンテキストの名前を決めます。IBM Intelligent Operations Center の命名規則では、データ項目名をモニター・コンテキスト名として使用します。IBM Intelligent Operations Center が受信する各データ項目から、XML 形式のデータを含むルーティング・メッセージが生成されます。IBM Intelligent Operations Center に付属のサンプル・モデルでは、IBM Business Monitor に送信される各ルーティング・メッセージに対して、個別のモニター・コンテキスト・インスタンスが生成されます。
4. IBM Business Monitor 開発ツールキットがインストールされている Rational Application Developer または WebSphere Integration Developer で、モニター・コンテキストのインバウンド・イベントを定義します。インバウンド・イベントの定義では、コンテキストがモニターするルーティング・メッセージの構造、コンテキストを一意的に定義するキー、およびメッセージから抽出する情報を定義するメトリックを指定します。
 - a. XML スキーマを作成します。スキーマは、IBM Business Monitor へのインバウンド・イベントの構造を定義します。

- b. IBM Business Monitor インバウンド・イベントの名前と ID を指定します。ID には、スペースや特殊文字を含めることはできません。デフォルトでは、スペースを下線で置換した名前から ID が作成されます。IBM Intelligent Operations Center に付属するすべてのサンプル・モデルでは、デフォルトの ID が使用されています。
 - c. データ項目に使用するものとして作成してある XML スキーマを指定します。このスキーマは、モデリング・プロジェクトに存在する必要があります。IBM Intelligent Operations Center には、サンプルの `ioc_sample_monitor_models` モデリング・プロジェクトにスキーマのコピーがあります。
 - d. ルーティング・メッセージの、必要なフィルター処理を定義します。例えば、特定の重大度レベルを表す特定のプロパティ値を含むデータ項目に対するモニターを制限するなどが考えられます。
 - e. XML メッセージから抽出するメトリックを指定します。
 - f. モニター・コンテキスト・インスタンスを一意的に識別するコンテキスト・キーを定義します。キー値は、モニター・コンテキスト・インスタンスが生成されると、インバウンド・イベントによって指定されます。
 - g. インバウンド・イベントを相関付けるかどうかを指定します。
5. KPI コンテキストを指定します。KPI コンテキストは、KPI と KPI 関連トリガーおよびイベントのコンテナです。モニター・コンテキストとは異なり、KPI コンテキストにはキーもメトリックもありません。KPI を作成する前に、KPI コンテキストをコンテナとして作成しておく必要があります。
 6. 前に定義した KPI コンテキストの内部に、KPI を作成します。
 7. KPI のタイプ（「**10 進数**」または「**期間**」）を指定します。
 8. KPI の範囲、値、および色インジケータを定義します。IBM Intelligent Operations Center KPI の大半のサンプルでは、3 つの範囲とそれに関連する色が定義されます。

表 35. サンプル KPI の範囲および色の定義

名前	色	RGB
許容可能	緑	699037
注意	黄	FDBA1A
クリティカル	赤	C32E14

9. KPI の計算方法を定義します。KPI の値は、2 つの方法のうちいずれか一方で決まります。集約関数を使用するメトリックから値を計算した場合、KPI は集約 KPI と呼ばれます。他の KPI またはユーザー定義の XPath 関数に基づいて値を計算した場合、KPI は式 KPI と呼ばれます。

IBM Intelligent Operations Center のサンプルでは、最低レベルの KPI (子 KPI のない KPI) が集約 KPI として定義されています。より高いレベルの KPI (子 KPI を持つ KPI) は、式 KPI として定義されています。

集約 KPI の値は、IBM Business Monitor サーバーに送信された XML メッセージで送信されるデータを取り込んだメトリックを基に計算されます。その後、このデータに対して集約関数が実行されます。集約関数には、以下の関数が含まれます。

- 平均
- 最大
- 最小
- 合計
- 出現回数

- 標準偏差

値は、定量化できる測定値として表されます。例えば、犯罪の平均応答時間 (5 分 7 秒) や平均水位 (100.5) などです。

式 KPI の値は、KPI の範囲および計算値を基に計算されます。IBM Intelligent Operations Center のサンプルでは、親 KPI の計算値により、KPI の値が、その子 KPI の値に応じて 0、1、または 2 と求められます。値 0 は許容可能な範囲に、値 1 は注意の範囲に、値 2 はクリティカルな範囲に対応付けられます。このサンプルでは、計算式を使用して、KPI の値が、その子 KPI の中で最も高い緊急度に設定されます。

10. オプション: 集約 KPI の時間フィルターを指定します。集約 KPI では、KPI 値の計算期間を制限するオプションの時間フィルターを設定できます。この時間は、繰り返しの間隔 (最終完了期間や現在の期間など)、回転間隔、または固定間隔のいずれでも構いません。IBM Intelligent Operations Center 集約 KPI のすべてのサンプルには、時間フィルターが定義されています。
11. オプション: KPI のデータ・フィルターを指定します。例えば、犯罪の平均応答時間を計算するときに、警察管区 1 が対象で、他の管区は対象外にする場合は、データ・フィルターを使用して、他のモニター・コンテキストをすべて削除できます。
12. トリガー、IBM Business Monitor サーバーへのインバウンド・イベント、IBM Intelligent Operations Center へのアウトバウンド・イベントなどの、KPI 値を更新する方法を定義します。
13. KPI をテストします。IBM Business Monitor 開発ツールキットには、デプロイ前に KPI をテストするためのテスト環境があります。詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。
14. モニター・モデル・アプリケーションをデプロイします。

関連概念:

181 ページの『KPI 階層の定義』

KPI 間の親子関係を定義して、KPI が IBM Intelligent Operations Center 内でどのように表示されるかを設計できます。ビジネス・プロセスに適した方法で KPI を参照できるよう、独自の KPI 階層を設計します。

181 ページの『IBM Business Monitor との KPI の通信』

IBM Intelligent Operations Center は、特定のモニター・コンテキストまたは重要業績評価指標 (KPI) コンテキストを通じて、IBM Business Monitor と通信します。

172 ページの『KPI 更新のためのデータ・ソースのルーティング』

IBM Intelligent Operations Center は、着信データ項目を KPI にルーティングする必要があるかどうかを判別できます。

関連タスク:

184 ページの『モニター・モデルのデプロイ』

重要業績評価指標 (KPI) とそのモニター・モデルを定義したら、モニター・モデルを IBM Business Monitor にデプロイする必要があります。IBM Business Monitor は IBM Intelligent Operations Center アプリケーション・サーバー上で稼働します。

関連資料:

170 ページの『ルーティング・スキーマ・ファイル』

IBM Intelligent Operations Center の基本ルーティング・スキーマ・ファイルには、すべてのデータ・ソースに共通のプロパティに対応する要素が含まれています。データ・ソースに固有のプロパティも組み込むには、ルーティング・スキーマ・ファイルを更新します。更新されたスキーマ・ファイルは、データを KPI にルーティングする際に使用されます。また、統合トピックにルーティングされるレコードを処理するアプリケーションを作成するときにも、更新されたスキーマ・ファイルを使用できます。

関連情報:

 IBM Business Monitor の製品資料

 XML Path Language (XPath) 2.0 (Second Edition) の資料

KPI 階層の定義

KPI 間の親子関係を定義して、KPI が IBM Intelligent Operations Center 内でどのように表示されるかを設計できます。ビジネス・プロセスに適した方法で KPI を参照できるよう、独自の KPI 階層を設計します。

IBM Business Monitor では、別の KPI の値に基づいている KPI を実装できます。ただし、KPI 間に親子関係を定義することはできません。このタスクを簡素化するため、IBM Intelligent Operations Center には、管理者向けの「重要業績評価指標」構成ツールが用意されています。このツールについては、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

IBM Intelligent Operations Center のサンプル KPI は、以下の例のように、階層設計によって一連の Police Department KPI を定義します。

```
Police Department ----- level 1
  Crime Response Time ----- level 2
    Crime Response Time Precinct One ----- level 3
    Crime Response Time Precinct Two ----- level 3
```

この例では、Police Department に 1 つの子 (Crime Response Time) があります。Crime Response Time には、2 つの子 (Crime Response Time Precinct One と Crime Response Time Precinct Two) があります。

2 つのレベル 3 の KPI が、KPI モデル内に集約 KPI として定義されます。つまり、これらの値は、メトリック値および集約関数を使用して計算されます。このセット内にある他のすべての KPI は式 KPI であり、それらの値は他の KPI の値を基に計算されます。例えば、以下のようなものがあります。

- Crime Response Time は、Crime Response Time Precinct One および Crime Response Time Precinct Two の値に基づいています。
- Police Department は、Crime Response Time の値に基づいています。

関連概念:

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されます。

関連タスク:

178 ページの『KPI のモデル化』

KPI をモデル化するには、IBM Business Monitor 開発ツールキットがインストールされている Rational Application Developer または WebSphere Integration Developer を使用します。

IBM Business Monitor との KPI の通信

IBM Intelligent Operations Center は、特定のモニター・コンテキストまたは重要業績評価指標 (KPI) コンテキストを通じて、IBM Business Monitor と通信します。

IBM Intelligent Operations Center のデータは、IBM Business Monitor に送信されるインバウンド・イベント、および IBM Business Monitor から受信するアウトバウンド・イベントに含まれています。

IBM Business Monitor サーバーからのアウトバウンド・イベントは、外部メッセージ・キューに置かれま
す。 IBM Intelligent Operations Center はこの仕組みを使用して、KPI 更新情報を非同期で受信します。

注: MonitorServerSecurityEnabled プロパティを設定して、IBM Business Monitor への接続に SSL を
使用してセキュア接続を行うかどうかを指定します。システム・プロパティ・テーブルでこのプロパティ
を変更する方法については、トピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。シ
ステム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

178 ページの『KPI のモデル化』

KPI をモデル化するには、IBM Business Monitor 開発ツールキットがインストールされている Rational
Application Developer または WebSphere Integration Developer を使用します。

トリガー

IBM Business Monitor は、トリガーを使用して、追加の処理を開始するデータを検出します。IBM
Intelligent Operations Center に付属の KPI サンプル・モデルによって、2 つのタイプのトリガーが定義さ
れます。

トリガーは、IBM Business Monitor サーバーが、定義済みの KPI セットに対応する XML ルーティン
グ・メッセージ (インバウンド・イベント) を受信したときに起動します。

IBM Intelligent Operations Center が受信するデータ項目によってルーティング・メッセージが生成されま
すが、このメッセージによって KPI が変更される場合があります。IBM Intelligent Operations Center は、
IBM Business Monitor サーバーから通知を受信したときに KPI が変更されるかどうかを決定します。アウ
トバウンド・イベントの場合は、トリガーによって、通知メッセージが送信されるタイミングが決まりま
す。

メッセージ・ベースのトリガーを使用して、KPI 計算に対する入力データが変更されたときに、IBM
Intelligent Operations Center に通知を送信することができます。ただし、定義済みの期間が終了した後に
KPI 値が変更された場合は、メッセージ・ベースのトリガーを使用してその状況に対処することはできま
せん。

IBM Intelligent Operations Center のサンプルでは、短い期間が定義されている KPI に関する通知を IBM
Intelligent Operations Center に送信するために、時間ベースのトリガーが使用されています。例えば、
Severe Traffic Accidents KPI が、1 時間ごとに期限切れになるように定義されているとします。この
KPI で 10:00 に値が 3 であり、次の 1 時間以内にその KPI に対してメッセージが受信されない場合、そ
の時間枠は期限切れになり、KPI 値は 0 (ゼロ) にリセットされます。

IBM Business Monitor へのインバウンド・イベントの定義

IBM Intelligent Operations Center のサンプルでは、インバウンド・イベントを使用して、トリガーが起動
される時期が決定されます。KPI コンテキストのインバウンド・イベントは、モニター・コンテキストの
インバウンド・イベントと同様の方法で定義します。

このタスクについて

インバウンド・イベントの定義は、Rational Application Developer を使用するか、WebSphere Integration
Developer を IBM Business Monitor と共に使用して行います。これらのツールの使用については、こ
れらの製品の製品資料を参照してください。

インバウンド・イベントを定義するには、以下の手順を実行します。

手順

1. インバウンド・イベントの KPI コンテキストを選択します。
2. インバウンド・イベントを作成し、イベント名と ID を指定します。
3. XML スキーマを指定します。
4. フィルター条件を指定します。
5. KPI コンテキストを選択し、新規インバウンド・イベントを作成します。
6. インバウンド・イベントのトリガーを作成します。
7. トリガーが反復可能であることを確認します。トリガーは、トリガーのソースが更新され、トリガー条件が満たされるたびに起動します。
8. トリガーのソースを選択します。
9. トリガー条件を定義します。トリガー条件が満たされると、トリガーが起動します。

例

サンプルのモニター・モデルは、IBM Business Monitor サーバーが IBM Intelligent Operations Center から XML ルーティング・メッセージを受信するたびにトリガーが起動するよう定義されています。

IBM Business Monitor からのアウトバウンド・イベントの定義

アウトバウンド・イベントは、トリガーの起動時に IBM Business Monitor から IBM Intelligent Operations Center に送信される情報を定義します。

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center は、IBM Business Monitor サーバーから送信されるアウトバウンド通知を使用して、KPI に変化があったかどうかを判断します。KPI に変化があった場合、IBM Intelligent Operations Center は、KPI データを IBM Business Monitor サーバーから取得し、KPI キャッシュ情報を更新して、IBM Intelligent Operations Center データを更新します。

アウトバウンド・イベントの定義は、Rational Application Developer を使用するか、WebSphere Integration Developer を IBM Business Monitor 開発ツールキットとともに使用して行います。これらのツールの使用について詳しくは、これらの製品のインフォメーション・センターを参照してください。

アウトバウンド・イベントを定義するには、以下の手順を実行します。

手順

1. アウトバウンド・イベントの KPI コンテキストを選択します。
2. アウトバウンド・イベントを作成し、イベント名と ID を指定します。
3. 通知スキーマを指定します。ioc-notification-v1.0.xsd 通知スキーマ・ファイルは、ioc_sample_monitor-models プロジェクト内にあります。
4. アウトバウンド・イベントのコンテキストを定義します。コンテキストは通知スキーマに基づいていません。
5. **notification** の下にある **sentfrom** の値に「Monitor」と入力します。
6. 以下のサブステップの定義に従って、イベント・コンテキストにパラメーター要素を追加します。
 - a. 最初のパラメーターとして、**parameterName** に modelID と指定し、**parameterValue** にモニター・モデル ID を指定します。例: ioc_sample_public_safety_model。

- b. KPI セット内の各 KPI について、パラメーターを追加して KPI ID と KPI 値を指定します。 KPI ID は **parameterName** 要素を使用して指定し、KPI 値は **parameterValue** 要素を使用して指定します。 KPI ID は、KPI セット内の KPI に関連付ける必要があります。 KPI 値をストリングとして指定するには、`xs:string()` 関数を使用します。例えば、**parameterName** に `Police_Department` と指定し、**parameterValue** に `xs:string(Police_Department)` と指定することができます。

例

IBM Intelligent Operations Center に送信される通知の例を以下に示します。

```
<ns1:notification>
  <ns1:notificationType> Alert</ns1:notificationType>
  <ns1:sentFrom> Monitor</ns1:sentFrom>
  <ns1:headline> Police Department KPI Changed</ns1:headline>
  <ns1:description> Police Department KPI Changed</ns1:description>
  <ns1:kpiLink> Police Department</ns1:kpiLink>
  <ns1:category> Safety</ns1:category>
  <ns1:parameter>
    <ns1:parameterName> modelId</ns1:parameterName>
    <ns1:parameterValue>
      ioc_sample_public_safety_model</ns1:parameterValue>
    </ns1:parameter>
  <ns1:parameter>
    <ns1:parameterName> Police_Department</ns1:parameterName>
    <ns1:parameterValue> 0</ns1:parameterValue>
  </ns1:parameter>
  <ns1:parameter>
    <ns1:parameterName> Crime_Response_Time</ns1:parameterName>
    <ns1:parameterValue> 0</ns1:parameterValue>
  </ns1:parameter>
  <ns1:parameter>
    <ns1:parameterName> Crime_Response_Time_Precinct_One</ns1:parameterName>
    <ns1:parameterValue> PT3M30.000S</ns1:parameterValue>
  </ns1:parameter>
  <ns1:parameter>
    <ns1:parameterName> Crime_Response_Time_Precinct_Two</ns1:parameterName>
    <ns1:parameterValue> PT3M30.000S</ns1:parameterValue>
  </ns1:parameter>
</ns1:notification>
```

モニター・モデルのデプロイ

重要業績評価指標 (KPI) とそのモニター・モデルを定義したら、モニター・モデルを IBM Business Monitor にデプロイする必要があります。IBM Business Monitor は IBM Intelligent Operations Center アプリケーション・サーバー上で稼働します。

このタスクについて

IBM Business Monitor が使用するモニター・モデルをデプロイするには、定義済みのモデルから Java プラットフォーム Enterprise Edition プロジェクトを生成します。Java プラットフォーム Enterprise Edition プロジェクトを生成したら、モデル・アプリケーションを EAR ファイルとしてエクスポートできます。EAR ファイルはその後、IBM Intelligent Operations Center アプリケーション・サーバー上で稼働する IBM Business Monitor にデプロイできます。

手順

1. IBM Business Monitor 開発ツールキットがインストールされている WebSphere Integration Developer、または Rational Application Developer の「エンタープライズ・エクスプローラー」タブで、プロジェクト生成を必要とするモニター・モデルを右クリックします。例: `ioc_sample_public_safety_model`。

2. 「**Monitor JEE プロジェクトの生成**」をクリックします。 次のプロジェクトが作成されます:
modelApplication、modelLogic、および modelModerator。
3. modelApplication プロジェクトを右クリックし、「**エクスポート**」 > 「**EAR**」をクリックして、モニター・モデル・アプリケーションをエクスポートします。
4. EAR ファイルを IBM Business Monitor にデプロイする前に、KPI をテストします。 IBM Business Monitor の製品資料の説明に従って操作してください。
5. EAR ファイルを IBM Business Monitor サーバーにデプロイします。 IBM Business Monitor の製品資料の説明に従って操作してください。

関連タスク:

178 ページの『KPI のモデル化』

KPI をモデル化するには、IBM Business Monitor 開発ツールキットがインストールされている Rational Application Developer または WebSphere Integration Developer を使用します。

関連情報:



IBM Business Monitor の製品資料

KPI の表示ラベルと表示値

IBM Intelligent Operations Center には、IBM Business Monitor モデルが提供するラベルとは別の表示ラベルを提供するために使用できる DB2 データベース表が用意されています。

KPI 名および範囲名は、IBM Intelligent Operations Center に付属の IBM Business Monitor モデルのサンプルで定義されます。KPI 名の例を以下に示します。

- 水
- 水質

範囲名の例を以下に示します。

- 許容可能
- 注意
- クリティカル

KPI 範囲など、IBM Business Monitor で定義された各作成物の ID は、表示名と関連付けられています。ID にはスペースを含めることができませんが、表示名にはスペースを含めても構いません。ID は、データベース表内でラベルを参照するためのキーとして使用されます。IBM Intelligent Operations Center は、この ID を使用して KPI 表示ラベルを選択します。ID に対応する値がデータベース表で指定されていない場合は、IBM Business Monitor の定義で指定された値が使用されます。

KPI 表示値は、IBM Business Monitor サーバーの ISO 言語および国別コードを使用して、IBM Business Monitor によってグローバル化されます。例えば、KPI パーセント値は、ロケールが en_US の場合は 12.61% の形式で表示され、ロケールが fr_FR の場合は 12,61% の形式で表示されます。データベース表定義は、これらの値には使用されません。

IBM Intelligent Operations Center のデフォルトのプロパティ・データベース表は、IOC.I18N_RESOURCE です。以下の例は、この表の KPI グループから抽出したものです。

GROUP LOCALE KEY	VALUE
KPI default kpiNoValue	There is no data available to determine the KPI value
KPI default kpiRangeUndetermined	Undetermined
KPI default kpiNoRangeDefined	There is no KPI range defined
KPI default Flood_Control	Flood Control

```
KPI default Water_Levels          Water Levels
KPI default Flow_Discharge_City_River Flow Discharge City River
KPI default Water_Level_City_Lake   Water Level City Lake
```

kpiNoValue と kpiRangeUndetermined の値は、IBM Business Monitor の KPI が NULL 値を返した場合に、IBM Intelligent Operations Center で使用されます。例えば、市内湖沼の水位の KPI は、直前の完全な時間帯に基づく毎日繰り返される時間帯で定義されます。日曜日にこの KPI の更新が受信されず、月曜日にこの KPI が要求された場合は、前日分のデータが存在しないため、NULL が返されます。表示値は「KPI 値を決定するデータがありません」に設定され、範囲表示名は「決定不能」に設定されます。

抽出したサンプルの他の項目 (Flood_Control、Water_Levels、Flow_Discharge_City_River、および Water_Level_City_Lake) は、KPI ID の表示ラベルを定義します。これらの ID は、IBM Intelligent Operations Center に付属の ioc_sample_water_model サンプル・モニター・モデル内で定義されています。これらの項目では、IBM Business Monitor で指定されたテキスト値を置き換えるテキストを指定できます。例えば、モデル自体を変更する代わりに、データベース表を使用して、変換された値を示すことができます。

```
('KPI', 'default', 'Flow_Discharge_City_River', 'Flow Discharge City River')
('KPI', 'de', 'Flow_Discharge_City_River', 'Durchfluss des Flusses')
```

KPI のキャッシュ

IBM Intelligent Operations Center 構成設定は、KPI 値が IBM Business Monitor から取得されるタイミングを決定します。

IBM Intelligent Operations Center では、KPI 値はキャッシュに保持されます。デフォルトでは、KPI は、IBM Business Monitor からキャッシュにロードされます。このキャッシュは、システム・プロパティ・テーブルの **KpiRefreshInterval** プロパティで指定された時間間隔に従いリフレッシュされます。このリフレッシュ時間は、更新済みの KPI を IBM Intelligent Operations Center に送信する要件に基づき変更できます。システム・プロパティ・テーブル内のプロパティの変更については、トピックの末尾にあるリンクを参照してください。

「重要業績評価指標」構成ツールで KPI を作成した場合、KPI への更新はキャッシュ・リフレッシュにのみ依存します。IBM Business Monitor で KPI が定義されている場合、トリガー・メカニズムを定義して、その KPI の変更に応じた追加処理を実装できます。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

CAP との統合

共通アラート・プロトコル (CAP) を使用して、IBM Intelligent Operations Center と外部システムとの間でデータを交換できます。

ソリューション管理者がデータ・ソースを作成するとき、ソリューション管理者はデータ収集の形式として CAP を選択でき、データ・ソースを介して受信する CAP メッセージが地理空間情報マップまたはロケーション・マップに表示されることを指定できます。CAP の指定で定義されるエレメントは、データ・ソース・プロパティにマップされます。CAP の指定について詳しくは、OASIS Common Alerting Protocol バージョン 1.2 を参照してください。

関連情報:

CAP メッセージ・ルーティング

ソリューション管理者は、複数の 共通アラート・プロトコル (CAP) データ・ソースを定義できます。ただし、CAP メッセージがメッセージ・プロパティの値に基づいて送付されることをソリューション管理者が指定しない限り、各データ・ソースは受信されたすべての CAP メッセージをすべての宛先に送信します。

デフォルトでは、CAP メッセージを送付するのに IOC V1.6 スキーマが使用されます。ただし、IBM Intelligent Operations Center V1.5 用に開発された重要業績評価指標 (KPI) モデルを IBM Intelligent Operations Center V1.6 と共に使用したい場合は、CAP スキーマを使用して CAP メッセージを送付してください。メッセージ・コード・プロパティの値が kpi である場合に CAP メッセージの KPI モデルへのルーティングをセットアップするには、以下の構成ステップを使用してください。

1. 「ソリューション管理」ビューで、「システム管理」 > 「システム・プロパティ」をクリックして、RouteCAPXML プロパティの値を true に設定します。
2. CAP データ・ソース定義で、code の値が kpi に等しい場合は、CAP メッセージを「重要業績評価指標」ルーティング宛先に送付するルーティング式を定義します。

CAP メッセージを、CAP メッセージにあるパラメーターに基づいて送付することはできません。

CAP メッセージのパブリッシング

パブリッシング・クライアントが 共通アラート・プロトコル (CAP) メッセージを、WebSphere Message Broker メッセージ・キューまたは WebSphere Application Server JMS リソースのいずれかにパブリッシュするように構成します。

WebSphere Message Broker メッセージ・キュー

CAP メッセージを WebSphere Message Broker メッセージ・キューにパブリッシュするには、以下の構成設定を使用します。

キュー・マネージャー

IOC.MB.QM

キュー・マネージャー・ポート番号

1414

キュー・マネージャー・ホスト名

IBM Intelligent Operations Center 分析サーバー・ホスト名

WebSphere Application Server JMS リソース

CAP メッセージを WebSphere Application Server JMS リソースにパブリッシュするには、以下の構成設定を使用します。

- キュー接続ファクトリー:

名前 ioc.mb.con.factory

JNDI 名

jms/ioc.mb.con.factory

- キュー

名前 cap.in.q

JNDI 名

jms/cap.in.q

マップおよびリストでの CAP メッセージの表示

ソリューション管理者は、ユーザーが 共通アラート・プロトコル (CAP) メッセージを CAP メッセージ・エレメントの値に従ってフィルターに掛けるために使用できるように「フィルター」パネル上でペインを構成できます。

「フィルター」パネル上で適切なオプションを選択することで、CAP データ・ソースから受信された各 CAP メッセージを適切なマップ上に、またはリスト内にデータとして表示できます。CAP メッセージを地理空間情報マップとロケーション・マップの両方で表示できるようにしたい場合は、マップ・タイプごとに個別のデータ・ソースを指定する必要があります。マップ上およびリスト内で、CAP メッセージのコンテンツをプレビュー・カード、および「フル・プロパティ (Full Properties)」ウィンドウで表示できます。

CAP 指定は、一部の CAP メッセージ・エレメントについて列挙された値を定義しています。「フィルター」パネルを介して、以下の CAP メッセージ・エレメントの列挙された値もフィルターに掛けることができます。これらのメッセージ・エレメントは データ・ソース・キー・プロパティにマップされています。

- category
- certainty
- severity
- urgency

CAP メッセージの更新およびキャンセル

データの取り込みについては、共通アラート・プロトコル (CAP) メッセージは CAP 指定に従って更新およびキャンセルされます。CAP メッセージを更新およびキャンセルする方法は 2 通りあります。

CAP メッセージ・データ項目は、更新 CAP メッセージを送信するか、キャンセル CAP メッセージを送信することで、更新およびキャンセルすることができます。あるいは、他のすべてのデータ項目についてと同様に、マップおよびリストで「追加のアクション」メニューを使用することで、CAP メッセージを更新またはキャンセルすることができます。

第 6 章 ソリューションのカスタマイズ

特定の操作に適合するように、ソリューションをカスタマイズすることができます。

ユーザー・インターフェースをカスタマイズするには、「ポータル管理」ビューを使用します。「ソリューション管理」ビューの「システム管理」では、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響するシステム・プロパティをカスタマイズすることができます。「ソリューション管理」ビューの「構成ツール」には、IBM Intelligent Operations Center の主要コンポーネントをカスタマイズするためのオプションがあります。

特定の運用やビジネスに合わせたソリューションのカスタマイズには、以下のタスクが含まれます。カスタマイズはソリューションの統合と密接に関連しています。以下に、該当するリンクを記載します。

ユーザー・プロファイルの表示または編集

1.6.0.2

ソリューション・ユーザー・プロファイル内の情報を表示し、編集することができます。ユーザー・プロファイルを編集して、時間帯 (タイム・ゾーン)、言語設定、および通知の設定を指定します。パスワードのリセットや、個人の詳細情報の変更を行うこともできます。

このタスクについて

Administrator システム管理者は、新規プロファイルを作成したり、既存のユーザー・プロファイルのすべての属性をリセットしたりできます。

手順

1. ユーザー・プロファイルを変更するために、ビューの上部にあるユーザー名の横のリストから「**プロファイルの編集**」を選択します。ユーザー・プロファイルの属性の一部または全部を変更します。
 - 一般プロファイル属性 (名前、E メール、電話番号など) を変更する場合は、「**マイ・プロファイル**」をクリックします。
 - ソリューションの表示設定を変更する場合は、「**表示設定**」をクリックします。カラー・スキーム、主たる使用言語、または時間帯を変更します。カラー・スキームを選択すると、ソリューションに表示される色が変わります。ブラウザーで、ロケールおよびタイム・ゾーンの設定を変更することもできます。
 - ソリューションの通知設定 (通知を表示するかどうか、通知を表示する時間の長さなど) を変更する場合は、「**通知の設定**」をクリックします。
 - プロファイルのパスワードを変更する場合は、「**パスワード変更**」をクリックします。
2. ブラウザー・ページを最新表示して、変更内容を有効にします。

関連概念:

191 ページの『ユーザー・インターフェースのローカライズ』
ソリューション・ポータルに表示されるロケールおよびタイム・ゾーンを変更するには、ユーザー・プロファイルを編集します。ユーザー・プロファイルで特定のロケール設定を構成しなかった場合は、ブラウザーの設定が適用されます。ユーザー・プロファイルで構成したロケールおよびタイム・ゾーンの設定は、ブラウザーの設定よりも優先されます。

ユーザー・プロフィールの表示または編集

1.6

1.6.0.1

ソリューション・ユーザー・プロフィール内の情報を表示し、編集することができます。管理者は、新規ユーザーごとにユーザー・プロフィールを作成します。

このタスクについて

ユーザー・プロフィールに含まれる属性を次の表に示します。管理者は、これらすべての属性を編集することができます。ユーザーが編集できる属性については、表の中で示します。

表 36. ソリューション・ユーザー・プロフィールの属性

属性	説明	ユーザーによる編集の可否
ユーザー ID*	管理者は、識別のために各新規ユーザーにユーザー ID を割り当てます。	不可
パスワード*	管理者はセキュリティのためのパスワードを割り当てます。パスワードは固有のものであり、長さは 5 から 60 文字の範囲である必要があります。有効なパスワードに使用できるのは、文字 a から z、A から Z、ピリオド (.)、ダッシュ (-)、および下線 (_) のみです。	Yes
名	名 (ファーストネーム)。	Yes
姓*	姓 (ラストネーム)。	Yes
E メール	E メール・アドレス。	Yes
プロフィール・イメージ	プロフィールのイメージ。例えば、写真など。	Yes
電話番号	電話番号。	Yes
役職	職務上の肩書き。	Yes
主たる使用言語	主たる使用言語。リストから選択できます。	Yes
時間帯	優先する時間帯。リストから選択できます。	Yes
通知表示制限	通知の表示期間の制限 (日数)。この制限に指定された日数よりも古い通知は、「通知」ウィンドウに表示されません。デフォルト値は 3 です。	Yes

注: アスタリスクが付いた属性は、新規ユーザーを正常に作成するために必要です。アスタリスクが付いていない属性は、オプションです。

手順

1. ユーザー・プロフィールを表示または編集するには、ビューの上部にあるユーザー名の隣のリストから、「**プロフィールの編集**」を選択します。
2. オプション: パスワードを変更するには、以下のサブステップを実行します。
 - a. 「**現在のパスワード**」を入力します。入力したパスワードは表示されません。
 - b. 「**新規パスワード**」を入力し、それを「**パスワードの確認**」で再入力します。
3. オプション: 残りのフィールドの情報を編集します。
4. 変更を実行依頼するため、「**OK**」をクリックします。

タスクの結果

変更内容に基づいてユーザー・プロファイルが更新されます。

表示設定の構成

1.6.0.2

IBM Intelligent Operations Center ユーザー・プロファイル内の表示設定を表示し、編集することができます。

手順

1. ユーザー・プロファイルを変更するために、ビューの上部にあるユーザー名の横のリストから「**プロファイルの管理**」を選択します。
2. 表示設定を変更するために、「**表示設定**」をクリックします。
 - 明色または暗色カラー・スキームを選択します。
 - 「**主たる使用言語**」ドロップダウン・リストから言語を選択します。

関連タスク:

189 ページの『ユーザー・プロファイルの表示または編集』

ソリューション・ユーザー・プロファイル内の情報を表示し、編集することができます。ユーザー・プロファイル編集して、時間帯 (タイム・ゾーン)、言語設定、および通知の設定を指定します。パスワードのリセットや、個人の詳細情報の変更を行うこともできます。

ユーザー・インターフェースのローカライズ

ソリューション・ポータルに表示されるロケールおよびタイム・ゾーンを変更するには、ユーザー・プロファイル編集します。ユーザー・プロファイルで特定のロケール設定を構成しなかった場合は、ブラウザの設定が適用されます。ユーザー・プロファイルで構成したロケールおよびタイム・ゾーンの設定は、ブラウザの設定よりも優先されます。

ロケール設定によって、すべてのテキストの表示に使用する言語が決まります。本ソリューションで使用できない言語の場合は、最も近い関係にある言語が使用されます。例えば、カナダ・フランス語を使用できない場合はフランス語に戻され、フランス語も使用できない場合は、常に使用可能な英語に戻されます。

すべての日時は、ユーザーのタイム・ゾーンの設定に従って、システム・プロパティ・データベースで指定されている形式で表示されます。管理者は、日付および時刻の形式をカスタマイズできます。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

189 ページの『ユーザー・プロファイルの表示または編集』

ソリューション・ユーザー・プロファイル内の情報を表示し、編集することができます。ユーザー・プロファイル編集して、時間帯 (タイム・ゾーン)、言語設定、および通知の設定を指定します。パスワードのリセットや、個人の詳細情報の変更を行うこともできます。

フィールド・テキストの翻訳

変換ウィザードを使用して、テキスト入力可能な任意のフィールドに翻訳を入力します。翻訳済みフィールドは、ユーザー・プロファイルまたはブラウザーのいずれかで選択したロケールに従って、ユーザー・インターフェースに表示されます。

このタスクについて

テキスト入力可能な任意のフィールドの翻訳バージョンを指定できます。翻訳バージョンが設定されているフィールドの場合、ユーザー・インターフェースに表示される言語は、ユーザー・プロファイルで設定されているロケールによって決まります。ユーザー・プロファイルで主たる使用言語が設定されていない場合、表示される言語は、ブラウザーで選択したロケールによって決まります。

手順

1. 変換ウィザードのアイコンをクリックするか、またはテキスト入力可能なフィールドの内部をクリックします。
2. ウィンドウに表示されるサポート対象ロケールのスクロール・リストから、必要な言語を選択します。
3. 該当するサポート対象ロケール・フィールドに、翻訳バージョンのフィールド・テキストを入力します。デフォルト値のみを入力した場合は、常にデフォルト値が表示されます。例えば、ソリューションをアラビア語で表示している場合にアラビア語の翻訳が指定されていないときは、デフォルト値が表示されます。
4. 「OK」をクリックします。

ソリューションへのロケールの追加

SupportedLocales システム・プロパティを構成することで、ソリューションにロケールを追加できます。

手順

1. 「ソリューション管理」ビューで、**SupportedLocales** システム・プロパティを構成し、新しいロケールの値を挿入します。
2. データ・サーバーに root ユーザーとしてログオンします。
3. コマンド行に次のコマンドを入力します。

```
su - db2inst2
DB2 connect to iocdb
DB2 INSERT INTO IOC.I18N_RESOURCE ("GROUP", "LOCALE", "KEY", "VALUE")
VALUES ('group_value', 'locale_value', 'key_value', 'value');
```

各部の意味は、次のとおりです。

- *group_value* はリソース・コレクションの名前です。
- *locale_value* は *value* のロケールです。
- *key_value* は *value* の名前です。ピリオド文字 (.) をこの値に含めないでください。
- *value* は翻訳された値です。

例

次の手順例は、タイ語のロケールをソリューションに追加する方法を示しています。

新規ページのメイン・コンテンツを決定します。1 番下のパネルでは、新規ページの下部に表示されるコンテンツを決定します。

手順

1. 任意の運用ビューまたは状況ビューから、WebSphere Portal を開きます。
2. WebSphere Portal で、「ポータル・ユーザー・インターフェース」をクリックします。
3. ページの処理または新規ページの作成を行うには、「ページの管理」>「ページの選択 (Select Page)」をクリックします。子ページを追加するページにナビゲートして、「新規ページ」をクリックします。
4. 必須フィールドに入力します。ソリューション・ページの処理または新規ソリューション・ページの作成を行う場合は、「タイトル」フィールドを作成または更新し、「テーマ」の値を IOC Portal 8 Theme に設定します。「ページ・タイプ」の値が Static Content に設定されていることを確認します。この設定は、IBM Intelligent Operations Center のページ・レイアウトが使用されることを意味します。
5. ページの各パネルで「ポートレットの追加」をクリックし、以下の手順に従ってコンテンツを追加します。
 - 1 番上のパネルをクリックし、IBM Intelligent Operations Center 「フィルター」パネルを新規ページの前縁に追加します。

注: 各ページに追加できる「フィルター」パネルは 1 つまでです。

 - 2 番目のパネルをクリックし、「サポート内容」パネルを新規ページの後縁に追加します。この代わりに、IBM Intelligent Operations Center API を使用する特殊コンテンツを追加することもできます。
 - 3 番目のパネルをクリックし、マップ、ロケーション・マップ、リスト・データが含まれた「内容」パネルをページに追加します。また、3 番目のパネルをクリックし、KPI ナビゲーション・ツリーと KPI コンテンツ・ペインの両方をページに追加することもできます。この代わりに、IBM Intelligent Operations Center API を使用する特殊コンテンツを追加することもできます。
 - 1 番下のパネルをクリックし、新規ページの下部に特殊コンテンツ (テロップ・アプリケーションなど) を追加します。

6. 必要な変更を行います。 WebSphere Portal を使用したポートレットのカスタマイズについては、WebSphere Portal の製品資料を参照してください。

注: ページをカスタマイズする際には、空のままになっているパネル (メインの「内容」パネルは除く) は新規ページに表示されません。空のパネルは、ソリューションから動的に削除されます。

関連情報:

 [IBM WebSphere Portal 8 の製品資料](#)

「内容」パネルのカスタマイズ

IBM Intelligent Operations Center の「内容」パネルをカスタマイズして、表示するタブおよびコンテンツを指定できます。「内容」パネルはコンテンツ・ビューアー・ポートレットを通して実装され、管理者は WebSphere Portal 管理インターフェースを使用してこれをカスタマイズすることができます。

このタスクについて

管理者は、パス、接頭部、モジュール名、新しいタブが「内容」パネルに表示される順序を含めたコンマ区切り値を `ioc_ui_content_viewer_portlet` ポートレットに追加します。このコンマ区切り値によって、タブ機能を備えた JavaScript モジュールがロードされます。

手順

1. 「スーパーバイザー: 操作」ビューで、「ポータル管理」>「ポートレット管理 (Portlet Management)」>「ポートレット」をクリックします。
2. 「内容」パネルをカスタマイズするには、インストール済みポートレットのリストから、**ioc_ui_content_viewer_portlet** を選択します。
3. 「内容」パネル設定を構成するには、「ポートレットの構成」をクリックし、必要な設定を編集します。
4. `contentView-Tab-XXX` という接頭部が付いた構成パラメーターを「新規パラメーター (New parameter)」フィールドに入力します。ここで、`XXX` はパラメーター名です。
5. 表 1 に示すパラメーター値を「新しい値」フィールドに入力します。この表では、IBM Intelligent Operations Center 「内容」パネルのタブに 2 種類のサンプル・カレンダー・コンポーネントを追加する場合について説明しています。パラメーター値に含まれる以下の変数を、適切な値に置き換えてください。
 - `PATH_LOCATION` は、新しいコンテンツの絶対パスです。
 - `PATH_NAME` は、新しいコンテンツのパスの名前です。
 - `MODULE` は、モジュールの名前です。このモジュールは、`ioc_theme_static_js_web%WebContent%js%com%ibm%ioc%contentviewer%View.js` ファイルに記述された関数を、さまざまなフィルター・パネル・イベント (データ・ソースを選択した場合など) に応じて実装します。
 - `TAB_ORDER` は、タブが「内容」パネルに表示される順序です。この順序は 0 から始まります。値 0 は最初に表示されるタブを表します。

注: **Intelligent Operations Center** モジュール以外の場合は、パスと接頭部のパラメーター値を指定してください。

例

表 37. 「内容」パネルにタブを追加する場合の設定例:

パラメーター名	パラメーター値
<code>contentView-Tab-Graph-Visualisation</code>	<code>PATH_LOCATION:/test_ioc_common_widgets/js/test,PATH_NAME:test,MODULE:test/com/bin/ioc/contentviewer/views/SampleVisualisation,TAB_ORDER:3</code>
<code>contentView-Tab-locMap</code>	<code>MODULE:ioc/com/ibm/map/MapViewWrapper,TAB_ORDER:0</code>

コンポーネントのカスタマイズ

1.6.0.2

ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズするために、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成することができます。既存のコンポーネントをカスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。例えば、特定のシステム・コンポーネントに対して、既存のプレビュー・カードを新規のカスタマイズされたプレビュー・カードで置き換えることができます。

このタスクについて

以下のタイプのコンポーネントをカスタム・コンポーネントで置き換えることができます。

プレビュー・カード

データ・ソースに対してカスタマイズされたプレビュー・カードを使用することができます。

アクション

データ・ソースにカスタマイズされたアクションを割り当てることができます。

詳細プロパティ・ウィンドウ

データ・ソースの項目に対してカスタマイズされた詳細プロパティ・ウィンドウを表示することができます。

拡張視覚化機能

拡張視覚化機能コンポーネント・タイプを構成して、マップでのデータ・ソース項目およびホット・スポットのレンダリング方法をカスタマイズすることもできます。

関連タスク:

135 ページの『表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定』
マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。選択がクリアされたデータ・ソースのデータ項目が、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の両方にカウントされないようにすることができます。

コンポーネントの作成

1.6.0.2

コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成します。例えば、独自にカスタマイズしたプレビュー・カードを作成したり、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示するアクションを作成したりすることができます。カスタマイズされた詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントや拡張視覚化機能コンポーネントを作成することもできます。

始める前に

コンポーネントを実装するコードを含むモジュールを作成し、インストールします。例えば、カスタム・アクションを作成する場合は、JavaScript ファイル内の Dojo スクリプトによってアクションを実装します。WAR ファイルにパッケージ化されているサンプルのカスタム・モジュールをダウンロードできます。詳しくは、このセクションにある『カスタム・モジュールの定義』トピックを参照してください。

モジュールのモジュール名、パス・ロケーション、およびパス名を書き留めます。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「コンポーネントのカスタマイズ」 をクリックします。
2. 「作成」をクリックします。
3. 「カスタム・コンポーネントの作成」ウィンドウで、カスタム・コンポーネントの詳細を入力します。入力が必要な詳細には以下の値が含まれます。

名前 例えば、サンプルのいずれかを使用してカスタム・コンポーネントを作成する場合、次のいずれかの名前を入力します。

- サンプルのアクション
- サンプルのマップの視覚化
- サンプルのプレビュー

Type リストから該当するコンポーネント・タイプを選択します。例えば、サンプルのアクションを使用する場合、「**アクション**」を選択します。

ターゲット

カスタム・コンポーネントは、データ・ソースなどのターゲット値に関連付けられています。

パス・ロケーション

パス・ロケーションの値では、カスタム・コンポーネントが実装されるモジュールのパスを指定します。サンプル・モジュールのいずれかを使用する場合、次のパスを入力します。
`/ioc_sample_extensions/js/test`

パス名 パス名の値では、パス・ロケーションの名前を指定します。サンプル・モジュールのいずれかを使用する場合、値 `sample` を入力します。

モジュール名

モジュール名の値では、カスタム・コンポーネントが実装されるモジュールの名前を指定します。サンプル・モジュールのいずれかを使用する場合、次のリストから正しいモジュール名を入力します。

- `sample/com/ibm/ioc/action/SampleCustomAction`
- `sample/com/ibm/ioc/previewcard/SampleCustomPropertiesPane`
- `sample/com/ibm/ioc/map/SampleCustomRenderer`

タスクの結果

「カスタム・コンポーネントの作成」ウィンドウで「**OK**」をクリックすると、「**コンポーネントの構成**」の下の該当するコンポーネント・タイプ・サブメニューに、新規コンポーネントの名前がリストされます。

例

例えば、「すべてキャンセル」という名前のアクション・コンポーネントを追加した場合は、**コンポーネントの構成** > **アクションサブメニュー**に新規のメニュー・オプション「すべてキャンセル」が表示されます。

次のタスク

新規コンポーネントをユーザー・インターフェースに追加する場合は、「**ユーザー・インターフェースにコンポーネントを追加**」メニュー・オプションを使用します。

カスタム・モジュールの定義: 1.6.0.2

カスタマイズしたコンポーネントで使用できるカスタム・モジュールを Dojo スクリプトによって定義します。例えば、カスタマイズしたアクションおよびプレビュー・カードを実装するカスタム・モジュールを定義することができます。WAR ファイルにパッケージ化されていて、IBM Intelligent Operations Center にインストールする準備ができているサンプルのカスタム・モジュールをダウンロードできます。

このタスクについて

以下の手順は、データ・サーバーで実行します。カスタム・モジュールを実装するサンプルの Dojo スクリプトを表示するには、関連リンクを参照してください。サンプルの Dojo スクリプトは、ダウンロードできる WAR ファイルにパッケージ化されています。

手順

1. カスタム・モジュールを作成し、パッケージ化するには、次のいずれかのオプションを選択します。
 - 関連リンクから、サンプルのカスタム・モジュールを含む WAR ファイルをダウンロードします。
 - JavaScript ファイルにある Dojo スクリプトを使用して、各カスタム・モジュールを定義し、それらの JavaScript ファイルを含む WAR ファイルを作成します。
2. その WAR ファイルを WebSphere Application Server にインストールします。
3. 次のように、モジュールを IBM HTTP Server サーバーである Web サーバーとポータル・クラスタの両方にマップします。

標準環境

```
WebSphere:cell=cell1,node=ihsnode1,server=ihsserver1
WebSphere:cell=cell1,cluster=PortalCluster
```

高可用性環境

```
WebSphere:cell=cell1,node=ihsnode2,server=ihsserver2
WebSphere:cell=cell1,node=ihsnode1,server=ihsserver1
WebSphere:cell=cell1,cluster=PortalCluster
```

4. WAR ファイルが正常に開始することを確認します。
5. ブラウザーで、`http://web_server/ioc_sample_extensions/js/test/com/ibm/ioc/action` にある JavaScript ファイルにアクセスできることを確認します。例えば、`http://web_server/ioc_sample_extensions/js/test/com/ibm/ioc/action/SampleCustomAction.js` にあるサンプルのカスタム・アクションの JavaScript ファイルにアクセスできることを確認します。

関連情報:



サンプルのカスタム・モジュール

コンポーネントの構成

1.6.0.2

システム内の既存のコンポーネントの設定を構成することができます。例えば、カスタマイズされたコンポーネントのパスとモジュールの設定を変更できます。

このタスクについて

コンポーネント・タイプごとに、対角線が入った円形のアイコンでデフォルトのコンポーネントが示されます。デフォルトのコンポーネントについては、名前と説明のみを編集できます。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「コンポーネントのカスタマイズ」 > 「コンポーネントの構成」 をクリックします。
2. 構成するコンポーネントのタイプをクリックし、名前をクリックします。例えば、Update アクション・コンポーネントを編集する場合は、アクション > 「更新」 をクリックします。
3. コンポーネントの設定を構成し、「保存」 をクリックします。カスタマイズされたコンポーネントについて構成できる設定について詳しくは、『コンポーネントの作成』トピックを参照してください。

ユーザー・インターフェースへのコンポーネントの追加

1.6.0.2

ユーザー・インターフェースに表示するコンポーネントを選択します。システム・コンポーネントのカテゴリ内にある特定のシステム・コンポーネントをカスタマイズすることができます。例えばデータ・ソースの場合は、特定のデータ・ソースから受け取るデータ項目に対してカスタマイズされたプレビュー・カードが表示されるように指定することができます。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「構成ツール」 > 「コンポーネントのカスタマイズ」 > 「ユーザー・インターフェースにコンポーネントを追加」 をクリックします。
2. 追加または置換するコンポーネントのタイプを選択します。例えば、あるデータ・ソースから得た項目に対して表示されるデフォルトのプレビュー・カードを置き換えたい場合は、「プレビュー・カード」を選択します。データ・ソースから得た項目に対して表示される「追加のアクション」メニューにアクションを追加したい場合は、「アクション」を選択します。
3. カスタマイズするシステム・コンポーネントを選択します。選択したコンポーネントのタイプに応じて、「データ・ソース」または「ホット・スポット」からコンポーネントを選択できます。
4. コンポーネントを追加または置換して、システム・コンポーネントをカスタマイズします。
 - コンポーネント・タイプに「プレビュー・カード」を選択した場合は、使用可能なプレビュー・カードのリストからプレビュー・カードを選択します。
 - コンポーネント・タイプに「アクション」を選択した場合は、使用可能なアクションのリストから使用したいアクションを選択します。
 - コンポーネント・タイプに「拡張視覚化機能」を選択した場合は、リストから使用したい拡張視覚化機能を選択します。
 - コンポーネント・タイプに「詳細プロパティ・ウィンドウ」を選択した場合は、リストから使用したい詳細プロパティ・ウィンドウを選択します。
5. カスタマイズするその他のシステム・コンポーネントに対して上記の 2 つのステップを繰り返し、「保存」をクリックします。

KPI のカスタマイズ

IBM Intelligent Operations Center では、ビジネス・プロセスに適合するよう重要業績評価指標 (KPI) モデルをカスタマイズできます。

KPI は、トレンドを分析したり問題領域を示したりするために使用できる統計データを提供するように設計されています。KPI データは、データ・ソースからシステムに取り込まれるデータ項目によって更新されます。

IBM Intelligent Operations Center には、KPI 状況の更新に使用できる KPI およびイベントのサンプル・セットがあります。IBM Intelligent Operations Center には、3 つのサンプル KPI モデルが用意されています。これらのモデルは、公共安全、輸送、および水道に関するサンプルのモニター・プロセスとビジネス・プロセスに基づいています。サンプルの KPI については詳しくは、リンクを参照してください。

各ソリューションは、KPI の作成および統合プロセスに従って、特定のビジネス環境に必要な KPI をセットアップします。IBM Business Monitor を使用して、ユーザー独自の KPI モデルを作成することもできます。IBM Intelligent Operations Center を使用して KPI を作成および統合する方法については、リンクを参照してください。

IBM Intelligent Operations Center で KPI をカスタマイズするには、「重要業績評価指標」構成ツールを使用します。「重要業績評価指標」ツールは、「ソリューション管理」ビューのオプションの 1 つとして管理者に提供されます。ツールを使用して KPI を構成する方法については、リンクを参照してください。

このツールを使用して、KPI のプロパティの表示、KPI の作成、コピー、または変更、および KPI モデルの階層表示を表示または変更することができます。

「**KPI 定義**」タブを使用して、IBM Intelligent Operations Center の特定の KPI モデルに関連付ける KPI を定義します。以下のリストに、「**KPI 定義**」タブで使用可能なオプションを示します。

- KPI モデルに所属する KPI の現行リストを表示する。
- 既存の KPI のプロパティを表示する。
- 既存の KPI のプロパティを更新する。
- KPI モデル用の KPI を作成する。
 - 集約 KPI は、定義済みのメトリックで計算された値を使用します。
 - 式 KPI は、他の KPI に基づく値を使用します。
- KPI を削除する。

更新は、IBM Intelligent Operations Center データベースに格納されている IBM Business Monitor モデルに保存されます。更新は、ブラウザを次に最新表示したときに、ユーザー・インターフェースの状況ビューにも反映されます。

注: IBM Business Monitor で作成された KPI は、「モデル KPI」として定義されます。「IBM Intelligent Operations Center」構成ツールで作成またはコピーされたすべての KPI は、「ダッシュボード」として定義されます。モデル KPI は削除できず、構成ツール内での更新に関していくつかの制限があります。

状況ビューに表示される KPI 階層を更新するには、「**関係と表示**」タブを使用します。

- 既存の KPI 階層を表示する。
- KPI のメイン・プロパティを表示する。
- KPI 階層内の項目を移動または削除して、ツリー構造を変更する。
- 事前に定義された KPI を階層に追加する。

ここで行った更新は、状況ビューを次に最新表示したときに、ユーザー・インターフェースに反映されません。

注: 表示階層を更新しても、KPI モデルが変更されることはありません。KPI モデルのロジックに沿った更新を行うためには、KPI モデルを理解しておく必要があります。

関連概念:

201 ページの『サンプル KPI』

IBM Intelligent Operations Center では、サンプル KPI が提供されています。このサンプル KPI は、IBM Business Monitor 開発ツールキットを使用してさまざまなタイプの KPI を実装する際のガイダンスとなるように設計されています。水道、輸送、および公共安全用のサンプル・モニター・モデルが用意されています。

176 ページの『KPI の作成および統合』

重要業績評価指標 (KPI) モデルは、ビジネス・モニター開発ツールキット、および「重要業績評価指標」構成ツールを使用して作成および変更できます。

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されません。

サンプル KPI

IBM Intelligent Operations Center では、サンプル KPI が提供されています。このサンプル KPI は、IBM Business Monitor 開発ツールキットを使用してさまざまなタイプの KPI を実装する際のガイダンスとなるように設計されています。水道、輸送、および公共安全用のサンプル・モニター・モデルが用意されています。

最も低いレベルの KPI は集約 KPI として定義されます。集約 KPI は、着信データ項目に含まれる値と各種関数 (平均、最大、最小、合計、出現回数、標準偏差など) から計算されます。これらの値は、定量化可能な測定値として表現されます。KPI にルーティングされるデータ項目プロパティは、データ・ソース定義で識別されます。より高いレベルの KPI は、サンプル KPI の作成時に定義されたマッピングに基づいて値にマップされます。

より高いレベルのサンプル KPI の値は、色および推奨応答レベルに相当する数字です。値 0 は許容可能を表します。値 1 は注意またはモニターを表します。値 2 は対処が必要であることを表します。最も低いレベルの KPI の値は、その値が表す KPI に応じて、期間、10 進数、パーセンテージ、または通貨になります。最も低いレベルの KPI の値の例を以下に示します。

- 15% は、特定の空港で一定の期間に生じたフライト遅延のパーセンテージを表す KPI の実際の値です。
- 5 分 7 秒は、ある場所での一定の期間における平均犯罪応答時間を表す KPI の実際の値です。

サンプル・モデルのソース・ファイルは、Rational Application Developer または IBM Business Monitor Toolkit がインストールされている WebSphere Integration Developer にインポートできるアーカイブ・ファイルの形で提供されます。このアーカイブ・ファイルを変更して、KPI 定義を変更、追加、または削除することができます。その後、定義を再生成して、IBM Intelligent Operations Center に再デプロイできます。KPI の統合について詳しくは、リンクを参照してください。

IBM Intelligent Operations Center には以下のサンプル・モデルが付属しています。

- ioc_sample_public_safety_model
- ioc_sample_transportation_model
- ioc_sample_water_model

これらのモデルには、以下のサンプル KPI が含まれています。

- 水
 - 治水
 - 水位
 - 市内河川の放水
 - 市内湖沼の水位
 - 水管理
 - 戦略的計画
 - 漏水
 - 水の供給と需要

- 水質
 - 物理的標識
 - 濁度
 - pH
- 輸送
 - 空港
 - フライト遅延
 - 空港 1 でフライト遅延
 - 空港 2 でフライト遅延
 - 道路と交通
 - 道路イベント
 - 重大な交通事故
 - 輸送管理
 - 収益
 - 橋とトンネルの通行料
 - 駐車施設の収益
- 公共安全
 - 消防署
 - 消防士の負傷
 - 消防署 1 の消防士負傷
 - 消防署 2 の消防士負傷
 - 警察署
 - 犯罪の応答時間
 - 警察管区 1 の犯罪応答時間
 - 警察管区 2 の犯罪応答時間
 - 公共安全管理
 - 公共安全の予算
 - EMS 部門の予算
 - 消防署の予算
 - 警察署の予算

関連概念:

199 ページの『KPI のカスタマイズ』

IBM Intelligent Operations Center では、ビジネス・プロセスに適合するよう重要業績評価指標 (KPI) モデルをカスタマイズできます。

176 ページの『KPI の作成および統合』

重要業績評価指標 (KPI) モデルは、ビジネス・モニター開発ツールキット、および「重要業績評価指標」構成ツールを使用して作成および変更できます。

KPI をカスタマイズする前のバックアップ

KPI をカスタマイズする前に、IBM Intelligent Operations Center で既存の KPI をバックアップしてください。このアドバイスは、IBM Business Monitor、または IBM Intelligent Operations Center の重要業績評価指標構成ツールを使用して作成または変更した KPI に当てはまります。

このタスクについて

KPI モデルのカスタマイズおよび KPI の変更を行う前に、既存のモデルをバックアップするとよいでしょう。この手順は、指定されたモデルのすべての KPI を、指定されたファイルにエクスポートし、指定されたファイルから、指定されたモデルに KPI をインポートします。

手順

1. アプリケーション・サーバーにログオンします。
2. IBM Business Monitor プロファイルの bin ディレクトリー (/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin) に移動します。
3. KPI をエクスポートするには、以下のコマンドを実行します。

```
./wsadmin.sh -wsadmin_classpath
"../../../../plugins/com.ibm.wbimonitor.lifecycle.spi.jar:../../../../plugins/
com.ibm.wbimonitor.repository.jar" -lang jython -f "../../../../scripts/wbm/kpi/exportKpis.jy"
"xml_file_path" model_ID model_version ALL
```

変数 *xml_file_path* は、KPI のエクスポート先の XML ファイルの名前とパスを表します。変数 *model_ID* と *model_version* は、KPI のエクスポート元の KPI モデルの ID とバージョンを表します。

注: *model_ID* と *model_version* は、重要業績評価指標ツールの「関係と表示」タブに表示されます。KPI をクリックすると、KPI の詳細なプレビューが表示されます。

4. KPI をインポートするには、以下のコマンドを実行します。

```
./wsadmin.sh -wsadmin_classpath
"../../../../plugins/com.ibm.wbimonitor.lifecycle.spi.jar:../../../../plugins/
com.ibm.wbimonitor.repository.jar" -lang jython -f "../../../../scripts/wbm/kpi/importKpis.jy"
"xml_file_path"
```

変数 *xml_file_path* は、KPI のインポート元の XML ファイルの名前とパスを表します。

例

モデル *ioc_sample_public_safety_model* からすべての KPI を /tmp/kpis.xml にエクスポートするには、以下のコマンドを実行します。 *xml_file_path* の値は /tmp/kpis.xml です。 *model_ID* の値は *ioc_sample_public_safety_model* です。 *model_version* の値は 2011-02-18T10:49:46 です。

```
./wsadmin.sh -wsadmin_classpath "../../../../plugins/com.ibm.wbimonitor.lifecycle.spi.jar:
../../../../plugins/com.ibm.wbimonitor.repository.jar" -lang jython -f "../../../../scripts/wbm
/kpi/exportKpis.jy" "/tmp/kpis.xml" ioc_sample_public_safety_model
2011-02-18T10:49:46 ALL
```

KPI モデルの処理について詳しくは、IBM Business Monitor 製品資料へのリンクを参照してください。

関連情報:



IBM Business Monitor の製品資料

データ・ソースに対するカスタム・アクションの定義

1.6

1.6.0.1

1.6.0.2

データ・ソース構成ツールの「アクション」タブに使用可能なアクションとして表示される、カスタム・アクションを定義できます。データ・ソースにカスタム・アクションを割り当てると、データ・ソースのレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに、そのアクションが表示されます。

このタスクについて

以下の手順では、例として Camera Feed という名前のアクションを作成します。この手順は、データ・サーバーで実行します。

手順

1. カスタム・アクションは、JavaScript ファイル内の Dojo スクリプトを通じて定義します。例えば、CameraFeed.js という名前の JavaScript ファイル内で Dojo スクリプトを実装します。この Dojo スクリプトは、BaseMoreAction スクリプトを拡張したものです。この Dojo スクリプトは、ユーザーが「追加のアクション」メニューで項目を選択したときに起動される performAction 関数をオーバーライドします。サンプル Dojo スクリプトを表示するには、関連リンクを参照してください。
2. JavaScript ファイルが含まれる Web モジュールを作成します。Web モジュールがどのようにパッケージ化されるかによって、WAR ファイルか、または EAR ファイルのどちらかになる可能性があります。
3. Web モジュールを WebSphere Application Server にインストールします。
4. モジュールを、IBM HTTP Server サーバーとポータル・クラスターの両方にマップします。

標準環境

```
WebSphere:cell=cell1,node=ihsnode1,server=ihsserver1
WebSphere:cell=cell1,cluster=PortalCluster
```

高可用性環境

```
WebSphere:cell=cell1,node=ihsnode2,server=ihsserver2
WebSphere:cell=cell1,node=ihsnode1,server=ihsserver1
WebSphere:cell=cell1,cluster=PortalCluster
```

5. ブラウザーで、<https://host:port/sample/custom/more/actions/js/test/CameraFeed.js>にある JavaScript ファイルにアクセスできることを確認します。
6. IOC.Available_Extensions データベース表で、カスタム・アクションの項目を定義します。Camera Feed アクションの項目を定義する SQL 照会は以下のとおりです。

```
INSERT INTO IOC.Available_Extensions (Name, Type, Disabled, Multiple, PathLocation, PathName, Module)
VALUES ('CameraFeed', 'ACTION', '1', '0', '/sample/custom/more/actions/js', 'exmp', 'exmp/test/CameraFeed');
```

この SQL 照会のパラメーターを定義したリストを以下に示します。

Name

データ・ソース構成ツールの使用可能なアクションのリストに表示されるアクション名。名前にはスペースを挿入しないでください。

Type

拡張子のタイプ。カスタム・アクションについては、値 ACTION を指定します。

Disabled

デフォルトでアクションをすべてのデータ・ソースに割り当てかどうかを指定します。デフォルトでアクションを割り当てる場合は値 0 を指定し、それ以外の場合は値 1 を指定します。データ・ソース構成ツールの使用可能なアクションの表では、値「はい」および「いいえ」によってアクションをデータ・ソースに割り当てかどうかを示されます。

Multiple

アクションを複数のデータ項目に適用できるかどうかを指定します。アクションを単一のデータ項目にのみ適用できるようにするには、値 0 を指定します。アクションを複数のデータ項目に適用できるようにするには、値 1 を指定します。

PathLocation

アクションを実行する JavaScript ファイルのパス・ロケーション。

PathName

アクションを実行する JavaScript ファイルのパス名。

Module

アクションを実行する JavaScript モジュール。

7. Camera Feed アクションのグローバルゼーション値を IOCデータベースの I18N_RESOURCE 表に挿入するには、以下のコマンドを入力します。

```
INSERT INTO IOC.I18N_RESOURCE ("GROUP", "LOCALE", "KEY", "VALUE")
VALUES ('PreviewCard', 'default', 'action_CameraFeed', 'Camera Feed');
```

注: KEY の値には、接頭部 action_ を付ける必要があります (例: action_CameraFeed)。

前の手順の SQL 照会では、デフォルト・ロケールのグローバルゼーション値が挿入されます。ここでは、別のロケールのグローバルゼーション値を挿入できます。この場合、LOCALE には該当するコードを入力し、VALUE にはそのロケールに該当するアクション名を入力します。

関連タスク:

128 ページの『データ・ソースへのアクションの割り当て』

データ・ソースから受信するデータ項目に適用するユーザー・アクションを選択できます。デフォルトで適用されているアクションもあります。

関連情報:



サンプル Dojo スクリプト

データ項目のアイコン

操作ビュー、状況ビュー、および「ソリューション管理」ビューで、データ項目を表す独自のアイコンを設計し、イメージ・ファイルをアップロードすることができます。アップロードするイメージ・ファイルは、いくつかの要件を満たしている必要があります。

アイコン・イメージ・ファイルが満たす必要のある要件の概要を以下のリストに示します。

- アイコンは、透過 PNG ファイル形式で保管する必要があります。
- ソリューション・インターフェースのどこでもアイコンが見えるように、アイコンごとに 2 つのイメージ・ファイル (暗色バージョンと明色バージョン) をアップロードする必要があります。
 - 操作ビューでは、パドルの色が暗色の場合は明色バージョンのアイコンが表示され、パドルの色が明色の場合は暗色バージョンのアイコンが表示されます。
 - 状況ビューでは、明色バージョンのアイコンが表示されます。
 - 管理ビューでは、暗色バージョンのアイコンが表示されます。
- アイコンの暗色バージョンと明色バージョンは、どちらも同じファイル名でイメージ・ファイルに保管する必要があります。このため、アイコン・イメージ・ファイルの暗色バージョンと明色バージョンを作成するときは、双方のファイルが上書きされないように、各ファイルを別々のディレクトリーに保管してください。

関連タスク:

129 ページの『マップ上のデータの外観の構成』

データ・ソースからのデータ項目を表すために、マップ・マーカーにアイコンまたは色のいずれかを割り当てます。データ・ソース内にあるプロパティの値に従ってマップ・マーカーの外観を変更するための条件を設定できます。

Cognos レポートの表示

1.6.0.1

1.6.0.2

IBM Intelligent Operations Center は、Cognos レポートを表示するためのレポート・ページおよびレポート・ポートレットの作成についてのテーマを提供します。レポート・ページを作成すると、そのページは IBM Intelligent Operations Center インターフェースでビューとして表示されます。

始める前に

Cognos レポートに取り込むことができるデータ・ソースを次のように構成できます。

1. データ・ソース構成ツールで、「**基本**」タブをクリックします。
2. 「**レポート・モデル**」で、「はい」を選択します。

Cognos レポートを高可用性環境で表示したい場合は、『高可用性環境における Cognos モデルの構成』リンクで説明されている構成を行う必要があります。

表示したいレポートごとに、Cognos Connection コンソールからデフォルト操作の URL を入手してください。メインの手順の説明に従って、このデフォルト操作の URL を使用前に編集して Cognos レポートを構成します。デフォルト操作の URL を入手して編集するには、システム管理者として以下のステップを実行します。

1. Cognos Connection コンソールを開くには、「ソリューション管理」ビューで、「システム管理」 > 「管理コンソール」 > 「レポート管理」をクリックします。
2. Cognos Connection コンソールで、IOC ディレクトリーを展開します。
3. レポート・ポートレットで、表示したいレポートを見つけます。
4. レポートのアクション欄で、「プロパティの設定 (Set properties)」をクリックします。
5. 「一般」タブで、「検索パス、ID、URL を表示」をクリックします。
6. 「デフォルト操作の URL」の値をメモします。
7. IBM Intelligent Operations Center の「ソリューション管理」ビューで、「システム・プロパティ」 > 「AnalyticServerDispatchUrl」をクリックし、「値」フィールドのホスト名とポート番号をコピーします。
8. メモしたデフォルト操作の URL に含まれるホスト名とポート番号を、AnalyticServerDispatchUrl システム・プロパティからコピーしたホスト名とポート番号で置き換えます。
9. 編集したデフォルト操作の URL が HTTPS プロトコルを使用していることを確認します。

編集したデフォルト操作の URL を使用して、メインの手順の説明に従ってレポートを構成します。

このタスクについて

レポート・テーマの名前は IOC Portal 8 Reports Theme であり、2 つの縮小表示可能ではないペインが含まれます。レポート・ポートレットの名前は `ioc_ui_reports_portlet` です。レポート・テーマを使用して、レポート・ページを作成し、そのレポート・ページに 2 つのレポート・ポートレットを並べて配置することができます。

ポートレットに構成する設定はグローバルであるため、レポート・ポートレットをコピーしてから、コピーされたレポート・ポートレットをカスタマイズして Cognos レポートを表示します。

「ポータル管理」ビューで、以下の手順を使用して、最大 2 つのレポート・ポートレットを含むレポート・ページを作成します。各レポート・ポートレットは、最大 3 つのレポートを含むように構成できます。

ページおよびポートレットについて詳しくは、「ページの作成またはカスタマイズ」または WebSphere Portal Server 製品資料を参照してください。

手順

1. IBM Intelligent Operations Center インターフェースで、「管理」 > 「ポータル管理」をクリックします。

レポート・ポートレットを構成する

2. 「ポートレットの管理」 > 「ポートレット」をクリックします。
3. レポート・ページに表示するレポート・ポートレットを構成します。
 - a. ポートレットのリストで `ioc_ui_reports_portlet` を見つけてから、「ポートレットのコピー (Copy portlet)」アイコンをクリックします。
 - b. レポート・ポートレットのコピーを適切な名前を付けて保存します。例えば、`ioc_ui_cognos1_portlet` というような名前にします。
 - c. ポートレットのリストで新規レポート・ポートレットを見つけてから、「ポートレットの構成 (Configure portlet)」アイコンをクリックします。
 - d. レポート・ポートレットに表示する最大 3 つのレポートの高さおよび URL を構成します。『作業を始める前に』セクションに記載されている手順を使用して、各レポートについて URL を入手してください。
 - e. 表示するレポート・ポートレットでレポート・ヘッダーとツールバーを使用不可にするには、各レポートの URL の末尾に以下の値を追加します。

• `&cv.toolbar=false&cv.header=false`

4. オプション: レポート・ページに表示する 2 番目のレポート・ポートレットを構成するには、前のステップを繰り返します。

レポート・ページを構成する

5. 「ポータル・ユーザー・インターフェース」 > 「ページの管理」をクリックします。
6. 「コンテンツ・ルート」 > 「市区町村名」 > 「市全域」をクリックします。
7. 「新規ページ」をクリックします。
8. レポート・ページについて適切なオプションを選択または指定します。「Theme」について、「IOC Portal 8 Reports Theme」を選択します。
9. 前に作成したレポート・ポートレットを表示するためのレポート・ページを構成します。
10. 表示するレポートでレポート・ヘッダーを使用不可にする場合は、以下のレポート・パラメーターで値 `false` を設定します。

- `cv.toolbar`
- `cv.header`

次のタスク

構成可能なレポート・パラメーターについて詳しくは、IBM Cognos Business Intelligence の製品資料を参照してください。

関連タスク:

193 ページの『ページの作成またはカスタマイズ』

管理者は IBM Intelligent Operations Center に組み込む新規ページを作成し、それらのページに表示するコンテンツを指定することができます。各ページに組み込むコンテンツの外観およびレイアウトをカスタマイズできます。

86 ページの『高可用性環境における Cognos モデルの構成』

データ・ソースが作成または更新されるときに、IBM Intelligent Operations Center は、Cognos モデルをパブリッシュできます。高可用性環境で、IBM Intelligent Operations Center が Cognos モデルをパブリッシュできるようにするには、Cognos を構成する必要があります。

関連情報:



IBM WebSphere Portal 8 の製品資料

ソリューションでの IBM ロゴの構成

IBM Intelligent Operations Center で表示される IBM のタイトルとロゴを変更することができます。

手順

注: 高可用性環境を使用している場合は、クラスター内の両方のアプリケーション・サーバーで関連するロゴ・ファイルを編集してください。IBM Intelligent Operations Center ファイル・システムを変更する場合 (ロゴ・イメージ・ファイルを置換する場合など) は、変更したすべてのファイルに対して再帰的に許可を設定します。ファイル所有者の値を `ibmadmin` に設定し、ファイル・グループの値を `ibmadmins` に設定します。

- IBM Intelligent Operations Center のビューのバナーに表示されるタイトル (「市区町村名」など) をカスタマイズするには、「ポータル管理」ビューで以下のステップを実行します。
 1. 「ポータル・ユーザー・インターフェース」 > 「ページの管理」 > 「コンテンツ・ルート」をクリックします。
 2. 表内で、「固有の名前または ID (Unique name or Identifier)」の値が `ioc.Home` になっている行を探します。
 3. 「ページ・プロパティの編集」アイコンをクリックします。
 4. 「タイトル」フィールドの値を編集します。
- IBM Intelligent Operations Center のビューのブラウザー・タイトルをカスタマイズする場合は、以下のステップを実行します。
 1. データベース・サーバーに `root` としてログオンします。
 2. `i18n_resource` 表で、グループ値が `Theme`、キー値が `theme_title` になっているすべてのエントリーの値を変更します。

- IBM Intelligent Operations Center のビュー（「ソリューション管理」ビューなど）のバナーの上隅に表示される IBM ロゴをカスタマイズすることができます。アプリケーション・サーバーに *root* ユーザーとしてログオンし、以下のいずれかのオプションを選択します。

1. 「ソリューション管理」ビューまたは白を基調としたビューで IBM ロゴを変更する場合は、以下の PNG ファイルを置き換えます。

```
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_theme_ear.ear/ioc_theme_static_js_web.war/compressedJS/idx/themes/oneui/idx/app/images/headerLogo.png
```

2. 暗色を基調としたビューで IBM ロゴを変更する場合は、以下のファイルを置き換えます。

```
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_theme_ear.ear/ioc_theme_static_js_web.war/compressedJS/idx/themes/oneuidark/idx/app/images/headerLogo.png
```

3. グレーを基調としたビューで IBM ロゴを変更する場合は、以下のファイルを置き換えます。

```
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_theme_ear.ear/ioc_theme_static_js_web.war/compressedJS/idx/themes/oneuidarkgrey/idx/app/images/headerLogo.png
```

- ソリューションのログイン・ページのバナーに表示される IBM ロゴを変更する場合は、アプリケーション・サーバーに *root* ユーザーとしてログオンし、以下のステップを実行します。

1. 以下の *styles.css* ファイルを編集します。

```
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_portal_ear.ear/ioc_ui_login_portlet.war/_ioc_ui_login_portlet/css/styles.css
```

2. *styles.css* ファイルの末尾で、以下のコード例のようなカスタム CSS コンテンツを追加します。

```
.wpthemeBanner .wpthemeBranding img {  
    background-image: url("../images/custom_logo.jpg");  
    background-position: 0 0;  
    width:80px;  
    height:80px;  
}
```

ここで、

custom_logo.jpg はカスタム・ロゴ・ファイルです。

3. *styles.css* ファイルで、ロゴの高さと幅の値を必要に応じて編集します。

4. カスタム・ロゴ・ファイル (*custom_logo.jpg* など) を以下のディレクトリーにコピーします。

```
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_portal_ear.ear/ioc_ui_login_portlet.war/_ioc_ui_login_portlet/images
```

- ログイン・ページの背景イメージ・ファイルをカスタマイズする場合は、以下のファイルを置き換えます。

```
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_portal_ear.ear/ioc_ui_login_portlet/images/ioc_login_background_192012280.jpg
```

第 7 章 ソリューションの管理

「ソリューション管理」ビューで IBM Intelligent Operations Center を管理します。

ログオン

ログオンして IBM Intelligent Operations Center ユーザー・インターフェースにアクセスします。

始める前に

ローカル管理者に連絡して、ユーザー ID とパスワードを取得してください。組織内におけるユーザーの役割に適したセキュリティー・アクセス・レベルを付与することは、管理者の担当業務です。また、管理者は、ソリューション・ポータルにアクセスするための Web アドレス URL もユーザーに提供します。

このタスクについて

以下の手順に従って、新規ブラウザー・セッションを開始し、IBM Intelligent Operations Center にアクセスします。また、ご使用の環境にインストールされている他の IBM Smarter Cities Software Solutions からこのソリューションにアクセスすることもできます。ポータルの上部にあるメイン・ナビゲーション・バーから、「IBM Intelligent Operations Center」を選択します。

手順

1. ブラウザーのアドレス・フィールドに URL を入力します。

注: URL には完全修飾ドメイン名 (例: `https://web_hostname/wps/portal`) を使用する必要があります。ここで、`web_hostname` は Web サーバーのホスト名です。登録された完全修飾ドメイン名の代わりに IP アドレスを使用すると、ウィンドウが正しく開かないことがあります。

2. ログイン・ページで、ユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 「ログイン」をクリックします。

タスクの結果

アクセスを許可されたページ、機能、およびデータのみが表示されます。追加のアクセス権限が必要な場合は、管理者に連絡してください。

製品バージョン詳細の表示

「ソリューション管理」ビューで、インストール済みの IBM Intelligent Operations Center および統合された IBM Smarter Cities Software Solutions のバージョンの詳細を表示できます。インストール後に適用した更新の詳細も表示できます。

ソリューション管理 ビューで、「システム管理」 > 「製品情報」 をクリックします。このページに、インストール済みのソフトウェア、コンポーネント、およびフィックスに関する詳細が表示されます。

注: 各フィックスについて表示される情報は、そのフィックスで提供されたインストールの指示で該当する手順を完了したかどうかによって変わります。

サービスの管理

管理コンソールを使用して、ソリューションによって提供されるサービスを管理します。

各サービスについて、「管理コンソール」内のリンクを利用することで、管理コンソールにアクセスしたり、管理へのアクセス方法に関する情報を確認したりすることができます。

システム・プロパティを使用して、リンクをカスタマイズできます。例えば、管理コンソール・リンクが http プロトコルまたは https プロトコルのどちらを使用するかを指定できます。デフォルトでは、管理コンソール・リンクは https プロトコルを使用します。システム・プロパティについて詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

Web サーバー

表 38. Web サーバーでの管理

コンソール	管理
Web サーバー	Web サーバーのセキュリティーを管理するには、IBM HTTP Server 用の WebSphere Application Server 8.0 Deployment Manager コンソールへのリンクを使用します。

アプリケーション・サーバー

表 39. アプリケーション・サーバーでの管理

コンソール	管理
アプリケーション・サーバー	IBM Intelligent Operations Center が提供するさまざまなサービスを管理するには、WebSphere Application Server 用の Web ベースのコンソールへのリンクを使用します。サーバーの制御、リソースおよびサービス・プロバイダーの管理、ホスト設定およびその他の環境設定の変更を行えます。
連絡先管理	Lotus Domino 連絡先管理用の Lotus Domino Administration クライアントをダウンロードおよびセットアップする方法については、IBM Lotus Domino および Lotus Notes 製品資料を参照してください。
Security Identity Manager	Security Identity Manager の Web ベースのコンソールへのリンクを使用して、ユーザー ID とアプリケーション ID を集中管理し、パスワード、ユーザー・プロビジョニング、および監査機能を管理します。IBM Tivoli Directory Integrator 内にインストールされて構成される LDAP アダプターと Linux アダプターを使用して、LDAP アカウントと Linux アカウントをリモート側の Security Identity Manager から管理できます。
モバイル・アプリケーション開発	モバイル・アプリケーションのリポジトリを管理し、IBM Worklight Application Center に登録されているデバイスを追跡し、特定のデバイス上にインストールされているアプリケーションを表示するには、IBM Worklight Application Center 6.0 コンソールへのリンクを使用します。

表 39. アプリケーション・サーバーでの管理 (続き)

コンソール	管理
1.6.0.2 OIP 管理	ソリューション用に最適化された対話式プロセス・タスクおよび設定を一元的に管理し、構成するには、OIP 管理用の Web ベースのコンソールへのリンクを使用します。例えば、ソリューションの SMS または E メールの設定を構成します。

データ・サーバー

表 40. データ・サーバーでの管理

コンソール	管理
データベース	DB2 Enterprise Server Edition を使用してデータベースを管理する方法については、IBM DB2 Database for Linux, UNIX, and Windows 製品資料を参照してください。データベース・コントロール・センター GUI またはコマンド行を使用して作業を実行できます。
ディレクトリー	ユーザーのディレクトリーを管理するには、Tivoli Directory Server の Web ベースのコンソールを使用します。Tivoli Directory Server の Web ベースのコンソールを使用する方法については、IBM Tivoli Directory Server 製品資料を参照してください。

分析サーバー

表 41. 分析サーバーでの管理

コンソール	管理
レポート管理	レポートのセットアップを行うには、IBM Cognos Connection の Web ベースのコンソールへのリンクを使用します。新規レポートの作成や、既存のレポートの変更が行えます。また、データ・ソースの構成、公開フォルダーや専用フォルダーのセットアップ、権限および配布の定義、レポートの自動実行のスケジュール作成なども行えます。
データ・マイニングおよびモデリング	意思決定能力を高めるために、IBM SPSS Modeler データ・マイニング・ツールを使用して予測モデルを開発し配置する方法については、IBM SPSS Modeler 製品資料へのリンクを参照してください。
データ最適化	数学的アルゴリズムを使用して最適化モデルを作成する方法については、IBM ILOG CPLEX Optimization Studio 製品資料へのリンクを参照してください。
メッセージング	ローカルおよびリモートの WebSphere MQ オブジェクト (キューやキュー・マネージャーなど) を定義および管理する方法については、WebSphere MQ 製品資料へのリンクを参照してください。

表 41. 分析サーバーでの管理 (続き)

コンソール	管理
メッセージング・バス	メッセージ・ブローカーを構成および管理する方法と、メッセージ・フロー・アプリケーションを開発、テスト、およびデバッグする方法については、WebSphere Message Broker 製品資料へのリンクを参照してください。

関連タスク:

『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

システム・プロパティの構成

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

手順

システム・プロパティを表示、作成、変更、または削除するには、「ソリューション管理」ビューで、「システム管理」 > 「システム・プロパティ」をクリックします。システム・プロパティの値と説明を表示するには、プロパティの名前をクリックします。フィールドのヘルプ・アイコンをクリックすると、入力可能な名前や値に関する情報が表示されます。

- システム・プロパティを作成するには、「作成」をクリックして、以下のようになります。
 1. 「システム・プロパティの作成」ウィンドウで、「名前」に値を入力します。
 2. オプション: 「値」に値を入力します。
 3. オプション: 「グループ」に値を入力します。 同じグループのメンバーであるシステム・プロパティは、システム・プロパティ REST サービスの 1 回の呼び出しで取得できます。
 4. オプション: 「説明」に値を入力します。
 5. 「OK」をクリックします。
- システム・プロパティを変更するには、プロパティの名前をクリックして、以下のようになります。
 1. プロパティの「値」、「説明」、および「グループ」を必要に応じて編集します。
 2. 「保存」をクリックします。
- システム・プロパティを削除するには、プロパティの名前をクリックして、以下のようになります。
 1. 「削除」をクリックします。
 2. 確認ウィンドウで「OK」をクリックします。

標準環境における状況の開始、停止、および照会

プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは、高可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

関連概念:

223 ページの『高可用性環境における開始、停止、および状況の照会』プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは、高可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center サービスを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

16 ページの『バージョン 1.6.0.2 の新機能』

IBM Intelligent Operations Centerバージョン 1.6.0.2には、複数の新機能が用意されており、既存の機能への更新が提供されます。新機能には、ユーザーが通知の設定をカスタマイズできるように拡張されたユーザー・プロファイル管理が含まれます。ソリューション管理者は、新規コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、カスタマイズされたユーザー・インターフェース・コンポーネントを作成できます。KPI については、ソリューション管理者は、レポートに KPI をマップできます。

プラットフォーム制御ツールの標準環境コンポーネントについて

1.6.0.2

プラットフォーム制御ツールのコンポーネントは、論理グループに結合され、親子関係を使用して名前が付けられます。

例えば、標準環境では、ディレクトリー・コンポーネントを基本レベルまたはそれより下位のコンポーネント・レベルで開始、停止、または照会することができます。

表 42. 標準環境でのディレクトリー・コンポーネントおよびサブコンポーネントのプラットフォーム制御ツール名の例

基本コンポーネント	コンポーネント	サブコンポーネント
dir	dbstds	dbstdsadm
		dbstdsserv
	dbstdi	

標準環境用の基本コンポーネントは以下のとおりです。

dir ディレクトリー・コンポーネント
db データベース・コンポーネント
sec セキュリティ・コンポーネント
msg メッセージング・コンポーネント
col コラボレーション・コンポーネント
app アプリケーション・コンポーネント
ana 分析コンポーネント

コンポーネントとサブコンポーネントには、「サーバー + 製品またはサービス」の形式で名前が付けられます。例えば、dbstds は、データ・サーバー 上の Tivoli Directory Server です。

コンポーネントとサブコンポーネントの名前について詳しくは、IBM Intelligent Operations Center に付属する iopmgmt.std.help.txt ファイルを参照してください。

標準環境におけるコンポーネントの開始

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

このタスクについて

IOCControl コマンドは、ibmadmin ユーザーとして実行してください。ibmadmin としてログオンしていない場合、su - ibmadmin コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに切り替えます。

重要: 個別コンポーネントの開始は、熟練した IBM Intelligent Operations Center 管理者のみが行ってください。必要とされる順序でコンポーネントが開始されなかった場合は、予測不能な結果が起こることがあります。

手順

IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントを開始するには、分析サーバーで以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a start -c all -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Centerのインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例:
'pass\$phrase'

コンポーネントは、必要とされる順序で開始されます。前提条件コンポーネントは、従属コンポーネントより前に開始されます。例えば、データベース・コンポーネントとディレクトリー・コンポーネントは最初に開始されます。

1 つのコンポーネントのみを開始するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a start -c component -p password
```

ここで、*component* は IOCControl ヘルプ内の「ターゲット・オプション」でリストされる ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例:

```
'pass$phrase'
```

オプションで、nostatus オプションをコマンドに追加できます。これにより、コマンドから返される出力がすべて抑止されます。

タスクの結果

要求された IBM Intelligent Operations Center コンポーネントが開始されます。

次のタスク

IOCControl コマンドで必要な結果が得られなかった場合は、/opt/IBM/ISP/mgmt/logs ディレクトリー内のログを確認します。ログには、最新の IOCControl コマンドの結果が含まれています。

1.6.0.2 ログ・ファイルの名前は、-a で指定したアクションで始まります。

関連タスク:

218 ページの『標準環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

221 ページの『標準環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバーで実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

222 ページの『標準環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手』

プラットフォーム制御ツールを標準環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

V1.6.0.2 の標準環境で従う必要のある開始順序

1.6.0.2

標準環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で開始する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを開始するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの `-a start -c all -p password` コマンドを使用してすべてのコンポーネントを開始することが推奨されますが、個別にコンポーネントを開始することが必要な場合もあります。

以下の表に、従う必要のあるコンポーネントの開始順序を示します。コンポーネントを開始するには、基本コンポーネントまたは `-c` 値の個別コンポーネントを使用します。

表 43. IBM Intelligent Operations Center 標準版コンポーネントの開始順序

基本コンポーネント	コンポーネント	開始される製品またはサービス
dir	dbstds	Tivoli Directory Server
	dbstdi	Tivoli Directory Integrator
dbs	dbstdb24adm	DB2 Enterprise Server Edition 管理サーバー
	dbstdb24mid	ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition
	dbstdb24app	アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition
sec	appisim	IBM Security Identity Manager
msg	anamb	IBM Message Broker
col	appdomino	IBM Lotus Sametime
app	appdmgr	WebSphere Application Server Deployment Manager
	appbmon	IBM Business Monitor
	appstproxy	IBM Lotus Sametime Proxy Server
	appwrklt	IBM Worklight
	appwpe	WebSphere Portal Extend
	appiop	Intelligent Operations Platform サーバー
	webihs	IBM HTTP Server
ana	anacognos	IBM Cognos Business Intelligence
	anacplex	IBM ILOG CPLEX Optimization Studio
	anasps	IBM SPSS Modeler

V1.6 および V1.6.0.1 の標準環境で従う必要のある開始順序

1.6

1.6.0.1

標準環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で開始する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを開始するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの `-a start -c all -p password` コマンドを使用してすべてのコンポーネントを開始することが推奨されますが、個別にコンポーネントを開始することが必要な場合もあります。

一部のコンポーネントには他のコンポーネントへの従属関係があるため、コンポーネントは特定の順序で開始する必要があります。

通常は、コンポーネントを以下の 3 つのグループに分けて開始してください。

グループ 1

tds、db24mid、db24app

グループ 2

sim

グループ 3

残りのすべてのコンポーネント

グループ 1 のコンポーネントを最初に開始し、次にグループ 2 を開始し、最後にグループ 3 を開始します。各グループ内のコンポーネントは任意の順序で開始できます。

表 44. IBM Intelligent Operations Center コンポーネント開始順序の従属関係

コンポーネント	説明	このコンポーネントの開始前から実行されている必要のあるコンポーネント
tds	Tivoli Directory Server	なし
db24mid	ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition	なし
db24app	アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition	なし
sim	IBM Security Identity Manager	tds
appdmgr	WebSphere Application Server Deployment Manager	tds
wbm	WebSphere Business Modeler	tds、wpe
st	IBM Lotus Sametime	tds
stproxy	IBM Lotus Sametime Proxy Server	tds
wpe	WebSphere Portal Extend	tds
wmb	IBM Message Broker	tds
cognos	IBM Cognos Business Intelligence	tds、wpe
wrklit	IBM Worklight	tds、wpe
iopsvr	Intelligent Operations Platform サーバー	tds、wpe
ihsweb	IBM HTTP Server	tds

標準環境におけるコンポーネントの停止

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

このタスクについて

IOCCControl コマンドは、ibmadmin ユーザーとして実行してください。ibmadmin としてログオンしていない場合、su - ibmadmin コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに切り替えます。

重要: 個別コンポーネントの停止は、熟練した IBM Intelligent Operations Center 管理者のみが行ってください。必要とされる順序でコンポーネントが停止されなかった場合は、予測不能な結果が起こることがあります。

手順

IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントを停止するには、分析サーバーで以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a stop -c all -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Centerのインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例:
'pass\$phrase'

1 つのコンポーネントのみを停止するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a stop -c component -p password
```

ここで、*component* は IOCControl ヘルプ内の「ターゲット・オプション」でリストされる ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。

password 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例:

```
'pass$phrase'
```

1.6.0.2 オプションで、*nostatus* オプションをコマンドに追加できます。これにより、コマンドから返される出力がすべて抑止されます。

タスクの結果

要求された IBM Intelligent Operations Center コンポーネントが停止されます。

次のタスク

IOCControl コマンドで必要な結果が得られなかった場合は、`/opt/IBM/ISP/mgmt/logs` ディレクトリ内のログを確認します。ログには、最新の IOCControl コマンドの結果が含まれています。

1.6.0.2 ログ・ファイルの名前は、`-a` で指定したアクションで始まります。

関連タスク:

215 ページの『標準環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

221 ページの『標準環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバーで実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

222 ページの『標準環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手』

プラットフォーム制御ツールを標準環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

V1.6.0.2 標準環境で従う必要のある停止順序

1.6.0.2

標準環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で停止する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの `-a stop -c all -p password` コマンドを使用してすべてのコンポーネントを停止することが推奨されますが、個別にコンポーネントを停止することが必要な場合もあります。

以下の表に、従う必要のあるコンポーネントの停止順序を示します。コンポーネントを停止するには、基本コンポーネントまたは `-c` 値の個別コンポーネントを使用します。

表 45. IBM Intelligent Operations Center 標準版コンポーネントの停止順序

基本コンポーネント	コンポーネント	開始される製品またはサービス
ana	anaspss	IBM SPSS Modeler
	anacplex	IBM ILOG CPLEX Optimization Studio
	anacognos	IBM Cognos Business Intelligence
app	webihs	IBM HTTP Server
	appiop	Intelligent Operations Platform サーバー
	appwpe	WebSphere Portal Extend
	appwrklt	IBM Worklight
	appstproxy	IBM Lotus Sametime Proxy Server
	appbmon	WebSphere Business Modeler
	appdmgr	WebSphere Application Server Deployment Manager
col	appdomino	IBM Lotus Sametime
msg	anamb	IBM Message Broker
sec	appisim	IBM Security Identity Manager
dbs	dbfdb24app	アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition
	dbfdb24mid	ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition
	dbfdb24adm	DB2 Enterprise Server Edition 管理サーバー
dir	dbstdi	Tivoli Directory Integrator
	dbstds	Tivoli Directory Server

V1.6 および V1.6.0.1 の標準環境で従う必要のある停止順序

1.6

1.6.0.1

標準環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で停止する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの `-a stop -c all -p password` コマンドを使用してすべてのコンポーネントを停止することが推奨されますが、個別にコンポーネントを停止することが必要な場合もあります。

一部のコンポーネントには他のコンポーネントへの従属関係があるので、コンポーネントは特定の順序で停止する必要があります。

通常は、コンポーネントを以下の 3 つのグループに分けて停止してください。

グループ 1

appdmgr、ihsweb、wbm、st、stproxy、wpe、wmb、cognos、wrklt、iopsvr

グループ 2

sim

グループ 3

db24mid、db24app、tds

グループ 1 のコンポーネントを最初に停止し、次にグループ 2 を停止し、最後にグループ 3 を停止します。各グループ内のコンポーネントは任意の順序で停止できます。

表 46. IBM Intelligent Operations Center のコンポーネント停止順序の従属関係

コンポーネント	説明	このコンポーネントの停止前に停止されている必要のあるコンポーネント
appdmgr	WebSphere Application Server Deployment Manager	wpe
ihsweb	IBM HTTP Server	wpe
wbm	WebSphere Business Modeler	なし
st	IBM Lotus Sametime	stproxy
stproxy	IBM Lotus Sametime Proxy Server	なし
wpe	WebSphere Portal Extend	iopsvr, wrklt, cognos, wbm
wmb	IBM Message Broker	なし
cognos	IBM Cognos Business Intelligence	なし
wrklt	IBM Worklight	なし
iopsvr	Intelligent Operations Platform サーバー	なし
sim	IBM Security Identity Manager	なし
db24mid	ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition	wpe
db24app	アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition	wpe
tds	Tivoli Directory Server	その他すべてのサービス

標準環境におけるコンポーネントの状況の照会

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバーで実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

このタスクについて

IOControl コマンドは、ibmadmin ユーザーとして実行してください。ibmadmin としてログオンしていない場合、su - ibmadmin コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに切り替えます。

手順

IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントの状況を照会するには、分析サーバーで以下のコマンドを実行します。

```
IOControl -a status -c all -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

1 つのコンポーネントのみを検査するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOControl -a status -c component -p password
```

ここで、*component* は IOCControl ヘルプ内の「ターゲット・オプション」でリストされる ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例:
'pass\$phrase'

タスクの結果

開始されているコンポーネントについては **[on]** と表示されます。開始されていないコンポーネントについては **[off]** と表示されます。

1.6.0.2 **[unknown]** が表示された場合は、コンポーネントの状況を判別するときに問題が発生しています。可能性がある問題は、次のとおりです。

- プラットフォーム制御ツールとコンポーネントの間のネットワーク接続に問題がある。
- サーバーでリソースが不足している。例えば、ログ用のディスク・スペースが不足していると、サーバーが新規の作業要求を処理できなくなります。
- オプションの製品が完全にインストールされていない。
- その他のコンポーネント固有の問題。

コマンドを再実行します。それでも **[unknown]** が表示される場合は、ログに追加情報がないかを確認してください。

注: **1.6.0.2** **-c** で指定されるコンポーネントにサブコンポーネントが定義されている場合は、親コンポーネントの状況ではなくサブコンポーネントの状況が表示されます。プラットフォーム制御ツールのヘルプでは、IBM Intelligent Operations Center で定義されているコンポーネントとサブコンポーネントがリストされます。

次のタスク

IOCControl コマンドで必要な結果が得られなかった場合は、`/opt/IBM/ISP/mgmt/logs` ディレクトリー内のログを確認します。ログには、最新の IOCControl コマンドの結果が含まれています。

関連タスク:

215 ページの『標準環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

218 ページの『標準環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

『標準環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手』

プラットフォーム制御ツールを標準環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

標準環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手

プラットフォーム制御ツールを標準環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

このタスクについて

IOCControl コマンドは、`ibmadmin` ユーザーとして実行してください。`ibmadmin` としてログオンしていない場合、`su - ibmadmin` コマンドを実行して `ibmadmin` ユーザーに切り替えます。

手順

IOCControl コマンドのオプションを表示するには、分析サーバーで以下のいずれかのコマンドを実行します。

1.6.0.2

```
IOCControl -a help  
or IOCControl -h
```

1.6

1.6.0.1

```
IOCControl -a 000  
or  
IOCControl -h
```

タスクの結果

IOCControl コマンドのオプションが表示されます。

関連タスク:

215 ページの『標準環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

218 ページの『標準環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

221 ページの『標準環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 標準環境サーバーで実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

高可用性環境における開始、停止、および状況の照会

プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは、高可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center サービスを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

関連概念:

214 ページの『標準環境における状況の開始、停止、および照会』

プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは、高可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

16 ページの『バージョン 1.6.0.2 の新機能』

IBM Intelligent Operations Centerバージョン 1.6.0.2には、複数の新機能が用意されており、既存の機能への更新が提供されます。新機能には、ユーザーが通知の設定をカスタマイズできるように拡張されたユーザー・プロファイル管理が含まれます。ソリューション管理者は、新規コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、カスタマイズされたユーザー・インターフェース・コンポーネントを作成できます。KPI については、ソリューション管理者は、レポートに KPI をマップできます。

プラットフォーム制御ツールの高可用性環境コンポーネントについて

1.6.0.2

プラットフォーム制御ツールのコンポーネントは、論理グループに結合され、親子関係を使用して名前が付けられます。

例えば、高可用性環境では、ディレクトリー・コンポーネントを基本レベルまたはそれより下位のコンポーネント・レベルで開始、停止、または照会することができます。

表 47. 高可用性環境でのディレクトリー・コンポーネントおよびサブコンポーネントのプラットフォーム制御ツール名の例

基本コンポーネント	コンポーネント	サブコンポーネント	サブコンポーネントのサブコンポーネント
dirgrp	dirpri	dbstdspri	dbstdsapmpri
			dbstdsservpri
		anatdsproxypri	anatdsproxyadmpri
			anatdsproxyservpri
		dbstdipri	
		dirsby	dbstdssby
	dbstdsservsby		
	anatdsproxysby		anatdsproxyadmsby
			anatdsproxyservsby

高可用性環境用の基本コンポーネントは以下のとおりです。

- dirgrp** ディレクトリー・コンポーネント
- dbsggrp** データベース・コンポーネント
- secgrp** セキュリティ・コンポーネント
- msggrp** メッセージング・コンポーネント
- colgrp** コラボレーション・コンポーネント
- appgrp** アプリケーション・コンポーネント
- anagrp** 分析コンポーネント

コンポーネントとサブコンポーネントには、「サーバー + 製品またはサービス」の形式で名前が付けられます。例えば、dbstdspri は、データ・サーバー 1 上の Tivoli Directory Server です。

コンポーネントとサブコンポーネントの名前について詳しくは、IBM Intelligent Operations Center に付属する iopmgmt.ha.help.txt ファイルを参照してください。

高可用性環境におけるコンポーネントの開始

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

このタスクについて

IOCControl コマンドは、ibmadmin ユーザーとして実行してください。ibmadmin としてログオンしていない場合、su - ibmadmin コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに切り替えます。

重要: 個別コンポーネントの開始は、熟練した IBM Intelligent Operations Center 管理者のみが行ってください。必要とされる順序でコンポーネントが開始されなかった場合は、予測不能な結果が起こることがあります。

手順

1. 分析サーバー 1 または分析サーバー 2 に `ibmadmin` ユーザーとしてログオンします。別のユーザーとしてログインしている場合は、`su - ibmadmin` コマンドを実行して `ibmadmin` ユーザーに変更します。通常の運用下では、分析サーバー 1 でプラットフォーム制御ツールを使用します。分析サーバー 1 が使用不可能な場合は、分析サーバー 2 でプラットフォーム制御ツールを実行できます。分析サーバー 1 と分析サーバー 2 で同時にプラットフォーム制御ツールを使用しないでください。これを行うと、予測不能な結果が発生することがあります。

2. **1.6.0.2** IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントを開始するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a start -c all -p password
```

ここで、`password` は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。`password` 値に特殊文字が含まれる場合、`password` 値を単一引用符で囲む必要があります。例: `'pass$phrase'`

オプションで、`nostatus` オプションをコマンドに追加できます。これにより、コマンドから返される出力がすべて抑止されます。

コンポーネントは、必要とされる順序で開始されます。前提条件コンポーネントは、従属コンポーネントより前に開始されます。例えば、データベース・コンポーネントとディレクトリー・コンポーネントは最初に開始されます。

1 つのコンポーネントのみを開始するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a start component -p password
```

ここで `component` は `IOCControl` ヘルプ内でリストされている ID、`password` は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。`password` 値に特殊文字が含まれる場合、`password` 値を単一引用符で囲む必要があります。例: `'pass$phrase'`

オプションで、`nostatus` オプションをコマンドに追加できます。これにより、コマンドから返される出力がすべて抑止されます。

3. **1.6** **1.6.0.1** IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントを開始するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a 001 -p password
```

ここで、`password` は、IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。`password` 値に特殊文字が含まれる場合、`password` 値を単一引用符で囲む必要があります。例: `'pass$phrase'`

オプションで、`nostatus` オプションをコマンドに追加できます。これにより、コマンドから返される出力がすべて抑止されます。

コンポーネントは、必要とされる順序で開始されます。前提条件コンポーネントは、従属コンポーネントより前に開始されます。例えば、データベース・コンポーネントとディレクトリー・コンポーネントは最初に開始されます。

1 つのコンポーネントのみを開始するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOControl -a action -p password
```

ここで *action* は IOControl ヘルプ内でリストされている ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: '*pass\$phrase*'

オプションで、*nostatus* オプションをコマンドに追加できます。これにより、コマンドから返される出力がすべて抑止されます。

タスクの結果

要求された IBM Intelligent Operations Center コンポーネントが開始されます。

次のタスク

IOControl コマンドで必要な結果が得られなかった場合は、`/opt/IBM/ISP/mgmt/logs` ディレクトリー内のログを確認します。ログには、最新の IOControl コマンドの結果が含まれています。

1.6.0.2 ログ・ファイルの名前は、`-a` で指定したアクションで始まります。

関連タスク:

229 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

233 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

235 ページの『高可用性環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手』

プラットフォーム制御ツールを高可用性環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

V1.6.0.2 の高可用性環境で従う必要のある開始順序

1.6.0.2

高可用性環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で開始する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを開始するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの `-a start -c all -p password` コマンドを使用してすべてのコンポーネントを開始することが推奨されますが、個別にコンポーネントを開始することが必要な場合もあります。

以下の表に、従う必要のあるコンポーネントの開始順序を示します。コンポーネントを停止するには、基本コンポーネントまたは `-c` 値の個別コンポーネントを使用します。

表 48. IBM Intelligent Operations Center 高可用性コンポーネントの開始順序

基本コンポーネント	コンポーネント	説明
dirgrp	dirpri	プラットフォーム・ディレクトリー・コンポーネントの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • Tivoli Directory Server • Tivoli Directory Server プロキシ・サーバー • Tivoli Directory Integrator
	dirsby	プラットフォーム・ディレクトリー・コンポーネントの始動 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> • Tivoli Directory Server • Tivoli Directory Server プロキシ・サーバー
dbsgroup	dbssby	データベース・コンポーネントの始動 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> • DB2 Enterprise Server Edition 管理サーバー • ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition • アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition
	dbspri	データベース・コンポーネントの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • DB2 Enterprise Server Edition 管理サーバー • ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition • アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition
secgrp	secpri	セキュリティー・コンポーネントの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Security Identity Manager
	secsby	予約済み
msggrp	msgpri	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Message Broker
	msgsb	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの始動 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Message Broker
colgrp	colpri	コラボレーション・コンポーネントの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Lotus Sametime
	colsb	予約済み

表 48. IBM Intelligent Operations Center 高可用性コンポーネントの開始順序 (続き)

基本コンポーネント	コンポーネント	説明
appgrp	apppri	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Deployment Manager • IBM Business Monitor • IBM Lotus Sametime Proxy Server • IBM Worklight • WebSphere Portal Extend • Intelligent Operations Platform サーバー • IBM HTTP Server
	appsby	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの始動 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Deployment Manager • IBM Business Monitor • IBM Lotus Sametime Proxy Server • IBM Worklight • WebSphere Portal Extend • Intelligent Operations Platform サーバー • IBM HTTP Server
anagr	anapri	プラットフォーム分析サーバーの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Cognos Business Intelligence • IBM ILOG CPLEX Optimization Studio • IBM SPSS Modeler
	anasby	プラットフォーム分析サーバーの始動 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Cognos Business Intelligence • IBM ILOG CPLEX Optimization Studio • IBM SPSS Modeler

V1.6 および V1.6.0.1 の高可用性環境で従う必要のある開始順序

1.6

1.6.0.1

高可用性環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で開始する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを開始するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの `start all` オプションを使用してすべてのコンポーネントを開始することが推奨されますが、場合によっては個別にコンポーネントを開始する必要があります。

一部のコンポーネントには他のコンポーネントへの従属関係があるため、コンポーネントは特定の順序で開始する必要があります。

表 49. IBM Intelligent Operations Center コンポーネント開始順序の従属関係

コンポーネント	説明	このコンポーネントの開始前から実行されている必要のあるサービス
101	LDAP コンポーネントの始動 (1 次)	なし
111	LDAP コンポーネントの始動 (スタンバイ)	101
121	LDAP プロキシ・コンポーネントの始動 (1 次)	101
131	LDAP プロキシ・コンポーネントの始動 (スタンバイ)	111, 121
141	データベース・コンポーネントの始動 (スタンバイ)	なし
151	データベース・コンポーネントの始動 (1 次)	141, 903
201	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの始動 (1 次)	101
211	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの始動 (スタンバイ)	111
221	プラットフォーム分析サーバーの始動 (1 次)	101
231	プラットフォーム分析サーバーの始動 (スタンバイ)	111
241	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの始動 (1 次)	101
251	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの始動 (スタンバイ)	111
261	コラボレーション・コンポーネントの始動 (1 次)	101
271	レポート・コンポーネントの始動 (1 次)	101
301	Web コンポーネントの始動 (1 次)	101
311	Web コンポーネントの始動 (スタンバイ)	101

高可用性環境におけるコンポーネントの停止

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

このタスクについて

IOControl コマンドは、ibmadmin ユーザーとして実行してください。ibmadmin としてログオンしていない場合、`su - ibmadmin` コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに切り替えます。

重要: 個別コンポーネントの停止は、熟練した IBM Intelligent Operations Center 管理者のみが行ってください。必要とされる順序でコンポーネントが停止されなかった場合は、予測不能な結果が起こることがあります。

手順

1. 分析サーバー 1 または分析サーバー 2 に ibmadmin ユーザーとしてログオンします。別のユーザーとしてログインしている場合は、`su - ibmadmin` コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに変更します。通常の運用下では、分析サーバー 1 でプラットフォーム制御ツールを使用します。分析サーバー 1 が使用不可能な場合は、分析サーバー 2 でプラットフォーム制御ツールを実行できます。分析サーバー 1 と分析サーバー 2 で同時にプラットフォーム制御ツールを使用しないでください。これを行うと、予測不能な結果が発生することがあります。

2. **1.6.0.2** IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントを停止するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a stop -c all -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Centerのインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

1 つのコンポーネントのみを停止するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a stop -c component -p password
```

ここで *component* は IOCControl ヘルプ内でリストされている ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

3. **1.6** **1.6.0.1** IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントを停止するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a 091 -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Centerのインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

1 つのコンポーネントのみを停止するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a action password
```

ここで *action* は IOCControl ヘルプ内でリストされている ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。*password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

タスクの結果

要求された IBM Intelligent Operations Center コンポーネントが停止されます。

次のタスク

IOCControl コマンドで必要な結果が得られなかった場合は、/opt/IBM/ISP/mgmt/logs ディレクトリー内のログを確認します。ログには、最新の IOCControl コマンドの結果が含まれています。

1.6.0.2 ログ・ファイルの名前は、-a で指定したアクションで始まります。

関連タスク:

224 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

233 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

235 ページの『高可用性環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手』

プラットフォーム制御ツールを高可用性環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

V1.6.0.2 の高可用性環境で従う必要のある停止順序

1.6.0.2

高可用性環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で停止する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの `-a stop -c all -p password` コマンドを使用してすべてのコンポーネントを停止することが推奨されますが、個別にコンポーネントを停止することが必要な場合もあります。

以下の表に、従う必要のあるコンポーネントの停止順序を示します。コンポーネントを停止するには、基本コンポーネントまたは `-c` 値の個別コンポーネントを使用します。

表 50. IBM Intelligent Operations Center 高可用性コンポーネントの停止順序

基本コンポーネント	コンポーネント	説明
anagrp	anasby	プラットフォーム分析サーバーの停止 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Cognos Business Intelligence • IBM ILOG CPLEX Optimization Studio • IBM SPSS Modeler
	anapri	プラットフォーム分析サーバーの停止 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Cognos Business Intelligence • IBM ILOG CPLEX Optimization Studio • IBM SPSS Modeler
appgrp	appsby	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの停止 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Deployment Manager • IBM Business Monitor • IBM Lotus Sametime Proxy Server • IBM Worklight • WebSphere Portal Extend • Intelligent Operations Platform サーバー • IBM HTTP Server
	apppri	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの停止 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Deployment Manager • IBM Business Monitor • IBM Lotus Sametime Proxy Server • IBM Worklight • WebSphere Portal Extend • Intelligent Operations Platform サーバー • IBM HTTP Server
colgrp	colsby	予約済み
	colpri	コラボレーション・コンポーネントの停止 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> • IBM Lotus Sametime

表 50. IBM Intelligent Operations Center 高可用性コンポーネントの停止順序 (続き)

基本コンポーネント	コンポーネント	説明
msggrp	msgsbj	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの停止 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> IBM Message Broker
	msgpri	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの停止 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> IBM Message Broker
secgrp	secsbj	予約済み
	secpri	セキュリティー・コンポーネントの停止 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> IBM Security Identity Manager
dbsgrp	dbspri	データベース・コンポーネントの始動 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> DB2 Enterprise Server Edition 管理サーバー ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition
	dbssbj	データベース・コンポーネントの始動 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> DB2 Enterprise Server Edition 管理サーバー ミドルウェア用 DB2 Enterprise Server Edition アプリケーション用 DB2 Enterprise Server Edition
dirgrp	dirsbj	プラットフォーム・ディレクトリー・コンポーネントの停止 (スタンバイ) <ul style="list-style-type: none"> Tivoli Directory Server Tivoli Directory Server プロキシ・サーバー
	dirpri	プラットフォーム・ディレクトリー・コンポーネントの停止 (1 次) <ul style="list-style-type: none"> Tivoli Directory Server Tivoli Directory Server プロキシ・サーバー Tivoli Directory Integrator

V1.6 および V1.6.0.1 の高可用性環境で従う必要のある停止順序

1.6

1.6.0.1

高可用性環境では、IBM Intelligent Operations Center のコンポーネントを特定の順序で停止する必要があります。

IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止するには、プラットフォーム制御ツールを使用します。プラットフォーム制御ツールの stop all オプションを使用してすべてのコンポーネントを停止することが推奨されますが、場合によっては個別にコンポーネントを停止する必要があります。

表 51. IBM Intelligent Operations Center コンポーネント開始順序の従属関係

コンポーネント	説明	このコンポーネントの開始前から実行されている必要のあるサービス
501	Web コンポーネントの停止 (スタンバイ)	なし
511	Web コンポーネントの停止 (1 次)	501

表 51. IBM Intelligent Operations Center コンポーネント開始順序の従属関係 (続き)

コンポーネント	説明	このコンポーネントの開始前から実行されている必要のあるサービス
601	レポート・コンポーネントの停止 (1 次)	なし
611	コラボレーション・コンポーネントの停止 (1 次)	なし
621	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの停止 (スタンバイ)	なし
631	プラットフォーム・メッセージング・サーバーの停止 (1 次)	621
641	プラットフォーム分析サーバーの停止 (スタンバイ)	なし
651	プラットフォーム分析サーバーの停止 (1 次)	641
661	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの停止 (スタンバイ)	なし
671	プラットフォーム・アプリケーション・サーバーの停止 (1 次)	661
751	データベース・コンポーネントの停止 (1 次)	601, 611, 631, 651, 671, 953
741	データベース・コンポーネントの停止 (スタンバイ)	621, 641, 661, 955
701	LDAP プロキシ・コンポーネントの停止 (スタンバイ)	641
711	LDAP プロキシ・コンポーネントの停止 (1 次)	651
721	LDAP コンポーネントの停止 (スタンバイ)	601, 611, 621, 631, 641, 651, 661, 671, 953
731	LDAP コンポーネントの停止 (1 次)	601, 611, 621, 631, 641, 651, 661, 671, 953, 731

高可用性環境におけるコンポーネントの状況の照会

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

このタスクについて

IOCControl コマンドは、ibmadmin ユーザーとして実行してください。ibmadmin としてログオンしていない場合、su - ibmadmin コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに切り替えます。

手順

- 分析サーバー 1 または分析サーバー 2 に ibmadmin ユーザーとしてログオンします。別のユーザーとしてログインしている場合は、su - ibmadmin コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに変更します。通常の運用下では、分析サーバー 1 でプラットフォーム制御ツールを使用します。分析サーバー 1 が使用不可能な場合は、分析サーバー 2 でプラットフォーム制御ツールを実行できます。分析サーバー 1 と分析サーバー 2 で同時にプラットフォーム制御ツールを使用しないでください。これを行うと、予測不能な結果が発生することがあります。
- 1.6.0.2** IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントの状況を照会するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a status -c all -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Centerのインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。 *password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

1 つのコンポーネントのみを検査するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a status -c component -p password
```

ここで *component* は IOCControl ヘルプ内の ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。 *password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

3. **1.6** **1.6.0.1** IBM Intelligent Operations Center のすべてのコンポーネントの状況を照会するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a 801 -p password
```

ここで、*password* は、IBM Intelligent Operations Centerのインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。 *password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

1 つのコンポーネントのみを検査するには、以下のコマンドを実行します。

```
IOCControl -a action -p password
```

ここで *action* は IOCControl ヘルプ内の ID、*password* は IBM Intelligent Operations Center のインストール時に定義されたトポロジー・パスワードです。 *password* 値に特殊文字が含まれる場合、*password* 値を単一引用符で囲む必要があります。例: 'pass\$phrase'

タスクの結果

開始されているコンポーネントについては **[on]** と表示されます。開始されていないコンポーネントについては **[off]** と表示されます。

1.6.0.2 **[unknown]** が表示された場合は、コンポーネントの状況を判別するときに問題が発生しています。可能性がある問題は、次のとおりです。

- プラットフォーム制御ツールとコンポーネントの間のネットワーク接続に問題がある。
- サーバーでリソースが不足している。例えば、ログ用のディスク・スペースが不足していると、サーバーが新規の作業要求を処理できなくなります。
- オプションの製品が完全にインストールされていない。
- その他のコンポーネント固有の問題。

コマンドを再試行します。それでも **[unknown]** が表示される場合は、ログに追加情報がないかを確認してください。

注: **1.6.0.2** **-c** で指定されるコンポーネントにサブコンポーネントが定義されている場合は、親コンポーネントの状況ではなくサブコンポーネントの状況が表示されます。プラットフォーム制御ツールのヘルプでは、IBM Intelligent Operations Center で定義されているコンポーネントとサブコンポーネントがリストされます。

関連タスク:

224 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

229 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

『高可用性環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手』

プラットフォーム制御ツールを高可用性環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

高可用性環境におけるプラットフォーム制御ツールのヘルプの入手

プラットフォーム制御ツールを高可用性環境で実行するためのオプションに関する情報を入手できます。

このタスクについて

IOControl コマンドは、ibmadmin ユーザーとして実行してください。ibmadmin としてログオンしていない場合、su - ibmadmin コマンドを実行して ibmadmin ユーザーに切り替えます。

手順

- **1.6.0.2** IOControl コマンドのオプションを表示するには、分析サーバー 1 または分析サーバー 2 で以下のいずれかのコマンドを実行します。

```
IOControl -a help
```

or

```
IOControl -h
```

- **1.6** **1.6.0.1** IOControl コマンドのオプションを表示するには、分析サーバー 1 または分析サーバー 2 で以下のいずれかのコマンドを実行します。

```
IOControl -a 000
```

タスクの結果

IOControl コマンドのオプションが表示されます。

関連タスク:

224 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの開始』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントを開始できます。

229 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの停止』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性サーバー上で実行されるコンポーネントを停止できます。

233 ページの『高可用性環境におけるコンポーネントの状況の照会』

プラットフォーム制御ツールを使用して、IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境サーバー上で実行されるコンポーネントの状況を判別できます。

コンポーネントの検証

システム検査チェック・ツールツールは、IBM Intelligent Operations Center 内のコンポーネントをテストし、アクセス可能であるか、および操作可能であるかを判別します。

システム検査チェック・ツールの使用方法

システム検査チェック・ツールは、IBM Intelligent Operations Center システムを構成するサービスの運用状況を判別するために使用します。

このタスクについて

システム検査チェック・ツール・ツールはシステムの機能を検証します。

テストが失敗した場合のトラブルシューティングと個々のテストの詳細については、そのテストの「ヘルプ」をクリックします。

「プロパティ」には、IBM ソフトウェア・サポートに連絡する際に使用する、テストの追加情報が示されます。

手順

1. 管理者権限を持つユーザーとして IBM Intelligent Operations Center にログオンします。
2. トップ・バナーの「管理」 > 「ソリューション管理」をクリックします。
3. サイド・メニューの「システム管理」 > 「システム検査チェック」をクリックします。
4. 以下のいずれかを行って、実行対象のテストを 1 つまたは複数選択します。
 - 実行対象の特定のテストをクリックします。
 - 「すべてのテストを実行」をクリックして、選択可能なすべての機能をテストします。

タスクの結果

テストが正常に完了すると、 アイコンが表示されます。テストが失敗すると、 アイコンが表示されます。テストが失敗した場合、エラーを解決するためにテストの問題判別の指示に従います。これらの指示は、 アイコンまたは「ヘルプ」をクリックしてアクセスすることもできます。

特定のテストが実行された場合は、テストの実行結果がテストの実行時間とともにポートレットの下部に表示されます。「すべてのテストを実行」が選択された場合は、この情報は表示されません。

次のタスク

このツールは、「リセット」をクリックすることにより、リセットされて結果をすべてクリアできます。

IBM Intelligent Operations Center サービスとコンポーネントの状況の判別

IBM Intelligent Operations Center は、さまざまな IBM Intelligent Operations Center のサービスおよびコンポーネントの運用状況を判断するために使用できる、いくつかのシステム検査チェック・ツール・テストを提供します。

これらのテストは、コラボレーションやモニターなどの機能ごとに、論理的にグループ化されています。

分析 (Web サーバー経由の Cognos Connection コンソール) テスト

分析 (Web サーバー経由の Cognos Connection コンソール) テストでは、Cognos Servlet Gateway および Cognos Administration Portal URL を使用して、分析サーバー上の Cognos にアクセスできるかどうかを判別します。

リソース

分析 (Web サーバー経由の Cognos Connection コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Cognos (分析サーバー・システム上)。

問題判別

分析 (Web サーバー経由の Cognos Connection コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には *anacognos* (標準環境) または *anacognosgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* に *cognos* を使用し、*topology_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合は、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。
 - プライマリー Web サーバーを開始するには、*action* に 701 を指定します。
 - スタンバイ Web サーバーを開始するには、*action* に 711 を指定します。
 - プライマリー Web サーバーを停止するには、*action* に 511 を指定します。
 - スタンバイ Web サーバーを停止するには、*action* に 501 を指定します。
 - プライマリー・分析サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
 - スタンバイ・分析サーバーの状況を確認するには、*action* に 843 を指定します。
 - プライマリー・分析サーバーを開始するには、*action* に 221 を指定します。
 - スタンバイ・分析サーバーを開始するには、*action* に 231 を指定します。
 - プライマリー・分析サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。

- スタンバイ・分析サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - b. 分析サーバーでは、以下の Cognos ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Displ/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Displ/SystemErr.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemErr.log
 - /opt/IBM/cognos/c10_64/logs/ ディレクトリーのすべてのログ
5. 分析サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. 分析サーバー・システムで、ibmadmin (Cognos ユーザー) としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - d. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_Displ" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_Displ を使用して CognosX_Displ を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_Displ" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_Displ を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_Displ open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - e. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_GW1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_GW1 を使用して CognosX_GW1 を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_GW1" is STARTED.」が表示された場合、こ

のステップはスキップします。CognosX_GW1 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_GW1 open for e-business; process id is 26676」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Displ
- c. CognosX_GW1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW1
- b. CognosX_Displ
- c. nodeagent

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_GW1 -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_GW1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_Displ -wasadmin WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_Displ サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

7. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION_SERVER_HOST は、分析サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、CognosX-Disp1 サーバーおよび CognosX_GW1 サーバーの状況を確認します。
 -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Displ
- c. CognosX_GW1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW1
- b. CognosX_Displ
- c. nodeagent

CognosX_GW1 サーバーおよび CognosX_Displ サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

8. URL (`http://WEB_SERVER_HOST/ServletGateway/servlet/Gateway`) を使用して、Web サーバーから Cognos Administration Portal にアクセスできることを確認します。WEB_SERVER_HOST は、Web サーバーのホスト名です。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

分析 (Cognos Connection コンソール) テスト

分析 (Cognos Connection コンソール) テストでは、Cognos Servlet Gateway および Cognos Administration Portal URL を使用して、分析サーバー上の Cognos にアクセスできるかどうかを判別します。

リソース

分析 (Cognos Connection コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Cognos (分析サーバー・システム上)。

問題判別

分析 (Cognos Connection コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。 *component* には *anacognos* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。 *component* に *cognos* を使用し、*topology_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log

- b. 分析サーバーでは、以下の Cognos ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Disp1/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Disp1/SystemErr.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemErr.log
- /opt/IBM/cognos/c10_64/logs/ ディレクトリーのすべてのログ

4. 分析サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

- a. 分析サーバー・システムで、ibmadmin (Cognos ユーザー) としてログオンします。

- b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

- c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップし

ます。 nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

- d. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_Displ" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_Displ` を使用して CognosX_Displ を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_Displ" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。 CognosX_Displ を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_Displ open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
- e. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_GW1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_GW1` を使用して CognosX_GW1 を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_GW1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。 CognosX_GW1 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_GW1 open for e-business; process id is 26676」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Displ
- c. CognosX_GW1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW1
- b. CognosX_Displ
- c. nodeagent

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_GW1 -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_GW1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_Displ -wasadmin WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_Displ サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

6. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、分析サーバー のホスト名です。
- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、CognosX-Disp1 サーバーおよび CognosX_GW1 サーバーの状況を確認します。

 アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。 必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。 サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. `CognosX_Displ`
- c. `CognosX_GW1`

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. `CognosX_GW1`
- b. `CognosX_Displ`
- c. `nodeagent`

`CognosX_GW1` サーバーおよび `CognosX_Displ` サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

7. 分析サーバーにおいて、URL (`http://ANALYTICS_SERVER_HOST:9444/ServletGateway/servlet/Gateway`) を使用して、WebSphere Portal システムから Cognos Administration Portal にアクセスできることを確認します。`ANALYTICS_SERVER_HOST` は 分析サーバー のホスト名です。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

分析 (Cognos Connection コンソール) [1] テスト

分析 (Cognos Connection コンソール) [1] テストでは、高可用性環境内にある分析サーバー 1 上の Cognos に、Cognos Servlet Gateway と Cognos Administration Portal URL からアクセスできるかどうかを判別します。

リソース

分析 (Cognos Connection コンソール) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Cognos (分析サーバー・システム上)。

問題判別

分析 (Cognos Connection コンソール) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。 *component* には *anacognosgrp* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 843 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 221 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 231 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - 分析サーバーでは、以下の Cognos ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Displ/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Displ/SystemErr.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemErr.log

- /opt/IBM/cognos/c10_64/logs/ ディレクトリーのすべてのログ
4. 分析サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
 5. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. 分析サーバー・システムで、ibmadmin (Cognos ユーザー) としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - d. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_Displ" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_Displ を使用して CognosX_Displ を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_Displ" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_Displ を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_Displ open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - e. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_GW1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_GW1 を使用して CognosX_GW1 を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_GW1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_GW1 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_GW1 open for e-business; process id is 26676」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Displ
- c. CognosX_GW1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW1
- b. CognosX_Displ
- c. nodeagent

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_GW1 -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_GW1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_Displ -wasadmin WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_Displ サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

6. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION_SERVER_HOST は、分析サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、CognosX-Disp1 サーバーおよび CognosX_GW1 サーバーの状況を確認します。
 -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Displ
- c. CognosX_GW1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW1
- b. CognosX_Displ
- c. nodeagent

CognosX_GW1 サーバーおよび CognosX_Displ サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

7. 分析サーバーにおいて、URL (`http://ANALYTICS_PRIMARY_HOST:9444/ServletGateway/servlet/Gateway`) を使用して、WebSphere Portal システムから Cognos Administration Portal にアクセスできることを確認します。ここで、`ANALYTICS_PRIMARY_HOST` は分析サーバー 1 のホスト名です。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

分析 (Cognos Connection コンソール) [2] テスト

分析 (Cognos Connection コンソール) [2] テストでは、高可用性環境内にある分析サーバー 2 上の Cognos に、Cognos Servlet Gateway と Cognos Administration Portal URL からアクセスできるかどうかを判別します。

リソース

分析 (Cognos Connection コンソール) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Cognos (分析サーバー・システム上)。

問題判別

分析 (Cognos Connection コンソール) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。 `component` には `anacognosgrp` を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、`action` に 841 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、`action` に 843 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、`action` に 221 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、`action` に 231 を指定します。

- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - b. 分析サーバーでは、以下の Cognos ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Disp1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Disp1/SystemErr.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemErr.log
 - /opt/IBM/cognos/c10_64/logs/ ディレクトリーのすべてのログ
4. 分析サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. 分析サーバー 2・システムで、ibmadmin (Cognos ユーザー) としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - d. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_Disp2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_Disp2 を使用して CognosX_Disp2 を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_Disp2" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_Disp2 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_Disp2 open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - e. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_GW2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_GW2 を使用して CognosX_GW2 を始動します。メッ

ページ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_GW2" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。 CognosX_GW2 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_GW2 open for e-business; process id is 26676」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Dispatch2
- c. CognosX_GW2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW2
- b. CognosX_Dispatch2
- c. nodeagent

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_GW2 -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_GW2 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh CognosX_Dispatch2 -wasadmin WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_Dispatch2 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

6. Cognos Dispatcher サーバーおよび Cognos Gateway サーバーが始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、分析サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、CognosX-Dispatch2 サーバーおよび CognosX_GW2 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

② アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Dis2
- c. CognosX_GW2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW2
- b. CognosX_Dis2
- c. nodeagent

CognosX_GW2 サーバーおよび CognosX_Dis2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

分析サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (デフォルトは admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

7. 分析サーバーにおいて、URL (`http://ANALYTICS_BACKUP_HOST:9444/ServletGateway/servlet/Gateway`) を使用して、WebSphere Portal システムから Cognos Administration Portal にアクセスできることを確認します。ここで、ANALYTICS_BACKUP_HOST は分析サーバー 2 のホスト名です。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

分析 (SPSS Modeler) テスト

分析 (SPSS Modeler) テストでは、SPSS Modeler サーバーが分析サーバー上で稼働しているかどうかを判別します。

リソース

分析 (SPSS Modeler) テストでは、以下のリソースを使用します。

- SPSS Modeler サーバー (分析サーバー上)

問題判別

分析 (SPSS Modeler) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。
component には *anasps* (標準環境) または *anaspsgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* に *cognos* を使用し、*topology_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 271 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 601 を指定します。*topology_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - 分析サーバーでは、以下の SPSS Modeler ログを確認します。
 - /opt/IBM/SPSS/ModelerServer/15.0/log/messages.log

5. 分析サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. SPSS Modeler サーバーが始動されていることを確認します。
 - a. 分析サーバーで、ibmadmin ユーザーとしてログオンします。
 - b. 次のコマンドを実行します。

```
/opt/IBM/SPSS/ModelerServer/15.0/modelersrv.sh list
```

以下のような出力が戻されます。

```
PID PPID USER VSZ PCPU COMMAND
11021 1 ibmadmin 352724 0.0 modelersrv_15_0
```
7. SPSS Modeler サーバーがリストされていない場合は、以下のコマンドを実行して、サーバーを始動します。

```
/opt/IBM/SPSS/ModelerServer/15.0/modelersrv.sh start
```
8. サーバーが稼働している場合は、そのサーバーを停止して再始動します。
 - a. 以下のいずれかのコマンドを実行し、SPSS Modeler サーバーを停止します。

```
/opt/IBM/SPSS/ModelerServer/15.0/modelersrv.sh stop
```

```
/opt/IBM/SPSS/ModelerServer/15.0/modelersrv.sh kill
```
 - b. 以下のコマンドを実行し、SPSS Modeler サーバーを始動します。

```
/opt/IBM/SPSS/ModelerServer/15.0/modelersrv.sh start
```

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST CplexServer1) テスト

アプリケーション・サーバー (REST CplexServer1) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST CplexServer1) テストでは、以下のリソースを使用します。

- 分析サーバー上の WebSphere Application Server.

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST CplexServer1) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

```
component
```

には `anacplex` (標準環境) または `anacplexgrp` (高可用性環境) を使用し、

```
topology_password
```

 にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。 *component* には *cplex* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 843 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 221 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 231 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log

- c. 分析サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/logs/CPlexServer1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/logs/CPlexServer1/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
 6. CPlexServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CPlexServer1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/startServer.sh CPlexServer1 を使用して CPlexServer1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CPlexServer1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CPlexServer1 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server CPlexServer1 open for e-business; process id is 26654

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CPlexServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CPlexServer1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行することで、CPlexServer1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実

行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. CPlexServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、CPlexServer1 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。 必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」 をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。 サーバーを選択して「開始」 をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CPlexServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CPlexServer1
- b. nodeagent

CPlexServer1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST CPlexServer2) テスト

アプリケーション・サーバー (REST CPlexServer2) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST CPlexServer2) テストでは、以下のリソースを使用します。

- 分析サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST CPlexServer2) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には *anacplexgrp* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 843 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 221 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 231 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin  
IOCControl -a action -p topology_password
```
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log`
 - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log`
 - 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log`
 - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log`
 - 分析サーバー 2 上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
 - `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/logs/CPlexServer2/SystemOut.log`
 - `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/logs/CPlexServer2/SystemErr.log`

4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは `df -h` コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、`df -h` コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. CPlexServer2 サーバーが開始していることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー・システムで、`ibmadmin` としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/startNode.sh` を使用して `nodeagent` を始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.`」が表示された場合、このステップはスキップします。`nodeagent` を始動する必要があった場合、「`ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654`」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "CPlexServer2" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/startServer.sh CPlexServer2` を使用して CPlexServer2 サーバーを始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "CPlexServer2" is STARTED.`」が表示された場合、このステップはスキップします。CPlexServer2 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。`ADMU3000I: Server CPlexServer2 open for e-business; process id is 26654`

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. CPlexServer2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CPlexServer2
- b. `nodeagent`

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CPlexServer2 サーバーが停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

6. CPlexServer2 サーバーが開始していることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、CPlexServer2 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。 必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」 をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。 サーバーを選択して「開始」 をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. CPlexServer2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CPlexServer2
- b. `nodeagent`

CPlexServer2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `CPlexServer2/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/CPLEXProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Displ) テスト

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Displ) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Displ) テストでは、以下のリソースを使用します。

- 分析サーバー上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Displ) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。
component には *anacognosdisp* (標準環境) または *anacognosdispgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* に *cognos* を使用し、*topology_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 843 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 221 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 231 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log
 - c. 分析サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Displ1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Displ1/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. CognosX_Displ1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要がある場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_Displ1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_Displ1 を使用して CognosX_Displ1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_Displ1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_Displ1 を始動する必要がある場合、「ADMU3000I: Server CognosX_Displ1 open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Displ1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_Displ
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_Displ サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

- 7. CognosX_Displ サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、CognosX_Displ サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Displ

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_Displ
- b. nodeagent

CognosX_Displ サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Dispatch) テスト

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Dispatch) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Dispatch) テストでは、以下のリソースを使用します。

- 分析サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_Dispatch) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には *anacognosdispgrp* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 843 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 221 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 231 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log
- c. 分析サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Disp2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_Disp2/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. CognosX_Disp2 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
- a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
- b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
- c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
- a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_Disp2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_Disp2 を使用して CognosX_Disp2 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_Disp2" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_Disp2 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_Disp2 open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Disp2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_Disp2
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_Dis2 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. CognosX_Dis2 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、CognosX_Dis2 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_Dis2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_Dis2
- b. nodeagent

CognosX_Dis2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW1) テスト

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW1) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW1) テストでは、以下のリソースを使用します。

- 分析サーバー上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW1) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には *anacognosgw* (標準環境) または *anacognosgwgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* に *cognos* を使用し、*topology_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 841 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 843 を指定します。

- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 221 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 231 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 651 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log
 - c. 分析サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW1/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. CognosX_GW1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_GW1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_GW1 を使用して CognosX_GW1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_GW1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_GW1 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_GW1 open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_GW1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_GW1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. CognosX_GW1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、CognosX_GW1 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. CognosX_GW1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. CognosX_GW1
- b. nodeagent

CognosX_GW1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW2) テスト

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW2) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW2) テストでは、以下のリソースを使用します。

- 分析サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST CognosX_GW2) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
`component` に `anacognosgwgrp` を使用し、`topology_password` にトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin  
  
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、`action` に 841 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、`action` に 843 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、`action` に 221 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、`action` に 231 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、`action` に 651 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを停止するには、`action` に 641 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log
 - c. 分析サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/logs/CognosX_GW2/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. CognosX_GW2 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー 1・システムで、ibmadmin としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "CognosX_GW2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startServer.sh CognosX_GW2 を使用して CognosX_GW2 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "CognosX_GW2" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。CognosX_GW2 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server CognosX_GW2 open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent

b. CognosX_GW2

以下の順序でサーバーを停止します。

a. CognosX_GW2

b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、CognosX_GW2 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. CognosX_GW2 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。

- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、CognosX_GW2 サーバーの状況を表示します。

 アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

a. nodeagent

b. CognosX_GW2

以下の順序でサーバーを停止します。

a. CognosX_GW2

b. nodeagent

CognosX_GW2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/cognosProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実

行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST IopServer1) テスト

アプリケーション・サーバー (REST IopServer1) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST IopServer1) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST IopServer1) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` には `appiop` (標準環境) または `appiopgrp` (高可用性環境) を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` には `iopsvr` を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/logs/IopServer1/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/logs/IopServer1/SystemErr.log

5. アプリケーション・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

6. IopServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

- a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。

- b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

- c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップしま

す。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

- a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "IopServer1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/bin/startServer.sh IopServer1` を使用して IopServer1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "IopServer1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。IopServer1 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server IopServer1 open for e-business; process id is 26654

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. IopServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. IopServer1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、IopServer1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. IopServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、IopServer1 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. IopServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. IopServer1
- b. nodeagent

IopServer1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST IopServer2) テスト

アプリケーション・サーバー (REST IopServer2) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST IopServer2) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST IopServer2) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には appiopgrp を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/logs/IopServer2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/logs/IopServer2/SystemErr.log

4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. IopServer2 サーバーが開始していることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

- a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。

- b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

- c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

- a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "IopServer2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/

IopProfile2/bin/startServer.sh IopServer2 を使用して IopServer2 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "IopServer2" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。IopServer2 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server IopServer2 open for e-business; process id is 26654

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. IopServer2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. IopServer2
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、IopServer2 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. IopServer2 サーバーが開始していることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、IopServer2 サーバーの状況を表示します。

 アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. IopServer2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. IopServer2
- b. nodeagent

IopServer2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/IopProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST STProxyServer1) テスト

アプリケーション・サーバー (REST STProxyServer1) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST STProxyServer1) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST STProxyServer1) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には `appstproxy` (標準環境) または `appstproxygrp` (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* には `stproxy` を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log

b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log

c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppSrv7/profiles/STPAppProfile1/logs/STProxyServer1/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppSrv7/profiles/STPAppProfile1/logs/STProxyServer1/SystemErr.log

5. アプリケーション・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

6. STProxyServer1 サーバーが開始していることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。

- b. コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/STPAppProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行します。
`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
- c. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/STPAppProfile1/bin/startNode.sh` を使用して `nodeagent` を始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.`」が表示された場合、このステップはスキップします。`nodeagent` を始動する必要があった場合、「`ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654`」のようなメッセージが表示されます。
- a. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "STProxyServer1" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/STPAppProfile1/bin/startServer.sh STProxyServer1` を使用して `STProxyServer1` サーバーを始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "STProxyServer1" is STARTED.`」が表示された場合、このステップはスキップします。`STProxyServer1` を始動する必要があった場合、「`ADMU3000I: Server STProxyServer1 open for e-business; process id is 26654`」のようなメッセージが表示されます。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. `STProxyServer1`

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. `STProxyServer1`
- b. `nodeagent`

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/STPAppProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`STProxyServer1` サーバーが停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/STPAppProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

- 7. `STProxyServer1` サーバーが開始していることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、`STProxyServer1` サーバーの状況を確認します。

➡ アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

✖ アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

③ アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/STPAppProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. STProxyServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. STProxyServer1
- b. nodeagent

STProxyServer1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/STPAppProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

アプリケーション・サーバー (REST WBM_DE_AppTarget.WBMNode1.0) テスト

アプリケーション・サーバー (REST WBM_DE_AppTarget.WBMNode1.0) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

リソース

アプリケーション・サーバー (REST WBM_DE_AppTarget.WBMNode1.0) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

問題判別

アプリケーション・サーバー (REST WBM_DE_AppTarget.WBMNode1.0) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には appbmon (標準環境) または appbmongrp (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。 *component* には *wbm* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。
- topology_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. BPM\_DE.AppTarget.BPMNode1.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで、/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
  - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startServer.sh WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 を使用して、サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0" is STARTED.」が表示された場合は、このステップをスキップします。サーバーを始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 open for e-business; process id is 26654.

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーが停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、nodeagent が停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere 管理者パスワードです。

7. BPM\_DE.AppTarget.BPMNode1.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーの状況を表示するために、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックします。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startNode.sh を実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0
- b. nodeagent

WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、nodeagent が停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere 管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## アプリケーション・サーバー (REST WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0) テスト

アプリケーション・サーバー (REST WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

## リソース

アプリケーション・サーバー (REST WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

アプリケーション・サーバー (REST WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appbmongrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー 2・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
  - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/startServer.sh WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 を使用して WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 open for e-business; process id is 26654

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD

を実行することで、WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0
- b. nodeagent

WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal) テスト

アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

### リソース

アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

### 問題判別

アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appwpe* (標準環境) または *appwpegrp* (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* には *wpe* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。

- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WebSphere\_Portal" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startServer.sh WebSphere\_Portal を使用して WebSphere\_Portal サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WebSphere\_Portal" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WebSphere\_Portal を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server WebSphere\_Portal open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WebSphere\_Portal サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WebSphere\_Portal サーバーの状況を表示します。

 アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

WebSphere\_Portal サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2) テスト

アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

## リソース

アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

アプリケーション・サーバー (REST WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には `appwpegrp` を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーが始動済みであることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
  - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startServer.sh WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 を使用して WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2" is STARTED.」が表示された場合は、このステップをスキップします。WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーを始動する必要があった場合は、次のようなメッセージが表示されます。「ADMU3000I: Server WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 open for e-business; process id is 26654」。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent

b. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2

以下の順序でサーバーを停止します。

a. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2

b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーが始動済みであることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。

- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーの状況を確認します。

 アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

a. nodeagent

b. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2

以下の順序でサーバーを停止します。

a. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2

b. nodeagent

WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer1) テスト

アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer1) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

## リソース

アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer1) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer1) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
`component` には `appwrklt` (標準環境) または `appwrkltgrp` (高可用性環境) を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` に `wrklt` を使用し、`topology_password` にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin
IOCCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin
IOCCControl -a start -c component -p topology_password
```

c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/logs/WorklightServer1/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/logs/WorklightServer1/SystemErr.log

5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

6. WorklightServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。

b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/

WorklightProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要がある場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

- a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WorklightServer1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startServer.sh WorklightServer1 を使用して WorklightServer1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WorklightServer1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WorklightServer1 を始動する必要がある場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WorklightServer1 open for e-business; process id is 26654

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行することで、WorklightServer1 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. WorklightServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. [http://APPLICATION\\_SERVER\\_HOST:9061/ibm/console](http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console) で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、WorklightServer1 サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

② アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer1
- b. nodeagent

WorklightServer1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer2) テスト

アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer2) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

## リソース

アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer2) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

アプリケーション・サーバー (REST WorklightServer2) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には `appwrk1tgrp` を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/logs/WorklightServer2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/logs/WorklightServer2/SystemErr.log

4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. WorklightServer2 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

- a. アプリケーション・サーバー 2・システムで、ibmadmin としてログオンします。

- b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

- c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/startNode.sh` を使用して `nodeagent` を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。 `nodeagent` を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
- a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WorklightServer2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/startServer.sh WorklightServer2` を使用して `WorklightServer2` サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WorklightServer2" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。 `WorklightServer2` を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。 ADMU3000I: Server WorklightServer2 open for e-business; process id is 26654

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. `WorklightServer2`

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. `WorklightServer2`
- b. `nodeagent`

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`WorklightServer2` サーバーが停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

- 6. `WorklightServer2` サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、`WorklightServer2` サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

② アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer2
- b. nodeagent

WorklightServer2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## アプリケーション・サーバー (REST isim1) テスト

アプリケーション・サーバー (REST isim1) テストでは、ターゲット・サーバー上の WebSphere Application Server REST サービスへのアクセスをテストします。

## リソース

アプリケーション・サーバー (REST isim1) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

アプリケーション・サーバー (REST isim1) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には appisim (標準環境) または appisimgrp (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。 *component* には *sim* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/logs/isim1/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/logs/isim1/SystemErr.log

5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは `df -h` コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、`df -h` コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. isim1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、`ibmadmin` としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startNode.sh` を使用して `nodeagent` を始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.`」が表示された場合、このステップはスキップします。`nodeagent` を始動する必要があった場合、「`ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654`」のようなメッセージが表示されます。
  - a. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "isim1" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startServer.sh isim1` を使用して `isim1` サーバーを始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "isim1" is STARTED.`」が表示された場合、このステップはスキップします。`isim1` を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。`ADMU3000I: Server isim1 open for e-business; process id is 26654`

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. `isim1`

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. `isim1`
- b. `nodeagent`

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`isim1` サーバーが停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

7. isim1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、isim1 サーバーの状況を表示します。

 アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。 必要な場合は、サーバーを選択して「**再始動**」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。 サーバーを選択して「**開始**」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. `isim1`

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. `isim1`
- b. `nodeagent`

isim1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「**停止**」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## アプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server 管理コンソール) テスト

アプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server 管理コンソール) テストでは、アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server へのアクセスをテストします。

## リソース

アプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server 管理コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- WebSphere Application Server (アプリケーション・サーバー上)

## 問題判別

アプリケーション・サーバー (WebSphere Application Server 管理コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appdmgr* (標準環境) または *appdmgrgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。  
*component* には *appdmgr* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/dmgr/logs/dmgr/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/dmgr/logs/dmgr/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは `df -h` コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、`df -h` コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. dmgr サーバーが WebSphere Application Server 管理コンソールまたは手動ステップによって始動されていることを確認します。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバーで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. 以下のコマンドを実行して、dmgr サーバーを始動します。
 

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/dmgr/bin/startManager.sh
```

dmgr サーバーを停止するには、アプリケーション・サーバー上のコマンド・ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/dmgr/bin/stopManager.sh
-username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD
```

ここで、`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere Application Server 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server 管理者 ID パスワードです。
7. dmgr サーバーが WebSphere Application Server 管理コンソールまたは手動ステップによって始動されていることを確認します。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用したステップは以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server 管理者 ID (通常は `admin`) とパスワードを使用して、WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
8. dmgr サーバーが WebSphere Application Server 管理コンソールまたは手動ステップによって始動されていることを確認します。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用したステップは以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、WebSphere\_Portal サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

❌ アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

❓ アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。

dmgr サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) テスト

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) テストでは、IBM Business Monitor サーバーが稼働しており、管理コンソールが使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- WBM\_DE.AppTarget.WBMNode1.0 という名前の WebSphere Application Server

## 問題判別

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appbmon* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。*component* に *wbm* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

c. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0/SystemErr.log

4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. BPM\_DE.AppTarget.BPMNode1.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。

b. コマンド・ウィンドウで、/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startServer.sh WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 を使用して、サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0" is STARTED.」が表示された場合は、このステップをスキップします。サーバーを始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 open for e-business; process id is 26654.

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーが停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、nodeagent が停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere 管理者パスワードです。

6. BPM\_DE.AppTarget.BPMNode1.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーの状況を表示するために、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックします。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startNode.sh を実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0
- b. nodeagent

WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、`nodeagent` が停止します。`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD`。ここで、`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere 管理者パスワードです。

## ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [1] テスト

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [1] テストでは、高可用性環境内にある IBM Business Monitor プライマリー・サーバーが稼働中で、管理コンソールが使用可能かどうかを判別します。

### リソース

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- `WBM_DE.AppTarget.WBMNode1.0` という名前の WebSphere Application Server

### 問題判別

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` には `appbmongrp` を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、`action` に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、`action` に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、`action` に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、`action` に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、`action` に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、`action` に 661 を指定します。

`topology_password` にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. BPM\_DE.AppTarget.BPMNode1.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで、/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startServer.sh WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 を使用して、サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0" is STARTED.」が表示された場合は、このステップをスキップします。サーバーを始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 open for e-business; process id is 26654.

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーが停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、nodeagent が停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere 管理者パスワードです。

6. BPM\_DE.AppTarget.BPMNode1.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. [http://APPLICATION\\_SERVER\\_HOST:9061/ibm/console](http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console) で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーの状況を表示するために、「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックします。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/startNode.sh を実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0
- b. nodeagent

WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode1.0 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウで次のコマンドを実行することで、nodeagent が停止します。/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD。ここで、WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere 管理者パスワードです。

## ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [2] テスト

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [2] テストでは、高可用性環境内にある IBM Business Monitor バックアップ・サーバーが稼働中で、管理コンソールが使用可能かどうかを判別します。

### リソース

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- WBM\_DE.AppTarget.WBMNode2.0 という名前の WebSphere Application Server

### 問題判別

ビジネス・モニター (WebSphere Business Monitor コンソール) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appbmongrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/logs/WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
  5. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
    - a. アプリケーション・サーバー 2・システムで、ibmadmin としてログオンします。
    - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
    - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
      - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/startServer.sh WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 を使用して WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 open for e-business; process id is 26654

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」 をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」 をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0
- b. nodeagent

WBM\_DE\_AppTarget.WBMNode2.0 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## コラボレーション (IBM Domino コンソール) テスト

コラボレーション (IBM Domino コンソール) テストでは、その URL を使用して Domino ディレクトリにアクセスできるかどうかを判別します。

### リソース

コラボレーション (IBM Domino コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Domino サーバー (アプリケーション・サーバー上)。

### 問題判別

コラボレーション (IBM Domino コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、問題を特定して解決してください。

### 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appdomino* (標準環境) または *appdominogrp* (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* に *st* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - サーバーの状況を確認するには、*action* に 871 を指定します。
  - サーバーを開始するには、*action* に 261 を指定します。

- サーバーを停止するには、*action* に 611 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の Lotus Domino ログを確認します。
    - /local/notesdata/console.out
    - /local/notesdata/log.nsf
    - /local/notesdata/IBM\_TECHNICAL\_SUPPORT/ ディレクトリーのすべてのログ
5. アプリケーション・サーバー システム上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを使用して判別することができます。
6. Lotus Domino プロセス・コンポーネントが実行されていることを確認します。
  - a. Lotus Domino ディレクトリー・コンソールにログインします ([http://APP\\_SERVER\\_HOST:84/notes.nsf](http://APP_SERVER_HOST:84/notes.nsf))。APP\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバーのホスト名です。Domino 管理者のユーザー名およびパスワードを使用してログインします。
  - b. コンソールにアクセスできない場合、アプリケーション・サーバーで **ps -ef | grep notes** コマンドを実行して、Lotus Domino プロセスが実行されているかどうかを判別します。Lotus Domino プロセスは以下のとおりです。
    - server
    - event
    - update
    - replica
    - router
    - adminp
    - calconn
    - sched
    - http
    - rnrmgr
    - staddin
7. 一部のプロセスのみ (すべてのプロセスではない) が実行されている場合、すべてのプロセスを再開する前に、実行中のプロセスを停止します。
  - a. アプリケーション・サーバーに、notes ユーザーとしてログインします。
  - b. /local/notesdata ディレクトリーに移動します。
  - c. **"nohup /opt/IBM/lotus/bin/server -q >console.out 2>&1 &"** コマンドを実行して、実行されているすべての Lotus Domino プロセスを停止します。
  - d. **ps -ef | grep notes** コマンドを実行して、すべてのプロセスが停止していることを確認します。
  - e. 実行されている Lotus Domino プロセスがまだ存在する場合、**kill -9 pid** コマンドを使用して停止します。pid は、Lotus Domino プロセスのプロセス ID です。
8. Lotus Domino プロセスが実行されていない場合、Lotus Domino サーバー・コンポーネントを始動します。
  - a. アプリケーション・サーバーに、notes ユーザーとしてログインします。
  - b. /local/notesdata ディレクトリーに移動します。

- c. "nohup /opt/IBM/lotus/bin/server > console.out 2>&1 &" コマンドを実行して、すべての Lotus Domino サーバー・コンポーネントを始動します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## コラボレーション (IBM Sametime コンソール) テスト

コラボレーション (IBM Sametime コンソール) テストでは、その URL を使用して Sametime コンソールにアクセスできるかどうかを判別します。

## リソース

コラボレーション (IBM Sametime コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Sametime サーバー (アプリケーション・サーバー上)。

## 問題判別

コラボレーション (IBM Sametime コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appdomino* (標準環境) または *appdominogrp* (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* には *st* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- サーバーの状況を確認するには、*action* に 871 を指定します。
- サーバーを開始するには、*action* に 261 を指定します。
- サーバーを停止するには、*action* に 611 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. Sametime Community Server の構成ファイルおよびログ・ファイルを収集し、確認します。
- a. *notes* ユーザーとして アプリケーション・サーバーにログオンします。
  - b. `/local/notesdata` ディレクトリーに移動します。
  - c. `sh stdiagzip.sh` コマンドを実行します。このコマンドは、該当するすべてのログ・ファイルを収集し、`/local/notesdata/` ディレクトリーに書き込みます。
  - d. `/local/notesdata/` ディレクトリーにあるログを確認します。
5. アプリケーション・サーバー システム上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは `df -h` コマンドを使用して判別することができます。
6. Sametime プロセス・コンポーネントが実行されていることを確認します。
- a. Sametime ホーム・ページ (`http://APP_SERVER_HOST:84/stcenter.nsf`) にログインします。  
*APP\_SERVER\_HOST* は、アプリケーション・サーバーのホスト名です。Domino 管理者のユーザー名およびパスワードを使用してログインします。
  - b. Sametime ホーム・ページで、「サーバーの管理」をクリックします。
  - c. 「サーバー - 概要」ページで、すべての Sametime サービスが実行されていることを確認します。
7. 一部のプロセスのみ (すべてのプロセスではない) が実行されている場合、すべてのプロセスを再開する前に、実行中のプロセスを停止します。
- a. アプリケーション・サーバーに、*notes* ユーザーとしてログインします。
  - b. `/local/notesdata` ディレクトリーに移動します。
  - c. `"nohup /opt/IBM/lotus/bin/server -q >console.out 2>&1 &"` コマンドを実行して、実行されているすべての Sametime プロセスを停止します。
  - d. `ps -ef | grep notes` コマンドを実行して、すべてのプロセスが停止していることを確認します。
  - e. 実行されているプロセスがまだ存在する場合、`kill -9 pid` を使用して停止します。*pid* は、Lotus Domino プロセスのプロセス ID です。
8. Sametime プロセスが実行されていない場合、Lotus Sametime サーバー・コンポーネントを始動します。
- a. アプリケーション・サーバーに、*notes* ユーザーとしてログインします。
  - b. `/local/notesdata` ディレクトリーに移動します。
  - c. `"nohup /opt/IBM/lotus/bin/server > console.out 2>&1 &"` コマンドを実行して、すべての Lotus Sametime サーバー・コンポーネントを始動します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## コラボレーション (IBM Sametime Proxy コンソール) テスト

コラボレーション (IBM Sametime Proxy コンソール) テストでは、Lotus Sametime Proxy Web アプリケーション URL を使用して、Lotus Sametime Proxy Web アプリケーションにアクセスできるかどうかを判別します。

### リソース

コラボレーション (IBM Sametime Proxy コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Sametime Proxy (アプリケーション・サーバー上)。

### 問題判別

コラボレーション (IBM Sametime Proxy コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appstproxy* (標準環境) または *appstproxygrp* (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - サーバーの状況を確認するには、*action* に 871 を指定します。
  - サーバーを開始するには、*action* に 261 を指定します。
  - サーバーを停止するには、*action* に 611 を指定します。*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. アプリケーション・サーバーでは、以下の Sametime Proxy Server ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STAppProfile1/logs/STProxyServer1/SystemOut.log

- /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STPAppProfile1/logs/STProxyServer1/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー システム上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを使用して判別することができます。
  5. Sametime Proxy Server が始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
    - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
    - b. コマンド・ウィンドウで、コマンド (/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STPAppProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PWD) を実行します。WAS\_ADMIN\_PWD は、WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
    - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STProxyServer1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - d. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "STProxyServer1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STPAppProfile1/bin/startServer.sh STProxyServer1 を使用して STProxyServer1 を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "STProxyServer1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。STProxyServer1 を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server STProxyServer1 open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. STProxyServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. STProxyServer1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド (/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STPAppProfile1/bin/stopServer.sh STProxyServer1 -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PWD) を実行することで、STProxyServer1 が停止します。WAS\_ADMIN\_PWD は、WebSphere の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド (/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STPAppProfile1/bin/stopNode.sh -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PWD) を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_PWD は、WebSphere の管理者パスワードです。

6. Sametime Proxy Server が始動されていることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、STProxyServer1 サーバーの状況を確認します。

 アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。 必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。 サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STProxyServer1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. `STProxyServer1`

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. `STProxyServer1`
- b. `nodeagent`

STProxyServer1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド (`/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/STAppProfile1/bin/stopNode.sh -username waswebadmin -password WAS_ADMIN_PWD`) を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_PWD` は、WebSphere の管理者パスワードです。

7. アプリケーション・サーバーで、URL `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9085/stwebclient/popup.jsp` を使用して WebSphere Portal システムから Sametime Proxy コンソールにアクセスできることを確認します。`APPLICATION_SERVER_HOST` は アプリケーション・サーバー のホスト名です。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (*database name*) テスト

データベース (*database name*) では、`db2status` スクリプトを実行することで、データ・サーバー上の *database name* DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

## リソース

データベース (*database name*) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション DB2 インスタンス (データ・サーバー上)

## 問題判別

データベース (*database name*) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *db24app* (標準環境) または *db24appgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。  
*component* には *db24app* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 821 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 823 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 141 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 151 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 701 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 711 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。 これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または /etc/hosts ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
5. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
6. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。 これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。 ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。 そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
7. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、アプリケーション DB2 インスタンス・ユーザー (db2inst2) としてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

*database name* インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。
8. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - db2inst2** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
9. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。ログは、データ・サーバーの /datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリーに配置されています。 /datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリー内の db2diag.log で、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) テスト

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) では、**db2status** スクリプトを実行することで、データ・サーバー上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

## リソース

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 アプリケーション・インスタンス (データ・サーバー上)

## 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *db2db24app* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。 *component* には *db24app* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。 これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または */etc/hosts* ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log*
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log*
5. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。 これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。 ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。 そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、アプリケーション・インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

アプリケーション・インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。

- DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - db2inst2** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
- DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。ログは、データ・サーバーの /datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリーに配置されています。 /datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリー内の db2diag.log で、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [1] テスト

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [1] では、**db2status** スクリプトを実行することで、高可用性環境にあるデータ・サーバー 1 上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

## リソース

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 アプリケーション・インスタンス (データ・サーバー上)

## 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。  
*component* には *db2sdb24appgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 821 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 823 を指定します。

- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 141 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 151 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 701 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 711 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。 これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または /etc/hosts ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
5. データ・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、アプリケーション・インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。
 

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

アプリケーション・インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。
7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - db2inst2** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。ログは、データ・サーバーの /datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリに配置されています。 /datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリ内の db2diag.log で、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [2] テスト

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [2] では、**db2status** スクリプトを実行することで、高可用性環境にあるデータ・サーバー 2 上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

### リソース

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 アプリケーション・インスタンス (データ・サーバー上)

### 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - アプリケーション) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *db2sdb24appgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 821 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 823 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 141 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 151 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 701 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 711 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。  
**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または /etc/hosts ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
5. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、アプリケーション・インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

アプリケーション・インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。
7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - db2inst2** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。ログは、データ・サーバーの /datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリーに配置されています。/datahome/db2inst2/sqllib/db2dump ディレクトリー内の db2diag.log で、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) テスト

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) では、**db2status** スクリプトを実行することで、データ・サーバー上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

## リソース

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 Directory Server インスタンス (データ・サーバー上)

## 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。*component* に *dbstdsserv* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。*component* に *tds* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または */etc/hosts* ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log*
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log*
- データ・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
- データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - データ・サーバーで、Directory Server インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

Directory Server インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。

7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - dsrdbm01** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。このログは、データ・サーバーの `/datahome/dsrdbm01/sqlllib/db2dump` ディレクトリーにあります。
9. `db2diag.log` ログで、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [1] テスト

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [1] では、**db2status** スクリプトを実行することで、高可用性環境にあるデータ・サーバー 1 上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

## リソース

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 Directory Server インスタンス (データ・サーバー上)

## 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には `dbstdsservgrp` を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 821 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 823 を指定します。

- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 141 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 151 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 701 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 711 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。 これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または /etc/hosts ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
5. データ・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、Directory Server インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。
 

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

Directory Server インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。
7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - dsrdbm01** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。このログは、データ・サーバーの /datahome/dsrdbm01/sqlllib/db2dump ディレクトリにあります。
9. db2diag.log ログで、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [2] テスト

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [2] では、**db2status** スクリプトを実行することで、高可用性環境にあるデータ・サーバー 2 上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

### リソース

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 Directory Server インスタンス (データ・サーバー上)

### 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - Directory Server) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *dbstdservgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 821 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 823 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 141 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 151 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 701 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 711 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。  
**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または */etc/hosts* ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
5. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、Directory Server インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

Directory Server インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。
7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - dsrdbm01** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。このログは、データ・サーバーの /datahome/dsrdbm01/sql1lib/db2dump ディレクトリーにあります。
9. db2diag.log ログで、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) テスト

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) では、**db2status** スクリプトを実行することで、データ・サーバー上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

## リソース

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 ミドルウェア・インスタンス (データ・サーバー上)

## 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* に *db2db24mid* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。*component* には *db24mid* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または */etc/hosts* ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log*
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log*
5. データ・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、ミドルウェア・インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

ミドルウェア・インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。

7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - db2inst1** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。ログは、データ・サーバーの `/datahome/db2inst1/sqllib/db2dump` ディレクトリーに配置されています。
9. `db2diag.log` ログで、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [1] テスト

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [1] では、**db2status** スクリプトを実行することで、高可用性環境にあるデータ・サーバー 1 上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

## リソース

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 ミドルウェア・インスタンス (データ・サーバー上)

## 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には `dbsdb24midgrp` を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に `821` を指定します。

- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 823 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 141 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 151 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 701 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 711 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。 これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または /etc/hosts ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
5. データ・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、ミドルウェア・インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。
 

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

ミドルウェア・インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。
7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - db2inst1** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。ログは、データ・サーバーの /datahome/db2inst1/sqllib/db2dump ディレクトリに配置されています。
9. db2diag.log ログで、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [2] テスト

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [2] では、**db2status** スクリプトを実行することで、高可用性環境にあるデータ・サーバー 2 上の DB2 インスタンスの DB2 マネージャー状況をテストします。

### リソース

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- DB2 ミドルウェア・インスタンス (データ・サーバー上)

### 問題判別

データベース (DB2 インスタンス - ミドルウェア) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントが必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *db2db24midgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーが必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 821 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 823 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 141 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 151 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 701 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 711 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. テストが開始されたアプリケーション・サーバーと、データベースが存在するデータ・サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。これを行うには、アプリケーション・サーバーで、データ・サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します。  
**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または /etc/hosts ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
5. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. データ・サーバーが使用するデータベース・マネージャーが始動されていることを確認します。
  - a. データ・サーバーで、ミドルウェア・インスタンス・ユーザーとしてコマンド・ウィンドウから以下のコマンドを実行します。

```
db2 get snapshot for dbm | grep "Database manager status"
```

ミドルウェア・インスタンスについてデータベース・マネージャーが始動されている場合、メッセージ「Database manager status = Active」が表示されます。
7. DB2 プロセスが実行されていない場合、root ユーザーとして実行するには、コマンド・ウィンドウから **su - db2inst1** を実行してプロセスを始動します。それ以外のユーザーとして行うときは、**db2start** を実行してデータベース・マネージャーを始動します。
8. DB2 ログで、このテストに使用されたデータベース・インスタンスに関連するエラーを確認します。ログは、データ・サーバーの /datahome/db2inst1/sqllib/db2dump ディレクトリーに配置されています。
9. db2diag.log ログで、このテストに使用されたデータベースの始動時に発生したエラーを確認します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ディレクトリー (Tivoli Directory Server コンソール) テスト

ディレクトリー (Tivoli Directory Server コンソール) テストでは、サーバーに HTTP 要求を送信することで、Tivoli Directory Server が使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

ディレクトリー (Tivoli Directory Server コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (データ・サーバー上)

## 問題判別

ディレクトリー (Tivoli Directory Server コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *dbstdsserv* (標準環境) または *dbstdsservgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* には *tds* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 811 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 813 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 101 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 111 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 741 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 751 を指定します。*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log`

• /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

5. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

6. Tivoli Directory Server (LDAP サーバー) が実行されていることを確認してください。

- a. データ・サーバーの端末セッションに **root** としてログオンします。
- b. **ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmslapd** が実行されていることを示します。

- c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmdiradm** が実行されていることを示します。

7. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. Linux の **root** ユーザーとして **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を実行して Tivoli Directory Server を始動します。
8. Tivoli Directory Administration Server の **ibmdiradm** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. データ・サーバーの端末セッションで **su - dsrdbm01** を実行します。
  - b. **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t** を実行してアプリケーション・サーバーを開始します。
9. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されている場合、以下を行います。

注: このステップは、Tivoli Directory Server が前のステップで始動されている場合でも行います。

- a. データ・サーバーの端末セッションに **dsrdbm01** としてログオンします。
  - b. **idsldapsearch -h localhost -D "cn=root" -w "ADMIN\_PASSWORD" -s sub uid=\*** を実行します。ここでの **ADMIN\_PASSWORD** は LDAP の **root** 管理者のアカウント・パスワードです。既存の LDAP ユーザー・オブジェクトが表示されます。
10. Tivoli Directory Server Web Administration Tool が実行されていることを確認してください。Tivoli Directory Server Web Administration Tool は、LDAP インスタンスの停止と開始、ユーザーまたはアカウントの追加、およびログ・ファイルの表示を行うために使用されます。
    - a. アプリケーション・サーバーの端末セッションに **ibmadmin** としてログオンします。
    - b. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/serverStatus.sh -all -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PASSWORD** コマンドをアプリケーション・サーバー上で実行します。ここで、**WAS\_ADMIN\_PASSWORD** は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。このツールを実行すると、以下のようなメッセージが返されます。

```
ADMU0508I: The Application Server "tdsServer" is STARTED
```

以下のメッセージが返された場合、**tdsServer** を始動する必要があります。

```
ADMU0509I: The Application Server "tdsServer" cannot be reached. It appears to be stopped.
```

- c. `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/v7/profiles/isim1/bin/startServer.sh tdsServer` コマンドを実行して、tdsServer を始動します。tdsServer サーバーが始動されて、以下のようなメッセージが表示されます。

```
ADMU3000I: Server tdsServer open for e-business; process id is 26654
```

11. `http://DATA_SERVER_HOST:9062/IDSWebApp/IDSjsp/Login.jsp` で、Tivoli Directory Server Web Administration Tool にアクセスします。ここで、`DATA_SERVER_HOST` はデータ・サーバーのホスト名です。
12. LDAP の root 管理者アカウント (`cn=root`) および適切なパスワードを指定してログオンします。LDAP サーバー名は `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST:389` にする必要があります。ここでの `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST` はデータ・サーバーのホスト名です。
13. 「サーバー管理」 > 「サーバーの始動/停止/リセット」をクリックします。LDAP サーバー状況が表示されます。また、このページを使用して LDAP サーバーを始動、停止、またはリセットすることもできます。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ディレクトリー (Tivoli Directory Server) テスト

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) テストでは、サーバーに HTTP 要求を送信することで、Tivoli Directory Server が使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (データ・サーバー上)

## 問題判別

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` に `dbstdsserv` を使用し、`topology_password` にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。 *component* に *tds* を使用し、 *topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。
 

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。
 

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。
 

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
4. データ・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. Tivoli Directory Server (LDAP サーバー) が実行されていることを確認してください。
  - a. データ・サーバーの端末セッションに **root** としてログオンします。
  - b. **ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。
 

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmslapd** が実行されていることを示します。
  - c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。
 

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmdiradm** が実行されていることを示します。
6. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. Linux の **root** ユーザーとして **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を実行して Tivoli Directory Server を始動します。
7. Tivoli Directory Administration Server の **ibmdiradm** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. データ・サーバーの端末セッションで **su - dsrdbm01** を実行します。
  - b. **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t** を実行してアプリケーション・サーバーを開始します。
8. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されている場合、以下を行います。
 

**注:** このステップは、Tivoli Directory Server が前のステップで始動されている場合でも行います。

  - a. データ・サーバーの端末セッションに **dsrdbm01** としてログオンします。

- b. `idsldapsearch -h localhost -D "cn=root" -w "ADMIN_PASSWORD" -s sub uid=*` を実行します。ここでの `ADMIN_PASSWORD` は LDAP の root 管理者のアカウント・パスワードです。既存の LDAP ユーザー・オブジェクトが表示されます。
  9. Tivoli Directory Server Web Administration Tool が実行されていることを確認してください。Tivoli Directory Server Web Administration Tool は、LDAP インスタンスの停止と開始、ユーザーまたはアカウントの追加、およびログ・ファイルの表示を行うために使用されます。
    - a. アプリケーション・サーバーの端末セッションに `ibmadmin` としてログオンします。
    - b. `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/serverStatus.sh -all -username waswebadmin -password WAS_ADMIN_PASSWORD` コマンドをアプリケーション・サーバー上で実行します。ここで、`WAS_ADMIN_PASSWORD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。このツールを実行すると、以下のようなメッセージが返されます。

```
ADMU0508I: The Application Server "tdsServer" is STARTED
```

以下のメッセージが返された場合、`tdsServer` を始動する必要があります。

```
ADMU0509I: The Application Server "tdsServer" cannot be reached. It appears to be stopped.
```
    - c. `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startServer.sh tdsServer` コマンドを実行して、`tdsServer` を始動します。`tdsServer` サーバーが始動されて、以下のようなメッセージが表示されます。

```
ADMU3000I: Server tdsServer open for e-business; process id is 26654
```
10. `http://DATA_SERVER_HOST:9062/IDSWebApp/IDSjsp/Login.jsp` で、Tivoli Directory Server Web Administration Tool にアクセスします。ここで、`DATA_SERVER_HOST` はデータ・サーバーのホスト名です。
11. LDAP の root 管理者アカウント (`cn=root`) および適切なパスワードを指定してログオンします。LDAP サーバー名は `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST:389` にする必要があります。ここでの `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST` はデータ・サーバーのホスト名です。
12. 「サーバー管理」 > 「サーバーの始動/停止/リセット」をクリックします。LDAP サーバー状況が表示されます。また、このページを使用して LDAP サーバーを始動、停止、またはリセットすることもできます。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [1] テスト

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [1] テストでは、サーバーに HTTP 要求を送信することで、Tivoli Directory Server が使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (データ・サーバー上)

## 問題判別

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *dbstdservgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 811 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 813 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 101 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 111 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 741 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 751 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log`
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log`
  - データ・サーバーで、以下の Tivoli Directory Server のログを確認します。 `/datahome/dsrdbm01/idsslapd-dsrdbm01/logs/audit.log`
- データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
- Tivoli Directory Server (LDAP サーバー) が実行されていることを確認してください。
  - データ・サーバーの端末セッションに `root` としてログオンします。
  - ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの `ibmslapd` が実行されていることを示します。

- c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmdiradm** が実行されていることを示します。

6. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. Linux の **root** ユーザーとして **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を実行して Tivoli Directory Server を始動します。
7. Tivoli Directory Administration Server の **ibmdiradm** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. データ・サーバーの端末セッションで **su - dsrdbm01** を実行します。
  - b. **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t** を実行してアプリケーション・サーバーを開始します。

8. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されている場合、以下を行います。

注: このステップは、Tivoli Directory Server が前のステップで始動されている場合でも行います。

- a. データ・サーバーの端末セッションに **dsrdbm01** としてログオンします。
  - b. **idsldapsearch -h localhost -D "cn=root" -w "ADMIN\_PASSWORD" -s sub uid=\*** を実行します。ここでの **ADMIN\_PASSWORD** は LDAP の root 管理者のアカウント・パスワードです。既存の LDAP ユーザー・オブジェクトが表示されます。
9. Tivoli Directory Server Web Administration Tool が実行されていることを確認してください。Tivoli Directory Server Web Administration Tool は、LDAP インスタンスの停止と開始、ユーザーまたはアカウントの追加、およびログ・ファイルの表示を行うために使用されます。
    - a. アプリケーション・サーバーの端末セッションに **ibmadmin** としてログオンします。
    - b. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/serverStatus.sh -all -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PASSWORD** コマンドをアプリケーション・サーバー上で実行します。ここで、**WAS\_ADMIN\_PASSWORD** は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。このツールを実行すると、以下のようなメッセージが返されます。

```
ADMU0508I: The Application Server "tdsServer" is STARTED
```

以下のメッセージが返された場合、**tdsServer** を始動する必要があります。

```
ADMU0509I: The Application Server "tdsServer" cannot be reached. It appears to be stopped.
```

- c. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startServer.sh tdsServer** コマンドを実行して、**tdsServer** を始動します。**tdsServer** サーバーが始動されて、以下のようなメッセージが表示されます。

```
ADMU3000I: Server tdsServer open for e-business; process id is 26654
```

10. **http://DATA\_SERVER\_HOST:9062/IDSWebApp/IDSjsp/Login.jsp** で、Tivoli Directory Server Web Administration Tool にアクセスします。ここで、**DATA\_SERVER\_HOST** はデータ・サーバーのホスト名です。
11. LDAP の root 管理者アカウント (**cn=root**) および適切なパスワードを指定してログオンします。LDAP サーバー名は **DATABASE\_DIRECTORY\_SERVER\_HOST:389** にする必要があります。ここでの **DATABASE\_DIRECTORY\_SERVER\_HOST** はデータ・サーバーのホスト名です。
12. 「サーバー管理」 > 「サーバーの始動/停止/リセット」をクリックします。LDAP サーバー状況が表示されます。また、このページを使用して LDAP サーバーを始動、停止、またはリセットすることもできます。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [2] テスト

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [2] テストでは、サーバーに HTTP 要求を送信することで、Tivoli Directory Server が使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (バックアップ・データ・サーバー上)

## 問題判別

ディレクトリー (Tivoli Directory Server) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *dbstdservgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 811 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 813 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 101 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 111 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 741 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 751 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. データ・サーバーで、以下の Tivoli Directory Server のログを確認します。 /datahome/dsrdbm01/idsslapt-dsrdbm01/logs/audit.log
4. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
  5. Tivoli Directory Server (LDAP サーバー) が実行されていることを確認してください。
    - a. データ・サーバー 2 の端末セッションに **root** としてログオンします。
    - b. **ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。
 

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmslapd** が実行されていることを示します。
    - c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。
 

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmdiradm** が実行されていることを示します。
  6. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されていない場合、以下を行います。
    - a. Linux の **root** ユーザーとして **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を実行して Tivoli Directory Server を始動します。
  7. Tivoli Directory Administration Server の **ibmdiradm** が実行されていない場合、以下を行います。
    - a. データ・サーバー 2 の端末セッションで **su - dsrdbm01** を実行します。
    - b. **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t** を実行してアプリケーション・サーバーを開始します。
  8. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されている場合、以下を行います。
 

注: このステップは、Tivoli Directory Server が前のステップで始動されている場合でも行います。

    - a. データ・サーバーの端末セッションに **dsrdbm01** としてログオンします。
    - b. **idsldapsearch -h localhost -D "cn=root" -w "ADMIN\_PASSWORD" -s sub uid=\*** を実行します。ここでの **ADMIN\_PASSWORD** は LDAP の **root** 管理者のアカウント・パスワードです。既存の LDAP ユーザー・オブジェクトが表示されます。
  9. Tivoli Directory Server Web Administration Tool が実行されていることを確認してください。Tivoli Directory Server Web Administration Tool は、LDAP インスタンスの停止と開始、ユーザーまたはアカウントの追加、およびログ・ファイルの表示を行うために使用されます。
    - a. アプリケーション・サーバー 2 の端末セッションに **ibmadmin** としてログオンします。
    - b. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/serverStatus.sh -all -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PASSWORD** コマンドをアプリケーション・サーバー 2上で

実行します。ここで、`WAS_ADMIN_PASSWORD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。このツールを実行すると、以下のようなメッセージが返されます。

```
ADMU0508I: The Application Server "tdsServer" is STARTED
```

以下のメッセージが返された場合、`tdsServer` を始動する必要があります。

```
ADMU0509I: The Application Server "tdsServer" cannot be reached. It appears to be stopped.
```

- c. `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/v7/profiles/isis1/bin/startServer.sh tdsServer` コマンドを実行して、`tdsServer` を始動します。`tdsServer` サーバーが始動されて、以下のようなメッセージが表示されます。

```
ADMU3000I: Server tdsServer open for e-business; process id is 26654
```

10. `http://DATA_SERVER_HOST:9062/IDSWebApp/IDSjsp/Login.jsp` で、Tivoli Directory Server Web Administration Tool にアクセスします。ここで、`DATA_SERVER_HOST` はバックアップ・データ・サーバーのホスト名です。
11. LDAP の root 管理者アカウント (`cn=root`) および適切なパスワードを指定してログオンします。LDAP サーバー名は `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST:389` にする必要があります。ここでの `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST` はバックアップ・データ・サーバーのホスト名です。
12. 「サーバー管理」 > 「サーバーの始動/停止/リセット」をクリックします。LDAP サーバー状況が表示されます。また、このページを使用して LDAP サーバーを始動、停止、またはリセットすることもできます。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [1] テスト

ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [1] テストでは、サーバーに HTTP 要求を送信することで、Tivoli Directory Server が使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (分析サーバー上)

## 問題判別

ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` には `apptdsproxygrp` を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 815 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 817 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 121 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 131 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 731 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 721 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

4. 分析サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. データ・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

6. Tivoli Directory Server (LDAP サーバー) が実行されていることを確認してください。

- a. 分析サーバーの端末セッションに **root** としてログオンします。

- b. **ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmslapd** が実行されていることを示します。

- c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmdiradm** が実行されていることを示します。

7. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されていない場合、以下を行います。

- a. Linux の *root* ユーザーとして **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を実行して Tivoli Directory Server を始動します。
8. Tivoli Directory Administration Server の *ibmdiradm* が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. 分析サーバーの端末セッションで **su - dsrdbm01** を実行します。
  - b. **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t** を実行してアプリケーション・サーバーを開始します。
9. Tivoli Directory Server の *ibmslapd* が実行されている場合、以下を行います。
 

注: このステップは、Tivoli Directory Server が前のステップで始動されている場合でも行います。

  - a. データ・サーバーの端末セッションに *dsrdbm01* としてログオンします。
  - b. **idsldapsearch -h localhost -D "cn=root" -w "ADMIN\_PASSWORD" -s sub uid=\*** を実行します。ここでの *ADMIN\_PASSWORD* は LDAP の *root* 管理者のアカウント・パスワードです。既存の LDAP ユーザー・オブジェクトが表示されます。
10. Tivoli Directory Server Web Administration Tool が実行されていることを確認してください。Tivoli Directory Server Web Administration Tool は、LDAP インスタンスの停止と開始、ユーザーまたはアカウントの追加、およびログ・ファイルの表示を行うために使用されます。
  - a. 分析サーバーの端末セッションに *ibmadmin* としてログオンします。
  - b. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/serverStatus.sh -all -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PASSWORD** コマンドを分析サーバー上で実行します。ここで、*WAS\_ADMIN\_PASSWORD* は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。このツールを実行すると、以下のようなメッセージが返されます。
 

```
ADMU0508I: The Application Server "tdsServer" is STARTED
```

以下のメッセージが返された場合、*tdsServer* を始動する必要があります。

```
ADMU0509I: The Application Server "tdsServer" cannot be reached. It appears to be stopped.
```
  - c. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startServer.sh tdsServer** コマンドを実行して、*tdsServer* を始動します。*tdsServer* サーバーが始動されて、以下のようなメッセージが表示されます。
 

```
ADMU3000I: Server tdsServer open for e-business; process id is 26654
```
11. [http://APPLICATION\\_SERVER\\_HOST:9081/IDSWebApp](http://APPLICATION_SERVER_HOST:9081/IDSWebApp) で、Tivoli Directory Server Web 管理ツールにアクセスします。ここで、*APPLICATION\_SERVER\_HOST* は、アプリケーション・サーバー 1 のホスト名です。
12. LDAP の *root* 管理者アカウント (*cn=root*) および適切なパスワードを指定してログオンします。LDAP サーバー名は *DATABASE\_DIRECTORY\_SERVER\_HOST:389* にする必要があります。ここでの *DATABASE\_DIRECTORY\_SERVER\_HOST* は分析サーバーのホスト名です。
13. 「サーバー管理」 > 「サーバーの始動/停止/リセット」をクリックします。LDAP サーバー状況が表示されます。また、このページを使用して LDAP サーバーを始動、停止、またはリセットすることもできます。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [2] テスト

ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [2] テストでは、サーバーに HTTP 要求を送信することで、Tivoli Directory Server が使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (分析サーバー 2上)

## 問題判別

ディレクトリー (Tivoli Directory Server プロキシ) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *apptdsproxygrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 815 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 817 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 121 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 131 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 731 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 721 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

4. 分析サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. Tivoli Directory Server (LDAP サーバー) が実行されていることを確認してください。

- a. 分析サーバー 2 の端末セッションに **root** としてログオンします。
- b. **ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmslapd** が実行されていることを示します。

- c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```

この例は、Tivoli Directory Server デーモンの **ibmdiradm** が実行されていることを示します。

6. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. Linux の **root** ユーザーとして **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を実行して Tivoli Directory Server を始動します。
7. Tivoli Directory Administration Server の **ibmdiradm** が実行されていない場合、以下を行います。
  - a. 分析サーバー 2 の端末セッションで **su - dsrdbm01** を実行します。
  - b. **/opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t** を実行してアプリケーション・サーバーを開始します。
8. Tivoli Directory Server の **ibmslapd** が実行されている場合、以下を行います。

注: このステップは、Tivoli Directory Server が前のステップで始動されている場合でも行います。

- a. データ・サーバーの端末セッションに **dsrdbm01** としてログオンします。
  - b. **idsldapsearch -h localhost -D "cn=root" -w "ADMIN\_PASSWORD" -s sub uid=\*** を実行します。ここでの **ADMIN\_PASSWORD** は LDAP の **root** 管理者のアカウント・パスワードです。既存の LDAP ユーザー・オブジェクトが表示されます。
9. Tivoli Directory Server Web Administration Tool が実行されていることを確認してください。Tivoli Directory Server Web Administration Tool は、LDAP インスタンスの停止と開始、ユーザーまたはアカウントの追加、およびログ・ファイルの表示を行うために使用されます。
    - a. 分析サーバー 2 の端末セッションに **ibmadm** としてログオンします。
    - b. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/serverStatus.sh -all -username waswebadmin -password WAS\_ADMIN\_PASSWORD** コマンドを分析サーバー 2 上で実行します。ここで、**WAS\_ADMIN\_PASSWORD** は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。このツールを実行すると、以下のようなメッセージが返されます。

```
ADMU0508I: The Application Server "tdsServer" is STARTED
```

以下のメッセージが返された場合、**tdsServer** を始動する必要があります。

```
ADMU0509I: The Application Server "tdsServer" cannot be reached. It appears to be stopped.
```

- c. **/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startServer.sh tdsServer** コマンドを実行して、**tdsServer** を始動します。**tdsServer** サーバーが始動されて、以下のようなメッセージが表示されます。

ADMU3000I: Server tdsServer open for e-business; process id is 26654

10. `http://DATA_SERVER_HOST:9062/IDSWebApp/IDSjsp/Login.jsp` で、Tivoli Directory Server Web Administration Tool にアクセスします。ここで、`DATA_SERVER_HOST` はバックアップ分析サーバーのホスト名です。
11. LDAP の root 管理者アカウント (cn=root) および適切なパスワードを指定してログオンします。LDAP サーバー名は `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST:389` にする必要があります。ここでの `DATABASE_DIRECTORY_SERVER_HOST` はバックアップ分析サーバーのホスト名です。
12. 「サーバー管理」 > 「サーバーの始動/停止/リセット」をクリックします。LDAP サーバー状況が表示されます。また、このページを使用して LDAP サーバーを始動、停止、またはリセットすることもできます。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) テスト

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) テストでは、Message Broker とキュー・マネージャーにアクセスできるかどうかを判別します。

## リソース

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) では、以下のリソースを使用します。

- WebSphere Portal Server (アプリケーション・サーバー上)。

## 問題判別

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) テストが失敗した場合、以下を実行し、問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` には `msgmb` を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

あるいは、分析サーバーから以下のコマンドを実行して、IBM Message Broker の状況を確認することができます。

```
su - mqm

mqsilist
```

IBM Message Broker が稼働している場合は、「BIP1284I: キュー・マネージャー 'IOC.MB.QM' のブローカー 'IOC\_BROKER' が実行中です。」が返されます。IBM Message Broker が稼働していない場合は、「BIP1285I: キュー・マネージャー 'IOC.MB.QM' のブローカー 'IOC\_BROKER' が停止しています。」が返されます。

以下のコマンドを使用して、IBM Message Broker およびキュー・マネージャーを停止することもできます。

```
su - mqmconn

source /opt/IBM/mqsi/8.0.0.1/bin/mqsiprofile

mqsistop IOC_BROKER -q
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。 *component* に *wmb* を使用し、 *topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. ログにエラーがないかチェックします。 ログは、分析サーバーの `/var/log/messages` ディレクトリーに配置されています。 接頭部「BIP」が付いたメッセージを探します。 また、キュー名と、テストが実行されたときのタイム・スタンプも探します。
4. アプリケーション・サーバーと分析サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。 これを行うには、アプリケーション・サーバーで、分析サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、 **ping** コマンドを送信します (逆も同様)。 **ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または `/etc/hosts` ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
5. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log`
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log`
6. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。 これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。 ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。 そのため、 **df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
7. **1.6.0.2** IBM Message Broker が稼働していない場合は、プラットフォーム制御ツール を使用するか、または以下のステップを実行して始動します。
  - a. 以下のコマンドを実行します。

```
su - mqmconn

source /opt/IBM/mqsi/8.0.0.1/bin/mqsiprofile
```

以下の出力が返されます。

MQSI 8.0.0.3  
/opt/IBM/mqsi/8.0.0.1

- b. 以下のコマンドを実行します。

```
mqsisstart IOC_BROKER
```

以下の出力が返されます。

```
BIP8096I: Successful command initiation, check the system log to
ensure that the component started without problem and that it
continues to run without problem.
```

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [1] テスト

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [1] テストでは、高可用性環境内にあるプライマリー・サーバー上で Message Broker とキュー・マネージャーにアクセスできるかどうかを判別します。

## リソース

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- WebSphere Portal Server (アプリケーション・サーバー上)。

## 問題判別

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* に *msgmgrp* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 851 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 853 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 241 を指定します。

- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 251 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 631 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 621 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. アプリケーション・サーバーと分析サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。これを行うには、アプリケーション・サーバーで、分析サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します (逆も同様)。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または */etc/hosts* ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log*
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log*
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log*
    - */opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log*
5. アプリケーション・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. ログにエラーがないかチェックします。ログは、分析サーバーの */var/log/messages* ディレクトリーに配置されています。接頭部「BIP」が付いたメッセージを探します。また、キュー名と、テストが実行されたときのタイム・スタンプも探します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [2] テスト

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [2] テストでは、高可用性環境内にあるバックアップ・サーバー上で Message Broker とキュー・マネージャーにアクセスできるかどうかを判別します。

## リソース

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [2]・テストでは、以下のリソースを使用します。

- WebSphere Portal Server (アプリケーション・サーバー上)。

## 問題判別

メッセージング (Message Broker のインストール・チェック) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* に *msgmgr* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 851 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 853 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 241 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 251 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 631 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 621 を指定します。*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
- アプリケーション・サーバーと分析サーバーの間にネットワーク接続があることを確認します。これを行うには、アプリケーション・サーバーで、分析サーバーの短縮ホスト名と完全修飾ホスト名の両方を指定して、**ping** コマンドを送信します (逆も同様)。**ping** コマンドの結果は、ホスト名が DNS または */etc/hosts* ファイルにより正しく解決されているかどうかを表します。
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log*
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log*
  - 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log*
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log*
- アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

6. ログにエラーがないかチェックします。ログは、分析サーバーの `/var/log/messages` ディレクトリーに配置されています。接頭部「BIP」が付いたメッセージを探します。また、キュー名と、テストが実行されたときのタイム・スタンプも探します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## モバイル (IBM Worklight コンソール) テスト

モバイル (IBM Worklight コンソール) テストでは、IBM Worklight サーバーが実行されているかどうか、および管理コンソールが使用可能であるかどうかを判別します。

## リソース

モバイル (IBM Worklight コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- WorklightServer1 という名前の WebSphere Application Server

## 問題判別

モバイル (IBM Worklight コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* に `appwrklt` を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。*component* に `wrklt` を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/logs/WorklightServer1/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/logs/WorklightServer1/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. WorklightServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要がある場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WorklightServer1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startServer.sh WorklightServer1 を使用して WorklightServer1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WorklightServer1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WorklightServer1 を始動する必要がある場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WorklightServer1 open for e-business; process id is 26654

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WorklightServer1 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WorklightServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WorklightServer1 サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer1
- b. nodeagent

WorklightServer1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## モバイル (IBM Worklight コンソール) [1] テスト

モバイル (IBM Worklight コンソール) [1] テストでは、高可用性環境内のプライマリー IBM Worklight サーバーが実行されているかどうか、および管理コンソールが使用可能であるかどうかを判別します。

### リソース

モバイル (IBM Worklight コンソール) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- WorklightServer1 という名前の WebSphere Application Server

### 問題判別

モバイル (IBM Worklight コンソール) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appwrkltgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
- c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/logs/WorklightServer1/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/logs/WorklightServer1/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. WorklightServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WorklightServer1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startServer.sh WorklightServer1 を使用して WorklightServer1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WorklightServer1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WorklightServer1 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WorklightServer1 open for e-business; process id is 26654

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WorklightServer1 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WorklightServer1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WorklightServer1 サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer1
- b. nodeagent

WorklightServer1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## モバイル (IBM Worklight コンソール) [2] テスト

モバイル (IBM Worklight コンソール) [2] テストでは、高可用性環境内にある IBM Worklight バックアップ・サーバーが稼働中で、管理コンソールが使用可能かどうかを判別します。

## リソース

モバイル (IBM Worklight コンソール) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- WorklightServer2 という名前の WebSphere Application Server

## 問題判別

モバイル (IBM Worklight コンソール) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appwrkltgrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/logs/WorklightServer2/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/logs/WorklightServer2/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. WorklightServer2 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー 2・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
  - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WorklightServer2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/startServer.sh WorklightServer2 を使用して WorklightServer2 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WorklightServer2" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WorklightServer2 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server WorklightServer2 open for e-business; process id is 26654

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer2
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行することで、WorklightServer2 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WorklightServer2 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WorklightServer2 サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WorklightServer2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WorklightServer2
- b. nodeagent

WorklightServer2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/WorklightProfile2/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## パスワード管理 (パスワード同期エージェント) テスト

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) テストでは、パスワード管理同期エージェントへのアクセスをテストします。

## リソース

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (データ・サーバー上)
- Tivoli Directory Integrator (データ・サーバー上)

## 問題判別

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* に *dbstdi* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。*component* に *tdi* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. データ・サーバー 上で、以下のディレクトリーにある Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。
    - /opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/logs
  - c. データ・サーバー 上で、Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。

- /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/plugin.log
  - /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/proxy.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
  5. Tivoli Directory Integrator サーバーが始動していることを確認します。
    - a. データ・サーバーに **ibmadmin** ユーザーとしてログオンします。
    - b. サーバーを始動または再始動してください。
      - サーバーを始動するには、**/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd start** コマンドを実行します。
      - サーバーを再始動するには、**/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd restart** コマンドを実行します。
  6. Tivoli Directory Server LDAP サーバーが稼働していることを確認します。
    - a. データ・サーバー 上の端末セッションに **root** ユーザーとしてログオンします。
    - b. **ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。ここでは、Tivoli Directory Server デーモン (**ibmslapd**) が稼働中であることを示しています。
 

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```
    - c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。ここでは、Tivoli Directory Server デーモン (**ibmdiradm**) が稼働中であることを示しています。
 

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```
  7. Tivoli Directory Server **ibmslapd** が稼働していない場合は、**opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を **root** ユーザーとして実行し、ディレクトリー・サーバーを始動します。
  8. Tivoli Directory Server 管理サーバー **ibmdiradm** が稼働していない場合は、**opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmdiradm -I dsrdbm01** コマンドを **root** ユーザーとして実行し、管理サーバーを始動します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [1] テスト

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [1] では、高可用性環境内のデータ・サーバー 1 上のパスワード管理同期エージェントへのアクセスをテストします。

## リソース

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (データ・サーバー上)
- Tivoli Directory Integrator (データ・サーバー上)

## 問題判別

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *dbstdigrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 101-AUX を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 111-AUX を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 751-AUX を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 741-AUX を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. データ・サーバー 1 上で、以下のディレクトリーにある Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。
    - /opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/logs
  - d. データ・サーバー 1 上で、Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。
    - /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/plugin.log
    - /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/proxy.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. Tivoli Directory Integrator サーバーが始動していることを確認します。
  - a. データ・サーバー 1 に `ibmadmin` ユーザーとしてログオンします。
  - b. サーバーを始動または再始動してください。
    - サーバーを始動するには、`/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd start` コマンドを実行します。
    - サーバーを再始動するには、`/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd restart` コマンドを実行します。
6. Tivoli Directory Server LDAP サーバーが稼働していることを確認します。
  - a. データ・サーバー 1 上の端末セッションに `root` ユーザーとしてログオンします。
  - b. `ps -ef | grep ibmslapd` コマンドを実行します。結果は以下のようになります。ここでは、Tivoli Directory Server デーモン (`ibmslapd`) が稼働中であることを示しています。
 

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```
  - c. `ps -ef | grep ibmdiradm` コマンドを実行します。結果は以下のようになります。ここでは、Tivoli Directory Server デーモン (`ibmdiradm`) が稼働中であることを示しています。
 

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```
7. Tivoli Directory Server `ibmslapd` が稼働していない場合は、`opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01` を `root` ユーザーとして実行し、ディレクトリー・サーバーを始動します。
8. Tivoli Directory Server 管理サーバー `ibmdiradm` が稼働していない場合は、`opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmdiradm -I dsrdbm01` コマンドを `root` ユーザーとして実行し、管理サーバーを始動します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [2] テスト

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [2] では、高可用性環境内のデータ・サーバー 2 上のパスワード管理同期エージェントへのアクセスをテストします。

## リソース

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (データ・サーバー上)
- Tivoli Directory Integrator (データ・サーバー上)

## 問題判別

パスワード管理 (パスワード同期エージェント) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。`component` には `dbstdigrp` を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。
 

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 101-AUX を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 111-AUX を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 751-AUX を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 741-AUX を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

- c. データ・サーバー 2 上で、以下のディレクトリーにある Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。

- /opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/logs

- d. データ・サーバー 2 上で、Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。

- /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/plugin.log
- /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/proxy.log

4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. Tivoli Directory Integrator サーバーが始動していることを確認します。

- a. データ・サーバー 2 に **ibmadmin** ユーザーとしてログオンします。

- b. サーバーを始動または再始動してください。

- サーバーを始動するには、**/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd start** コマンドを実行します。
- サーバーを再始動するには、**/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd restart** コマンドを実行します。

6. Tivoli Directory Server LDAP サーバーが稼働していることを確認します。

- a. データ・サーバー 2 上の端末セッションに **root** ユーザーとしてログオンします。

- b. **ps -ef | grep ibmslapd** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。ここでは、Tivoli Directory Server デーモン (ibmslapd) が稼働中であることを示しています。

```
dsrdbm01 13797 1 0 Apr26 pts/1 00:00:09 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmslapd -I dsrdbm01 -t -n
root 32080 19149 0 23:17 pts/1 00:00:00 grep ibmslapd
```

- c. **ps -ef | grep ibmdiradm** コマンドを実行します。結果は以下のようになります。ここでは、Tivoli Directory Server デーモン (ibmdiradm) が稼働中であることを示しています。

```
root 4394 14038 0 14:17 pts/2 00:00:00 grep ibmdiradm
dsrdbm01 11055 1 0 Apr26 pts/1 00:00:00 /opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/64/ibmdiradm -I dsrdbm01 -t
```

7. Tivoli Directory Server ibmslapd が稼働していない場合は、**opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmslapd -I dsrdbm01** を root ユーザーとして実行し、ディレクトリー・サーバーを始動します。
8. Tivoli Directory Server 管理サーバー ibmdiradm が稼働していない場合は、**opt/ibm/ldap/V6.3/sbin/ibmdiradm -I dsrdbm01** コマンドを root ユーザーとして実行し、管理サーバーを始動します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## パスワード管理 (Tivoli Directory Integrator) テスト

パスワード管理 (Tivoli Directory Integrator) テストでは、Tivoli Directory Integrator へのアクセスをテストします。

## リソース

パスワード管理 (Tivoli Directory Integrator) テストでは、以下のリソースを使用します。

- Tivoli Directory Server (データ・サーバー上)
- Tivoli Directory Integrator (データ・サーバー上)

## 問題判別

パスワード管理 (Tivoli Directory Integrator) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には dbstdi (標準環境) または dbstdigrp (高可用性環境) を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。 *component* には *tdi* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。
 

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。
 

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。
 

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 101-AUX を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 111-AUX を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 751-AUX を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 741-AUX を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
  - c. データ・サーバー上で、以下のディレクトリーにある Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。
    - /opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/logs
  - d. データ・サーバー上で、Tivoli Directory Server ログをすべて確認します。
    - /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/plugin.log
    - /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd\_plugins/tds/proxy.log
5. アプリケーション・サーバー上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. Tivoli Directory Integrator サーバーが始動していることを確認します。

- a. データ・サーバーに `ibmadmin` ユーザーとしてログオンします。
- b. サーバーを始動または再始動してください。
  - サーバーを始動するには、`/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd start` コマンドを実行します。
  - サーバーを再始動するには、`/opt/IBM/TDI/V7.1/timsol/ITIMAd restart` コマンドを実行します。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) テスト

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) テストでは、WebSphere Portal コンソールへの Web サーバー・アクセスをテストします。

## リソース

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
`component` に `appwpe` を使用し、`topology_password` にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。  
`component` に `wpe` を使用し、`topology_password` にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

b. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。

b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WebSphere\_Portal" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startServer.sh WebSphere\_Portal を使用して WebSphere\_Portal サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WebSphere\_Portal" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WebSphere\_Portal を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server WebSphere\_Portal open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- nodeagent
- WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- WebSphere\_Portal

b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WebSphere\_Portal サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WebSphere\_Portal サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

WebSphere\_Portal サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [1] テスト

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [1] テストでは、高可用性環境内にあるプライマリー・サーバー上の WebSphere Portal コンソールへの Web サーバー・アクセスをテストします。

### リソース

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

### 問題判別

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appwpegrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。  

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を確認し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー Web サーバーを開始するには、*action* に 701 を指定します。
  - スタンバイ Web サーバーを開始するには、*action* に 711 を指定します。
  - プライマリー Web サーバーを停止するには、*action* に 511 を指定します。
  - スタンバイ Web サーバーを停止するには、*action* に 501 を指定します。
  - プライマリー・ポータル・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・ポータル・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・ポータル・サーバーを始動するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・ポータル・サーバーを始動するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・ポータル・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。
  - スタンバイ・ポータル・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
- b. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
  - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WebSphere\_Portal" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startServer.sh WebSphere\_Portal を使用して WebSphere\_Portal サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WebSphere\_Portal" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WebSphere\_Portal を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server WebSphere\_Portal open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行することで、

WebSphere\_Portal サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WebSphere\_Portal サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

WebSphere\_Portal サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [2] テスト

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [2] テストでは、高可用性環境内にあるバックアップ・サーバー上の WebSphere Portal コンソールへの Web サーバー・アクセスをテストします。

## リソース

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

ポータル (Web サーバー経由の WebSphere Portal コンソール) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appwpegrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 701 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 711 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 511 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 501 を指定します。
- プライマリー・ポータル・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・ポータル・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・ポータル・サーバーを始動するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・ポータル・サーバーを始動するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・ポータル・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。
- スタンバイ・ポータル・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log
- c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2/SystemOut.log
  - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
5. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーが始動済みであることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startServer.sh WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 を使用して WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2" is STARTED.」が表示された場合は、このステップをスキップします。WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーを始動する必要があった場合は、次のようなメッセージが表示されます。「ADMU3000I: Server WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 open for e-business; process id is 26654」。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーが始動済みであることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーの状況を確認します。
    -  アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2
- b. nodeagent

WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ポータル (WebSphere Portal コンソール) テスト

ポータル (WebSphere Portal コンソール) テストでは、WebSphere Portal コンソールへのアクセスをテストします。

### リソース

ポータル (WebSphere Portal コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

### 問題判別

ポータル (WebSphere Portal コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

### 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* に *appwpe* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。*component* に *wpe* を使用し、*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
  - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
  - b. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
    - /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log
4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
  5. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
    - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
    - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
    - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WebSphere\_Portal" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/startServer.sh WebSphere\_Portal を使用して WebSphere\_Portal サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WebSphere\_Portal" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WebSphere\_Portal を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server WebSphere\_Portal open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行することで、WebSphere\_Portal サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/bin/stopNode.sh -username WAS\_ADMIN\_USER -password WAS\_ADMIN\_PWD を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。`APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WebSphere\_Portal サーバーの状況を表示します。
    -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
    -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
    -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. `nodeagent`

WebSphere\_Portal サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ポータル (WebSphere Portal コンソール) [1] テスト

ポータル (WebSphere Portal コンソール) [1] テストでは、高可用性環境内のプライマリー・サーバー上の WebSphere Portal コンソールへのアクセスをテストします。

## リソース

ポータル (WebSphere Portal コンソール) [1] テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

ポータル (WebSphere Portal コンソール) [1] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
*component* には *appwpegrp* を使用し、*topology\_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
  - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
  - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
  - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
- 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
  - アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log`
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log`
  - アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log`
    - `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log`
- アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
  - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
  - b. コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
  - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
    - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "WebSphere\_Portal" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startServer.sh WebSphere_Portal` を使用して WebSphere\_Portal サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "WebSphere\_Portal" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。WebSphere\_Portal を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server WebSphere\_Portal open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、WebSphere\_Portal サーバーが停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

6. WebSphere\_Portal サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION\_SERVER\_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。

- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、WebSphere\_Portal サーバーの状況を表示します。

 アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。 必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。 サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal
- b. nodeagent

WebSphere\_Portal サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。 `WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## ポータル (WebSphere Portal コンソール) [2] テスト

ポータル (WebSphere Portal コンソール) [2] テストでは、高可用性環境内のバックアップ・サーバー上の WebSphere Portal コンソールへのアクセスをテストします。

## リソース

ポータル (WebSphere Portal コンソール) [2] テストでは、以下のリソースを使用します。

- アプリケーション・サーバー 2 上の WebSphere Application Server。

## 問題判別

ポータル (WebSphere Portal コンソール) [2] テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1.  プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
`component` には `appwpegrp` を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```

- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```

- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```

2. **1.6** **1.6.0.1** プラットフォーム制御ツールを使用して、サーバーの状況を検査し、サーバーを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。

- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

*topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
```

```
IOCControl -a action -p topology_password
```

3. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。

- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal/SystemErr.log

- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバー 2上で、以下の WebSphere Application Server ログを確認します。

- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2/SystemOut.log
- /opt/IBM/WebSphere/wp\_profile/logs/WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2/SystemErr.log

4. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。

5. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーが始動済みであることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。

- a. アプリケーション・サーバー・システムで、*ibmadmin* としてログオンします。

- b. コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行します。 `WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、 `WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
- c. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` を使用して `nodeagent` を始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.`」が表示された場合、このステップはスキップします。 `nodeagent` を始動する必要があった場合、「`ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654`」のようなメッセージが表示されます。
- a. メッセージ「`ADMU0509I: The Application Server "WebSphere_Portal_Portal_Node2" cannot be reached. It appears to be stopped.`」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startServer.sh WebSphere_Portal_Portal_Node2` を使用して `WebSphere_Portal_Portal_Node2` サーバーを始動します。メッセージ「`ADMU0508I: The Application Server "WebSphere_Portal_Portal_Node2" is STARTED.`」が表示された場合は、このステップをスキップします。 `WebSphere_Portal_Portal_Node2` サーバーを始動する必要があった場合は、次のようなメッセージが表示されます。「`ADMU3000I: Server WebSphere_Portal_Portal_Node2 open for e-business; process id is 26654`」。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. `nodeagent`
- b. `WebSphere_Portal_Portal_Node2`

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. `WebSphere_Portal_Portal_Node2`
- b. `nodeagent`

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、 `WebSphere_Portal_Portal_Node2` サーバーが停止します。 `WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、 `WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、 `nodeagent` が停止します。 `WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、 `WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

- 6. `WebSphere_Portal_Portal_Node2` サーバーが始動済みであることを確認します。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
  - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である `admin` およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログインします。 `APPLICATION_SERVER_HOST` は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
  - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「**WebSphere Application Server**」をクリックして、 `WebSphere_Portal_Portal_Node2` サーバーの状況を確認します。

➡ アイコンは、サーバーが開始済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

✖ アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

③ アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

**重要:** サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2
- b. nodeagent

WebSphere\_Portal\_Portal\_Node2 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS\_ADMIN\_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS\_ADMIN\_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

## 次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

## セキュリティ (IBM Security Identity Manager 管理コンソール) テスト

セキュリティ (IBM Security Identity Manager 管理コンソール) テストでは、IBM Security Identity Manager サーバーが稼働中で、管理コンソールが使用可能かどうかを判別します。

## リソース

セキュリティ (IBM Security Identity Manager 管理コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- isim1 という名前の WebSphere Application Server

## 問題判別

セキュリティ (IBM Security Identity Manager 管理コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

## 手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。  
`component` には `appisim` (標準環境) または `appisimgrp` (高可用性環境) を使用し、`topology_password` にはトポロジー・パスワードを指定します。

- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。 *component* には *sim* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
- a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
- b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
- c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を検査し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
- プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
  - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
  - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。
- topology\_password* にトポロジー・パスワードを指定します。
- ```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```
4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
- a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
- b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
- /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log

- c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/logs/isis1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/logs/isis1/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. isis1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/startNode.sh を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "isis1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/startServer.sh isis1 を使用して isis1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "isis1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。isis1 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server isis1 open for e-business; process id is 26654

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. isis1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. isis1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行することで、isis1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD を実行するこ

とで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. isim1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。 WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、isim1 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。 必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」 をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。 サーバーを選択して「開始」 をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。 Node Agent が実行されていない可能性があります。 Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. isim1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. isim1
- b. nodeagent

isim1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

セキュリティ (IBM Security Identity Manager コンソール) テスト

セキュリティ (IBM Security Identity Manager コンソール) テストでは、IBM Security Identity Manager サーバーが稼働中で、コンソールが使用可能かどうかを判別します。

リソース

セキュリティ (IBM Security Identity Manager コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- isim1 という名前の WebSphere Application Server

問題判別

セキュリティー (IBM Security Identity Manager コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

- 1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には *appisim* (標準環境) または *appisimgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。
component には *sim* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
- 1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
 - プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
 - スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log
 - c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/logs/isis1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/logs/isis1/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは `df -h` コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、`df -h` コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. isim1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー・システムで、ibmadmin としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/serverStatus.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/startNode.sh` を使用して nodeagent を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。nodeagent を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "isis1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/startServer.sh isim1` を使用して isim1 サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "isis1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。isim1 を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server isim1 open for e-business; process id is 26654

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. isim1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. isim1

b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、isis1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. isis1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。

- a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。

- b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、isis1 サーバーの状況を表示します。

 アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。

 アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。

 アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
b. isis1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. isis1
b. nodeagent

isis1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

セキュリティ (IBM Security Identity Manager セルフ・コンソール) テスト

セキュリティ (IBM Security Identity Manager セルフ・コンソール) テストでは、IBM Security Identity Manager サーバーが稼働中で、セルフコンソールが使用可能かどうかを判別します。

リソース

セキュリティ (IBM Security Identity Manager セルフ・コンソール) テストでは、以下のリソースを使用します。

- isim1 という名前の WebSphere Application Server

問題判別

セキュリティ (IBM Security Identity Manager セルフ・コンソール) テストが失敗した場合、以下を実行し、アクセス関連の問題を特定して解決してください。

手順

1. **1.6.0.2** プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
component には *appisim* (標準環境) または *appisimgrp* (高可用性環境) を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
2. **1.6** **1.6.0.1** 標準環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、必要に応じてそれらを開始および停止します。希望するオプションで以下のコマンドを実行します。*component* には *sim* を使用し、*topology_password* にはトポロジー・パスワードを指定します。
 - a. コンポーネントの状況を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a status -c component -p topology_password
```
 - b. コンポーネントを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a start -c component -p topology_password
```
 - c. コンポーネントを停止するには、次のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin

IOCControl -a stop -c component -p topology_password
```
3. **1.6** **1.6.0.1** 高可用性環境で実行している場合、プラットフォーム制御ツールを使用して、コンポーネントの状況を確認し、コンポーネントを必要に応じて始動および停止します。必要なオプションを指定して、次のコマンドを実行します。
 - プライマリー・サーバーの状況を確認するには、*action* に 831 を指定します。

- スタンバイ・サーバーの状況を確認するには、*action* に 833 を指定します。
- プライマリー・サーバーを開始するには、*action* に 201 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを開始するには、*action* に 211 を指定します。
- プライマリー・サーバーを停止するには、*action* に 671 を指定します。
- スタンバイ・サーバーを停止するには、*action* に 661 を指定します。

topology_password にトポロジー・パスワードを指定します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a action -p topology_password
```

4. 実行時例外については、ログ・ファイルを確認してください。
 - a. アプリケーション・サーバーでは、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal/SystemErr.log
 - b. 高可用性環境内のアプリケーション・サーバー 2 で、以下の WebSphere Portal ログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal_PortalNode2/SystemErr.log
 - c. アプリケーション・サーバーで、以下の WebSphere Application Server のログを確認します。
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/logs/isis1/SystemOut.log
 - /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/logs/isis1/SystemErr.log
5. アプリケーション・サーバー 上のファイル・システムが最大容量に達していないことを確認してください。これは **df -h** コマンドを実行して判別することができます。ファイル・システムは、使用率が 100% より小さい場合でも、満杯であると見なされることがあります。そのため、**df -h** コマンドの戻り値が、ファイル・システムが満杯の 90% 以上の状態であることを示している場合は、ファイル・システムが最大容量に達したと見なしてください。
6. *isis1* サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。手動のステップは以下のとおりです。
 - a. アプリケーション・サーバー・システムで、*ibmadmin* としてログオンします。
 - b. コマンド・ウィンドウで /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/serverStatus.sh -all -username *WAS_ADMIN_USER* -password *WAS_ADMIN_PWD* を実行します。*WAS_ADMIN_USER* は WebSphere 管理者 ID (通常は *admin*)、*WAS_ADMIN_PWD* は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。
 - c. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "nodeagent" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/startNode.sh を使用して *nodeagent* を始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "nodeagent" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。*nodeagent* を始動する必要があった場合、「ADMU3000I: Server nodeagent open for e-business; process id is 26654」のようなメッセージが表示されます。
 - a. メッセージ「ADMU0509I: The Application Server "isis1" cannot be reached. It appears to be stopped.」が表示された場合は、コマンド /opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isis1/bin/startServer.sh *isis1* を使用して *isis1* サーバーを始動します。メッセージ「ADMU0508I: The Application Server "isis1" is STARTED.」が表示された場合、このステップはスキップします。*isis1* を始動する必要があった場合、次のようなメッセージが表示されます。ADMU3000I: Server *isis1* open for e-business; process id is 26654

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. isim1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. isim1
- b. nodeagent

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/stopServer.sh -all -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、isim1 サーバーが停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere Application Server の管理者パスワードです。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、nodeagent が停止します。WAS_ADMIN_USER は WebSphere 管理者 ID (通常は admin)、WAS_ADMIN_PWD は WebSphere の管理者パスワードです。

7. isim1 サーバーが始動済みであることを確認してください。この確認は、WebSphere Application Server 管理コンソールを使用するか、手動のステップを行うことで実行できます。WebSphere Application Server 管理コンソールを使用する手順は、以下のとおりです。
 - a. `http://APPLICATION_SERVER_HOST:9061/ibm/console` で、WebSphere Application Server の管理 ID である admin およびパスワードを使用して WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。APPLICATION_SERVER_HOST は、アプリケーション・サーバー のホスト名です。
 - b. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Server」をクリックして、isim1 サーバーの状況を表示します。
 -  アイコンは、サーバーが始動済みであることを示します。必要な場合は、サーバーを選択して「再始動」をクリックし、サーバーを再始動してください。
 -  アイコンは、サーバーが停止していることを示します。サーバーを選択して「開始」をクリックし、サーバーを開始してください。
 -  アイコンは、サーバー状況が使用不可であることを示します。Node Agent が実行されていない可能性があります。Node Agent を開始するには、コマンド・ウィンドウで `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/isim1/bin/startNode.sh` コマンドを実行します。

重要: サーバーは、指定された順序で開始および停止する必要があります。

以下の順序でサーバーを開始します。

- a. nodeagent
- b. isim1

以下の順序でサーバーを停止します。

- a. isim1
- b. nodeagent

isim1 サーバーを停止するには、サーバーを選択して「停止」をクリックします。

アプリケーション・サーバーのコマンド・ウィンドウでコマンド `/opt/IBM/WebSphere/AppServerv7/profiles/ism1/bin/stopNode.sh -username WAS_ADMIN_USER -password WAS_ADMIN_PWD` を実行することで、`nodeagent` が停止します。`WAS_ADMIN_USER` は WebSphere 管理者 ID (通常は `admin`)、`WAS_ADMIN_PWD` は WebSphere の管理者パスワードです。

次のタスク

見つかった問題やエラーをすべて解決し、テストを再試行します。

使用状況データのロギングと分析

IBM Intelligent Operations Center では、使用状況データがログに記録されます。このデータは、後から使用状況分析アプリケーションを使用して処理できます。

これらのログは、ログイン、ログアウト、タイムアウト、ログイン失敗などのセッション・アクティビティに関する情報を提供します。ログ・エントリは、NCSA combined 業界標準に準拠しています。

ログ・エントリを分析することで、IBM Intelligent Operations Center の使用状況をモニターできます。

使用状況分析ログ

IBM Intelligent Operations Center の使用状況レコードは、専用のログ・ファイルに書き込まれます。WebSphere Portal は、ログを 6 時間ごとに循環させるように構成されています。循環の間隔はカスタマイズできます。

使用状況分析ログは、標準環境ではアプリケーション・サーバー、高可用性環境ではアプリケーション・サーバー 1 とアプリケーション・サーバー 2 にあります。ログは次のディレクトリにあります。

```
wp_root/logs/wp_server_name/SiteAnalyzerLogs
```

ここで `wp_root` は WebSphere Portal のホーム・ディレクトリ、`wp_server_name` は WebSphere Portal のサーバー名です。

ログ・ファイルには、`sa_CREATE_TIME_CLOSE_TIME.log` という形式の名前が付けられます。ここで、`CREATE_TIME` はログが作成された時点のタイム・スタンプ、`CLOSE_TIME` はログが閉じられた時点のタイム・スタンプです。`CREATE_TIME` および `CLOSE_TIME` の各タイム・スタンプの形式は、`YYYY.MM.DD-hh.mm.ss` です。ここで、`YYYY` は年、`MM` は月、`DD` は日、`hh` は時間、`mm` は分、`ss` は秒を表します。

使用状況分析データを取り込むには、ロギングを有効にする必要があります。ロギングはデフォルトで使用可能になっています。

関連情報:



WebSphere Portal でのサイト分析ロギングの有効化

使用法分析ツールの実行

使用法分析ツールは、リアルタイムおよびヒストリカルなレポート作成の目的で、使用状況分析ログを処理し、そのデータを保存します。

このタスクについて

このツールは、USAGEAN データベースの SCHUSAG.USAGEDATA 表に、以下の分析情報を保管します。処理されたログは、`/opt/IBM/WebSphere/usageAnalysis/Archive_date_time/logs` ディレクトリー (`date_time` はツールが実行された時点のタイム・スタンプ) に保管されます。

- `src_ip` - WebSphere Portal URL (`req_url`) 要求の送信元 IP アドレス。
- `req_user` - WebSphere Portal URL (`req_url`) を要求したユーザー。
- `req_datetime` - WebSphere Portal URL (`req_url`) が要求された日時。
- `req_url` - ユーザー (`req_user`) が要求した WebSphere Portal URL。
- `cookies` - WebSphere Portal URL (`req_url`) 要求とともに渡された Cookie。
- `sa_filename` - 処理された使用状況分析ログ・ファイルの名前。
- `p_server` - 使用状況分析ログ・ファイル (`sa_filename`) の作成元 WebSphere Portal サーバー。この情報は、複数の WebSphere Portal ノードを含むインストール済み環境で役立ちます。
- `created` - データベースにエントリーが作成された日時。

Usage Analysis tool を構成するには、`/opt/IBM/WebSphere/usageAnalysis/runAnalysisTool.sh` ファイルの以下のプロパティーを変更します。

- `IS_DEBUG`: `yes` または `no` に設定できます。Usage Analysis tool の実行時にデバッグ・ステートメントを表示するかどうかを示します。デフォルトは `no` で、デバッグ・ステートメントが表示されないことを示します。
- `IS_FORCE`: `yes` または `no` に設定できます。以前に処理した使用状況分析ファイルを再処理するかどうかを示します。`yes` に設定すると、データベースの既存のエントリーが削除され、ログが再処理されます。

使用状況分析ツールを実行するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 標準環境では、アプリケーション・サーバーに `ibmadmin` ユーザーとしてサインオンします。高可用性環境を運用している場合は、アプリケーション・サーバー 1 とアプリケーション・サーバー 2 に順にサインオンし、以下のステップを実行します。
2. `was_root/usageAnalysis` ディレクトリー (`was_root` は WebSphere Application Server のホーム・ディレクトリー) に移動します。例えば、`/opt/IBM/WebSphere/usageAnalysis` です。
3. `./runAnalysisTool.sh -h database_server_hostname -p db2inst1_password` を実行します。

ここで `database_server_hostname` はデータ・サーバーまたはデータ・サーバー 1 のホスト名、`db2inst1_password` はトポロジー・プロパティー・ファイルの `DEFAULT.PWD.DB2` で定義されたパスワードです。

タスクの結果

分析結果が USAGEAN データベースに書き込まれます。

第 8 章 ソリューションの保守

IBM Intelligent Operations Center の円滑な稼働を維持するには、定期的な保守をスケジュールします。ログ・ファイル保守計画を実装し、システムを調整してパフォーマンスを最適化します。

サポート知識ベースの照会

次のリンクをクリックすると、すべてのバージョンの IBM Intelligent Operations Center について、稼働中のサポート知識ベースのカスタマイズされた照会が始まります。IBM Intelligent Operations Center での保守に関するヒントをすべて表示する。

データのバックアップとリカバリー

ご使用の IBM Intelligent Operations Center のデプロイメントについて、定期的にデータをバックアップおよびリカバリーするための計画を作成してください。データ・ファイルおよびデータベースのバックアップおよびリカバリーは、あらゆるビジネス・システムにとって不可欠な操作で、特に実稼働環境で稼働中のデータおよびアプリケーションについては重要です。

始める前に

IBM Intelligent Operations Center のバックアップを実行する前に、以下の事項を決定してください。

- 使用するユーティリティを決定します。Tivoli Storage Manager または別のバックアップおよびリカバリー用ユーティリティを使用できます。Tivoli Storage Manager の製品資料、または使用するユーティリティの資料を参照してください。
- オフライン・バックアップとオンライン・バックアップのどちらを実行するかを決定します。オフライン・バックアップを行う場合は、バックアップ手順を実行する前に、IBM Intelligent Operations Center サーバーを停止します。オンライン・バックアップを行う場合は、バックアップ手順の実行中も、IBM Intelligent Operations Center サーバーは稼働したままです。オンライン・バックアップを行うことを選択する場合は、ファイル・システムおよびデータベースのバックアップに使用する手法およびツールが、オンライン・バックアップの取り込みに対応していることを確認してください。例えば、オンライン・バックアップの実行中に、開いているファイルや変更されたデータベースが検出された場合に、それによってバックアップが失敗しないことを確認してください。

関連情報:



Tivoli Storage Manager の製品資料

データのバックアップ

IBM Intelligent Operations Center のファイル・システムおよびデータベースに対して、定期的に自動バックアップ手順を実行するように、任意のバックアップおよびリカバリー用ユーティリティをスケジュールしてください。バックアップの頻度は、データの変更頻度と、データの重要度によって異なります。

ファイル・システムのバックアップ

各サーバー上の IBM Intelligent Operations Center ディレクトリーに対して、定期的に自動バックアップ手順を実行してください。完全な保護を実現するために、すべてのディレクトリーをバックアップすることが重要です。

このタスクについて

指定された各ディレクトリー内のすべてのファイルおよびサブディレクトリーをバックアップします。

注: ファイル・システムのバックアップは、データベースのバックアップと同時に実行してください。

手順

以下の表に示す各サーバー上の特定のディレクトリーを定期的にバックアップするように、任意のバックアップ・ユーティリティーをスケジュールします。

表 52. 各サーバー上のバックアップ対象の IBM Intelligent Operations Center ディレクトリー

サーバー	ディレクトリー
アプリケーション・サーバー	/opt/IBM/WebSphere/ /opt/IBM/WebSphere_STProxy /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd_plugins/pam /opt/IBM/isim/data /opt/IBM/isim/extensions/6.0 /opt/IBM/isim/config /opt/IBM/PMT /opt/IBM/ISP /opt/IBM/ioc /local/notesdata /home/ibmadmin /home/ibmuser
Web サーバー	/opt/IBM/HTTPServer/conf /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd_plugins/pam /opt/IBM/WebSphere/Plugins /opt/IBM/ISP /home/ibmadmin /home/ibmuser
分析サーバー	/opt/IBM/WebSphere/ /opt/IBM/ISP /opt/IBM/mqsi /opt/IBM/cognos /opt/IBM/ILOG /opt/ibm/ioc /opt/mqm /var/mqm /var/mqsi /home/ibmadmin /home/ibmuser /datahome/proxy/idsslapd-proxy /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd_plugins/pam
データ・サーバー	/datahome/dsrdbm01/idsslapd-dsrdbm01 /opt/IBM/ISP /home/ibmadmin /home/ibmuser /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd_plugins/pam /opt/IBM/TDI/V7.1/pwd_plugins/tds /opt/IBM/TDI/V7.1/timso1

データベースのバックアップ

IBM Intelligent Operations Center データベース (ディレクトリー・サーバーやユーザー・レジストリーを含む) に対して、定期的に自動バックアップ手順を実行してください。完全な保護を実現するために、必ずすべてのデータベースをバックアップしてください。

このタスクについて

データベースのバックアップに使用できるツールおよびプロセスについて詳しくは、このトピックの末尾にある DB2 製品資料へのリンクを参照してください。

Tivoli Directory Server をバックアップするときは、データベース情報のみをバックアップすることも、Tivoli Directory Server インスタンスのすべての情報をバックアップすることもできます。Tivoli Directory Server インスタンスの情報をバックアップしてリストアする方法について詳しくは、Tivoli Directory Server の製品資料にある管理ガイドを参照してください。

注: データベースのバックアップは、ファイル・システムのバックアップと同時に実行してください。

手順

IBM Intelligent Operations Center 内の各コンポーネントについて、以下の表に示す特定のデータベースを定期的にバックアップするように、任意のバックアップ・ツールをスケジュールします。

表 53. 各コンポーネントのバックアップ対象データベース

コンポーネント	データベース・インスタンス	データベース
WebSphere Portal Server	db2inst1	CUSTDB
	db2inst1	FDBKDB
	db2inst1	LKMDDDB
	db2inst1	JCRDB
	db2inst1	RELDDB
	db2inst1	COMMDB
IBM Business Monitor	db2inst1	MONITOR
	db2inst1	WBMDDB
IBM Cognos Business Intelligence	db2inst1	CXLOGDB
	db2inst1	CXCONTDB
Usage Analysis tool	db2inst1	USAGEAN
Tivoli Identity Manager	db2inst1	ITIMDB
IBM Worklight	db2inst1	WLREPORT
	db2inst1	APPCNTR
	db2inst1	WRKLGHT
IBM Intelligent Operations Center アプリケーション	db2inst2	IOCDB、IOCME
システム検査チェック・ツール	db2inst2	CATSchDB
LDAP	dsrdbm01	LDAPDB

関連情報:



IBM Tivoli Directory Server の製品資料



IBM DB2 Database for Linux, UNIX, and Windows の製品資料

バックアップからのデータのリカバリー

IBM Intelligent Operations Center ファイル内、またはデータベース内のデータが破損または消失した場合は、バックアップしたファイルおよびデータベースからデータをリカバリーします。

始める前に

バックアップからデータをリカバリーする前に、ターゲット環境を準備します。リカバリーしたファイルおよびデータベースの回復先として使用できる IBM Intelligent Operations Center のインスタンスをインストールする必要があります。IBM Intelligent Operations Center のインスタンスのインストールについて詳しくは、このトピックの末尾にあるインストールおよび構成のセクションへのリンクを参照してください。

このタスクについて

データベースのリカバリーについては、以下の点に注意してください。

- データベースをリストアする場合は、バックアップ・イメージを取得したときにアーカイブされたデータ・ファイルもリストアする必要があります。
- データベースをリストアするときは、データベースのリストア期間の終了点が、ファイル・システムのバックアップが完了した時点になるようにしてください。そうしなければ、構成ファイルとデータ・ファイルが、データベース内の情報と同期していない状態になる可能性があります。
- 高可用性環境でデータのリカバリーを行う場合は、データベースをリストアした後に、DB2 高可用性災害時リカバリーを再度構成する必要があります。DB2 高可用性災害時リカバリーの構成について詳しくは、DB2 の製品資料を参照してください。

手順

1. すべての IBM Intelligent Operations Center サーバーを停止するために、以下の手順を実行して、プラットフォーム制御ツールの IOCControl スクリプトを実行します。
 - a. 分析サーバーの /opt/IBM/ISP/mgmt/scripts ディレクトリーにある IOCControl スクリプトを特定します。
 - b. ユーザー `ibmadmin` としてログオンします。
 - c. 以下に示す適切なオプションを使用して IOCControl スクリプトを実行します。
 - 標準環境では、以下のコマンドを入力します。

```
./IOCControl -a stop -c all -p password
```
 - 高可用性環境では、以下のコマンドを入力します。

```
./IOCControl -a 091 -p password
```
2. データベース・サーバーを開始するために、以下に示す適切なオプションを使用して IOCControl スクリプトを実行します。
 - 標準環境では、以下のコマンドを入力します。

```
./IOCControl -a start -c db24mid -p password
./IOCControl -a start -c db24app -p password
```
 - 高可用性環境では、以下のコマンドを入力します。

```
./IOCControl -a 141 -p password
./IOCControl -a 151 -p password
```
3. トピック『ファイル・システムのバックアップ』の表にリストされているファイルおよびディレクトリーを削除します。このトピックの最後にあるリンクを参照してください。
4. トピック『ファイル・システムのバックアップ』の表にリストされている、バックアップしたファイルおよびディレクトリーをリストアします。このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

5. バックアップしたデータベースをリストアします。
6. すべての IBM Intelligent Operations Center サーバーを開始するために、以下の手順を実行して、IOControl スクリプトを実行します。
 - a. 分析サーバーの /opt/IBM/ISP/mgmt/scripts ディレクトリーにある IOControl スクリプトを特定します。
 - b. ユーザー `ibmadmin` としてログオンします。
 - c. 以下に示す適切なオプションを使用して IOControl スクリプトを実行します。
 - 標準環境で、以下のコマンドを入力します。

```
./IOControl -a start -c all -p password
```
 - 高可用性環境で、以下のコマンドを入力します。

```
./IOControl -a 001 -p password
```

関連概念:

23 ページの『第 2 章 ソリューションのインストール』

IBM Intelligent Operations Center には、IBM Intelligent Operations Center 環境およびアプリケーションをインストールするためのインストール・オプションがあります。IBM Intelligent Operations Center をインストールしたら、いくつかの追加構成が必要です。

関連情報:



IBM DB2 Database for Linux, UNIX, and Windows の製品資料

ログ・ファイルの保守

IBM Intelligent Operations Center では、複数の場所にログ・ファイルが保管されます。システム停止を防ぐために、データベースのバックアップ、ログ・ファイルのアーカイブ、および元のログ・ファイルの削除を定期的に行ってください。

IBM Intelligent Operations Center では、DB2 データベースを使用して、ユーザー・インターフェースに表示される情報、レポートに表示される情報、KPI に表示される情報、および API を通じて表示される情報が保管されます。データが IBM Intelligent Operations Center に到着すると、DB2 が情報をログに記録します。これにより、トランザクションの一貫性が確保され、システム障害からの復旧が可能となります。IBM Intelligent Operations Center でデータのボリュームが増大すると、ログ・ファイルの数が大幅に増えます。

ログ・ファイルに必要なディスク・スペースの量をモニターしてください。必要なディスク・スペースの量は、スケジュールされたデータ・ロードのサイズによって異なります。ログ・ファイルを管理しないと、最終的にファイル・システム・パーティションがログ・ファイルでいっぱいになり、アクティブ・ログのスペースを確保できなくなる可能性があります。この場合、IBM Intelligent Operations Center の数多くの基本機能が正しく機能しなくなるという負の影響が生じます。ログ・ファイルを管理するために取る方法は、IBM Intelligent Operations Center でのデータのバックアップとリカバリーの方法によって異なります。

以下の方法は、組み合わせて使用することができます。選択する方法は、各データ・ソースの特性によって決まります。方法のバリエーションとして、初期ロードのロギングをオフにしたり、古いレコードを上書きする循環ログを実装したりすることができます。これらの方法を使用すると、スペース不足エラーは防止できますが、直前のトランザクションにリカバリーできなくなります。詳しくは、トピックの最後にある

「*IBM DB2 10.1* データ・リカバリーと高可用性ガイドおよびリファレンス」のリンクにアクセスし、リカバリー時のストレージに関する考慮事項についてのセクションを参照してください。

ロギングをオフにする

外部記録システムからデータを容易に複製できる場合は、ロギングを完全にオフにします。ロギングをオフにすると、スペースを節約できるほか、ロードのパフォーマンスが大幅に向上します。障害から復旧するには、外部記録システムからデータを再ロードします。必要な履歴をすべてロードする必要があるため、この方法を使用すると、データ・ボリュームが大きい場合に長時間を要することがあります。

ロギングをオフにして日次バックアップを実装する

1 日より長い期間のデータを簡単に複製できない場合に、一部のデータを再ロードすることが許容されるときは、ロギングをオフにして、日次バックアップを実装します。障害から復旧するには、前日のバックアップをリストアし、本日のアクティビティーを再ロードします。バックアップには、標準の DB2 バックアップまたは仮想マシン・スナップショットを使用できます。この方法は、スペースを節約して、パフォーマンスを向上させます。抽出、変換、およびロード (ETL) プロセスまたはエクスポートを使用してデータが入力される標準の IBM Intelligent Operations Center データ・ソースには、この方法が最も適しています。

ロギングをオンにする

直前のトランザクションまでデータをリカバリーする必要があり、かつ外部記録システムからデータを再ロードしない場合は、アクティブ・ログとバックアップを処理するために必要なスペースの量を判別する必要があります。アクティブ・ログ・ファイルのスペースを再利用できるようにするには、定期的なフルバックアップ、定期的な増分バックアップ、または両方のバックアップの組み合わせを実装することが不可欠です。以下のステップは、サンプルのバックアップ処理の概略です。この場合、各バックアップ・ステップは適切な間隔で実行されます。

1. 初期データをロードします。
2. フルデータベース・バックアップ backup_1 を実装します。
3. 対応するログ activelog_1 と activelog_2 を作成するスケジュールされたデータをロードします。
4. 増分データベース・バックアップ backup_2 を実装します。
5. activelog_1 と activelog_2 をアーカイブするか、削除します。
6. 対応するログ activelog_3 と activelog_4 を作成するスケジュールされたデータをロードします。
7. 増分データベース・バックアップ backup_3 を実装します。
8. activelog_3 と activelog_4 をアーカイブするか、削除します。
9. 対応するログ activelog_5 と activelog_6 を作成するスケジュールされたデータをロードします。
10. フルデータベース・バックアップ backup_4 を実装します。

一例として、上記のステップ 6 の直後に発生した障害の後でデータをリカバリーする必要がある場合は、以下のステップを実行します。

1. フルデータベース・バックアップ backup_1 をリストアします。
2. 増分データベース・バックアップ backup_2 をリストアします。
3. アクティブ・ログ activelog_3 と activelog_4 を適用します。

関連情報:

 IBM DB2 10.1 データ・リカバリーと高可用性ガイドおよびリファレンス

パフォーマンスの調整

以下の各セクションでは、アプリケーション・サーバーと WebSphere Application Server を調整する方法について説明します。

関連情報:



WebSphere Application Server の製品資料

アプリケーション・サーバーの調整

このタスクについて

パフォーマンス・テストの結果に基づく以下のガイドラインを使用して、Java 仮想マシンのヒープ・サイズを設定します。

手順

1. 最小ヒープ・サイズと最大ヒープ・サイズを同じ値に設定します。
2. 物理メモリーに適合し、かつ 2 GB を超える値にヒープ・サイズを設定します。

次のタスク

詳しくは、関連リンクを参照してください。

WebSphere Application Server の調整

WebSphere Application Server バージョン 8 のパフォーマンスの調整については、関連リンクを参照してください。

DB2 パフォーマンス・モニター・データ収集の構成

DB2 インスタンスおよびデータベースのパフォーマンス・モニターを使用可能にするには、各 DB2 モニター・スイッチに関連するデータを収集するよう、DB2 を構成します。DB2 モニター・ルーチンを使用することにより、データベース・インスタンスがモニター対象になるようにモニター・スイッチの電源をオンにします。

このタスクについて

以下の手順に従って、関連する DB2 パフォーマンス・モニター・スイッチの値を「ON」に設定します。この手順は、db2inst1 と db2inst2 の両方で実行してください。

手順

1. データ・サーバーで、db2inst1 の DB2 インスタンス所有者としてログオンします。
2. 次のコマンドを入力します。

注: db2 update コマンドは、単一のコマンドとして 1 行に入力してください。

```
db2 attach to db2inst1
```

```
db2 update dbm cfg using DFT_MON_BUFPOOL ON DFT_MON_LOCK ON DFT_MON_SORT ON
DFT_MON_STMT ON DFT_MON_TABLE ON DFT_MON_TIMESTAMP ON DFT_MON_UOW ON
HEALTH_MON OFF
```

```
db2stop
```

```
db2start
```

3. db2inst1 を db2inst2 に置き換えて、上記手順を繰り返します。

次のタスク

DB2 パフォーマンス・モニターのスイッチ設定を確認するには、db2inst1 と db2inst2 の両方で、以下のステップを実行します。

1. データ・サーバーで、db2inst1 の DB2 インスタンス所有者としてログオンします。
2. 以下のコマンドを入力します。

```
db2 get dbm cfg |grep _MON
```

3. db2inst1 を db2inst2 に置き換えて、上記手順を繰り返します。

トポロジー・パスワードの変更

トポロジー・パスワードは、インストール・プロセス中に、ソリューション・トポロジーを定義するファイルを暗号化するため、およびそのファイルにアクセスするために使用されます。このパスワードは、インストール・プロセスで鍵ストアが作成されるときに作成されます。このパスワードは必要に応じて変更できます。変更するには、鍵ストアを削除して新規のトポロジー・パスワードを指定します。

このタスクについて

インストール・サーバーで、IBM Intelligent Operations Center インストール・パッケージがコピーされているディレクトリーに移動します。以下のステップでは、このディレクトリーを *install_home* と呼びます。

手順

1. root としてログオンするか、**su -** コマンドを実行して root アカウントに切り替えます。
2. *install_home/ioc16* ディレクトリーに移動します。
3. *install_home/ioc16/resource/ioc.keystore* ファイルを削除します。
4. 標準環境では **./iop.std.install.sh -p topology_password 3** コマンド、高可用性環境では **./iop.ha.install.sh -p topology_password 3** コマンドを実行します (*topology_password* はトポロジー用に作成するパスワード)。
5. 後で使用するときのために、パスワードをメモします。

重要: パスワード管理ツールおよびプラットフォーム制御ツールを実行している場合には、トポロジー・パスワードが必要です。

シングル・サインオンのための LTPA トークンの更新

IBM Intelligent Operations Center では、Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) トークンを使用して、多くのサービス間でのシングル・サインオンを有効にします。インストール時に生成されたトークンおよび鍵には、有効期限はありません。これは、定期的に LTPA トークンを再生成し、そのトークンを使用してサービスを更新するための、セキュリティー・グッド・プラクティスです。

始める前に

IBM Intelligent Operations Center 製品をインストールしてすべてのサービスを開始してから、LTPA トークンを更新する必要があります。

この手順では、すべてのサービスを停止して開始する必要があるため、システムが実動状態にある場合は更新を行わないでください。システムにログインしたユーザーのサービスが中断され、データが失われる可能性があります。

手順

アプリケーション・サーバーの新規 LTPA トークンを生成します。

1. アプリケーション・サーバーで Web ブラウザーを開き、`http://application_host:9061/ibm/console` に移動します。ここで、`application_host` は、アプリケーション・サーバーのホスト名です。
 2. トポロジー・プロパティ・ファイルの `WAS.ADMIN.ACCOUNT.PWD` パラメーターで指定されているパスワードを使用して、`admin` ユーザーとしてログオンします。
 3. 「セキュリティ」 > 「グローバル・セキュリティ」 > 「LTPA」をクリックします。
 4. 新規 LTPA トークンのパスワードを 2 回入力します。このパスワードは、LTPA トークンの暗号化に使用されます。このパスワードは、LTPA トークンのインポート時にも使用されます。このパスワードは、トポロジー・プロパティ・ファイルの `WAS.LTPA.PWD` パラメーターとして記録してください。
 5. LTPA トークンの保存場所のパスとファイル名を入力します。例えば `/tmp/newapp.ltpa` とします。別のパスまたはファイル名を指定する場合は、残りのステップで、`/tmp/newapp.ltpa` をご使用のパスおよびファイル名に置き換えてください。
 6. 「鍵のエクスポート」をクリックします。新規 LTPA トークンが `/tmp/newapp.ltpa` として保存されます。
 7. 「メッセージ」 > 「保存」をクリックします。更新が保存されます。シングル・サインオンのドメインが定義されていないことについての警告は無視してください。
 8. アプリケーション・サーバーで、`root` ユーザーとしてログオンし、端末ウィンドウを開きます。
 9. `cp /tmp/newapp.ltpa /opt/IBM/ISP/stproxy.ltpa` コマンドを実行します。これにより、IBM Intelligent Operations Center のインストール時に作成されたファイルを置き換えます。
- コラボレーション・サービスのシングル・サインオンを更新します。
10. 78 ページの『コラボレーション・サービス用のシングル・サインオンの構成』のステップに従って、コラボレーション・サービスのシングル・サインオンを更新します。
- すべてのサービスを停止して再開します。
11. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのサービスを停止します。
 12. プラットフォーム制御ツールを使用して、すべてのサービスを開始します。LTPA トークンが、WebSphere Application Server と Lotus Domino Server の間で伝搬されます。

セッション・タイムアウトの設定

セッション・タイムアウトは、セッションが終了し、ユーザーによる再度のログインが必要になるまでの、ユーザーがアイドル状態のままにいることのできる時間を決定します。セッション・タイムアウトには、管理者のポータル・サービス経由でのログインを含みます。

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center のインストール時には、セッション・タイムアウトは定義されていません。セッションがアイドル状態であっても、ユーザーは、ログアウトするまではログインしたままになります。

ユーザーの組織のセキュリティー・ポリシーにより、一定期間アイドルであればセッションのログアウトが必要となる場合は、以下のステップを使用して、IBM Intelligent Operations Center システムのセッション・タイムアウトを定義してください。

手順

サーバー・タイムアウトを構成します。

1. Web ブラウザーを使用して `http://application_server:9061/ibm/console` に移動します。ここで `application_server` は、標準環境の場合はアプリケーション・サーバーのホスト名、高可用性環境の場合はアプリケーション・サーバー 1 のホスト名です。
2. トポロジー・プロパティ・ファイルの `PORTAL.ADMIN.ACCOUNT.PWD` で定義されたパスワードを指定して、admin ユーザーとしてログオンします。
3. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「WebSphere Portal」をクリックします。
4. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
5. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
6. 「OK」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。
8. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「STProxyServer1」をクリックします。
9. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
10. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
11. 「OK」をクリックします。
12. 「保存」をクリックします。
13. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_GW1」をクリックします。
14. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
15. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
16. 「OK」をクリックします。
17. 「保存」をクリックします。
18. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_Disp1」をクリックします。
19. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
20. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
21. 「OK」をクリックします。

22. 「保存」をクリックします。
高可用性環境で実行している場合は、以下の追加のサーバーを構成します。
23. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_Disp2」をクリックします。
24. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
25. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
26. 「OK」をクリックします。
27. 「保存」をクリックします。
28. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「CongnosX_GW2」をクリックします。
29. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
30. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
31. 「OK」をクリックします。
32. 「保存」をクリックします。
33. 「サーバー」 > 「サーバー・タイプ」 > 「WebSphere Application Servers」 > 「WebSphere_Portal_PortalNode2」をクリックします。
34. 「コンテナ設定値 (Container Settings)」 > 「セッション管理」 > 「タイムアウトの設定」をクリックします。
35. 所定のタイムアウト値を分単位で入力します。
36. 「OK」をクリックします。
37. 「保存」をクリックします。
Cognos のアイドル・タイムアウトを設定します。
38. root ユーザーとして、標準環境の場合は分析サーバーに、高可用性環境の場合は分析サーバー 1 と分析サーバー 2 の両方にログオンします。
39. /opt/IBM/cognos/c10_64/bin64/cogconfig.sh を実行します
40. 「セキュリティ」 > 「認証」をクリックします。
41. 「アイドル・タイムアウト (秒)」に、希望するタイムアウト値 (秒単位) を指定します。
42. 「ファイル」 > 「保存」をクリックします。
43. 高可用性環境の 2 番目の分析サーバーについて、上の手順を繰り返します。
サーバーを再始動します。
44. プラットフォーム制御ツールを使用して、アプリケーションおよび分析用のコンポーネントを停止した後、再始動します。

第 9 章 データの表示、フィルタリング、および分析

IBM Intelligent Operations Center の状況ビューおよび操作ビューを使用して、データをマップまたはリストに表示します。フィルター基準を設定して、表示されるデータを決定することができます。レポートでデータを分析するか、または KPI を表示するかデータのホット・スポットを分析することでデータを分析します。「マイ・アクティビティ」ウィンドウでは、標準操作手順を通じて自分に割り当てられたアクティビティを管理できます。

IBM Intelligent Operations Center は、ポータル・テクノロジーを使用する Web ベースのソリューションです。このソリューションには、サポートされるいずれかの Web ブラウザーを使用してアクセスできます。

関連情報:



IBM Intelligent Operations Center でサポートされるブラウザ

サンプル・ユーザー・ビュー

IBM Intelligent Operations Center には、監督者、オペレーター、およびエグゼクティブ・ユーザー向けに操作および状況のサンプル・ビューが用意されています。これらのビューを使用すると、必要な情報にアクセスし、必要に応じてイベントに対応することができます。管理ビューもあります。

次の表に示すメニューは、すべてのビューの上部付近に表示されます。

表 54. すべてのビューに表示されるメニュー

メニュー	説明
通知	「通知」ウィンドウには、通知およびその詳細についての動的リストが表示されます。
マイ・アクティビティ	「マイ・アクティビティ」ウィンドウには、標準操作手順のアクティブ・インスタンスに関連付けられたアクティビティの動的リストが表示されます。
連絡先	「連絡先」ウィンドウを使用すると、カテゴリ別に分類された連絡先のリストを表示することができます。連絡したい相手に基づいたカテゴリに連絡先を分類できます。例えば、一般的な作業連絡先用にカテゴリを設定し、プロジェクト作業連絡先用に別のカテゴリを設定することができます。ソリューション内でインスタント・メッセージを送信したり、自分のオンライン状況、連絡先、またはグループを変更したりできます。
追加のアクション	「追加のアクション」はコンテキスト・メニューです。表示されるオプションは、フォーカスがあるパネルに関連しています。

表 54. すべてのビューに表示されるメニュー (続き)

メニュー	説明
ヘルプ	「ヘルプ」メニューは疑問符アイコンで表されます。これは、ローカル側の製品資料へのリンクが含まれたコンテキスト・メニューです。このリンクは、ビューに現在表示されているパネルおよびメニュー・オプションに関連しています。このメニューには、オンラインの完全な製品資料へのリンクも含まれており、「オンラインの詳細ヘルプ」というラベルが付いています。

以下のトピックで、それぞれのビューに表示されるパネルについての概要を説明します。

関連タスク:

193 ページの『ページの作成またはカスタマイズ』

管理者は IBM Intelligent Operations Center に組み込む新規ページを作成し、それらのページに表示するコンテンツを指定することができます。各ページに組み込むコンテンツの外観およびレイアウトをカスタマイズできます。

マップでの操作

操作ビューを使用すると、ロケーションに関連付けられたデータ更新を常に把握し、その概要を得ることができます。各運用ビュー (operations view)は、独立したエレメントで構成される対話式 Web ページであり、これらのエレメントが互いに連携して、ユーザー向けの包括的な情報や対話を実現します。

このビューに表示されるデータは、ユーザーに割り当てられたアクセス権によって異なります。組織内のユーザー・グループには、権限セットが割り当てられています。グループのメンバーは、各自のジョブの役割に適したデータのみを見ることができます。

メニュー・バーの上部にある「市全域」メニューから、必要なビューを選択します。ユーザーが使用できるビューは、そのユーザーに割り当てられたアクセス権によって異なります。各ユーザー・グループは、そのグループに関連付けられたジョブの役割に適したページのみを見ることができます。用意されている操作ビューの概要を次の表に示します。

表 55. 操作ビュー

ビュー	説明
スーパーバイザー: 操作	「スーパーバイザー: 操作」ビューを使用して、現在のデータの概要を得ることができます。「スーパーバイザー: 操作」ビューは、現在のデータをモニターし、将来の問題を予測する監督者および管理者を対象としています。
オペレーター: 操作	「オペレーター: 操作」ビューを使用して、現在のデータ項目とそのロケーションを常時把握することができます。「オペレーター: 操作」ビューは、データのモニターとその対応を行うオペレーター、管理者などユーザーを対象としています。
エグゼクティブ: 操作	「エグゼクティブ: 操作」を使用して、現在のデータをまとめて表示することができます。「エグゼクティブ: 操作」を使用すると、組織間にまたがって責任を持つユーザーが、データとロケーションに関する変更を管理し、変更に対応できるようになります。

操作ビューには、以下のパネルが含まれています。

「フィルター」パネル

該当する操作ビューで、「フィルター」パネルを使用して、「内容」パネル内に表示されるデータを定義します。

「内容」パネル

運用ビュー (operations view)の「内容」パネルで、地理情報マップ、ロケーション・マップ、またはリストのいずれかの形式のデータを表示できます。

「サポート内容」パネル

「サポート内容」パネルでは、イベントのレポートをグラフ、表、または円グラフで表示できます。

KPI 付きの状況

状況ビューでは、主要なデータに重点を置いた重要業績評価指標 (KPI) をまとめて表示することができます。ユーザーは、組織の業績の主要な領域に関して、状況の変更をモニターおよび管理し、その変更に対応することができます。

このビューで使用可能な KPI は、ユーザーに割り当てられたアクセス権によって異なります。組織内のユーザー・グループには、権限セットが割り当てられています。グループのメンバーは、各自のジョブに適した KPI のみを見ることができます。

メニュー・バーの上部にある「市全域」メニューから、必要なビューを選択します。ユーザーが使用できるビューは、そのユーザーに割り当てられたアクセス権によって異なります。各ユーザー・グループは、そのグループに関連付けられたジョブの役割に適したページのみを見ることができます。用意されている状況ビューの概要を次の表に示します。

表 56. 状況ビュー

ビュー	説明
スーパーバイザー: 状況	監督している組織について、選択した KPI の状況を確認するには、「スーパーバイザー: 状況」ビューを使用します。「スーパーバイザー: 状況」ビューは、日常業務に関する KPI をモニターする監督者を対象としています。
エグゼクティブ: 状況	管理している単一組織または複数の組織の KPI をすべて表示するには、「エグゼクティブ: 状況」ビューを使用します。KPI の状況に関する最新の変更を確認し、必要に応じて業務を計画および指示することができます。「エグゼクティブ: 状況」ビューには、管理している組織全体の KPI の状況をまとめたエグゼクティブ・レベルのサマリーが表示されます。

状況ビューには、以下の要素が含まれています。

ナビゲーション・ツリー

状況ビューでは、ナビゲーション・パネルを使用して「内容」パネルに表示されるデータを定義します。

「内容」パネル

状況ビューの「内容」パネルでは、上位の KPI を表示することも、必要に応じてドリルダウンして基礎となる KPI を表示することもできます。

KPI 付きのエリア状況

1.6.0.1

1.6.0.2

特定の名前付きエリアの主要なデータを強調表示する重要業績評価指標 (KPI) のビューを取得するには、エリア状況ビューを使用します。ユーザーは、マップの特定エリアにおける組織の業績に関して、状況の変更をモニターおよび管理し、その変化に対応することができます。

このビューで使用可能な KPI は、ユーザーに割り当てられたアクセス権、および選択する名前付きエリアによって異なります。組織内のユーザー・グループには、権限セットが割り当てられています。グループのメンバーは、各自のジョブに適した KPI のみを見ることができます。

メニュー・バーの上部にある「市全域」メニューから、必要なビューを選択します。ユーザーが使用できるビューは、そのユーザーに割り当てられたアクセス権によって異なります。各ユーザー・グループは、そのグループに関連付けられたジョブの役割に適したページのみを見ることができます。用意されているサンプルのエリア状況ビューの概要を次の表に示します。

表 57. エリア状況ビュー

ビュー	説明
監督者: エリア状況	監督しているエリアにおける組織について、選択した KPI の状況を確認するには、「監督者: エリア状況」ビューを使用します。「監督者: エリア状況」ビューは、特定エリアの日常業務に関連する KPI をモニターする監督者を対象としています。
エグゼクティブ: エリア状況	管理している組織とエリアに関する KPI を確認するには、「エグゼクティブ: エリア状況」ビューを使用します。KPI の状況に関する最新の変更を確認し、必要に応じて業務を計画および指示することができます。「エグゼクティブ: エリア状況」ビューには、管理している組織全体とエリアの KPI の状況をまとめたエグゼクティブ・レベルのサマリーが表示されます。

エリア状況ビューには、以下の要素が含まれています。

マップおよびリストのパネル

エリア状況ビューでは、マップおよびリストのパネルを使用して、「内容」パネルに表示されるデータを定義します。「マップ」または「リスト」のタブを使用して、焦点を当てる名前付きエリアを選択できます。選択した名前付きエリアにより、「内容」パネルに表示されるデータが定義されます。

「内容」パネル

状況ビューの「内容」パネルでは、上位の KPI を表示することも、必要に応じてドリルダウンして基礎となる KPI を表示することもできます。

マップ

「マップおよびリスト」パネルのトップにある「名前付きエリア・データ・ソースの選択」フィールドで、リストから 1 つ以上のデータ・ソースを選択します。すべてのデータ・ソースのすべての名前付きエリアがマップに表示されます。関連する KPI を「内容」パネルに表示するには、マップの名前付きエリアの形状を強調表示します。

リスト

「マップおよびリスト」パネルのトップにある「名前付きエリア・データ・ソースの選択」フィールドで、リストから 1 つ以上のデータ・ソースを選択します。選択されたすべてのデータ・ソースのすべての名前付きエリアがリストに表示されます。「データ・ソースの表示」フィールドでは、特定のデータ・ソースを選択して、リストに表示されるそのデータ・ソースに関連する名前付きエリアのみを表示することができます。関連する KPI を「内容」パネルに表示するには、表の名前付きエリア行をクリックします。

マップおよびリストのタブに関する一般情報については、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。KPI の表示について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

Administrator 名前付きエリアの KPI の構成について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連概念:

420 ページの『マップおよびリスト上のデータの表示』

運用ビュー (operations view) の「内容」パネルで、地理情報マップ、ロケーション・マップ、またはリストのいずれかの形式のデータを表示できます。

437 ページの『KPI を介した状況のモニター』

状況ビューでは、重要業績評価指標 (KPI) の状況を要約形式または詳細形式で表示することができます。

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されます。

113 ページの『データ・ソースの構成』

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

管理ビューと構成ビュー

管理ビューを使用して、IBM Intelligent Operations Center を管理および構成します。

ソリューション管理

「ソリューション管理」ビューでは、製品バージョン詳細の表示、管理コンソールへのアクセス、システム検査チェックの実行、およびシステム・プロパティの管理を行うことができます。コンポーネントを構成することもできます。

以下のコンポーネントを構成できます。

- データ・ソース
- 「フィルター」パネル
- 地理情報マップ
- 重要業績評価指標
- ロケーション・マップ
- 標準操作手順

「ソリューション管理」ビューにアクセスするには、ビューの上部にある「Administration」メニューで「ソリューション管理」をクリックします。

ポータル管理

「ポータル管理」ビューを使用すると、IBM Intelligent Operations Center インターフェースのコンテンツを管理、保守、操作したり、インターフェースの各種機能にアクセスできるユーザーを割り当てたりできます。

「ポータル管理」ビューにアクセスするには、ビューの上部にある「**Administration**」メニューで「ポータル管理」を選択します。

関連概念:

101 ページの『第 3 章 ソリューションの保護』

IBM Intelligent Operations Center は不可欠な操作の中核を成しているため、このソリューション内のセキュリティは重要です。セキュリティを確保するためには、デフォルト設定を把握していることと、ソリューションのユーザーを管理して正しいレベルのアクセス権限をすべてのユーザーに付与することが重要です。

193 ページの『ユーザー・インターフェースのカスタマイズ』

IBM Intelligent Operations Center ユーザー・インターフェースの要素は、操作に合わせてカスタマイズできます。

マップおよびリスト上のデータの表示

運用ビュー (operations view) の「内容」パネルで、地理情報マップ、ロケーション・マップ、またはリストのいずれかの形式のデータを表示できます。

注: 地理空間情報マップ上では、世界表示アイコンは『マップの制御』トピックの説明に従って機能します。ロケーション・マップ上では、世界表示アイコンをクリックすると、ロケーション・マップのデフォルト・ビューが表示されます。

関連概念:

8 ページの『ユーザーのための新機能』

IBM Intelligent Operations Center 1.6 では、新しい「フィルター」パネルを使用して、マップまたはレポートに表示されるデータをフィルタリングできます。

マップの制御

マウスまたはキーボードを使用して、マップ内でカーソルを移動できます。

マップの上部にあるコントロール

マップの上部には、以下のコントロールがあります。

- パン矢印 (上、下、左、右)
- ズームイン
- 世界表示 (最大の範囲までズームアウト)
- ズームアウト

マップ内を移動するためのコントロール

マップ内を移動するには、以下のコントロールを使用できます。

- マウスを使用してマップをクリックし、ドラッグする
- 上方向パン矢印か、キーボードの上矢印キーを押して北へ移動する

- 下方向パン矢印か、キーボードの下矢印キーを押して南へ移動する
- 右方向パン矢印か、キーボードの右矢印キーを押して東へ移動する
- 左方向パン矢印か、キーボードの左矢印キーを押して西へ移動する

マップの縮尺を拡大または縮小するためのズーム・コントロール

マップのズームインまたはズームアウトを行うには、以下のコントロールを使用できます。

- マップの中心にズームインするには「+」マップ・アイコンをクリックし、マップの中心からズームアウトするには「-」マップ・アイコンをクリックする
- マップの中心に合わせて、選択した位置にズームインするには、その位置をダブルクリックする
- ズームアウトを最大にして世界表示にするには、「世界表示」アイコンをクリックする
- ズームインするには、キーボードの + キーを押す
- ズームアウトするには、キーボードの - キーを押す
- ズームインの対象領域を囲む長方形を描くには、Shift キーを押しながらマウスを使用する

関連タスク:

134 ページの『マップの中心およびズームの設定』

管理者は、ソリューションの地理情報基本マップの中心点座標およびズーム・レベルを設定できます。

「マップ」タブ

「マップ」タブを使用して、地理情報マップに表示される現在の情報を表示します。マップ上でマークが付いているデータ項目から情報を取得できます。「フィルター」パネルでデータ・ソースを選択し、ソリューションで使用可能なマップのリストから基本マップを選択します。

「マップ」タブでは、データ項目は、マップ上のそれぞれ適切な位置に関連付けられて、ビジュアルに表示されます。「マップ」タブに表示される情報を「ロケーション・マップ」タブおよび「リスト」タブの情報と併せて使用することで、問題、リソース、位置パターン、競合、および相乗効果を特定できます。急速に変化する状況を容易に把握し、関連するデータ・ソースおよびデータ・フィールドにアクセスすることができます。

「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブは、表示されるデータ項目に関する入力情報および変更が共有されるように、相互にリンクされます。「フィルター」パネルでフィルターを設定して、必要なデータ項目を表示できます。この設定は、「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブに表示されるデータ項目を制御します。「リスト」タブで、選択されたデータ・ソースの名前、およびそのすべての現在のデータ項目とプロパティのリストを確認できます。

「マップ」タブの要素

「マップ」タブには、次の表に示す 2 つの対話式インターフェース・要素があります。

表 58. 「マップ」のインターフェース・要素

インターフェース・要素	説明
地理情報マップ	選択された基本マップが表示され、データ項目および詳細なロケーション・マップが存在する場所を示すマーカーが付けられます。

表 58. 「マップ」のインターフェース・エレメント (続き)

インターフェース・エレメント	説明
「追加のアクション」メニュー	<p>マップに関連付けられているアクションのメニュー:</p> <p>新規項目 データ項目をマップの特定位置に追加します。データ項目の追加については、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。</p> <p>地図をリセット ソリューションのデフォルト基本マップに戻ります。マップをリセットして、中心点およびズーム・レベルをデフォルト設定でオーバーライドします。</p> <p>1.6.0.2 CSV のアップロード 選択したデータ・ソースにデータを提供する CSV ファイルをアップロードします。</p> <p>基本マップ 別の基本マップを表示します。使用可能なマップのリストから必要なマップを選択します。</p>

注: 初めてシステムにログオンすると、マップの中心点およびズーム・レベルは、デフォルトに設定されます。それ以降にシステムにログオンすると、中心点およびズーム・レベルは、直前のセッションから取得されます。デフォルトのマップ設定が管理者によって変更された場合は、マップをリセットして、新規のデフォルト設定を表示します。

マップは、そのマップ上の位置に関するデータ項目を使用して更新されますが、これは「フィルター」パネルでの設定に基づきます。「フィルター」パネル上の設定により、どのデータ・ソースを使用し、どのデータ項目を表示するかを制御します。

より詳細なロケーション・マップが使用可能な場合は、そのロケーションがマップ上に示されます。ロケーション・マップは「ロケーション・マップ」タブで表示できます。

注: **Administrator** データ項目には、「マップ」タブに表示される緯度と経度の座標が必要です。データ項目にエリア名がある場合、エリア名は「ロケーション・マップ」タブにのみ表示されます。

マップ・マーカー

マップ上でのデータ項目やロケーション・マップの位置は、次の表に示すマーカーで表されます。

表 59. マップ・マーカー

マーカーのタイプ	説明
シングルポイント・アイコン	アイコン・マーカーは、データ項目に関連付けられているマップ上のポイント・ロケーションを示しており、各データ・ソースを表す固有のアイコン・ピクチャーを使用しています。
ポリゴン	マップ上の、データ項目に関連付けられたエリアを示す形状です。
線	マップ上の、データ項目に関連付けられた線を示す線分または線のセットです。
マルチポイント	単一のデータ項目をマップ上の複数のポイントに関連付けることができます。マルチポイントのデータ項目は、同じマーカーを複数のロケーションで使用して表されます。これらのマーカーの 1 つを選択すると、そのデータ項目に関連付けられている他のアイコンも同時に強調表示されます。

表 59. マップ・マーカー (続き)

マーカーのタイプ	説明
ロケーション・マップ	ロケーション・マップのマーカーは、マップ上のその位置で、1 つ以上のロケーション・マップから成るコレクションが「ロケーション・マップ」タブで使用可能であることを示します。

単一のデータ項目の詳細を表示するには、マップ上のマーカーをクリックします。最初に、プレビュー・カードには最小プロパティと重要プロパティが表示されます。データ・ソースによっては、カードをクリックして、項目に関連付けられたその他の情報およびアクションを表示できます。データ・ソースの設計で更新が許可されている場合は、データ項目を更新できます。

ロケーション・マップのコレクションの詳細を表示するには、マップ上のマーカーをクリックします。最初はプレビュー・カードにロケーション・マップの数と、それらのマップに関連付けられている項目の数が表示されます。「ロケーション・マップ」タブでマップを表示するには、「追加のアクション」をクリックして、マップ名をクリックします。

Administrator 管理アクセス権限がある場合は、「ソリューション管理」ビューに移動して、このタブに表示される内容を構成できます。

関連概念:

133 ページの『地理情報マップの構成』

「ソリューション管理」ビューで、ユーザーが使用可能なマップ、マップの初期中心点、およびマップのズーム・レベルを構成できます。

ポイント・データ項目の追加

マップ上のポイントに関連するデータ項目を作成します。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

このタスクについて

新規データ項目のデータ・ソースとマップ上の位置を選択します。次に、データ・ソースおよびマップに追加する項目に該当するプロパティの値を入力します。

注: 現在のフィルター・パネル設定の対象ではないデータ項目を追加できます。その場合、項目はソリューションに追加されますが、その項目が含まれるようにフィルター・パネルが変更されない限り、項目はマップまたはリスト上に表示されません。

手順

1. 操作ビューで、ビューの上部にあるアクション・バーの「追加のアクション」 > 「新規項目」をクリックします。「新規項目」ウィンドウが表示されます。
2. データ項目・タイプのドロップダウン・リストからデータ・ソースを選択して、関連付けられた図形またはマーカーをすべて表示します。選択可能なデータ・ソースは、特定の「フィルター」パネルに関連付けられているデータ・ソースです。
3. 選択した図形タイプまたはマーカーを、新規データ項目を配置するマップ上のロケーションまでドラッグします。「新規項目の追加」ウィンドウが表示されます。**1.6.0.2** 表示された使用可能な図形からマーカー・タイプを選択します。複数のポイントをマップに描画する場合は、すべてのポイントの描画が終了した時点で「描画完了 (Done Drawing)」をクリックします。

4. 該当するフィールドにデータ項目のプロパティを入力します。アスタリスクが付いているプロパティは、新規項目を正常に作成するために必要です。アスタリスクが付いていないプロパティは、オプションです。

ロケーション・フィールドには、単語「ポイント」と、マップ上の位置の緯度と経度の座標が自動的に必ず入力されます。データ・ソース構成によっては、新規データ項目のその他のプロパティも自動的に入力されることがあります。**1.6.0.2** ソリューションがジオコーディング・プロバイダーを使用して構成されている場合は、ロケーション・フィールドに町名を入力できます。

5. マップに項目を追加するには、「保存」をクリックします。

タスクの結果

新規項目のデータ・ソースを表すアイコンがマップ上の位置に表示されます。新規項目の詳細は、「マップ」から開くプレビュー・カード上、または「リスト」タブ上で表示できます。

注:

1.6.0.1 **1.6.0.2** 地理空間情報マップ上のエリアまたは線で表される新規データ項目を作成するには、トピックの最後に示すリンクを参照してください。

線、またはその他のマルチポイント形式によって表されるデータ項目をマップに追加できるのは、ポーリングの結果としてデータ・ソースから受け取った場合のみです。ロケーション・マップ・マーカは、ロケーション・マップ構成ツールでの構成結果として地理空間情報マップに追加することができます。

関連タスク:

1.6.0.1 **1.6.0.2** 『エリア・データ項目または線データ項目の追加』

地理空間情報マップ上のあるエリアと関連付けられていて、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成できます。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

エリア・データ項目または線データ項目の追加

1.6.0.1 **1.6.0.2**

地理空間情報マップ上のあるエリアと関連付けられていて、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成できます。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

このタスクについて

データ・ソースおよびマップ上の開始位置を選択して、新規データ項目に関連付けます。次に、マップ上のエリアを表す形状を描き、データ・ソースの項目に関連するプロパティの値を入力します。

注: 現在の「フィルター」パネル設定の対象ではないデータ項目を追加できます。その場合、項目はソリューションに追加されますが、その項目が含まれるように「フィルター」パネル設定が変更されない限り、項目はマップまたはリスト上に表示されません。

手順

1. 操作ビューで、ビューの上部にあるアクション・バーの「追加のアクション」 > 「新規項目」をクリックします。「新規項目」ウィンドウが表示されます。
2. データ項目・タイプのドロップダウン・リストからデータ・ソースを選択して、関連付けられた図形またはマーカをすべて表示します。選択可能なデータ・ソースは、特定の「フィルター」パネルに関連付けられているデータ・ソースです。

3. 選択した図形タイプまたはマーカーを、新規データ項目を配置するマップ上のロケーションまでドラッグします。
4. マップ上に描画するエリアまたは線に関連付けられているデータ項目を作成できます。その結果として、このデータ項目はデータ・ソースに追加されます。
 - マップ上にエリアを描くために、マップ上で必要な開始位置をクリックしてから、ポリゴンのそれぞれの角をクリックします。ポリゴンの描画を終了するには、ダブルクリックします。新規エリアがマップに表示されます。
 - **1.6.0.2** 線、マルチライン、またはマルチポリゴンを描画する場合は、必須の開始位置をマップ上でクリックし、表示される使用可能な図形から描画ツールを選択します。線の描画を完了するには、ダブルクリックします。マルチラインまたはマルチポリゴンをマップに描画する場合は、描画が終了した時点で「**描画完了 (Done Drawing)**」をクリックします。

「新規項目の追加」ウィンドウが表示されます。

5. 該当するフィールドにデータ項目のプロパティを入力します。アスタリスクが付いているプロパティは、新規項目を正常に作成するために必要です。アスタリスクが付いていないプロパティは、オプションです。

ロケーション・フィールドには、単語「ポリゴン」と、マップ上のエリアの形状を表す位置の緯度と経度の座標が自動的に必ず入力されます。データ・ソース構成によっては、新規データ項目のその他のプロパティも自動的に入力されることがあります。

6. マップに項目を追加するには、「**保存**」をクリックします。

タスクの結果

新規項目のエリアを表す形状がマップに表示されます。「マップ」タブから、あるいは「リスト」タブの行から、プレビュー・カードに新規項目の詳細を表示できます。データ・ソースが境界のデータとして構成されている場合、新規エリア名は、フィルター・パネルの境界ペインで選択対象になります。

注: 地理空間情報マップ上のポイント位置によって表される新規データ項目を作成するには、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。線またはその他のマルチポイント形状によって表されるデータ項目をマップに追加できるのは、ポーリングの結果としてデータ・ソースから受け取った場合のみです。ロケーション・マップ・マーカーは、ロケーション・マップ構成ツールでの構成結果として地理空間情報マップに追加されます。

関連タスク:

423 ページの『ポイント・データ項目の追加』

マップ上のポイントに関連するデータ項目を作成します。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

KML オーバーレイの表示

1.6.0.2

管理者がマップに対して 1 つ以上の KML オーバーレイを構成すると、フィルター・パネルに「**マップ・オーバーレイ**」ペインが表示されます。KML オーバーレイには、マップに表示できるデータ項目に関する追加の情報が含まれています (ロケーションやアイコンなど)。

始める前に

KML オーバーレイを通じてマップに表示されるデータ項目を更新するには、管理者が KML オーバーレイ・ファイルを更新する必要があります。

このタスクについて

例えば、KML オーバーレイに都市の配管マップが含まれているとします。配管マップの KML オーバーレイを選択すると、そのオーバーレイはマップの一部であるかのようにマップ上に表示されます。

手順

- KML オーバーレイをマップに表示するには、フィルター・パネルの「マップ・オーバーレイ」ペインで、表示する KML オーバーレイを選択します。
- KML オーバーレイ・ファイルに含まれているデータが管理者によって更新された場合、更新内容を表示するには、ブラウザーを最新表示します。

関連タスク:

136 ページの『KML オーバーレイの追加』

KML ファイルには、IBM Intelligent Operations Center マップに追加できるレイヤーおよび機能のコレクションが含まれています。XML 形式のデータがある場合は、KML スキーマを使用して、データ・ソースなしでマップに機能を追加できます。管理者は、KML オーバーレイを基本マップに追加できます。

「ロケーション・マップ」タブ

「ロケーション・マップ」タブを使用して、特定のロケーションの状態に関する現在の情報を取得します。ロケーション・マップ上でマークが付いているデータ項目から情報を取得できます。「フィルター」パネルでデータ・ソースを選択し、ソリューションで使用可能なマップのリストからロケーション・マップを選択します。IBM Intelligent Operations Center のロケーション・マップは、対話用に事前に定義されているエリア (大規模なスポーツ・スタジアムの座席エリアなど) を含むマップ、ダイアグラムまたは計画です。

「ロケーション・マップ」タブでは、ロケーション・マップ上の該当するエリアに関連付けられたデータ項目を視覚的に確認することができます。「ロケーション・マップ」タブに表示される情報を「マップ」タブおよび「リスト」タブの情報と併せて使用することで、問題、リソース、位置パターン、競合、および相乗効果を特定できます。該当するデータ・ソースおよびデータ・フィールドにアクセスすることで、状態の素早い変化に簡単に対応できます。

「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブは、表示されるデータ項目に関する入力情報および変更が共有されるように、相互にリンクされます。「フィルター」パネルでフィルターを設定して、必要なデータ項目を表示できます。この設定は、「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブに表示されるデータ項目を制御します。「リスト」タブで、選択されたデータ・ソースの名前、およびそのすべての現在のデータ項目とプロパティのリストを確認できます。

「ロケーション・マップ」タブの要素

「ロケーション・マップ」タブには、以下の表に示す 3 つの対話式インターフェース・要素があります。

表 60. 「ロケーション・マップ」のインターフェース・要素

インターフェース・要素	説明
マップ・メニュー	コレクション別およびカテゴリ別に編成された使用可能なロケーション・マップのアルファベット順リスト。
ロケーション・マップ	選択されたロケーション・マップ。ロケーション・マップは、複数の対話式エリアに分割されます。各エリアには、データ項目が存在する場所を示すマーカーが含まれます。

表 60. 「ロケーション・マップ」のインターフェース・エレメント (続き)

インターフェース・エレメント	説明
「追加のアクション」メニュー	マップに関連付けられているアクションのメニュー: 新規項目 データ項目をマップの特定位置に追加します。データ項目の追加について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

マップ・メニューで、1つのコレクションは1つ以上のロケーション・マップから成り立っていて、1つのカテゴリは1つ以上のマップ・コレクションから成り立っています。コレクションは、通常、特定の場所または建物を表します。また、コレクションには、地理情報マップ上に表示される位置が割り当てられます。探しているコレクションを見つけやすくするために、カテゴリには適切な名前が割り当てられます。

マップは、マップ上のエリアに関連付けられたデータ項目により更新され、「フィルター」パネル上で選択した設定の影響を受けます。「フィルター」パネル上の設定により、どのデータ・ソースを使用し、どのデータ項目を表示するかを制御します。

注: **Administrator** データ項目には、「マップ」タブに表示される緯度と経度の座標が必要です。データ項目にエリア名がある場合、エリア名は「ロケーション・マップ」タブにのみ表示されます。

ロケーション・マップのマーカー

ロケーション・マップ上のデータ項目の位置を表すマーカーのタイプは以下のとおりです。

表 61. ロケーション・マップのマーカー

マーカーのタイプ	説明
アイコン	エリア内の1つのデータ項目のオカレンスを示します。各データ・ソースを表す固有のアイコンが使用されます。
クラスター	同じエリア内の複数のデータ項目のオカレンスが、そのエリア内のデータ項目の数を表す数値とともに示されます。

単一のデータ項目の詳細を表示するには、マップ上のマーカーをクリックします。最初に、プレビュー・カードには最小プロパティと重要プロパティが表示されます。データ・ソースによっては、カードをクリックして、項目に関連付けられたその他の情報およびアクションを表示できます。データ・ソースの設計で更新が許可されている場合は、データ項目を更新できます。

同じエリア内に複数のデータ項目が存在する場合、それらの項目は1つのクラスター・マーカーで表されます。このマーカーをクリックすると、データ項目の名前が表示されます。その後、個々のデータ項目をクリックして、その項目の詳細を表示できます。クラスター・マーカーを強調表示すると、色が変更されません。

Administrator 管理アクセス権限がある場合は、「ソリューション管理」ビューに移動して、このタブに表示される内容を構成できます。

関連概念:

149 ページの『ロケーション・マップの構成』

「システム管理」ビューで、「ロケーション・マップ」タブ上に表示されるロケーション・マップをカスタ

マイズできます。「ロケーション・マップ」タブは、操作ビュー上の「内容」パネルの一部です。

ロケーション・マップへのデータ項目の追加

ロケーション・マップ上のエリアと関連付けられており、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成することができます。データ項目は、「ロケーション・マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

このタスクについて

マップ上のエリアとデータ・ソースを選択して、新規データ項目に関連付けます。次に、データ・ソースに該当するプロパティの詳細およびマップに追加する項目の詳細を入力します。

注: 現在のフィルター・パネル選択の対象ではないデータ項目を追加できます。その場合、項目はソリューションに追加されますが、項目はマップまたはリスト上に表示されません。項目を表示するには、フィルター・パネル選択を変更してその項目を含めます。

手順

1. 「追加アクション」 > 「新規項目」をクリックします。「新規項目」ウィンドウが表示されます。
2. ロケーション・マップに使用可能なデータ・ソースを表すパレットから、マップ・マーカースを選択します。選択できるデータ・ソースは、ロケーション・マップに表示されるよう構成されているデータ・ソースです。
3. マップ上で、新規データ項目に指定したい位置にマーカースをドラッグします。「新規項目の追加」ウィンドウが表示されます。
4. 該当するフィールドにデータ項目のプロパティを入力します。アスタリスクが付いているプロパティは、新規項目を正常に作成するために必須です。アスタリスクが付いていないプロパティは、オプションです。ロケーション・フィールドには、地理空間情報マップ上の位置の緯度と経度と一緒にロケーション・マップ・コレクションが自動的に入力されます。エリア名フィールドには、ロケーション・マップ上のエリアの名前が自動的に入力されます。データ・ソースによっては、新規データ項目のその他のプロパティも自動的に入力されることがあります。
5. 「保存」をクリックして項目を保存するか、「閉じる」をクリックして項目の追加を中止します。

タスクの結果

新規項目のデータ・ソースを表すアイコンがロケーション・マップ上のエリア内に表示されます。新規項目の詳細は、ロケーション・マップから開くプレビュー・カード上、または「リスト」タブ上に表示できます。

「リスト」タブ

「リスト」タブを使用して、IBM Intelligent Operations Center 内のデータ項目を表示、モニター、および管理します。

「リスト」タブには、データ項目とその詳細の対話式リストが含まれています。「フィルター」パネルの設定と一致するすべてのデータ項目が「リスト」タブ上に表示されます。

「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブは、表示されるデータ項目に関する入力情報および変更が共有されるように、相互にリンクされます。「フィルター」パネルでフィルターを設定して、必要なデータ項目を表示できます。この設定は、「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブに表示されるデータ項目を制御します。「リスト」タブで、選択されたデータ・ソースの名前、およびそのすべての現在のデータ項目とプロパティのリストを確認できます。

一度に 1 つのデータ・ソースのデータ項目を表示することができます。表示するデータ・ソースは、「リスト」タブの上部にあるデータ・ソースのドロップダウン・リストから選択できます。

リストは、項目を記述する最小プロパティと重要プロパティの概要を示します。各列の幅やソート順を調整することができます。

単一のデータ項目の詳細を表示するには、行をクリックします。最初に、プレビュー・カードには最小プロパティと重要プロパティが表示されます。データ・ソースによっては、カードをクリックして、項目に関連付けられたその他の情報およびアクションを表示できます。項目が地理情報マップ上に存在する場合は、「追加のアクション」 > 「マップ上で強調表示」をクリックして、マップ上の項目を強調表示できます。データ・ソースの構成で更新が許可されている場合は、データ項目を更新できます。

地理空間情報マップ上の 1 つ以上の項目をリストから強調表示するには、リストでそれらの項目を選択し、上部のメニュー・バーで「追加のアクション」 > 「マップ上で強調表示」をクリックします。

このリストは定期的に最新表示され、設定したフィルターに応じた更新内容が表示されます。

リストへのデータ項目の追加

「リスト」タブ上で、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成できます。データ項目は、リストに追加され、データ・ソースによっては、同時にマップに追加することもできます。

手順

1. 操作ビューで、ビューの上部にあるアクション・バーの「追加のアクション」 > 「新規項目」をクリックします。「新規項目の追加」ウィンドウが表示されます。データ項目のプロパティには、「リスト」タブで選択されているデータ・ソースが反映されます。
2. データ項目のプロパティの該当するフィールド値を入力します。アスタリスクが付いているプロパティは、新規項目を正常に作成するために必要です。アスタリスクが付いていないプロパティは、オプションです。データ・ソース構成に応じて、一部のフィールドは自動的に入力されます。データ項目をマップ上に表示するには、ロケーション・フィールドに入力する必要があります。WKT (事前割り当てテキスト) は、マップ上に位置の緯度と経度を入力するための必須形式です。
 - 地理空間情報マップ上にマップ・マーカで表される項目については、ロケーション・フィールドに、「ポイント」という単語と、そのポイントの座標を入力します。
 - ロケーション・マップ上にマップ・マーカで表される項目については、
 - ロケーション・フィールドに、単語「ポイント」と、地理空間情報マップの位置の座標を入力します。
 - エリア名フィールドに、ロケーション・マップ・エリアの名前を入力します。
 - **1.6.0.1** **1.6.0.2** 地理空間情報マップ上に形状で表される項目については、単語「ポリゴン」と、そのポリゴンを構成するポイントの座標を入力します。ポリゴンが正しく描画できるようにするためには、ポリゴンの最初と最後のポイントが同じでなければなりません。
3. 「保存」をクリックして項目を保存するか、「閉じる」をクリックして、項目の追加をキャンセルします。

タスクの結果

新規項目は、「リスト」タブに表示でき、また、データ項目に適切なプロパティが指定されている場合にはマップ・タブにも表示できます。

マップおよびリスト上のデータのフィルタリング

該当する操作ビューで、「フィルター」パネルを使用して、「内容」パネル内に表示されるデータを定義します。「内容」パネルには、「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブが含まれています。

「フィルター」パネルには、以下の定義済みペインがあります。

- 保存済みフィルター
- 日付と時刻
- 境界

「フィルター」パネルには、「フィルター」パネルに対して定義されたデータ・ソース・カテゴリーを表示する動的ペインもあります。

定義済みペインおよび動的ペインで、フィルター基準を適用して、「内容」パネル内に表示されるデータを定義できます。フィルター基準のセットを適用した後で、そのフィルター基準のセットに名前を付け、保存することができます。「保存済みフィルター」ペインで、保存されたフィルター基準のセットを表示したり、フィルター基準にアクセスしたりできます。現在のフィルター設定をクリアするには、「フィルター」パネルの下部近くにある「クリア」をクリックします。

1.6.0.2

マップでのデータ項目の表示

データ項目は、フィルター・パネルで選択した内容に従って、マップに表示されます。表示されるデータ項目の数が **MaxFeaturesToRenderOnMap** システム・プロパティで構成されている値を超えた場合、超過分のデータ項目は表示されません。一部のデータ項目が表示されないことを通知する警告メッセージが表示されます。

データ・ソースの選択をクリアした場合、そのデータ・ソースに属するデータ項目は引き続きマップにレンダリングされますが、これらのデータ項目は非表示になります。**MaxFeaturesToRenderOnMap** 値に従って、マップにレンダリングするデータ項目を評価する際、レンダリングされた非表示のデータ項目は評価に含まれます。したがって、現在選択されているフィルター基準に合致するデータ項目の数が **MaxFeaturesToRenderOnMap** 値より少なくても、一部のデータ項目がマップに表示されない場合があります。現在は選択されていないデータ・ソースが、マップにレンダリングするデータ項目の総数に含まれないようにするには、ビューを最新表示します。

現在選択されていないデータ・ソースのデータ項目がカウントされないようにする場合は、

RemoveFeaturesOnDataSourceDeselect システム・プロパティの値を **true** に設定します。

RemoveFeaturesOnDataSourceDeselect システム・プロパティの値を **true** に設定すると、マップをパンおよびズームするときに、パフォーマンスが向上することがあります。しかし、選択をクリアしたデータ・ソースを再選択するときには、パフォーマンスが低下することがあります。

関連タスク:

135 ページの『表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定』

マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。選択がクリアされたデータ・ソースのデータ項目が、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の両方にカウントされないようにすることができます。

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

フィルターの作成および保存

日付、時刻、場所、および構成されたデータ・ソースに基づいたフィルター基準を作成および保存できます。

このタスクについて

フィルターを作成するには、「フィルター」パネルの該当するペインで、選択基準を指定します。後で使用するためにフィルターを保存できます。

「フィルター」パネルのいずれかのペインで設定を変更するか、選択を行うたびに、「内容」パネル内のデータが更新されるまで、進行状況表示バーが表示されます。

手順

- フィルターを作成するには、以下のペインで適切な設定を指定します。
 - 日付と時刻
 - 境界
 - 1 つ以上のフィルター・ペイン
- 現在のフィルター設定を保存するには、以下のサブステップを実行します。
 1. 「フィルター」パネルの下部近くにある「保存」をクリックします。
 2. 「名前を付けて保存」ウィンドウで、「名前」にフィルターの名前を入力します。
 3. 以下のいずれかのオプションをクリックして、フィルターをプライベートにするかパブリックにするかを指定します。
 - プライベート (自分のみが使用可能)
 - パブリック (任意のユーザーが使用可能)
- 現在のフィルター設定をクリアするには、「フィルター」パネルの下部近くにある「クリア」をクリックします。

保存済みのフィルターまたはお気に入りの表示、適用、および削除

「保存済みフィルター」ペインまたは「お気に入り」ペインで、保存済みのフィルターを表示、適用、および削除することができます。

このタスクについて

インストールされている IBM Intelligent Operations Center のバージョンに応じて、保存済みのフィルターが「保存済みフィルター」ペインまたは「お気に入り」ペインに表示されます。各フィルターの横にあるアイコンは、フィルターがプライベート (自分のみが使用可能) かパブリック (任意のユーザーが使用可能) を示します。

手順

「フィルター」パネルで、**保存済みフィルター**または**お気に入り**をクリックします。次のオプションのいずれかを選択してください。

- 保存済みフィルターまたはお気に入りを適用するには、リストの名前をクリックして選択します。
- 保存済みフィルターまたはお気に入りを削除するには、「削除」アイコンをクリックします。

日付と時刻によるフィルタリング

「日付と時刻」ペイン内で、「内容」パネル内にデータを表示する対象の期間を定義します。

手順

1. 「「フィルター」パネル」で、「日付と時刻」をクリックします。
2. 「開始」の下で、期間の開始日時を定義します。
 - a. カレンダー・アイコンをクリックし、日付を選択します。
 - b. 「時刻」リストから、時刻を選択します。
3. 「終了」の下で、期間の終了日時を定義します。
 - a. カレンダー・アイコンをクリックし、日付を選択します。
 - b. 「時刻」リストから、時刻を選択します。
4. オプション: データを表示する対象の期間をさらに制限して、定義済みの休日または範囲のみにするには、「この期間のみ」リストから値を選択します。

境界によるフィルタリング

「境界」ペイン内で、「内容」パネル内にデータを表示する対象の境界を定義します。

このタスクについて

1.6.0.1 **1.6.0.2** データ・ソースが境界のデータとして構成されている場合は、「境界」ペインに表示されます。データ・ソースから受け取られるデータ項目で定義されている 1 つ以上の 名前付きエリアに境界を設定することができます。

手順

「境界」ペイン

- 「マップ」タブ上に設定されている現在のズーム・レベルおよびパンの位置に境界を設定するには、**1.6** **1.6.0.1** 「マップ上に現在表示されているエリア」または **1.6.0.2** 「表示されるマップ内のエリア」をクリックします。
- **1.6.0.1** **1.6.0.2** 境界を名前付きエリアに設定するには、以下のステップを実行します。
 1. **1.6.0.1** 「名前付きエリア」または **1.6.0.2** 「選択された境界内のエリア」をクリックします。
 2. 最初のリストである「境界エリア・タイプ」リストからデータ・ソースを選択します。
 3. 2 番目のリストである「境界エリア」リストから 1 つ以上の名前付きエリアを選択します。選択した名前付きエリアはマップで強調表示されます。

名前付きエリアの作成

1.6.0.1 **1.6.0.2**

マップ上で、名前付きエリア・タイプと定義されたデータ・ソースの名前付きエリアを描画することができます。

始める前に

113 ページの『データ・ソースの構成』セクションの説明に従って、名前付きエリア・タイプのデータ・ソースを作成します。次の点に注意してください。

- 「収集」タブで、データ・ソースの収集方法として「地理空間情報マップ用のユーザー・インターフェース・エントリー」を選択します。
- 「基本」タブで、「境界のデータ」に対して「はい」を選択します。

名前付きエリア・タイプのデータ・ソースが表示されるように、フィルター・パネルのペインを構成します。詳しくは、『130 ページの『「フィルター」パネルの構成』』セクションを参照してください。

このタスクについて

以下の手順では、名前付きエリアをマップ上で描画して作成する方法について説明します。マップ上に各名前付きエリア・ポリゴンを個別に描画する代わりに、多数の名前付きエリアを CSV ファイルで定義するか、または SQL を使用して定義することができます。その後に、CSV ファイルまたは SQL から名前付きエリアのデータを収集する名前付きエリア・タイプのデータ・ソースを作成します。SQL を使用した名前付きエリアの定義について詳しくは、『SQL を使用した名前付きエリアの定義』トピックを参照してください。

手順

1. ビューの上部にあるアクション・バーで、「追加のアクション」 > 「新規項目」をクリックします。
2. 名前付きエリアのデータ・ソースを表すアイコンを「新規項目」ウィンドウからマップヘドラッグし、名前付きエリアを描画します。
3. 名前付きエリア・データ項目のプロパティの該当するフィールドをダブルクリックし、値を入力します。
4. マップに名前付きエリア・データ項目を追加するために、「保存」をクリックします。

次のタスク

マップ上で、名前付きエリアに含まれているデータ項目を表示することができます。フィルター・パネルで、名前付きエリア内にあるデータ項目を表示するための境界を設定します。

1. 「名前付きエリア」をクリックします。
2. 最初のリストで、名前付きエリア・タイプのデータ・ソースを選択します。
3. 2 番目のリストで、作成した名前付きエリアを選択します。

関連タスク:

167 ページの『SQL を使用した名前付きエリアの定義』

多数の名前付きエリアを含んだ名前付きエリア・タイプのデータ・ソースを定義することができます。マップ上で各名前付きエリアのポリゴンを個別に描く代わりに、SQL 表を使用して名前付きエリア・ポリゴンを定義できます。その後に、データベースに接続するデータ・ソースを作成して、SQL 表から名前付きエリア・データを収集します。

424 ページの『エリア・データ項目または線データ項目の追加』

地理空間情報マップ上のあるエリアと関連付けられていて、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成できます。データ項目は、「マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

データ・ソースによるフィルタリング

フィルター・ペイン内で、「内容」パネルにデータを表示する対象のデータ・ソースを定義します。

手順

データを表示する対象のデータ・ソースごとに以下の手順を繰り返します。

1. 「「フィルター」パネル」で、「データ・ソース・グループ」をクリックします。
2. 必要なデータ・ソースの横にあるチェック・ボックスを選択します。
3. オプション: データ・ソースごとに、データ・ソースの構成で追加のフィルター基準が指定されている場合は、追加のフィルター基準を指定できます。
 - a. 「その他」をクリックします。「その他」ボタンは、追加のフィルター基準が使用可能である場合にのみ表示されます。
 - b. 「追加のフィルター」ウィンドウで、1 つ以上のフィルター・オプションのリストから、1 つ以上の値を選択します。1 つのフィルター・オプションのリストから複数の値を選択した場合、データ項目がフィルタリング後の結果に表示されるためには、そのデータ項目が、当該リストからここで選択された値のうち、1 つだけを満たしている必要があります。複数のフィルター・オプションのリストから複数の値を選択した場合、データ項目がフィルタリング後の結果に表示されるためには、そのデータ項目が、各リストからここで選択された値のうち、1 つ以上を満たしている必要があります。

タスクの結果

データ・ソースを最初に選択すると、ブラウザーには、フィルター基準を満たす最新のデータが表示されます。データ・ソース情報の初期照会の後に、ブラウザーは、自動最新表示間隔によって定義された間隔で、サーバーをバックグラウンドでポーリングします。ブラウザーは、ポーリングされたデータを使用して、新規作成、更新、または削除されたデータ・ソース・レコードによって、マップ、リスト、またはロケーション・マップを更新します。

自動最新表示間隔の設定

IBM Intelligent Operations Center 内で自動最新表示間隔を設定して、システムに到着した情報によってユーザー・インターフェースを最新表示する頻度を制御できます。これには、マップ、リスト、またはロケーション・マップに表示される情報が含まれます。この設定は、特に複数のユーザーが同時にアクティブである場合には、システム全体のパフォーマンスに影響します。そのため、自動最新表示機能は、必要な場合にのみアクティブにしてください。

始める前に

到着した最新のアクティビティを表示するためのアクティブな操作コンソールとしてブラウザーを使用している場合は、「フィルター」パネル内で期間の範囲 (例えば、前の週) を選択します。次に、以下の手順を実行して、自動最新表示間隔を、選択されたデータに基づいた必要な値に設定します。コントロール・ルーム内の大規模なモニター上に、単一のクライアント操作ビューを表示できます。

このタスクについて

表示される情報のソースに関する知識に基づいて、自動最新表示間隔を設定します。例えば、天候イベントが 1 時間に 1 回到着する場合、自動最新表示間隔を 5 分に設定すると、自動最新表示によって新規データが返されるのは、12 回の最新表示につき 1 回のみです。この場合、1 時間のうちの残りの 11 回の最新表示では、システム・リソースが無駄に使用されます。

システムとの対話操作で、ディスプレイ上のさまざまな情報をフィルタリングして基本的な計画および分析を実行するときには、通常、自動最新表示機能をオフにします。

注: 基本マップ上の項目を追加、更新、または削除した場合は、設定とは無関係に即時に最新表示が行われます。最新表示が行われるときに自動最新表示間隔タイマーが更新されるため、重複する最新表示が行われることはありません。

手順

いずれかの操作ビューで自動最新表示間隔を設定します。

1. 「自動最新表示」フィールドで、矢印をクリックして値を選択するか、値を入力します。指定できる値は、0 から 60 まで (0 と 60 を含む) です。0 の値を指定した場合、自動最新表示機能はオフになります。
2. 間隔タイプを指定するには、リストから値を選択します。秒、分、時間、日、週、または月の間隔タイプを選択できます。

タスクの結果

最新表示の後でブラウザー内に表示される結果は、選択したフィルター基準および構成によって異なります。新規作成された項目および更新された項目は、現在のフィルター基準と一致する場合にのみ表示されません。削除された項目は、マップから削除されます。

レポートの表示

「サポート内容」パネルを使用して、イベントのレポートをグラフ、表、または円グラフで表示します。表示されるレポートは特定のデータ・ソース出力および特定のイベントに依存しており、これらのデータ・ソース出力やイベントは、「フィルター」パネルから選択でき、マップの現行ビューにのみ表示されます。時間別のデータ・ソース結果を棒グラフまたは表形式で表示します。データ・ソース別の結果を円グラフまたは表形式で表示することもできます。グラフと表形式を切り替えるには、「時間別のデータ・ソースの結果」や「データ・ソース別の合計の結果」レポートの「**グラフ**」タブおよび「**リスト**」タブをクリックします。これらのレポートは、傾向を把握し、現在および将来のイベントへの対応について計画を策定するのに役立ちます。

ソリューションでのレポートの表示

レポートを表示するには、「サポート内容」パネルを拡張する、マップ・ポータル末尾側のスプリッター・バーをクリックします。これにより、「サポート内容」パネル内に 2 つのレポートが縦に表示されます。デフォルトでは、上部の「時間別のデータ・ソースの結果」レポートには、時間別のデータ・ソース結果のグラフが表示されます。下部の「データ・ソース別の合計の結果」レポートには、データ・ソース別の結果が表示されます。「フィルター」パネルから任意の数のイベントを選択すると、それらのイベントに基づくレポートがソリューションにより生成されます。「サポート内容」パネルに自動的に表示されるのは、マップの現行ビューに表示されるイベントのレポートのみです。

時間別のデータ・ソース結果を棒グラフで表示する

デフォルトでは、データ・ソース結果を時間 (月単位) に対してマップする棒グラフが「時間別のデータ・ソースの結果」レポートの「**グラフ**」タブに表示されます。「**分布単位**」ドロップダウン・リストで日、週、または月を選択します。このドロップダウン・リストは「**リスト**」タブでのみ使用できます。ドロップダウン・リストのデフォルト値は「月」です。同じ期間で同じ結果の表ビューに切り替えるには、「**リスト**」タブをクリックします。

時間別のデータ・ソース結果を表で表示する。

「時間別のデータ・ソースの結果」レポートに棒グラフが表示されているときに、「リスト」タブをクリックします。棒グラフの結果が、同じレポートに表形式で表示されます。表示される列およびドロップダウン・エレメントを次の表に示します。

表 62. 表での時間別のデータ・ソース結果

フィールド	説明
配布したユーザー	レポートで使用される凡例を決定するための値をこのドロップダウン・リストから選択します。指定できる値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• 日• 週• 月
データ・ソース	アプリケーションがレポートで使用するデータ・ソースのアルファベット順のリスト。列名の横にある双方向の矢印をクリックして、順序を切り替えます。
月	データ・ソースのレポートで考慮される月の番号付きリスト。列名の横にある双方向の矢印をクリックして、順序を切り替えます。このフィールドの代替値は、「日」と「週」です。
カウント	データ・ソースのインシデント数の番号付きリスト。列名の横にある双方向の矢印をクリックして、順序を切り替えます。

データ・ソース別の結果を円グラフで表示する

デフォルトでは、「データ・ソース別の合計の結果」レポートの「グラフ」タブに円グラフが表示されます。この円グラフでは、円グラフの上にある「時間別のデータ・ソースの結果」レポートの棒グラフまたは表での結果の明細が表示されます。円グラフ・データの表ビューに切り替えるには、「リスト」タブをクリックします。

データ・ソース別の結果を表で表示する

「データ・ソース別の合計の結果」レポートに円グラフが表示されているときに、「リスト」タブをクリックします。円グラフの結果が表形式で表示されます。表示される列を次の表に示します。

表 63. 表でのデータ・ソース別の結果

列	説明
データ・ソース	アプリケーションがレポートで使用するデータ・ソースのアルファベット順のリスト。列名の横にある双方向の矢印をクリックして、順序を切り替えます。
カウント	データ・ソースのインシデント数の番号付きリスト。列名の横にある双方向の矢印をクリックして、順序を切り替えます。
結果全体に対するパーセンテージ	各データ・ソースの結果全体に対するパーセンテージ。パーセンテージの表示順序を切り替えるには、列名の横にある双方向の矢印をクリックします。

KPI を介した状況のモニター

状況ビューでは、重要業績評価指標 (KPI) の状況を要約形式または詳細形式で表示することができます。

状況ビューには、表示権限のある KPI の状況の要約が表示されます。現在の KPI の状況を確認し、必要に応じて計画および対処を行うことができます。

凡例バーにはビュー・フィルターがあります。チェック・ボックス・メニューから、表示する KPI の範囲を選択できます。デフォルトでは、すべての範囲が選択されます。

状況ビューのナビゲーション

「トップ・ライン」ビューの各列には、列の最上部の KPI モデル名でグループ化された、同種類の KPI が含まれます。各 KPI グループに関連付けられた KPI は、事前定義された状況に従って、色分けされたセルで表されます。色分けは、ビューの上部の凡例で説明されています。KPI 詳細を表示するには、セルをクリックします。KPI の状況、値、KPI タイプ、範囲タイプを示すプレビュー・カードが表示されます。KPI が基礎となる子 KPI で構成されている場合は、プレビュー・カードに「追加のアクション」メニューが含まれます。特定の KPI に焦点を当てるには、このメニューで「ドリルイン」を選択し、基礎となる KPI を表示します。基礎となる KPI がないレベルに達するまで、各 KPI レベルでこのアクションを繰り返すことができます。それぞれの KPI について、その基礎となるすべての KPI を表示することもできます。上位レベルに戻って焦点を当てるには、ナビゲーション・ツリー上で必要なノードをクリックします。

1.6.0.2 特定の KPI にマップされているレポートをすべて表示するには、「追加のアクション」メニューで「レポートの表示」を選択します。

KPI の色分け

各 KPI は、色分けされたセルで表されます。KPI のセルの色は、その KPI の状況を示しています。

ソリューションのサンプル KPI では、色分けは以下のようになっています。

- 緑色は、当該 KPI のパラメーターによると状況は許容可能であり、アクションは不要であることを示します。
- 黄色は、注意またはモニターが必要であり、アクションも必要となる可能性があることを示します。
- 赤色は、状況がクリティカルであり、アクションの実行が推奨されることを示します。
- 灰色は、KPI の状況について計算するのに使用可能なデータが十分でないことを示します。

色分けは、ビューの上部の凡例で定義されています。

KPI の更新

基礎となる子 KPI が更新されると、変更内容が状況ビューに反映されます。例えば、サンプル KPI には水質 KPI の変化の状況を判別するためのものがありますが、その KPI の状況が「許容可能」から「注意」に変わったとします。この変化は、「水質」セルの背景色が緑から黄色に変わることによって表されます。さらに、「通知」ボタンのアイコンでは、数値が変わることにより KPI の変化を知らせます。

ソリューションが KPI の計算に関するデータを受け取ると、状況ビュー上のセルで対応する色が変わります。この機能は、リアルタイムで変更が受信される可能性が高い KPI (航空機関の遅延など) の場合に役立ちます。この機能は、履歴 KPI (治水のために水位を測定する KPI など) には関係しません。このような KPI の場合、日次の測定が定期的に行われ、その間に状況に影響する急激な変動が発生する可能性は低いと考えられます。

KPI の構成

管理アクセス権がある場合は、「ソリューション管理」ビューに移動して、状況ビューの表示内容を構成することができます。

ソリューションには、一連のサンプル KPI が付属しています。こうした KPI は、さまざまなタイプの KPI をユーザーの組織に合わせて計画および実装する際の手引きとなるように設計されています。水道、輸送、公共安全の各分野のサンプルが用意されています。

関連概念:

137 ページの『KPI の構成』

「ソリューション管理」ビューで、重要業績評価指標 (KPI) およびユーザー・インターフェース内でのこれらの階層表示を構成できます。KPI は、IBM Intelligent Operations Center の状況ビューに表示されます。

418 ページの『KPI 付きのエリア状況』

特定の名前付きエリアの主要なデータを強調表示する重要業績評価指標 (KPI) のビューを取得するには、エリア状況ビューを使用します。ユーザーは、マップの特定エリアにおける組織の業績に関して、状況の変更をモニターおよび管理し、その変化に対応することができます。

関連タスク:

142 ページの『KPI のレポートへのマッピング』

管理者は、状況ビューに表示されるレポートに KPI をマップすることができます。同じレポートを複数の KPI にマップすることができます。オプションとして、レポートで表示されるデータを変更する一連のパラメーターを各レポートに追加することができます。これらのパラメーターの値は、Cognos レポート照会を生成するために使用されるほか、生成されたレポートのインスタンスにラベルとして表示されます。

KPI プレビュー・カードからのレポートの表示

1.6.0.2

状況ビューの KPI プレビュー・カードから、KPI にマップされているレポートを表示することができます。

手順

1. KPI プレビュー・カードで、「追加のアクション」 > 「レポートの表示 (View Reports)」をクリックします。
2. 表示可能なレポートのチェック・ボックスを 1 つ以上選択し、「OK」をクリックします。レポートが、その関連するグラフと共に「サポート内容」パネルに表示されます。

データのホット・スポットの分析

1.6.0.1

1.6.0.2

「マップ」タブを使用して、事前定義された分析によって生成されるホット・スポットの形式の、マップ上で選択するエリアに関するデータを分析します。「ホット・スポット」ビューは、重要な問題のモニターおよび管理、その問題への対応に役立ちます。

包括的な情報と対話の機能を提供するために、「フィルター」パネルのフィルターを分析と結合できます。分析結果を見ると、特定のデータ・パターンのホット・スポットがある場所を素早く確認できます。例え

ば、ホット・スポットは、多発する軽犯罪が市内の街灯の故障に関連していることを示す場合があります。このデータは、意思決定（例えば、市議会や近隣の集会の準備）をサポートできます。

「フィルター」パネルで、分析対象に時間フレームを選択します。「フィルター」パネルには、重点的に取り組む対象として選択できる名前付きエリアがリストされます。あるいは、示されている境界内のすべてのマップを見ることができます。「フィルター」パネルには、選択可能な一連のホット・スポット分析がリストされます。選択するホット・スポット分析は、データ・ソース、およびデータ項目に適用される分析のタイプを定義します。

分析を実行すると、マップには、その分析とフィルター基準によって生成されたすべてのホット・スポットが表示されます。ホット・スポットは、分析定義の距離、時間、およびソース関連の規則に従ったデータ項目のクラスターを表しています。各ホット・スポットは、地理空間情報マップ上で色の付いた円として示されます。各ホット・スポットの詳細は、「リスト」タブに表示されます。

マップに表示されるホット・スポットの情報は、円の色、位置、およびサイズに基づいて解釈できます。

- 円の色は、クラスター内の関連項目の数に対して計算されたスコアを示します。色の範囲は、赤色から黄色で、関連項目の最大比率から最小比率のスコアの範囲を表しています。
- 円の場所は、中心の位置によって決定されます。円の中心は、クラスターで収集されたすべての項目の位置に対する中心点です。
- 円の半径は、中心と、中心から最も離れた項目の位置との間の距離です。

ホット・スポットは、データ項目が分析定義で構成された関連規則に基づくパターンに従っているときに、マップ上に表示されます。

ホット・スポットをクリックすると、各ホット・スポットの詳細がプレビュー・カードに表示されます。

スコア クラスター内の関連項目の数に基づく計算の結果。スコアをパーセント値として示すだけでなく、増大するスコアに対応して、グレイから黄色、さらに赤に及ぶ色の輝度を使用した棒グラフ・アイコンも示されます。

名前 このホット・スポット分析の名前と、各クラスターに自動的に与えられた番号。与えられる番号は、最小番号 1 から、ホット・スポットの総数と等しい最大番号までの範囲です。

開始 クラスター内のすべての項目で最も早い開始日。

終了 クラスター内のすべての項目で最も遅い終了日。

最終更新

クラスター内のすべての項目で最新の最終更新日。

データ項目

クラスター内の項目の総数。

半径 中心と、クラスターの中心から最も離れた項目の位置との間の距離。

単位 距離に使用される計測単位（ヤードまたはメートル）。

分析タイプ

ホット・スポット分析定義で選択される分析のタイプ。ホット・スポット分析のオプションは、「距離別のクラスター」、「距離および関連データ・ソース別のクラスター」、または「時間を含む、距離および関連データ・ソース別のクラスター」です。

データ・ソース

データ・ソースごとに別個にリストされるホット・スポット内のデータ項目の数。

各ホット・スポットの詳細も、「リスト」タブの行にリストされます。

ホット・スポット分析定義について詳しくは、管理者にお問い合わせください。マップおよびリストのタブの使用に関する一般的な説明については、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

Administrator 分析ビューの構成については、「ホット・スポット分析の構成」のリンクを参照してください。名前付きエリアの構成については、「ソリューションのデータ・ソースの構成」のリンクを参照してください。

関連概念:

430 ページの『マップおよびリスト上のデータのフィルタリング』

該当する操作ビューで、「フィルター」パネルを使用して、「内容」パネル内に表示されるデータを定義します。「内容」パネルには、「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブが含まれています。

420 ページの『マップおよびリスト上のデータの表示』

運用ビュー (operations view) の「内容」パネルで、地理情報マップ、ロケーション・マップ、またはリストのいずれかの形式のデータを表示できます。

113 ページの『データ・ソースの構成』

IBM Intelligent Operations Center にデータを提供するデータ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツールを使用します。

145 ページの『ホット・スポット分析の構成』

ホット・スポット・ツールを使用して、ソリューションのホット・スポット分析定義を構成します。ホット・スポット分析では、時間と地理空間情報マップ上の位置に関連するデータのパターンを強調表示できません。管理者は、分析定義の作成、既にリストされているホット・スポット分析の更新、またはソリューションからのホット・スポット分析定義の削除を行うことができます。

ホット・スポット分析の実行

1.6.0.1

1.6.0.2

フィルター・ペイン内で、「内容」パネルにデータを表示する対象のホット・スポット分析を選択します。

手順

データを表示する対象のホット・スポット分析ごとに、以下のステップを繰り返します。

1. 「フィルター」パネルで、ホット・スポット分析グループをクリックします。
2. 必要なホット・スポット分析の横にあるチェック・ボックスを選択します。

タスクの結果

ホット・スポット分析定義で定義した基準に従って地理空間情報マップ上にホット・スポットが生成されます。

通知の表示

「通知」をクリックすると、通知およびその詳細についての動的リストが表示されます。

自分宛ての通知があるかどうかを確認するには、「通知」ボタンにアイコンを探します。通知がない場合、アイコンはありません。自分宛ての通知がある場合は、アイコンに通知の数が表示されます。

1.6.0.2

アイコンの形状と色は、リスト内の通知の最も高い重大度を示します。

- 角の丸いオレンジ色の正方形は、リストに正常通知のみが含まれていることを示します。

- 黄色の三角形は、重大度が最も高い警告通知がリストに含まれていることを示します。
- 赤色の円は、重大度が最も高いクリティカル通知がリストに含まれていることを示します。

「通知」は、自分に関連する現在のすべての通知がリスト表示される対話式ウィンドウです。自分または自分がメンバーであるユーザー・グループに送信された通知のみが表示されます。

通知を受け取るのは、事前定義された重要業績評価指標 (KPI) 値が変更され、新しい値が既存の値とは異なる範囲内にある場合です。例えば、貯水池の水位測定値が許容範囲を下回ると、その KPI へのアクセス権を持つユーザーに通知が出されます。

1.6.0.1 **1.6.0.2** 通知は、バックグラウンド・プロセスからのエラーも表示します。

通知のリスト

「通知」ウィンドウには、通知の動的な対話式リストが表示されます。リストには、通知ごとに、見出しの説明や送信日時などの主要情報が示されます。リストは、送信日時に基づく順序でソートされており、最新の通知が先頭になっています。リスト内でソート順を変更できます。

1.6.0.1 **1.6.0.2** のリストの 1 つの列には、各通知の重大度も示されます。

最初は、「通知」ウィンドウに現在のすべての通知がリスト表示されます。特定の通知に関する詳細情報を表示するには、その通知の行をクリックします。通知のプレビュー・カードに、その主要プロパティー (詳細説明、送信日時、および送信者) が表示されます。

1.6.0.1 **1.6.0.2** プレビュー・カードは、その通知が送信された回数も示します。

通知をリストから削除するには、プレビュー・カードで「追加のアクション」をクリックして、「キャンセル」をクリックします。プレビュー・カードを閉じてリストに戻るには、カードの上部にある「閉じる」アイコンをクリックします。

注: 通知は、もう使用しないことが確実な場合にのみ削除するようにしてください。なぜなら、プレビュー・カードを閉じると、すべての受信者についてその通知が削除されてしまうためです。

リストの末尾にあるサマリー・バーは、表示された通知の総数と選択された通知の数を示します。サイドバーを使用してリストをスクロールダウンします。

「通知」ウィンドウを閉じるには、メニュー・バーの「通知」をクリックします。

デフォルトでは、各通知は最長で 3 日間表示されます。通知がリストから削除されるまでの表示期間を設定することができます。上部のメニュー・バーで、ユーザー名をクリックしてから、「プロファイルの編集」をクリックします。「通知表示制限」フィールドに数値を入力して、各通知が表示される期間 (日数) の値を指定します。期間の制限のデフォルトは 3 日です。

通知設定の構成

1.6.0.2

特定のイベントが発生した場合に通知を受け取るようにソリューションを構成することができます。通知のタイプには、システム、SMS、および E メール の 3 つがあります。IBM Intelligent Operations Center ユーザー・プロファイル内の通知設定を表示して編集することができます。

このタスクについて

システム通知は、コンテンツ・パネルの「通知」ウィンドウに表示されます。SMS 通知は SMS メッセージで送信され、E メール通知は E メールで送信されます。

手順

1. ユーザー・プロフィールを変更するために、ビューの上部にあるユーザー名の横のリストから「**プロフィールの管理**」をクリックします。
 - a. SMS メッセージの電話番号および E メール・アドレスを構成する場合は、**プロフィールの管理** > 「**マイ・プロフィール**」をクリックします。
2. 通知を受け取るかどうか、受け取る通知のタイプ、および通知を表示する時間の長さを構成する場合は、「**自分の通知設定 (My Notification Settings)**」タブをクリックします。
3. コンポーネントを選択し、通知の設定を構成します。
 - KPI 通知設定を構成する場合は、「**重要業績評価指標**」を選択します。

注: KPI 通知を受け取るかどうかを決定する状況基準、および通知方法を定義します。例えば、直前の 1 時間に KPI の状況がクリティカルに変わった場合に SMS メッセージで通知を受け取るようにソリューションを構成します。

- システム・エラーの通知設定 (データ・インポートの通知設定など) を構成する場合は、「**システム・エラー**」を選択します。
 - IBM Cognos Business Intelligence の通知設定を構成する場合は、「**Cognos Business Intelligence**」を選択します。
 - 分析の通知設定を構成する場合は、「**分析**」を選択します。
 - データ・インポートの通知設定を構成する場合は、「**データ・インポート**」を選択します。

関連タスク:

189 ページの『ユーザー・プロフィールの表示または編集』
ソリューション・ユーザー・プロフィール内の情報を表示し、編集することができます。ユーザー・プロフィールを編集して、時間帯 (タイム・ゾーン)、言語設定、および通知の設定を指定します。パスワードのリセットや、個人の詳細情報の変更を行うこともできます。

アクティビティの管理

「マイ・アクティビティ」をクリックして、現在ログオンしているユーザーによって所有またはモニターされているアクティビティの動的リストを表示します。ただし、管理者は、「マイ・アクティビティ」ウィンドウにすべての所有者およびモニターのアクティビティを表示できます。

標準操作手順が起動されるたびに、関連付けられているアクティビティが所有者に割り当てられます。

「マイ・アクティビティ」ボタンには、アクティブである標準操作手順の数を示すアイコンが表示されます。自分が所有者またはモニターであるアクティビティを表示するには、「マイ・アクティビティ」をクリックします。「マイ・アクティビティ」ウィンドウ内のアクティビティは、その親である標準操作手順インスタンス別にグループ化されています。

起動された標準操作手順のインスタンスごとに、「マイ・アクティビティ」ウィンドウには、完了したアクティビティを含むすべてのアクティビティが表示されます。

アクティビティの期限に関する以下のアイコンが、「マイ・アクティビティ」ウィンドウの上部付近に表示されます。

期限過ぎ

完了期限を過ぎているアクティビティー。

本日が期限

今日完了する予定のアクティビティー。

期限前 将来完了する予定のアクティビティー。

アクティビティーが開始されると、開始時刻にアクティビティーの所要時間を加算することで、期限が計算されます。アクティビティーの期限日を使用して、アクティビティーの各期限アイコンに表示される数字が計算されます。

「マイ・アクティビティー」ウィンドウでは、標準操作手順はアルファベット順に表示されます。リスト内の期限過ぎアクティビティーがある各標準操作手順の横で、赤色のアイコンが期限が過ぎているアクティビティーの数を示します。

関連概念:

154 ページの『標準操作手順の構成』

標準操作手順とは、1つのプロセスまたは手順に関連するすべてのステップおよびアクティビティーを記述した、一連の指示です。複雑で予測不能なイベントに対して、組織が一貫性と計画性のある高品質の対応を実施するには、標準操作手順が不可欠です。

アクティビティーの表示、編集、および完了

以下の手順は、「マイ・アクティビティー」ウィンドウでアクティビティーを管理する方法を示しています。

起動された標準操作手順のインスタンスのアクティビティーを表示するには、標準操作手順の名前を展開します。インスタンスが完了するまで、標準操作手順のインスタンスのすべてのアクティビティーおよびその状況と期限が表示されます。すべてのアクティビティーが完了するか、スキップされると、標準操作手順のインスタンスはクローズされます。また、標準操作手順のインスタンスを手動で停止することもできます。「マイ・アクティビティー」ウィンドウに表示される情報を最新表示するには、「最新表示」をクリックします。

アクティビティーをクリックし、以下のいずれかのオプションを選択します。

- アクティビティーを開始するには、リストから「**開始**」を選択します。アクティビティーが標準操作手順定義で自動アクティビティーとして定義されている場合、そのアクティビティーに割り当てられているワークフローが自動的に開始され、アクティビティーが自動的に終了します。アクティビティーが If-Then-Else アクティビティーである場合、アクティビティーで定義されている分岐のいずれかを開始するには、リストから「**条件を満たした場合**」の**開始**または「**それ以外の場合**」の**開始**を選択します。

注: 特定の複数のアクティビティーを順番に実行するように指定されている場合、順番に実行する必要があるアクティビティーは、そのアクティビティーが従属している先行アクティビティーが完了するまで開始できません。

- アクティビティーをスキップするには、リストから「**スキップ**」を選択します。このオプションは、必須のマークが付いているアクティビティーでは選択できません。
- アクティビティーを完了するには、リストから「**完了**」を選択します。
- アクティビティーに参照を追加するには、以下のサブステップを実行します。
 1. リストから「**参照の追加**」を選択します。

2. 「ライブラリーへの参照の追加」ウィンドウで、「参照」リストから値を選択します。「新規追加」を選択した場合は、新規参照の詳細を入力し、「追加」をクリックします。
 3. 「追加」をクリックします。
 4. 追加した参照を表示するには、リストから「詳細の表示」を選択します。
- アクティビティーにコメントを追加するには、以下のサブステップを実行します。
 1. リストから「コメントの追加」を選択します。
 2. コメントの追加ウィンドウの「コメント」フィールドにコメントを入力します。
 3. 「保存」をクリックします。
 4. 追加したコメントを表示するには、リストから「詳細の表示」を選択します。
 - 参照とコメントを含むアクティビティーの詳細を表示するには、以下のサブステップを実行します。
 1. リストから「詳細の表示」を選択します。
 2. 「アクティビティーの詳細」ウィンドウで、「参照」タブ、「役割」タブ、「コメント」タブ、または「変更ログ」タブをクリックします。
 - 通知を送信するには、以下のサブステップを実行します。
 1. リストから「Eメールの送信」を選択します。
 2. 「通知テンプレート」の値を選択します。
 3. 「宛先」には、受信者の E メール・アドレスを入力します。
 4. 「件名」には、Eメールの件名を入力します。
 5. 「メッセージ」には、独自のメッセージを入力できます。また、現在の標準操作手順、アクティビティー、またはイベントの詳細を追加するには、「対象」リストから値を選択し、「追加」をクリックします。「対象」リストを使用して、複数の項目から詳細を追加できます。
 6. 必要な場合は、SMTP サーバーに対する認証のために、「ユーザー」および「パスワード」の値を入力します。
 7. 「送信」をクリックします。
 - 標準操作手順のインスタンスの詳細を表示するには、標準操作手順の名前の横にある「i」アイコンをクリックします。「標準操作手順の詳細」ウィンドウで、以下のいずれかのオプションを選択します。
 - 標準操作手順インスタンスの基本情報を編集するには、リストから「編集」を選択します。変更を基本情報に保存するには、「保存」をクリックします。あるいは、変更をキャンセルするには、「キャンセル」をクリックします。
 - 標準操作手順インスタンスのアクティビティー、参照、および役割を表示または編集するか、コメントおよび変更ログを表示するには、それぞれのタブをクリックします。
 - 標準操作手順のインスタンスを停止するには、リストから「停止」を選択します。
 - 標準操作手順インスタンスの詳細をエクスポートするには、リストから「エクスポート」を選択します。
 - 標準操作手順のインスタンスにコメントを追加するには、リストから「コメントの追加」を選択します。

標準操作手順の編集について詳しくは、このトピックの最後にある標準操作手順の構成に関するセクションへのリンクを参照してください。

関連概念:

154 ページの『標準操作手順の構成』

標準操作手順とは、1つのプロセスまたは手順に関連するすべてのステップおよびアクティビティーを記述した、一連の指示です。複雑で予測不能なイベントに対して、組織が一貫性と計画性のある高品質の対応を

実施するには、標準操作手順が不可欠です。

標準操作手順へのデータ項目のリンク

1.6.0.1

1.6.0.2

プレビュー・カードを介して、既に実行中の標準操作手順のインスタンスにデータ項目を関連付けるか、または標準操作手順の新しいインスタンスを起動できます。

始める前に

ソリューション管理者は、データ・ソース構成ツールを使用して、標準操作手順アクションを適切なデータ・ソースに割り当てる必要があります。標準操作手順アクションの名前は、LaunchSop および AssociateSop です。次に、データ・ソースから受信されたデータ項目について、標準操作手順オプションが、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示されます。

手順

データ項目については、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューから以下のオプションのいずれかを選択します。

- 既に実行中の標準操作手順のインスタンスにデータ項目を関連付けるには、「**実行中の標準操作手順への関連付け**」をクリックし、リストで標準操作手順を選択します。1 つ以上の標準操作手順のインスタンスに 1 つのデータ項目を関連付けることができます。
- 標準操作手順のインスタンスからデータ項目を関連付け解除するには、「**実行中の標準操作手順への関連付け**」をクリックし、リストで標準操作手順の選択をクリアします。
- 標準操作手順のインスタンスを起動するには、「**標準操作手順の起動**」をクリックしてから、以下のオプションのいずれかを選択します。
 - 「**送付された標準操作手順定義**」を選択します。データ・ソース構成に基づき、該当するデータ・ソースが送付される標準操作手順のリストから標準操作手順を選択するには、このオプションを使用します。
 - 「**すべての標準操作手順定義**」を選択します。すべての選択可能な標準操作手順のリストから標準操作手順を選択するには、このオプションを使用します。

既にデータ項目に関連付けられている標準操作手順のインスタンスを起動することはできません。各データ項目が起動できるのは、各標準操作手順の 1 つのインスタンスのみです。

- データ項目に関連付けられている標準操作手順のリストを表示するには、「**標準操作手順の表示**」をクリックします。

連絡先の管理

「連絡先」をクリックして、ソリューション内の他のユーザーにインスタント・メッセージを送信します。

注: IBM Intelligent Operations Center アプリケーション・サーバーの完全修飾ドメイン名を使用して、ソリューション・ポータルにログオンする必要があります。登録された完全修飾ドメイン名の代わりに IP アドレスまたはホスト名の別名を使用してポータルにログオンした場合、このインスタント・メッセージのウィンドウは正しく表示されません。

デフォルトの状況は、ユーザーが応答可であることを示します。離席中、会議中、または応答不可であることを示すようにユーザーの状況インディケータを変更できます。デフォルトの状況メッセージを変更することもできます。状況を変更するには、ウィンドウの上部で、ユーザーの状況インディケータの横にあるドロップダウン・ボタンをクリックします。

カテゴリー別に分類された連絡先のリストをセットアップできます。連絡する必要がある相手に基づいたカテゴリー別に、連絡先を分類できます。例えば、一般的な作業連絡先のカテゴリーや、プロジェクト作業連絡先の別のカテゴリーを設定できます。

連絡先とやり取りするには、セットアップした連絡先のいずれかを選択するか、表示されるフィールドに名前を入力して連絡先を検索します。各ユーザーの名前とその状況が表示されます。自分のオンライン状況、連絡先、またはグループを変更することもできます。ウィンドウの上部の以下のメニューをクリックします。

- 「ファイル」を選択して、連絡先を追加したり、グループを変更したり、ログオフしたりします。
- 「ツール」を選択して、チャット、またはアナウンスをセットアップしたり、ユーザー自身のプライバシー設定を変更したりします。
- 「ヘルプ」を選択して、ポートレットの使用方法に関する詳細を確認します。

IBM Intelligent Operations Center では、ミーティング・ルーム機能は使用できません。

注: ログオンしているすべてのユーザーの状況を示すリストが表示されます。場合によっては、ログオンしているユーザーがブラウザー・ウィンドウを閉じるかログオフしても、セッションの有効期限が切れるまで、このユーザーの状況はログオン状態のまま表示されることがあります。しかし、ログオンしているユーザーがブラウザー・ウィンドウを閉じるかログオフした後で、このユーザーにメッセージを送信しても、メッセージは配信されません。このユーザーにメッセージを送信しようとしているユーザーに対しては、エラー・メッセージが表示されます。自分の状況が、常に即時に「応答不可」に更新されるようにするには、「ファイル」 > 「ログアウト」をクリックしてログオフします。

第 10 章 トラブルシューティングとサポート

IBM ソフトウェアに関する各種の問題を切り分けて解決するために、トラブルシューティング情報およびサポート情報を使用できます。これには、ご使用の IBM 製品に付属している問題判別リソースの使用方法が含まれます。

問題のトラブルシューティング手法

トラブルシューティングとは、問題を解決するための体系的な方法です。トラブルシューティングの目標は、予想したように動作しなかった原因およびその問題の解決方法を判別することです。

トラブルシューティングの最初の手順は、問題を完全に記述することです。問題記述によって、ユーザーと IBM 技術サポートの担当者が問題の原因を見つけるために、どこから開始するべきかを知るのに役立ちます。この手順には、お客様自身で確認が必要な、基本的な質問が含まれます。

- 問題にはどのような症状がありますか?
- どこで問題が発生していますか?
- いつ問題が発生しますか?
- どのような条件下で問題が発生しますか?
- 問題は再現できますか?

一般に、これらの質問に回答することで問題を適切に記述することができ、これにより問題解決につながります。

問題にはどのような症状がありますか?

問題の記述を開始するとき、最も明白な質問として「何が問題であるのか」ということが挙げられます。この質問は単純なように思われますが、これをいくつかのさらに絞り込んだ質問に分解し、問題をさらに具体的に記述することができます。細分化した質問には以下のようなものがあります。

- 問題を報告しているのは誰または何ですか?
- エラー・コードおよびメッセージは何ですか?
- システムにどのような障害が発生しますか? 例えば、ループ、停止、異常終了、性能低下、または間違った結果などですか。

どこで問題が発生していますか?

問題が発生している場所の判別は必ずしも容易ではありませんが、問題解決においては最も重要な手順の 1 つです。障害を報告したコンポーネントと障害が発生したコンポーネントの間には、何層ものテクノロジーが存在する可能性があります。ネットワーク、ディスク、およびドライバーは、問題を調査する際に考慮すべきコンポーネントの一部に過ぎません。

以下の質問は、問題の発生場所に焦点を絞って、問題のレイヤーを特定するのに役立ちます。

- 問題は 1 つのプラットフォームまたはオペレーティング・システムに特定のものですか、それとも複数のプラットフォームまたはオペレーティング・システムに共通していますか?
- 現行の環境および構成はサポートされていますか?

あるレイヤーが問題を報告している場合、問題が発生しているのは必ずしもそのレイヤー内ではありません。問題の発生場所を特定するためには、その問題が存在する環境を理解することも必要です。オペレーティング・システムとバージョン、対応するすべてのソフトウェアとバージョン、およびハードウェア情報など、時間をかけて問題の環境を完全に記述してください。サポートされる構成の環境で稼働していることを確認してください。問題の多くは、ソフトウェア・レベルの非互換性に原因がある場合が多く、それらのソフトウェアは、同時に実行されることを意図していないか、または同時に実行する場合のテストが十分に行われていません。

いつ問題が発生しますか？

特に発生が 1 回限りのケースについては、障害に至るイベントの詳細なタイムラインを作成します。作業をさかのぼることによって、タイムラインを簡単に作成できます。エラーが報告された時点 (できるだけ詳細に、ミリ秒単位まで) から開始します。使用できるログと情報を逆方向にたどります。通常、確認する必要があるのは、診断ログで見つけた最初の疑わしいイベントまでの部分だけです。

イベントの詳細なタイムラインを作成するには、次の質問に答えます。

- 問題が発生するのは、一日の特定の時刻だけですか？
- 問題はどのくらいの頻度で発生しますか？
- 問題が報告される時刻に至るまで、どういうイベントのシーケンスがありますか？
- 問題が発生するのは、ソフトウェアやハードウェアのアップグレードやインストールなど、環境を変更した後ですか？

これらの種類の質問に回答することによって、問題の調査における参照の枠組みを提示できます。

どのような条件下で問題が発生しますか？

問題の発生時に稼働しているシステムおよびアプリケーションを把握することは、トラブルシューティングの重要な部分です。次の環境に関する質問は、問題の根本原因を特定するのに役立ちます。

- 問題が発生するのは、いつも同じタスクが実行されているときですか？
- 問題が表面化するには、イベントが特定の順序で発生する必要がありますか？
- 同時に他のアプリケーションにも障害が発生しますか？

これらの質問に答えることで、問題が発生する環境を説明し、依存関係を関連付けることができます。ほぼ同時に複数の問題が発生する場合でも、それらの問題が関連しているとは限らないことに注意してください。

問題は再現できますか？

トラブルシューティングの観点からすると、問題は再現可能であることが理想的です。通常、問題が再現できる場合は、調査に役立つ大規模なツールやプロシーチャーのセットがあります。したがって、再現できる問題は、多くの場合、デバッグや解決が容易です。ただし、再現可能な問題で不都合が生じる可能性もあります。問題によって業務に大きな影響が出る場合、問題を繰り返し発生させることは望ましくありません。可能であれば、テストまたは開発用の環境で問題を再作成します。これらの環境では通常、調査時の柔軟性が高まり、制御しやすくなります。

- テスト・システムで問題を再現できますか？
- 複数のユーザーまたは複数のアプリケーションで同じタイプの問題が発生していますか？
- 単一コマンド、コマンドのセット、または特定のアプリケーションで問題を再現できますか？

関連タスク:

503 ページの『知識ベースの検索』

IBM 知識ベースを検索することで、問題の解決策が見つかることがあります。使用可能なリソース、サポート・ツール、および検索方法を使用して、結果を最適化できます。

トレースの使用可能化およびログ・ファイルの表示

IBM Intelligent Operations Center での問題をトラブルシューティングするには、いくつかのシステムのログ・ファイルを分析することが必要な場合があります。

以下のシステムのトレースを使用可能にしてログを表示する方法については、以下の手順で説明します。

- WebSphere Portal
- IBM Business Monitor

関連概念:

235 ページの『コンポーネントの検証』

システム検査チェック・ツールツールは、IBM Intelligent Operations Center 内のコンポーネントをテストし、アクセス可能であるか、および操作可能であるかを判別します。

407 ページの『ログ・ファイルの保守』

IBM Intelligent Operations Center では、複数の場所にログ・ファイルが保管されます。システム停止を防ぐために、データベースのバックアップ、ログ・ファイルのアーカイブ、および元のログ・ファイルの削除を定期的に行ってください。

WebSphere Portal でのトレースの使用可能化とログの表示

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center を高可用性環境にデプロイした場合は、トレースを使用可能にして、アプリケーション・サーバー 1 と アプリケーション・サーバー 2 の両方のログを表示します。

WebSphere Portal のログは以下の場所にあります。

標準環境

`/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal`

高可用性環境

アプリケーション・サーバー 1 上の `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal`

アプリケーション・サーバー 2 上の `/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/logs/WebSphere_Portal`

トレースを開始してログを表示するには、実行時に root ユーザーとしてコマンドを入力してください。トラブルシューティング後は、忘れずにすべてのロギングを削除してください。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「システム管理」 > 「管理コンソール」 をクリックします。
2. 「アプリケーション・サーバー」 をクリックして、WebSphere Application Server 8.0 Deployment Manager コンソールにログオンします。
3. 「トラブルシューティング」 > 「ログおよびトレース」 をクリックします。
4. 「WebSphere_Portal」 > 「ログ・レベル詳細の変更 (Change log level details)」 をクリックします。
5. 「ランタイム」 タブをクリックし、すべてのコンポーネントのトラブルシューティングを行う以下のコマンドを入力します。

```
*=warning: com.ibm.ioc.*=all
```

さらに具体的なトレース・コマンドを指定することができます。

- データ・ソースが正常に作成されたにもかかわらずデータ・ソースからの情報が表示されない場合は、以下のトレース・コマンドを入力してロギングをオンにします。その後問題を再現してみます(別のデータ・ソースを作成するなど)。

```
*=warning: com.ibm.ioc.logger.DataReceiverLogger=all:
```

- フィルター・パネルの問題をトラブルシューティングするには、以下のトレース・コマンドを入力します。

```
*=warning: com.ibm.ioc.logger.FilterLogger=all:
```

- マップとリストの問題をトラブルシューティングするには、以下のトレース・コマンドを入力します。

```
*=warning: com.ibm.ioc.logger.StatLogger=all:
```

- KPI の問題をトラブルシューティングするには、以下のトレース・コマンドを入力します。

```
*=warning: com.ibm.ioc.logger.KpiLogger=all:
```

6. 「OK」をクリックします。

7. ログ (例えばアプリケーション・サーバー 1 のログ) を表示するために、以下のコマンドを入力します。

```
cd /opt/IBM/WebSphere/wp_profile1/logs/WebSphere_Portal  
tail -f trace.log
```

次のタスク

トラブルシューティングが終了したら、すべてのトレースを削除します。

アプリケーション・サーバー上の IBM Business Monitor のトレースの使用可能化およびログの表示 このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center を高可用性環境にデプロイした場合は、トレースを使用可能にして、WBM_DE.AppTarget.WBMNode1.0 サーバーと WBM_DE.AppTarget.WBMNode2.0 サーバーの両方のログを表示します。

アプリケーション・サーバー上の IBM Business Monitor のログは、以下の場所にあります。

標準環境

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile1/logs/WBM_DE.AppTarget.WBMNode1.0
```

高可用性環境

```
/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/wbmProfile2/logs/WBM_DE.AppTarget.WBMNode2.0
```

トレースを開始してログを表示するには、実行時に root ユーザーとしてコマンドを入力してください。

手順

1. ソリューション管理 ビューで、「システム管理」 > 「管理コンソール」 をクリックします。
2. 「アプリケーション・サーバー」をクリックして、WebSphere Application Server 8.0 Deployment Manager コンソールにログオンします。
3. 「トラブルシューティング」 > 「ログおよびトレース」 をクリックします。
4. 「WBM_DE.AppTarget.WBMNode1.0」 > 「ログ・レベル詳細の変更 (Change log level details)」 をクリックします。

5. 「ランタイム」タブをクリックし、トレース・レベル・コード `com.ibm.wbimonitor.*=all` を入力します。
6. 「OK」をクリックします。

次のタスク

トラブルシューティングが終了したら、すべてのトレースを削除します。

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center は、IBM Intelligent Operations Center その他の IBM ソフトウェア製品で発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

このツールは、IBM Intelligent Operations Center 環境で発生する問題のトラブルシューティングに必要な情報を収集します。また、このツールは、IBM サポートが使用できるよう、ログをステージング・ロケーションに送信します。以下の種類の情報が収集されます。

- プラットフォームの問題判別ファイル
- システム・ログおよびトレース・ファイル
- プラットフォーム・プロビジョニング・ファイル
- システム構成ファイル
- Java ダンプ・ファイル
- 問題判別フレームワークの内部ログ・ファイル
- インストール・ログ・ファイル
- インストール済み rpm パッケージのリスト

ISA Data Collector のインストール

ブラウザを使用して指定の Web リンク経由で ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center にアクセスします。ブラウザから現行システム上のデータを直接収集できます。あるいは、現行システムまたは別のシステムからデータを収集するためのユーティリティをダウンロードできます。

手順

1. IBM Support Assistant Data Collector のサイトに移動します。
2. 次のオプションのいずれかを選択してください。
 - 現在のブラウザを使用して現行システムからデータを収集する
 - a. 「このシステム (現在のブラウザを使用)」を選択します。
 - b. 使用条件の条項を確認して同意します。
 - c. 「コレクションの開始」をクリックします。
 - ダウンロード可能なユーティリティを使用して現行システムまたは別のシステムからデータを収集する
 - a. 「このシステムまたは別のシステム (ダウンロード可能なユーティリティを使用)」を選択します。
 - b. 使用条件の条項を確認して同意します。
 - c. ご使用のオペレーティング・システムのダウンロード・オプションをクリックします。
 - d. `isadc` ユーティリティを実行します。

関連情報:

 IBM Intelligent Operations Center 1.6.x 用の IBM Support Assistant Data Collector

データ・コレクションの作成

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center は、組織内でトラブルシューティングを行うため、またはサポート要求とともに IBM サポートに提供するために、IBM Intelligent Operations Center システムから、ログその他の情報を収集します。

手順

1. `cd /tmp/isadc` を実行して、`isadc` ディレクトリーに移動します。
2. `./isadc.sh` を実行します。データ・コレクターに関する情報が表示されます。
3. プロンプトに従ってデータ・コレクションを作成します。
4. コレクションを IBM サポートに送信するかどうかを入力します。

タスクの結果

収集した情報は、指定されたファイル名で保存され、要求に応じて IBM サポートに送信されます。

関連概念:

『IBM サポートに送信するデータ・コレクションの命名』
IBM サポート・サイトに送信するコレクションは、特定の命名基準を満たしている必要があります。

IBM サポートに送信するデータ・コレクションの命名

IBM サポート・サイトに送信するコレクションは、特定の命名基準を満たしている必要があります。

ファイル名は、以下のいずれかの形式に従っている必要があります。

`pmr_number.branch_number.country_code.short_description.zip`

or

`pmr_number,branch_number,country_code,short_description.zip`

例: 34143.055.000.logs.zip

2 番目の形式は、以前のバージョンの ISA Data Collector との互換性維持のために受け入れ可能となっています。推奨される形式は、コンマではなくピリオドを使用する最初の形式です。

ISA Data Collector は、コレクションを IBM サポートに送信する前に、ファイル名を検証します。ファイル名が命名基準を満たしていない場合は、ファイルを送信する前にファイル名を変更するよう、ユーザーにプロンプトが出されます。

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center の既知の問題

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center に関する問題と制限を示します。

- アプリケーション・サーバーが実行されていない場合は、ソフトウェアのバージョンと適用済みフィックスに関する情報がコレクションに含まれません。
- コレクターがサーバーにアクセスできない場合は、サーバーがバイパスされ、ログが収集されません。エラーは出されません。

サーバー上にログが存在するが、それらのログが収集されていない場合は、標準環境ではサーバーと分析サーバーとの間、高可用性環境ではサーバーと分析サーバー 1 との間の接続を確認します。

IBM Intelligent Operations Center のメッセージ

各メッセージのトピックは、IBM Intelligent Operations Center で特定のエラー状態が発生する原因を特定するのに役立ち、また、エラーを解決するための推奨処置を示します。

IBM Intelligent Operations Center を使用しているときに発生する可能性のあるエラーを理解できるようにするために、各メッセージのトピックは、IBM Intelligent Operations Center またはそのログに表示されるメッセージ、説明、および処置という 3 つのセクションに分割されています。

メッセージ

2 つの ID が含まれ、それぞれがエラー ID と、関連付けられているテキストを示します。エラー ID はメッセージ ID です。これは、メッセージを識別する固有の番号です。最後の文字 E はメッセージがエラーに起因することを示し、W は警告メッセージ、I は情報メッセージであることを示します。

説明 メッセージの追加説明です。

ユーザーの処置

エラーを解決するための修正処置が示されています。

エラー・メッセージについての情報を検索するには、インフォメーション・センターの検索フィールドにエラー・メッセージの ID 番号を入力します。

注: このセクションのトピックには、IBM Intelligent Operations Center に固有のメッセージのみが含まれています。他のすべてのメッセージについては、製品資料を参照してください。

CIYBA0050E 構成ファイル {0} が見つかりません。格納しているフォルダーをクラスパスに追加してください。

説明: インストール・プロパティは、`custom.properties` ファイルで IBM Intelligent Operations Center インストール・ツールに提供されます。このファイルは、`install-root/resource` ディレクトリにあります。このファイルはインストール・ツールのクラスパスに配置する必要があります。

ユーザーの処置: `install-root/resource/custom.properties` ファイルがクラスパスにあることを確認してください。

このメッセージは、次のいずれかの条件によって引き起こされました。

- ファイルが見つかりませんでした。
- ファイルを読み取ることができませんでした。
- ファイルがプロパティ・ファイル形式ではありません。

ユーザーの処置: `install-root/resource/custom.properties` を調べて、`common.properties` ファイルが存在し、読み取り可能であることを確認してください。ファイルがプロパティ・ファイル形式であることを確認してください。

CIYBA0051E 構成ファイル {0} をロードできません。フォルダーをクラスパスに追加し、ファイルが読み取り可能であることを確認してください。

説明: インストール・プロパティは、`custom.properties` ファイルで IBM Intelligent Operations Center インストール・ツールに提供されます。このファイルは、`install-root/resource` ディレクトリにあります。

CIYBA0052E {0} に、リモート接続指定プロパティ (`connection.options`) の値が含まれていません。

説明: インストーラーが、`install-root/resource/custom.properties` ファイルで `connection.options` プロパティを指定して、許可されたりリモート接続プロトコルの指定をオーバーライドしようとしています。指定された値が空です。

ユーザーの処置: 有効なリモート接続プロパティ・リストを追加してください。このリストはコマンドで区切ら

CIYBA0053E • CIYBA0102E

れたストリングです。例えば `ssh-pw,ssh-key` のようなリストです。

有効なプロトコルは以下のとおりです。

ssh-pw パスワード認証による SSH。

ssh-key

RSA キーまたは DSA キーによる SSH。

`connection.options` プロパティをコメント化することもできます。その場合は、デフォルトの接続プロトコル `ssh-pw` が使用されます。

CIYBA0053E サポートされないリモート接続タイプが指定されました: {0}。

説明: インストーラーが、`install-root/resource/custom.properties` ファイルで `connection.options` プロパティを指定して、許可されたリモート接続プロトコルの指定をオーバーライドしようとしています。指定された値の 1 つ以上がエラーです。

ユーザーの処置: 有効なリモート接続プロパティ・リストを追加してください。このリストはコマンドで区切られたストリングです。例えば `ssh-pw,ssh-key` のようなリストです。

有効なプロトコルは以下のとおりです。

ssh-pw パスワード認証による SSH。

ssh-key

RSA キーまたは DSA キーによる SSH。

CIYBA0054E リモート接続プロトコル「{0}」に対して ID ファイル (property: `ssh.identity`) が指定されませんでした。

説明: リモート接続プロトコル `ssh-key` は、`install-root/resource/custom.properties` ファイルで指定されている唯一のリモート接続プロトコルです。`ssh-key` プロトコルを選択する場合は、ID ファイル (SSH 秘密鍵) を指定する必要があります。

ユーザーの処置: `install-root/resource/custom.properties` ファイルの `ssh.identity` プロパティで、ID ファイルを指定してください。

CIYBA0055E キー ID ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: `install-root/resource/custom.properties` ファイルの `ssh.identity` プロパティに SSH ID ファイルが指定されていますが、この ID ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: `ssh.identity` プロパティに有効な

ID ファイルを指定してください。

CIYBA0056E キー ID ファイルの処理中に予期しないエラーが発生しました: {0}。詳細: {1}。

説明: SSH ID ファイルを使用してリモート通信を確立する際に、予期しない例外が発生しました。

ユーザーの処置: {1} で詳細を参照して、例外の根本原因を判別してください。

CIYBA0059E 無効なリモート接続構成のため、インストールを終了しています。

説明: リモート通信のプロパティが正しく構成されていないため、インストール・プロセスを終了しています。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0101E トポロジー・ファイル {0} が無効です。

説明: インストーラーは {0} トポロジー・ファイルの検証を試み、トポロジー・ファイルにエラーが含まれていることを検出しました。以下のエラーがあります。

- 必要なコンポーネントがトポロジー・ファイル内にすべて存在しているわけではない。
- 前提条件コンポーネントが従属コンポーネントよりも前にリストされていない。
- 順次デプロイする必要のあるコンポーネントが、並列開発スタンプ内に存在している。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルを修正し、インストールを再実行してください。

CIYBA0102E トポロジーまたはトポロジー仕様ファイルが見つかりませんでした。

説明: それぞれのインストール・トポロジーには、関連する `.xml` ファイルと仕様があります。これらのファイルの一方または両方を検出できませんでした。

ユーザーの処置: すべてのインストール・ファイルがインストール・サーバーに解凍されているかどうかを確認してください。`custom.properties` ファイル内の `image.basedir.local` プロパティが正しいロケーションに設定されているかどうかを確認してください。`custom.propeties` ファイルは、インストール・パッケージが解凍されたインストール・サーバー上の `/resource` サブディレクトリに格納されています。

CIYBA0103E コンポーネントをインストールするための {0} スクリプトが存在しません。

説明: インストール・プログラムがコンポーネントのスクリプトを検出しようとしたのですが、スクリプトが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: インストール・メディアがインストール・サーバーに解凍されているかどうかを確認してください。 custom.properties ファイルで、ベース・ディレクトリーが正しく構成されているかどうかを確認してください。ベース・ディレクトリーを使用して、インストール・スクリプトのロケーションが取得されます。

CIYBA0104E トポロジー・ファイルに、無効なエントリーが含まれています。

説明: インストーラーが、トポロジー・ファイルを読み取り、各コンポーネント用にデプロイ可能な単位を作成しているときに、エラーを検出しました。これは、カスタム・トポロジーをインストールしている場合を除き、通常は内部エラーです。

トポロジー・ファイルが破損しているか、または誤って指定されている可能性があります。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルで以下の問題があるかどうかを調べてください。

- コンポーネント ID が重複している。
- コンポーネント ID または型属性が指定されていない。
- 接続属性の指定に親コンポーネントが存在しない。
- トポロジーが XML スキーマ検証に合格しない。

CIYBA0105E {0} ファイルが見つかりませんでした。

説明: インストール・プログラムが {0} ファイルを検出できませんでした。

ユーザーの処置: すべてのインストール・ファイルがインストール・サーバーに解凍されているかどうかを確認してください。 custom.properties ファイル内の image.basedir.local プロパティーが正しいロケーションに設定されているかどうかを確認してください。 custom.propeties ファイルは、インストール・パッケージが解凍されたインストール・サーバー上の /resource サブディレクトリーに格納されています。

CIYBA0106E {0} ファイルを保存できませんでした。

説明: インストール・プログラムは {0} という名前のファイルに書き込もうとしたのですが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: インストーラーのユーザー ID を使

用して、指定されたロケーションにアクセスできるかどうかを確認してください。 ディスク上に十分なスペースがあるかどうか、パーティションが破損していないかどうかを確認してください。

CIYBA0107E プロパティー参照 {0} がトポロジー・ファイル {1} に見つかりませんでした。

説明: インストール中に、一部のコンポーネントで、前提条件ソフトウェアからのプロパティー値が必要になります。これらのコンポーネントは、トポロジー・ファイル内のプロパティー参照を使用して、必須プロパティーの値を判別します。このプロパティー参照が、トポロジー・ファイル内で見つかりませんでした。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルが破損しています。これは、手動の編集によって無効なエントリーが作成されたか、インストール時にトポロジー・ファイルが正しい値で書き込まれなかったことが原因で発生した可能性があります。どのコンポーネントが誤ってインストールされたかを判別してください。誤ってインストールされたコンポーネントをすべて削除し、トポロジー・ファイルを修正してから、再インストールしてください。

CIYBA0108E コンポーネント {0} がトポロジー・ファイル {1} に見つかりませんでした。

説明: インストール・プログラムは、{0} コンポーネント ID が {1} トポロジー・ファイル内で見つかることを予期していましたが、そのコンポーネント ID は見つかりませんでした。この問題は、別のコンポーネントの接続要素で依存関係が誤って指定されたために発生した可能性があります。

ユーザーの処置: {0} への参照について、トポロジー・ファイルで確認してください。 {0} コンポーネントの誤った接続要素をすべて修正してから、再インストールしてください。

CIYBA0109E トポロジー・ファイル {2} のプロパティー {0}.{1} が無効です。

説明: トポロジー・ファイルと仕様プロパティー・ファイルで、このプロパティーが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 仕様プロパティー・ファイルまたはトポロジー・ファイルにこのプロパティーが指定されていない場合は、追加してください。プロパティーのミススペルが原因で、このエラーが発生した可能性もあります。トポロジー・ファイルまたは仕様プロパティー・ファイルを修正してから、再インストールしてください。

**CIYBA0110E トポロジー・ファイル {2} のプロパティ
ー {0}、{1} が見つかりません。**

説明: デプロイ可能な単位が、役割 {1} で指定された別のデプロイ可能な単位を参照しています。 従属するデプロイ可能な単位が見つからないか、役割が一致していません。

ユーザーの処置: 上記のトポロジー・ファイルには、上記のプロパティへの参照が含まれていますが、そのプロパティの定義がトポロジー・ファイル内に見つかりません。 トポロジー・ファイルを手動で編集してコンポーネントを削除し、そのコンポーネントへの参照がまだ存在する場合に、この状況が発生する可能性があります。

**CIYBA0111E コンポーネント {0} のマスター・ホスト
を取得できません。**

説明: トポロジー・コンポーネントは、ターゲット・ホストに関連付けられている必要があります。 それにもかかわらず、孤立したトポロジー・コンポーネントが指定されています。

ユーザーの処置: {0} トポロジー・コンポーネントを調べて、ホスト属性を含むコンポーネントを最終的に持つことになる、一連の接続属性のシーケンスが含まれているかどうかを確認してください。

**CIYBA0112E トポロジー・ファイル {0} の読み取りに
失敗しました。**

説明: インストール・プログラムが、指定されたトポロジー・ファイルを読み取ることができませんでした。

ユーザーの処置: 上記のトポロジー・ファイルがインストール・ディレクトリーに存在するかどうか、インストール・プログラムがそのディレクトリーにアクセスできるかどうかを確認してください。

CIYBA0113E ファイル {0} を保存できませんでした。

説明: インストール・プログラムが、上記のファイルを保存できませんでした。

ユーザーの処置: インストール・プログラムがインストール・ディレクトリーへのアクセス権限を持っているかどうかを確認してください。

CIYBA0114E {0}、{1} プロパティを設定できません。

説明: インストール・プログラムが、上記のプロパティを更新できませんでした。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルが破損しているか、手動で編集されて無効なプロパティ値が設定され

ています。 トポロジー・ファイルを修正し、インストールを再実行してください。

**CIYBA0115E トポロジー・ファイル {0} が見つかり
ません。**

説明: インストール・プログラムが、上記のトポロジー・ファイルにアクセスすることができませんでした。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルが、インストール・プログラムによって指定されたディレクトリー内に存在するかどうか、インストール・プログラムがそのディレクトリーにアクセスできるかどうかを確認してください。

**CIYBA0116E プロパティ・ファイル {0} に書き込む
ことができません。**

説明: インストール・プログラムが、上記のプロパティ・ファイルに書き込むことができませんでした。

ユーザーの処置: インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、ターゲット・サーバー上の一時ディレクトリーへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。 一時インストール・スクリプトが書き込まれるターゲット・サーバー上のディレクトリーは、`custom.properties` ファイル内の `Unix.script.basedir.remote` プロパティによって指定されます。 このプロパティが誤って指定されている場合は、修正してください。

**CIYBA0117E インストーラーが、鍵ストアを作成でき
ませんでした。**

説明: インストール・プログラムが、鍵ストアを作成できませんでした。

ユーザーの処置: インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、インストール・メディアが解凍されているすべてのサブディレクトリーへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。

**CIYBA0118E インストーラーが、指定されたパスワード
を使用して鍵ストアにアクセスできませ
んでした。 パスワードが誤っているか、鍵
ストアが破損しています。**

説明: インストール・プログラムが、鍵ストアにアクセスすることができませんでした。

ユーザーの処置: 指定されたパスワードが正しいかどうか、鍵ストアが破損していないかどうかを確認してください。 ソリューションを再インストールすることにより新規パスワードで鍵ストアを再生成してください。

**CIYBA0119E トポロジー・ファイル {1} のプロパティ
ー {0} を暗号化できません。**

説明: インストール・プログラムは、トポロジー・ファイルで指定されたパスワードを使用して、上記のプロパティを暗号化しようとしたのですが、暗号化できませんでした。

ユーザーの処置: 鍵ストアが破損していないかどうか、トポロジーのパスワードが正しいかどうかを確認してください。必要な場合は、再インストールを行って、新規パスワードで鍵ストアを再作成してください。

**CIYBA0120E トポロジー・ファイル {1} のプロパティ
ー {0} を暗号化解除できません。**

説明: 上記のプロパティを読み取り、暗号化を解除しようとしたのですが、失敗しました。

ユーザーの処置: インストール・プログラムが使用するユーザー ID が、上記のトポロジーにアクセスできるかどうか、トポロジー・ファイルが正しいロケーションに存在するかどうかを確認してください。また、パスワードと秘密鍵が正しいかどうかを確認してください。インストールを再実行してください。

**CIYBA0121E 鍵ストア・ファイル {0} は既に存在しま
す。**

説明: IBM Installation Manager インストールを使用した場合、このエラーは発生しません。IBM Installation Manager は、インストールのフローを制御し、鍵ストアの再生成が試行されないようにします。

ユーザーの処置: インストールがまだ実行されていないことを確認してください。以前のインストール試行で生成された既存の鍵ストアを削除してから、インストーラーを再実行してください。

**CIYBA0122E トポロジーの鍵ストアが存在しません。
createSecretKey コマンドを実行してくだ
さい。**

説明: IBM Installation Manager インストールを実行した場合、このエラーは発生しません。IBM Installation Manager インストールは、自動的に SecretKey を受け入れ、鍵ストアを生成します。

ユーザーの処置: ステップ・バイ・ステップのインストールを実行する場合は、鍵ストアを生成するステップを実行してください。

**CIYBA0123E トポロジー {0} が完全にはインストール
されていません。**

説明: インストール・プログラムにより、トポロジー内の一部のコンポーネントがインストールされていないことが検出されました。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルを調べて、どのコンポーネントがインストールされていないかを判別してください。インストールを再開してください。

**CIYBA0124E {0} プロパティ・ファイルが見つかりま
せん。**

説明: インストール・プログラムが、上記のプロパティ・ファイルを読み取ろうとしたのですが、ファイルが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: インストール・パッケージが正しく解凍されているかどうかを確認してください。インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、パッケージが解凍されているすべてのディレクトリーへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。

**CIYBA0125E プロパティ・ファイル {0} に書き込む
ことができません。**

説明: インストール・プログラムが、ランタイム変数の値を使用してファイルを更新しようとしたのですが、入出力例外が返されました。

ユーザーの処置: インストール・プログラムのユーザー ID を使用して、指定されたロケーションにアクセスできるかどうかを確認してください。ファイル・システム内に十分なスペースがあるかどうか、ディスク・パーティションが破損していないかどうかを確認してください。

**CIYBA0126E トポロジー・ファイル {1} のプロパティ
ー {0} の値を設定できません。**

説明: インストール・プログラムが、指定されたプロパティ値を設定できませんでした。

ユーザーの処置: 上記のトポロジー・ファイル内の上記のプロパティが、正しい XML 構文で記述されているかどうかを確認してください。このトポロジー・ファイルが破損していないかどうか、形式が正しいかどうかを確認してください。ファイル内の特殊文字をすべて削除してから、インストールを再開してください。

CIYBA0127E ソリューション仕様ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: インストール・プログラムは、上記のファイルを読み取ろうとしましたが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: このファイルが、指定されたロケーションに存在するかどうかを確認してください。インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、パッケージが解凍されているすべてのディレクトリーへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。

CIYBA0128E {0} ファイルを保存できませんでした。

説明: インストール・プログラムは、上記のファイルに書き込もうとしましたが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: インストール・プログラムが使用するユーザー ID により、指定されたロケーションにアクセスできるかどうかを確認してください。ファイル・システム内に十分なスペースがあるかどうか、ディスク・パーティションが破損していないかどうかを確認してください。

CIYBA0129E ソリューション・パッケージ・ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: インストール・プログラムは、上記のファイルを読み取ろうとしましたが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: このファイルが、指定されたロケーションに存在するかどうかを確認してください。インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、パッケージが解凍されているすべてのディレクトリーへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。

CIYBA0130E ソリューション・パッケージ・ファイル {0} が存在しません。

説明: インストール・プログラムは、上記のファイルを読み取ろうとしましたが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: メッセージに示されているファイルの権限を確認してください。インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、このファイルを読み取る権限があるかどうかを確認してください。必要に応じてファイル権限を変更してください。

CIYBA0131E インストーラーが {0} トポロジー・ファイルをロードできませんでした。ファイル入出力メッセージは {1} でした。

説明: 指定されたトポロジー・ファイルをインポートしようとしたときに、上記のエラーが返されました。

ユーザーの処置: 上記のトポロジー・ファイルが正しいディレクトリーに存在するかどうかを確認してください。このトポロジー・ファイルに無効な文字が含まれていないかどうかを確認してください。インストール・プログラムが、このトポロジー・ファイルが存在するディレクトリーにアクセスできるかどうかを確認してください。

CIYBA0140E 必要な変換プログラムまたは XSL ファイルにアクセスできません。

説明: インストール・プログラムは、必要な変換プログラムまたは XSL ファイルを読み取ろうとしましたが、読み取ることができませんでした。

ユーザーの処置: インストール・プログラムが使用するユーザー ID により、インストール・パッケージが解凍されているロケーションにアクセスできるかどうかを確認してください。ディスク・パーティションが破損していないかどうかを確認してください。インストール・パッケージを再度解凍し、インストールを再実行してください。

CIYBA0141E インストール・ファイル {0} が見つかりません。

説明: インストール・プログラムは、上記のファイルを読み取ろうとしましたが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: このファイルが、指定されたロケーションに存在するかどうかを確認してください。インストール・プログラムが使用するユーザー ID が、解凍されたインストール・パッケージが格納されているすべてのディレクトリーにアクセスできるかどうかを確認してください。

CIYBA0142E インストール・ファイル {0} に書き込むことができません。

説明: インストール・プログラムは、上記のファイルに書き込もうとしましたが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、解凍されたインストール・パッケージが格納されているすべてのディレクトリーへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。ディスク・

パーティションが破損していないかどうか、スペースが不足していないかどうかを確認してください。

CIYBA0143E インストール・プログラムが、トポロジー・ファイル进行处理できませんでした。

説明: インストール・プログラムは、トポロジー・ファイルを読み取り、ランタイム値を含む中間ファイルを生成します。インストール・プログラムは、トポロジー・ファイル进行处理して中間ファイルを書き込んでいるときにエラーを検出しました。このエラーの原因として考えられるのは、ファイル入出力エラーです。

ユーザーの処置: インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、インストール・パッケージが解凍されているすべてのディレクトリへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。ディスク・パーティションが破損していないかどうか、スペースが不足していないかどうかを確認してください。

CIYBA0150E トポロジー仕様ファイル {0} を読み取ることができません。

説明: インストール・プログラムは、上記のファイルを読み取ろうとしましたが、ファイル入出力エラーが返されました。

ユーザーの処置: このファイルが、指定されたロケーションに存在するかどうかを確認してください。インストール・プログラムが使用するユーザー ID に、インストール・パッケージが解凍されているすべてのディレクトリへのアクセス権限があるかどうかを確認してください。

CIYBA0160E ルール仕様ファイルが {0} ディレクトリで見つかりませんでした。

説明: インストール・プログラムは、事前検査ルールを定義する rule-spec.xml ファイルをロードしようとしたが、ロードできませんでした。

ユーザーの処置: 上記のディレクトリが存在するかどうかを確認してください。また、インストール・プログラムが使用するユーザー ID でこのディレクトリにアクセスできるかどうかを確認してください。

CIYBA0161E ルール名 {0} は無効です。

説明: インストール・プログラムは、rule-spec.xml ファイルで誤ったルール名を検出しました。このファイルは、事前検査ステップで使用されるルールを定義します。

ユーザーの処置: rule-spec.xml ファイルで、ルール名が正しいかどうかを確認してください。正しいルール名

については、rule-spec.xml ファイルの未変更のバージョンを参照してください。

CIYBA0162E トポロジー {0} のインストール前提条件の検査で問題が検出されました。

説明: 事前検査ステップが失敗しました。サポートされるシステム要件を満たしていない構成ターゲットが 1 つ以上あります。

ユーザーの処置: 計画されたトポロジーが、サポートされる最小限の要件を満たしているかどうかを確認してください。

CIYBA0163W ターゲット・サーバー {0} の OS タイプが {1} ではありません。

説明: 事前検査ステップは、上記のターゲット・サーバー上で、サポートされていないオペレーティング・システムを検出しました。

ユーザーの処置: ターゲット・サーバー上のオペレーティング・システムが、サポートされるシステム要件を満たすようにしてください。

CIYBA0164W {0} サーバーでは {1} ビット OS の使用が予期されていました。

説明: 事前検査ステップにより、ターゲット・サーバーで誤ったオペレーティング・システムが検出されました。

ユーザーの処置: ターゲット・サーバーのオペレーティング・システムのタイプがシステム要件を満たしていることを確認してください。

CIYBA0165W ターゲット・サーバー {0} の CPU が x86 でも s390 64 ビット CPU でもありません。

説明: 事前検査ステップにより、示されているターゲット・サーバーの CPU タイプがサポートされていないことが検出されました。

ユーザーの処置: ターゲット・サーバーの CPU タイプが、システム要件を満たしていることを確認してください。

CIYBA0166E ターゲット・サーバー {0} に接続できません。

説明: 事前検査ステップの実行時に、インストール・プログラムはリモート・サーバーに接続できませんでした。

ユーザーの処置: インストール・サーバーとターゲッ

CIYBA0167E • CIYBA0183E

ト・サーバーの間の接続を確認してください。他のエラーがないか、事前検査ログを調べてください。

CIYBA0167E 正しくないホスト名、アカウント、またはパスワードが指定されたため、サーバー {0} に接続できません。

説明: 事前検査ステップの実行時に、インストール・プログラムが失敗しました。インストール・プログラムは、ターゲット・サーバーに接続できませんでした。

ユーザーの処置: ホスト名の形式が正しいこと、およびリモート・サーバー用に正しいログイン詳細が指定されていることを確認してください。追加情報がないか、事前検査ログを調べてください。

CIYBA0168E サーバー {0} と {1} の {2} が同期していません。

説明: {2} の相違が {0} サーバーと {1} サーバーとの間に存在します。

ユーザーの処置: {2} がすべての {0} サーバーと {1} サーバーとで同じになるようにしてください。

CIYBA0171I インスタンス {0} を使用してインストール前提条件の検査を開始しています。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0172I インストール前提条件の検査が正常に完了しました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0173I インストール前提条件の検査が完了しましたが、{0} 件の警告と {1} 件のエラーが発生しました:

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0176E サーバー {0} のログイン情報が正しくありません。サーバーで使用するユーザー ID とパスワードを確認してください。

説明: インストール・プログラムの事前検査ステップで、ターゲット・サーバーのログイン情報が正しくないことが検出されました。

ユーザーの処置: サーバーのアカウント詳細に、正しい

ユーザー ID とパスワードが指定されていることを確認してください。

CIYBA0177W リモート・サーバーに接続できません。再試行を待っています。

説明: インストール・プログラムの事前検査ステップで、リモート・サーバーに接続できませんでした。接続が再試行されます。

ユーザーの処置: アクションは不要です。インストール・プログラムは、custom.properties ファイルの waiting.time プロパティに指定されている時間待機してから接続を再試行します。

CIYBA0178W {0} に接続できません。{1} ミリ秒待つてから次の接続試行を行います。

説明: システムに接続の問題があります。

ユーザーの処置: 接続試行が複数回失敗する場合は、ネットワーク管理者に連絡して、接続の問題を解決してインストールを再試行してください。

CIYBA0179E トポロジー・プロパティ・ファイルでキー {0} に値が指定されませんでした。

説明: インストール・プログラムの事前検査ステップで、ホスト名、ユーザー名、またはパスワードの値をプロパティ・ファイルから取得できませんでした。

ユーザーの処置: ホスト名、ユーザー名、およびパスワードが、プロパティ・ファイルに正しく指定されていることを確認してください。

CIYBA0180E サーバー {0} に対して入力されたユーザー ID には root 特権がありません。

説明: インストール・プログラムの事前検査ステップで、示されているサーバーに使用されているアカウントに root 特権がないことが検出されました。

ユーザーの処置: サーバーに使用されているユーザー ID を root 特権のあるユーザー ID に変更するか、サーバーに指定されているユーザー ID に root 特権を追加します。

CIYBA0183E 鍵 {1} の値 {0} が無効です。
「EM64T」、「AMD64」、または「S390」である必要があります。

説明: 鍵の値は、指定されている値のいずれかでなければなりません。

ユーザーの処置: 値を訂正し、インストールを再実行してください。

CIYBA0184E 鍵 {1} の値 {0} が有効なホスト名ではありません。

説明: インストール・プログラムの事前検査ステップで、提供された値が有効なホスト名でないことが判別されました。

ユーザーの処置: ホスト名が正しい形式であることと、正しい値を持っていることを確認してください。

CIYBA0185E インストール前提条件の検査がルール {0} で失敗しました。

説明: インストール・プログラムの事前検査ステップが、指定されたルールの検査時に失敗しました。

ユーザーの処置: 追加メッセージがないか、事前検査ログを調べてください。エラーを訂正し、インストールを再実行してください。

CIYBA0187E SSH 鍵ストア「{0}」が指定されましたが、アクセスできませんでした。証明書ベース SSH プロトコルは使用できません。詳細: {1}。

説明: インストール・プログラムの事前検査ステップで、ターゲット・サーバーへの接続の試行時に SSH 鍵ストア内で無効なデータが検出されました。

ユーザーの処置: メッセージの詳細を確認して、提供された鍵ストアに適切な項目があることを確かめてください。

CIYBA0190E トポロジー・ファイルでは、コンポーネント {0} はコンポーネント {1} より前に記述されている必要があります。

説明: トポロジー・ファイルが誤って変更されました。前提条件コンポーネントが、そのコンポーネントに依存するコンポーネントより後に記述されています。

ユーザーの処置: 従属関係を持つコンポーネントが、依存先のコンポーネントより後に記述されるようにトポロジー・ファイルを変更してください。

CIYBA0191E トポロジー・ファイルで、コンポーネント {0} とコンポーネント {1} の間に従属関係があります。これらのコンポーネントを並列にデプロイすることはできません。

説明: コンポーネント間に従属関係がある場合、それらのコンポーネントを並列にデプロイすることはできません。例えば、コンポーネント 2 が、コンポーネント 1 の前提条件である場合などです。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルの並列スタンプ

からコンポーネントを除去してください。

CIYBA0192E トポロジー・ファイルで、プロパティ {1},{2} の参照値 {0} が無効です。

説明: メッセージに含まれている参照値が、示されているプロパティで無効です。

ユーザーの処置: ID フィールドを使用してプロパティ定義を検索し、このプロパティに対するすべての参照が正しい値を持つようにしてください。

CIYBA0193E トポロジー・ファイルで、コンポーネント {0} に重複する接続 {1} があります。

説明: トポロジー・ファイルで、コンポーネントの接続が重複して定義されています。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルの重複している接続情報を除去して、インストール・プログラムを再実行してください。

CIYBA0194E コンポーネント {0} でプロパティ {0} が重複しています。

説明: コンポーネントに重複したプロパティが定義されています。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイルで、コンポーネントの重複したプロパティを除去してください。

CIYBA0195E トポロジー・ファイルのコンポーネント {0} に、無効なプロパティ {0} があります。

説明: 指定されたプロパティは、示されているコンポーネントで予期されていませんでした。プロパティがミススペルされていること、またはプロパティ仕様からプロパティが欠落していることが原因と考えられます。

ユーザーの処置: 指定されたプロパティをプロパティ・ファイルまたはトポロジーに追加してください。プロパティがミススペルされていた場合は、ミススペルを訂正してください。トポロジー・ファイルまたは仕様プロパティ・ファイルを訂正して、インストールを再開してください。

CIYBA0196E コンポーネント {1} にプロパティ {0} がありません。

説明: コンポーネントには、示されているプロパティが必要です。プロパティがミススペルされていること、またはプロパティ仕様ファイルからプロパティが欠落していることがエラーの原因と考えられます。

CIYBA0197E • CIYBA0206E

ユーザーの処置: プロパティを仕様プロパティ・ファイルまたはトポロジーに追加してください。ミススペルがエラーの原因である場合は、ミススペルを訂正してください。 インストールを再開してください。

CIYBA0197E コンポーネント {0} に無効なコンポーネント・タイプ {1} が指定されています。

説明: コンポーネントに無効なコンポーネント・タイプが指定されていました。

ユーザーの処置: コンポーネントの仕様ファイルに、コンポーネント・タイプが含まれていることを確認してください。 コンポーネント仕様ファイルは、インストール・サーバーの `install_home/ioc16/spec/component` サブディレクトリにあります。

CIYBA0198E コンポーネント {1} では接続 {0} は無効です。

説明: このコンポーネントでは、定義された接続は無効です。

ユーザーの処置: コンポーネントのトポロジー・ファイルで接続のスペルを確認して、ミススペルがないようにしてください。

CIYBA0199E {0} 接続がコンポーネント {1} にありませんでした。

説明: 示されているコンポーネントに接続が定義されていません。

ユーザーの処置: コンポーネント仕様ファイルを確認して、接続情報が含まれるようにしてください。

CIYBA0200E {0} の接続情報が存在しません。

説明: 示されているコンポーネントの接続 ID が欠落しています。

ユーザーの処置: 接続 ID がトポロジー・ファイルに指定されていることを確認してください。 接続 ID が正しくスペルされていることと、その接続 ID の関連コンポーネントを定義するトポロジー・ファイルのスタンプを参照していることを確認してください。

CIYBA0201E リモート・サーバー {0} に接続できません。

説明: インストール・プログラムが、示されているサーバーへの接続の問題を検出しました。

ユーザーの処置: サーバー間に接続の問題がないことを確認してください。 インストール・プログラムの事前

検査ステップを実行して、接続の問題があれば解決してください。

CIYBA0202E サーバー {0} に対するユーザー名またはパスワードが無効です。

説明: インストール・プログラムが、示されているサーバーの資格情報が無効であることを検出しました。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルでサーバー資格情報が正しいことを確認してください。

CIYBA0203E ファイル {0} が存在しません。

説明: プロパティ・ファイルのロードを試行してエラーが返されました。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイルへのパスが正しいことと、ファイルが存在することを確認してください。

CIYBA0204E ファイル {0} の読み取りまたは書き込みを行うことができません。

説明: インストール・プログラムはプロパティ・ファイルのロードを試行しましたが、エラーが返されました。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイルのパスが正しいことと、示されているファイルが存在することを確認してください。

CIYBA0205E {1} にディレクトリー {0} を作成できません。

説明: インストール・プログラムは、リモート・サーバーにディレクトリーを作成できませんでした。

ユーザーの処置: リモート・サーバーに十分なスペースがあること、またインストール・プログラムで使用されるユーザー ID にディレクトリーを作成するための十分なアクセス権と適切な権限があることを確認してください。

CIYBA0206E サーバー {2} のリモート・ディレクトリー {1} にファイル {0} をアップロードできません。

説明: インストール・プログラムは、リモート・サーバーの示されているディレクトリーにファイルをコピーできませんでした。

ユーザーの処置: リモート・サーバーに十分なスペースがあること、またインストール・プログラムで使用されるユーザー ID に、リモート・サーバーにファイルを書

き込むための十分なアクセス権と適切な権限があることを確認してください。

CIYBA0207E {0} のイメージが定義されていません。

説明: インストール・プログラムは、プロパティ・ファイルのイメージ・データを取得できませんでした。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイルに、データ・コンポーネントが入っているイメージ・フィールドが含まれていることを確認してください。

CIYBA0208E リモート・サーバー {1} にコンポーネント {0} のイメージをアップロードできません。

説明: インストール・プログラムは、リモート・サーバーのディレクトリーにイメージ・ファイルをコピーできませんでした。

ユーザーの処置: リモート・サーバーに十分なスペースがあること、またインストール・プログラムで使用されるユーザー ID に、リモート・サーバーのディレクトリーに書き込むための十分なアクセス権と適切な権限があることを確認してください。また、リモート・ディレクトリー名が正しいことも確認してください。

CIYBA0209I ホスト名: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0210I OS タイプ = {0}、OS ビット = {1}、CPU アーキテクチャー = {2}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0211I リモート・パス: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0212I ローカル・パス: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0213E リモート・サーバー {1} からファイル {0} をダウンロードできません。

説明: インストール・プログラムは、リモート・ディレクトリー・サーバーからローカル・サーバーにイメージ・ファイルをコピーできませんでした。

ユーザーの処置: ローカル・サーバーに十分なスペースがあること、またインストール・プログラムで使用されるユーザー ID に、ディレクトリーに書き込むための十分なアクセス権と適切な権限があることを確認してください。また、ローカル・ディレクトリー名とリモート・ディレクトリー名が正しいことも確認してください。

CIYBA0214E ファイル {0} をダウンロードします。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0215I コマンド: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0216I コマンド出口コード: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0217I コマンド出力: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0218E コマンドが戻りコード {0} で失敗しました。

説明: コマンドは正常に完了しませんでした。

ユーザーの処置: 詳しくは、ログ・ファイルを確認してください。

CIYBA0219I ファイル {0} をアップロードします。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0220I ローカル・イメージ・ディレクトリー: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0221I リモート・イメージ・ディレクトリー: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0222E リモート・イメージ {0} は既に存在しません。

説明: このファイルは既にターゲット・サーバーに存在します。インストール・プロセスには、メディアをターゲット・サーバーに転送することが含まれています。このメッセージは、必要なイメージが既に転送されていることを示しています。

ユーザーの処置: このメッセージは、前のインストール試行のメディアがターゲット・サーバーにまだ存在していることを示しています。ユーザーが新しいインストールの開始を意図している場合は、メディアをもう一度アップロードできるよう、そのメディアを削除する必要があります。

CIYBA0223E サーバー {0} でコマンドを起動できません。

説明: インストール・プログラムは、リモート・サーバーからローカル・サーバーに対して **IOC** コマンドを実行できませんでした。

ユーザーの処置: ローカル・サーバーとリモート・サーバーの間の接続を確認してください。インストール・プログラムで使用されるユーザー ID に、コマンドを実行するための十分なアクセス権と適切な権限があることを確認してください。

CIYBA0224E サーバー {1} のフォルダー {0} からバックアップ・ファイルを取得します。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0225E サーバー {1} のフォルダー {0} からバックアップ・ファイルを取得できませんでした。

説明: インストール・プログラムは、リモート・バックアップ・フォルダーからローカル・フォルダーにファイルを取り出すことができませんでした。

ユーザーの処置: ローカル・サーバーとリモート・サーバーの間の接続を確認してください。インストール・プログラムで使用されるユーザー ID に、フォルダーにアクセスするための十分なアクセス権と適切な権限があることを確認してください。

CIYBA0226E サーバー {1} にバックアップ・フォルダー {0} が存在しません。

説明: インストール・プログラムは、リモート・バックアップ・フォルダーからローカル・フォルダーにファイルを取り出すことができませんでした。

ユーザーの処置: リモート・ディレクトリーとフォルダーが存在することを確認してください。

CIYBA0227E ID およびパス属性に値が指定されている必要があります。

説明: インストール時に、コンポーネント ID とパス属性を識別できませんでした。

ユーザーの処置: コンポーネント ID とパス引数が、タスク引数内で提供されていることを確認してください。

CIYBA0228I 実行コマンド: {0}。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0229E ターゲット・ディレクトリー {0} のディスク・スペースが不足しています。

説明: インストール・プログラムは、ターゲット・ディレクトリー内で十分なスペースを検出できませんでした。

ユーザーの処置: 示されているディレクトリーが、十分な割り振りスペースを持っていること、またインストール・プログラムで使用されるユーザーID によってアクセス可能であることを確認してください。

CIYBA0230I IBM Intelligent Operations Center コマンド行バージョン: {0}

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0231I トポロジー「{0}」が正常にインポートされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0232E ../topology フォルダー下にトポロジー名「{0}」が見つかりませんでした。

説明: インストール・プログラムは、示されているトポロジーを ../topology フォルダー内で検出できませんでした。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルが ../topology フォルダーに存在すること、また有効な XML 形式になっていることを確認してください。

CIYBA0233I 現在のトポロジーは「{0}」です。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0234E ANT_HOME が設定されていないか、設定が誤っています。

説明: インストール・プログラムが、ANT_HOME 環境変数で問題を検出しました。

ユーザーの処置: ANT_HOME 変数が、有効な ANT バージョンに設定されていることを確認してください。

CIYBA0237E コンポーネント ID 「{0}」は無効です。

説明: インストール・プログラムが、トポロジー・ファイル内で誤ったコンポーネント ID を検出しました。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイル内で、コンポーネント ID が存在すること、また正しい名前になっていることを確認してください。

CIYBA0238E コンポーネント ID 「{1}」に対するアクション「{0}」は無効です。

説明: 示されているアクションは、トポロジー・ファイル内の現在のコンポーネントでは正しくありません。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルを調べて、定義されているアクションがコンポーネントで適切なものとなるようにしてください。

CIYBA0239E より詳細な操作メッセージについては、{0} を確認してください。

説明: コマンドは正常に完了しませんでした。

ユーザーの処置: 取るべきアクションについては、{0} で示されているログ・ファイルを確認してください。

CIYBA0240I コマンドは正常に完了したか、または警告付きで正常に完了しました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0241E コマンドが失敗しました:

説明: 表示されているコマンドが失敗しました。

ユーザーの処置: 取るべきアクションは、失敗したコマンドによって異なります。コマンドとログを調べて、失敗の原因を判別してください。

CIYBA0242E パラメーター「{0}」から「.xml」を除去してください。

説明: 示されているパラメーターにファイル拡張子.xml が含まれています。

ユーザーの処置: XML ファイル名パラメーターに、.xml 拡張子が含まれてはなりません。パラメーターから.xml を除去して、コマンドを再試行してください。

CIYBA0243E IOP_CIPHER_ALG または IOP_CIPHER_KEYSIZE 環境変数の設定が誤っています。適切な JCE 準拠値に設定してください。

説明: インストール・プログラムは、暗号化に使用される暗号の正しい値を識別できませんでした。

ユーザーの処置: CIPHER_ALG および IOP_CIPHER_KEYSIZE 環境値が正しく設定されていることを確認してください。

CIYBA0244E 「{0}」は無効なパラメーターです。

説明: 示されているパラメーターは、有効なパラメーターではありません。

ユーザーの処置: パラメーターを除去するか訂正して、コマンドを再試行してください。

CIYBA0245E 「-{0}」にパラメーターがありません。

説明: 示されているパラメーターは必須ですが、コマンドで欠落しています。

ユーザーの処置: 欠落しているパラメーターを指定して、コマンドを再実行してください。

CIYBA0249I 操作スクリプトを準備します。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0250I 操作が完了しました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0251I 操作シーケンスが開始されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0252I 操作シーケンスが完了しました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0253I コンポーネントの {{0}} イメージをホスト {{1}} にアップロードします。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0254I コンポーネント {{0}} をホスト {{1}} にインストールします。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0255I コンポーネント {{0}} をホスト {{1}} からアンインストールします。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0256I ホスト {{1}} でコンポーネント {{0}} を始動します。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0257I ホスト {{1}} でコンポーネント {{0}} を停止します。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0258I ホスト {{1}} でコンポーネント {{0}} を伝搬します。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0261I {0} 個のタスクが実行されています

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0262I 合計 {0} 個のタスクが実行されます。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0263I ホスト {{1}} でコンポーネント {{0}} をバックアップします。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0264E ログ構成ファイル {0} をロードできません。

説明: ログ機能、ログ構成パラメーターを含むプロパティ・ファイルを検出できません。

ユーザーの処置: インストール・パッケージが完全に解凍されていること、またこのパッケージがインストール・プログラムを実行するユーザー ID からアクセス可能なファイル・システムに置かれていることを確認してください。

CIYBA0265E ログのファイル・ハンドラーを作成できません。

説明: ログ機能、システム・ファイル・ハンドルを使用してファイルを開こうとしましたが、開けませんでした。

ユーザーの処置: システム管理者に、システムで使用可能なファイル・ハンドルの数を確認するように依頼してください。インストール・パッケージが解凍されたファイル・システムが破損していないことを確認してください。

CIYBA0266E 必須 RPM パッケージ {0} が {1} サーバーにインストールされていません。

説明: 示されている RPM パッケージがサーバーにインストールされていません。

ユーザーの処置: サポートされる RPM パッケージをサーバーにインストールしてください。

CIYBA0267E {1} サーバーのディスク・スペースが不十分です。{0} のディスク・スペースが必要です。

説明: サーバーのディスク・スペースが十分でないか、サーバーがディスク・スペースのシステム要件を満たしていません。

ユーザーの処置: 最小スペース要件が満たされるように、ファイルを削除してサーバー上のスペースを使用可能にしてください。

CIYBA0268E {1} サーバーのメモリーが不十分です。
{0} GB のメモリーが必要です。

説明: 示されているサーバーの RAM が不十分です。サーバーは、最小 RAM のシステム要件を満たしていません。

ユーザーの処置: サーバーに RAM を追加してください。

CIYBA0269I サーバー {1} で {0} ディレクトリーを作成できません。このディレクトリーは既に存在します。

説明: 指定されたディレクトリーは、サーバーに既に存在します。

ユーザーの処置: サーバー上のこのディレクトリーを除去してください。

CIYBA0270I TCP IP ポート {0} は、サーバー {1} で既に使用されています。これは必須ポートであり、インストール前に使用可能な状態にしておく必要があります。

説明: プログラムまたはプロセスは、サーバー上の必須 TCP/IP ポートを使用するよう既に構成されています。

ユーザーの処置: 必須ポートを使用できるようにサーバーを再構成してください。インストールを再実行してください。

CIYBA0271E サーバー {1} に、必要な完全修飾ホスト名、または短いホスト名、またはデフォルトのホスト名が設定されていません。必要な FQH は {0} です。

説明: サーバーに、必要な完全修飾ホスト名が設定されていません。

ユーザーの処置: IBM Installation Manager を使用したインストールの場合は、サーバーの完全修飾ホスト名を入力してください。ステップ・バイ・ステップのインストールの場合は、トポロジーのプロパティ・ファイルの SERVERS セクションに完全修飾ホスト名を入力してください。エラー・メッセージにリストされているサーバーを訂正します。

CIYBA0272E サーバー {1} からサーバー {0} へのネットワーク接続が切断されています。

説明: 示されている 2 つのサーバー間にネットワーク接続がありません。

ユーザーの処置: サーバー間の接続を確認してください。問題が解決しない場合は、システム・ネットワー

ク管理者に連絡してください。

CIYBA0273I サーバー {0} で、サポートされない SELinux が実行されています。

説明: SELinux は、IBM Intelligent Operations Center ではサポートされていません。

ユーザーの処置: サポートされる Linux バージョンをインストールしてください。

CIYBA0274E サーバー {0} でアクティブなファイアウォールが検出されました。インストール前に、すべてのファイアウォールを無効にしておく必要があります。

説明: サーバーのファイアウォールがアクティブになっています。

ユーザーの処置: インストール処理中は、サーバーのファイアウォールを無効にしてください。

CIYBA0275I サーバー {0} の DNS 項目が見つかりません。IP またはホスト名による DNS 参照が失敗しました。

説明: サーバーが DNS で正しく構成されていないか、DNS が正しく機能していません。IP アドレスまたはホスト名による DNS 参照コマンドがサーバーで失敗しました。

ユーザーの処置: このサーバーのシステム・ネットワーク管理者に連絡して、DNS の DNS 項目を訂正してください。

CIYBA0276E サーバー {1} のシステム設定が、インストール要件を満たしていません。詳しくは、直前のメッセージを参照してください。

説明: オープン・ファイルの最大数のシステム設定が、インストール要件を満たしていません。

ユーザーの処置: ulimit 設定を示されている値に変更する必要があります。

CIYBA0277I 検出された Linux リリースは、インストール要件を満たしていません。必要なリリースは {0} です。

説明: 示されているサーバーにインストールされている Linux はサポートされていません。

ユーザーの処置: サポートされる Linux バージョンをインストールしてください。

CIYBA0278I 検出された Linux ディストリビューションは、要件を満たしていません。必要なディストリビューションは {0} です。

説明: インストールされている Linux はサポートされていません。

ユーザーの処置: サポートされる Linux ディストリビューションをインストールしてください。

CIYBA0279E サーバー {4} で WebSphere Application Server プロファイル {0} が開始されていないか、アカウントまたはパスワードが無効です。

説明: WebSphere Application Server プロファイルが開始されていないか、無効な資格情報を使用して開始しようとしてしました。

ユーザーの処置: 正しいユーザー ID とパスワードを使用して、WebSphere Application Server プロファイルを開始してください。

CIYBA0281E サーバー {0} で IPv6 が有効になっていません。インストール前に、サーバーで IPv6 を有効にしてください。

説明: 示されているサーバーで IPv6 が構成されていません。

ユーザーの処置: 示されているサーバーで IPv6 を有効にしてください。

CIYBA0282E メディア・サーバーの {0} ディレクトリにある一部のファイルが破損しています。

説明: すべてのインストール・ファイルには、インストール前に検証される必要がある MD5 チェックサムがあります。示されているディレクトリにある一部のファイルの MD5 チェックサムが、有効な MD5 チェックサムではありません。

ユーザーの処置: インストール・パッケージをもう一度解凍するか、このディレクトリにファイルを再コピーしてください。

CIYBA0283E サーバー {0} で SSH が正しく構成されていません。SSH を使用したパスワード認証が必要ですが、サーバーで構成されていません。

説明: 示されているサーバーの SSH 構成が正しくありません。

ユーザーの処置: /etc/ssh/sshd_config ファイルを、

以下のように再構成してください。

- AllowUsers ステートメントと AllowGroups ステートメントをすべて削除します。
- PermitRootLogin に YES を指定します。
- Password Authentication に YES を指定します。

この変更により、root ユーザーのみが、パスワード認証による SSH を使用してサーバーにアクセスできるようになります。

CIYBA0284E シンボリック [ソフト] リンクとなる {0} が検出されました。シンボリック・リンクは許可されません。

説明: ファイルまたはディレクトリへのシンボリック・リンクまたはソフト・リンクはサポートされていません。

ユーザーの処置: シンボリック・リンクを除去して、直接パスまたはファイル名を指定してください。

CIYBA0285E Tivoli Directory Server インスタンス {0} がサーバー {1} で始動されていません。

説明: 示されている Tivoli Directory Server インスタンスを始動する必要があります。

ユーザーの処置: Tivoli Directory Server を始動してください。

CIYBA0286E IBM DB2 インスタンス {0} がサーバー {1} で始動されていません。

説明: 示されている DB2 インスタンスが始動されていません。

ユーザーの処置: DB2 インスタンスを始動してください。

CIYBA0287E プロファイル {0} の WebSphere Application Server {1} がサーバー {2} で始動されていません。

説明: 示されている WebSphere Application Server プロファイルが、示されているサーバーで始動されていません。

ユーザーの処置: WebSphere Application Server プロファイルを始動してください。

CIYBA0288E サーバー {0} の「localhost」が 127.0.0.1 にマップされていません。

説明: 各サーバーのホスト・ファイルで、localhost 項目が 127.0.0.1 にマップされている必要があります。

ユーザーの処置: サーバーのホスト・ファイルを更新して、localhost 値を 127.0.0.1 にマップしてください。

CIYBA0289I {1} サーバーに必要な数の CPU がありません。このマシンに必要な CPU の数は {0} です。

説明: サーバーの CPU リソースが不十分で、要件を満たしていません。

ユーザーの処置: 示されているサーバーに CPU リソースを追加してください。

CIYBA0301E テストを実行するためのボタンがクリックされましたが、一致するプロパティがプロパティ・ファイル内に見つかりませんでした。

説明: テストのためのプロパティが、プロパティ・ファイル内で見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 「リセット」をクリックします。これにより、変更が行われた場合に、プログラムが現在のプロパティ・ファイルを読み取るようになります。テストを再実行してください。

CIYBA0302E すべてのテストには特定のプロパティが必要です。class プロパティは、その 1 つです。パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: シーケンス番号

説明: テスト定義に class プロパティがありません。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイル内でシーケンス番号を検索します。テスト用の class プロパティを追加します。これはテストのクラス名です。通常、これはリモート実行エージェントのクラス名です (実行のためにテスト要求を IopCatRemoteResponder に転送するコード)。

例えば、以下のようなものがあります。

```
0070.classname=com.ibm.iop.cat.fw.remote.IopCatRemoter
```

CIYBA0303E すべてのテストには特定のプロパティが必要です。表示ラベル・プロパティはその 1 つです。パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: シーケンス番号

説明: テスト定義に表示ラベルがありません。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイル内でシーケンス番号を検索します。テスト用の displaylabel プロパティを追加します。これがボタンに表示されるテキストです

CIYBA0304E テストを実行するためのボタンがクリックされましたが、一致するテストがプロパティ・ファイル内に見つかりませんでした。

説明: 現在ロードされているプロパティ・ファイルは、要求されたテストを定義していません。

ユーザーの処置: 「リセット」をクリックします。現在のプロパティ・ファイルが再ロードされます。

CIYBA0305E テストを実行するためのボタンがクリックされましたが、テスト用の構成情報が見つかりませんでした。

説明: 構成情報がテストで使用できません。

ユーザーの処置: 「リセット」をクリックします。現在のプロパティ・ファイルが再ロードされます。

CIYBA0306E クラスによって指定されているコードが見つかりませんでした。パラメーター: {0}: クラス名 (未検出)

説明: classname がプロパティ・ファイル内で正しく指定されていないか、コードが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: IopCatRemoteResponder アプリケーションの共有ライブラリーを調べて、1 つ以上の共有ライブラリーが欠落していないか、または指定されていないかどうかを確認してください。

CIYBA0307E 共通変数はすべてのテストに適用されません。共通変数を使用して、名前変数、クラス変数、またはデバッグ変数を設定することはできません。パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: プロパティ・キー・ストリング

説明: Common を使用して、name、class、または debug が設定されています。

ユーザーの処置: キーを探して、問題の行を除去してください。例えば、すべてのテストに同じ名前を付けるために使用された common.name などです。

CIYBA0308E クラス {0}、メソッド {1} で例外が発生しました。詳細 {2}

説明: 例外が発生しました。

ユーザーの処置: 例外ストリングを調べて、テストが失敗した理由を判別してください。これは通常のテスト障害と考えられます。例えば、「接続が拒否されました (Connection refused)」は、通常、指定のポートで

CIYBA0309E • CIYBA0323E

listen していたプログラムがなかったため、サービスが実行されていないことを意味します。

CIYBA0309E {0},{1}0 - テスト [{2}] - 例外: {3}

説明: 示されているテストで実行時例外が発生しました。

ユーザーの処置: 詳細については、エラー・メッセージを確認してください。

CIYBA0310E このテストの実行中に予期しない例外が発生しました。

説明: 予期しない例外が発生しました。

ユーザーの処置: 追加の詳細については、他の例外を確認してください。

CIYBA0312I Web テストで、予期される HTTP 応答コードを受信しました (200 から 299 の範囲内またはプロパティ expectedRcode で指定された値)。パラメーター: {0}: クラス名

説明: テストが成功したことを示しています。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0313E Web テストで、予期される HTTP 応答コードを受信されませんでした (200 から 299 の範囲内またはプロパティ expectedRcode で指定された値)。パラメーター: {0}: クラス名 {1}: HTTP 応答コード

説明: 予期しない HTTP 応答コードを受け取りました。

ユーザーの処置: ブラウザーまたは `wget` コマンドを使用して、`hosturl` プロパティで指定されている URL を調べてください。

CIYBA0314I テスト応答コード: {0} 応答テキスト: {1} 詳細: {2}。

説明: このメッセージは、テスト応答をストリングとして返します。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYBA0315E すべてのテストでプロパティが必要です。このテストにプロパティが渡されませんでした。

説明: テストの呼び出しでプロパティがありませんでした。

ユーザーの処置: プロパティはフレームワークによって渡されるため、このメッセージは表示されないはずで、IBM ソフトウェア・サポートに連絡してください。

CIYBA0320E 出力テキスト「{1}」に目的のストリングが見つかりませんでした。クラス名 {0}

説明: SSH テストはサーバーにログインし、コマンドを実行し、予想されるストリングがコマンドからの出力にないか検査します。このテストのプロパティで、予想されるストリングが指定されていませんでした。

ユーザーの処置: テストの `expected` キーを確認してください。プロパティを追加または変更して、`commands` プロパティに指定されているコマンドの出力に含まれると予想されるストリングを指定してください。

CIYBA0322E 出力テキスト「{1}」に目的のストリングが見つかりませんでした。クラス名 {0}

説明: SSH テストはサーバーにログオンし、コマンドを実行し、予想されるストリングがコマンドからの出力にないか検査します。予想されるストリングが出力で検出されませんでした。

ユーザーの処置: テストと出力テキストの `expected` キーを確認してください。これはテストが失敗したことを示している可能性があります。出力テキストに「キーボード対話は許可されていません (keyboard interactive not allowed)」が含まれている場合は、リモート・サーバーにログオンするために使用されたユーザー ID またはパスワードが間違っている可能性があります。テストの `user`、`password`、および `hostname` の各プロパティを確認してください。パスワードは、鍵ストアのパスワードの別名です。

CIYBA0323E 予期しない例外「{1}」が発生しました。クラス名 {0}

説明: 予期しない例外が発生しました。

ユーザーの処置: 出力テキストに「キーボード対話は許可されていません (keyboard interactive not allowed)」が含まれている場合は、リモート・サーバーにログオンするために使用されたユーザー ID またはパスワードが間違っている可能性があります。テストの `user`、`password`、および `hostname` の各プロパティを確認してください。パスワードは、鍵ストアのパスワードの別名です。

CIYBA0340E テスト実行エージェント

(IopCatRemoteResponder) が入力 JSON データを解析できませんでした。 パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: POST データ

説明: ユーザー・インターフェースおよびテスト実行エージェントは、JSON を使用して通信します。 このエラーは、テスト実行エージェント (IopCatRemoteResponder) が、入力 JSON データを解析できなかったことを意味します。

ユーザーの処置: POST データを調べて、正しい JSON 形式になっていることを確認してください。

CIYBA0341E テストの実行中に例外が発生しました。

パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: 例外ストリング

説明: テストの実行中に例外が発生しました。

ユーザーの処置: 例外ストリングを調べて、テストが失敗した理由を判別してください。 これは通常のテスト障害と考えられます。 例えば、「接続が拒否されました」の場合は、通常、ポートで listen していたプログラムがなかったため、サービスが実行されていないことを意味します。

CIYBA0342E テスト実行エージェント

(IopCatRemoteResponder) がユーザー・インターフェースに応答を返信できませんでした。 パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: 例外ストリング

説明: ユーザー・インターフェースおよびテスト実行エージェントは、JSON を使用して通信します。 このエラーは、テスト実行エージェント (IopCatRemoteResponder) が、ユーザー・インターフェースに応答を返信できなかったことを意味します。

ユーザーの処置: 例外ストリングを調べて、応答を送信できなかった理由を判別してください。 このエラーは、テストに要した時間が長すぎたため、ユーザー・インターフェースがもはや待機していない場合に発生することがあります。

CIYBA0343E 予想されるキー接頭部がありません。 パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: プロパティ・キー・ストリング

説明: 特定のテストのすべてのプロパティには、接頭部として同じ数値が付きます。 これにより、プロパティ・ファイルは位置で判断されなくなるため、グループ化が可能になります。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイル内でキーを検索して、適切な接頭部を追加してください。 例えば、以下は誤りです。

```
classname      - com.ibm.iop.cat.fw.remote.IopCatRemoter
0050.rhosturl   - https://$APP_HOSTNAME_1]-9443/IopCatRemoteResponder/IopCatRemoteResponder
0050.remoteclassname - com.ibm.iop.cat.fw.Echo
0050.displaylabel - Internal Diagnostic (Echo REST remoted)
0050.comment    - Self diagnostic CAT check. Tests link between to CAT modules.
0050.failinfoage - cct_echo_rest_remoded_test.html
```

以下のようにする必要があります。

```
0050.classname      - com.ibm.iop.cat.fw.remote.IopCatRemoter
0050.rhosturl       - https://$APP_HOSTNAME_1]-9443/IopCatRemoteResponder/IopCatRemoteResponder
0050.remoteclassname - com.ibm.iop.cat.fw.Echo
0050.displaylabel   - Internal Diagnostic (Echo REST remoted)
0050.comment        - Self diagnostic CAT check. Tests link between to CAT modules.
0050.failinfoage    - cct_echo_rest_remoded_test.html
```

CIYBA0345E 無効なキー - キー接頭部が数値ではありません。 パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: シーケンス番号

説明: すべてのテストには、特定のテストのすべてのプロパティをグループ化する数値接頭部が必要です。 指定した接頭部が数値ではありません。

ユーザーの処置: プロパティ・ファイル内でシーケンス番号を検索します。 接頭部を数値に変更し、この同じ接頭部をテストの残りのプロパティに使用してください。

CIYBA0347E 例外が発生しました。 パラメーター: {0}: クラス名 {1}: メソッド名 {2}: 例外ストリング

説明: 例外が発生しました。

ユーザーの処置: 例外ストリングを調べて、テストが失敗した理由を判別してください。 これは通常のテスト障害と考えられます。 例えば、「接続が拒否されました」の場合は、通常、ポートで listen していたプログラムがなかったため、サービスが実行されていないことを意味します。

CIYBA0348E テストを実行するためのボタンがクリックされましたが、一致するプロパティがプロパティ・ファイル内に見つかりませんでした。

説明: テストでプロパティが見つかりませんでした。 プロパティ・ファイルが変更された可能性があります。

ユーザーの処置: 「リセット」をクリックします。 現在のプロパティ・ファイルが再ロードされます。

CIYBA0349E クラスによって指定されているコードが見つかりませんでした。 パラメーター: {0}: クラス名 (未検出)

説明: classname がプロパティ・ファイル内で正しく指定されていないか、コードが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: TopCatRemoteResponder の共有ライブラリーを調べて、1 つ以上の共有ライブラリーが欠落していないかどうかを確認してください。

CIYBA0401E プラットフォーム制御ツールのプロパティ・テンプレート・ファイル名が指定されなかったか、正しくありませんでした。

説明: プラットフォーム制御ツール プロパティ・テンプレート・ファイルのパラメーターがありません。

ユーザーの処置: プラットフォーム制御ツール プロパティ・ファイルの正しい名前を入力してください。

CIYBA0402E IBM Intelligent Operations Center トポロジー・プロパティ・ファイル名が指定されなかったか、正しくありませんでした。

説明: IBM Intelligent Operations Center トポロジー・プロパティ・ファイルのパラメーターがないか、正しくありません。

ユーザーの処置: IBM Intelligent Operations Center トポロジー・プロパティ・ファイルの正しい名前を入力してください。

CIYBA0403E プラットフォーム制御ツール プロパティ・テンプレート・ファイル名が指定されなかったか、正しくありませんでした。

説明: プラットフォーム制御ツール プロパティ・テンプレート・ファイルを指定しているパラメーターがありません。

ユーザーの処置: プラットフォーム制御ツール トポロジー・プロパティ・ファイルの正しいファイル名を入力してください。

CIYBA0404E IBM Intelligent Operations Center トポロジー・プロパティ・ファイルが見つかりません。

説明: IBM Intelligent Operations Center トポロジー・プロパティ・ファイルが見つかりません。

ユーザーの処置: IBM Intelligent Operations Center トポロジー・プロパティ・ファイルが、インストール・サーバーの `install_home/ioc16/topology` ディレクトリーに配置されていることを確認してください。

CIYBA0405E トポロジー・ファイルに次のプロパティのパスワードがありません:

説明: 示されているトポロジー・プロパティ・ファイルでパスワードが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: トポロジー・ファイルのパスワードが必要です。トポロジーのパスワードを入力してください。

CIYRS0000E システム・プロパティ {0} の作成中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} という名前のシステム・プロパティが作成されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0000I システム・プロパティ {0} が作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0001E システム・プロパティ {0} の更新中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} という名前のシステム・プロパティが更新されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0001I システム・プロパティ {0} が更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0002E システム・プロパティ {0} の削除中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} という名前のシステム・プロパティが削除されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0002I システム・プロパティ {0} が削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0003E ペイン {0} の作成中にエラーが発生しました。

説明: 内部 SQL 例外が発生したため、「フィルター」パネル REST サービスが挿入要求を完了できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0003I ペイン {0} が作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0004E ペイン {0} の更新中にエラーが発生しました。

説明: 「フィルター」パネル REST サービスが更新要求を完了できませんでした。同時に行われた更新要求が進行中であることが原因として考えられます。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0004I ペイン {0} が更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0005E ペイン {0} の削除中にエラーが発生しました。

説明: 内部 SQL 例外が発生したため、「フィルター」パネル REST サービスが削除要求を完了できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0005I ペイン {0} が削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0006I 「日付と時刻」ペインが保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0007E データ・ソース {0} の削除中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、指定されたデータ・ソースは削除されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0007I データ・ソース {0} が削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0008E データ・ソース {0} の保存中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、指定されたデータ・ソースは保存されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0008I データ・ソース {0} が保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0009E データ・ソース {0} の翻訳済みテキストを保存中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、指定されたデータ・ソースに入力した翻訳済みテキストは保存されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示

し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0010E データ・ソース {0} にプロパティーが見つかりませんでした。

説明: 指定されたデータ・ソースにプロパティーが見つかりませんでした。

ユーザーの処置: データ・ソースに対して指定した値がすべて正しいことを確認してください。カスタマイズされた受信側を作成した場合は、受信側に問題がないか確認してください。ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0011E ドラフト状況でない標準操作手順は編集できません。

説明: ドラフト状況でない標準操作手順定義を編集しようとした。標準操作手順定義を編集するには、先にドラフト・バージョンを作成する必要があります。

ユーザーの処置: 編集する標準操作手順定義のドラフト・バージョンを作成してください。ドラフトの作成について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

157 ページの『ドラフトおよび承認の操作』標準操作手順定義を作成すると、最初はドラフト・バージョンが保存されます。ドラフト・バージョンを承認用に送信すると、あるバージョンの標準操作手順定義が保存され、承認タイム・スタンプ値がそのバージョンの名前となります。承認されたバージョンを基にした別のドラフトを作成することができます。

CIYRS0012E 暫定的な更新は要求できません。

説明: エラーが発生したため、データ・サーバーが標準操作手順定義に対する更新を処理できません。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』

IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0013E 標準操作手順を作成する権限がありません。

説明: 標準操作手順定義を構成できるのは、許可された標準操作手順作成者および管理者のみです。許可された標準操作手順作成者は、SopAuthorRoles システム・プロパティにリストされます。許可された標準操作手順管理者は、SopAdminRoles システム・プロパティにリストされます。

ユーザーの処置: 権限を持つ標準操作手順の作成者または管理者に、標準操作手順定義を代わりに作成するよう依頼してください。または、権限を持つ標準操作手順の作成者のリストに自分を追加するよう管理者に依頼してください。標準操作手順の作成および管理に関連する役割について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連概念:

110 ページの『標準操作手順役割の定義』
標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

CIYRS0014E 現在のユーザーには、暫定的な標準操作手順定義が存在します。

説明: 選択した標準操作手順定義については、以前にドラフト・バージョンが作成されており、それがコミットされていません。

ユーザーの処置: 選択した標準操作手順定義の以前に作成したドラフト・バージョンをコミットまたは削除してください。

CIYRS0015E 選択した標準操作手順定義はドラフト状況ではありません。

説明: 標準操作手順定義がドラフト状況ではないため、この定義に変更を加えることができません。

ユーザーの処置: 変更を試行する前に、標準操作手順定義のドラフト・バージョンを作成してください。

関連タスク:

157 ページの『ドラフトおよび承認の操作』

標準操作手順定義を作成すると、最初はドラフト・バージョンが保存されます。ドラフト・バージョンを承認用に送信すると、あるバージョンの標準操作手順定義が保存され、承認タイム・スタンプ値がそのバージョンの名前となります。承認されたバージョンを基にした別のドラフトを作成することができます。

CIYRS0016E 承認要求が保留中であるため、ドラフト・バージョンを作成できませんでした。

説明: 承認用に送信されたドラフトがある場合は、標準操作手順定義のドラフト・バージョンを作成できません。

ユーザーの処置: 標準操作手順定義の別のドラフト・バージョンを作成する前に、ドラフトを破棄するか、現在のドラフトが承認されるまで待機してください。ドラフトおよび承認の操作について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

157 ページの『ドラフトおよび承認の操作』

標準操作手順定義を作成すると、最初はドラフト・バージョンが保存されます。ドラフト・バージョンを承認用に送信すると、あるバージョンの標準操作手順定義が保存され、承認タイム・スタンプ値がそのバージョンの名前となります。承認されたバージョンを基にした別のドラフトを作成することができます。

CIYRS0017E 参照が見つかりませんでした。

説明: 標準操作手順定義に含まれる参照が見つかりません。その参照が参照ライブラリーから削除されていることが原因として考えられます。

ユーザーの処置: 参照がライブラリー内に存在するかどうかを確認してください。必要に応じて、以下のうち 1 つ以上のオプションを実行します。

- ライブラリーに新しい参照を追加します。
- 標準操作手順定義内の参照を編集します。
- 標準操作手順インスタンス内の参照を編集します。

CIYRS0018E 共有参照を編集できません。

説明: 共有参照を編集できるのは、ReferenceLibrarianRoles システム・プロパティにリストされているユーザーのみです。SopAdminRoles システム・プロパティおよび SopAuthorRoles システム・プロパティにリストされているユーザーは、自分が作成した参照のみを編集および削除できます。

ユーザーの処置: 権限を持つ参照ライブラリアンに、代わりに共有参照を編集するよう依頼してください。

関連概念:

110 ページの『標準操作手順役割の定義』標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

CIYRS0019E 標準操作手順定義は編集できません。

説明: 標準操作手順定義がドラフト状況ではないため、この定義を編集できません。別の管理者が標準操作手順定義のドラフト・バージョンを作成している可能性があります。

ユーザーの処置: 別の管理者が所有するドラフト・バージョンが存在するかどうか確認してください。ドラフト・バージョンが存在する場合は、既存のドラフト・バージョンがコミットまたは削除されてから、別のドラフト・バージョンを作成するようにしてください。

関連タスク:

157 ページの『ドラフトおよび承認の操作』標準操作手順定義を作成すると、最初はドラフト・バージョンが保存されます。ドラフト・バージョンを承認用に送信すると、あるバージョンの標準操作手順定義が保存され、承認タイム・スタンプ値がそのバージョンの名前となります。承認されたバージョンを基にした別のドラフトを作成することができます。

CIYRS0020E 項目が見つかりませんでした。

説明: 標準操作手順で参照されているデータ項目が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: データ項目の ID を確認してください。

CIYRS0021E 受信者が指定されていません。

説明: 通知の受信者 E メール・アドレスを 1 つ以上指定する必要があります。

ユーザーの処置: 通知の受信者 E メール・アドレスを 1 つ以上入力してください。

CIYRS0022E 有効な通知要求が提出されていません。

説明: 通知テンプレートに含まれるコンテンツの形式が正しくありません。

ユーザーの処置: 通知テンプレートに含まれるコンテンツの形式を確認し、修正してください。

CIYRS0023E フィルター基準と一致する標準操作手順定義が見つかりませんでした。

説明: 要求で指定されたフィルター基準と一致する標準操作手順定義がありません。

ユーザーの処置: 要求内のフィルター基準を確認し、修正してください。

CIYRS0024E 内部処理エラーが発生しました。

説明: 内部処理エラーが発生したため、要求を処理できませんでした。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連概念:

449 ページの『トレースの使用可能化およびログ・ファイルの表示』

IBM Intelligent Operations Center での問題をトラブルシューティングするには、いくつかのシステムのログ・ファイルを分析することが必要な場合があります。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0025E インポートされた XML ファイルは無効です。

説明: インポートされた XML ファイルに無効な XML が含まれているため、このファイルを読み取ることができませんでした。

ユーザーの処置: XML ファイルを確認して有効な XML が含まれていることを確認してから、再度 XML ファイルをインポートしてください。

CIYRS0026E 入力データの形式が無効です。

説明: REST サービスに対する要求に正しくない形式のデータが含まれていました。

ユーザーの処置: 要求内のデータの形式を確認し、再度試行してください。

CIYRS0027E クライアント要求を処理中に通信エラーが発生しました。

説明: 通信エラーが発生したため、要求内のデータを読み取ることができませんでした。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。

さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0028E 無効な自動化の詳細が指定されました。

説明: 自動化アクティビティーに関する指定された詳細が不十分です。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティーについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0029E 使用可能な自動化キーがありません。

説明: 自動化アクティビティーの自動化キーが使用可能ではありません。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティーについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0030E 自動化アクティビティーを開始できませんでした。

説明: 自動化アクティビティーを開始できませんでした。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティーについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要

な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0031E 自動化アクティビティーを停止できませんでした。

説明: 完了した自動化アクティビティーを停止できませんでした。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティーについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0032E 処理できない非送信請求応答を自動化エンジンから受け取りました。

説明: 処理できない非送信請求応答を自動化エンジンから受け取りました。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティーについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0033E ハンドルID が {0} の自動化は見つかりませんでした。

説明: 自動化アクティビティーが開始しようとした自動化作業指示書 (ハンドル ID {0}) が見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティーについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0034E 自動化エンジンからエラー {0} が返されました。

説明: 自動化エンジンで、エラー・コード {0} が示す自動化アクティビティーに関する問題が発生しました。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティーについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0035E アクティビティーは自動化アクティビティーではありません。

説明: 自動化アクティビティーでないアクティビティーの自動化 ID が要求されました。

ユーザーの処置: アクティビティーの自動化 ID を要求する前に、そのアクティビティーが自動化アクティビティーであることを確認してください。

CIYRS0036I {0} 個の標準操作手順がインポートされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0037E インポート・ターゲット・システムのアクティビティー・タイプ定義が、インポート・ソース・システムのアクティビティー・タイプ定義と整合していません。

説明: ソース・システムで指定されたアクティビティー・タイプが、ターゲット・システムで指定されたアクティビティー・タイプと一致しません。

ユーザーの処置: 標準操作手順定義をインポートする前に、ソース・システムとターゲット・システムの両方で同じタイプのアクティビティーが指定されていることを確認してください。

CIYRS0038E 必須アクティビティーは削除できません。

説明: 起動された標準操作手順のインスタンスについては、標準操作手順の定義で必須として示されているアクティビティーを削除できません。

ユーザーの処置: 標準操作手順の定義で必須として示されているアクティビティーは完了する必要があります。

CIYRS0039E 完了またはスキップしたアクティビティーは編集できません。

説明: 編集しようとしているアクティビティーは、既に完了しているか、スキップされています。

ユーザーの処置: なし。

CIYRS0041E 標準操作手順定義に基づいて作成されたインスタンスが存在する場合は、その標準操作手順定義を削除できません。

説明: 削除しようとしている標準操作手順定義にアクティブ・インスタンスが存在します。アクティブ・インスタンスが存在する標準操作手順定義は削除できません。

ユーザーの処置: 選択した標準操作手順定義を削除しようとする前に、その定義のすべてのアクティブ・インスタンスの状況が完了になるまで待機してください。標準操作手順のインスタンスの状況の表示については、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

158 ページの『定義の表示および編集』標準操作手順定義を表示および編集するには、以下の手順を実行してください。

CIYRS0042E 停止できるのは、開始された標準操作手順のみです。

説明: 開始されていない標準操作手順のインスタンスを停止しようとしてしました。

ユーザーの処置: 「ソリューション管理」ビュー、または標準操作手順 REST インターフェースを使用して、標準操作手順のインスタンスの状況を確認してください。

関連タスク:

160 ページの『標準操作手順のインスタンスの表示および編集』

標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

CIYRS0043E 開始できるのは、停止している標準操作手順のみです。

説明: 停止されていない標準操作手順のインスタンスを開始しようとしてしました。

ユーザーの処置: 「ソリューション管理」ビュー、または標準操作手順 REST インターフェースを使用して、標準操作手順のインスタンスの状況を確認してください。

関連タスク:

160 ページの『標準操作手順のインスタンスの表示および編集』

標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

CIYRS0044E 期間の単位に「なし」以外を選択した場合は、有効な期間値を指定する必要があります。

説明: 「なし」以外の期間単位を選択したにもかかわらず、アクティビティの期間の値を入力していません。

ユーザーの処置: 「期間」フィールドに、アクティビティの期間を表す数値を入力してください。

CIYRS0045E 「名前」に値を入力する必要があります。

説明: 標準操作手順定義の名前に値を入力していません。

ユーザーの処置: 「名前」フィールドに、標準操作手順定義の名前を入力してください。

CIYRS0046E 以下のフィールドが最大長を超えています。

説明: 指定されたフィールドに最大長を超えるデータが含まれています。

ユーザーの処置: 各フィールドのデータが、以下の表に示す最大フィールド長を超えないようにしてください。

フィールド	最大長
NAME	128
DESCRIPTION	1024
COMMENT	1024
PROPERTY	64
CRITERIA	512
URI	2083
STATUS	256

CIYRS0047E 標準操作手順のインポート中にエラーが発生しました: {0}

説明: {0} で示された標準操作手順定義を、インポートした XML ファイルからインポートできませんでした。

ユーザーの処置: インポート元の XML ファイルで、{0} で示された標準操作手順定義の形式を確認してください。詳細については、ログ・ファイルを確認してください。

関連概念:

449 ページの『トレースの使用可能化およびログ・ファイルの表示』

IBM Intelligent Operations Center での問題をトラブルシューティングするには、いくつかのシステムのログ・ファイルを分析することが必要な場合があります。

CIYRS0048E 自動化の開始中にエラーが発生しました。自動化エンジンから次のエラーがレポートされました: {0}。

説明: {0} で示されるエラーが自動化エンジンで発生したため、自動化アクティビティを開始できませんでした。

ユーザーの処置: 自動化アクティビティについては、このトピックの末尾にある IBM SmartCloud Control

Desk 7.5.1 の製品資料へのリンクを参照してください。自動化アクティビティーに関する問題の解決に支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

関連情報:

 IBM SmartCloud Control Desk バージョン 7.5.1 の製品資料

CIYRS0049E この標準操作手順定義に関連付けられている標準操作手順のインスタンスを削除する権限がありません。

説明: 標準操作手順のインスタンスを削除できるのは、標準操作手順定義で書き込み権限を付与されている、権限を持つ標準操作手順管理者およびユーザーのみです。許可された標準操作手順管理者は、SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされます。

ユーザーの処置: 標準操作手順定義で書き込み権限を付与された、権限を持つ標準操作手順管理者またはユーザーに、代わりに標準操作手順のインスタンスを削除するよう依頼してください。標準操作手順の管理に関する役割について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連概念:

110 ページの『標準操作手順役割の定義』
標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

関連タスク:

154 ページの『標準操作手順定義の構成』
標準操作手順を定義するときに、標準操作手順に組み込まれるアクティビティーを定義します。標準操作手順のアクティビティーの一部または全部について、実行する順序を指定することができます。例えば、直前のアクティビティーが完了するか、またはスキップされない限り、特定のアクティビティーが開始されないように指定することができます。また、所有者およびモニターを標準操作手順に割り当てます。

CIYRS0050E 標準操作手順またはアクティビティーのいずれかを更新する権限がありません。

説明: 標準操作手順のインスタンスと関連アクティビティーを更新できるのは、標準操作手順定義で書き込み権限を付与されている、権限を持つ標準操作手順管理者およびユーザーのみです。許可された標準操作手順管理者は、SopAdminRoles システム・プロパティーにリストされます。

ユーザーの処置: 標準操作手順定義で書き込み権限を付与された、権限を持つ標準操作手順管理者またはユーザーに、代わりに標準操作手順のインスタンスを削除するよう依頼してください。標準操作手順の管理に関する役割について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連概念:

110 ページの『標準操作手順役割の定義』
標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

関連タスク:

154 ページの『標準操作手順定義の構成』
標準操作手順を定義するときに、標準操作手順に組み込まれるアクティビティーを定義します。標準操作手順のアクティビティーの一部または全部について、実行する順序を指定することができます。例えば、直前のアクティビティーが完了するか、またはスキップされない限り、特定のアクティビティーが開始されないように指定することができます。また、所有者およびモニターを標準操作手順に割り当てます。

CIYRS0053E 要求が許可されませんでした。

説明: リソースにアクセスする権限がありません。

ユーザーの処置: 権限を持つ標準操作手順管理者に、代わりに要求を作成するよう依頼してください。または、権限を持つ標準操作手順管理者のリストに自分を追加するよう管理者に依頼してください。標準操作手順の管理に関する役割について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連概念:

110 ページの『標準操作手順役割の定義』標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

CIYRS0054E 要求が許可されなかったか、または ID が存在しません。

説明: リソースにアクセスする権限がないか、存在しない ID を指定しました。

ユーザーの処置: リソースの ID を確認してください。リソースへのアクセス権限を持つ役割については、このトピックの末尾にあるエラー・メッセージ CIYRS0053E へのリンクを参照してください。

関連情報:

480 ページの『CIYRS0053E』
要求が許可されませんでした。

CIYRS0055E このアクティビティは開始できません。

説明: 選択したアクティビティは待機中状況ではないため、このアクティビティを開始できません。

ユーザーの処置: 「ソリューション管理」ビュー、または標準操作手順 REST インターフェースを使用して、アクティビティの状況を確認してください。

関連タスク:

160 ページの『標準操作手順のインスタンスの表示および編集』標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

CIYRS0056E このアクティビティはスキップできません。

説明: このアクティビティは標準操作手順定義で必須アクティビティとして指定されているため、スキップできません。

ユーザーの処置: 必須アクティビティを完了してください。

CIYRS0057E このアクティビティは完了できません。

説明: 開始されていないアクティビティを完了しようとしてしました。

ユーザーの処置: 「ソリューション管理」ビュー、または標準操作手順 REST インターフェースを使用して、アクティビティの状況を確認してください。

関連タスク:

160 ページの『標準操作手順のインスタンスの表示および編集』標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

CIYRS0058E 参照が見つからなかったか、解析できませんでした。

説明: 参照 URL が正しくないか、その URL にあるコンテンツが正しくありません。例えば、参照コンテンツが削除されていることなどが考えられます。

ユーザーの処置: 参照 URL を確認してください。URL が正しい場合は、その URL にあるコンテンツを確認してください。必要に応じ、参照 URL または参照コンテンツを修正してください。メッセージ CIYRS0017E に関する関連トピックも参照してください。

関連情報:

475 ページの『CIYRS0017E』
参照が見つかりませんでした。

CIYRS0059E このアクティビティは停止できません。

説明: 開始されていないアクティビティを停止しようとしてしました。

ユーザーの処置: 「ソリューション管理」ビュー、または標準操作手順 REST インターフェースを使用して、アクティビティの状況を確認してください。

関連タスク:

160 ページの『標準操作手順のインスタンスの表示および編集』標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

CIYRS0060E このアクティビティーは開始していません。

説明: 開始されていないアクティビティーの自動化状況を照会しようとしていました。

ユーザーの処置: 「ソリューション管理」ビュー、または標準操作手順 REST インターフェースを使用して、アクティビティーの状況を確認してください。

関連タスク:

160 ページの『標準操作手順のインスタンスの表示および編集』

標準操作手順定義に関して、起動された標準操作手順のインスタンスを確認できます。インスタンスは「標準操作手順の詳細」ウィンドウに表示でき、そこでインスタンスを編集したり、インスタンスの状況を変更したりできます。

CIYRS0061E 参照を作成、編集、または削除する権限がありません。

説明: ライブラリー内の参照を作成、編集、または削除する権限を付与されているのは、以下のシステム・プロパティーにリストされているユーザーのみです。

- ReferenceLibrarianRoles
- SopAdminRoles
- SopAuthorRoles

参照の作成、編集、および削除について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

ユーザーの処置: 権限を持つユーザーに、代わりに参照を作成、編集、または削除するよう依頼してください。

関連概念:

110 ページの『標準操作手順役割の定義』

標準操作手順コンポーネントは、最新の認証資格情報を取得して、各ユーザーにどのアクションを実行する権限があるかを判別します。各ユーザーには、そのユーザーが割り当てられている LDAP 役割に基づいた標準操作手順アクションを実行する権限があります。また、各ユーザーは、標準操作手順オブジェクトに関連付けて使用される識別名 (DN) と一致する必要があります。

CIYRS0062E 現在使用中の参照は削除できません。

説明: 削除しようとしているライブラリー内の参照は、アクティブな標準操作手順のインスタンスで使用されています。

ユーザーの処置: 標準操作手順のアクティブ・インスタンスを調べて、参照が使用されている場所を確認し、そのインスタンスが完了するまで待機してください。また、今後エラーが発生しないように、すべての標準操作

手順定義からその参照を削除してください。その上で、ライブラリー内の参照を削除してください。

関連タスク:

158 ページの『定義の表示および編集』

標準操作手順定義を表示および編集するには、以下の手順を実行してください。

CIYRS0063E 入力した期間の値が無効です。値を確認し、再試行してください。

説明: アクティビティーの期間を指定する場合は、値が整数でなければなりません。

ユーザーの処置: 「期間」フィールドに整数を入力してください。

CIYRS0065E フィルター/お気に入り {0} の保存中にエラーが発生しました。

説明: 内部 SQL 例外が発生したため、「フィルター」パネル REST サービスが挿入要求を完了できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』

IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0065I フィルター/お気に入り {0} が保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0066E フィルター/お気に入り {0} の削除中にエラーが発生しました。

説明: 内部 SQL 例外が発生したため、「フィルター」パネル REST サービスが削除要求を完了できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスクバリーの実行を行っ
ています。

CIYRS0066I フィルター {0} が削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0067E ドラフト状況の標準操作手順は起動できません。

説明: 起動しようとしている標準操作手順のバージョンはドラフト状況です。起動できるのは、承認された標準操作手順のバージョンのみです。

ユーザーの処置: ドラフト標準操作手順定義を承認用に送信するか、以前に承認されたバージョンの標準操作手順定義 (適切なバージョンが存在する場合) を起動してください。標準操作手順のドラフト・バージョンおよび承認済みバージョンの操作について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

157 ページの『ドラフトおよび承認の操作』
標準操作手順定義を作成すると、最初はドラフト・バージョンが保存されます。ドラフト・バージョンを承認用に送信すると、あるバージョンの標準操作手順定義が保存され、承認タイム・スタンプ値がそのバージョンの名前となります。承認されたバージョンを基にした別のドラフトを作成することができます。

CIYRS0068E 少なくとも 1 つのアクティビティ定義を定義する必要があります。

説明: 標準操作手順定義に 1 つ以上のアクティビティ定義を追加する必要があります。

ユーザーの処置: 「追加」をクリックします。「アクティビティ定義の作成」ウィンドウで、「名前」リストからアクティビティ定義を選択するか、新規アクティビティ定義を指定します。

関連タスク:

154 ページの『標準操作手順定義の構成』
標準操作手順を定義するときに、標準操作手順に組み込まれるアクティビティを定義します。標準操作手順のアクティビティの一部または全部について、実行する順序を指定することができます。例えば、直前のアクティビティが完了するか、またはスキップされない限り、特定のアクティビティが開始されないように指定することができます。また、所有者およびモニターを標

準操作手順に割り当てます。

CIYRS0070I 「保存済みフィルター/お気に入り」ペインが保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0071E システム・プロパティの作成中にエラーが発生しました。{0} という名前のシステム・プロパティは既に存在します。

説明: 既に別のシステム・プロパティに割り当てられている名前をシステム・プロパティに割り当てたため、システム・プロパティを作成できませんでした。システム・プロパティの名前は固有でなければなりません。

ユーザーの処置: 固有の名前を指定してシステム・プロパティを作成してください。

CIYRS0072E イメージ・パス {0} が見つかりませんでした。

説明: パス値 {0} が存在しません。イメージのパス、またはイメージ・ファイル名が正しくありません。

ユーザーの処置: イメージ・パスとファイル名を確認および修正してから、要求を再送信してください。

CIYRS0073E データ・ソースに必要なデータ・ソース・ラベルがありません。

説明: 「データ・ソース・ラベル」フィールドにデータ・ソースの名前を指定していません。

ユーザーの処置: 「データ・ソース・ラベル」フィールドにデータ・ソースの名前を指定してください。

CIYRS0074E データ・ソースに必要な接続プロトコルがありません。

説明: データ・ソースに対してデータ収集の方法を指定していません。

ユーザーの処置: データ・ソースのデータ収集方法を、サポートされるオプション (標準 CSV ファイルまたは DB2 データベース) から指定してください。

CIYRS0075E このデータ・ソース接続プロトコルはサポートされていません。

説明: データ・ソースに対して指定したデータ収集の方法をシステムが認識しません。

ユーザーの処置: データ・ソースのデータ収集方法を、

サポートされるオプション (標準 CSV ファイルまたは DB2 データベース) から指定してください。

CIYRS0076E 指定された接続情報の値の組み合わせでは、データ・ソース・プロパティは見つかりませんでした。

説明: 「接続情報」フィールドに指定された値を持つプロパティが、データ・ソースに見つかりませんでした。

ユーザーの処置: 「接続情報」フィールドの値がすべて正しいことを確認し、再試行してください。

CIYRS0077E CSV ディレクトリー・パスが欠落しているか、誤っています。

説明: CSV ファイルのファイル・パスが指定されていないか、「ディレクトリー」フィールド内のファイル・パスが正しくありません。

ユーザーの処置: 「ディレクトリー」フィールド内のファイル・パスが、CSV ファイル・データ・ソースの正しいファイル・パスであることを確認してください。

CIYRS0078E CSV ファイル名が欠落しているか、誤っています。

説明: ファイル名が指定されていないか、「ファイル名」フィールド内のファイル名が正しくありません。

ユーザーの処置: CSV ファイル・データ・ソースの正しいファイル名が「ファイル名」フィールドに入力されていることを確認してください。

CIYRS0079E CSV ファイルが見つからないか、読み取れませんでした。

説明: 「接続情報」フィールドに指定された値を使用する CSV ファイルをシステムが検出できません。またはファイルが検出されましたが読み取ることができません。

ユーザーの処置: 「接続情報」フィールドに指定された値に対応する CSV ファイルが存在することを確認してください。また、コンテンツが標準形式であることを確認してください。

CIYRS0080E データベース・タイプが欠落しているか、誤っています。

説明: 「データの収集方法 (How to acquire data)」に正しい値を指定しませんでした。

ユーザーの処置: データ・ソースのデータ収集方法を、サポートされるオプション (標準 CSV ファイルまたは

DB2 データベース) から指定してください。

CIYRS0081E ホスト名または IP を ping できませんでした。

説明: システムが「ホスト名または IP」フィールドの値を ping したときに、応答が受信されませんでした。

ユーザーの処置: ホスト名または IP の値が正しいことを確認してください。ファイアウォールに問題がないことを確認してください。

CIYRS0082E データベース・ポートが欠落しているか、誤っています。

説明: データベースの「ポート」フィールドに値が指定されていないか、指定された値が正しくありません。

ユーザーの処置: データベース・ポートの値が正しいことを確認してください。

CIYRS0083E データベース・ユーザー ID が欠落しているか、誤っています。

説明: データベースの「ユーザー ID」フィールドに値が指定されていないか、指定された値が正しくありません。

ユーザーの処置: データベース・ユーザー ID の値が正しいことを確認してください。

CIYRS0084E データベース・パスワードが欠落しているか、誤っています。

説明: データベースの「パスワード」フィールドに値が指定されていないか、指定された値が正しくありません。

ユーザーの処置: データベース・パスワードの値が正しいことを確認してください。

CIYRS0085E データベース名が欠落しているか、誤っています。

説明: 「データベース名」フィールドに値が指定されていないか、指定された値が正しくありません。

ユーザーの処置: データベース名の値が正しいことを確認してください。

CIYRS0086E データベース表が欠落しているか、誤っています。

説明: 「データベース表」フィールドに値が指定されていないか、指定された値が正しくありません。

ユーザーの処置: データベース表名が、スキーマ接頭部

(IOC.STAGING など) で完全に修飾されていることを確認してください。

CIYRS0087E 指定されたホスト名、ポート、ユーザー ID、およびパスワードの組み合わせでは、プログラムはデータベースに接続できませんでした。

説明: システムが「接続情報」フィールドに指定された値でデータベースに接続できません。

ユーザーの処置: 「接続情報」フィールドの値が、データベース・データ・ソースの接続用として正しいことを確認してください。

CIYRS0088E データベース表名にスキーマ接頭部がありません。

説明: 「データベース表」フィールドの値にスキーマ接頭部がありません。

ユーザーの処置: データベース表名が、スキーマ接頭部 (IOC.STAGING など) で完全に修飾されていることを確認してください。

CIYRS0089E カテゴリ {0} の更新中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているカテゴリが作成されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0089I カテゴリ {0} が作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0091E コレクション {0} の作成中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているコレクションが作成されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示

し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0091I コレクション {0} が作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0092E コレクション {0} の更新中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているコレクションが更新されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0092I コレクション {0} が更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0093E ロケーション・マップ {0} の作成中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているロケーション・マップが作成されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYRS0093I ロケーション・マップ {0} が作成されま
した。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0094E ロケーション・マップの更新中にエラーが
発生しました。

説明: エラーが発生したため、ロケーション・マップは
更新されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示
し、再試行してください。問題が解決しない場合は、デ
ータ・サーバーが稼働しており、正しく構成されている
ことを確認できる管理者に連絡してください。それでも
エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してく
ださい。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYRS0094I ロケーション・マップが更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0095E ロケーション・マップ {0} の削除中にエ
ラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているロケ
ーション・マップが削除されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示
し、再試行してください。問題が解決しない場合は、デ
ータ・サーバーが稼働しており、正しく構成されている
ことを確認できる管理者に連絡してください。それでも
エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してく
ださい。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYRS0095I ロケーション・マップ {0} が削除されま
した。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0096E カテゴリ {0} の削除中にエラーが発生
しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているカテ
ゴリーが削除されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示
し、再試行してください。問題が解決しない場合は、デ
ータ・サーバーが稼働しており、正しく構成されている
ことを確認できる管理者に連絡してください。それでも
エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してく
ださい。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYRS0096I カテゴリ {0} が削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0097E コレクション {0} の削除中にエラーが発
生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているコレ
クションが削除されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示
し、再試行してください。問題が解決しない場合は、デ
ータ・サーバーが稼働しており、正しく構成されている
ことを確認できる管理者に連絡してください。それでも
エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してく
ださい。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYRS0097I コレクション {0} が削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0099E エリアの作成中にエラーが発生しました。

説明: 一部のエリアが作成された可能性があります。ただし、エラーが発生したために、少なくとも 1 つのエリアが作成されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0099I エリアが作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0100E 内部処理エラーが発生しました。

説明: 内部処理エラーが発生したため、要求を処理できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0101E 要求されたデータ・ソース {0} の定義中にエラーが発生しました。

説明: データ・ソースの定義に誤りがあるため、データ・ソース {0} を定義できませんでした。

応答: データ・ソースの定義を確認してください。

CIYRS0102E 入力された基準が無効です。基準を確認し、再試行してください。

説明: 要求で指定された基準の形式が正しくありません。

ユーザーの処置: 要求内の基準の形式を確認してください。キー値プロパティのリストを、URL エンコードされたパラメーターのコンマ区切りリストとしてフォーマット設定してください。

CIYRS0103E データ・ソース {0} にはビューが定義されていません。構成を確認し、再試行してください。

説明: データ・ソース {0} にビューが定義されていません。

応答: データ・ソースの定義を確認してください。

CIYRS0104E データ・ソース {0} には列が定義されていません。構成を確認し、再試行してください。

説明: データベースで、データ・ソース {0} にプロパティ列が定義されていません。

応答: データ・ソースの定義を確認してください。

CIYRS0105E ID {0} のデータ・ソースはありません。

説明: ID 値が {0} のデータ・ソースが存在しません。

ユーザーの処置: ID 値が正しいかどうか、またはデータ・ソースが正しく作成されているかどうかを確認してください。

CIYRS0106E バッファには正の double 値が必要です。

説明: 指定されたバッファ値が無効です。

ユーザーの処置: バッファ値には正の 10 進数値を指定してください。

CIYRS0107E 境界が必要です。

説明: 要求に境界の座標を含める必要があります。

ユーザーの処置: 要求に境界の座標を指定してください。

CIYRS0108E 要求に無効な WKT 入力が含まれています。

説明: 要求に無効な Well-Known Text (WKT) 形式の入力が含まれています。

ユーザーの処置: 要求の入力が有効な WKT 形式であることを確認してください。

CIYRS0109E 入力した座標は範囲から外れています。座標を確認し、再試行してください。

説明: 入力された座標がマップ内に存在しません。

ユーザーの処置: 指定する座標がマップ境界の内側にあることを確認してください。

CIYRS0110E 入力した座標は無効です。ポリゴンが閉じていません。座標を確認し、再試行してください。

説明: 指定された座標では閉じ多角形が形成されません。

ユーザーの処置: 閉じ多角形を形成する座標を指定するようにしてください。

CIYRS0111E バッファ値が範囲から外れています。バッファ値を確認し、再試行してください。

説明: マップ境界の内側にある閉じ多角形に対応するバッファ値を指定する必要があります。

ユーザーの処置: マップ境界の内側にある閉じ多角形に対応するバッファ値を入力してください。

CIYRS0112E 正しくないソート・オプション {0} が使用されました。

説明: ソート関数の指定に使用できるのはデータ・ソースの列名のみです。

ユーザーの処置: データ・ソースの列名を使用してソート関数を指定してください。

CIYRS0113E 無効なタイム・スタンプ値 {0} が使用されました。

説明: 要求に無効なタイム・スタンプ値 {0} が含まれています。

ユーザーの処置: ISO8601 に準拠した有効な long 型のタイム・スタンプ値を入力してください。

CIYRS0114E 基準の形式 {0} が誤っています。

説明: 要求で指定された基準 {0} の形式が正しくありません。

ユーザーの処置: 基準 {0} の形式を確認してください。

CIYRS0115E データ・ソース定義に列 {0} が見つかりませんでした。

説明: 要求で指定された列 {0} がデータ・ソース定義内に存在しません。

ユーザーの処置: データ・ソース定義内の列を確認してください。

CIYRS0116E 正しくない演算子 {0} が使用されました。

説明: 要求に無効な演算子 {0} が含まれています。

ユーザーの処置: 要求で使用できる演算子は以下のものだけです: =、>、>=、<、<=

CIYRS0117E データ受信側 {0} の更新中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているデータ受信側が更新されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスクバリーの実行を行っています。

CIYRS0118E 固有のテキスト ID 値は、既に別のデータ・ソースによって使用されています。

説明: 「データ・ソースの固有テキスト ID」フィールドの値が、別のデータ・ソースに使用されています。

ユーザーの処置: 「データ・ソースの固有テキスト ID」フィールドの値がデータ・ソースに固有であることを確認してください。

CIYRS0119E 別のペインが選択した色を既に使用しているため、ペインを作成できません。

説明: 別のペインで既に使用されている色をペインに割り当てました。各ペインに固有の色を割り当てる必要があります。

ユーザーの処置: 別のペインで使用されていない色をペインに割り当ててください。

CIYRS0120E 別のペインが選択した色を既に使用しているため、ペインを更新できません。

説明: 別のペインで既に使用されている色をペインに割り当てました。各ペインに固有の色を割り当てる必要があります。

ユーザーの処置: 別のペインで使用されていない色をペインに割り当ててください。

CIYRS0121I イメージ・ファイル {0} が正常にアップロードされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0122E ロケーション・マップのイメージ・ファイル・タイプは、サポートされていません: {0}。

説明: アップロードしようとしているロケーション・マップのイメージ・ファイルの形式は、サポートされていません。

ユーザーの処置: アップロードするロケーション・マップのイメージ・ファイルの形式が、PNG、JPG、GIF または SVG のいずれかであることを確認してください。

関連タスク:

151 ページの『マップ・イメージの表示およびアップロード』

管理者は、ソリューション内のロケーション・マップを作成する際に使用できるマップ・イメージを表示またはアップロードすることができます。

CIYRS0123E マップ・アイコンのイメージ・ファイル・タイプは、サポートされていません: {0}。

説明: アップロードしようとしているマップ・アイコンのイメージ・ファイルの形式は、サポートされていません。

ユーザーの処置: アップロードするマップ・アイコンのイメージ・ファイルの形式が、透過 PNG であることを確認してください。

関連概念:

205 ページの『データ項目のアイコン』
操作ビュー、状況ビュー、および「ソリューション管理」ビューで、データ項目を表す独自のアイコンを設計し、イメージ・ファイルをアップロードすることができます。アップロードするイメージ・ファイルは、いくつかの要件を満たしている必要があります。

CIYRS0124E イメージ・ファイルのアップロード中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、イメージ・ファイルはアップロードされませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』

IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0125E データ・ソースに対するデータ受信側を作成中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したために、データ・ソースに対してデータ受信側が作成されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0126E このデータ・ソースのデータ受信側を更新中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、データ・ソースのデータ受信側が更新されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0183I 1 つ以上の標準操作手順インスタンスが正常に作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0183E 標準操作手順の起動中にエラーが発生しました。

説明: 標準操作手順の起動を妨げるエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0184I {0} が {1} に関連付けられました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0184E 項目を、実行中の 1 つ以上の標準操作手順インスタンスに関連付けているときにエラーが発生しました。

説明: エラーが発生し、項目を 1 つ以上の標準操作手順インスタンスに関連付けられませんでした。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0185I ホット・スポット分析 {0} が作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0185E ホット・スポット分析の作成中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、ホット・スポット分析定義を作成できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでも

エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0186I ホット・スポット分析 {0} が更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0186E ホット・スポット分析の更新中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、ホット・スポット分析定義を更新できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0187I ホット・スポット分析 {0} が削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0187E ホット・スポット分析の削除中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、ホット・スポット分析定義を削除できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYRS0188E ホット・スポット分析の作成中にエラーが発生しました。同じ名前を持つホット・スポット分析が既に存在します。

説明: 既存の定義と同じ名前を持つホット・スポット分析定義は作成できません。

ユーザーの処置: 作成するホット・スポット分析定義に対して固有の名前を入力します。

CIYRS0189W 選択したフィルター基準は {0} 個のレコードを返すことになります。これは、構成した {1} 個の限度を超えます。{2} 個のレコードのみが返されました。

説明: 構成した限度を超える数のデータ項目を返すフィルター基準が指定されています。したがって、メッセージに示されているとおり、指定よりも少ない数のデータ項目が返されました。

ユーザーの処置: 構成した限度以内の数のデータ項目を返すためには、より制限的なフィルター基準を指定します。あるいは、StatMaxAllowedFeaturesInResponse システム・プロパティを編集して、構成した限度を増やします。

関連タスク:

214 ページの『システム・プロパティの構成』システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

135 ページの『表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定』マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。選択がクリアされたデータ・ソースのデータ項目が、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の両方にカウントされないようにすることができます。

CIYRS0190E {1} にはデータ・ソース {0} が必要です。

説明: データ・ソースは、メッセージに示されているサービスが使用中であるため、削除できません。

ユーザーの処置: メッセージに示されているサービスがこのデータ・ソースをまだ使用中であるかどうか確認します。サービスでこのデータ・ソースが必要でなくなっている場合は、サービスからデータ・ソースへの参照を除去してから、データ・ソースを削除します。

CIYRS0191I Cognos モデルは正常に更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0191E Cognos モデルは更新されませんでした。

説明: Cognos モデルの更新を妨げるエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。高可用性環境で Cognos モデルを生成している場合は、

『高可用性環境における Cognos モデルの構成』リンクを参照して、可能なソリューションを探してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

86 ページの『高可用性環境における Cognos モデルの構成』データ・ソースが作成または更新されるときに、IBM Intelligent Operations Center は、Cognos モデルをパブリッシュできます。高可用性環境で、IBM Intelligent Operations Center が Cognos モデルをパブリッシュできるようにするには、Cognos を構成する必要があります。

CIYRS0192I {0} が {1} から関連付け解除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0193E プロファイルの更新中にエラーが発生しました。

説明: プロファイルの更新中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0194I プロファイルが更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0195I 新規パスワードは正常に保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0196E パスワードの保存中にエラーが発生しました。

説明: パスワードの保存中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0197I 通知の設定は正常に保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0198E 通知の設定の保存中にエラーが発生しました。

説明: 通知の設定の保存中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0199I 表示設定は正常に保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0200E 表示設定の保存中にエラーが発生しました。

説明: 表示設定の保存中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0201I プロファイルは正常に保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0202E プロファイルの保存中にエラーが発生しました。

説明: プロファイルの保存中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0203I カスタム・コンポーネントは正常に作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0203E カスタム・コンポーネントの作成中にエラーが発生しました。

説明: カスタム・コンポーネントの作成中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0204I カスタム・コンポーネントは正常に更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0204E カスタム・コンポーネントの更新中にエラーが発生しました。

説明: カスタム・コンポーネントの更新中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。

さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0205I カスタム・コンポーネントは正常に削除されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0205E カスタム・コンポーネントの削除中にエラーが発生しました。

説明: カスタム・コンポーネントの削除中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYRS0206I カスタマイズ内容は正常に保存されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYRS0206E カスタマイズ内容の保存中にエラーが発生しました。

説明: カスタマイズ内容の保存中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0000E 選択したペインは編集できません。

説明: 選択したペインには構成できるオプションが存在しません。

ユーザーの処置: なし。

CIYUI0001E 選択したペインは削除できません。

説明: 選択したペインは事前定義ペインであるため、このペインを削除できません。削除できるのはデータ・ソースを表示する動的ペインのみです。

ユーザーの処置: なし。

CIYUI0002E 無効なモジュール定義が、プレビュー・カードの「追加のアクション」拡張機能として指定されました。

説明: 「追加のアクション」拡張機能のロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 拡張機能がデータベース表で正しく定義されていることを確認してください。カスタム・アクションの定義について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

128 ページの『データ・ソースへのアクションの割り当て』
データ・ソースから受信するデータ項目に適用するユーザー・アクションを選択できます。デフォルトで適用されているアクションもあります。

203 ページの『データ・ソースに対するカスタム・アクションの定義』

データ・ソース構成ツールの「アクション」タブに使用可能なアクションとして表示される、カスタム・アクションを定義できます。データ・ソースにカスタム・アクションを割り当てると、データ・ソースのプレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに、そのアクションが表示されます。

CIYUI0003E ポートレット構成パラメーターに無効なモジュール定義が指定されました。

説明: 無効なモジュール定義が「内容」パネルにロードされました。

ユーザーの処置: モジュール定義が正しく定義されていることを確認してください。

関連タスク:

194 ページの『「内容」パネルのカスタマイズ』
IBM Intelligent Operations Center の「内容」パネルをカスタマイズして、表示するタブおよびコンテンツを指定できます。「内容」パネルはコンテンツ・ビューアー・ポートレットを通して実装され、管理者は WebSphere Portal 管理インターフェースを使用してこれをカスタマイズすることができます。

CIYUI0004I データ項目は正常に作成されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0005I データ項目は正常に更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0006E 別のユーザーがデータ項目を更新しました。

説明: 項目の編集が開始された後に、別のユーザーがその項目に対する変更を保存しました。

ユーザーの処置: 項目を閉じてから再度開き、必要に応じて編集してください。

CIYUI0007E 項目の保存中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、項目は保存されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0008E 無効なモジュール定義が、リストの「追加のアクション」拡張機能として指定されました。

説明: 「追加のアクション」拡張機能を「リスト」タブヘロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: 拡張機能がデータベース表で正しく定義されていることを確認してください。カスタム・アクションの定義について詳しくは、このトピックの最後に

あるリンクを参照してください。

関連タスク:

203 ページの『データ・ソースに対するカスタム・アクションの定義』

データ・ソース構成ツールの「アクション」タブに使用可能なアクションとして表示される、カスタム・アクションを定義できます。データ・ソースにカスタム・アクションを割り当てると、データ・ソースのプレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに、そのアクションが表示されます。

CIYUI0009E 基本マップの保存中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、基本マップは保存されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0010E この基本マップを削除する前に、別のマップをデフォルトの基本マップとして選択する必要があります。

説明: 選択したマップはデフォルトの基本マップであるため、このマップを削除できません。

ユーザーの処置: 選択したマップを削除する場合は、別のマップをデフォルトの基本マップとして選択する必要があります。

関連タスク:

134 ページの『基本マップの管理』
管理者は、ソリューションの基本マップを作成、編集、または削除できます。

CIYUI0013E 基本マップの削除中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、基本マップは削除されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されている

ことを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0014E 中心点の座標およびズーム・レベルを保存中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、中心点の座標およびズーム・レベルは保存されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0014I 中心点の座標とズーム・レベルが正常に更新されました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0015E マップ設定の取得中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、マップ設定は取得されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0016I 基本マップが構成されていません。管理者は、「ソリューション管理」、「構成ツール」の順に選択して、地理情報マップを追加できます。

説明: これは、基本マップが構成されていないことを示す情報メッセージです。

ユーザーの処置: 管理者は、「ソリューション管理」ビューで地理情報マップを構成することができます。詳しくは、トピックの末尾にあるリンクを参照してください。

関連概念:

133 ページの『地理情報マップの構成』
「ソリューション管理」ビューで、ユーザーが使用可能なマップ、マップの初期中心点、およびマップのズーム・レベルを構成できます。

CIYUI0017E マップの取得中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、マップは取得されませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0018I レコードは正常にキャンセルされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0019E レコードをキャンセルしようとしてエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、レコードをキャンセルできませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYUI0020I レコードは正常にキャンセルされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0021E レコードの 1 つをキャンセルしようと
してエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、レコードのうちの 1 つ
をキャンセルできませんでした。

ユーザーの処置: ログ・ファイルを確認してください。
さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡して
ください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYUI0022E データ・ソース拡張モジュール {0} のロ
ード中にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているデー
タ・ソース拡張モジュールがロードされませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示
し、再試行してください。問題が解決しない場合は、デー
タ・サーバーが稼働しており、正しく構成されている
ことを確認できる管理者に連絡してください。それでも
エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してく
ださい。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYUI0023E データ・ソース構成のロード中にエラーが
発生しました。

説明: エラーが発生したため、データ・ソース構成はロ
ードされませんでした。

ユーザーの処置: パスワードが正しいことを確認して
ください。ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試
行してください。問題が解決しない場合は、データ・サー
バーが稼働しており、正しく構成されていることを確認
できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再

発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYUI0024E 選択したデータ・ソース {0} は完全に構
成されていません。

説明: {0} に示されているデータ・ソースの構成が完了
していません。

ユーザーの処置: データ・ソースの構成を確認するよう
に、管理者に依頼してください。データ・ソースの構成
について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを
参照してください。

関連概念:

113 ページの『データ・ソースの構成』
IBM Intelligent Operations Center にデータを提供する
データ・ソースを構成するには、データ・ソース・ツール
を使用します。

CIYUI0025E データ・ソース {0} のデータをロード中
にエラーが発生しました。

説明: エラーが発生したため、{0} に示されているデー
タ・ソースのデータがロードされませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示
し、再試行してください。問題が解決しない場合は、デー
タ・サーバーが稼働しており、正しく構成されている
ことを確認できる管理者に連絡してください。それでも
エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してく
ださい。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、
FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っ
ています。

CIYUI0026E データ・ソースのロード中にエラーが発生
しました。「追加のアクション」モジュール {0} が無効です。

説明: 「追加のアクション」拡張機能のロード中にエラ
ーが発生しました。

ユーザーの処置: 拡張機能がデータベース表で正しく定
義されていることを確認してください。カスタム・アク
ションの定義について詳しくは、このトピックの最後
にあるリンクを参照してください。

関連タスク:

203 ページの『データ・ソースに対するカスタム・アクションの定義』

データ・ソース構成ツールの「アクション」タブに使用可能なアクションとして表示される、カスタム・アクションを定義できます。データ・ソースにカスタム・アクションを割り当てると、データ・ソースのプレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに、そのアクションが表示されます。

CIYUI0027E 新規の式を追加する前に既存の式を入力してください。

説明: 以前に追加した式が不完全な状態で「ルーティング式の追加」をクリックしました。

ユーザーの処置: 追加したルーティング式を完成させる値を入力してから、もう一度「ルーティング式の追加」をクリックしてください。

CIYUI0028E 新規のスタイルを追加する前に既存のスタイルを入力してください。

説明: 以前に追加したスタイルが不完全な状態で、「スタイルの追加」をクリックしました。

ユーザーの処置: 追加したスタイルを完成させる値を入力してから、もう一度「スタイルの追加」をクリックしてください。

CIYUI0029E 項目がドロップされた場所にエリアが存在しません。

説明: ロケーション・マップ内の、エリアが構成されていない部分に、項目が追加されました。

ユーザーの処置: 項目は必ず、ロケーション・マップ内の、構成済みエリアに含まれる部分に追加するようにしてください。必要に応じて、管理者にロケーション・マップに新規エリアを構成するよう依頼してください。

関連タスク:

428 ページの『ロケーション・マップへのデータ項目の追加』

ロケーション・マップ上のエリアと関連付けられており、データ・ソースに追加されるデータ項目を作成することができます。データ項目は、「ロケーション・マップ」タブと「リスト」タブに同時に追加されます。

153 ページの『ロケーション・マップ上のエリアの作成、更新、または削除』

管理者は、ロケーション・マップ上に表示されるエリアを作成、更新、または削除できます。

CIYUI0030E Google マップ API をロードできませんでした。

説明: Google マップ API サービスを使用できません。

ユーザーの処置: Google マップ API サービスがオンラインで使用可能かどうかを確認してください。サービスが使用可能でない場合は、サービスが使用可能になるのを待って、再試行してください。

CIYUI0031E 変更を保存する前に既存のデータ・ソースを選択してください。

説明: データ・ソースの選択またはデータ・ソースの変更を行わずに、「保存」をクリックしました。

ユーザーの処置: データ・ソースを選択し、それを変更してから、もう一度「保存」をクリックしてください。

CIYUI0032E 保存する前に、必要な最小限のプロパティ・フィールドを入力してください。

説明: 「最小プロパティ」タブの必須フィールドをすべて入力していない状態でデータ・ソース構成を保存しました。

ユーザーの処置: 「最小プロパティ」タブの必須値を入力してから、「保存」をクリックしてください。「最小プロパティ」タブの必須値について詳しくは、トピックの最後にあるリンクを参照してください。

関連資料:

120 ページの『データ・ソースの最小プロパティの設定』

データ・ソースからのプロパティを各最小プロパティに割り当て、データに適した設定を選択します。

CIYUI0033E 選択したデータ・ソースに変更を保存する権限がありません。

説明: 選択したデータ・ソースを更新するために必要な権限がありません。

ユーザーの処置: 管理者またはデータ・ソースの作成者に連絡して、データ・ソースを更新するための権限を付与してもらってください。

CIYUI0034E ペイン {0} を移動できませんでした。

説明: エラーが発生したため、ペイン {0} を移動できませんでした。

ユーザーの処置: ブラウザー・ウィンドウを最新表示し、再試行してください。問題が解決しない場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでも

エラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

CIYUI0036E イメージのアップロード中にエラーが発生しました。再試行してください。

説明: エラーが発生したため、イメージをアップロードできませんでした。

ユーザーの処置: イメージ・ファイルが、使用できる形式のうちの 1 つであることを確認してください。イメージのアップロードについて詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

問題が続く場合は、ブラウザー・ウィンドウを最新表示してから、再試行してください。エラーが再度発生する場合は、データ・サーバーが稼働しており、正しく構成されていることを確認できる管理者に連絡してください。それでもエラーが再発する場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

151 ページの『マップ・イメージの表示およびアップロード』
管理者は、ソリューション内のロケーション・マップを作成する際に使用できるマップ・イメージを表示またはアップロードすることができます。

CIYUI0036I イメージが正常にアップロードされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0037I 削除する有効なカテゴリ、コレクション、またはマップを選択してください。

説明: 「ロケーション・マップ・イメージ」メニュー・オプションを削除しようとしたのですが、これは削除のオプションとして無効です。

ユーザーの処置: 削除する有効なカテゴリ、コレクション、またはマップを選択してください。

CIYUI0038E 削除する既存のデータ・ソースを選択してください。

説明: データ・ソースを選択せずに「削除」をクリックしました。

ユーザーの処置: 削除するデータ・ソースを選択してか

ら「削除」をクリックしてください。

CIYUI0039E 選択したデータ・ソースを削除する権限がありません。

説明: 選択したデータ・ソースを削除するために必要な権限がありません。

ユーザーの処置: 管理者またはデータ・ソースの作成者に連絡して、データ・ソースを削除するための権限を付与してもらってください。

CIYUI0040E 続行するには、値が必要です。

説明: 1 つ以上の必須フィールドに値を入力していません。

ユーザーの処置: 必ずすべての必須フィールドに値を入力してください。

CIYUI0040I 続行するには、値が必要です。

説明: 1 つ以上の必須フィールドに値を入力していません。

ユーザーの処置: 必ずすべての必須フィールドに値を入力してください。

CIYUI0041I アイコンのアップロードが完了しました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0042E エリアは削除されました。既存のエリアと重なり合うエリアは指定できません。

説明: 作成しようとしたエリアは、別のエリアと重なり合っているため、削除されました。

ユーザーの処置: 作成済みのエリアを確認してください。エリアを作成するときは、別のエリアと重なり合わないよう描いてください。

関連タスク:

153 ページの『ロケーション・マップ上のエリアの作成、更新、または削除』
管理者は、ロケーション・マップ上に表示されるエリアを作成、更新、または削除できます。

CIYUI0043E データ項目はルーティング式と一致しません。

説明: 着信データ項目が、データ・ソースに対して定義されているどのルーティング式とも一致しません。このデータ項目は破棄されます。

ユーザーの処置: 類似するデータ項目が IBM Intelligent

Operations Center 内のコンポーネントにルーティングされるようにする場合は、データ・ソースに対して定義されているルーティング基準を見直して更新してください。

関連タスク:

127 ページの『データ・ソースからのデータのルーティング』

データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

CIYUI0044E 線は相互に交差することはできません。

説明: このメッセージは、1 つ以上の線が交差した状態でマップに描画されているポリゴンを完成させようとした場合に出されます。

ユーザーの処置: マップにポリゴンを描画する際には、ポリゴンの辺を構成する線が交差しないようにしてください。ポリゴンの角で辺が交わるようにポリゴンを描画し直します。

CIYUI0045W 4 つ以上のデータ・ソースを選択した場合、ホット・スポットの生成時にシステムのパフォーマンスが大幅に低下します。

説明: パフォーマンスは、分析用に選択されたデータ・ソースの数により、また、それほどではないにせよ、データ・ソース内のデータ項目の数により影響を受ける可能性があります。

ユーザーの処置: 分析に不可欠なデータ・ソースのみを選択します。データ・ソースが 3 つ以上で、データ項目がさらに多い場合は、応答がさらに遅くなることに備えて準備してください。

CIYUI0046E KPI モデル・リストの取得中にエラーが発生しました。

説明: IBM Business Monitor との通信に問題が発生しています。

ユーザーの処置: IBM Business Monitor モデルが正しくデプロイされていることを確認します。

CIYUI0047E KPI 階層の保存中にエラーが発生しました。

説明: REST サービスから送信されるメッセージにエラーがあります。JSON は解析できません。

ユーザーの処置: データ・サーバーとの通信エラーのシ

ステム・ログを確認するか、または管理者に支援を依頼します。

CIYUI0048E データ項目を追加できませんでした。ロケーション・マップ上のエリア名が、データ・ソース内のエリア名プロパティの文字の長さ制限を超えています。

説明: 着信データ項目が、データ・ソースに対して定義されているどのルーティング式とも一致しません。このデータ項目は破棄されます。

ユーザーの処置: 類似するデータ項目が IBM Intelligent Operations Center 内のコンポーネントにルーティングされるようにする場合は、データ・ソースに対して定義されているルーティング基準を見直して更新してください。

CIYUI0049I KPI 階層が正常にインポートされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0049E KPI 階層のインポート操作に失敗しました。

説明: KPI 階層のインポート操作に失敗しました。

ユーザーの処置: KPI 階層のインポートに失敗しました。詳細情報については、サーバー・ログを確認してください。

CIYUI0050I KPI 階層が正常にエクスポートされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0051E カスタム・コンポーネントの更新中にエラーが発生しました。コンポーネントをロードできません。

説明: カスタム・コンポーネントの更新中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: パス・ロケーション、パス名、およびモジュール名が正しいことを確認してください。その後、もう一度やり直してください。

関連タスク:

196 ページの『コンポーネントの作成』
コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成します。例えば、独自にカスタマイズしたプレビュー・カードを作成したり、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示するアクションを作成したりすることができます。カスタマイズされた詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントや拡張視覚化機能コンポーネントを作成することもできます。

CIYUI0052E コンポーネントをロードできません。

説明: コンポーネントをロードできません

ユーザーの処置: パス・ロケーション、パス名、およびモジュール名が正しいことを確認してください。その後、もう一度やり直してください。

関連タスク:

196 ページの『コンポーネントの作成』
コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成します。例えば、独自にカスタマイズしたプレビュー・カードを作成したり、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示するアクションを作成したりすることができます。カスタマイズされた詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントや拡張視覚化機能コンポーネントを作成することもできます。

CIYUI0053E 選択した項目のデータ・ソースに対してプレビュー・カード・コンポーネントが指定されませんでした。

説明: プレビュー・カード・コンポーネントが指定されていません。

ユーザーの処置: ソリューション管理ビューで、コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、プレビュー・カード・コンポーネントをデータ・ソースに割り当てます。

関連タスク:

195 ページの『コンポーネントのカスタマイズ』
ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズするために、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成することができます。既存のコンポーネントをカスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。例えば、特定のシステム・コンポーネントに対して、既存のプレビュー・カードを新規のカスタマイズされたプレビュー・カードで置き換えることができます。

CIYUI0054E 選択した項目のデータ・ソースに対して詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントが指定されませんでした。

説明: 詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントが指定されていませんでした。

ユーザーの処置: ソリューション管理ビューで、コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントをデータ・ソースに割り当てます。

関連タスク:

195 ページの『コンポーネントのカスタマイズ』
ソリューションの機能を拡張およびカスタマイズするために、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成することができます。既存のコンポーネントをカスタマイズされたコンポーネントで置き換えることも可能です。例えば、特定のシステム・コンポーネントに対して、既存のプレビュー・カードを新規のカスタマイズされたプレビュー・カードで置き換えることができます。

CIYUI0055E プレビュー・カード・コンポーネントに対して無効なモジュール定義が指定されました。

説明: プレビュー・カード・コンポーネントに対して無効なモジュール定義が指定されました。

ユーザーの処置: パス・ロケーション、パス名、およびモジュール名が正しいことを確認してください。その後、もう一度やり直してください。

関連タスク:

196 ページの『コンポーネントの作成』
コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成します。例えば、独自にカスタマイズしたプレビュー・カードを作成したり、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示するアクションを作成したりすることができます。カスタマイズされた詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントや拡張視覚化機能コンポーネントを作成することもできます。

CIYUI0056E 詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントに対して無効なモジュール定義が指定されました。

説明: 詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントに対して無効なモジュール定義が指定されました。

ユーザーの処置: パス・ロケーション、パス名、およびモジュール名が正しいことを確認してください。その

後、もう一度やり直してください。

関連タスク:

196 ページの『コンポーネントの作成』
コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成します。例えば、独自にカスタマイズしたプレビュー・カードを作成したり、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示するアクションを作成したりすることができます。カスタマイズされた詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントや拡張視覚化機能コンポーネントを作成することもできます。

CIYUI0057E データ・ソース {0} のデータ・インポート操作に失敗しました。

説明: 通知の説明に示されている例外のため、示されているデータ・ソースのデータ・インポート操作に失敗しました。

ユーザーの処置: 詳しくは、SystemOut.log ファイルを参照してください。さらに支援が必要な場合は、IBM サポートに連絡してください。

関連タスク:

505 ページの『IBM サポートへの連絡』
IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

CIYUI0058E 「{0}」は無効なモジュール定義です。

説明: 選択したコンポーネントに無効なモジュール定義があります。

ユーザーの処置: パス・ロケーション、パス名、およびモジュール名が正しいことを確認してください。その後、もう一度やり直してください。

関連タスク:

196 ページの『コンポーネントの作成』
コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、ユーザー・インターフェースに追加できるカスタマイズされたコンポーネントを作成します。例えば、独自にカスタマイズしたプレビュー・カードを作成したり、プレビュー・カードの「追加のアクション」メニューに表示するアクションを作成したりすることができます。カスタマイズされた詳細プロパティ・ウィンドウ・コンポーネントや拡張視覚化機能コンポーネントを作成することもできます。

CIYUI0059E ユーザー ID またはパスワードが正しくないため、ログオン試行は失敗しました。

説明: ログオン時に入力したユーザー ID またはパスワードが間違っています。

ユーザーの処置: ユーザー ID とパスワードが正しいことを確認してください。その後、もう一度やり直してください。

CIYUI0060W 現在のフィルター条件で、構成されている制限に従ってマップにレンダリングできるデータ項目は、{0} 件のみです。

説明:

フィルター・パネルで選択した内容に従って、マップにデータ項目が表示されます。表示されるデータ項目の数が **MaxFeaturesToRenderOnMap** システム・プロパティで構成されている値を超えた場合、超過分のデータ項目は表示されません。

データ・ソースの選択をクリアすると、そのデータ・ソースに属しているデータ項目はマップにレンダリングされたままですが、データ項目は表示されなくなります。マップにレンダリングされるデータ項目が

MaxFeaturesToRenderOnMap 値に従って評価される場合には、レンダリングされているが表示されていないデータ項目が評価に組み込まれます。したがって、現在選択されているフィルター基準を満たすデータ項目の数が **MaxFeaturesToRenderOnMap** の値に満たない場合でも、一部のデータ項目がマップに表示されないことがあります。

ユーザーの処置:

MaxFeaturesToRenderOnMap システム・プロパティの値を編集します。この値を大幅に増やすと、パフォーマンスが低下することがあります。現在は選択されていないデータ・ソースが、マップにレンダリングされるデータ項目の総数にカウントされないようにするには、ビューを最新表示します。

現在選択されていないデータ・ソースのデータ項目が、マップにレンダリングされるデータ項目にカウントされないようにする場合は、

RemoveFeaturesOnDataSourceDeselect システム・プロパティの値を true に設定します。

関連タスク:

135 ページの『表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定』

マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。選択がクリアされたデータ・ソースのデータ項目が、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の両方にカウントされないようにすることができます。

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

CIYUI0061W 選択したデータ項目をマップにレンダリングできません。現在のフィルター条件では、最大表示項目数に構成されている制限を越えているためです。

説明: フィルター・パネルで選択した内容に従って、マップにデータ項目が表示されます。表示されるデータ項目の数が **MaxFeaturesToRenderOnMap** システム・プロパティで構成されている値を超えた場合、超過分のデータ項目は表示されません。

データ・ソースの選択をクリアすると、そのデータ・ソースに属しているデータ項目はマップにレンダリングされたままですが、データ項目は表示されなくなります。マップにレンダリングされるデータ項目が

MaxFeaturesToRenderOnMap 値に従って評価される時には、レンダリングされているが表示されていないデータ項目が評価に組み込まれます。したがって、現在選択されているフィルター基準を満たすデータ項目の数が

MaxFeaturesToRenderOnMap の値に満たない場合でも、一部のデータ項目がマップに表示されないことがあります。

ユーザーの処置: **MaxFeaturesToRenderOnMap** システム・プロパティの値を編集します。この値を大幅に増やすと、パフォーマンスが低下することがあります。現在は選択されていないデータ・ソースが、マップにレンダリングされるデータ項目の総数にカウントされないようにするには、ビューを最新表示します。

現在選択されていないデータ・ソースのデータ項目が、マップにレンダリングされるデータ項目にカウントされないようにする場合は、

RemoveFeaturesOnDataSourceDeselect システム・プロパティの値を **true** に設定します。

関連タスク:

135 ページの『表示されるデータ項目および返されるデータ項目の制限の設定』

マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の最大数を設定できます。選択がクリアされたデータ・ソースのデータ項目が、マップとリストに返されるデータ項目およびマップにレンダリングされるデータ項目の両方にカウントされないようにすることができます。

214 ページの『システム・プロパティの構成』

システム・プロパティ・テーブルのシステム・プロパティを表示、作成、変更、および削除します。システム・プロパティは、IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成に影響を及ぼします。

CIYUI0062E このファイルは有効なイメージを含んでいないためアップロードされませんでした。

説明: このファイルは有効なイメージ・ファイルではないためアップロードされませんでした。

ユーザーの処置: アップロードするファイルの形式および内容が正しいことを確認してください。その後、もう一度やり直してください。

CIYUI0063E このファイルは有効な CSV ファイルではないためアップロードされませんでした。

説明: このファイルは有効な CSV ファイルではないためアップロードされませんでした。

ユーザーの処置: アップロードするファイルのタイプが CSV ファイルであることを確認してください。その後、もう一度やり直してください。

CIYUI0064E 現在のフィルター・パネル基準をお気に入りとして保存するには、{0} ペインの 1 つ以上のエラーを訂正してください。

説明: メッセージに示されているフィルター・ペインに 1 つ以上のエラーが含まれています。

ユーザーの処置: フィルター・ペインにあるエラーを訂正してください。

関連概念:

430 ページの『マップおよびリスト上のデータのフィルタリング』

該当する操作ビューで、「フィルター」パネルを使用して、「内容」パネル内に表示されるデータを定義します。「内容」パネルには、「マップ」タブ、「ロケーション・マップ」タブ、および「リスト」タブが含まれています。

CIYUI0065E CSV ファイルのアップロード中にエラーが発生しました。

説明: CSV ファイルのアップロード中にエラーが発生しました。

ユーザーの処置: アップロードするファイルの形式および内容が正しいことを確認してください。問題が解決しない場合は、ログ・ファイルを確認してください。

CIYUI0065I CSV ファイルは正常にアップロードされました。

説明: これは単なる通知メッセージです。

ユーザーの処置: アクションは不要です。

CIYUI0067E アクティビティによって、ループの原因となる可能性がある標準操作手順のインスタンスが起動されるため、アクティビティを保存できません。例えば、アクティビティによって、ある標準操作手順のインスタンスが起動され、その結果として、そのアクティビティの親に当たる標準操作手順の別のインスタンスが起動される場合などです。

説明: メッセージで説明されているように、保存しようとしているアクティビティによって、ループの原因となる可能性がある標準操作手順のインスタンスが起動されます。

ユーザーの処置: アクティビティ定義を編集します。これにより、アクティビティによって、ある標準操作手順のインスタンスが起動され、その結果として、そのアクティビティに関連する標準操作手順の別のインスタンスが起動されることがないようにします。

知識ベースおよび IBM サポートの使用

このセクションは、知識ベース、Fix Central、および IBM サポートを使用したトラブルシューティング情報の検索に関するトピックで構成されています。

知識ベースの検索

IBM 知識ベースを検索することで、問題の解決策が見つかることがあります。使用可能なリソース、サポート・ツール、および検索方法を使用して、結果を最適化できます。

このタスクについて

IBM Intelligent Operations Center のインフォメーション・センターを検索することによって役立つ情報を見つけることができますが、疑問点を解消したり問題を解決したりするために、場合によってはインフォメーション・センター以外でも調べる必要が生じます。

手順

知識ベースで必要な情報を検索するには、以下の方法を 1 つ以上使用します。

- IBM Support Assistant Lite (ISA Lite) を使用してコンテンツを検索します。

ISA Lite は、IBM ソフトウェア製品に関する疑問の答えを見つけ、それらの製品に関する問題を解決するために役立つ、無償のソフトウェア・ツールです。ISA Lite のダウンロードおよびインストールの方法については、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。

- IBM サポート・ポータルを使用して必要なコンテンツを検索します。

IBM サポート・ポータルは、IBM のシステム、ソフトウェア、およびサービスのすべてについてのすべての技術サポート・ツールと情報が統合され、中央管理されているビューです。IBM サポート・ポータルでは、1 つの場所から IBM 電子サポート・ポータルフォリオにアクセスできます。問題を防止したり、問題を短時間で解決したりするために必要な情報とリソースを重点的に表示するように、ページを調整することができます。このツールについてのデモ・ビデオ (https://www.ibm.com/blogs/SPNA/entry/the_ibm_support_portal_videos) を表示して、IBM サポート・ポータルに慣れてください。これらのビデオでは、IBM Support Portal の紹介、トラブルシューティングやその他のリソースの検索、およびポートレットを移動、追加、または削除してページを調整する方法の説明を行います。

- IBM Intelligent Operations Center に関する内容を検索するには、以下の追加技術リソースのいずれかを使用します。
 - IBM Intelligent Operations Center の技術情報と APAR (問題報告書)
 - IBM Intelligent Operations Center サポート・ポータル・ページ
 - IBM Intelligent Operations Center フォーラムおよびコミュニティのページ
 - IBM Smarter Cities Software Solutions Redbooks®
 - IBM Intelligent Operations Center 資料ライブラリー・ページ
- IBM マストヘッド検索を使用してコンテンツを検索します。任意の [ibm.com](https://www.ibm.com)® ページの上部にある「検索」フィールドに検索ストリングを入力することによって、IBM マストヘッド検索を使用できます。
- Google、Yahoo、または Bing などの外部検索エンジンを使用してコンテンツを検索します。外部検索エンジンを使用する場合、結果に [ibm.com](https://www.ibm.com) ドメイン以外のもが含まれる可能性が高くなります。ただし、[ibm.com](https://www.ibm.com) 以外のニュースグループ、フォーラム、およびブログなどで IBM 製品の問題解決に関して役立つ情報が見つかる場合があります。

ヒント: IBM 製品に関する情報を検索する場合は、「IBM」と製品の名前を検索に含めてください。

関連概念:

211 ページの『製品バージョン詳細の表示』

「ソリューション管理」ビューで、インストール済みの IBM Intelligent Operations Center および統合された IBM Smarter Cities Software Solutions のバージョンの詳細を表示できます。インストール後に適用した更新の詳細も表示できます。

451 ページの『ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center』

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center は、IBM Intelligent Operations Center その他の IBM ソフトウェア製品で発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

447 ページの『問題のトラブルシューティング手法』

トラブルシューティングとは、問題を解決するための体系的な方法です。トラブルシューティングの目標は、予想したように動作しなかった原因およびその問題の解決方法を判別することです。

Fix Central からのフィックスの入手

Fix Central を使用して、IBM Intelligent Operations Center などのさまざまな製品を対象として IBM サポートが推奨するフィックスを探することができます。Fix Central を使用すると、任意の配信オプションを指定してシステムのフィックスを検索、選択、オーダー、およびダウンロードすることができます。発生している問題を解決するための IBM Intelligent Operations Center 用の製品フィックスが提供されている場合があります。

手順

フィックスを検索してインストールするには、以下の手順を実行します。

1. フィックスの取得に必要なツールを入手します。 インストールされていない場合は、製品の更新インストーラーを入手します。 インストーラーは **Fix Central** からダウンロードできます。 このサイトには、更新インストーラーのダウンロード、インストール、および構成に関する説明が記載されています。
2. 製品として **IBM Intelligent Operations Center** を選択し、解決する問題に関連したチェック・ボックス (複数可) を選択します。
3. 必要なフィックスを特定して選択します。
4. フィックスをダウンロードします。
 - a. ダウンロード資料を開き、「パッケージのダウンロード (Download Package)」セクションのリンクをたどります。
 - b. ファイルをダウンロードするときに保守ファイルの名前を変更しないでください。 この変更には、意図的な変更のほか、特定の Web ブラウザーやダウンロード・ユーティリティーに起因する意図しない変更も該当します。
5. フィックスを適用するために、ダウンロード資料の『インストールの説明 (Installation Instructions)』セクションに記載されている説明に従います。
6. オプション: フィックスをはじめとする **IBM** サポートの更新を毎週お知らせする E メール通知に加入してください。

関連タスク:

506 ページの『サポート更新情報のサブスクリプション』

使用する **IBM** 製品についての重要な情報を受け取り続けるには、更新をサブスクリプションでできます。

関連情報:



Fix Central のヘルプ

IBM サポートへの連絡

IBM サポートでは、製品の問題点についての支援、FAQ への回答、および再ディスカバリーの実行を行っています。

始める前に

他の自助的方法 (技術情報の参照など) により回答や解決策を検索しても、目的の内容が見つからない場合は、**IBM** サポートに連絡してください。 **IBM** サポートに連絡するには、ユーザーの企業が有効な **IBM** ソフトウェア・サブスクリプションおよびサポート契約を保持し、ユーザーが **IBM** に問題を送信する権限を持っている必要があります。 使用可能なサポートのタイプについては、「*Software Support Handbook*」の『Support portfolio』のトピックを参照してください。

手順

問題について **IBM** サポートに連絡するときは、以下のステップを実行してください。

1. 問題を明確にし、背景情報を収集し、問題の重大度を判断してください。 詳しくは、「*Software Support Handbook*」の『Getting IBM support』のトピックを参照してください。
2. 診断情報を収集します。 **IBM Support Assistant Lite** を使用して **IBM Intelligent Operations Center** のログ・ファイルを収集する方法については、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。
3. 以下のいずれかの方法で、問題を **IBM** サポートに送信します。
 - **IBM Support Assistant Lite (ISA Lite)** を使用。 このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

- IBM Intelligent Operations Center サポート・ポータル・ページを介したオンライン: 「サービス・リクエスト」 ページの「サービス・リクエスト」ポートレットから、お客様のすべてのサービス要求を開き、更新し、表示することができます。
- 電話: お客様の地域の連絡先電話番号については、Directory of worldwide contacts の Web ページを参照してください。

タスクの結果

お客様が提出した問題が、ソフトウェア障害または資料の不正確さや欠落が原因である場合、IBM サポートはプログラム診断依頼書 (APAR) を作成します。APAR には問題が詳細に記述されます。可能なときには常に、IBM サポートは、APAR が解決されてフィックスが配信されるまで、お客様が実装できる回避策を提供します。IBM は解決済みの APAR を IBM サポート Web サイトに毎日公開し、同じ問題を経験した他のユーザーが、同じ解決策を利用できるようにしています。

次のタスク

IBM Assist On-Site (使用しているコンピューターにダウンロードできるリモート・アシスタンス・プラグイン) を使用して、IBM 技術サポート担当者と作業するための準備を行ってください。IBM 技術サポート担当者は、IBM Assist On-Site を使用して、ユーザーのデスクトップを表示し、マウスおよびキーボードの制御を共有できます。このツールにより、問題の特定、必要なデータの収集、および問題の解決に要する時間を短縮できます。詳しくは、IBM Assist On-Site を参照してください。

関連概念:

211 ページの『製品バージョン詳細の表示』

「ソリューション管理」ビューで、インストール済みの IBM Intelligent Operations Center および統合された IBM Smarter Cities Software Solutions のバージョンの詳細を表示できます。インストール後に適用した更新の詳細も表示できます。

451 ページの『ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center』

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center は、IBM Intelligent Operations Center その他の IBM ソフトウェア製品で発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

サポート更新情報のサブスクライブ

使用する IBM 製品についての重要な情報を受け取り続けるには、更新をサブスクライブできます。

このタスクについて

更新を受け取るようにサブスクライブすることによって、特定の IBM サポート・ツールおよびリソースの重要な技術情報と更新を受け取ることができます。次の 2 つの方法のうちいずれかを使用して、更新をサブスクライブできます。

RSS フィード

IBM Intelligent Operations Center の RSS フィードには、IBM Intelligent Operations Centerを使用できます。

開始手順および RSS 対応の IBM Web ページのリストなど、RSS についての一般情報については、「IBM ソフトウェア・サポート RSS フィード」のサイトを参照してください。

My Notifications

My Notifications を使用すると、任意の IBM 製品に対するサポートの更新をサブスクライブできます。（「通知」は、以前に使用されていた類似のツール My Support に置き換わるものです。）

「My Notifications」を使用して、毎日または毎週 E メールによる告知を受け取るように指定でき

ます。また、受信する情報のタイプ (資料、ヒント、製品フラッシュ (アラートとも呼びます)、ダウンロード情報、およびドライバーなど) を指定できます。「My Notifications」を使用することで、通知を希望する対象製品や、ニーズに応じた最適な配布方法をカスタマイズおよびカテゴリ化できます。

手順

サポート更新をサブスクライブするには、以下のようにします。

1. IBM Intelligent Operations Center RSS フィードをサブスクライブするには、以下のサブステップを実行します。
 - a. リンク [IBM Intelligent Operations Center RSS フィード](#) を開きます。
 - b. 「ライブ・ブックマークのサブスクライブ (Subscribe with Live Bookmark)」ウィンドウで、RSS フィードのブックマークを保存するフォルダーを選択し、「**サブスクライブ (Subscribe)**」をクリックします。

RSS フィードのサブスクライブについて詳しくは、このトピックの末尾にある関連情報セクションの「[IBM ソフトウェア・サポート RSS フィード](#)」リンクを参照してください。
2. My Notifications をサブスクライブするには、IBM サポート・ポータルにアクセスし、「**通知**」ポートレット内の「**My Notifications**」をクリックします。
3. IBM ID およびパスワードを使用してサインインし、「**送信**」をクリックします。
4. 受信する更新情報のタイプと受信方法を指定します。
 - a. 「**サブスクライブ**」タブをクリックします。
 - b. IBM Intelligent Operations Centerを選択し、「**続行**」をクリックします。
 - c. 更新情報を受信する方法 (E メール、オンライン上の指定フォルダー、または RSS や Atom フィード) の設定を選択します。
 - d. 受信する資料更新のタイプ (製品ダウンロードに関する新情報やディスカッション・グループのコメントなど) を選択します。
 - e. 「**送信**」をクリックします。

タスクの結果

使用している RSS フィードや「通知」設定を変更しない限り、要求した内容および方法で更新情報が通知されます。必要に応じて (例えば、1 つの製品の使用を停止して別の製品の使用を開始する場合など) に設定を変更できます。

関連タスク:

504 ページの『[Fix Central からのフィックスの入手](#)』

Fix Central を使用して、IBM Intelligent Operations Center などのさまざまな製品を対象として IBM サポートが推奨するフィックスを探すことができます。Fix Central を使用すると、任意の配信オプションを指定してシステムのフィックスを検索、選択、オーダー、およびダウンロードすることができます。発生している問題を解決するための IBM Intelligent Operations Center 用の製品フィックスが提供されている場合があります。

関連情報



[IBM ソフトウェア・サポート RSS フィード](#)



[「My Notifications」サポート・コンテンツの更新のサブスクライブ](#)

 [My notifications for IBM technical support](#)

 [My notifications for IBM technical support overview](#)

IBM との情報の交換

問題を診断または識別するには、ご使用のシステムのデータおよび情報を IBM サポートに提供する必要があります。場合によっては、問題の判別に使用するためのツールまたはユーティリティーが IBM サポートによって提供されることもあります。

関連概念:

449 ページの『トレースの使用可能化およびログ・ファイルの表示』

IBM Intelligent Operations Center での問題をトラブルシューティングするには、いくつかのシステムのログ・ファイルを分析することが必要な場合があります。

451 ページの『ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center』

ISA Data Collector for IBM Intelligent Operations Center は、IBM Intelligent Operations Center その他の IBM ソフトウェア製品で発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

IBM サポートへの情報の送信

問題解決にかかる時間を短縮するため、トレースおよび診断情報を IBM サポートに送信することができます。

手順

診断情報を IBM サポートに送信するには、次のようにします。

1. サービス・リクエスト・ツールを使用して、問題管理レコード (PMR) を開きます。
2. 必要な診断データを収集します。診断データがあると、PMR の解決に掛かる時間を短縮するのに役立ちます。診断データは、以下のように自動でも手動でも収集できます。
 - IBM Support Assistant Lite (ISA Lite) を使用してデータを自動的に収集する。このトピックの冒頭付近のリンクを参照してください。
 - データを手動で収集する。IBM Intelligent Operations Center のログ・ファイルについては、このトピックの冒頭付近にあるリンクを参照してください。
3. ファイルを ZIP ファイルまたは TAR ファイルに圧縮します。
4. 圧縮ファイルを IBM に転送します。以下のいずれかの方法を使用して、圧縮ファイルを IBM に転送できます。
 - サービス・リクエスト・ツール
 - 標準的なデータ・アップロード方式: FTP、HTTP
 - セキュアなデータ・アップロード方式: FTPS、SFTP、HTTPS
 - E メール

これらのデータ交換方法は、すべて IBM サポートのサイトで説明されています。

IBM サポートからの情報の受信

時として、IBM 技術サポート担当員が、お客様に対して診断ツールやその他のファイルをダウンロードするようお願いすることがあります。それらのファイルは FTP を使用してダウンロードできます。

始める前に

IBM 技術サポート担当者から、ファイルのダウンロードに使用する優先サーバーと、アクセス先の正確なディレクトリー名およびファイル名が提供されていることを確認してください。

手順

IBM サポートからファイルをダウンロードするには次のようにします。

1. FTP を使用して、IBM 技術サポート担当員が指定したサイトに接続し、anonymous としてログオンします。パスワードには E メール・アドレスを使用します。

2. 以下の該当するディレクトリーに移動します。

a. /fromibm ディレクトリーに移動します。

```
cd fromibm
```

b. IBM 技術サポート担当員から通知されたディレクトリーに移動します。

```
cd nameofdirectory
```

3. セッションでバイナリー・モードを有効にします。

```
binary
```

4. **get** コマンドを使用して、IBM 技術サポート担当員によって指定されたファイルをダウンロードします。

```
get filename.extension
```

5. FTP セッションを終了します。

```
quit
```

IBM Intelligent Operations Center に関する既知の問題と解決策

IBM Intelligent Operations Center で発生する一般的な問題の一部を、その解決策または回避策とともに示します。IBM Intelligent Operations Center で問題が発生した場合は、問題解決のトピックを参照して、発生している問題の解決策が提供されているかどうか調べてください。

データ・ソースまたはデータ項目が表示されない

特定の環境において、ソリューションでデータ・ソースまたはデータ項目が表示されません。

症状

ソリューションのターゲット表にはデータが設定されていますが、項目が表示されません。

問題の解決

ソリューションでデータ・ソースまたはデータ項目が表示されない場合が 3 例あることがわかっています。これらの問題の解決方法については、サブトピックを参照してください。

日付またはズーム・レベルの選択が原因でデータ項目が表示されない

ソリューション構成が正しくないために、ソリューションでデータ項目が表示されない場合があります。

症状

ソリューションのターゲット表にはデータが設定されていますが、データ項目が表示されません。

問題の解決

データ項目の開始日が、「フィルター」パネルで選択したデータの範囲内であることを確認してください。また、ズーム・レベルが表示中のデータに適していない場合があります。現在のズーム・レベルがマップだけでなくリストにも適用されていることを確認してください。マップで世界表示を選択している可能性もあります。

「エリア名」フィールドのデータ設定が原因でマップにデータ項目が表示されない

ソリューション構成が正しくないために、ソリューションでデータ項目が表示されない場合があります。データ・ソース作成時に「エリア名」フィールドにデータを設定すると、マップにデータ項目が表示されないことがあります。

症状

ソリューションのターゲット表にはデータが設定されていますが、マップにデータ項目が表示されません。

問題の解決

「エリア名」フィールドにデータをせずにデータ・ソースを再作成してください。

データ・ソース・ルーティングの更新がフィルタリング後の結果に反映されない

データソースのルーティング基準を編集した場合に、更新後のルーティング基準を満たすデータ項目が表示されるまでに、数回のリフレッシュ・サイクルが必要となる場合があります。

症状

ルーティング基準を持つデータ・ソースを作成したとします。そのデータ・ソースから送信されたデータ項目がマップまたはリストに表示されるよう、フィルター基準を構成しました。このデータ・ソースのルーティング基準を更新してから、リフレッシュ間隔の時間だけ待機します。この場合に、表示されることが予測された追加のデータ項目が表示されないことがあります。前のルーティング基準を満たす項目は表示されたままとなります。

問題の解決

フィルタリング後の結果に表示されるデータ項目に、更新されたルーティング基準が反映されない現象は、データ受信側がデータ項目の最終更新のタイム・スタンプを処理する方法が原因で発生します。データ・ソースのルーティング基準を更新した場合は、更新後のルーティング基準を満たすレコードの `lastupdatedatetime` フィールドが更新されるたびに、それらのレコードが処理されます。このため、更新後のルーティング基準を満たすデータ項目が表示されるまでに、数回のリフレッシュ・サイクルが必要となる場合があります。ただし、前のルーティング基準を満たしていた項目は表示されたままとなります。これは、それらの項目が既に処理されているためです。ルーティングは、未処理のステージング・データまたは更新されたステージング・データにのみ影響します。

関連タスク:

127 ページの『データ・ソースからのデータのルーティング』
データ・ソースから受信されるデータのために、ソリューションによってデータが処理される方法を定義するルーティング式を設定します。必要な単一の式または式の組み合わせと一致するデータ項目は、選択された宛先にルーティングされます。

再配置した項目が最新表示後に削除されない

マップ、ロケーション・マップ、またはリストで、項目の場所を表示可能なマップ・エリアの外へと更新した場合に、項目が前の場所に表示されたままになります。更新された項目は、ブラウザ・ウィンドウが最新表示されるまで表示可能なマップ・エリアから削除されません。

症状

項目を表示可能なマップ・エリアの外に再配置した場合に、自動最新表示間隔に達した後もその項目が表示されたままになります。自動最新表示によって返される項目は、現在の表示可能なマップ・エリアにあり、かつ前回の最新表示の後に変更されたものだけです。更新された項目は表示可能なマップ・エリアに既にないため、その項目は変更された項目として返されません。したがって、その項目はマップ、ロケーション・マップ、またはリストから削除されません。

問題の解決

ブラウザを最新表示します。これにより、完全照会が再実行され、更新された項目がマップ、ロケーション・マップ、またはリストから削除されます。あるいは、マップ上でズーム・レベルを変更してデータを最新表示します。マップ上でズーム・レベルを変更すると、ブラウザを最新表示するよりも速くデータを最新表示できる場合があります。

システム・パフォーマンスの問題

ファイル・システム・パーティションがログ・ファイルでいっぱいになり、アクティブ・ログ用のスペースを確保できなくなると、システム・パフォーマンスに問題が生じ、不明なユーザー・インターフェース・エラーが発生する可能性があります。

症状

IBM Intelligent Operations Center でデータの保存または機能の使用を試みたときに、エラーが発生する場合があります。

問題の解決

データ・サーバー上のファイル・システムがいっぱいになっていないことを確認します。データベース・ログ・ファイルを保守する方法については、関連リンクを参照してください。

関連概念:

407 ページの『ログ・ファイルの保守』

IBM Intelligent Operations Center では、複数の場所にログ・ファイルが保管されます。システム停止を防ぐために、データベースのバックアップ、ログ・ファイルのアーカイブ、および元のログ・ファイルの削除を定期的に行ってください。

サード・パーティー・サーバーが応答していません

標準トポロジーで、WebSphere Portal へのログオン後に「サード・パーティー・サーバーが応答していません」というエラー・メッセージが表示される場合があります。

症状

WebSphere Portal へのログオン後に「サード・パーティー・サーバーが応答していません」というエラー・メッセージが表示されます。

問題の解決

1. WebSphere Portal の状況を照会するには、以下のコマンドを入力し、IOCControl スクリプトがあるサーバーにログオンして IOCControl スクリプトを実行します。デフォルトでは、IOCControl スクリプトはインストール・サーバーにあります。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c wpe -p topology_password
```

WebSphere Portal が稼働中の場合は、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
照会コマンドを実行中です.....完了しました。
IBM WebSphere Portal Extend [ on ]
コマンドが正常に完了しました。
```

2. WebSphere Portal が稼働中でない場合は、以下のコマンドを入力します。

```
IOCControl -a start -c wpe -p topology_password
```

認証メカニズムが使用できない

標準トポロジーで、WebSphere Portal へのログオン後に「HPDIA0119W 認証メカニズムが使用できません」というエラー・メッセージが表示される場合があります。

症状

WebSphere Portal へのログオン後に「HPDIA0119W 認証メカニズムが使用できません」というエラー・メッセージが表示されます。

問題の解決

1. アプリケーション・サーバーに ibmadmin としてログオンし、Tivoli Directory Server の状況を照会するために、以下のコマンドを実行します。

```
su - ibmadmin
IOCControl -a status -c tds -p topology_password
```

Tivoli Directory Server が稼働中の場合は、以下の例のようなメッセージが表示されます。

```
照会コマンドを実行中です.....完了しました。
IBM Tivoli Directory Server [ on ]
コマンドが正常に完了しました。
```

2. Tivoli Directory Server が稼働中でない場合は、以下のコマンドを入力します。

```
IOCControl -a start -c tds -p topology_password
```

状況ビューに KPI データが表示されない

セキュリティー設定の変更、または IBM Business Monitor での問題が原因で、状況ビューに KPI データが表示されない場合があります。

症状

ソリューションの状況ビューに KPI データが表示されません。

問題の解決

- 以下の手順を実行して、問題がセキュリティー設定の変更に関連するものであるかどうかを確認します。

1. ポート設定を確認してください。管理者がシステム・プロパティで HTTPS セキュア接続設定を変更しており、それに合わせてポート設定が変更されていない場合は、状況ビューが IBM Business Monitor からデータを取得するときに問題が発生します。
 2. SSL 証明書が有効期限切れになっていないかどうかを確認します。SSL 証明書の有効期限が切れている場合は、新しい SSL 証明書を WebSphere Application Server トラストストアにインポートします。
 3. IBM Business Monitor への接続に使用される資格情報を確認します。管理者が資格情報を更新している場合は、WebSphere Application Server の wbmadmin JAAS 項目に格納されている資格情報を更新します。
- IBM Business Monitor の状況を確認するため、WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。管理コンソールへのアクセスについて詳しくは、リンクを参照してください。
 1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、「サーバー」 > 「クラスター」 > 「WebSphere Application Server クラスター」をクリックします。
 2. 以下から該当するオプションを選択します。
 - WBM.DE.AppTarget の状況が停止である場合は、これを再始動します。
 - WBM.DE.AppTarget の状況が停止ではない場合は、これを停止してから再始動します。問題が解決しない場合は、次のサブステップに進みます。
 3. IBM Business Monitor のログを調べ、IBM Business Monitor の問題を調査して解決します。ログの確認について詳しくは、このトピックの末尾にあるリンクを参照してください。
 4. IBM Business Monitor の問題がすべて解決したら、WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンして IBM Business Monitor を再始動します。

関連概念:

212 ページの『サービスの管理』

管理コンソールを使用して、ソリューションによって提供されるサービスを管理します。

状況ビューで KPI イベントが更新されない

状況ビューで KPI イベント・データが更新されない場合があります。

症状

状況ビューで KPI イベント・データが更新されません。

問題の解決

- 以下の手順を実行して、KPI イベントの更新が IBM Business Monitor に到達していることを確認します。
 1. WebSphere Application Server 管理コンソールにログオンします。管理コンソールへのアクセスについて詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。
 2. 「トラブルシューティング」 > 「モニター・モデル」 > 「失敗したイベント・シーケンス」をクリックします。ページに表示される KPI イベントをすべて削除します。
 3. IBM Business Monitor を再始動します。
 4. 「アプリケーション」 > 「モニター・サービス」 > 「記録済みイベントの管理」 > 「イベント・レコードの使用可能/使用不可」をクリックし、イベントの記録を有効にします。
 5. 「アプリケーション」 > 「モニター・サービス」 > 「記録済みイベントの管理」 > 「イベントの管理」をクリックします。このページで、IBM Intelligent Operations Center に送信される各 KPI イベントに対して 2 つ以上のイベントが作成されていることを確認します。

- KPI イベントが状況ビューで更新されることを確認します。KPI の表示について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。状況ビューで KPI 値が更新されることが確認されたら、それらの値は IBM Business Monitor でも更新されます。

関連概念:

212 ページの『サービスの管理』

管理コンソールを使用して、ソリューションによって提供されるサービスを管理します。

437 ページの『KPI を介した状況のモニター』

状況ビューでは、重要業績評価指標 (KPI) の状況を要約形式または詳細形式で表示することができます。

アラビア・ロケールで日時形式が正しく表示されない

アラビア・ロケールを選択している場合に、IBM Intelligent Operations Center ユーザー・インターフェースで日時の形式が誤って表示されます。

IBM Intelligent Operations Center ユーザー・インターフェースの実装に使用されている Dojo ツールキットは現在、アラビア数字をサポートしていません。

スクリーン・リーダーが時間の値を読み上げない

スクリーン・リーダーがリスト・ボックスの時間の値を読み上げません。この問題を回避するには、フィールドに 12 時制で時間を入力します。

症状

JAWS スクリーン・リーダーを使用して、時間の値を含むリスト・ボックスを選択すると、リーダーは、「開始日時の編集コンボを指定する必要があります (start date and time edit combo required)」と通知し、それから時間を読み上げます。しかし、フィールドに入力するためにユーザーがリストから選択できる時間の値を、リーダーが読み上げません。

問題の解決

時間の値を、クライアント・オペレーティング・システムで必須となっている 12 時制で、キーボードを使用してフィールドに入力してください。

Tivoli Directory Server Web Administration Tool を使用して LDAP サーバーを始動できない

Tivoli Directory Server Web Administration Tool を使用して LDAP サーバーを始動しようとする、HTTP 500 エラーが返され、LDAP サーバーが始動しません。

問題の解決

プラットフォーム制御ツールを使用して Tivoli Directory Server を始動してください。

関連概念:

214 ページの『標準環境における状況の開始、停止、および照会』

プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center コンポーネントを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは、高可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

223 ページの『高可用性環境における開始、停止、および状況の照会』プラットフォーム制御ツールを使用すると、ユーザーは、高可用性環境で実行される IBM Intelligent Operations Center サービスを停止、開始、および照会できます。プラットフォーム制御ツールのツールは標準環境で実行される IBM Intelligent Operations Center にも使用できます。

ユーザーが多数であるために接続が拒否される

IBM Intelligent Operations Center では、ユーザーの数が約 400 を超えると、一部の接続が拒否される場合があります。

症状

IBM Intelligent Operations Center でユーザー数が約 400 を超えると、ソリューションへの一部の接続が拒否される場合があります。これは、IBM HTTP Server 上でソケットが使い果たされたことが原因です。この問題を解決するには、クライアントの最大許容数を増やす必要があります。

問題の解決

IBM Intelligent Operations Center のユーザー・インターフェースでは、各ブラウザ・ページから多数の AJAX 要求が送信される可能性があります。IBM HTTP Server でサポートされるクライアントの最大数を増やすことが必要になる場合があります。httpd.conf ファイルでは、以下の例のように、スタンザによってワーカー MPM (マルチプロセッシング・モジュール) の設定が定義されます。

```
# worker MPM
#
# ThreadLimit: maximum setting of ThreadsPerChild
# ServerLimit: maximum setting of StartServers
# StartServers: initial number of server processes to start
# MaxClients: maximum number of simultaneous client connections
# MinSpareThreads: minimum number of worker threads which are kept spare
# MaxSpareThreads: maximum number of worker threads which are kept spare
# ThreadsPerChild: constant number of worker threads in each server process
# MaxRequestsPerChild: maximum number of requests a server process serves
<IfModule worker.c>
    ThreadLimit 25
    ServerLimit 64
    StartServers 1
    MaxClients 600
    MinSpareThreads 25
    MaxSpareThreads 75
    ThreadsPerChild 25
    MaxRequestsPerChild 0
</IfModule>
```

MaxClients 設定のデフォルト値は 600 です。クライアントの最大数を増やすには、以下のステップを実行します。

1. *MaxClients* 設定の値を、クライアント・ページのユーザー負荷および複雑さに適した値に変更します。

注: 目安として、*MaxClients* 設定の値を IBM Intelligent Operations Center ブラウザー・ページを同時に閲覧する可能性があるユーザー数の 2.5 倍から 3 倍に設定します。

2. IBM HTTP Server を再始動して、変更を有効にします。

1 次アプリケーション・サーバーが作動不能になった場合に IBM Intelligent Operations Center が応答を停止する

IBM Intelligent Operations Center 高可用性環境で 1 次アプリケーション・サーバーが作動不能になると、IBM Intelligent Operations Center がユーザー入力への応答を停止します。

症状

実用的な高可用性実装環境を実現するために、IBM Intelligent Operations Center インストール済み環境では 1 次アプリケーション・サーバーをホスト・ファイル・システムとして使用します。何らかの理由で 1 次アプリケーション・サーバーが作動不能になった場合に、ファイル・システムでホストされて共有されているデータに 2 次アプリケーション・サーバーがアクセスできなくなります。その後 2 次アプリケーション・サーバーが作動不能になります。

高可用性環境で 1 次アプリケーション・サーバーが作動不能になると、IBM Intelligent Operations Center がユーザー入力への応答を停止します。

問題の解決

イメージ、CSV、および JAR の各ファイルをホストするためのデフォルトの IBM Intelligent Operations Center NFS 構成を、スタンドアロン NFS サーバーで置き換えます。この手順では、以下のディレクトリを使用します。

```
/opt/IBM/ioc/csv  
/opt/IBM/ioc/lib  
/opt/IBM/WebSphere/wp_profile/installedApps/cell1/ioc_theme_ear.ear/  
ioc_theme_static_js_web.war/images
```

1. スタンドアロン NFS サーバーで、ディレクトリを作成し、エクスポートします。
2. 1 次アプリケーション・サーバーにある同じディレクトリの内容を、スタンドアロン NFS サーバー上に作成したディレクトリにコピーします。
3. 1 次アプリケーション・サーバー上の当該ディレクトリで、内容を削除し、エクスポートも削除します。
4. スタンドアロン NFS ファイル・サーバーから当該ディレクトリをマウントするように、1 次アプリケーション・サーバーと 2 次アプリケーション・サーバーを構成します。
5. 構成が完了したら、1 次アプリケーション・サーバーと 2 次アプリケーション・サーバーで NFS サービスを停止し、再始動します。

Intelligent Operations Center のデータ・ロード中にロードが失敗する

IBM Intelligent Operations Center ソリューションで データ・ソースからデータをロードする際に正しいデータおよびデータ・タイプが使用されていないと、データ・ロードが失敗してエラーが表示されます。

症状

ソリューションの開始日と終了日の列がストリング値として構成され、かつデータ・ソースの時刻列に時刻型でない値が含まれている場合に、データ・ソースからソリューションにデータをインポートすると、以下のエラーが表示されます。

```
[2/10/14 13:38:28:367 GMT] 00000051 DataReceiverL I com.ibm.ioc.datareceiver.utils.DataReceiverUtil  
parseStartAndEndDateFromString java.text.ParseException: Unparseable date: "2008-10-02"  
at java.text.DateFormat.parse(DateFormat.java:348)  
at com.ibm.ioc.datareceiver.utils.DataReceiverUtil.  
parseStartAndEndDateFromString(DataReceiverUtil.java:5077)
```

問題の解決

データ・ロードが失敗してエラーが表示されることを防ぐために、開始日と終了日の列がストリング・データ型となるように、また時刻列が空となるように、データ・ソースを構成します。データ・インポート・プロセスによって、デフォルトの時刻が適切に割り当てられます。

第 11 章 リファレンス

以下のトピックには、有用な追加参照情報が記載されています。

IBM Intelligent Operations Center REST インターフェース

IBM Intelligent Operations Center には、Representational State Transfer (REST) サービスを使用して実装される API のセットが付属しています。REST サービスは、IBM Intelligent Operations Center コンポーネント内のデータ (システム・プロパティや重要業績評価指標 (KPI) など) にアクセスする Uniform Resource Identifier (URI) 一式を提供します。

サービスは、任意の HTTP クライアント・アプリケーションで呼び出すことができます。また、JSON (JavaScript Object Notation) オブジェクトの形で、予期される応答を定義できます。JSON 形式は、JavaScript や他の製品、ツール、および言語を使用して簡単に構文解析し、処理できます。このため、独自の環境を使用するときの柔軟性が大幅に向上します。

サービスの多くは、入力として単純な HTTP GET URI を受け取ります。より複雑なサービスの場合は、HTTP GET (取得用)、HTTP POST (作成用)、または HTTP PUT (更新用) を使用して JSON 入力を受け取ります。結果は、JSON 形式で返され、エラー・メッセージおよび状況インディケータは JSON 出力として HTTP 応答に含めて返されます。

リソース URI

IBM Intelligent Operations Center REST の各リソース URI は、以下のような形式になります。

```
http://{host}:{port}/ibm/ioc/api/{service-name}/{resource}?{parameters}
```

ここで、

- `http://{host}:{port}` には、ホスト・アドレスとポートが入ります。
- `ibm/ioc/api` は、コンテキスト・ルートです。
- `{service-name}` は、サービスを表します。
- `{resource}` は、論理リソースを表します。
- `{parameters}` は、照会に適用するパラメーターです。

REST サービスへのアクセス

REST サービスには、権限を持つ IBM Intelligent Operations Center ユーザーのみがアクセスできます。また、ほとんどのサービスで、POST、PUT、DELETE の各メソッドにアクセスできるのが管理ユーザーに限られています。管理ユーザーは、CityWideAdmin グループと wpsadmins グループの少なくともどちらかのメンバーです。

グループへのユーザーの追加について詳しくは、このトピックの最後にあるリンクを参照してください。

リソースのバージョン

以下の変更は、バージョン間で互換性があるものと見なされます。クライアントでは、これらの変更を想定しておく必要があります。

- 既存のナビゲーションに影響を与えずに、REST リソース関係をリソース・モデルに追加する

- 既存のクライアントに影響を与えない REST 表記に付加情報を追加する
- MIME タイプまたは表記のサポートを追加する
- クライアントに返される既存の JSON オブジェクトに、古いクライアントでは無視される新しいプロパティを追加する
- クライアントから受け取る既存の JSON オブジェクトに、オプションとして定義された新しいプロパティを追加する

HTTP メソッド

IBM Intelligent Operations Center RESTインターフェースには、以下の HTTP メソッドが用意されています。

GET リソースを読み取ります。

POST リソースを作成します。

PUT リソースを更新します。

DELETE

リソースを削除します。

エラー処理

IBM Intelligent Operations Center REST 要求の処理中に認識されるエラーについては、呼び出し元クライアントに適切な HTTP 状況コード (例: 200 OK、404 未検出) が返されます。

サポートされている規格

IBM Intelligent Operations Center REST API では、以下のインターネット標準がサポートされています。

表 64. IBM Intelligent Operations Center REST API でサポートされているインターネット標準

標準	リファレンス
HTTP 1.1	RFC 2616
MIME, Part 1: Format of Internet Message Bodies	RFC 2045
MIME, Part 2: Media Types	RFC 2046
MIME Media Types	The Internet Corporation for Assigned Names and Numbers (IANA)
JSON スキーマ	Internet Engineering Task Force

関連タスク:

106 ページの『グループ・メンバーシップの表示または変更』
グループ・メンバーシップを表示または変更して、IBM Intelligent Operations Center 内のユーザーのアクセス権限を管理します。

関連情報:

 [IBM Intelligent Operations Center V1.6 REST API](#)

標準トポロジーで IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品およびコンポーネント

IBM Intelligent Operations Center ソリューションでは、標準トポロジー用のさまざまなソフトウェア製品とコンポーネントがインストールされます。

ソフトウェア製品およびコンポーネントと、それらのインストール先のサーバーを、表 65 に示します。

表 65. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品

製品	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
1.6.0.2 Tivoli Directory Server 6.3.0.26 (8.0.50.16 への GSKit アップグレードを含む)	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない
1.6 1.6.0.1 Tivoli Directory Server 6.3.0.18					
1.6.0.2 DB2 Enterprise Server Edition 10.1.0.3	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない
1.6 1.6.0.1 DB2 Enterprise Server Edition 10.1.0.1					
1.6.0.2 DB2 10.1.0.3 クライアント	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6 1.6.0.1 DB2 10.1.0.1 クライアント					
1.6.0.2 Tivoli Directory Integrator 7.1.1.3	プラグイン機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	すべての機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	インストールされない
1.6 1.6.0.1 Tivoli Directory Integrator 7.1.1.2					

表 65. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品 (続き)

製品	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
Tivoli Directory Integrator Dispatcher 6.0.6	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない
Tivoli Directory Integrator POSIX アダプター 6.0.23	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない
IBM Installation Manager 1.6.0	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされる	インストールされる
1.6.0.2 WebSphere Application Server 7.0.0.31	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる
1.6 1.6.0.1 WebSphere Application Server 7.0.0.27	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされる
1.6.0.2 WebSphere Application Server Network Deployment 8.0.0.8	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6 1.6.0.1 WebSphere Application Server Network Deployment 8.0.0.6	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされる
WebSphere Application Server 1.1.0.3 Web 2.0 およびモバイル用フィチャー・パック	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる
IBM Business Monitor 8.0.1.0	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない

表 65. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品 (続き)

製品	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
1.6.0.2 WebSphere Portal 8.0.0.1 CF08 (GSKit フィックス IFPI05309 を 含む)	インストールされ る	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない
1.6 1.6.0.1 WebSphere Portal 8.0.0.1 CF05					
1.6.0.2 IBM HTTP Server 8.0.0.8	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ る	インストールされ ない
1.6 1.6.0.1 IBM HTTP Server 8.0.0.6					
1.6.0.2 IBM HTTP Server 7.0.0.31	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ る
1.6 1.6.0.1 IBM HTTP Server 7.0.0.27					
WebSphere MQ7.5	インストールされ ない	インストールされ る	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない
1.6.0.2 IBM Message Broker 8.0.0.3	インストールされ ない	インストールされ る	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない
1.6 1.6.0.1 IBM Message Broker 8.0.0.1					
IBM Cognos Business Intelligence 10.2	インストールされ ない	インストールされ る	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない
SPSS Modeler Base 15.0	インストールされ ない	インストールされ る	インストールされ ない	インストールされ ない	インストールされ ない

表 65. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品 (続き)

製品	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
SPSS Modeler Data Access 6.1	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM ILOG CPLEX Optimization Studio 12.6	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6					
1.6.0.1 IBM ILOG CPLEX Optimization Studio 12.5	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM Java 1.7.0.6.1	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6					
1.6.0.1 IBM Java 1.7.0.4.2	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
Lotus Domino8.5.3.1	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
Lotus Sametime Entry 8.5.2.1	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
IBM Worklight Consumer Edition 6.0.0	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
IBM Sametime Proxy 8.5.2	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM Security Identity Manager 6.0.0.2	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6					
1.6.0.1 IBM Security Identity Manager 6.0	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない

表 65. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品 (続き)

製品	アプリケーション・サーバー	分析サーバー	データ・サーバー	Web サーバー	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
Data Studio 3.2.0 (オプション・コンポーネント)	インストールされない	インストールされない	インストールされる 注: Data Studio がインストールされる場合は、IBM Installation Manager 1.6.0 もこのサーバー上にインストールされます。	インストールされない	インストールされない
Semantic Model Services	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる
Jazz Foundation Server 3.0.1 (Semantic Model Services 用)	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる

関連概念:

16 ページの『バージョン 1.6.0.2 の新機能』

IBM Intelligent Operations Centerバージョン 1.6.0.2には、複数の新機能が用意されており、既存の機能への更新が提供されます。新機能には、ユーザーが通知の設定をカスタマイズできるように拡張されたユーザー・プロファイル管理が含まれます。ソリューション管理者は、新規コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、カスタマイズされたユーザー・インターフェース・コンポーネントを作成できます。KPI については、ソリューション管理者は、レポートに KPI をマップできます。

高可用性トポロジーで IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品およびコンポーネント

IBM Intelligent Operations Center ソリューションでは、高可用性トポロジー用のさまざまなソフトウェア製品とコンポーネントがインストールされます。

表 66 に、高可用性環境でインストールされるソフトウェア製品およびコンポーネントと、それらのインストール先のサーバーを示します。

表 66. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品

製品	アプリケーション・サーバー 1	アプリケーション・サーバー 2	分析サーバー 1	分析サーバー 2	データ・サーバー 1	データ・サーバー 2	Web サーバー 1	Web サーバー 2	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
1.6.0.2 Tivoli Directory Server 6.3.0.26 (8.0.50.16 への GSKit アップグレードを含む)	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6									
1.6.0.1 Tivoli Directory Server 6.3.0.18									

表 66. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品 (続き)

製品	アプリケーション・サーバー 1	アプリケーション・サーバー 2	分析サーバー 1	分析サーバー 2	データ・サーバー 1	データ・サーバー 2	Web サーバー 1	Web サーバー 2	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
1.6.0.2 DB2 Enterprise Server Edition 10.1.0.3 1.6 1.6.0.1 DB2 Enterprise Server Edition 10.1.0.1	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 DB2 10.1.0.3 クライアント 1.6 1.6.0.1 DB2 10.1.0.1 クライアント	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 Tivoli Directory Integrator 7.1.1.3 1.6 1.6.0.1 Tivoli Directory Integrator 7.1.1.2	プラグイン機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	すべての機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	プラグイン機能がインストールされる	インストールされない
Tivoli Directory Integrator Dispatcher 6.0.6	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
Tivoli Directory Integrator POSIX アダプター 6.0.23	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
IBM Installation Manager 1.6.0	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる
1.6.0.2 WebSphere Application Server 7.0.0.31 1.6 1.6.0.1 WebSphere Application Server 7.0.0.27	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる
1.6.0.2 WebSphere Application Server Network Deployment 8.0.0.8 1.6 1.6.0.1 WebSphere Application Server Network Deployment 8.0.0.6	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
WebSphere Application Server 1.1.0.3 Web 2.0 およびモバイル用フィチャー・パック	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる
IBM Business Monitor 8.0.1.0	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 WebSphere Portal 8.0.0.1 CF08 (GSKit フィックス IPF105309 を含む) 1.6 1.6.0.1 WebSphere Portal 8.0.0.1 CF05	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM HTTP Server 8.0.0.8 1.6 1.6.0.1 IBM HTTP Server 8.0.0.6	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない

表 66. IBM Intelligent Operations Center と共にインストールされる製品 (続き)

製品	アプリケーション・サーバー 1	アプリケーション・サーバー 2	分析サーバー 1	分析サーバー 2	データ・サーバー 1	データ・サーバー 2	Web サーバー 1	Web サーバー 2	セマンティック・モデル・サーバー (オプション)
1.6.0.2 IBM HTTP Server 7.0.0.31 1.6 1.6.0.1 IBM HTTP Server 7.0.0.27	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる
WebSphere MQ7.5	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM Message Broker 8.0.0.3 1.6 1.6.0.1 IBM Message Broker 8.0.0.1	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
IBM Cognos Business Intelligence 10.2	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
SPSS Modeler Base 15.0	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
SPSS Modeler Data Access 6.1	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM ILOG CPLEX Optimization Studio 12.6 1.6 1.6.0.1 IBM ILOG CPLEX Optimization Studio 12.5	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM Java 1.7.0.6.1 1.6 1.6.0.1 IBM Java 1.7.0.4.2	インストールされない	インストールされない	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
Lotus Domino8.5.3.1	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
Lotus Sametime Entry 8.5.2.1	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
IBM Worklight Consumer Edition 6.0.0	インストールされる	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
IBM Sametime Proxy 8.5.2	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
1.6.0.2 IBM Security Identity Manager 6.0.0.2 1.6 1.6.0.1 IBM Security Identity Manager 6.0	インストールされる	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない
Data Studio 3.2.0 (オプション・コンポーネント)	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	注: Data Studio がインストールされる場合は、IBM Installation Manager 1.6.0 もこのサーバー上にインストールされます。	注: Data Studio がインストールされる場合は、IBM Installation Manager 1.6.0 もこのサーバー上にインストールされます。	インストールされない	インストールされない	インストールされない
Semantic Model Services	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる
Jazz Foundation Server 3.0.1 (Semantic Model Services 用)	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされない	インストールされる

関連概念:

16 ページの『バージョン 1.6.0.2 の新機能』

IBM Intelligent Operations Centerバージョン 1.6.0.2には、複数の新機能が用意されており、既存の機能への更新が提供されます。新機能には、ユーザーが通知の設定をカスタマイズできるように拡張されたユーザー・プロファイル管理が含まれます。ソリューション管理者は、新規コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、カスタマイズされたユーザー・インターフェース・コンポーネントを作成できます。KPIについては、ソリューション管理者は、レポートに KPI をマップできます。

IBM Intelligent Operations Center に含まれてはいるが、インストールされてはいない製品

1.6.0.1

IBM Intelligent Operations Center パッケージには、IBM Intelligent Operations Center のインストール時にインストールされない製品が含まれています。特定のユース・ケースで必要な場合、これらの製品は、IBM Intelligent Operations Center のインストール後にインストールできます。

- IBM SmartCloud Control Desk 7.5.1
- IBM Social Media Analytics 1.2
- IBM Tivoli Composite Application Manager for Applications 7.2.0.1
- IBM Tivoli Monitoring 6.3
- IBM Tivoli Netcool/Impact 6.1.1
- IBM Tivoli Netcool/OMNIBus 7.4
- IBM Security Access Manager for Web 7.0

関連概念:

16 ページの『バージョン 1.6.0.2 の新機能』

IBM Intelligent Operations Centerバージョン 1.6.0.2には、複数の新機能が用意されており、既存の機能への更新が提供されます。新機能には、ユーザーが通知の設定をカスタマイズできるように拡張されたユーザー・プロファイル管理が含まれます。ソリューション管理者は、新規コンポーネント・カスタマイズ・ツールを使用して、カスタマイズされたユーザー・インターフェース・コンポーネントを作成できます。KPIについては、ソリューション管理者は、レポートに KPI をマップできます。

IBM Intelligent Operations Center サーバーで使用されるポート

IBM Intelligent Operations Center では、特定のポートが使用されます。

IBM Intelligent Operations Center で使用されるポートを表 67 に示します。高可用性環境では、これらのポートはプライマリー・サーバーとスタンバイ・サーバーの両方で使用されます。

表 67. IBM Intelligent Operations Center で使用されるポート

サーバー	製品の使用に必要なポート
アプリケーション・サーバー	84, 1352, 1516, 1533, 2810, 2811, 2812, 2813, 2814, 2815, 7272, 7273, 7274, 7275, 7277, 7278, 7288, 7291, 8082, 8878, 8879, 8882, 8883, 8884, 8885, 8886, 8887, 8888, 8889, 8890, 9044, 9046, 9047, 9048, 9050, 9061, 9063, 9064, 9065, 9066, 9067, 9081, 9082, 9083, 9084, 9085, 9092, 9094, 9101, 9103, 9104, 9105, 9106, 9107, 9201, 9202, 9203, 9204, 9205, 9206, 9207, 9208, 9209, 9210, 9352, 9354, 9355, 9356, 9357, 9358, 9359, 9360, 9361, 9362, 9404, 9406, 9411, 9412, 9414, 9415, 9417, 9418, 9419, 9420, 9422, 9423, 9444, 9445, 9446, 9447, 9448, 9629, 9630, 9631, 9632, 9634, 9635, 9636, 9637, 9638, 9639, 9641, 9809, 9811, 9812, 9813, 9900, 9902, 9904, 9906, 9908, 10025, 10029, 10030, 10033, 10034, 10035, 10036, 10037, 10039, 10039, 10129, 18002 高可用性環境では以下のポートも使用されます: 10043, 10044, 10045, 10047, 10048, 10050, 10051, 10053, 10056, 10057, 10058
データ・サーバー	389, 523, 1098, 1099, 1527, 3538, 3737, 3766, 18001, 18002, 50001, 50002 高可用性環境では以下のポートも使用されます: 55002, 55003, 55004, 55005, 55006, 55007, 55008, 55009, 55010, 55011, 55012, 55013, 55014, 55015, 55016, 55025
分析サーバー	2809, 2810, 4414, 7272, 7273, 8878, 8879, 8882, 8883, 8884, 8891, 9046, 9047, 9048, 9051, 9063, 9064, 9065, 9068, 9081, 9082, 9083, 9086, 9103, 9104, 9105, 9109, 9201, 9202, 9203, 9204, 9353, 9354, 9355, 9356, 9358, 9365, 9411, 9412, 9414, 9415, 9417, 9418, 9427, 9444, 9445, 9446, 9449, 9629, 9630, 9635, 9636, 9637, 9642, 9811, 9812, 9813, 9814, 9900, 9902, 18002 高可用性環境では以下のポートも使用されます: 389, 3538
Web サーバー	80, 443, 8008, 18002
セマンティック・モデル・サーバー (オプション)	80, 82, 2809, 2810, 2811, 2812, 2813, 3538, 3737, 7272, 7273, 7274, 7275, 7277, 7281, 8008, 8878, 8879, 8880, 8881, 8882, 8883, 8884, 8885, 8886, 8887, 8888, 9043, 9044, 9045, 9046, 9047, 9048, 9060, 9061, 9062, 9063, 9064, 9065, 9080, 9081, 9082, 9083, 9084, 9100, 9101, 9102, 9103, 9104, 9105, 9201, 9202, 9203, 9204, 9205, 9206, 9207, 9208, 9209, 9210, 9352, 9353, 9354, 9355, 9356, 9357, 9358, 9359, 9360, 9361, 9362, 9402, 9403, 9405, 9406, 9408, 9409, 9411, 9412, 9414, 9415, 9417, 9418, 9443, 9444, 9445, 9446, 9447, 9629, 9630, 9631, 9632, 9633, 9634, 9635, 9636, 9637, 9638, 9639, 9809, 9810, 9811, 9812, 9813, 9814, 9900, 9902, 9904, 9906, 9908

root アカウントで実行されるプロセス

Cyber Hygiene が完了した後も、一部のプロセスは root アカウントで実行する必要があります。

root アカウントで実行されるプロセスは、ユーザーまたはプロセスが特権エスカレーションによって root 特権を取得できる場合にぜい弱となることがあります。通常、これはユーザーによって出されるサービス処理要求でのみ問題となります。ユーザーによって出される要求には不正に構成された入力が含まれている可能性があり、このような入力によってサーバーのセキュリティが侵害される可能性があります。ユーザー要求を処理するサービスは、ユーザー・インターフェースまたはアクセス可能なアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) を提供するシステムです。

Linux デーモンは、始動、停止、または適切に定義されたシステム・イベントへの応答のみを実行することが多いため、通常はこれらのデーモンへのリスクはありません。多くの場合、これらのデーモンは root アカウントとして実行する必要があります。これにより、デーモンはその他のプロセスを制御し、重要なシステム・イベントに反応できます。ユーザーがアクセス可能なサーバー自体が root として実行されていない限り、root アカウントで実行されているデーモンによって重大な機密漏れが生じることはありません。

表 68 に、インストールの完了後も root アカウントとして実行されるプロセスをリストします。

表 68. root として実行される IBM Intelligent Operations Center 環境のプロセス

サーバー	製品	プロセス名	説明
データ・サーバー	DB2	db2wdog	このデーモン・プロセスは、システム・イベントを受信し、複数の子プロセスに伝搬します。db2wdog プロセスは db2sync プロセスを管理し、ルート・レベル管理を必要とします。
データ・サーバー	DB2	db2chkpwd	このデーモンは、データベースに接続するユーザーまたはアプリケーションのユーザー ID とパスワードを認証します。db2chkpwd プロセスは /etc/shadow パスワード・ファイルを読み取る必要があります。
データ・サーバー	DB2	/opt/IBM/DB2/bin/db2fmc	このデーモンは障害モニター・コーディネーターとして機能します。すべての DB2 インスタンスをモニターするため、root として実行する必要があります。
データ・サーバー	DB2	/usr/sbin/rcst/bin/rmcd および /usr/sbin/rcst/bin/IBM.ConfigRMd	これらのコマンドは、DB2 の高可用性ソリューションを管理します。高可用性に対応して構成されているサーバーのすべてのデータベースにアクセスできる必要があります。
データ・サーバー	DB2	/sbin/srcmstr	このデーモンは、Tivoli System Automation for Multiplatforms Reliable Scalable Cluster Technology (TSAMP/RSC) 環境内のすべてのデーモンを開始およびモニターします。
Web サーバー	IBM HTTP Server	httpd -d、http -f	Linux では、1024 より小さい番号のポートで listen するために root アクセス権限が必要です。標準 HTTP ポートは 80 から 443 です。IBM Intelligent Operations Center はポート 82 を使用します。httpd -d プロセスと http -f プロセスは root として実行する必要があります。代替構成はすべて、包括的なネットワークおよびセキュリティのポリシーおよび構成の一部としてインストール時に行われます。
アプリケーション・サーバー、分析サーバー、データ・サーバー、Web サーバー	Tivoli Directory Integrator	/opt/IBM/TDI/V7.1/jvm/jre/bin/java /pwd_plugins/pam/pwsync_ioc.props , /opt/IBM/TDI/V7.1/jvm/jre/bin/java /pwd_plugins/tds/pwsync_ioc.props	Tivoli Directory Server および Linux Password Synchronizer Java Proxy のプロセスは、パスワード変更要求を代行受信するために、root として実行する必要があります。

PDF ライブラリー

このトピックでは、印刷に適した PDF 形式で提供されているヘルプの内容へのリンクを示します。

- IBM Intelligent Operations Center 資料ライブラリー・ページ

用語集

この用語集は、IBM Intelligent Operations Center ソフトウェアおよび製品の用語および定義を記載しています。

この用語集では以下の相互参照が使用されています。

- 「を参照」は、用語から優先用語へ、または略語から完全な形式への参照を示すものです。
- 「も参照」は、関連する用語や対比する用語への参照を示します。

ここにはない用語および定義については、IBM Terminology Web サイト (新しいウィンドウで開きます) を参照してください。

『A』 530 ページの 『B』 530 ページの 『C』 531 ページの 『D』 531 ページの 『E』 532 ページの 『G』 532 ページの 『H』 532 ページの 『I』 532 ページの 『J』 533 ページの 『K』 533 ページの 『L』 534 ページの 『M』 534 ページの 『N』 535 ページの 『O』 535 ページの 『P』 535 ページの 『R』 536 ページの 『S』 537 ページの 『T』 537 ページの 『U』 538 ページの 『V』 538 ページの 『W』 539 ページの 『X』

A

抽象構文記法 1 (ASN.1) (Abstract Syntax Notation One (ASN.1))

情報データの構文を定義する国際標準。これは、多数の単純データ型を定義し、これらのデータ型を参照したり、データ型の値を指定したりするための記法を指定する。情報を伝送する際のエンコード方法を一切制約することなく、情報の抽象構文を定義する必要がある場合には、常に ASN.1 表記を適用できる。

アクセス制御リスト (ACL) (access control list (ACL))

コンピューター・セキュリティーにおいて、オブジェクトにアクセスできるすべてのサブジェクトおよびそれらのアクセス権限を識別する、オブジェクトに関連したリスト。

ACL アクセス制御リスト (access control list)を参照。

管理者権限 (administrator permission)

ポータルのリソースまたはユーザーを作成、構成、および削除するためのアクセス権を与えるために、管理者に付与される権限。この権限は、ユーザー役割グループのメンバーシップによって付与される。

集約 KPI (aggregation KPI)

集約関数を使用して測定基準から計算された KPI 値。

APAR プログラム診断依頼書 (authorized program analysis report) を参照。

ASN.1 抽象構文記法 1 (Abstract Syntax Notation One) を参照。

非同期 (asynchronous)

時間内に同期しないイベント、あるいは定期的または予測可能な時間間隔で発生しないイベントに関する用語。

属性 (attribute)

エンティティーを説明する、エンティティーの特性または特徴。例えば、従業員の電話番号は、従業員の属性の 1 つ。

認証ポータル・ユーザー (authenticated portal user)

パスワードとユーザー ID が格納されたプロファイルによって認証される、WebSphere Portal 内の包括的グループのメンバーであるユーザー。

認証 (authentication)

コンピューター・システムのユーザーが本人であることを証明するセキュリティー・サービス。このサービスを実装する一般的な手段として、パスワードやデジタル署名などがある。

許可 (authorization)

ユーザー、システム、またはプロセスに、オブジェクト、リソース、または機能への完全なアクセス権限または制限付きのアクセス権限を付与するプロセス。

許可権限 (authorization permission)

グループのメンバーシップに関連付けられたポータル、リソース、またはデータに対するアクセス権限。

プログラム診断依頼書 (APAR) (authorized program analysis report (APAR))

IBM から提供されるプログラムのサポート対象リリースにおける問題点に対する修正の要求。

B

基本マップ (base map)

背景となる参照情報 (地形、道路、ランドマーク、政治的境界など) を描写するマップ。このマップ上に、別のテーマに関する情報が配置される。基本マップは、位置参照に使用され、多くの場合、その構造の一部として測地基準点網を組み込む。

C

キャッシュ (cache)

命令またはデータ、もしくはその両方へのアクセス時間を短縮するために使用されるメモリー。キャッシュ・メモリー内のデータは、通常、より低速で低コストのストレージ内の他の場所 (ディスク上や別のネットワーク・ノード上など) に存在するデータのコピーである。

CAP 共通アラート・プロトコル (CAP) (Common Alerting Protocol (CAP)) を参照。

クラウド・アプリケーション (cloud application)

インターネットを経由したアクセスが可能となるよう拡張されるアプリケーション。クラウド・アプリケーションは、Web アプリケーションと Web サービスをホストする、大規模データ・センターおよび強力なサーバーを使用する。

共通アラート・プロトコル (CAP) (Common Alerting Protocol (CAP))

あらゆる種類のネットワークで危険に関する緊急アラートおよび一般警告のすべてを交換するための、単純であるが汎用の形式。

共通ウィジェット (common widget)

特定の製品に関連付けられていない、IBM が提供するウィジェット。ウィジェット (widget) も参照。

構成 (configuration)

1. システム、サブシステム、またはネットワークのハードウェアとソフトウェアが編成され、相互接続される方法。
2. インストールされている装置、オプション機能、およびプログラム製品を使用できるようにするために、システムに対して記述する処理。カスタマイズ (customization) も参照。

CSV ファイル (CSV file)

コンマ区切りの値が含まれるテキスト・ファイル。CSV ファイルは、一般に、使用フォーマットが異なるデータベース・システムおよびアプリケーション間でファイルを交換するときに使用される。

カスタマイズ (customization)

1. システムにインストールされて使用可能な状態に構成されているソフトウェア・プログラムのデフォルト設定を、必要に応じて変更する過程。構成 (configuration) も参照。
2. ユーザーによるポータル・ページまたはポートレットの変更。WebSphere Portal では、ユーザーはページ・レイアウトを変更し、装置ごとに表示されるポートレットを選択することによって、ポータル・ページをカスタマイズできる。パーソナライゼーション (personalization) も参照。

D

ダッシュボード (dashboard)

1. 各種のソースから取得したデータを統合し、関連情報やコンテキスト情報を一括表示するためのインターフェース。
2. ビジネス・データをグラフィカルに示す 1 つ以上のウィジェットを含むことが可能な Web ページ。

データ項目 (data item)

すべてのコンポーネントによる送信または処理が可能な、必要なものを完備したデータ・メッセージ。

データ・ソース (data source)

さまざまなデータを必要な形式で供給することができる外部のデータ・ソース (データベースやファイルなど)。

ドメイン (domain)

主要な事業の個々の部門。通常は、組織構造および関係者が有する専門知識に合わせて分かれている。例えば、都市行政機関は、運輸、水道、公衆安全のそれぞれを扱う部門に分かれている。

E

EAR エンタープライズ・アーカイブ (enterprise archive)を参照。

EJB Enterprise JavaBeans を参照。

エンタープライズ・アーカイブ (EAR) (enterprise archive (EAR))

Java EE 標準で定義され、Java EE アプリケーションを Java EE アプリケーション・サーバーにデプロイするために使用される、特殊なタイプの JAR ファイル。EAR ファイルには、EJB コンポーネント、デプロイメント記述子、個々の Web アプリケーション用の Web アーカイブ (WAR) ファイルが含まれる。Java アーカイブ (Java archive) も参照。

Enterprise JavaBeans (EJB)

オブジェクト指向の分散型エンタープライズ・レベル・アプリケーション (Java EE) の開発とデプロイメントのため、Sun Microsystems によって定義されたコンポーネント・アーキテクチャー。

式 KPI (expression KPI)

他の KPI の値から値が計算される KPI。

Extensible Markup Language (XML)

Standard Generalized Markup Language (SGML) に基づいたマークアップ言語を定義する標準メタ言語。

G

GDDM®

図形データ表示管理プログラム (Graphical Data Display Manager) を参照。

地理空間 (geospatial)

地球の地理的特性に関する用語。

図形データ表示管理プログラム (GDDM) (Graphical Data Display Manager (GDDM))

ディスプレイまたはプリンターに出力するテキストおよびグラフィックスを定義および表示する、IBM コンピューター・グラフィックス・システム。

グループ (group)

保護リソースに対するアクセス権限を共有することができるユーザーの集合。

H

HA 高可用性 (high availability) を参照。

ヒープ (heap)

Java プログラミングにおいて、Java 仮想マシン (JVM) が実行時に Java オブジェクトを格納するために使用するメモリー・ブロック。Java ヒープ・メモリーは、使用されなくなった Java オブジェクトを自動的に割り振り解除するガーベッジ・コレクターによって管理される。

高可用性 (HA) (high availability (HA))

あらゆる機能停止に耐え、事前定義済みのサービス レベルに従い処理機能を提供し続ける IT サービスの能力。対象となる停止には、保守やバックアップなどの計画されたイベントと、ソフトウェア障害、ハードウェア障害、電源障害や災害などの計画外のイベントの両方が含まれる。

ホット・スポット (hotspot)

ユーザーが定義する接近性および時間基準に基づいて収集および分析されるデータ項目のクラスターを表す、地理空間情報マップ上の色付きの円。

吹き出しヘルプ (hover help)

グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) の項目 (アイコン、フィールド、テキスト・ストリングなど) の上にカーソルを移動することによって表示できる、説明テキスト。吹き出しヘルプにはリッチ・テキストとリンクを組み込むことができる。

I

統合 (integration)

独立したソフトウェアのコンポーネントが 1 つの実行可能な総体に組み合わされる、ソフトウェア開発の作業。

ISO モデル (ISO model)

国際標準化機構 (ISO) の認可を受けた、データ通信に関するルールのセット。ISO プロトコルにより、別のベンダーから提供されたシステムを接続し、通信させることが可能となる。それらはオープン・システム間相互接続 (OSI) 標準の基本である。

J

JAR Java アーカイブ (Java archive) を参照。

Java アーカイブ (JAR) (Java archive (JAR))

Java プログラムのインストールと実行に必要なすべてのリソースを 1 つのファイルにまとめて保管するための圧縮ファイル形式。エンタープライズ・アーカイブ (enterprise archive) も参照。

Java EE

Java Platform, Enterprise Edition を参照。

Java Naming and Directory Interface (JNDI)

Java プラットフォームの拡張により、異機種の命名サービスとディレクトリー・サービス用の標準インターフェースが提供される。

Java Platform, Enterprise Edition (Java EE)

Oracle によって定義された、エンタープライズ・アプリケーションの開発とデプロイを行うための環境。Java EE プラットフォームは、多層 Web ベース・アプリケーションを開発するための機能を提供する、一連のサービス、アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)、およびプロトコルから構成されます。(Oracle)

JavaScript Object Notation (JSON)

JavaScript のオブジェクト・リテラル表記に基づいた、軽量のデータ交換フォーマット。JSON はプログラミング言語に対して中立であるが、さまざまな言語での規則を使用する。

Java 仮想マシン (JVM) (Java virtual machine (JVM))

コンパイル済み Java コード (アプレットおよびアプリケーション) を実行するプロセッサのソフトウェア実装。

JNDI Java Naming and Directory Interface を参照。

JSON JavaScript Object Notation を参照。

JVM Java 仮想マシン (Java virtual machine) を参照。

K

重要業績評価指標 (KPI) (key performance indicator (KPI))

ビジネス・プロセスの重要成功要因を追跡するために設計された数量化可能な指標。

鍵ストア (keystore)

パスワード情報が格納されているリポジトリ。

KPI 重要業績評価指標 (key performance indicator) を参照。

KPI モデル (KPI model)

KPI コンテキストを含むモニター・モデルの一部。KPI コンテキストには、重要業績評価指標と、それに関連するトリガーおよびイベントが含まれる。

KPI ポリシー (KPI policy)

着信イベントが KPI イベントの更新であるかどうかを判別し、パラメーターに応じて KPI 更新またはアラートを生成する処理のために、そのイベントを送信するポリシー。

L

緯度 (latitude)

地球の赤道を基準とした、北または南の地点の角距離。通常は度数と分数で表現される。

レイヤー (layer)

追加の地理空間情報を提供するためにマップ上に配置できるオーバーレイ。

LDAP Lightweight Directory Access Protocol を参照。

LDAP Directory Interchange Format (LDIF)

ディレクトリー情報のほか、ディレクトリーに適用する必要がある変更 (LDAP を使用しているディレクトリー・サーバーの間で交換できるディレクトリー情報など) の記述に使用するファイル形式。

LDIF LDAP Directory Interchange Format を参照。

サービス・レベル (LOS) (level of service (LOS))

運輸業界の交通技術者が、運輸インフラストラクチャーの要素の効率性を算出するために使用する、量的な指標。この指標は、「Highway Capacity Manual」に定義されている交通運用条件を記述する。

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)

TCP/IP を使用して X.500 モデルをサポートするディレクトリーへのアクセスを提供し、より複雑な X.500 ディレクトリー・アクセス・プロトコル (DAP) のリソース要件に制約されない、オープン・プロトコル。例えば、LDAP を使用してインターネットやイントラネット・ディレクトリー内の人、組織、およびその他のリソースの場所を探索できる。

線形参照 (linear reference)

道路沿い (通常は路肩) にあり、経路でのその位置を示すロケーション参照マーカー。そのマーカーの一例には、マイル標がある。

ロケーション・マップ (location map)

IBM Intelligent Operations Center 内で定義されている対話式エリアを含むマップまたはプラン。これらの 1 つ以上のエリアをイベントに関連付けることができる。例えば、主要なスポーツ・スタジアムの観客席エリアの図を定義し、発生したイベントを該当するエリアに関連付けることができる。

論理ゾーン (logical zone)

地理的エリア内の資産またはイベントの論理グループ。

経度 (longitude)

イングランドのグリニッジ天文台を経線とした、東または西の地点の角距離。通常は度数と分数で表現される。

LOS サービス・レベル (level of service) を参照。

M

モニター・コンテキスト・インスタンス (monitoring context instance)

モニター・コンテキスト内で特定の時点に収集される IBM Business Monitor の情報。

モニター・モデル (monitor model)

ビジネス・モデルのビジネス・パフォーマンス管理面を記述するモデル。これには、リアルタイム・ビジネス・モニターに必要なイベント、ビジネス・メトリック、および重要業績評価指標 (KPI) などが含まれる。

N

ネストされた KPI (nested KPI)

親 KPI の子として定義された KPI。

通知 (notification)

イベントまたは重要業績評価指標 (KPI) の状況が変更されたことを通知するメッセージ。

通知トリガー (notification trigger)

事前定義された重要業績評価指標 (KPI) 値の変更で、「座標 - アラート」ポートレットにアラート通知が送信される原因となるもの。

O

運用ビュー (operations view)

複数のポートレットで構成される Web ページ。これらのポートレットは、協調して動作することで、データ・ソースからの着信データをモニターし、着信データに応答するために、運用レベルでの包括的な情報提供および対話を促進します。

P

ページ (page)

ポータル環境で、1 つ以上のポートレットを含むインターフェース・エレメント。

パーソナライゼーション (personalization)

ビジネス・ルールとユーザー・プロファイル情報に基づいて、特定のユーザー向けの情報を使用可能にするプロセス。カスタマイズ (customization) も参照。

プラグイン (plug-in)

既存のプログラム、アプリケーション、またはインターフェースに機能を追加する、個別にインストール可能なソフトウェア・モジュール。

PMR 問題管理記録 (problem management record) を参照。

ポリゴン (polygon)

GDDM 機能において、ある領域を囲む一連の隣接した直線。

折れ線 (polyline)

直線のみで構成された形状。

ポータル (portal)

さまざまな情報、アプリケーション、ユーザーにアクセスできる安全な単一アクセス・ポイント。カスタマイズとパーソナライズが可能。

ポートレット (portlet)

ポータルのコンテキストに示される特定の情報またはサービスを提供する Web アプリケーションの一部である、再使用可能コンポーネント。

プレビュー・カード (preview card)

ユーザーが地理情報マップまたはロケーション・マップでマーカーをクリックしたとき、もしくはユーザーが「リスト」タブで行をクリックしたときに表示されるウィンドウ。このウィンドウには、関連データ項目に関する情報が表示されます。

問題管理レコード (PMR) ((problem management record (PMR)))

IBM サポート機構内の番号であり、お客様とのサービス・インシデントを表す。

R

RDF Resource Description Framework (RDF) を参照。

Really Simple Syndication (RSS)

Really Simple Syndication 仕様 (RSS 2.0) に基づく、シンジケーション Web コンテンツの XML ファイル・フォーマット。RSS XML ファイル・フォーマットは、RSS フィードを提供している Web サイトにインターネット・ユーザーがサブスクライブするために使用される。

Representational State Transfer (REST)

ワールド・ワイド・ウェブなどの分散ハイパーメディア・システム用のソフトウェア・アーキテクチャー・スタイル。この用語は、SOAP などの追加メッセージング層を使用せずに、HTTP 経由で XML (または YAML、JSON、プレーン・テキスト) を使用する、単純なインターフェースを指すときにも使用されることが多い。

リソース・バンドル (resource bundle)

1. プログラムのローカライズで使用するデータ (リソース) にキー値のマッピングを提供する、構造化されたデータの集合。値は一般的にストリングであるが、値自体を構造化データにすることもできる。
2. ストア・ページのテキストが含まれるクラス。Java PropertyResourceBundle API に従いバンドル・ファイルが作成され、アクセスされます。

Resource Description Framework (RDF)

Web 上の情報を表すためのフレームワーク。

REST Representational State Transfer を参照。

RSS Really Simple Syndication を参照。

S

Secure Sockets Layer (SSL)

通信のプライバシーを提供するセキュリティー・プロトコル。SSL を使用することにより、クライアント/サーバー・アプリケーションは、盗聴、不正アクセス、およびメッセージ偽造を防止するように設計された方法で通信できる。

SGML Standard Generalized Markup Language を参照。

シェイプ・ファイル (shapefile)

地理情報システム・ソフトウェアのデジタル・ファイル・フォーマット。

シングル・サインオン (SSO) (single sign-on)

ユーザー ID とパスワードを 1 回入力するだけで、複数のシステムやアプリケーションにアクセスできる認証プロセス。

スキン (skin)

グラフィカル・ユーザー・インターフェースの外観をその機能に影響を与えずに変更するための、インターフェースの変更可能なエレメント。

SOAP 非集中分散環境で情報を交換するための、軽量の XML ベースのプロトコル。SOAP を使用して、インターネットを介して情報をクエリーしたり戻したり、サービスを起動することが可能。Web サービス (web service) も参照。

ソリューション (solution)

お客様の特定の問題またはプロジェクトを扱う製品の組み合わせ。

SOP 標準操作手順を参照。

SPARQL

さまざまなデータ・ソースにまたがる照会を記述するための RDF 向け照会言語。SPARQL 照会言語の構文とセマンティックは W3 仕様により定義されている。

SSL セキュア・ソケット・レイヤー (Secure Sockets Layer) を参照。

SSO シングル・サインオン (single sign-on) を参照。

標準環境 (standard environment)

IBM Intelligent Operations Center が一連のサーバーにインストールされた環境。この環境では、各サーバーは特定のサービスをソリューションに提供します。

Standard Generalized Markup Language (SGML)

ISO 8879 標準に基づくマークアップ言語を定義するための標準メタ言語。SGML では、情報の表示よりも情報の構造化に焦点を当て、表示から構造と内容を分離している。電子媒体間での文書の交換も容易にする。

標準操作手順 (SOP) (standard operating procedure)

特定の事前定義の条件を満たすパラメーターを持つイベントが発生した場合にトリガーされる一連のアクティビティを定義する手順。

標準操作手順の選択マトリックス (Standard Operating Procedure selection matrix)

特定のイベントについて標準操作手順を開始するかどうかを決定するイベント・パラメーターの固有のセットを含むマトリックス。

状況ビュー (status view)

データ・ソースからの着信データをモニターするために、状況レベルでの包括的な情報提供を促進する Web ページ。例えば、状況ビューには、重要業績評価指標として表示されるデータの統合ビューが含まれる場合があります。

システム・プロパティ (system properties)

IBM Intelligent Operations Center のシステム全体の構成データ。

T

TAI トラスト・アソシエーション・インターセプター (trust association interceptor) を参照。

TCP/IP

TCP/IP プロトコル (Transmission Control Protocol/Internet Protocol) を参照。

テーマ (theme)

プレースに特定の形状をもたらすスタイル・エレメント。ポータルは、仮想壁紙と同様、プレースの作成時に選択可能ないくつかのテーマを提供する。

TCP/IP プロトコル (TCP/IP) (Transmission Control Protocol/Internet Protocol (TCP/IP))

異なるタイプの相互接続ネットワーク上のアプリケーション間で信頼できるエンドツーエンド接続を提供する、業界標準の一般通信プロトコルのセット。

トリガー (trigger)

発生を検出し、それに応じて追加の処理を引き起こすことができるメカニズム。

トラスト・アソシエーション・インターセプター (TAI) (trust association interceptor (TAI))

プロキシ・サーバーによって受信されたすべての要求の信頼性を製品環境で検証するためのメカニズム。検証の手法は、プロキシ・サーバーとインターセプターによって合意される。

U

Uniform Resource Identifier (URI)

1. 抽象的または物理的なりソースを識別するための簡潔な文字ストリング。
2. テキストのページ、ビデオや音声クリップ、静止画像やアニメーション画像、プログラムなど、Web 上のコンテンツを識別するために使用される固有アドレス。URI の最も一般的な形式は Web ページ・アドレスで、これは Uniform Resource Locator (URL) と呼ばれる URI の

特定の形式またはサブセットである。通常、URI は、リソースへのアクセス方法、リソースが存在するコンピューター、およびコンピューター上のリソースの名前 (ファイル名) について記述する。

Uniform Resource Locator (URL)

インターネットなどのネットワーク内でアクセス可能な情報リソースの固有アドレス。URL には、情報リソースへのアクセスに使用されるプロトコルの省略名、および情報リソースを見つけるためにプロトコルによって使用される情報が含まれる。

URI Uniform Resource Identifier を参照。

URL Uniform Resource Locator を参照。

ユーザー管理者 (user administrator)

新規ユーザーを追加し、適切な権限が設定された役割ベースの許可グループのメンバーシップをユーザーに付与することでセキュリティを確保する管理者。

ユーザー許可 (user permission)

ポータル・リソースを表示および操作するためのアクセス権限を与えるために、ユーザーに付与される権限。この権限は、ユーザー役割グループのメンバーシップによって付与される。

ユーザー・プロフィール (user profile)

ユーザーのログオン時に取得される、ユーザー ID、ユーザー名、パスワード、アクセス権限などの属性情報が含まれているユーザーの記述。

ユーザー役割グループ (user role group)

ソリューションへの適切なレベルのアクセス権限を新規ユーザーに与えるために、メンバーシップを割り当てるグループ。新規ユーザーは、それぞれ適切な役割グループのメンバーとして追加される。役割グループごとに異なる権限レベルが関連付けられている。

V

仮想ネットワーク・コンピューティング (VNC) (Virtual Network Computing (VNC))

リモート・フレーム・バッファ (RFB) プロトコルを使用して別のコンピューターをリモート側で制御する、グラフィカル・デスクトップ共有システム。ネットワーク経由で、あるコンピューターから別のコンピューターにキーボード・イベントとマウス・イベントを伝送し、グラフィカル画面の更新を反対方向に中継する。

VNC 仮想ネットワーク・コンピューティング (Virtual Network Computing)を参照。

W

Web Map Service (WMS)

マップ・サーバーが GIS データベースのデータを使用して生成した地理空間情報を参照するマップ・イメージをインターネットで提供するための標準プロトコル。この仕様は、オープン地理空間コンソーシアムによって開発され、1999 年に初めて公開された。

Web サービス (Web service)

標準のネットワーク・プロトコルを使用して、ネットワーク経由で公開、ディスカバー、および呼び出しを行うことのできる、自己完結型で自己記述型のモジュラー・アプリケーション。通常、データのタグ付けには XML、データの転送には SOAP、使用可能なサービスの記述には WSDL、使用可能なサービスのリスト作成には UDDI が使用される。SOAP も参照。

Web サービス記述言語 (WSDL) (Web Service Definition Language (WSDL))

ドキュメント指向またはプロシーチャー指向のいずれかの情報を含むメッセージを操作するエンドポイントのセットとして、ネットワーク・サービスを記述するための XML ベースの仕様。

ウィジェット (widget)

ボタン、スクロール・バー、制御域、テキスト編集域などの、再使用可能なユーザー・インターフェース・コンポーネント。キーボードまたはマウスからの入力を受信し、アプリケーションまたは別のウィジェットと通信することができる。共通ウィジェット (common widget) も参照。

WMS Web Map Service (WMS) を参照。

WO 作業指示書 (work order) を参照。

ワークフロー (workflow)

特定の状況に適した、特定のアクションのセット。例えば、緊急応答システムに接続するなど、適切なワークフローをトリガーするために、ソリューションをカスタマイズすることができる。

作業指示書 (WO) (work order (WO))

実行する必要がある作業に関する情報を含むレコード。

WSDL Web サービス記述言語 (Web Service Definition Language) を参照。

X

XML Extensible Markup Language を参照。

XML スキーマ (XML schema)

どのエレメントがどの組み合わせで許可されているかを示すことによって、XML ファイルのコンテンツを記述および制約するためのメカニズム。XML スキーマは、文書タイプ定義 (DTD) に代わるものであり、データの入力、継承、表示における機能を拡張するために使用できる。

アクセシビリティ

アクセシビリティ機能は、運動障害または視覚障害など身体に障害を持つユーザーがソフトウェア・プロダクトを快適に使用できるようにサポートします。

この製品の主なアクセシビリティ機能により、ユーザーは以下を行うことが可能です。

- スクリーン・リーダー・ソフトウェアやデジタル音声シンセサイザーなどの支援テクノロジーを使用して、画面に表示された内容を聞くことができます。本プロダクトでのこれらのテクノロジーの使用についての詳細は、支援テクノロジーの製品資料を参照してください。
- キーボードのみを使用して、特定の機能または同等の機能を操作できます。
- 画面上の表示を拡大できます。

また、アクセシビリティを補助するために以下の機能が含まれるように資料が変更されています。

- 資料はすべて XHTML 形式で利用でき、ユーザーはスクリーン・リーダー・ソフトウェア・テクノロジーを最大限に活用できます。
- 資料内のすべての画像に代替テキストが用意されているため、視力に障害のある方も画像の内容を理解することができます。

ソリューションには、アクセシビリティを補助する以下の機能が含まれています。

- すべてのページには、各ページのナビゲーション・エレメントをスキップするのに使用するリンクを説明するアクセシビリティ・プロローグが含まれています。プロローグには、使用可能なキーボード・ショートカットのセットも含まれています。

- すべてのページには、ページのさまざまなセクション (例えば、バナー、ナビゲーションおよびメインコンテンツなど) の開始を定義する境界標識が含まれています。
- フィールド・ヘルプ (ある場合) をアクティブ化するには、キーボードから CTRL+SHIFT+? を押します。
- 「連絡先」ポートレットをアクティブ化するには、Mozilla Firefox ブラウザーでキーボードから ALT+SHIFT+C を押します。

注: ショートカット・キーを押す前に、「連絡先」ポートレットが表示されていることを確認してください。Chrome と Internet Explorer 9 では、ショートカットが異なる可能性があります。

- 推奨される Web ブラウザーおよびスクリーン・リーダーは以下のとおりです。

Web ブラウザー

Mozilla Firefox 17 延長サポート版

スクリーン・リーダー

Freedom Scientific JAWS 14

プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話の調整、またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらのCookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項を確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

このソフトウェア・オファリングは、セッション管理およびシングル・サインオン構成に Cookie を使用します。Cookie を使用不可にすると、システムにアクセスできなくなります。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie などの各種テクノロジーの使用については、『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメントのハイライト』 (<http://www.ibm.com/privacy/jp/ja/>)、『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』 (<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』というタイトルのセクション、および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』 (<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation

Department T81B F6/Building 503

4205 S. Miami Boulevard

Durham NC 27709-9990

U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Microsoft、Windows および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Intel、Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Adobe、PostScript は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ 514
エリア 167

[カ行]

キーボード 514
既知の問題 509

[サ行]

視覚化 195
商標 20
新機能
 概要 8
身体障害 514

[タ行]

特記事項 20
トラブルシューティング 509

[ナ行]

名前付きエリア 167, 432

[マ行]

マップ 135
問題と解決策 509

[ヤ行]

ユーザー・インターフェースのカスタマイズ 195
ユーザー・インターフェース・コンポーネント 195
用語集 529

I

IBM Intelligent Operations Center 1.6 509
IOC 1.6 509

K

KML 425



Printed in Japan